

牛頸川治水ダム関係埋蔵文化財調査報告

# 牛頸窯跡群

Ⅱ

大野城市大字牛頸所在窯跡群の調査

福岡県文化財調査報告書

第 89 集

1989

福岡県教育委員会

# 牛 頸 窯 跡 群

大野城市大字牛頸所在窯跡群の調査



1. 牛頸窯跡群 全景（北上空から）1984年撮影



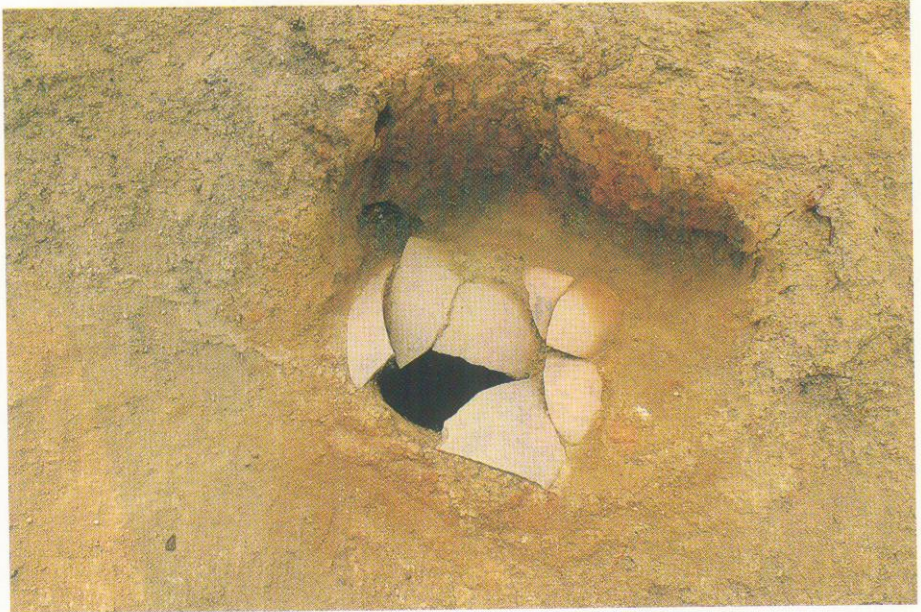
2. 牛頸ダム 全景（南上空から）1989年撮影



1. B-1地区 19~22・30~32号窟跡



2. B-4地区 40~42号窟跡



1. B-4地区 43号窯煙道部



2. I地区 窯跡群 全景 (北西から)



1. M-1地区 51・52号窯灰原



2. M-2地区 69・70号窯

## 序

この報告書は、牛頸川治水ダム建設に際し、福岡県土木部河川開発課と協議の結果やむなく開発される地域の埋蔵文化財を昭和57年度から発掘調査した記録の一部であります。

今回の報告は、昭和58年度から昭和61年度まで実施した井手窯跡群・長者原窯跡群・笹原窯跡群を内容とするもので『牛頸窯跡群II』として公刊することになりました。

発掘調査の記録としては決して満足のいくものではありませんが、本報告書を通して埋蔵文化財に対し、一層の御理解と御協力をいただければ幸いです。

なお、窯跡の保存と調査に対して御協力をいただいた牛頸ダム建設事務所、大野城市教育委員会、牛頸区、地元の方々をはじめ、関係各位の御援助と、御配慮により本書を発刊することができましたことを心から感謝申し上げます。

平成元年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 竹井 宏

## 例 言

1. 本書は、昭和57年10月26日から昭和61年7月4日までに、福岡県教育委員会が福岡県土本部河川開発課の執行委任を受けて、牛頸川治水ダム建設に伴い破壊される埋蔵文化財を発掘調査した2冊目の報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、福岡県大野城市大字牛頸所在の牛頸窯跡群で、B-1・4地区、I地区、M-1・2地区を、『牛頸窯跡群II』として報告するものである。
3. 本書の執筆分担は、下記のとおりである。

I	池辺元明
II-1	池辺元明
2	飛野博文・池辺元明
3	飛野博文
4・5	池辺元明
6	川述昭人・倉住靖彦
7	赤司善彦
III	日高正幸
IV-1	池辺元明
2	川述昭人・森田 勉
4. 地形図・実測図の作製にあたっては、福岡県那珂土木事務所作製の測量成果表を利用し、基準点を設け、国土調査法第II座標系で示した。本書に用いている方位は座標北である。
5. 整理作業・報告書作製は、九州歴史資料館で行ない、担当者のほか、遺物整理に岩瀬正信、遺物実測に若松三枝子・鬼木つや子・佐藤みゆき・原富子・大田育子・整図に豊福弥生・鶴田佳子・原カヨ子があたった。遺物写真の撮影等は、九州歴史資料館技術主査石丸洋とその指導により須原悦子・矢野明美があたった。またB-1・4地区の空中写真は(有)空中写真稲富の撮影による。
6. 巻頭図版のうち、I-1・2は、(有)空中写真企画の提供による。
7. 本文中の遺物番号は、窯跡群(地区)ごとに通し番号とし、挿図・図版・遺物一覧表の番号と統一した。
8. 本書の編集は、池辺元明があたった。

<題字 與田英昭>



# 本文目次

## 序

I	はじめに	1
II	遺構と遺物	7
1	B-1地区(井手窯跡群)の調査	8
(1)	調査の概要	8
(2)	19号窯跡	11
(3)	20号窯跡	13
(4)	21号窯跡	15
(5)	22号窯跡	15
(6)	29号窯跡	19
(7)	30号窯跡	21
(8)	31号窯跡	22
(9)	32号窯跡	24
(10)	33号窯跡	27
(11)	1号土壌	28
(12)	2号土壌	31
(13)	灰原	32
(14)	38・39号窯跡	63
(15)	小結	68
2	B-4地区(井手窯跡群)の調査	69
(1)	調査の概要	69
(2)	40号窯跡	69
(3)	41号窯跡	70
(4)	42号窯跡	72
(5)	43号窯跡	82
(6)	44号窯跡	84
(7)	45号窯跡	86

( 8 ) 46号窯跡	87
( 9 ) 44号窯南側土壌	92
(10) 47号窯跡	94
(11) 48号窯跡	95
(12) 49号窯跡	98
(13) 小結	101
3 I 地区 (長者原窯跡群) の調査	103
( 1 ) 調査の概要	103
( 2 ) 53号窯跡	105
( 3 ) 54号窯跡	107
( 4 ) 55号窯跡	109
( 5 ) 56号窯跡	109
( 6 ) 57号窯跡	113
( 7 ) 58号窯跡	114
( 8 ) 59号窯跡	116
( 9 ) 60号窯跡	119
(10) 61号窯跡	119
(11) 62号窯跡	122
(12) 63号窯跡	123
(13) 64号窯跡	125
(14) 65号窯跡	129
(15) 66号窯跡	129
(16) 66号上部土壌	131
(17) 67号窯跡	135
(18) 68号窯跡	137
(19) その他の出土遺物	138
(20) 小結	139
4 M-1 地区 (笹原窯跡群) の調査	139
( 1 ) 調査の概要	139
( 2 ) 51号窯跡	141
( 3 ) 51号焚口右側土壌	145
( 4 ) 52号窯跡	145
( 5 ) 灰原	148

(6) 小結 .....	160
5 M-2地区(笹原窯跡群)の調査 .....	161
(1) 調査の概要 .....	161
(2) 69号窯跡 .....	162
(3) 70号窯跡 .....	164
(4) 土壌 .....	166
(5) 小結 .....	168
6 4号窯跡灰原出土の刻書土器 .....	168
7 硯 .....	176
III 牛頸頸窯跡群の測量方法 .....	177
IV 結語 .....	185
1 窯の立地と構造 .....	186
2 須恵器について .....	188

## 図 版 目 次

本文対照頁

巻頭図版 1	1. 牛頸窯跡群 全景（北上空から）1984年撮影……………	1
	2. 牛頸ダム 全景（南上空から）1989年撮影……………	1
巻頭図版 2	1. B-1 地区 19~22・30~32号窯跡……………	8
	2. B-4 地区 40~42号窯跡……………	69
巻頭図版 3	1. B-4 地区 43号窯煙道部……………	82
	2. I 地区 窯跡群全景……………	103
巻頭図版 4	1. M-1 地区 51・52号窯灰原……………	148
	2. M-2 地区 69・70号窯……………	161

### B-1 地区

図 版 1	1. 伐採・防災工事後の状況 1……………	8
	2. 伐採・防災工事後の状況 2……………	8
図 版 2	1. 伐根作業状況……………	8
	2. 19~22号・30~32号窯跡灰原検出状態……………	32
図 版 3	1. 19~22号・30~32号窯跡灰原調査状況……………	32
	2. 灰原須恵器出土状態……………	32
図 版 4	1. 19~22号・30~32号窯跡（西から）……………	8
	2. 19~21号・30~31号窯跡（南から）……………	8
図 版 5	1. 19~22号・30~32号窯跡（西上空から）……………	8
	2. 19~22号・30~32号窯跡（上空から）……………	8
図 版 6	1. 19~22号・30~32号窯跡（上空から）……………	8
	2. 19~21号窯跡（西上空から）……………	11
図 版 7	1. 22・31・32号窯跡（南上空から）……………	15
	2. 30・31号窯跡……………	22
図 版 8	1. 19号窯跡……………	11
	2. 20号窯跡……………	13
図 版 9	1. 21号窯跡……………	15
	2. 22号窯跡……………	15

図版 10	1. 29号窯跡（南上空から）	19
	2. 29号窯跡（南上空から）	19
図版 11	1. 29号窯跡置台検出状態	19
	2. 30号窯跡	21
図版 12	1. 30号窯跡	21
	2. 31号窯跡	22
図版 13	1. 32号窯跡	24
	2. 29・33号窯跡（南から）	27
図版 14	1. 33号窯跡煙道上部須恵器出土状態	19
	2. 33号窯跡	27
図版 15	B-1地区出土土器 1	13
図版 16	B-1地区出土土器 2	24
図版 17	B-1地区出土土器 3	25
図版 18	B-1地区出土土器 4	29
図版 19	B-1地区出土土器 5	32
図版 20	B-1地区出土土器 6	32
図版 21	B-1地区出土土器 7	34
図版 22	B-1地区出土土器 8	34
図版 23	B-1地区出土土器 9	34
図版 24	B-1地区出土土器 10	34
図版 25	B-1地区出土土器 11	34
図版 26	B-1地区出土土器 12	34
図版 27	B-1地区出土土器 13	34
図版 28	B-1地区出土土器 14	34
図版 29	B-1地区出土土器 15	34
図版 30	B-1地区出土土器 16	38
図版 31	B-1地区出土土器 17	56
図版 32	B-1地区出土土器 18	56
図版 33	B-1地区出土土器 19	61
図版 34	B-1地区出土土器 20	67

#### B-4地区

図版 35	1 伐採後の遺構確認調査状況	69
-------	----------------	----

	2	40～42号窯跡灰原検出状況	69
図版	36	1 調査地区全景（南東上空から）	69
	2	40～46号窯跡（東上空から）	69
図版	37	1 40～46号窯跡（東上空から）	69
	2	40～42号窯跡（東上空から）	69
図版	38	1 43～46号窯跡（東上空から）	82
	2	43～45号窯跡（東上空から）	82
図版	39	1 40～42号窯跡	69
	2	43～46号窯跡	82
図版	40	1 40号窯跡	69
	2	42号窯跡煙道上部	72
図版	41	1 41号窯跡	70
	2	41号窯跡	70
図版	42	1 43号窯跡	82
	2	43号窯跡煙道上面閉塞状態	82
図版	43	1 43号窯跡煙道部	82
	2	44号窯跡焚口部	84
図版	44	1 44号窯跡焚口、45号窯跡焚口断面	85・86
	2	44・45号窯跡	84・86
図版	45	1 44・45号窯跡煙道部 1	84・86
	2	44・45号窯跡煙道部 2	84・86
図版	46	1 46号窯跡遺物出土状態	87
	2	46号窯跡	87
図版	47	1 46号窯跡前庭部灰原横断面	87
	2	46号窯跡前庭部灰原縦断面	87
図版	48	1 44号南側土壌遺物出土状態 1	92
	2	44号南側土壌遺物出土状態 2	92
図版	49	1 47・48号窯跡（東から）	94・95
	2	47（右）・48号窯跡（左）	94・95
図版	50	1 49号窯跡（東から）	98
	2	49号窯跡	98
図版	51	B-4地区出土土器 1	72
図版	52	B-4地区出土土器 2	78

図版 53	B-4 地区出土土器 3	87
図版 54	B-4 地区出土土器 4	90
図版 55	B-4 地区出土土器 5	96

## I 地区

図版 56	1 発掘前全景 (北から)	103
	2 法照寺裏崖面の窯検出状況	103
図版 57	1 発掘区遠景 1 (北西から)	103
	2 発掘区遠景 2 (西から)	103
図版 58	1 調査区全景 (北から)	103
	2 調査区北東側全景	103
図版 59	1 調査区全景、灰原検出状態 (北から)	103
	2 57~59・64~67号窯跡 (北東から)	103
図版 60	1 53~56号窯灰原	105
	2 53~56・60~62・68号窯跡	105
図版 61	1 53号窯跡	105
	2 54号窯跡	107
図版 62	1 55号窯跡	109
	2 55号窯跡床面置台検出状態	109
図版 63	1 55号窯跡燃焼部右側壁石組	109
	2 55号窯跡燃焼部左側壁石組	109
図版 64	1 56号窯跡	109
	2 57号窯跡	113
図版 65	1 64~65号窯跡	125
	2 64号窯跡	125
図版 66	1 65号窯跡	129
	2 57~59・67号窯跡	114
図版 67	1 66号窯跡上部土壌 1	131
	2 66号窯跡上部土壌 2	131
図版 68	I 地区出土土器 1	105
図版 69	I 地区出土土器 2	109
図版 70	I 地区出土土器 3	116
図版 71	I 地区出土土器 4	122

図版 72	I 地区出土土器 5	125
図版 73	I 地区出土土器 6	131
図版 74	I 地区出土土器 7	135

### M-1 地区

図版 75	1 伐採後の確認調査状況（西から）	139
	2 51・52号窯跡灰原検出状態	148
図版 76	1 調査区全景（西から）	139
	2 51（右）・52号窯跡（左）	141
図版 77	1 51号窯跡	141
	2 51号窯跡床面須恵器・置台出土状態	141
図版 78	1 52号窯跡	145
	2 52号窯跡焚口床面須恵器・置台出土状態	145
図版 79	1 51号窯跡焚口左側土壌	141
	2 52号窯跡焚口左側土壌	145
図版 80	1 51号窯跡右側土壌須恵器出土状態 1	145
	2 51号窯跡右側土壌須恵器出土状態 2	145
図版 81	M-1 地区出土土器 1	144
図版 82	M-1 地区出土土器 2	145
図版 83	M-1 地区出土土器 3	145
図版 84	M-1 地区出土土器 4	145
図版 85	M-1 地区出土土器 5	145
図版 86	M-1 地区出土土器 6	157
図版 87	M-1 地区出土土器 7	157
図版 88	M-1 地区出土土器 8	157
図版 89	M-1 地区出土土器 9	157
図版 90	M-1 地区出土土器 10	157
図版 91	M-1 地区出土土器 11	157
図版 92	M-1 地区出土土器 12	159

### M-2 地区

図版 93	1 M-1・M-2 地区調査区遠景（南西から）	161
	2 M-2 地区調査区全景（南西から）	161



図版 94	1	69号窯跡 1	162
	2	69号窯跡 2	162
図版 95	1	70号窯跡 (西から)	164
	2	70号窯跡 (南から)	164
図版 96	1	70号窯跡 (南から)	164
	2	70号窯跡 (西から)	164
図版 97	1	70号窯跡焚口部	164
	2	70号窯跡天井部残存状況	164
図版 98	1	70号窯跡第1補助燃焼孔	164
	2	70号窯跡第2補助燃焼孔	164
図版 99	1	70号窯跡第3補助燃焼孔	164
	2	70号窯跡第4補助燃焼孔・煙道	164
図版 100	M-2	地区出土土器	164
図版 101	1	A-3地区4号窯跡	168
	2	刻書土器 1	170
	3	刻書土器 2	171
図版 102		刻書土器 3	171

## 挿 図 目 次

第 1 図	牛頸窯跡群地形図 (縮尺1/4,000)	2 ~ 3
第 2 図	牛頸ダム建設地及び発掘調査地点 (縮尺1/6,000)	5
第 3 図	窯跡群分布図 (縮尺1/25,000)	6
第 4 図	窯体各部の名称 計測点模式図	7
第 5 図	須恵器各部名称 計測点模式図	8

### B-1 地区

第 6 図	19~22・29~33号窯跡地形図 (縮尺1/600)	9
第 7 図	19~22・30~32号窯跡配置図 (縮尺1/250)	10
第 8 図	29・33号窯跡配置図 (縮尺1/250)	11
第 9 図	19号窯跡実測図 (縮尺1/40)	12

第 10 図	19・20号窯出土土器実測図 (縮尺1/3)	13
第 11 図	20号窯跡実測図 (縮尺1/40)	14
第 12 図	21号窯跡実測図 (縮尺1/40)	16
第 13 図	22号窯跡実測図 (縮尺1/40)	17
第 14 図	22号窯出土土器実測図 (縮尺1/3)	18
第 15 図	29号窯跡実測図 (縮尺1/40)	19
第 16 図	29・30・31号窯出土土器実測図 (縮尺1/3)	20
第 17 図	30号窯跡実測図 (縮尺1/40)	21
第 18 図	31号窯跡実測図 (縮尺1/40)	23
第 19 図	32号窯跡実測図 (縮尺1/40)	25
第 20 図	32・33号窯出土土器実測図 (縮尺1/3)	26
第 21 図	33号窯跡実測図 (縮尺1/40)	27
第 22 図	33号煙道部蓋甕実測図 (縮尺1/6)	28
第 23 図	1号土壙実測図 (縮尺1/40)	29
第 24 図	1号土壙出土土器実測図① (縮尺1/3)	30
第 25 図	1号土壙出土土器実測図② (縮尺1/3)	31
第 26 図	2号土壙実測図 (縮尺1/20)	32
第 27 図	2号土壙出土土器実測図 (縮尺1/3)	33
第 28 図	B-1地区灰原割付図 (縮尺1/300)	34
第 29 図	19~22・30~32号窯灰原土層図 (縮尺1/80)	34~35
第 30 図	19~21号窯灰原出土土器実測図① (縮尺1/3)	35
第 31 図	19~21号窯灰原出土土器実測図② (縮尺1/3)	36
第 32 図	19~21号窯灰原出土土器実測図③ (縮尺1/3)	37
第 33 図	19~21号窯灰原出土土器実測図④ (縮尺1/3)	38
第 34 図	22・30~32号窯灰原出土土器実測図① (縮尺1/3)	39
第 35 図	22・30~32号窯灰原出土土器実測図② (縮尺1/3)	40
第 36 図	22・30~32号窯灰原出土土器実測図③ (縮尺1/3)	41
第 37 図	22・30~32号窯灰原出土土器実測図④ (縮尺1/3)	42
第 38 図	22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑤ (縮尺1/3)	43
第 39 図	22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑥ (縮尺1/3)	44
第 40 図	22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑦ (縮尺1/3)	45
第 41 図	22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑧ (縮尺1/3)	46
第 42 図	22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑨ (縮尺1/3)	47

第 43 図	22・30～32号窯灰原出土土器実測図⑩ (縮尺1/3)	48
第 44 図	22・30～32号窯灰原出土土器実測図⑪ (縮尺1/3)	49
第 45 図	22・30～32号窯灰原出土土器実測図⑫ (縮尺1/3)	50
第 46 図	22・30～32号窯灰原出土土器実測図⑬ (縮尺1/3)	51
第 47 図	22・30～32号窯灰原出土土器実測図⑭ (縮尺1/3)	52
第 48 図	22・30～32号窯灰原出土土器実測図⑮ (縮尺1/3)	53
第 49 図	22・30～32号窯灰原出土土器実測図⑯ (縮尺1/3)	54
第 50 図	22・30～32号窯灰原出土土器実測図⑰ (縮尺1/3)	55
第 51 図	19～22・30～32号窯灰原上層 (表土層) 出土土器実測図① (縮尺1/3)	57
第 52 図	19～22・30～32号窯灰原上層 (表土層) 出土土器実測図② (縮尺1/3)	58
第 53 図	29・33号窯灰原出土土器実測図① (縮尺1/3)	59
第 54 図	29・33号窯灰原出土土器実測図② (縮尺1/3)	60
第 55 図	重ね焼き実測図 (縮尺1/3)	61
第 56 図	穿孔土器実測図 (縮尺1/3)	62
第 57 図	38・39号窯地形図 (縮尺1/400)	62
第 58 図	38・39号窯灰原土層図 (縮尺1/80)	63
第 59 図	38・39号窯灰原出土土器実測図① (縮尺1/3)	64
第 60 図	38・39号窯灰原出土土器実測図② (縮尺1/3)	65
第 61 図	38・39号窯灰原出土土器実測図③ (縮尺1/3)	66

#### B - 4 地区

第 62 図	B - 4 地区地形図 (縮尺1/400)	70～71
第 63 図	40～46号窯跡配置図 (縮尺1/250)	70～71
第 64 図	40号窯跡実測図 (縮尺1/40)	70
第 65 図	40号窯窯内・41号窯北側土壌出土土器実測図 (縮尺1/3)	71
第 66 図	41号窯跡実測図 (縮尺1/40)	73
第 67 図	42号窯跡実測図 (縮尺1/40)	74
第 68 図	42号窯内・前庭部出土土器実測図 (縮尺1/3)	75
第 69 図	42号窯・焚口部横土壌出土土器実測図 (縮尺1/3)	76
第 70 図	40～42号窯灰原土層図 (縮尺1/80)	77
第 71 図	40～42号窯灰原出土土器実測図① (縮尺1/3)	79
第 72 図	40～42号窯灰原出土土器実測図② (縮尺1/3)	80
第 73 図	40～42号窯灰原出土土器実測図③ (縮尺1/3)	81

第 74 図	40~42号窯灰原出土土器実測図④ (縮尺1/3)	82
第 75 図	43号窯跡実測図 (縮尺1/40)	82~83
第 76 図	43号窯窯内・煙道部出土土器実測図 (縮尺1/3・1/6)	83
第 77 図	43号灰原出土土器実測図 (縮尺1/3)	84
第 78 図	44・45号窯跡実測図 (縮尺1/40)	84~85
第 79 図	44号窯窯内・煙道部出土土器実測図 (縮尺1/3・1/6)	85
第 80 図	45号窯出土土器実測図 (縮尺1/3)	87
第 81 図	46号窯跡実測図 (縮尺1/40)	86~87
第 82 図	46号窯窯内・前庭部出土土器実測図 (縮尺1/3・1/6)	88
第 83 図	46号窯灰原出土土器実測図 (縮尺1/3)	89
第 84 図	43~46号窯灰原出土土器実測図① (縮尺1/3)	91
第 85 図	43~46号窯灰原出土土器実測図② (縮尺1/6)	92
第 86 図	44号南側土壌実測図 (縮尺1/20)	93
第 87 図	44号南側土壌出土土器実測図 (縮尺1/3)	93
第 88 図	47~49号窯跡配置図 (1/250)	94~95
第 89 図	47号窯跡実測図 (縮尺1/40)	94
第 90 図	48号窯跡実測図 (縮尺1/40)	95
第 91 図	47・48号窯出土土器実測図 (縮尺1/3)	96
第 92 図	47・48号窯周辺出土土器実測図 (縮尺1/3)	97
第 93 図	49号窯灰原出土土器実測図 (縮尺1/3)	98
第 94 図	49号窯跡実測図 (縮尺1/40)	99
第 95 図	重ね焼き・穿孔土器実測図 (縮尺1/3)	100

## I 地区

第 96 図	J・I地区地形図 (縮尺1/1,000)	102
第 97 図	I地区窯跡配置図 (縮尺1/250)	103
第 98 図	53号窯跡実測図 (縮尺1/40)	104
第 99 図	53~56号窯床面・前庭部・灰原出土土器実測図 (縮尺1/3)	106
第 100 図	54号窯跡実測図 (縮尺1/40)	107
第 101 図	55号窯跡実測図 (縮尺1/40)	108
第 102 図	56号窯跡実測図 (縮尺1/40)	110
第 103 図	53~56号灰原土層図 (縮尺1/100)	111
第 104 図	57号窯跡実測図 (縮尺1/40)	112

第 105 図	57号窯床面・灰原出土土器実測図 (縮尺1/3)	113
第 106 図	58号窯跡実測図 (縮尺1/40)	115
第 107 図	59号窯跡実測図 (縮尺1/40)	117
第 108 図	59号窯窯内・前庭部出土土器実測図 (縮尺1/3)	118
第 109 図	60号窯跡実測図 (縮尺1/40)	119
第 110 図	61号窯跡実測図 (縮尺1/40)	120
第 111 図	61・62・63号窯出土土器実測図 (縮尺1/3)	121
第 112 図	62号窯跡実測図 (縮尺1/40)	122
第 113 図	63号窯跡実測図 (縮尺1/40)	124
第 114 図	64号窯跡実測図 (縮尺1/40)	126
第 115 図	64~66号窯内・前庭部出土土器実測図 (縮尺1/3)	127
第 116 図	65号窯跡実測図 (縮尺1/40)	128
第 117 図	66号窯跡実測図 (縮尺1/40)	130~131
第 118 図	64・66号窯出土土器実測図 (縮尺1/3)	130
第 119 図	66号窯上部土壌実測図 (縮尺1/40)	132
第 120 図	66号窯上部土壌出土土器実測図① (縮尺1/3)	133
第 121 図	66号窯上部土壌出土土器実測図② (縮尺1/3・1/6)	134
第 122 図	67号窯跡実測図 (縮尺1/40)	136
第 123 図	68号窯跡実測図 (縮尺1/40)	137
第 124 図	I 地区出土土器実測図 (縮尺1/6)	138

## M-1 地区

第 125 図	M-1・2 地区地形図 (縮尺1/1,000)	140
第 126 図	M-1 地区窯跡配置図 (縮尺1/250)	141
第 127 図	51号窯跡実測図 (縮尺1/40)	142
第 128 図	51・52号窯窯内・前庭部出土土器実測図 (縮尺1/3)	143
第 129 図	51号焚口右側土壌実測図 (縮尺1/20)	144
第 130 図	51号焚口右側土壌出土土器実測図① (縮尺1/3)	146
第 131 図	51号焚口右側土壌出土土器実測図② (縮尺1/3)	147
第 132 図	52号窯実測図 (縮尺1/40)	148
第 133 図	M-1 地区土層図 (縮尺1/80)	149
第 134 図	51・52号窯灰原出土土器実測図① (縮尺1/3)	150
第 135 図	51・52号窯灰原出土土器実測図② (縮尺1/3)	151

第 136 図	51・52号窯灰原出土土器実測図③ (縮尺1/3)	152
第 137 図	51・52号窯灰原出土土器実測図④ (縮尺1/3)	153
第 138 図	51・52号窯灰原出土土器実測図⑤ (縮尺1/3)	154
第 139 図	51・52号窯灰原出土土器実測図⑥ (縮尺1/3)	155
第 140 図	51・52号窯灰原出土土器実測図⑦ (縮尺1/3)	156
第 141 図	51・52号窯灰原出土土器実測図⑧ (縮尺1/3)	156~157
第 142 図	51・52号窯灰原出土土器実測図⑨ (縮尺1/3・1/6)	157
第 143 図	灰原内土壙実測図 (縮尺1/30)	158
第 144 図	灰原内土壙出土土器実測図 (縮尺1/3)	159
第 145 図	重ね焼き実測図 (縮尺1/3)	159
第 146 図	灰原表土出土土器実測図 (縮尺1/3)	160

## M-2 地区

第 147 図	M-2 地区窯跡配置図 (縮尺1/250)	161
第 148 図	69号窯跡実測図 (縮尺1/40)	162~163
第 149 図	69号窯出土土器実測図 (縮尺1/6)	162
第 150 図	69号窯前庭部・灰原出土土器実測図 (縮尺1/3)	163
第 151 図	70号窯跡実測図 (縮尺1/30)	164~165
第 152 図	70号窯窯内・灰原出土土器実測図 (縮尺1/3)	165
第 153 図	1~3号土壙実測図 (縮尺1/30)	167
第 154 図	土師器実測図 (縮尺1/3)	167
第 155 図	A-3 地区 4号窯跡出土甕実測図 (縮尺1/6)	169
第 156 図	刻書土器実測図 (縮尺1/3・1/6)	170
第 157 図	硯実測図 (縮尺1/3)	176
第 158 図	B-2 地区計算図	178
第 159 図	方位略図	179
第 160 図	C地区窯跡配置図 (縮尺1/250)	180
第 161 図	A-1 地区窯跡配置図 (縮尺1/250)	181
第 162 図	A-3 地区窯跡配置図 (縮尺1/250)	181
第 163 図	A-2 地区窯跡配置図 (縮尺1/750)	182
第 164 図	B-2 地区窯跡配置図 (縮尺1/250)	183
第 165 図	G地区窯跡配置図 (縮尺1/250)	183

第 166 図	K 地区窯跡配置図 (縮尺1/250)	184
第 167 図	出土土器分類①	188
第 168 図	出土土器分類②	189

## 表 目 次

表 1	牛頸川治水ダム建設地内発掘調査一覧表	5
表 2	窯跡一覧表	186
表 3	遺物一覧表	193
	B-1 地区出土遺物一覧表	193
	B-4 地区出土遺物一覧表	232
	I 地区出土遺物一覧表	246
	M-1 地区出土遺物一覧表	254
	M-2 地区出土遺物一覧表	268

# I はじめに

牛頸<sup>うしくび</sup>ダムは、御笠川水系牛頸川の福岡県大野城市大字牛頸に治水ダムとして建設されるものである。

牛頸川流域は近年急速に都市化が進み、商工業、住居地域として発展しているが、梅雨期、台風期にしばしば洪水による被害が発生している。特に昭和48年7月の局地的集中豪雨では、死傷者5名を含め、家屋の流失や浸水は3,800戸におよび田畑の流失、公共施設等に大きな被害を与えた。このため河川改修工事が計画されたが牛頸川下流の沿岸には、一般家屋・住宅団地・倉庫・工場が密集し、拡幅による全面改修は困難であるため上流にダムを建設することによって洪水調整を行うと共に既得用水の補給等流水の正常な機能の維持と増進が計られた。

牛頸一帯に須恵器を生産した窯跡が分布していることは、大正年間より知られていた。過去の分布調査や、人口増加による宅地造成、道路建設、学校建設等の開発によって、200基をこえる窯跡の発掘調査が実施されその全容が明らかにされつつある。

ダム予定地内の窯の分布については、昭和54年4月と昭和55年3月に、文化課職員が現地に入り、詳細な分布調査を実施し、その結果、約100基前後の窯跡の存在が推測された。この分布調査をもとに、河川開発課、牛頸ダム建設事務所との数度の協議及び現地打合せを行い、市道付替・工事地区・土捨場について事前の発掘調査を実施し、記録保存措置を行うことになった。調査は福岡県教育委員会が県土木部河川開発課の執行委任を受けて昭和57年10月26日から現地調査を開始した。

調査にいたる経過及び各年度の調査経過・調査関係者については、『牛頸窯跡群Ⅰ』を参照されたい。ここでは、本報告掲載分について簡単にふれる。

B-1地区の調査は、昭和58年11月の伐採終了後、地形測量と奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターに依頼し、磁気探査を実施した。発掘調査は、昭和59年4月から実施した。発掘作業は急斜面のため非常に困難でかつ危険であった。その結果谷の一部奥の部分で二群計9基の窯跡を検出した。また谷の入口付近で2基分の灰原を確認したが、窯本体は用地外のため調査しなかった。

昭和60年度には、B-4地区とM-1地区の調査を行った。B-4地区については、防災工事の日程の関係で一部灰原調査を前年度に実施した。調査の結果4グループ10基の窯跡を検出した。M-1地区では、2基の窯跡を検出した。窯体の上部は、大野貯水池建設の際の護岸工事で削平され残りは良くなかったが、灰原は残存状態が良好で多数の須恵器が出土した。

I地区（牛頸川右岸法照寺裏）と、M-2地区の発掘調査は、昭和61年度に実施した。I地



区は、牛頸川の流れる大谷の右岸、丘陵突端部の斜面上に位置する。窯体、灰原は寺の建設時に大きく削平され残存状況はわるいが、16基の窯跡を検出することができた。他の窯跡群が4～6基で構成されること考えると、面積の割に非常に数が多く注目される。

M-2地区は昨年度調査したM-1地区の隣接地で2基の窯跡を検出した。70号窯は斜面に並行し、等高線上に構築され、斜面下側の側壁に4個の補助燃焼孔を有する形態である。

その他の地区について若干説明する。

E地区は、足洗川林道に沿って、南西から北東へ延びる丘陵で、尾根に平坦面を有するため工房跡・集落跡を推定し試掘調査を実施したが遺構は検出できなかった。

D地区・F地区・H地区は灰原がダムの常位満水位（標高117,700m）より上部に、また窯本体は非常時満水位（標高123,500m）より上部に位置すると推定できるため、水位移動による影響は少ないと考えられ、現状のまま保存することとした。

出土遺物は、地元で建設された「牛頸ダム記念館」に一部展示して欲しいとの要望が、牛頸区、牛頸ダム建設事務所から出されており、現在この対応について大野城市教育委員会と協議中である。

現在整理終了後の遺物・図面・写真等は、九州歴史資料館に保管している。

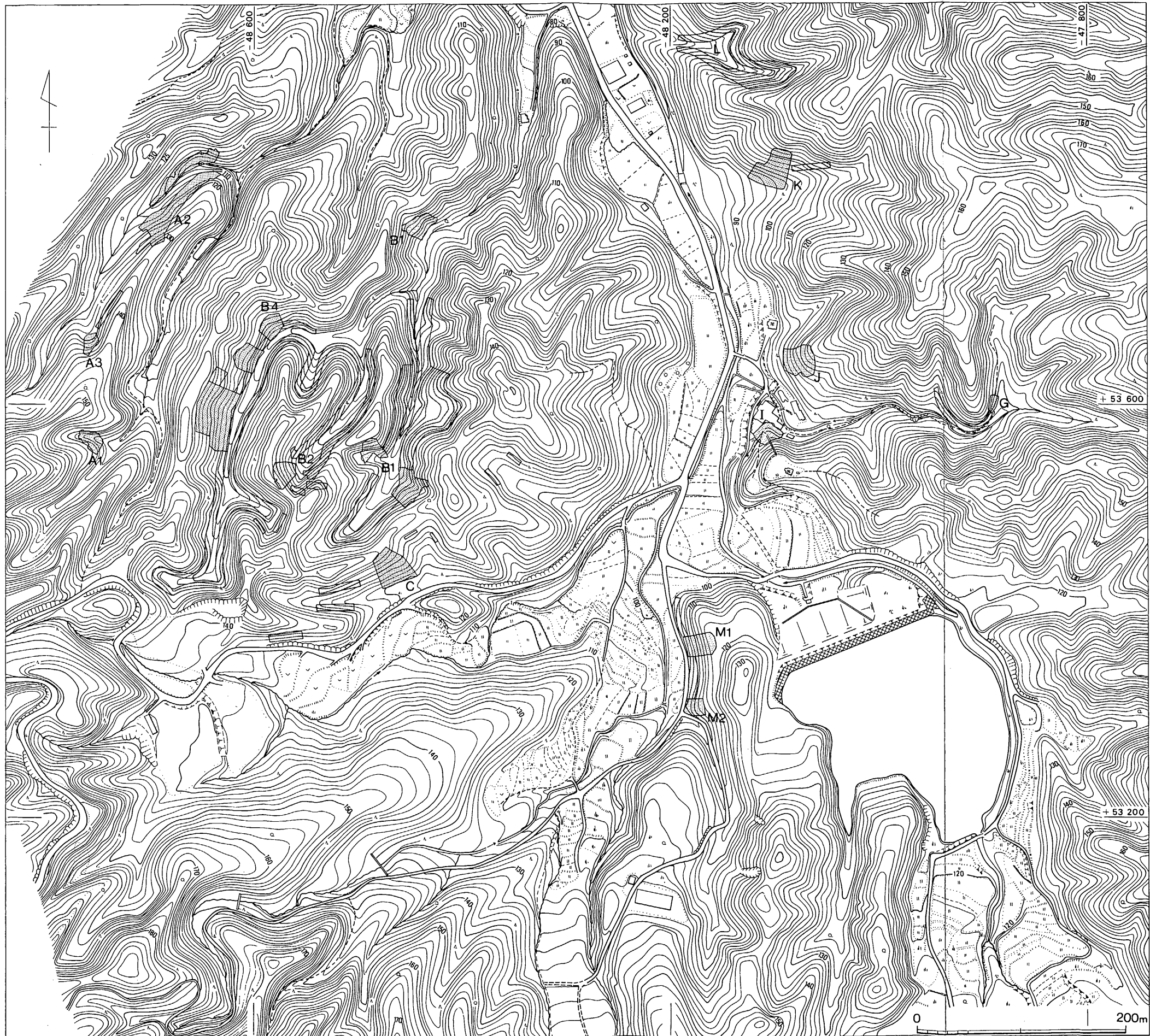
## 昭和63年度の整理

昭和57年度から61年度まで継続して行なった発掘調査によって出土した遺物は、プラスチック製パンコンテナ（横×縦×深：39.7×60.9×14.9cm）で約1,200箱に達した。この整理作業は、58年度から実施し、62年度をもってほぼ終了することができた。本年度は、本報告のため、遺物の実測・写真撮影、挿図・図版作成作業を行った。

昭和63年度の関係者は、次のとおりである。

### 福岡県教育委員会

総 括	教育長	竹 井 宏
	教育次長	大 鶴 英 雄
	指導第二部長	大 平 岩 男
	文化課課長	葉 石 勲
	同 課長補佐	平 聖 峰
	同 課長技術補佐	宮小路 賀 宏
	同 参事補佐	栗 原 和 彦
	同 参事補佐	柳 田 康 雄
庶 務	同 庶務係長	池 原 脩 二



第一圖 牛頭窯跡群地形圖 (縮尺 1/4,000)

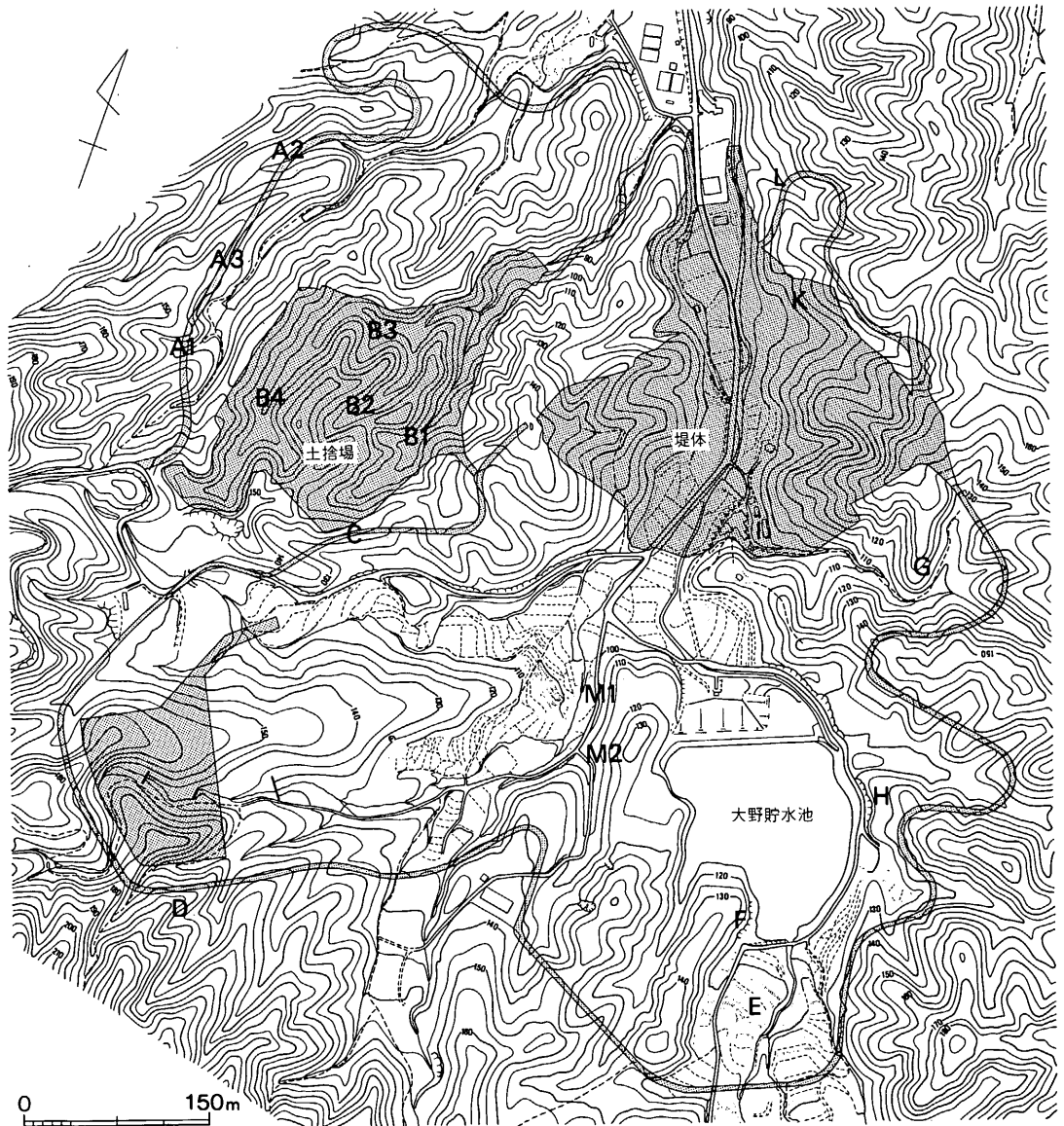
	同 事務主査	和田 健 作
整 理	同 記念物係長 (兼)	栗 原 和 彦
	同 技術主査	浜 田 信 也
	同 技術主査	小 池 史 哲
	同 主任技師	飛 野 博 文
	同 臨時職員	日 高 正 幸
	福岡県教育庁福岡教育事務所	
	社会教育課 技術主査	池 辺 元 明
	九州歴史資料館	
	学芸第一課技術主査	倉 住 靖 彦
	〃	石 丸 洋
	調査課技術主査	横 田 賢次郎
	同 技術主査	森 田 勉
	同 主任技師	赤 司 善 彦
		岩 瀬 正 信
	甘木歴史資料館副館長	川 述 昭 人
	整理補助員	豊 福 弥 生

なお、下記の協力があつた。

- 鬼木つや子・若松三枝子・佐藤みゆき・原富子・鶴田佳子・関久江・藺牟田秀子・矢野明美
- ・須原悦子・有馬信子・鬼木美知子・植山洋子・若松和子・大田育子・原カヨ子・森山シズ子
- ・福岡県土木部河川開発課、牛頸ダム建設事務所

表1 牛頸川治水ダム建設地内発掘調査地区一覧表

地区	窯跡名	所在地	窯数	調査年・月	調査担当者	備考
A-1	井手窯跡群	大字牛頸字井手 487-2	1	57年10月	川述 昭人 池辺 元明	
A-2		大字牛頸字井手 405-1 405-2	2	57年11月	川述 昭人 池辺 元明	2・3号窯は、路線外のため未調査。
A-3		大字牛頸字井手 488-2	6	58年1月	川述 昭人 池辺 元明	6号窯体・4～9号窯灰原は路線外のため未調査。
B-1	井手窯跡群	大字牛頸字井手 481-1 481-4 482-1	11	58年11月 59年4月	池辺 元明	38・39号窯は区域外のため未調査。
B-2		大字牛頸字井手 482-2	6	59年7月	横田賢次郎 森田 勉	
B-3		大字牛頸字井手 482-2	0	59年9月	池辺 元明	遺構・灰原なし。
B-4		大字牛頸字井手 481-1	10	59年12月 60年5月	池辺 元明 赤司 善彦 飛野 博文	
C	足洗川窯跡群	字足洗川 613-6 613-11 613-14	4	58年11月 59年9月	赤司 善彦 池辺 元明	
D		字足洗川 569		59年11月	赤司 善彦 池辺 元明	窯跡群は区域外。 灰原の規模から推定5基。
E		字笹原 636-1 638 644		60年8月	池辺 元明	工房跡・住居跡を推定したが試掘の結果遺構なし。
F	笹原窯跡群	字笹原 667-130		58年5月	川述 昭人 池辺 元明	現地保存。常時満水位より上部に遺存。推定2～3基。
G	道ノ下窯跡群	字道ノ下 770-5	4	58年5月	川述 昭人 池辺 元明	
H	長者原窯跡群	字長者原 670-66 670-70		58年4月	川述 昭人 池辺 元明	現地保存。常時満水位より上部に遺存。推定5基。
I		字長者原 670-57 字道ノ下 728-1	16	61年4月	池辺 元明 赤司 善彦 浜田 信也	
J	道ノ下窯跡群	字道ノ下 731	1	60年8月	池辺 元明	
K		字道ノ下 764-1 764-2	5	58年6月	川述 昭人 池辺 元明 宮小路賀宏	
L		字道ノ下 763-3		58年5月	川述 昭人 池辺 元明	窯跡は路線外に遺存。 推定2基。
M-1	笹原窯跡群	字笹原 667-12	2	60年10月	池辺 元明 飛野 博文	
M-2		字笹原 667-12 667-127	2	61年5月	池辺 元明	70号窯は炭窯。



第2図 牛頸ダム建設地及び発掘調査地点 (縮尺 1/6,000)

第3図 窯跡群名

- |            |            |             |            |            |
|------------|------------|-------------|------------|------------|
| 1. 大牟田池窯跡  | 2. 惣利窯跡群   | 3. 春日平田窯跡群  | 4. 梅頭窯跡    | 5. 出口窯跡    |
| 6. 神ノ前窯跡   | 7. 尊田窯跡群   | 8. 長浦窯跡     | 9. 向佐野窯跡   | 10. 宮ノ本窯跡  |
| 11. 華無尾窯跡群 | 12. 野添窯跡群  | 13. 大浦窯跡群   | 14. 谷置窯跡   | 15. 浦ノ原窯跡群 |
| 16. 平田窯跡群  | 17. 東浦窯跡群  | 18. 上平田窯跡群  | 19. 畑ヶ坂窯跡群 | 20. 後田窯跡群  |
| 21. 小田浦窯跡群 | 22. 大谷窯跡群  | 23. 月ノ浦窯跡群  | 24. 石坂窯跡群  | 25. 胴ノ元窯跡群 |
| 26. 城ノ山窯跡  | 27. 中通窯跡群  | 28. ハセムシ窯跡群 | 29. 原窯跡群   | 30. 井手窯跡群  |
| 31. 足洗川窯跡群 | 32. 道ノ下窯跡群 | 33. 長者原窯跡群  | 34. 笹原窯跡群  |            |

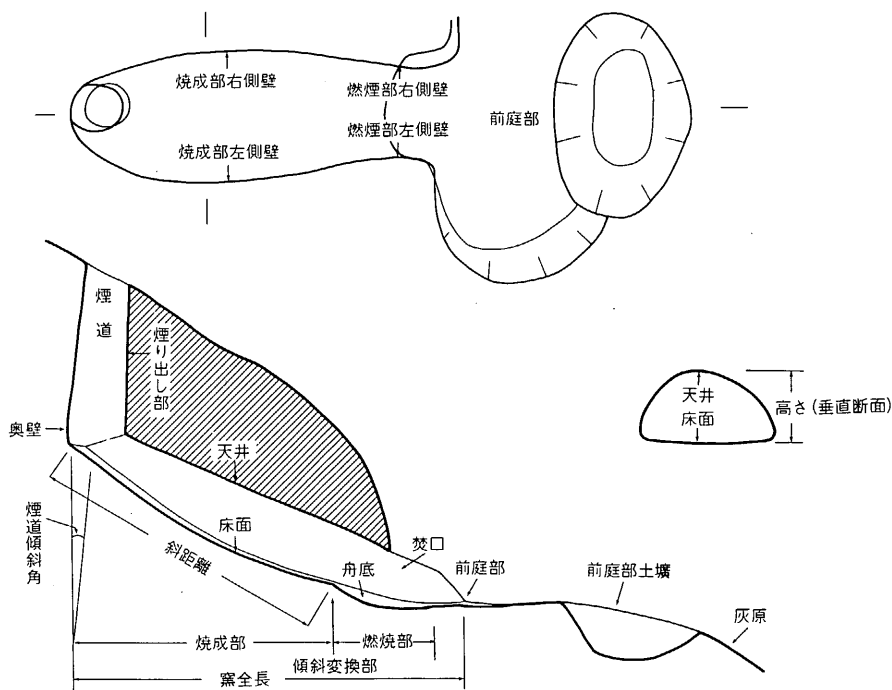


第3図 窯跡群分布図 (縮尺 1/25,000)

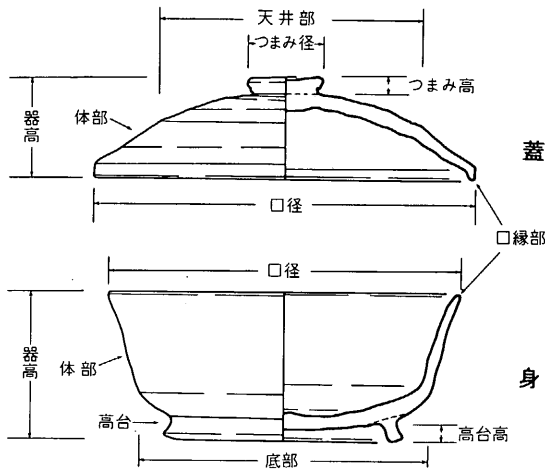
## II 遺構と遺物

牛頸ダム建設に伴って発掘調査を実施した窯跡は15地区で70基を数える。今年度の報告は、このうち、B-1地区11基・B-4地区10基、I地区16基・M-1地区2基・M-2地区2基の5地区41基について行なう。また、B-4地区出土の刻書土器、硯についての説明と、牛頸窯跡の測量法についても説明を加え、『牛頸窯跡群 I』の各地区の遺構配置図に座標方眼を記入して再掲した。各地区に記入している窯跡群の名称は従来どおり小字名を採用したが、将来的には谷単位、牛頸川、平野川の流域単位に再構成する必要があるだろう。

窯跡群の説明は各地区ごとに位置・立置・窯体・窯の付設遺構・灰原の順で行ない、説明に使用する名称及び計測点は第4図のとおりに統一した。遺物は、窯内出土遺物、当該窯の前庭部及び灰原の順で行なう。灰原が数基の窯で構成される場合は現場で一応層位の検討を行なって取り上げたが、遺物の復原作業の段階で土層名をこえて接合し、層位的な意味が認められないため、確実に窯に伴うと判断できる遺物を除き一括して取り扱うことにした。各遺物の説明は文章では行わず、蓋杯(蓋・身)、無高台杯・皿・盤・高杯・短頸壺・長頸壺・鉢・瓶・甕



第4図 窯体各部の名称・計測点模式図



第5図 須恵器各部名称・計測点模式図

の順で「遺物一覧表」に掲載した。本文・表に使用した名称及び計測点は第5図に示すとおりである。

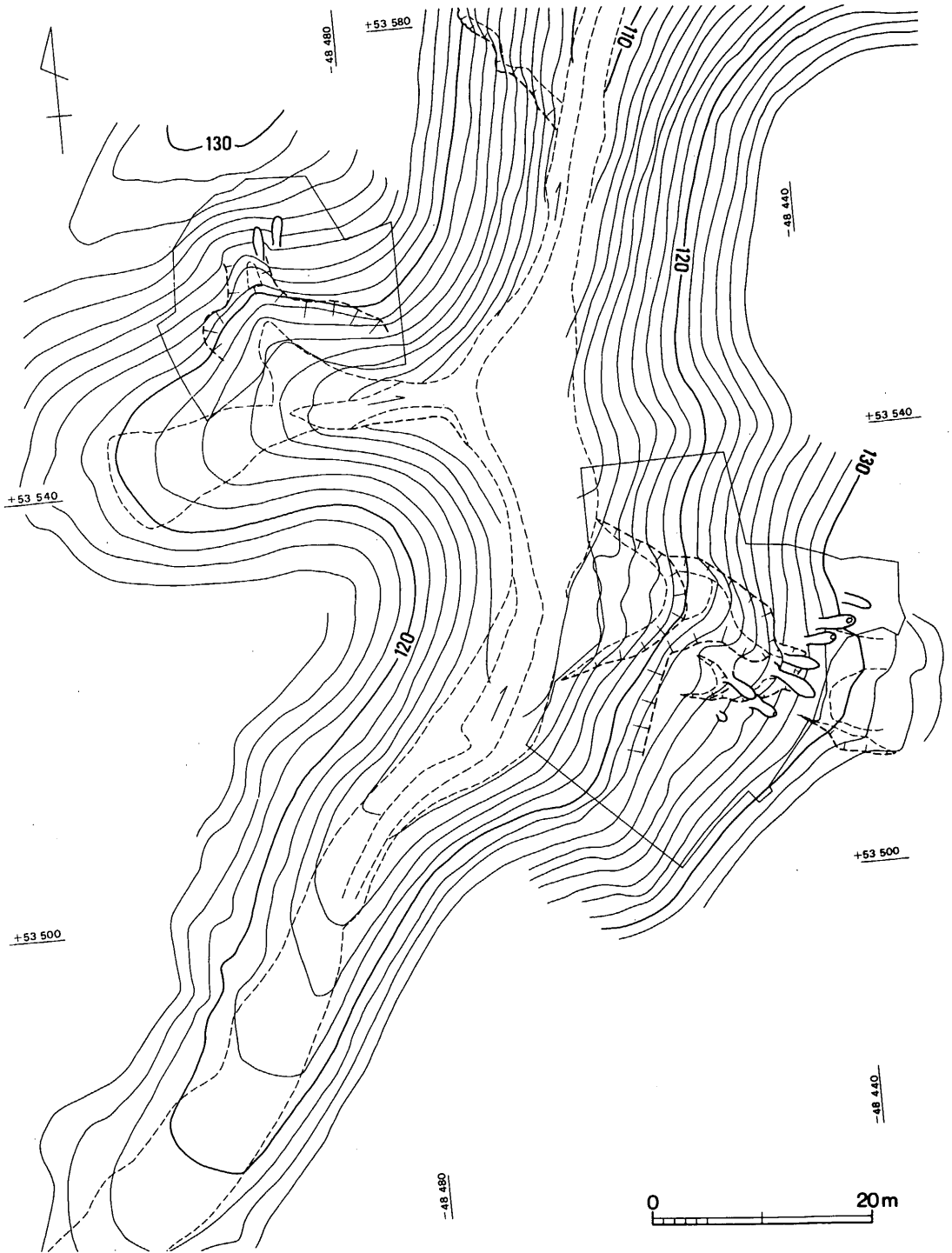
挿図での土器表現は、側面観は回転ヘラ削り調整の両端を実線で、他は破線で表現し、つまみ・高台の接合部は、稜線より濃く表現し、断面では破線を用いた。本文中の遺物番号は、地区ごとに通し番号とし、挿図・遺物一覧表と統一した。

## 1 B-1 地区（井手窯跡群）の調査

### (1) 調査の概要 (図版1～3、第6～8図)

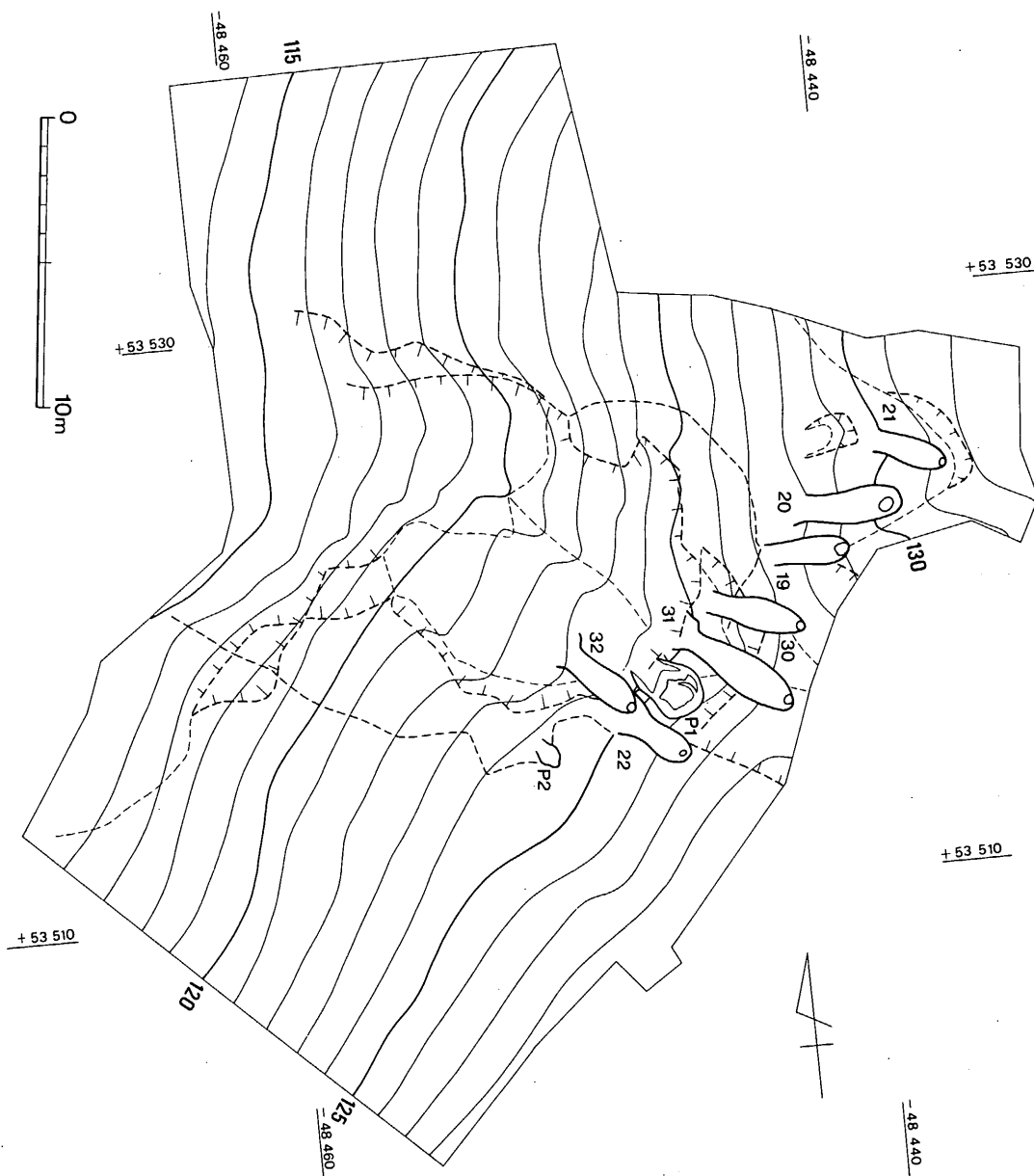
B-1 地区は、牛頸川の左岸でダム堤体が建設される丘陵を越えた西側の谷に向って開く。大野城市上水道浄水場から蛇行しながら南へ向かい、B-2・3・4へ通じる谷と二股に分かれる。この地点まで約300mある。さらに南行し、谷頭までは約250mを測る。この谷頭から約100m程もどった地点に西へ入る支谷がある。谷を形成する斜面は谷頭を除き非常に急である。この支谷のある付近から下流の谷間の沢には全面に須恵器片が散乱しており、谷の入口までこの状態が続き、窯の位置を確定するのは非常に困難であった。このため昭和58年11月、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターに依頼し、磁気探査を実施し窯の所在の確定を計ったが、岩盤上の表土層が薄く、期待通りのデータを得ることはできなかった。翌59年4月、裾部のトレンチ調査を実施し、支谷の付近で、2ヶ所に灰原を確認した。調査結果、7基と2基からなる窯跡群を検出した。19～22・30～32号窯の灰原は19号窯と30号窯の間が水道となっており、この間の灰原は流出し、岩盤が露出していた。沢の須恵器片は大半がこの部分のものであろう。



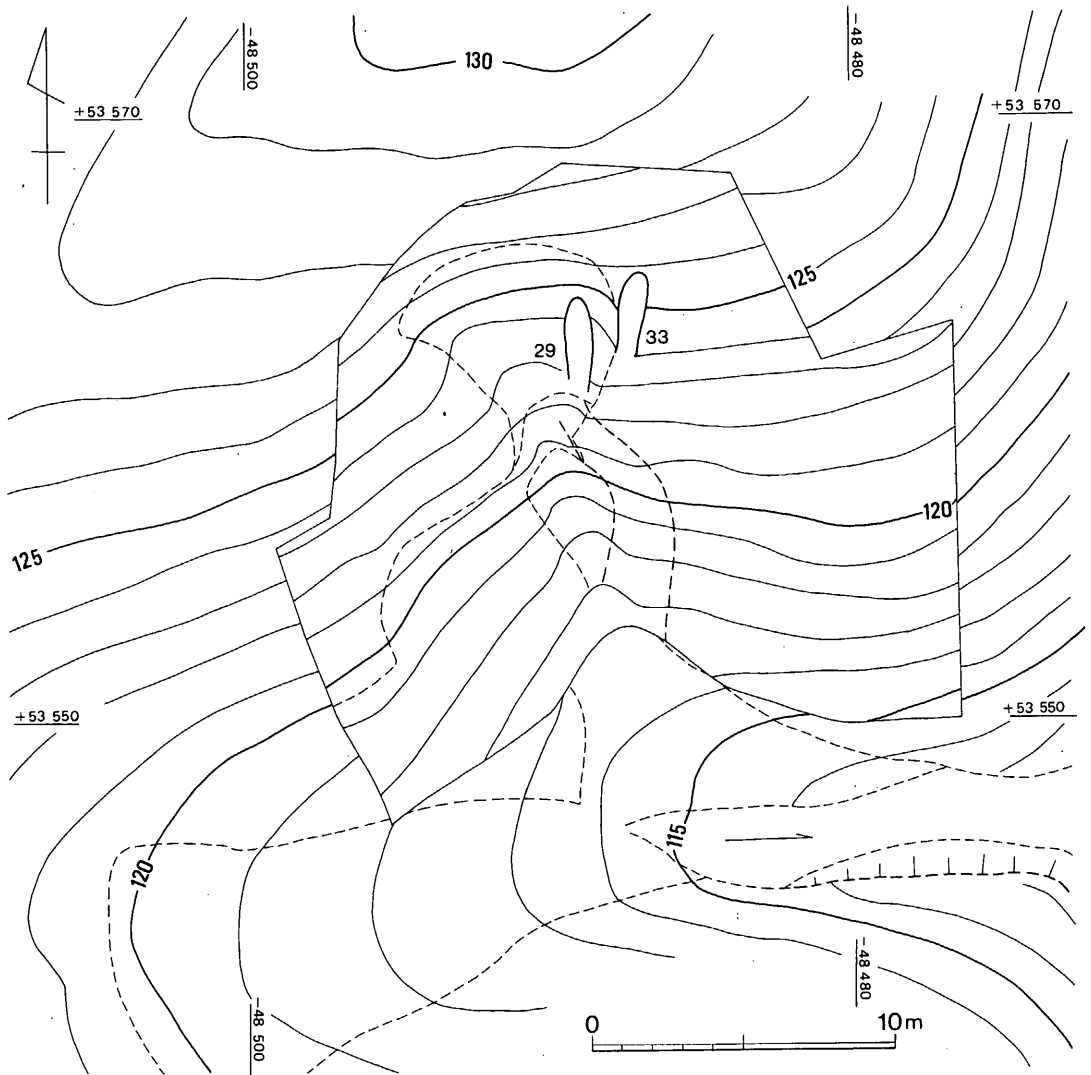


第6図 19~22・29~33号窯跡地形図 (縮尺 1/600)

B-2・3・4の谷との分岐点の北西側の急斜面でも灰原を確認し、調査の結果、窯跡本体は路線外に位置しており発掘しなかった。灰原の広がりから判断して2基の窯の存在はまちがいなく、38・39号窯とした。



第7図 19～22・30～32号窯跡配置図 (縮尺 1/250)



第8図 29・33号窯跡配置図（縮尺1/250）

## (2) 19号窯跡（図版4～6・8、第9図）

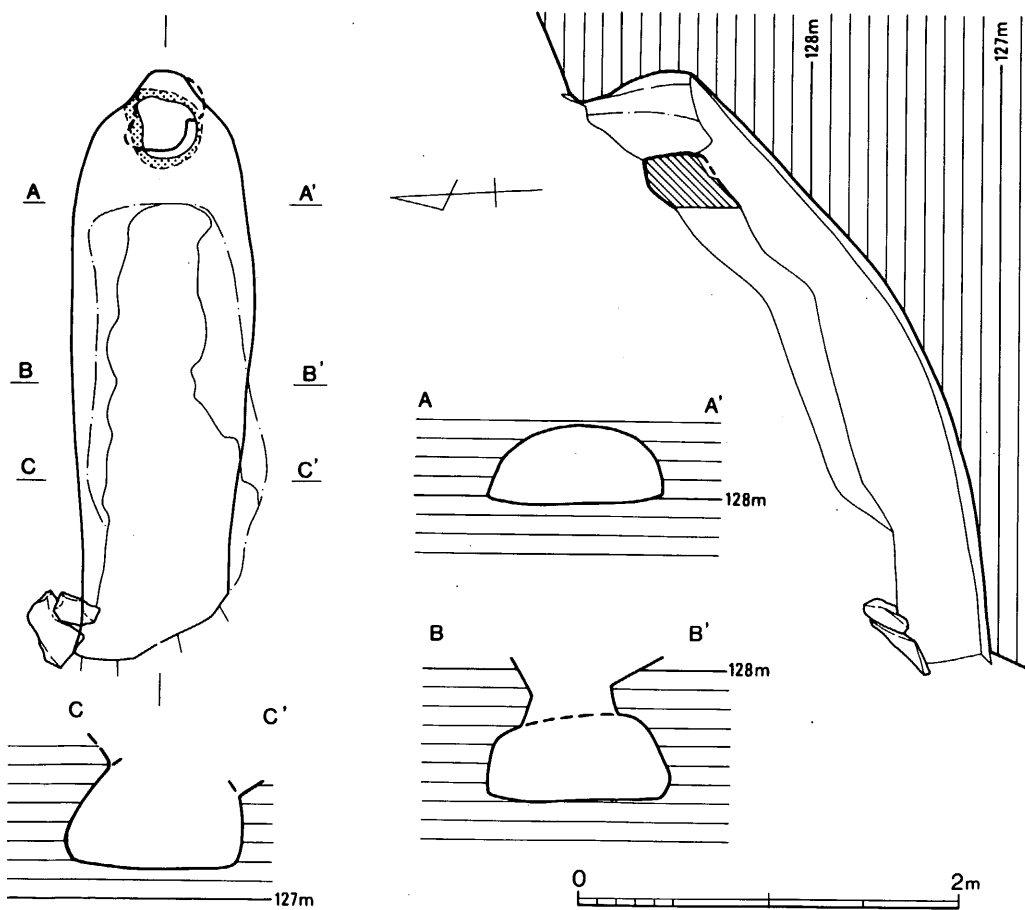
19～22・30～32号窯跡群の西側に位置し、20号窯跡と並列する。前庭部は地滑りのため残存せず、天井部も煙道付近の一部を除いて崩壊している。窯体は標高127m～129.3mの間に等高線に直交して構築され、花崗岩パイラン土を削り貫いた地下式無階無段登窯である。床面の平面形態は、燃焼部・焼成部はほぼ一定の幅で奥壁側が急に狭まる形を呈する。主軸方位は、S-86°-Eで、焚口は西を向く。主軸上での残存全長は3.1mを測る。

**燃烧部** 焚口上部と前庭部側が欠損しているため全容は不明である。烧成部との傾斜変換部は不明瞭であるが、焚口の残存状況、床面幅の変化から判断して、残存長約0.7m、幅約0.75mを測る。壁高は約0.45m程である。左壁上部に花崗岩の礫を2個使用して補強されている。貼床等は認められず地山層をそのまま床面として利用している。

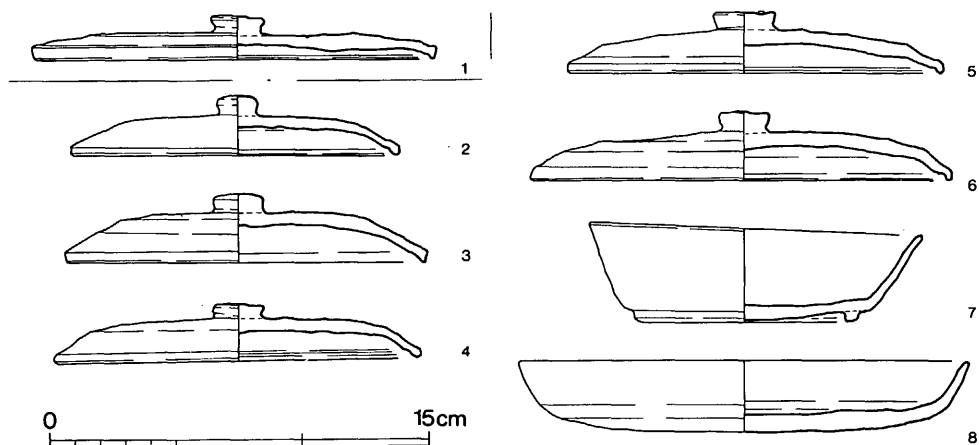
**烧成部** 燃烧部との境から、奥壁までの主軸長は2.35m、斜距離で2.8mを測る。床面の最大幅は0.95mを測り、奥壁に向って次第に狭まる。床面の傾斜は約20°~39°で奥壁に近づくにつれて急角度になっている。中央部の側壁は内彎して立上る。天井まで復原高は0.45m前後と推定できる。天井部が残る奥壁から0.5m付近では0.4mを測る。

**煙出し部** 上部は破壊を受け明確ではない。壁の一部も崩れている。0.2×0.3mの楕円を呈する筒形を呈し、現存長は床面から約0.6mを測る。

出土遺物 (図版15、第10図)



第9図 19号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



第10図 19・20号窯出土土器実測図（縮尺1/3）

煙道埋土中から蓋杯が出土した。

**蓋杯・蓋（1）** 天井部は低く、平坦である口縁部は垂直で端部は丸味をもっている。口縁部の内外面に重ね焼きよる色の違いがある。

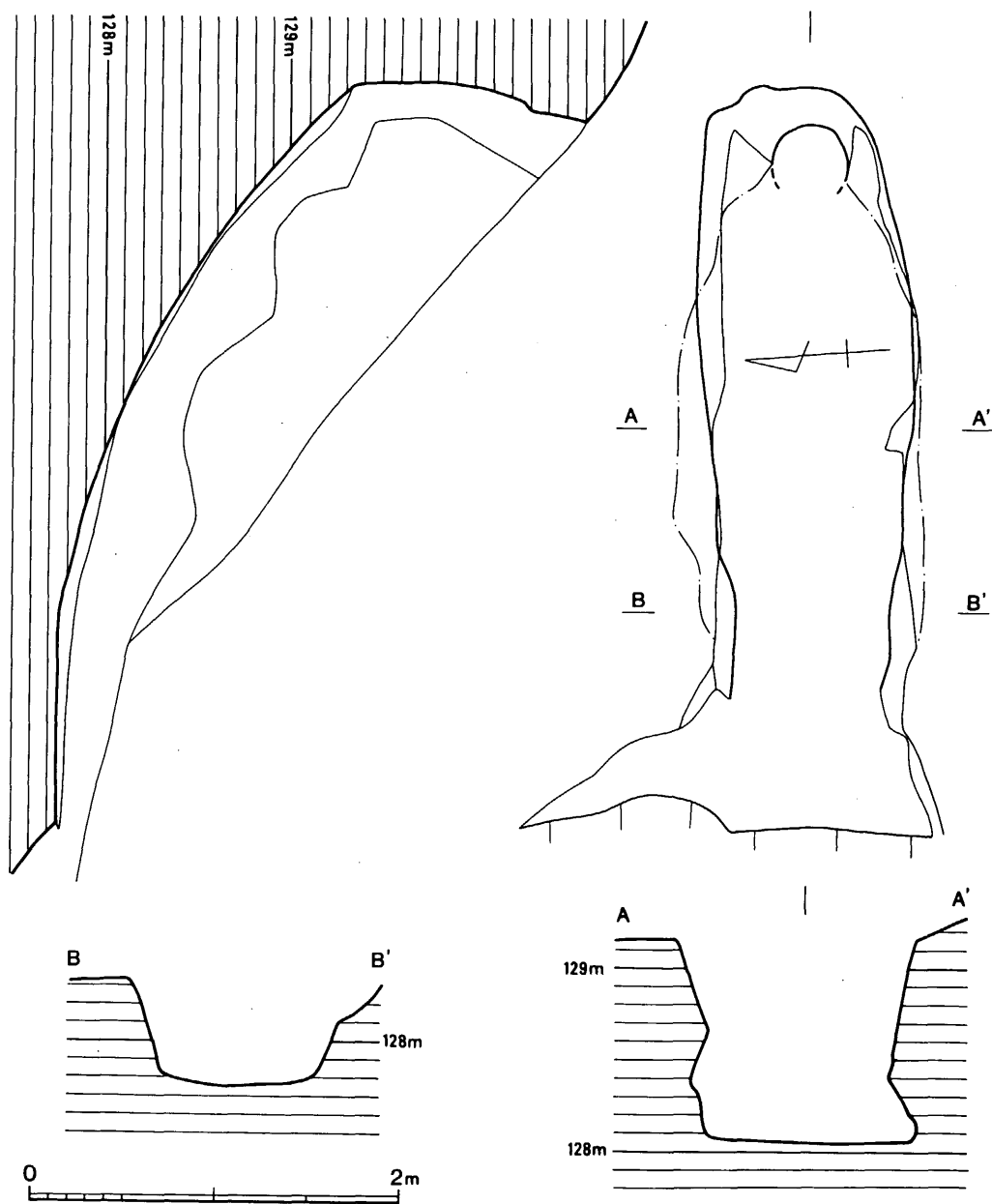
### （3）20号窯跡（図版8-2、第11図）

19号窯跡の北側に並列して検出した、地山を削り貫いて構築された地下式無階無段登窯である。窯体の主軸方位はS-89°-Eとほぼ東西方向を示し、丘陵の等高線に対して直交する。標高127.75m~130.60mの間に造られる。天井部は崩壊し全く残っていない、窯壁の残存状態も悪い。焼成部最大幅は1.15mを測り、奥壁側に向って次第に狭まるが他の窯より比して造りが広い。貼床等は認められず地山をそのまま床面としている。窯の全長は約4.0mを測る。

**燃烧部** 焚口付近は壁が崩れて明確ではないが幅約0.85m程で外側へ大きく開く。焚口から傾斜変換部0.65mが燃烧部で床は平坦である。幅は0.85mを測る。壁は斜めに立上り高さは0.6m弱である。

**焼成部** 燃烧部との境から奥壁までの主軸長は2.85m、斜距離で3.25mを測る。床幅は中央で1.1mを測る。奥壁に向って次第に狭まり、奥壁は隅丸を呈する。この部分の幅は約0.8mある。床面の傾斜は約16°~35°で奥壁に近づくにつれ急角度となる。右側壁はやや内彎気味、左側壁はほぼ直に立上る。天井部は崩壊のため高さは不明である。床面に貼床等は認められない。

**煙出し部** 崩壊のため焚口側の約半分が欠落している。残存状況から、径約40cmの筒形を呈するものと推定できる。現存長は1.25m、煙道の傾斜角は約10°である。



第11図 20号窯跡実測図（縮尺1/40）

**出土遺物**（図版15、第10図）

窯内埋土中から、蓋杯・皿が出土した。

蓋杯・蓋（2～6） いずれも天井部が低く平坦面を有す。4の口縁端部は丸い。3・6は

焼きがあまり。

**蓋杯・身（7）** 短い高台付杯である。体部はわずかに外反し、口縁端部は丸い。

**皿（8）** 焼き不良で、器壁は摩滅し調整は不明。約1/3ほどの破片である。

#### (4) 21号窯跡（図版9-1、第12図）

19～22・30～32号窯群の北側隅で最も高位置で検出した。標高129.40～131.15mの間に地山を削り貫いて構築された地下式無階無段登窯である。窯体の主軸方位はS-57°-Eで等高線に対してやや斜行する。裾部の沢までの比高は約15m測る。天井部は崩壊し残っていない。窯の全長は3.35m、幅は中央付近で約0.9mを測る。貼床等は認められず地山層をそのまま床面としている。

**燃烧部** 焚口の床幅は0.82mを測る。明確な傾斜変換部は認められないが、窯壁の残存状態、傾斜角から判断してB-B'付近が変換部と考えられる。長さは主軸線上で0.8mで床はわずかに傾斜する。床幅は0.73mでほぼ一定している。両壁とも斜めに立上り、床からの高さは0.45mである。

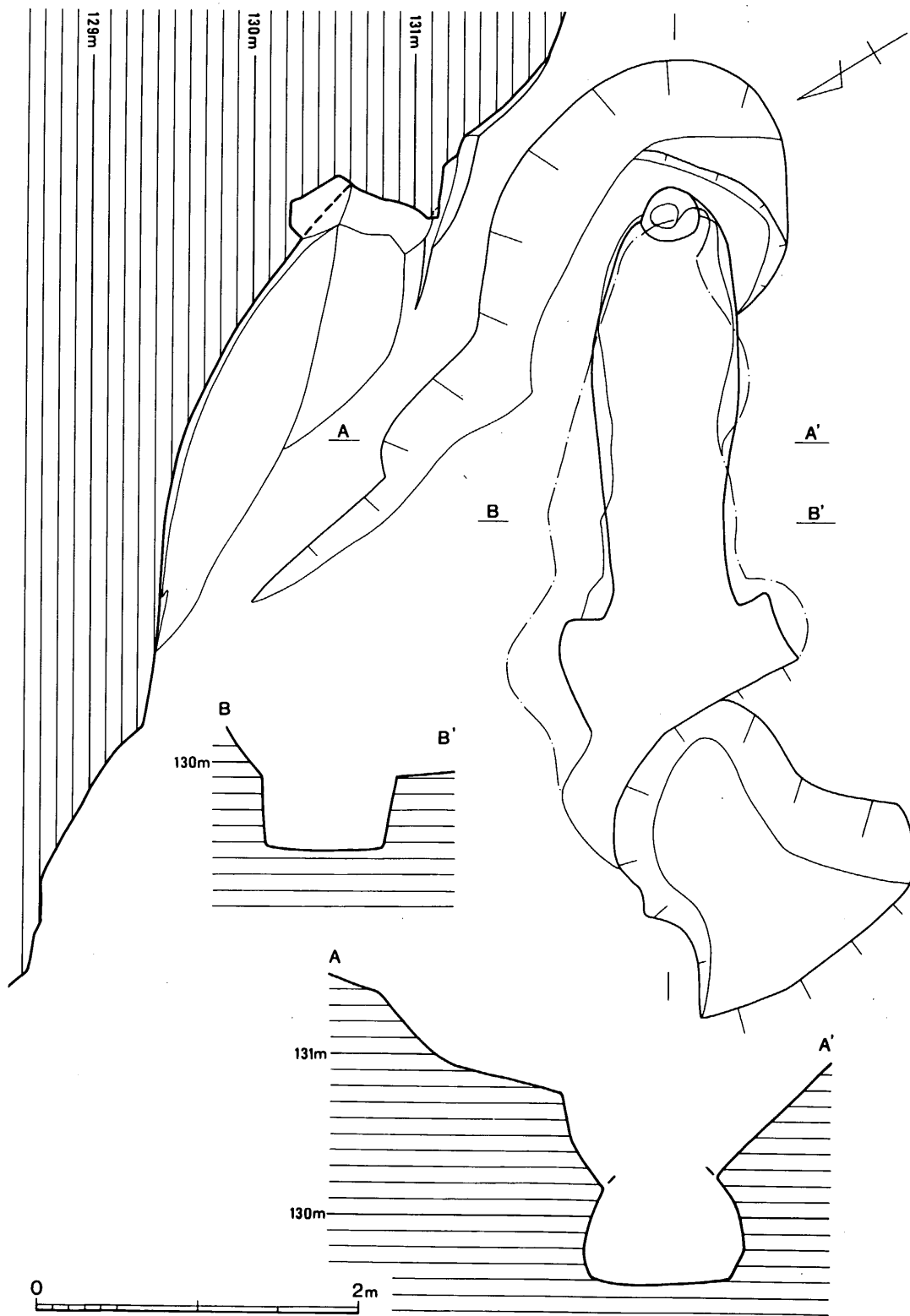
**焼成部** 燃烧部との境から、奥壁までの主軸長は2.1m、斜距離で2.4mを測る。床面幅は中央で0.9mを測り奥壁に向かって次第に狭まる。床面の傾斜角は約10°～35°で奥壁に近づくにつれて急角度になっている。壁は内彎しながら立上り、床から0.2mの位置が最大幅で1.0前後となる。天井までの高さは、壁から復原して約0.75m程になり、他の窯に比べて長さの割に高さがある。奥壁部分の床面に径0.35m深さ0.2m前後の穴があるが周囲は熱を受けておらず雨水等によって穿たれたものと判断した。

**煙出し部** 天井部の崩壊とともに約半分を失い詳細は不明である。現存長は0.55mである。現状で煙道部上端部で平坦面を有するが、この一群の窯跡の上部に湧水点があり上部をかなり浸食されており、これは構築当時のものとは考えにくい。

**前庭部** 長さ0.65m、幅1.35mの前庭部があり、この下に不整形の土壌が中軸線からやや右側にずれて掘られている。

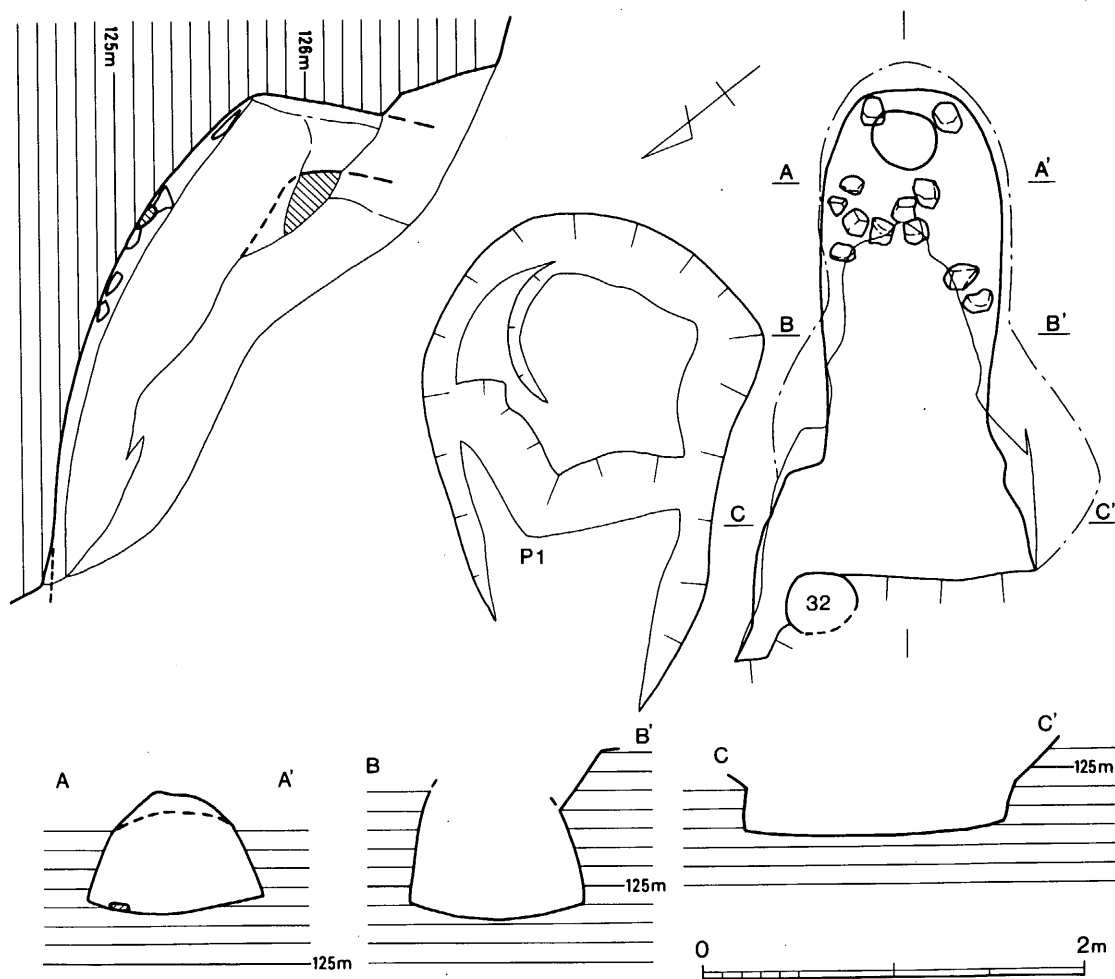
#### (5) 22号窯跡（図版9-2、第13図）

19～22・30～32号窯跡の一群の南端で検出した窯で、地山を削り貫いた無階無段登窯で、標高124.65m～127mの間に構築されている。下の沢との比高は約10.5mある。32号窯を破壊して造られている。窯体の主軸方位SN-52°-Eで等高線に対してほぼ直交する。天井部は全壊に近い。煙道部の上部も崩壊し20～30cm焚口側にずれていた。前庭部も一部崩壊していた。窯の



第 12 图 21号窯跡実測图 (縮尺 1/40)



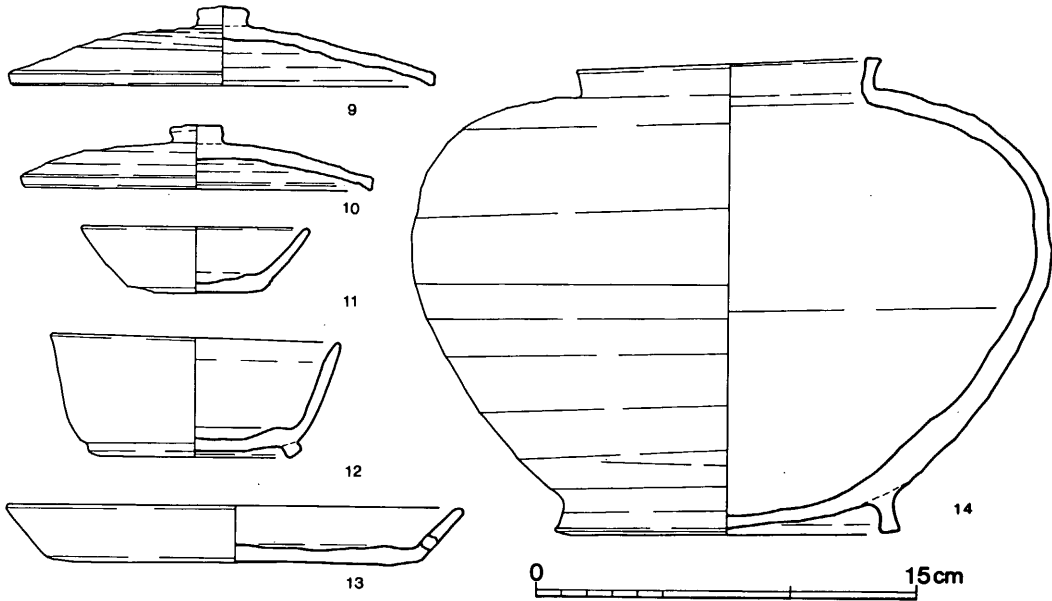


第13図 22号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

現存長は約2.1m、床幅は焼成部中央で0.95mを測る。貼床等は認められない。

**燃烧部** 焚口の床面幅は0.95mであり、床面は緩く傾斜している。焼成部との境は不明瞭であるが、床幅の変化、壁の傾斜などから判断して、長さ0.4mを測ることができる。

**焼成部** 前述の判断から焼成部の長さ1.9mほどで、床面の最大幅は中央部で0.95mを測る。平面プランは、左右壁とも緩くカーブを描く胴張り形で、奥壁コーナーはわずかに隅丸を呈している。窯体の断面形は、床面中央が低く、壁は直線的に内傾して立上る。天井までの高さは不明であるが壁の残りから推定すると、奥壁から1.5m前面で0.8m前後に復原でき、長さに対



第14図 22号窯出土土器実測図（縮尺1/3）

して非常に高い。床面の傾斜角は $15^{\circ}\sim 42^{\circ}$ を測る。床面で12個の土製置台を検出した。ほぼ原位置と考える。

**煙出し部** 現存長0.7mを測る。本来の高さは1.2m程と推定できる。平面は奥壁が角ばった筒形を呈している。

**前庭部** 前面は崩壊している。現存で長さ1m前後、幅約1.4mを測る。

#### 出土遺物（図版15、第14図）

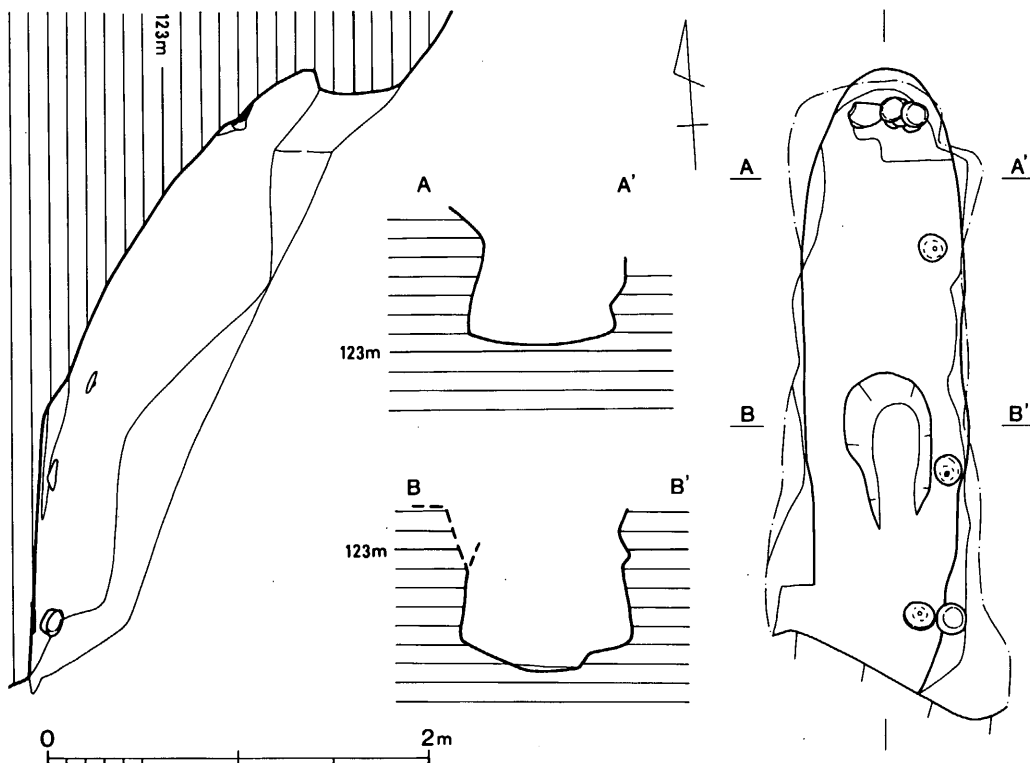
窯内埋土中・床面直上から蓋杯・皿・短頸壺が出土した。

**蓋杯・蓋（9・10）** 大きさは違うが同形態である。9は埋土中、10は床面直上からの出土。

**蓋杯・身（11・12）** 11は小形で杯で口径9cm、底部は未調整。12は口径11.4cm、底部の外側に高台が付つ。体部は直線的に開く。

**皿（13）** 床面直下からの出土で焼きはあまい。体部と底部の境に内・外両面からの穿孔が1孔認められた。

**短頸壺（14）** 22号煙道左上からの一括出土のものと、22号窯内埋土中のものが接合した。小形のもので最大胴部径は上位にある。器高は18.6cmである。



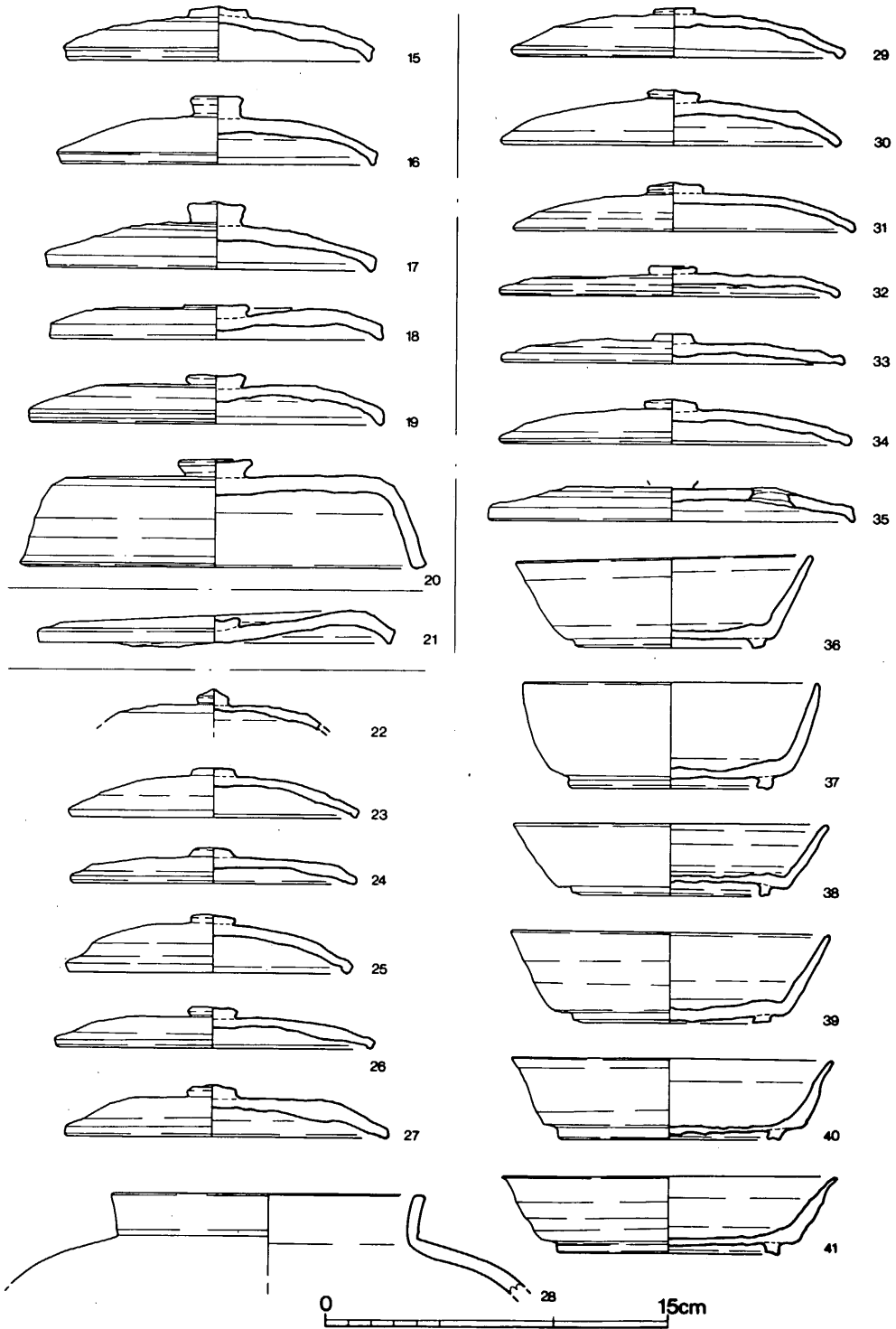
第15図 29号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

## (6) 29号窯跡 (図版10、第15図)

B-1地区の谷頭から80mほどもどった地点に西へ入る支谷がある。この南斜面に33号窯と並設されたもので、地山を削り貫いた地下式無階無段登窯である。標高122.3m~124.3mの間に等高線に対して直交して構築されている。天井部、煙道の壁面、前庭部が崩壊している。床面の形態はわずかに胴張りを呈し、奥壁は丸く造られている。窯体の主軸方位はN-4°-Eで、焚口は南に開いている。残存全長は3.25m、床面の最大幅は0.87mを測る。

**燃烧部** 天井部崩壊のため焚口の位置は不明である。床面に長さ0.8m、幅0.45mの舟底状のピットを有する。この上端が傾斜変換部で燃烧部の長さ現状で約1.5m、幅は中央で0.75mを測る。床面はわずかに傾斜している。

**焼成部** 傾斜変換部から奥壁までは、長さ1.6m、斜距離2.0mを測る。床面の最大幅は0.87mで、奥壁に向って狭まる。床の縦断面は他の窯に比べて緩やかである。傾斜角は20°~35°である。奥壁の煙道直下に原位置を保つ土製置台3個を検出した。



第16图 29·30·31号窯出土土器実測図(縮尺1/3)

煙出し部 奥壁で現存長0.5mを測る。崩壊のため詳細は不明である。

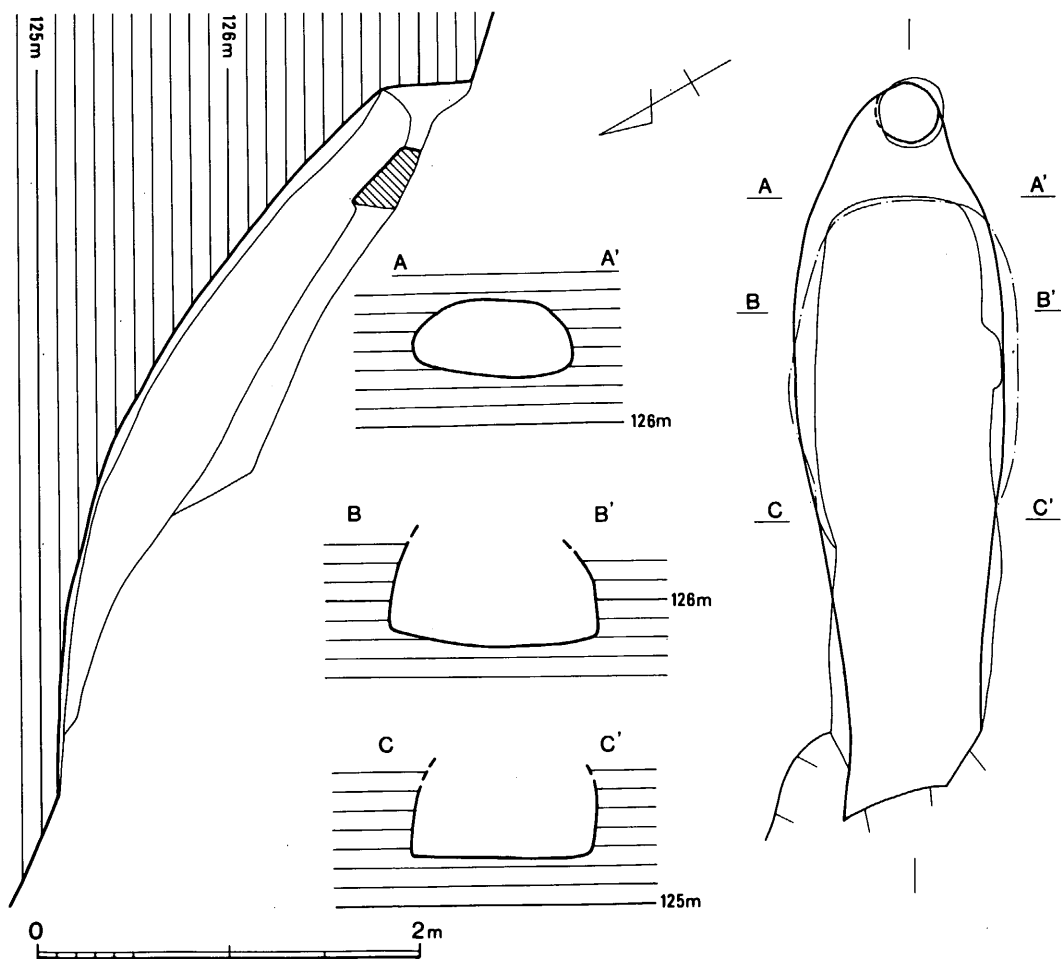
出土遺物 (図版15、第16図)

窯内床面から蓋杯・短頸壺の蓋が出土した。

蓋杯・蓋 (15~19) 15~17は天井部に丸味をもち、口縁部は内傾し、端部は丸い。18・19は天井部が平坦で口縁部は直である。

短頸頸・蓋 (20) 頂部に扁平な擬宝珠様のつまみがつき、天井部は平坦で、口縁部直線的でやや開く。端部は丸味をもつ。

(7) 30号窯跡 (図版11-2・12-1、第17図)



第17図 30号窯跡実測図 (縮尺1/40)

19号窯と31号の間に並設されている。標高125.1～127.3mの間に地山を削り貫いて構築された地下式無階無段登窯である。窯体の主軸方位はS-60°-Eで高等線に対してほぼ直交する。前庭部は崩壊し、天井部は奥壁側の一部を残すのみである。窯の残存長は3.85m、最大幅は1.07mを測る。平面形は焼成部中央が幅の広い胴張り状を呈し、奥壁は丸く造られる。

**燃焼部** 焚口の床面幅は残存状態から判断して0.67mほどであろう。床面は緩く傾斜している。傾斜変換部まで残存長は0.9m、床幅は中央で0.72mを測る。両壁はやや内彎気味に立上る。

**焼成部** 燃焼部との境から、奥壁までの主軸長は2.83m、斜距離で3.23mを測る。床面は中央で1.07mを測る。奥壁に向って次第に狭まるが、右側壁がやや内側へせり出す。床面の傾斜角は12°～40°で奥壁に近づくにつれて急角度となっている。中央部の側壁は内彎して立上り、天井は崩壊して明確ではないが、床面からの高さは約0.75mと推定される。天井部が残る奥壁から0.6m付近では0.4mを測る。床面に貼床等は認められない。

**煙出し部** 上部は崩壊のため明確ではない。煙道下端で径0.3mを測る。現存長は床面から0.5mである。

#### 出土遺物 (図版16、第16図)

窯内埋土中からの出土である。

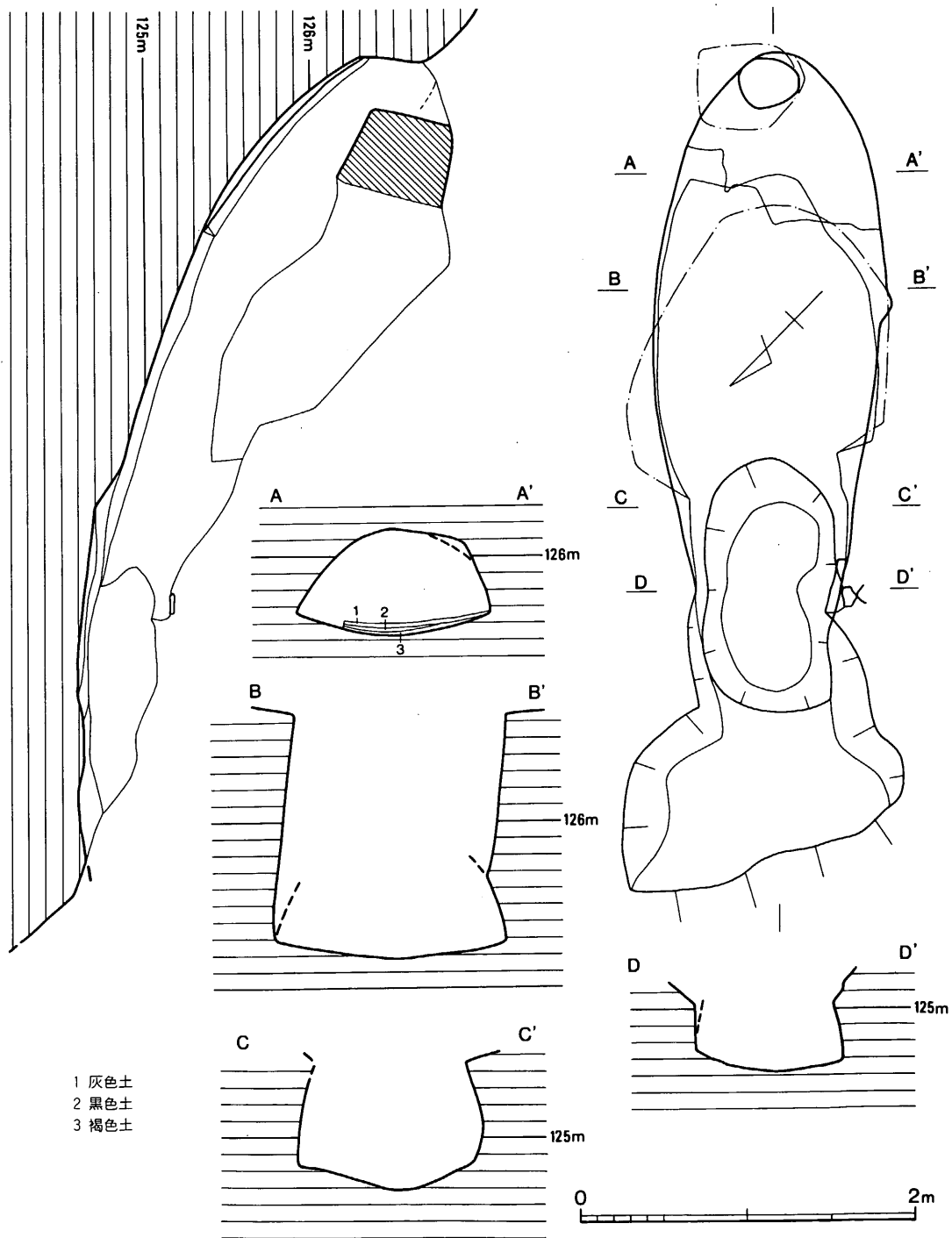
蓋杯・蓋 (21) 焼け歪みで、天井部が下がる。

#### (8) 31号窯跡 (図版12-2、第18図)

30号窯の北側に並設された窯で地山を削り貫いて構築された地下式無階無段登窯である。窯体の主軸方位はS-45°-Eで、丘陵の等高線に対して直交する。標高124.6～127mの間に造られている。天井部は奥壁部分の一部を除きほとんどが崩壊している。窯の全長は4.5mを測りB-1地区の中で最も大きい。焼成部床面の最大幅は1.36mある。平面形は両側壁が大きな弧を描き、奥壁は丸く造られている。奥壁から1mまでの床面は一段高くなっており、上部は硬く焼けしまり灰色を呈するが灰がたまった感じではない。他の部分ではこの層位は観察できず断定はできないが、貼床あるいは前焼成次の床面と考えられる。

**燃焼部** 焚口の床幅は0.7mを測り、外側へ大きく開く。燃焼部床面には、長さ1.5m、幅0.8mの舟底状のピットを有す。焚口からピット奥壁側上端までの長さは主軸線上で1.95m、幅は中央部で0.85mを測る。両壁は斜めに立上り、床からの高さは0.35mを測る。

**焼成部** 燃焼部との境から、奥壁までの主軸長は2.45m、斜距離で2.85mを測る。床面幅は中央で1.36mを測る。床の縦断面は大きな弧状を呈し、傾斜角は、20°～43°で奥壁近くは急である。中央部の両側壁・天井部は崩壊しており、床面からの高さは不明であるが、右側壁の内彎



第 18 图 31号窟迹实测图 (缩尺 1/40)

気味の立上りで断面カマボコ型に復原すれば、約0.8mほどになる。奥壁から0.7mでの高さは0.65mを測る。

**煙出し部** 煙道はそのほとんどが崩壊しており現状をとどめていない。煙道下端で0.3×0.35mを測りやや角ばった筒形を呈している。現存長は約0.4mである。

**前庭部** 焚口から0.5～0.7m残る。崩壊のため全容は不明である。

#### 出土遺物（図版16、第16図）

いずれも窯内埋土中で、舟底状ピット上部からの出土が多い。蓋杯・短頸壺片が出土した。

**蓋杯・蓋** (22～27・29～35) 12cm大のものから、16cm大のものまで出土した。23・24は天井部に丸味をもつ。26～31・34は天井部が平坦で、体部が立上り、天井部と体部の境が明瞭である。32・33は天井部が低く扁平である。35の天井部には焼成後の穿孔がある。

**蓋杯・身** (36～41)、いずれも高台付杯で外底端部から離れた位置に貼付される。36～39の体部は直線的に外上方に延びるが、40・41は口縁端部を外反させている。

**短頸壺** (28) 口縁部片である。口縁はやや外上方へ立上る。

#### (9) 32号窯跡（図版13-1、第19図）

22号窯の灰原を除去した後に検出した窯で、この斜面の窯跡群の中でも最も低位置にあり、沢までの比高は約8mを測る。標高122.8～124.6mの間に、地山を切り貫いて構築された無階無段登窯である。窯体の主軸方位はS-40°-Eを以て等高線に直交する。天井部は煙道の周囲を除き崩壊している。窯の全長は3.0m、床面は焼成部の中央で1.03mを測る。貼床等は認められず地山層をそのまま床面としている。

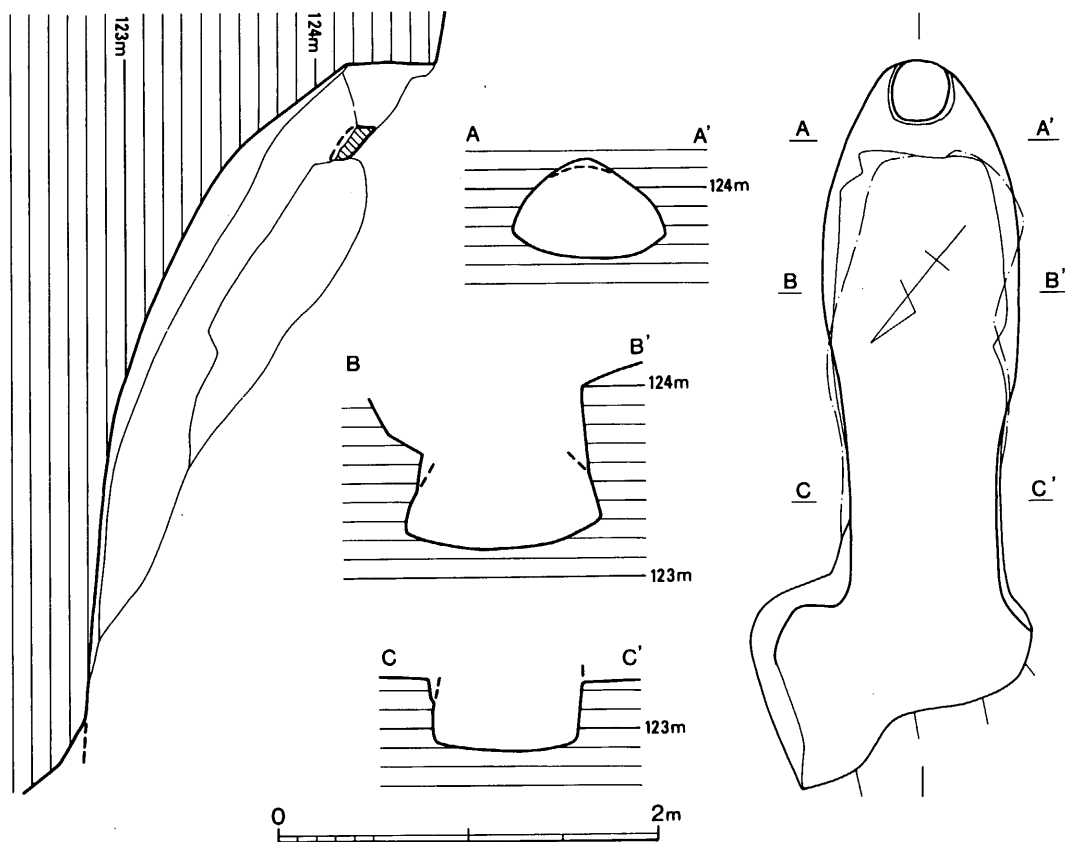
**燃焼部** 焚口の床幅は0.8mを測り、外側へ大きく開く。傾斜変換部までは主軸線上で0.65m、床幅は0.75mでほぼ一定している。床はわずかに傾斜する。左壁は内彎気味に、右壁はやや斜めに立上る。

**焼成部** 燃焼部の境から、奥壁までの主軸長は2.17m、斜距離で2.45mを測る。床幅は中央で1.03mを測る。平面プランは胴張り形であるが右壁は中央が直線的である。床の縦断面は中央部が彎曲している。焼成部端部から奥壁基部までの傾斜は31°であるが、奥壁近くの傾斜は53°ある。中央付近での側壁はやや内彎しながら立上る。

**煙出し部** 奥壁の基底部からほぼ直に立上る。平面形は、0.3×0.35mの隅丸方形を呈する。現存長は0.47mを測る。

**前庭部** 焚口から0.6mまで確認したが崩壊し全容は不明である。





第19図 32号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

## 出土遺物 (図版16・17、第20図)

いずれも窯内埋土中からの出土である。

**蓋杯・蓋 (42~45)** 11cm大から20cm大のものまでである。43はやや丸味もち、天井部と体部の境が不明瞭である。他は天井部は平坦である。

**蓋杯・身 (46~49)** 11cm大から17cm大のものまでである。高台は外底端部のやや内側につく。46~47の体部はわずかに外反する。

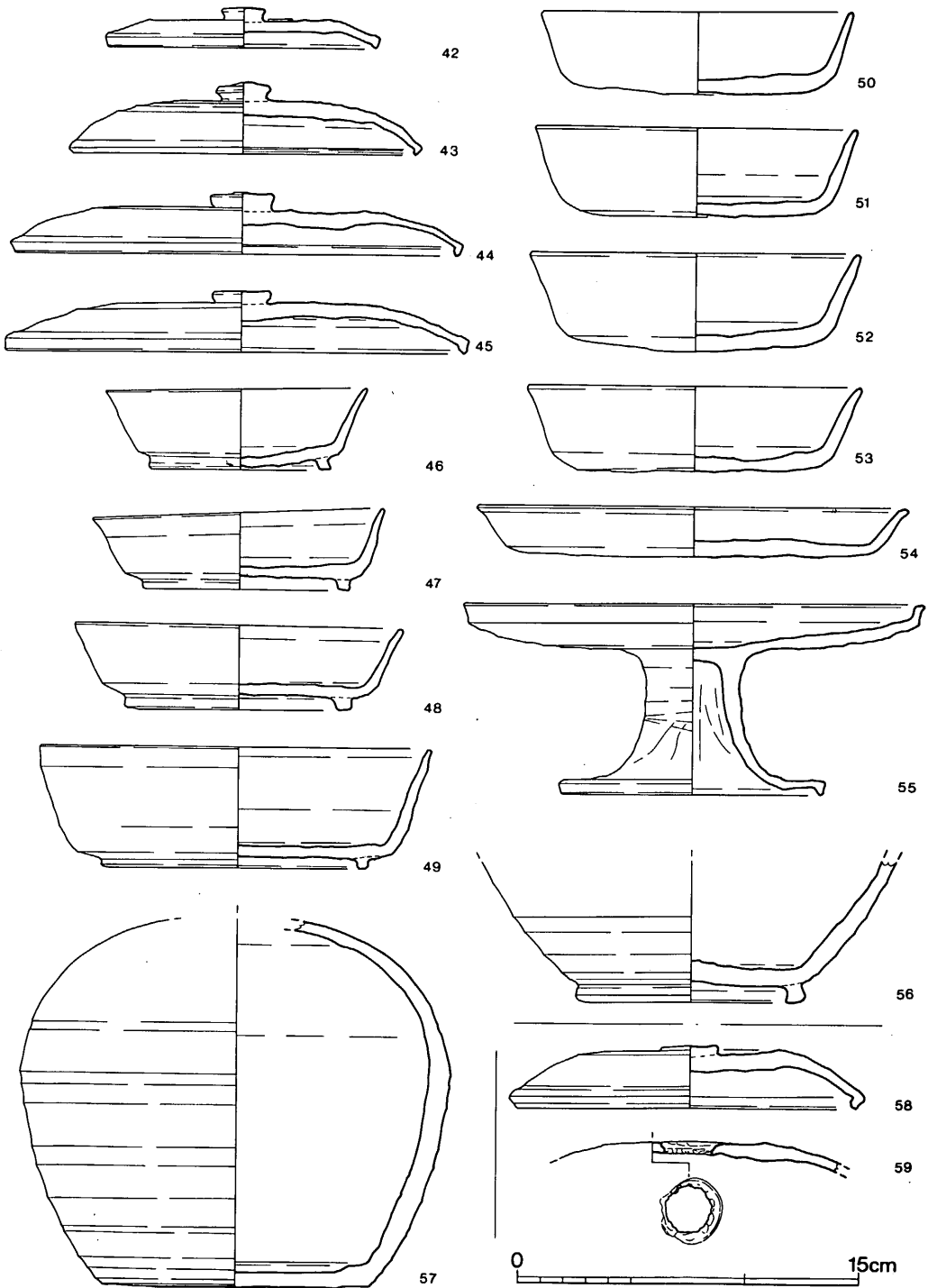
**杯 (50~53)** 無高台杯で体部と底部の境が不明瞭で、底外面は未調整である。

**皿 (54)** 口縁端部は丸味をもち、外方へつまみ出される。底外面は未調整である。

**高杯 (55)** 脚高6.5cmで短い。脚部のシボリ目は顕著である。

**長頸壺 (56)** 胴部下位の破片である。底部には八の字形の低い高台を持つ。

**瓶 (57)** 32号窯埋土中と灰原G34で出土した破片が接合した。胴部は丸味もち、中位以下は回転ヘラ削り、短い外反する口縁部をもつものであろう。



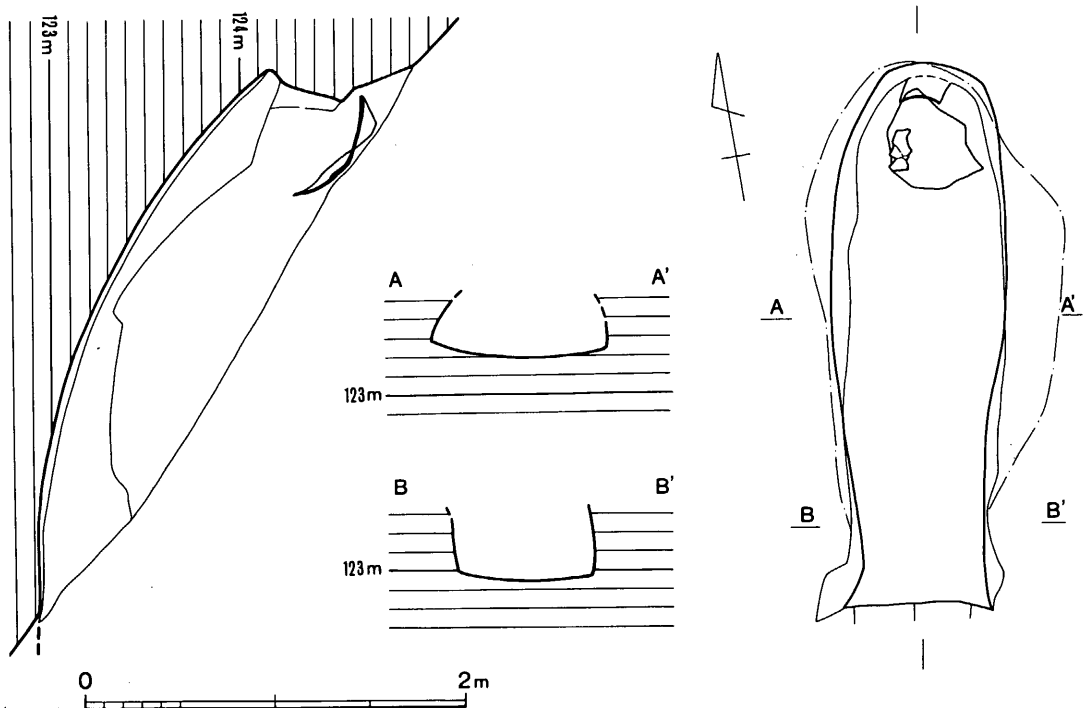
第20图 32·33号窯出土土器実測図(縮尺1/3)

## (10) 33号窯跡 (図版14-2、第21図)

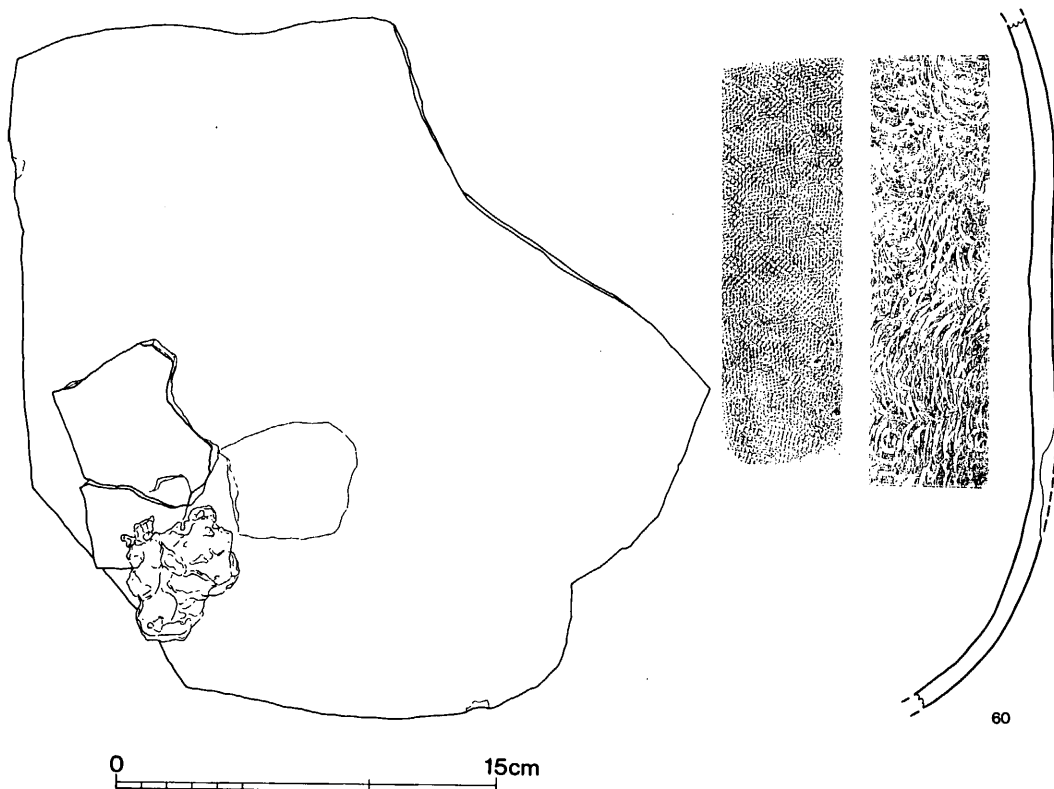
29号窯の東側に並設されたもので、29号窯より若干高位置にある。標高122.9~125 mの間に等高線に対して直交して構築され、地山を切り貫いた地下式無階無段登窯である。29号窯の発掘後の写真撮影時に土色の変化に気づき検出したものである天井部・煙出し部・前庭部が崩壊している。側壁の残りも悪い。床面の平面形は、燃烧部と焼成部の境付近から徐々に幅を増すが他の窯に比べて胴張りは緩かで、奥壁にかけて幅を狭める。窯体の主軸方位は $N-9^{\circ}-E$ で、焚口は南を向く。主軸上での残存全長は、2.9mを測り、床面の最大幅は0.92mである。

**燃烧部** 焚口の床面幅は0.77mを測り、床面はほぼ平坦である。傾斜変換部までの長さは約0.5mで、幅は中央で0.63mを測る。両壁は内彎気味に立上り、高さは約0.4mである。

**焼成部** 燃烧部との境から、奥壁までの主軸長は2.33m、斜距離は2.65mを測る。床面幅は中央で0.92mである。床の縦断面は、弧状を呈し傾斜角度は、 $10^{\circ}\sim 40^{\circ}$ で中央部から奥壁までは急傾斜である。両側は内彎して立上る。この角度で天井を復原すると、床面までは0.45mほどと推定できる。



第21図 33号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



第22図 33号煙道部蓋甕実測図(縮尺1/6)

**煙出し部** 奥壁側で壁が若干残る程度で崩壊し煙道の形状は不明である。残存状況から煙道は $15^{\circ}$ 程前傾すると考えられる。上層から煙道を覆ったと考えられる大甕胴部片が出土した。

#### 出土遺物(図版17、第20図)

ともに窯内埋土中からの出土である。

**蓋杯・蓋(58・59)** 58は天井部が平坦で、体部との境は明瞭である。59は天井部のつまみの跡に、焼成後内側からの穿孔がある。

#### 煙道部

**甕(60)** 煙道上部からの出土である。外面は格子タタキ、内面は弧状の当具痕が残る。外面には土器の破片と窯内の砂が付着している。

#### (11) 1号土壌(第23図)

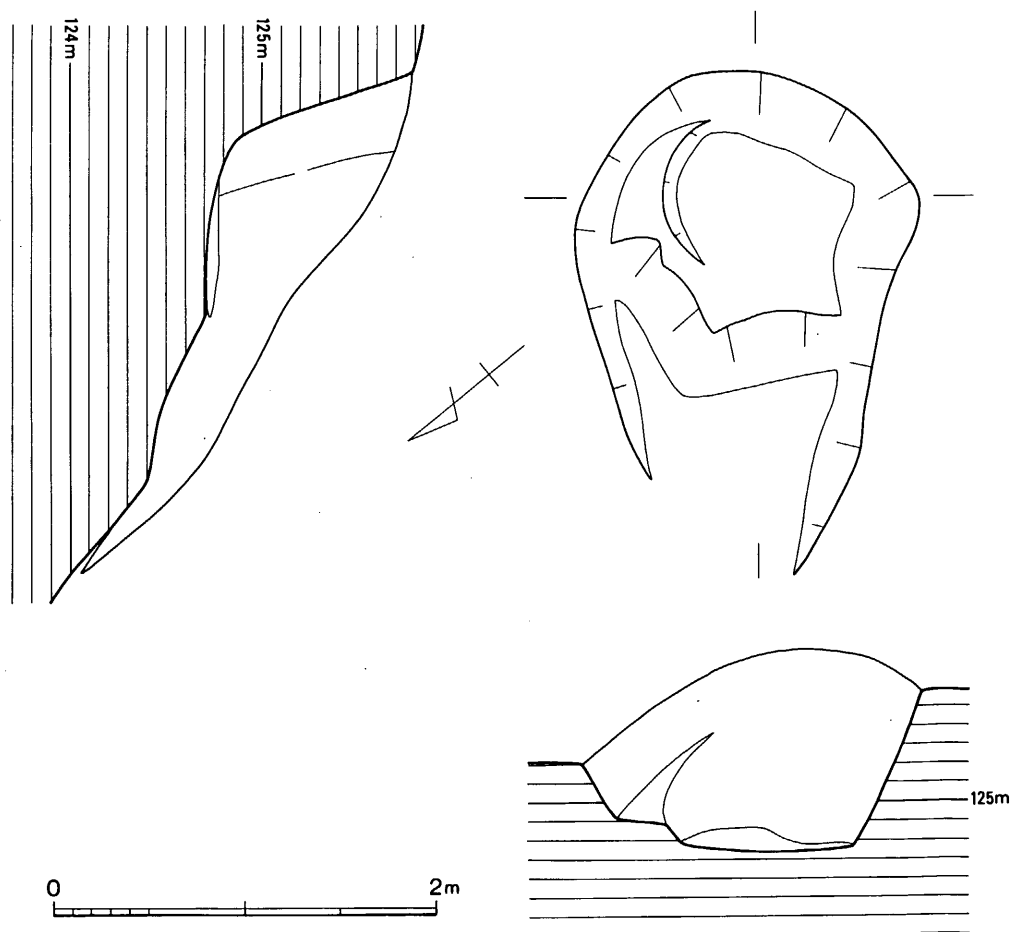
22号窯の北側、31号窯南側で両窯に挟まれて検出された土壌である。標高124~125.8mの間

に掘られている。長さ2.65m、最大幅1.8mを測る。性格は不明である。埋土は暗褐色で若干炭の混入が認められた。埋土中から多くの須恵器を出土した。31号窯跡の作業場として使用されたものであろうか。形状や立地からみて、窯の構築の際に崩壊したものを利用した可能性も考えられる。

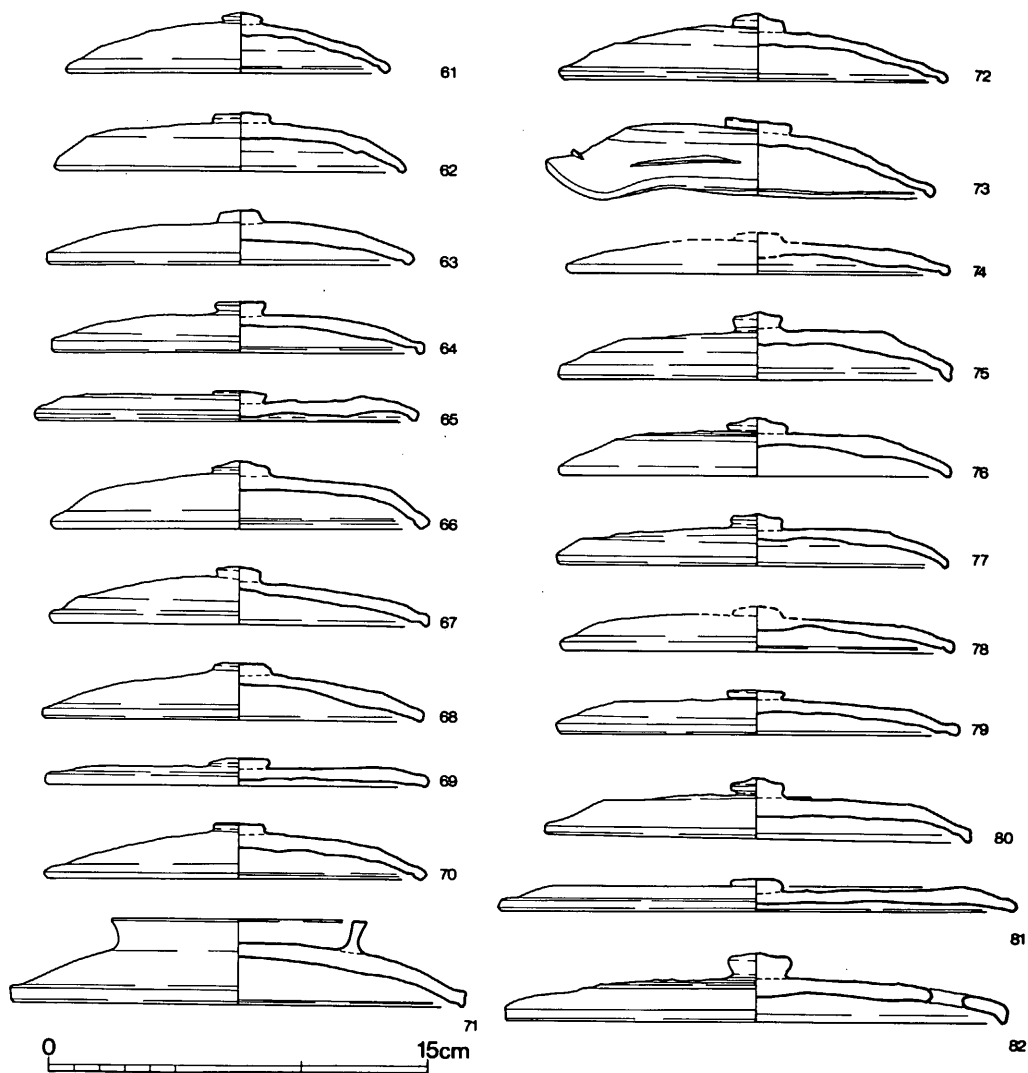
#### 出土遺物 (図版17・18、第24図)

**蓋杯・蓋 (61~82)** 12cm大から20cm大のものまである。天井部が丸味をもち、体部との境が不明瞭なもの、61~64・66~68・70・72・74。天井部が平坦で体部との境が明瞭なもの、75~77・79。天井部が低く扁平なもの、65・69・81がある。71は環状の特殊なつまみを有す。82は焼成前の穿孔が2孔ある。

**蓋杯・身 (83~95)** 体部が直線的に外上方に延び、底部との境が明瞭であるもの、83~88



第23図 1号土坑実測図 (縮尺 1/40)

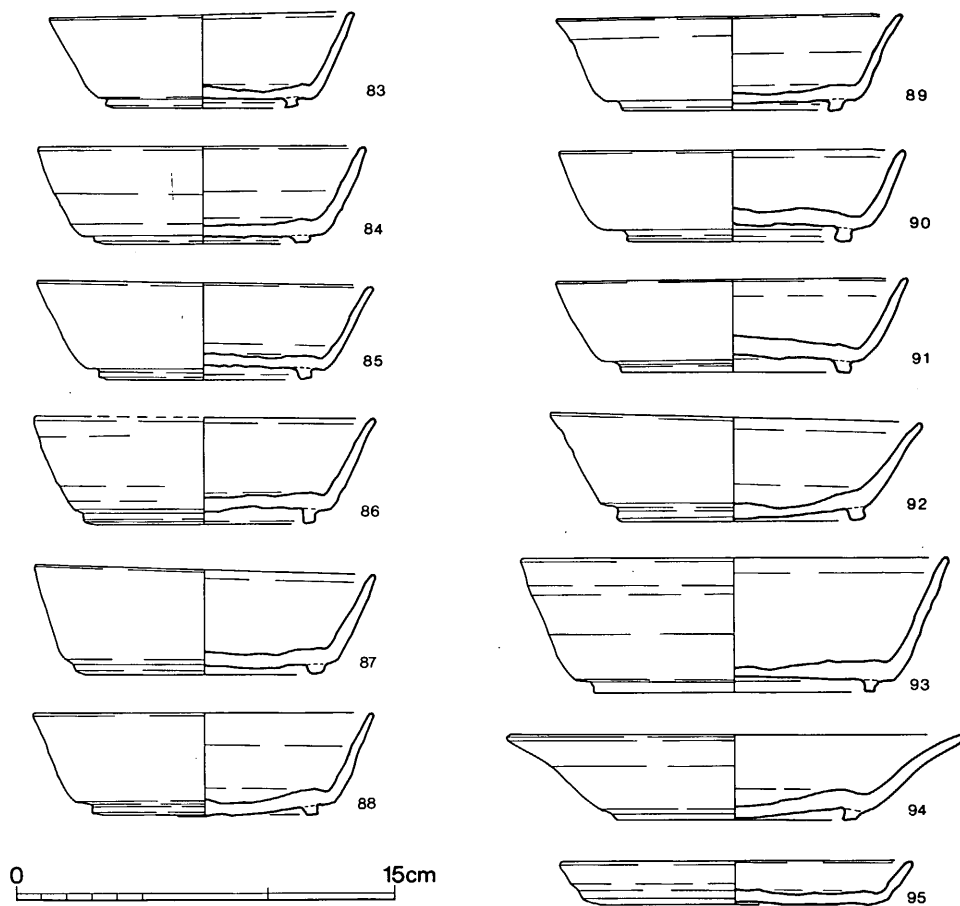


第24図 1号土城出土土器実測図①(縮尺1/3)

・90・91。体部が外反するもの、89・93。94は口縁部が大きく開き、体部は外反する。高台は外底端部より内側に貼付されるが、92・94は外底部端につく。

皿(95) 径14cmの小形のもので、外底部は未調整である。

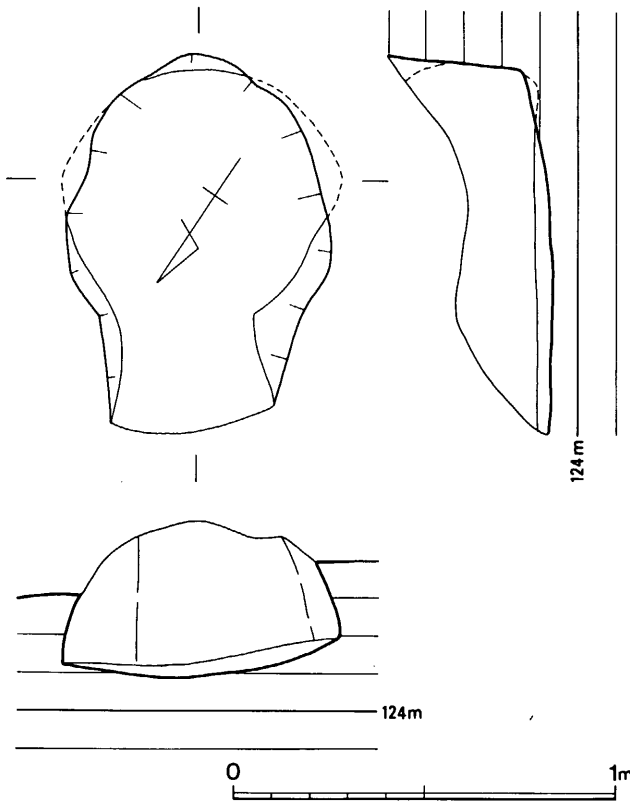
鉢(110) 1号土城の他に灰原G14、沢内から出土したものが接合した。口径 23.8cmである。胴部外面中位以下は、回転ヘラ削り、他は横ナデ調整。



第25図 1号土壌出土土器実測図② (縮尺1/3)

## (12) 2号土壌 (第26図)

22号窯の南側の灰原G17から検出した土壌である。標高124.1mに造られている。長さ約1m、最大幅0.74mを測る。主軸方位はS-33°-Eで形態は小形の窯を思わせる。斜面下側に壁はなく入口になっている。ここでの長さ約0.3m、幅は北側0.43m、南側で0.35mを測る。さらに南側に楕円形プランの土壌がつづく、主軸線上で長さ0.67m、幅0.74mを測る。壁は内彎して立上り焼成部を思わせる。床面から現地表までの高さは、0.2~0.4mを測る。周壁は熱を受け赤変するが、窯のように焼け締った状態は認められない。埋土には炭を多く含んでおり、土器が出土した。



第26図 2号土壙実測図(縮尺1/20)

**出土遺物**

(図版18・19、第27図)

**蓋杯・蓋 (96~100)** 96・97は体部と底部の境は丸味をもつ。98~100は天井部が低く扁平である。

**蓋杯・身 (101~106)** 大きさは総て13cm大である。体部は直線的に外上方に延び、高台は外底端部から離れた位置に貼付する。

**皿 (107・108)** 口縁部が若干外反する。外底部は、ヘラ切り離しのままで未調整である。107の外底部は板状圧痕を伴う。

**壺 (109)** 器高10.65cmの小形のもので、外底部未調整。他は回転ナデ調整である。

(13) 灰原 (第28図)

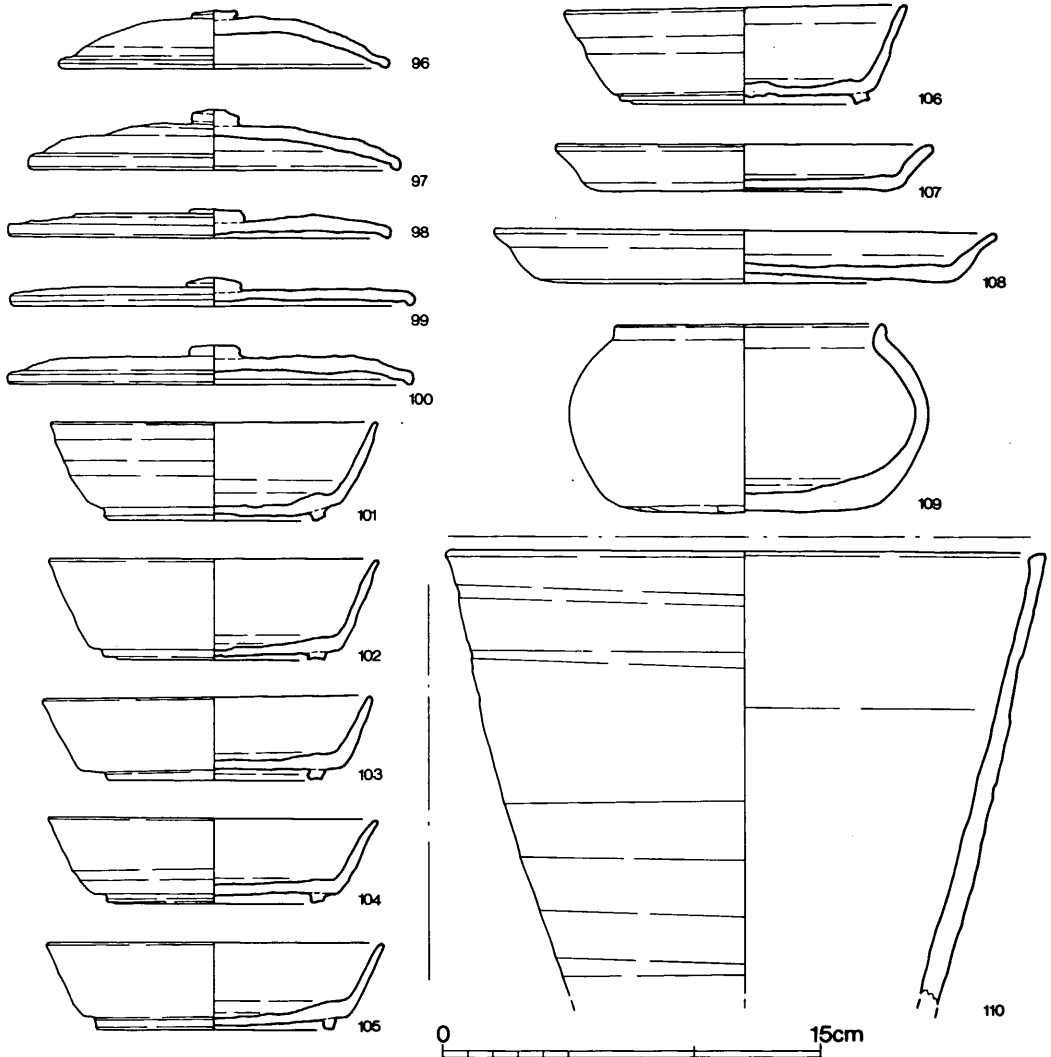
19~21号窯灰原 (第7・28・29図) 19~21号窯の灰原は、標高129~125mまで間に扇形に広がる。標高125m以下は地滑りによって崩壊し、地山の岩盤が露出している。21号窯の前庭部付近から灰原が認められたが、炭・灰が混入した黒色土は、21号前庭部土壙と標高126m以下の2×3mの箱囲内である。出土した土器もほとんどこの中である。

**出土遺物 (図版19~21、第30~33図)**

**蓋杯・蓋 (111~164)** 口径12cmから24cmの大形品までであるが、14~15.5cmの大きさが大半である。形態により3種類に分類できる

天井が高く丸味をもち、体部との境が明瞭でないもの111・112・114・117・125・136・137





第27図 2号土壙出土土器実測図(縮尺1/3)

・140・142~144・146~149・156。天井部が平坦で、体部が立上がり天井部と体部との境が明瞭なもの122~124・127・128・129・131~135・138・139・141・145・150~154・157~159。天井が低く扁平なもの115・116・118・120・130・155。160・161は23cmをこす大形品である。天井部は平坦で、体部との境付近は丸味をもち、口縁は外方へ曲げられ、端部を下方へつまみ出す。162~164はつまみを持たない。

**蓋杯・身(165~186)** 大半が体部が直線的に外上方へ延び、底部との境がやや丸味をもち、高台が外底端部に貼付される形態である。このうち体部がやや外反気味に立上るものに、166・170・172・184がある。高台が外底端から内側に貼付されるものに、173・177・185・186がある。

外底部は未調整で、169と171の高台部分に板状圧痕が伴う。

**杯 (187)** 器壁は厚く、口縁部がわずかに外反する。外底部は未調整である。

**長頸壺 (188)** 肩部・胴部の境の屈曲部の破片である。器壁が薄い。

**鉢 (189)** 口縁部をわずかに残す、胴部片で、底部に不明。反転実測。

**頸部片 (191)** 長い頸部で、中位に凹線が一条走る。

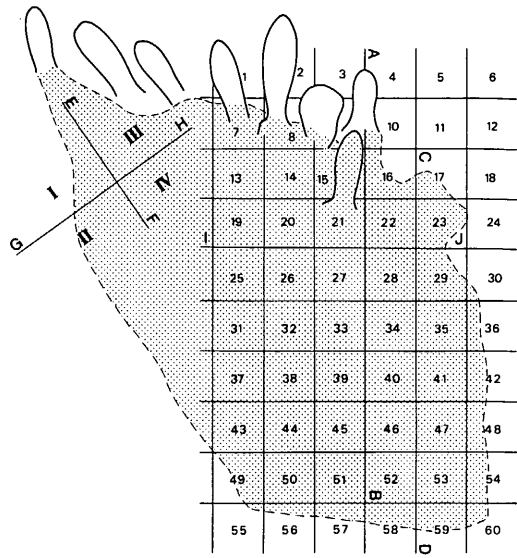
**22・30～32号窯灰原** 東から西へ傾斜し、東西約15m、南北約10mの広がりがあった。この中で標高125m以下、A-B断面から北側は、斜面が崩壊し、灰原はず

でに流出しており、岩盤上に、褐色土層・灰褐色土層がわずかに堆積しているだけであった。炭・窯壁・土製置台・土器を多量に含む褐色土層(灰原上層)・黒色土(灰原下層)は標高122～125mの間のG16・17・22・23・28・29・34とG46・52・53・58・59の標高114～117mの間で土器の大半はこの地区からの出土である。灰層の厚さは0.3～0.5mで、層位を新旧に分けることはできない。また窯構築の際の灰原の整形や沢から窯までの通路等の検出もできなかった。

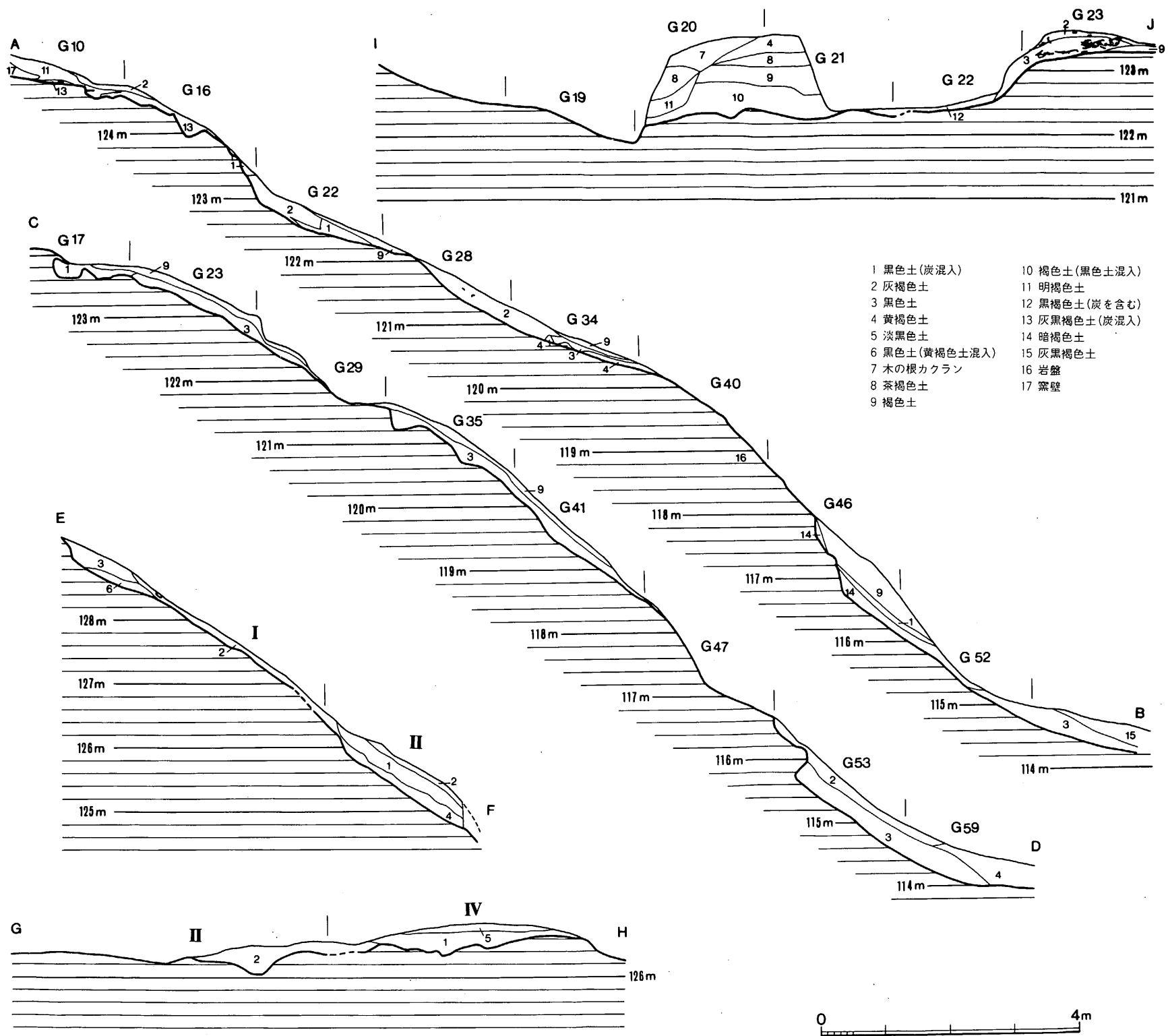
### 出土遺物 (図版21～26、第34～50図)

**蓋杯・蓋 (192～340)** 148個体図示した。口径10cmの小形品から、口径21cmを測る大形のものがある。その大半は、13～16cmの間に入る。形態は3種類に分類できる。天井が高く丸味をもつものが53点。天井部が平坦で、体部が立ち上がり、境が明瞭なものが46点。天井部が低く扁平なもの22点である。土器の一部が付着し重ね焼き痕が残るもの、196・243・257・258・286・288には、板状圧痕やタタキ痕が認められる。338～340はつまみのつかない蓋で、天井部に丸味をもち、口縁部は直に下だる。

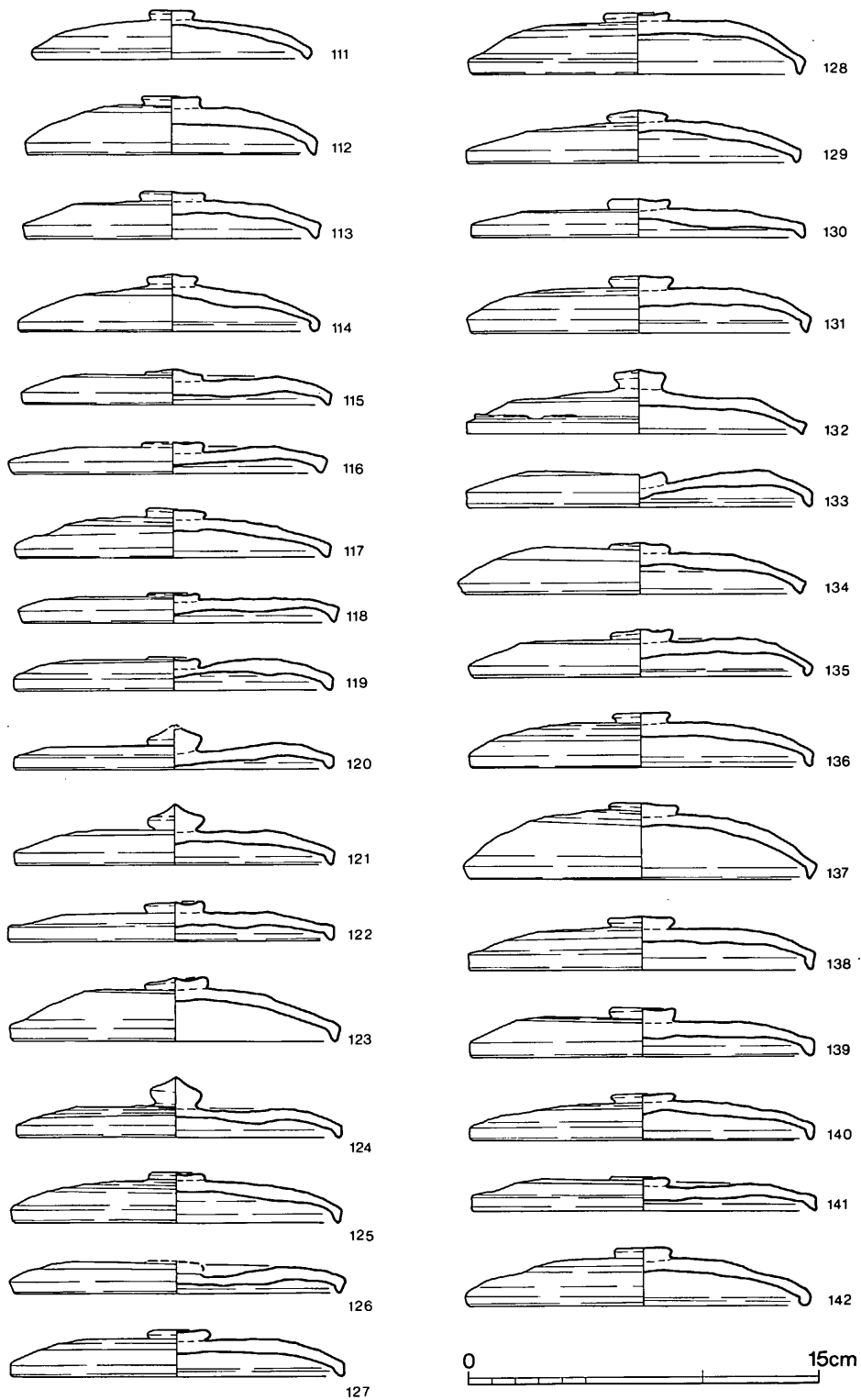
**蓋杯・身 (341～462)** 口径10.6cmの小形品から、口径19.2cmの大形品までである。口径13.5cm前後、器高3.7cm前後のものも多く出土した。形態は、体部が直線的に外上方へ延び、底部との境が明瞭である。中に体部・口縁部がわずかに外反するものもあるが数少ない、高台は短く、ほとんどが外底端部より内側へ貼付されている。外底端部に貼付されるものは、121点の内15点である。整形の手法は同一である。外底部に板状圧痕を伴うものに、356・359・379・383・390・394・407・433・438があり、明らかにタタキ痕と考えられるものに、401・426・451がある。



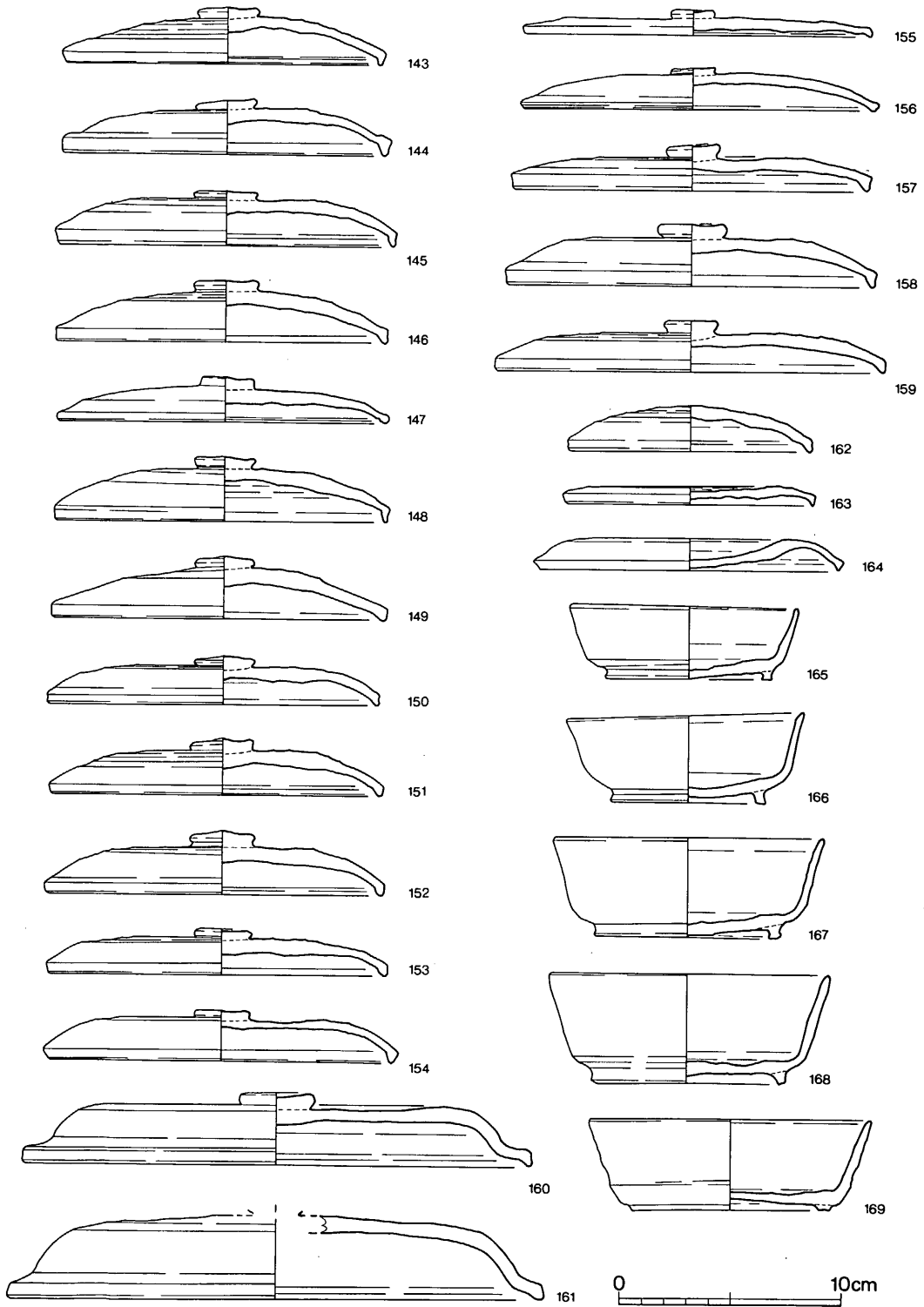
第28図 B-1地区灰原割付図 (縮尺1/300)



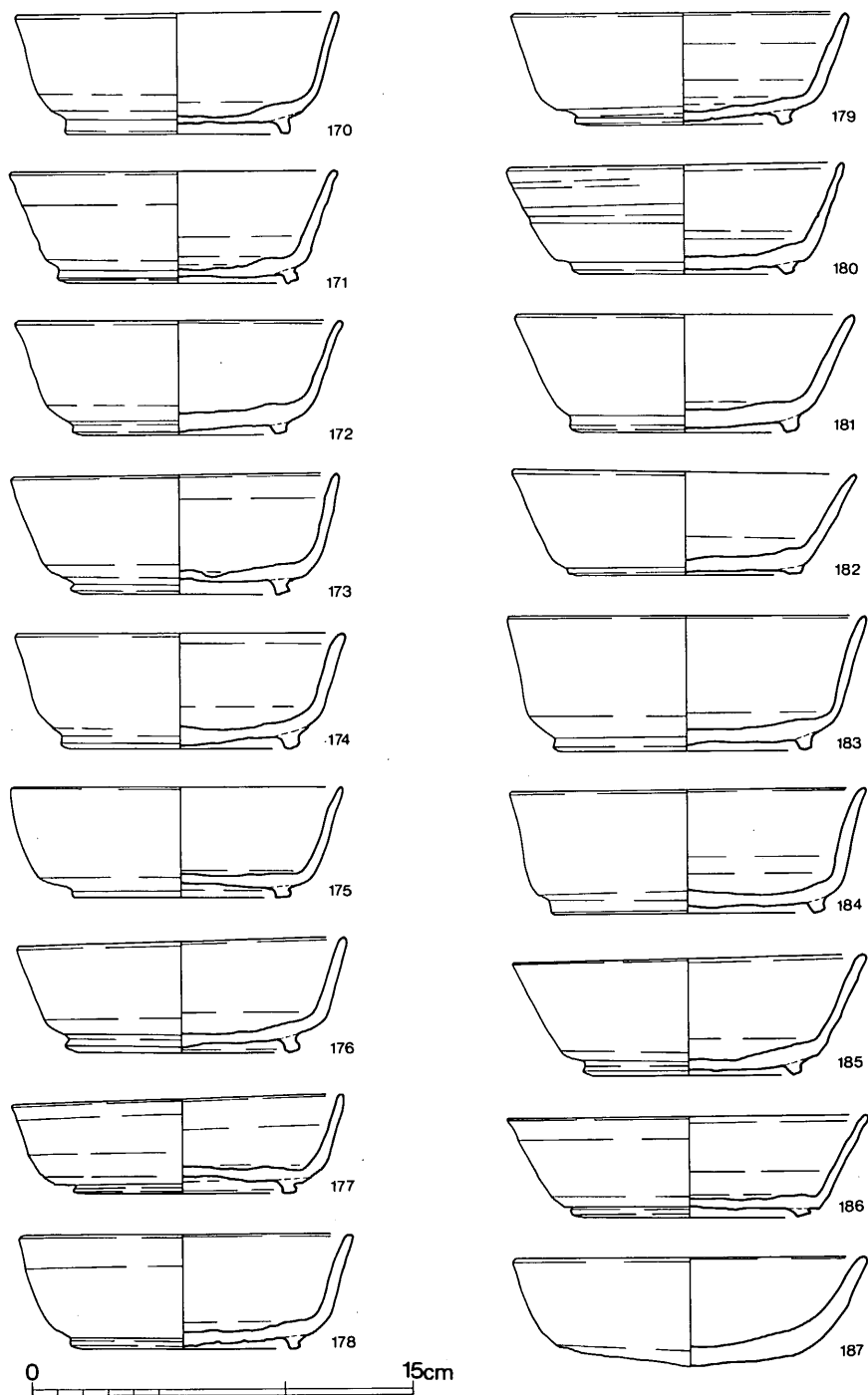
第29図 19~22・30~32号窯灰原土層図(縮尺1/80)



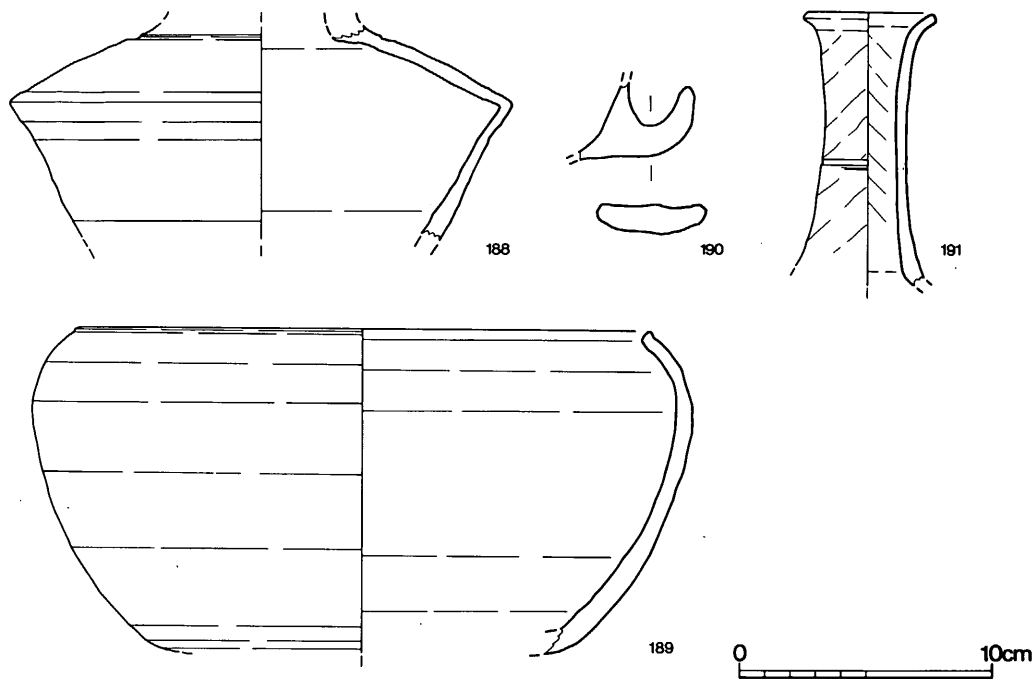
第 30 图 19~21号窯灰原出土土器実測図① (縮尺 1/3)



第31图 19~21号窯灰原出土土器実測図② (縮尺1/3)



第 32 図 19~21号窯灰原出土土器実測図③ (縮尺 1/3)



第33図 19～21号窯灰原出土土器実測図④ (縮尺 1/3)

386・383に重ね焼痕跡が認められた。

**杯 (463～472)** 無高台の杯で、体部は直線的に外上方へ延びる。底部が平坦で体部との境が明瞭なもの、463～466・468・472、やや丸味をもつもの467・469・470・471がある。外底部はヘラ切り未調整である。463・464に板状圧痕を伴う。

**皿 (473～513)** 口径13cmの小形の皿から口径が21cmをこす大形品までである。体部が直線的に上外方へ延びるものと外反するもの。底部と体部の境が明瞭なものとは不明瞭なものがある。

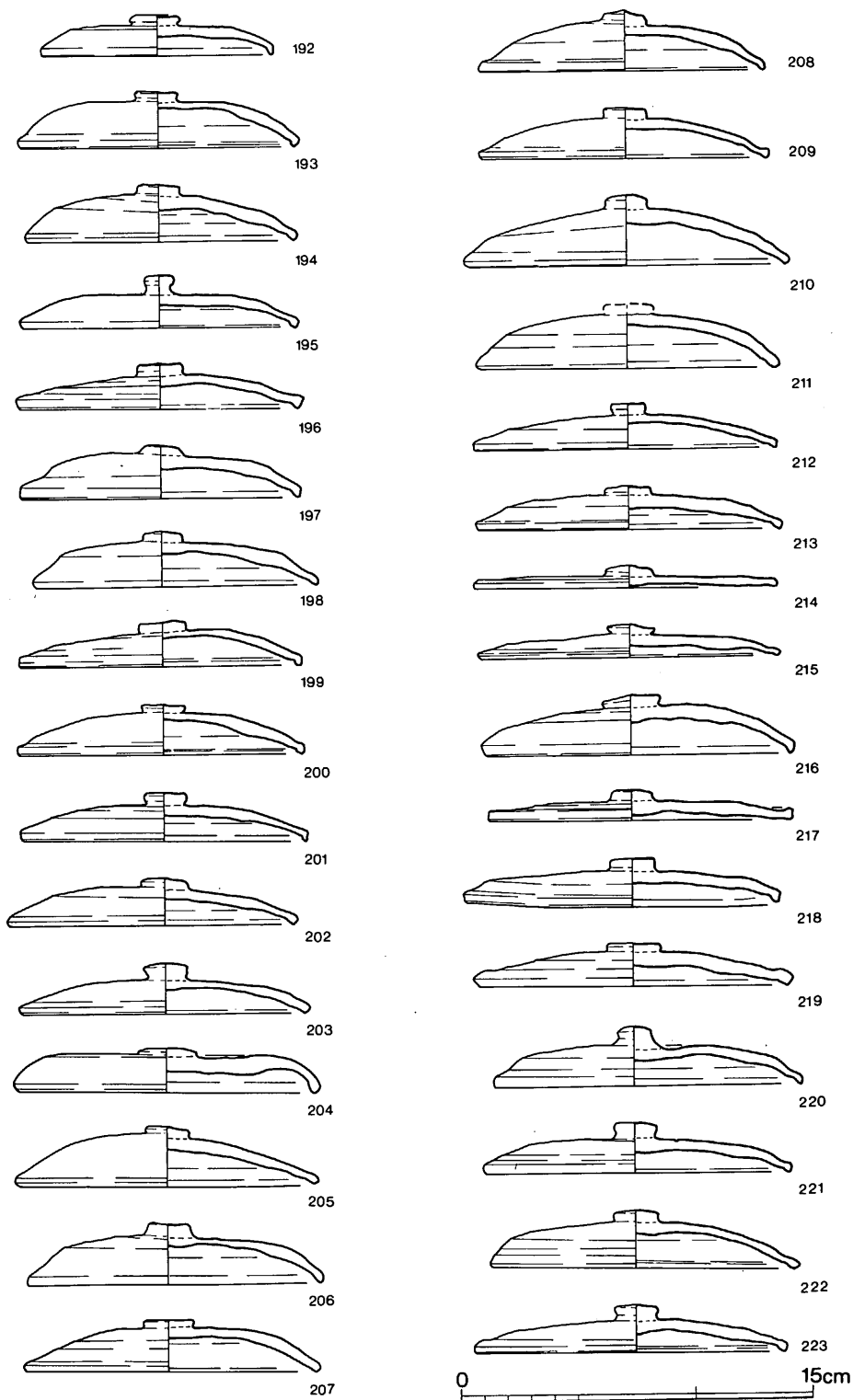
**盤 (514～519)** 口径20.3cmから28.6cmに復原できる大形品までである。

**高杯 (520～527)** 526は口縁部がわずかに外傾し端部に平坦面を有す。脚部は長く、端部をわずかにつまむ。527は杯底部と体部の境でやや屈曲させる。脚部は短い。

**短頸壺・蓋 (528・529)** 天井部は高く水平である。天井部端からやや開き気味に下り、端部をややつまみ出す。外天井部は回転ヘラ削り調整。

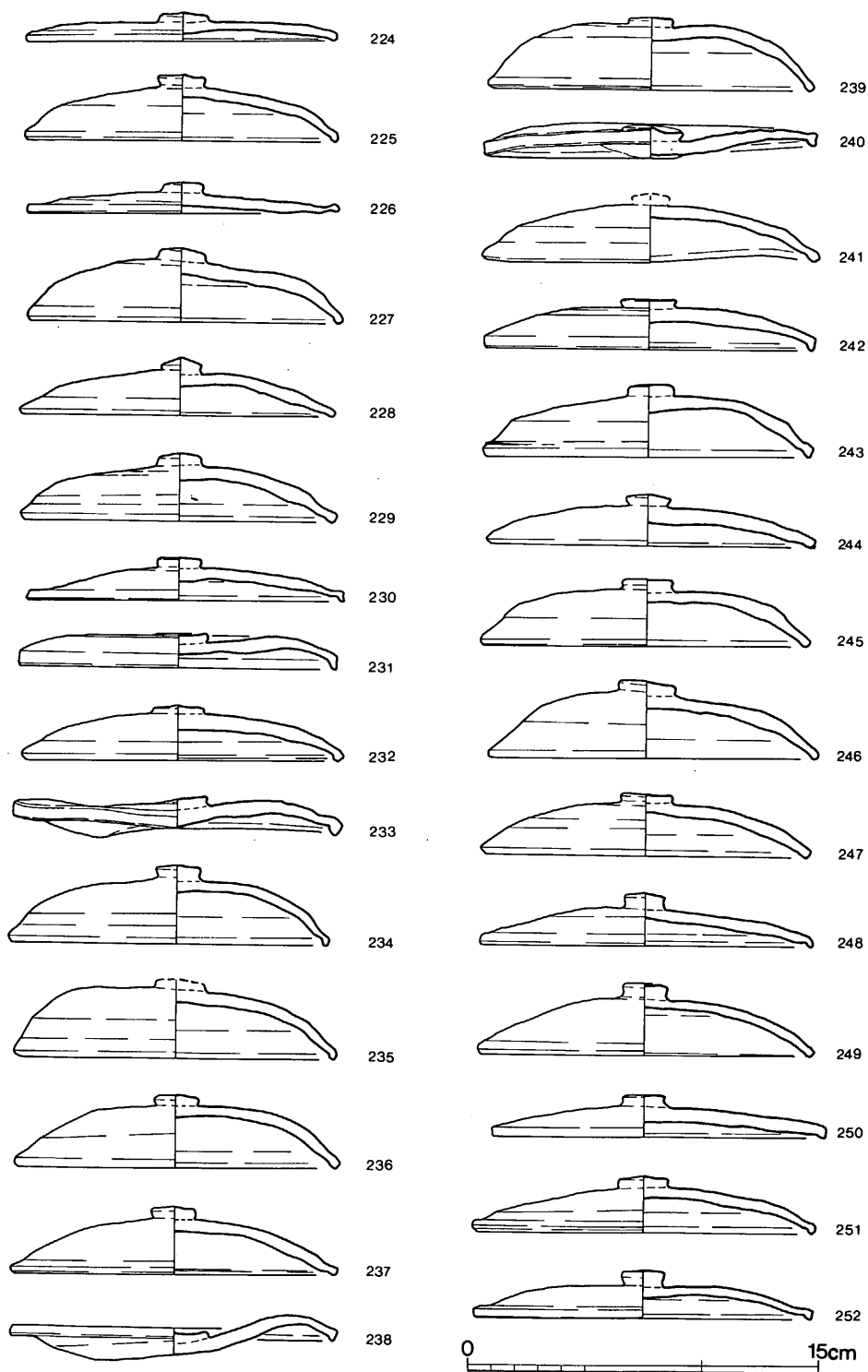
**短頸壺・身 (530～538)** 薬壺形のもので531の胴部最大径は上位にあり、他は肩・胴部に丸味をもち最大径は体部中央よりやや上位になる。533・537は同一個体の可能性がある。体部下半は広範囲に回転ヘラ削りを施している。

**壺 (539)** 壺の胴部片である。

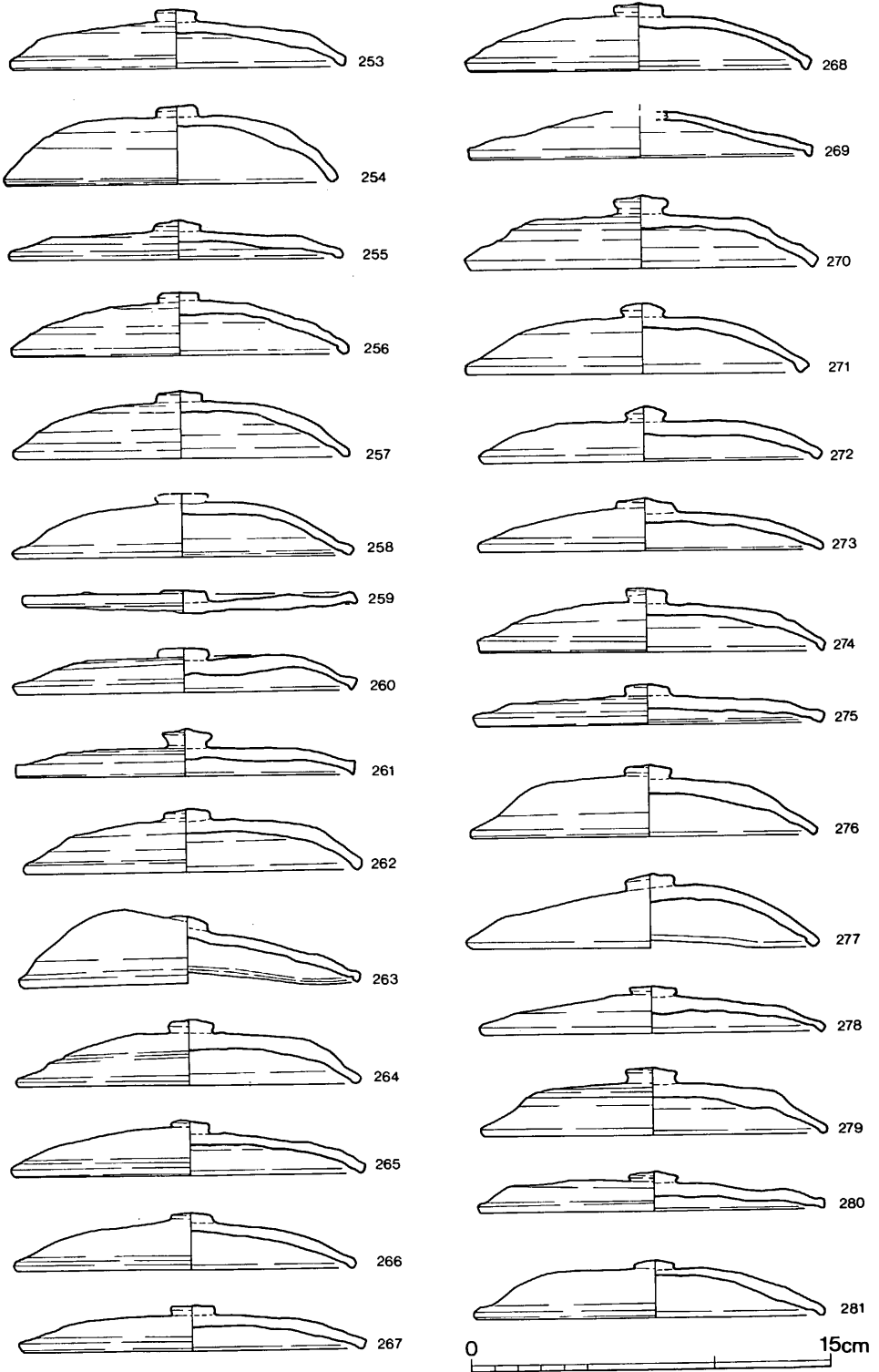


第34图 22·30~32号窯灰原出土土器実測图① (縮尺1/3)

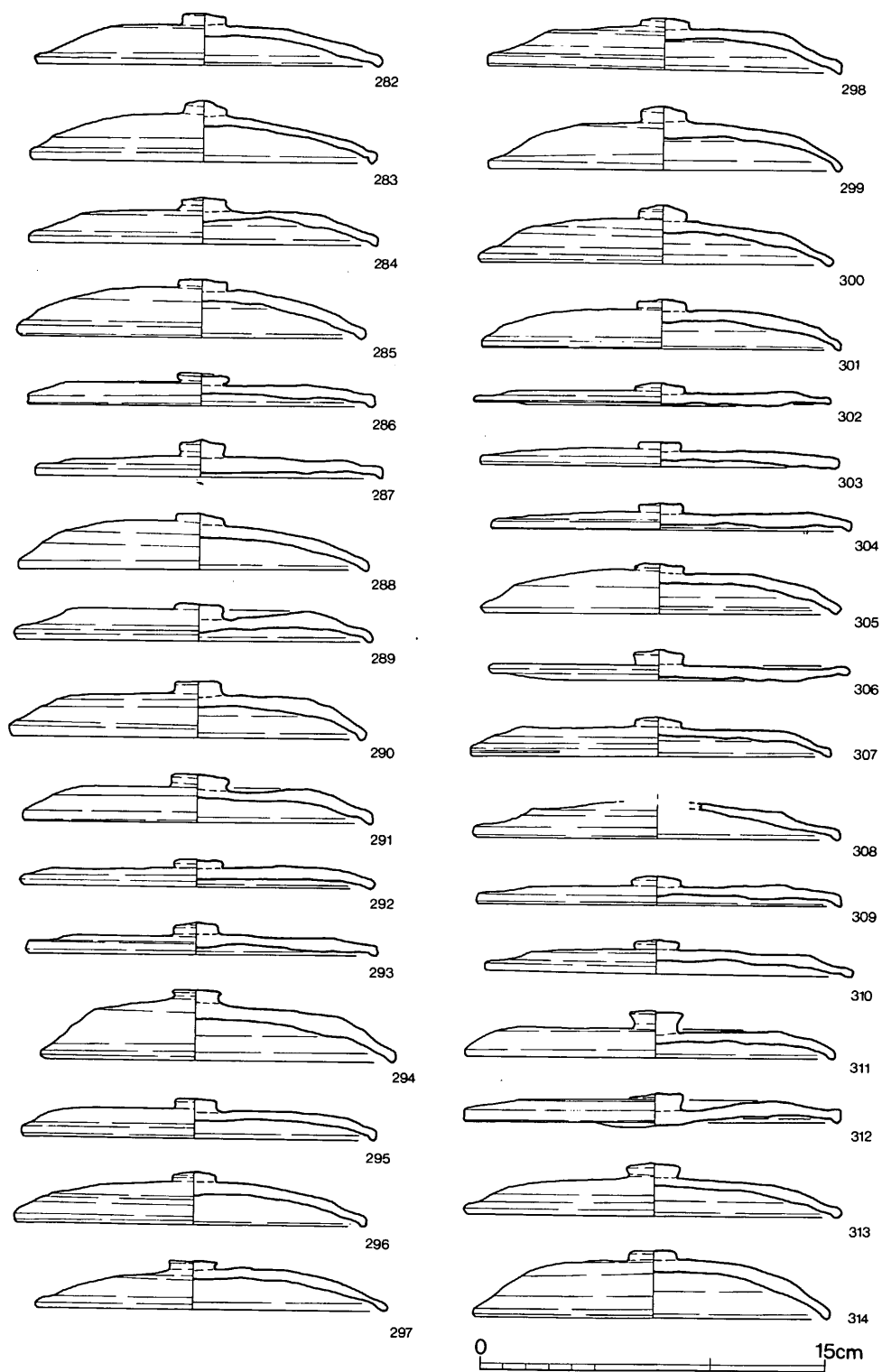




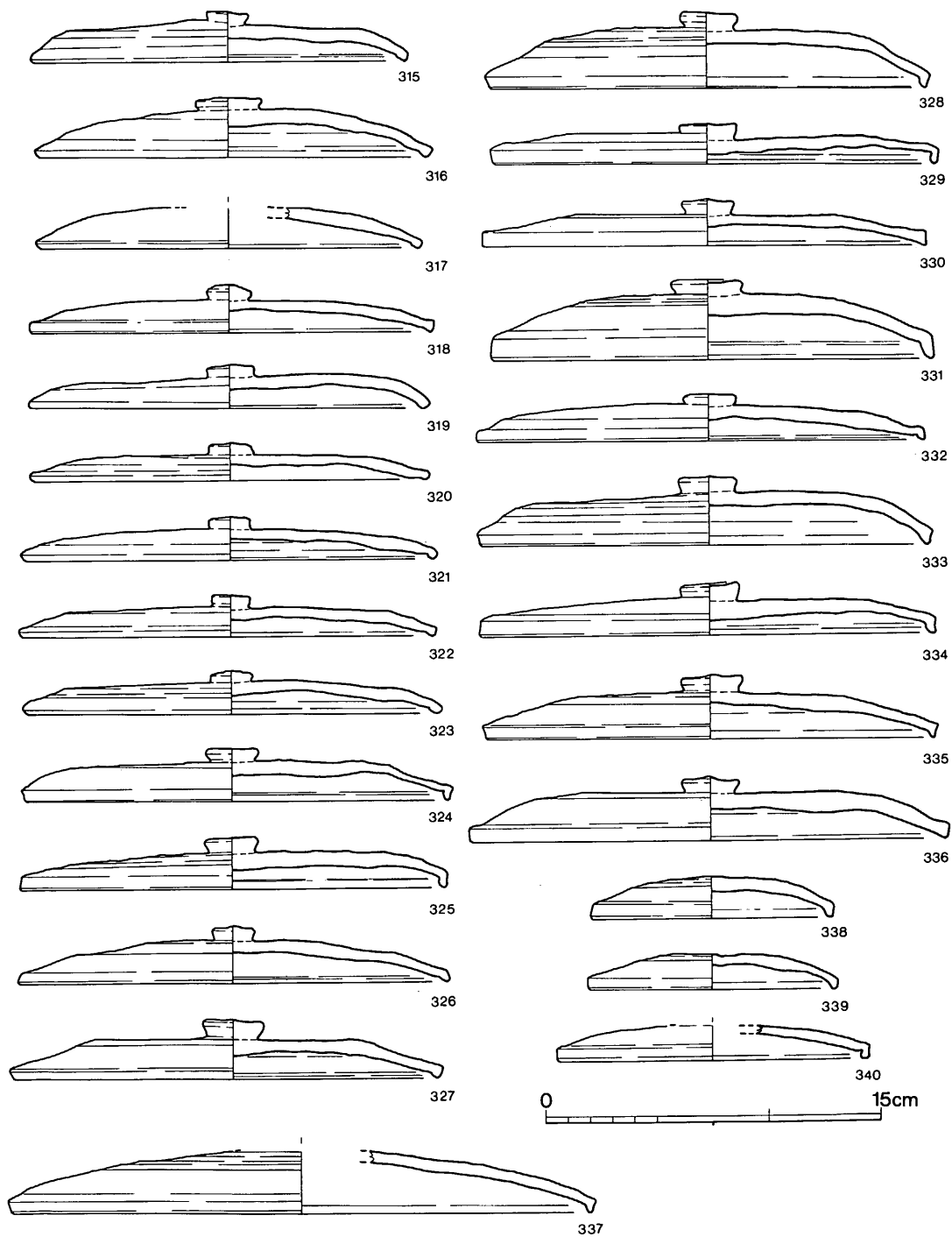
第 35 图 22·30~32号窑灰原出土器实测图② (缩尺 1/3)



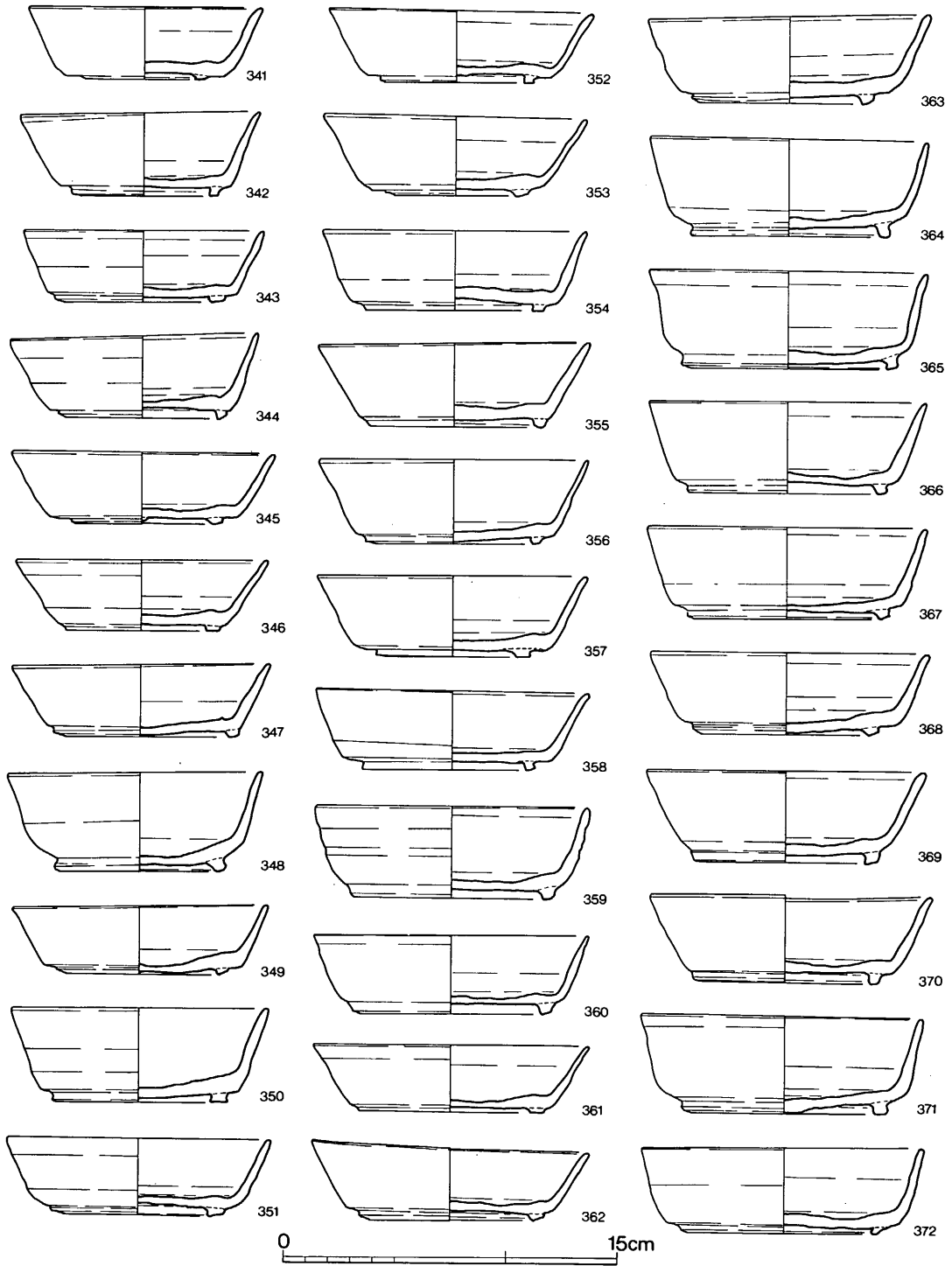
第 36 图 22·30~32号窯灰原出土土器実測图③ (縮尺 1/3)



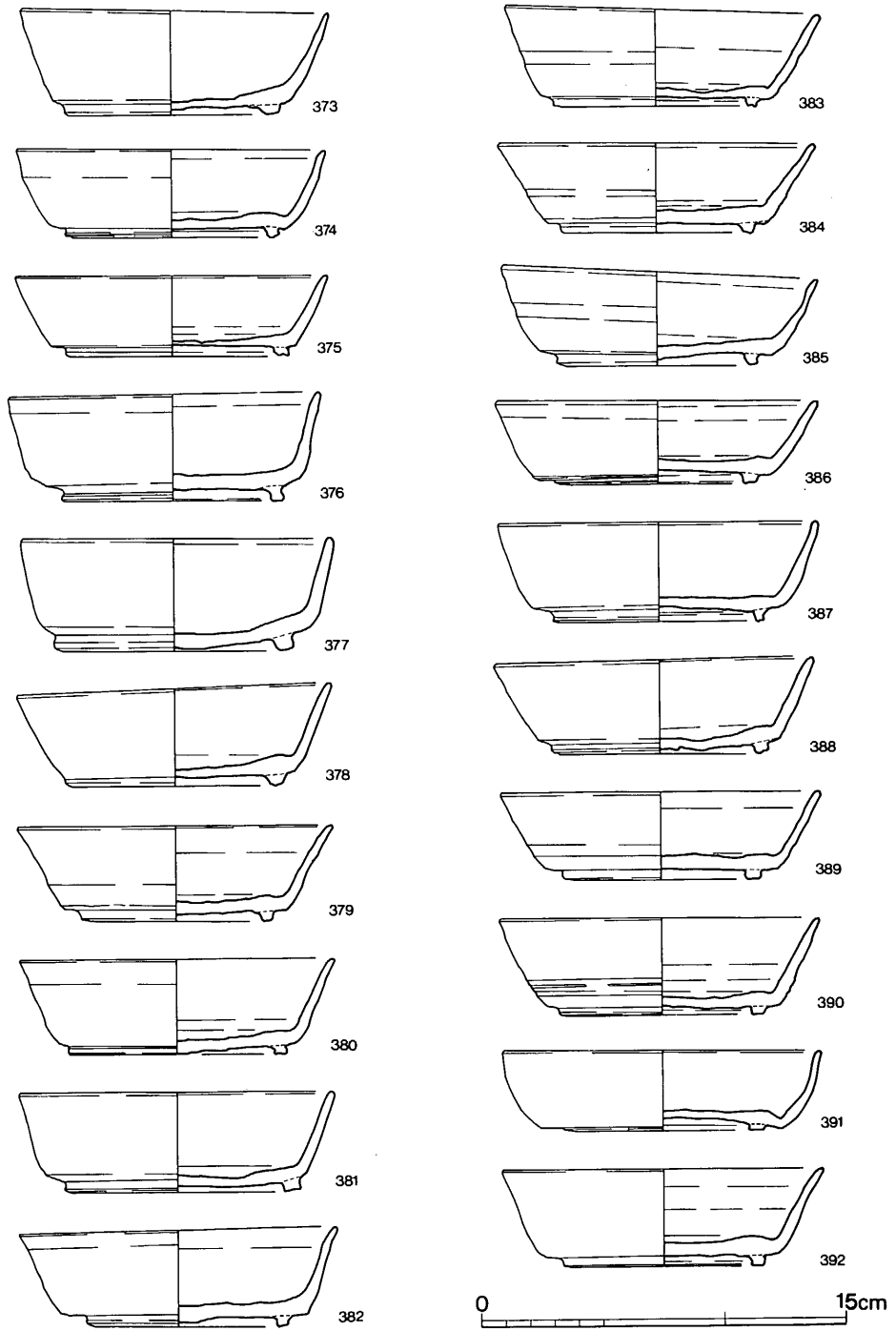
第37图 22·30~32号窯灰原出土土器実測图④ (縮尺1/3)



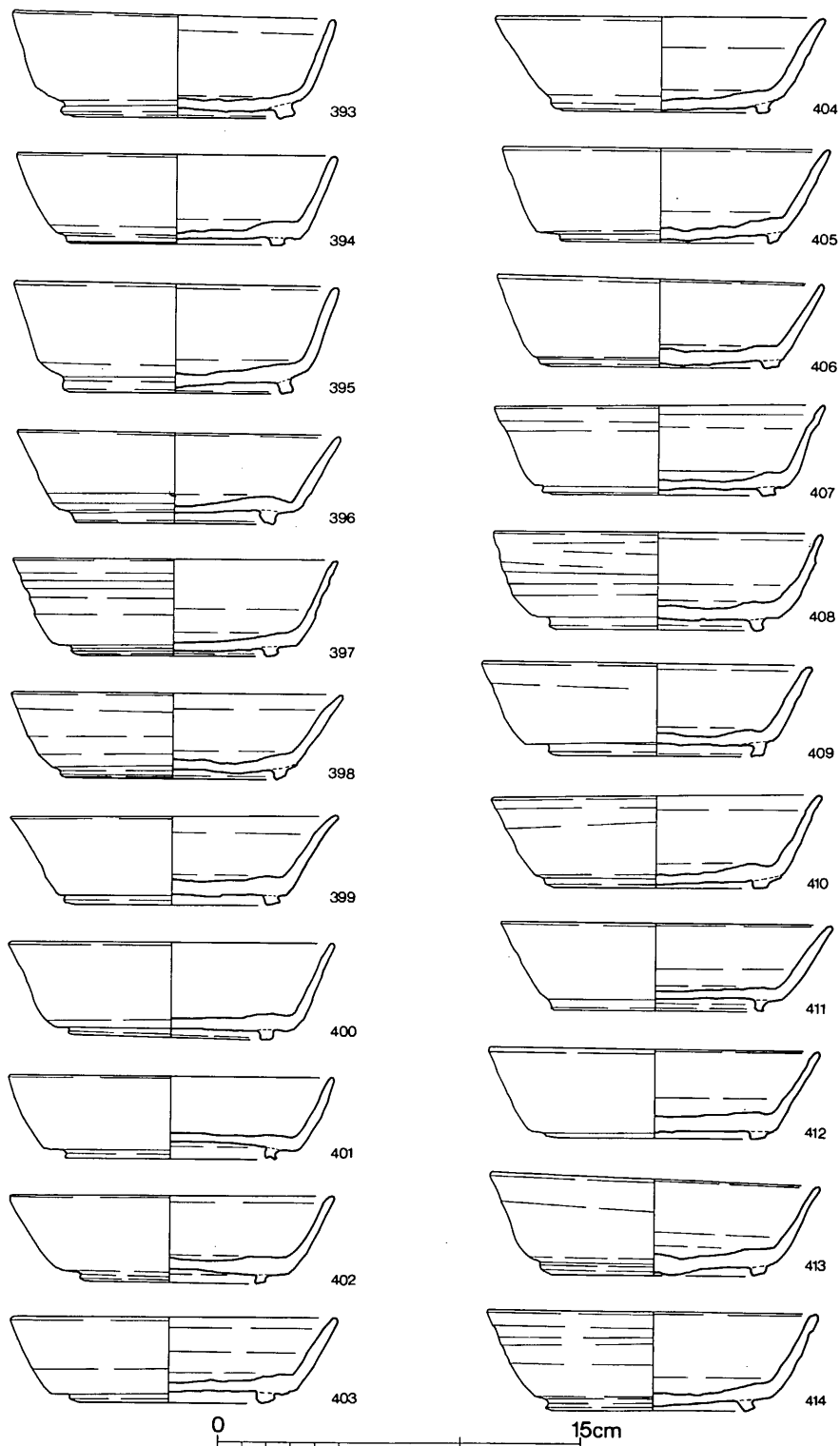
第 38 图 22·30~32号窯灰原出土土器実測图⑤ (縮尺 1/3)



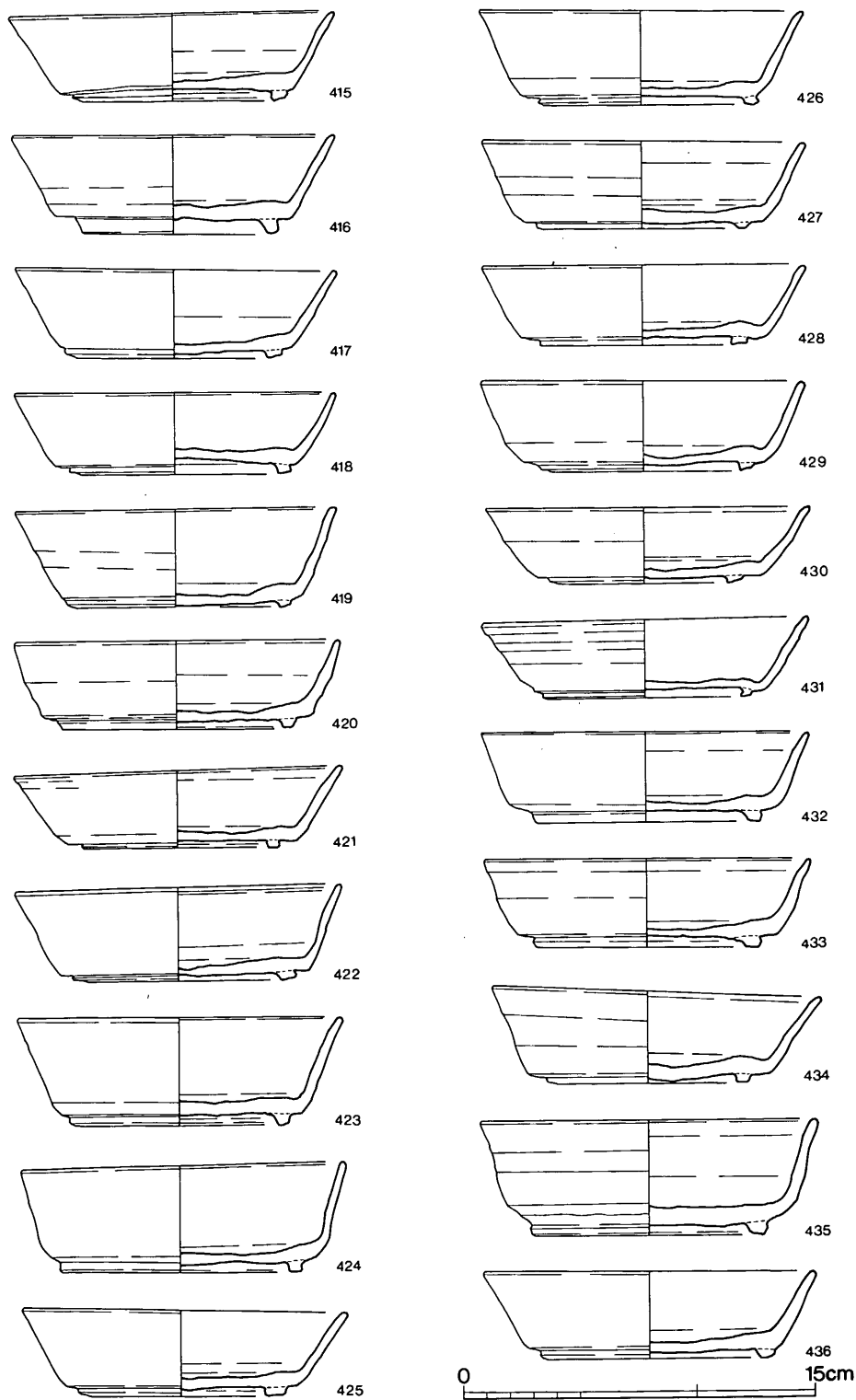
第 39 图 22·30~32号窯灰原出土土器実測図⑥ (縮尺 1/3)



第40图 22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑦ (縮尺1/3)

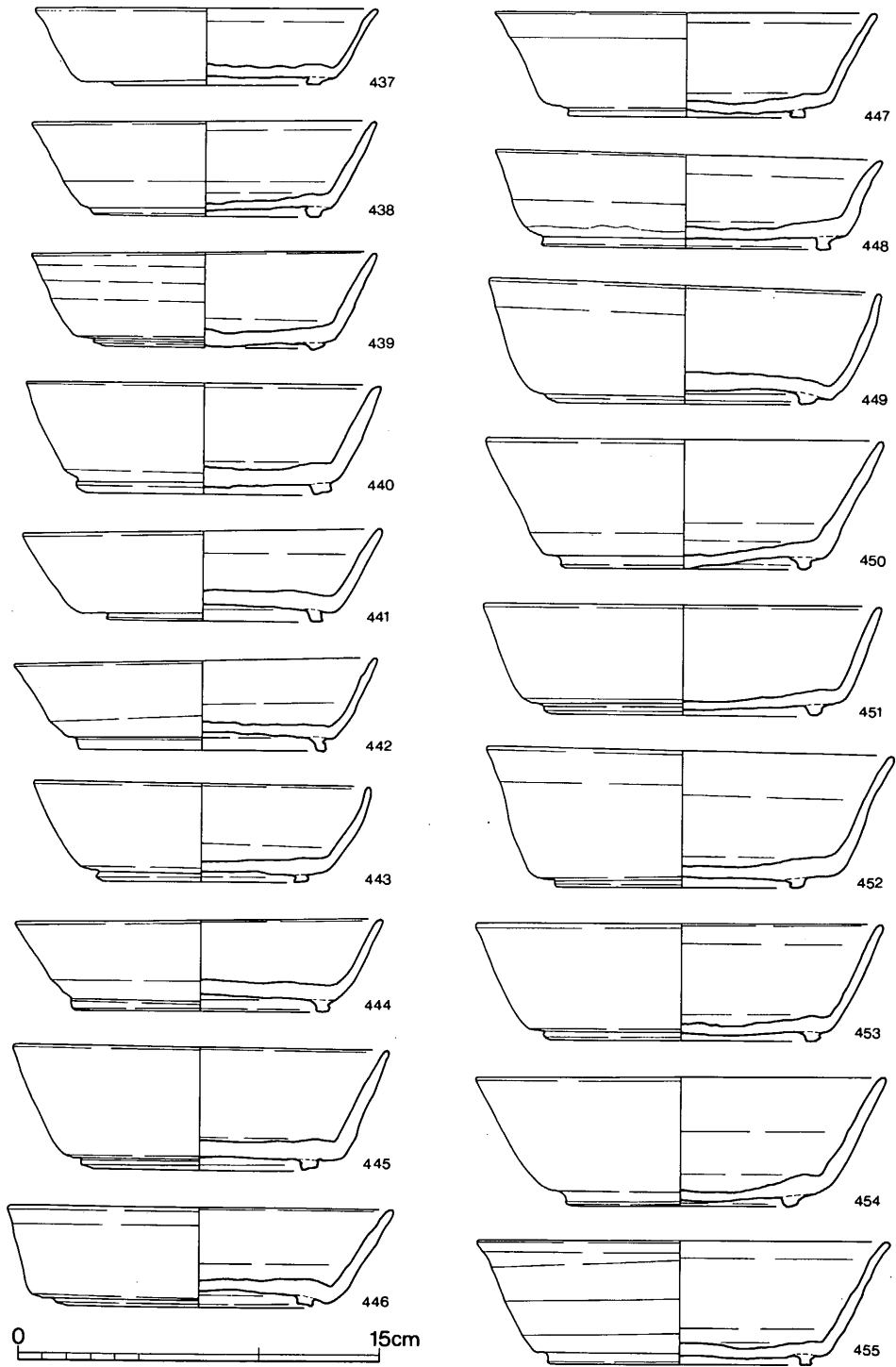


第41图 22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑧ (縮尺 1/3)

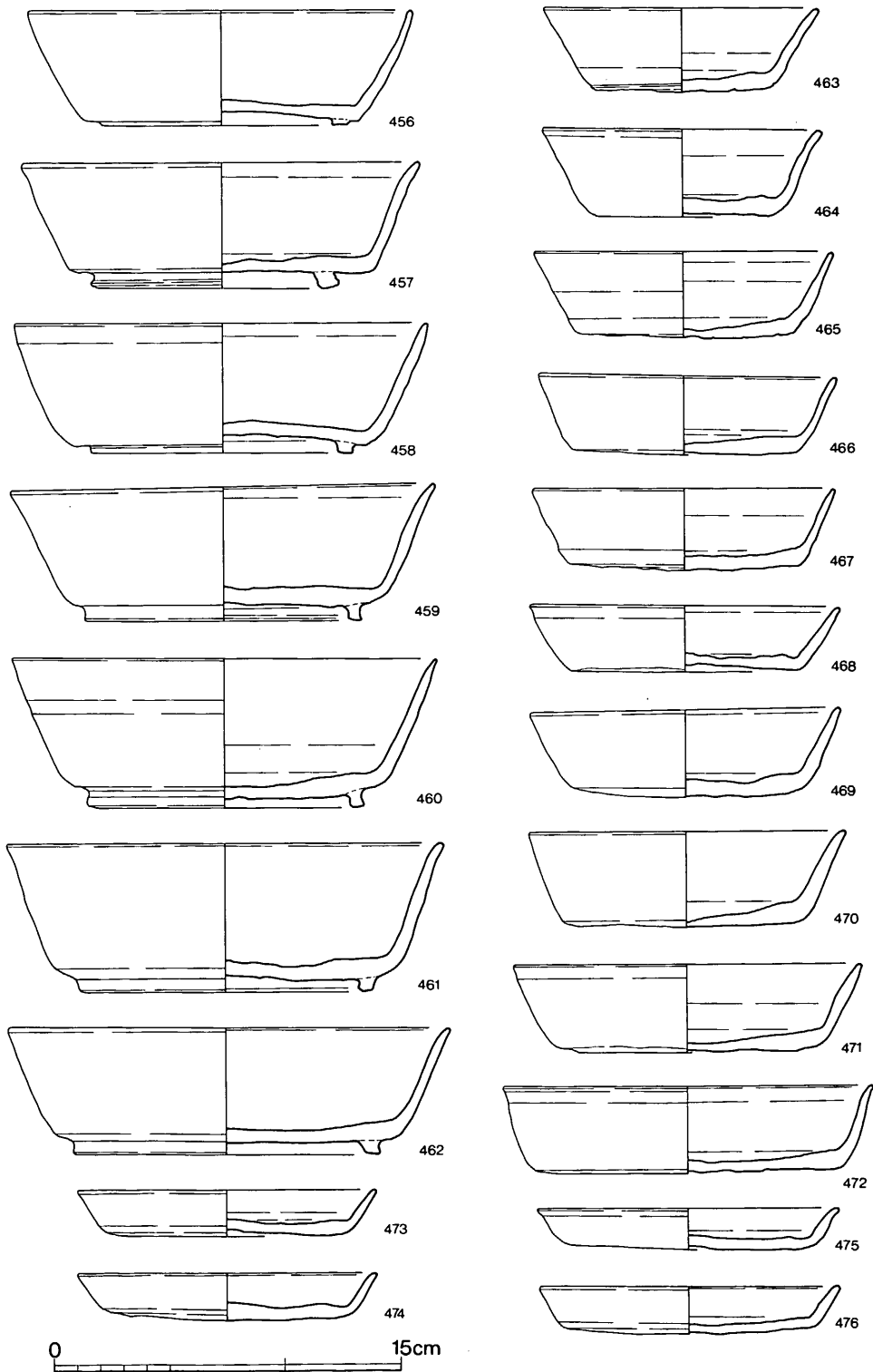


第 42 图 22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑨ (縮尺 1/3)

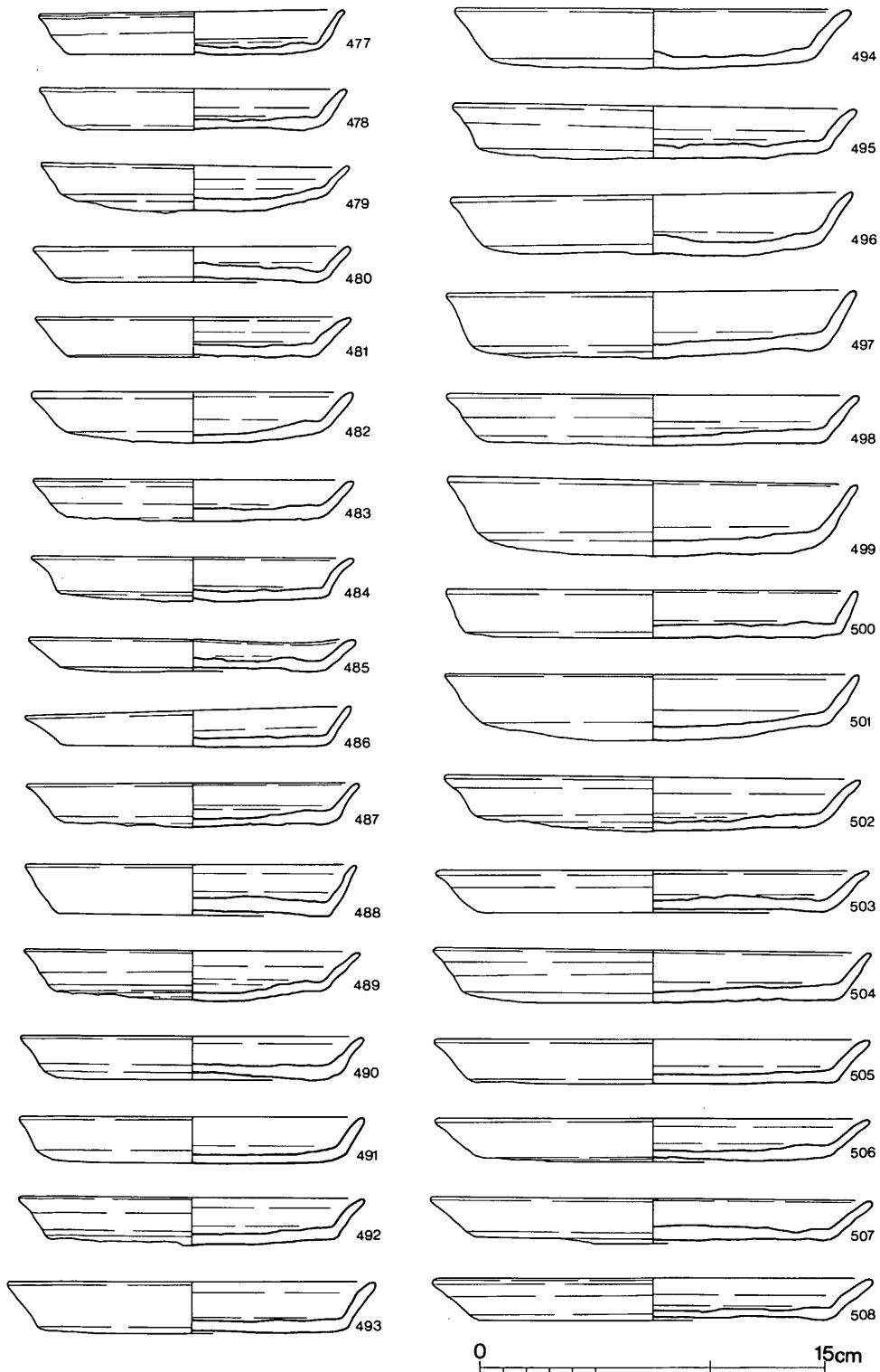




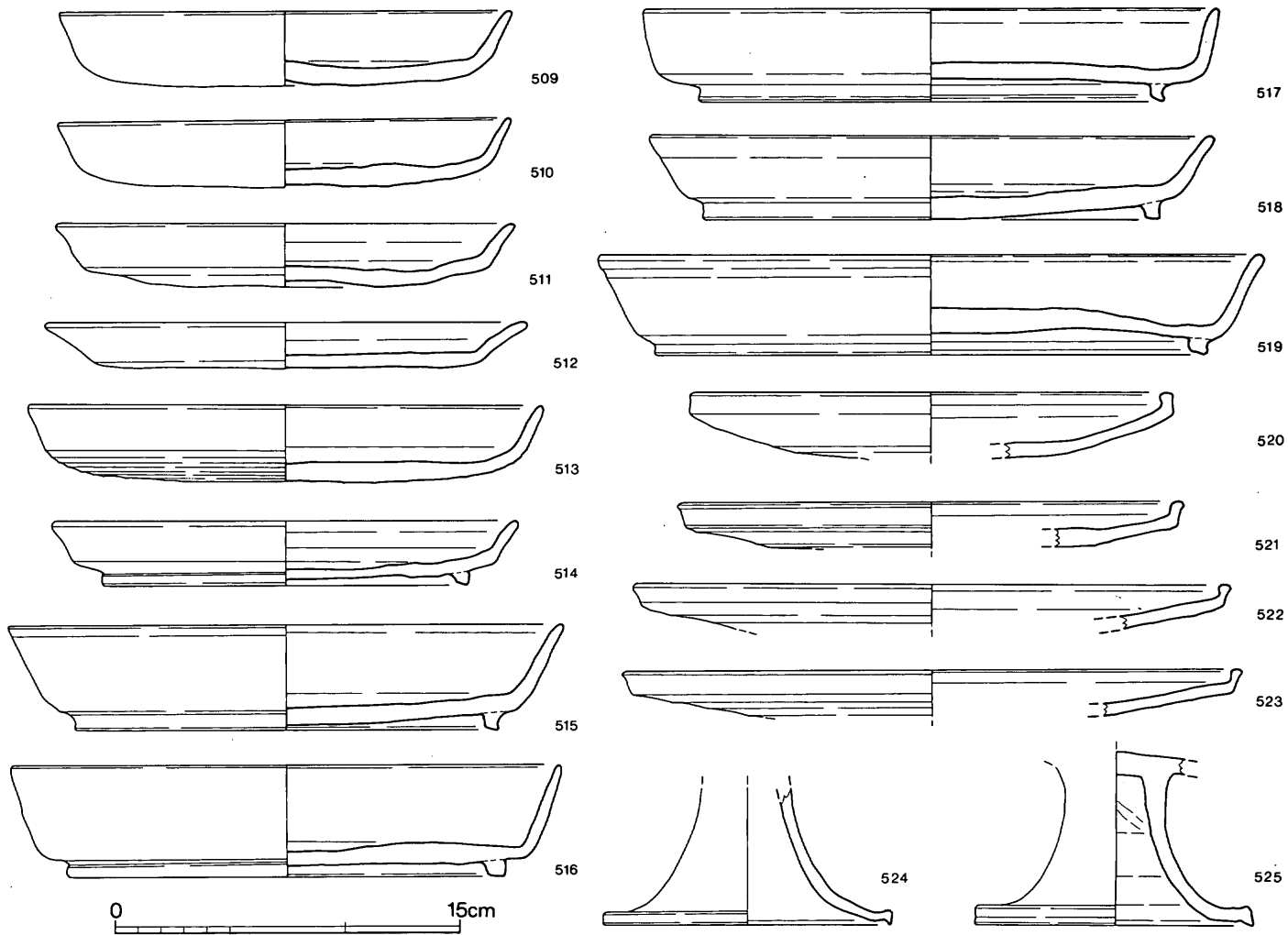
第43图 22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑩ (縮尺1/3)



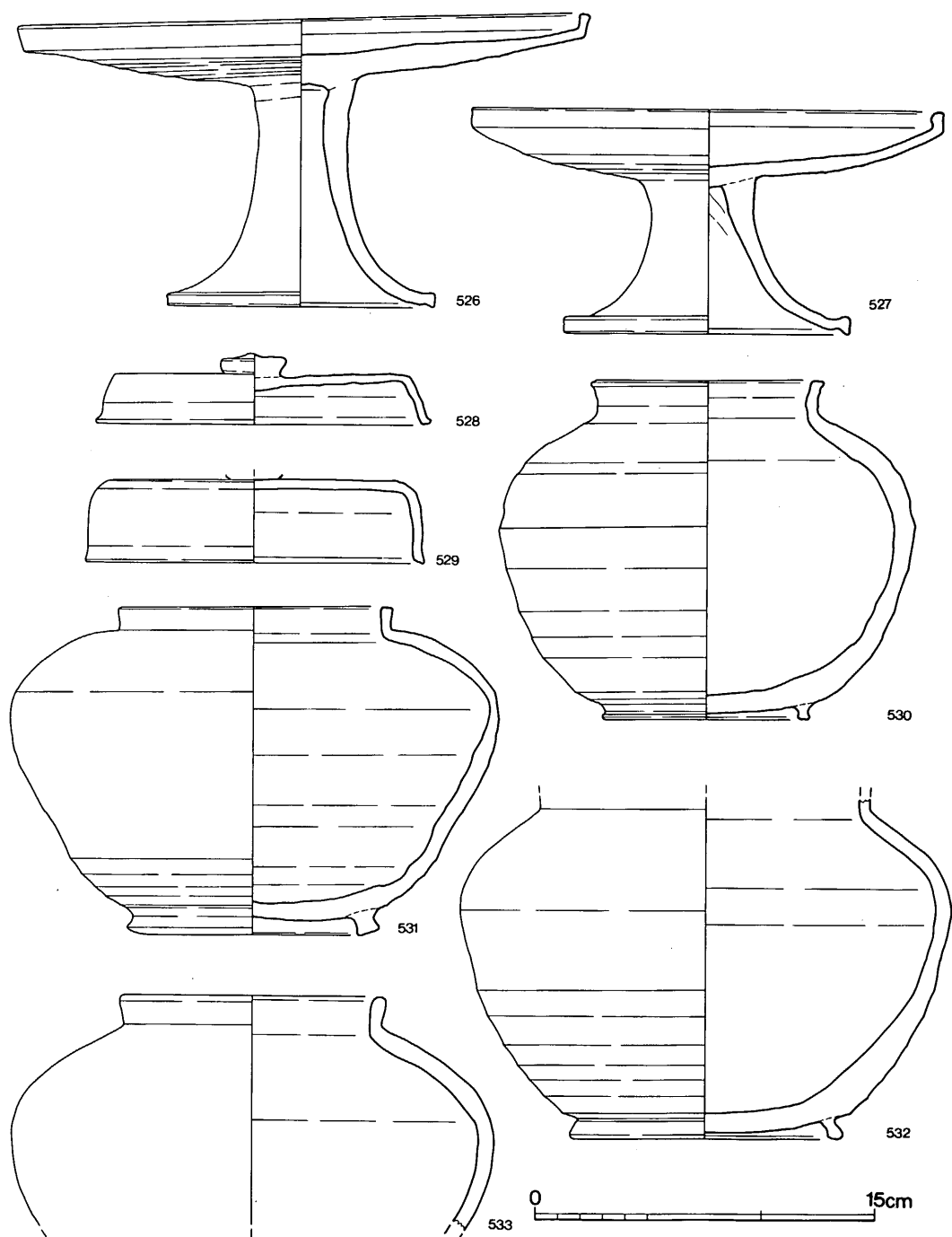
第 44 图 22・30~32号窯灰原出土土器実測图① (縮尺 1/3)



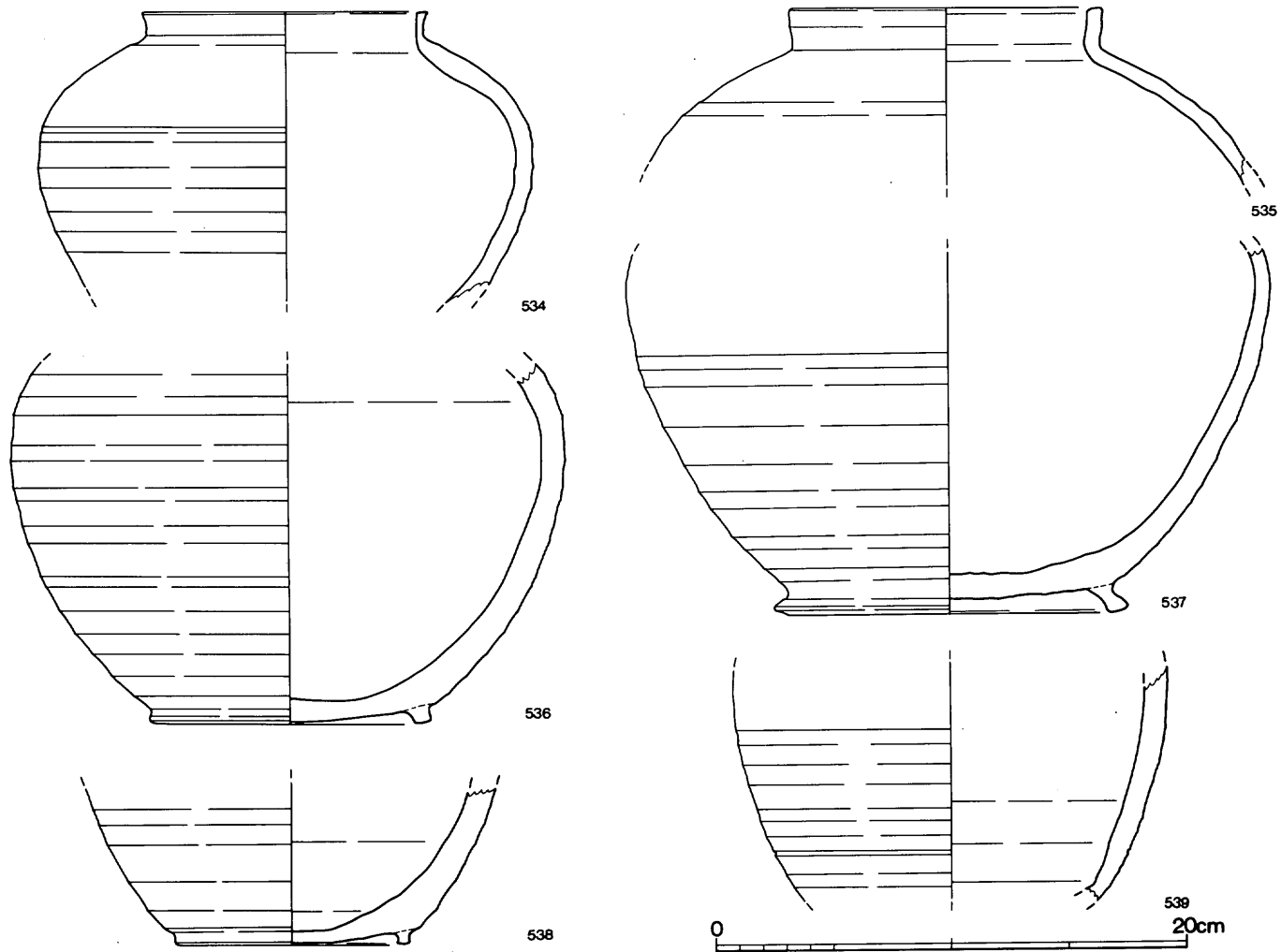
第 45 图 22·30~32号窯灰原出土土器实测图⑫ (縮尺 1/3)



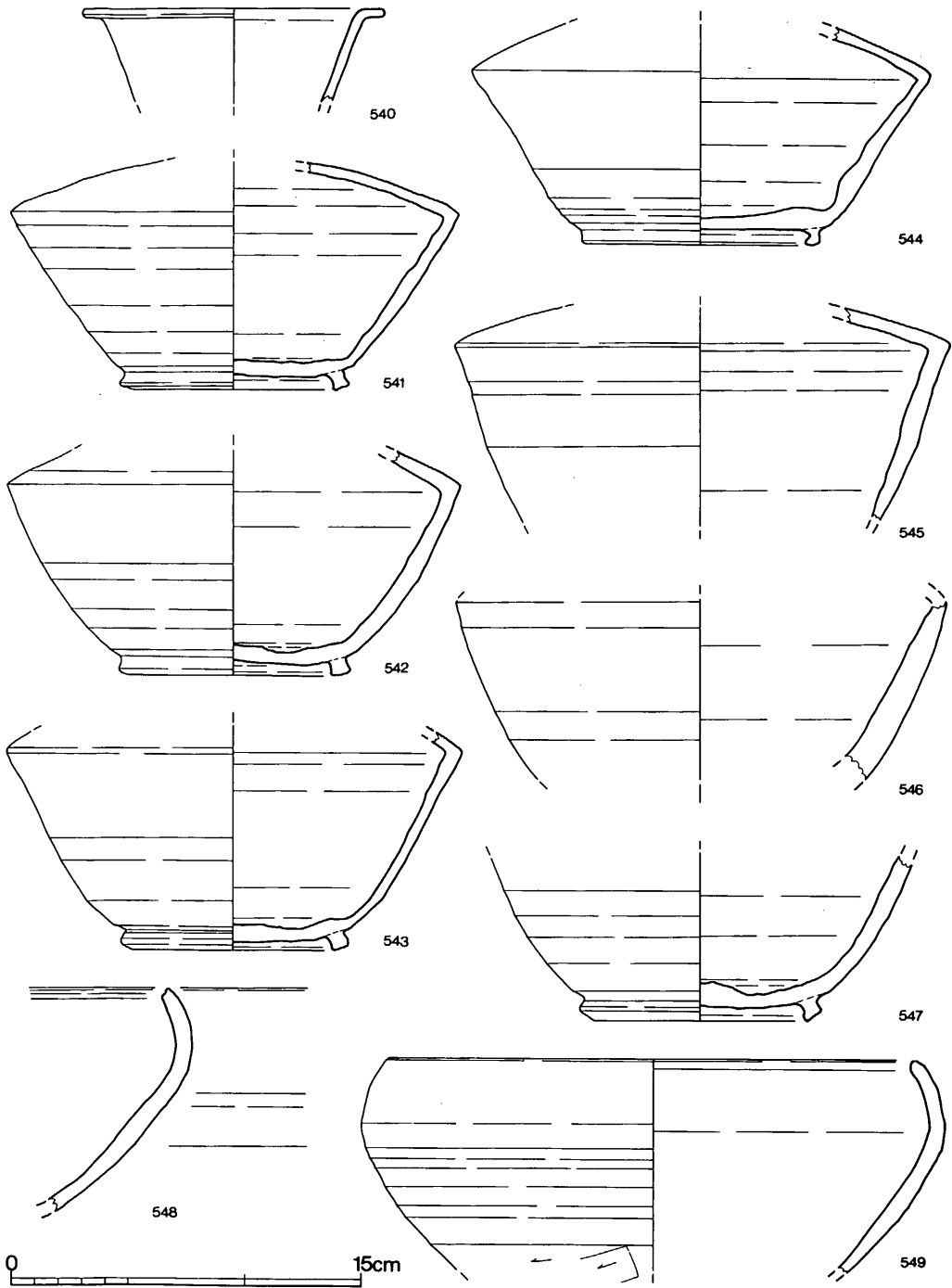
第46图 22・30~32号窯灰原出土土器実測図③ (縮尺1/3)



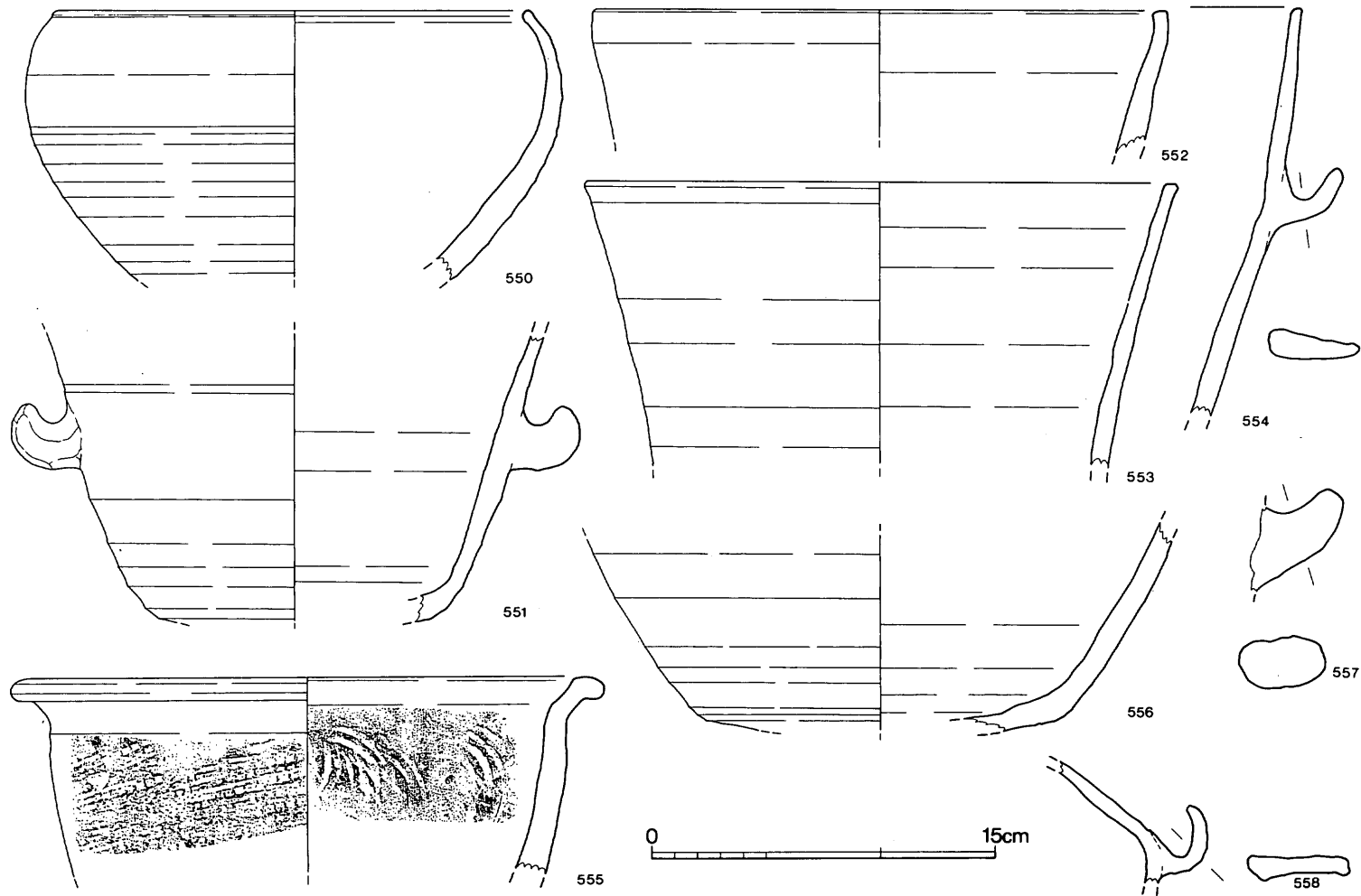
第 47 图 22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑬ (縮尺 1/3)



第 48 图 22・30~32号窯灰原出土土器実測図⑬ (縮尺 1/3)



第 49 图 22·30~32号窯灰原出土土器実測図⑬ (縮尺 1/3)



第 50 图 22·30~32号窯灰原出土土器実測図⑰ (縮尺 1/3)



**長頸壺 (540～547)** 540は口縁部片で、端部は水平に屈曲される。541～545は肩部と胴部の境は屈曲し鋭く稜線が入る。回転ヘラ削り調整は、胴部下位に施すものと屈曲部以下のものがある。外底部は平坦で端に八の字形の高台をもつ。

**鉢 (548～554・556)** 548～550は鉄鉢形の鉢で、口縁部を内傾させ、体部は底部にかけてすぼまる。552～554は口縁部片・551は胴部片、556は底部片で全形を知り得るものはない。

**甕 (555)** 甕の口縁部片と考える。

19～21・22・30～32号窯灰原上層出土土器 (図版31、32、第51・52図)

灰原上層からの出土で、調査前の清掃作業・伐根作業中半土の土器を含む。

19～21号窯灰原上層

**蓋杯・蓋 (559～565)** 559・560・563は天井部が高く、丸味をもつ。561・562・565は前者よりやや天井が低く、天井部は平坦に近い。564は天井部・体部の境が明瞭で扁平である。559～561・563・564に重ね焼きによる色調の違いが内・外面面に認められる。

**蓋杯・身 (566～572)** 体部は直線的に外上方へ延びる。高台は566は外底端に、他はやや内側へ貼付される。

**皿 (572～575)** 口径18～19cm大の皿である。底部は平坦である。573・575の口縁部はやや外反気味である。

22・30～32号灰原上層

**蓋杯・蓋 (576～585)** 576はつまみをもたない。天井部は未調整である。つまみをもつものは、天井部が丸味がある、577・580～583天井が低く、天井が平坦に近いもの578・579・585、扁平なもの584がある。

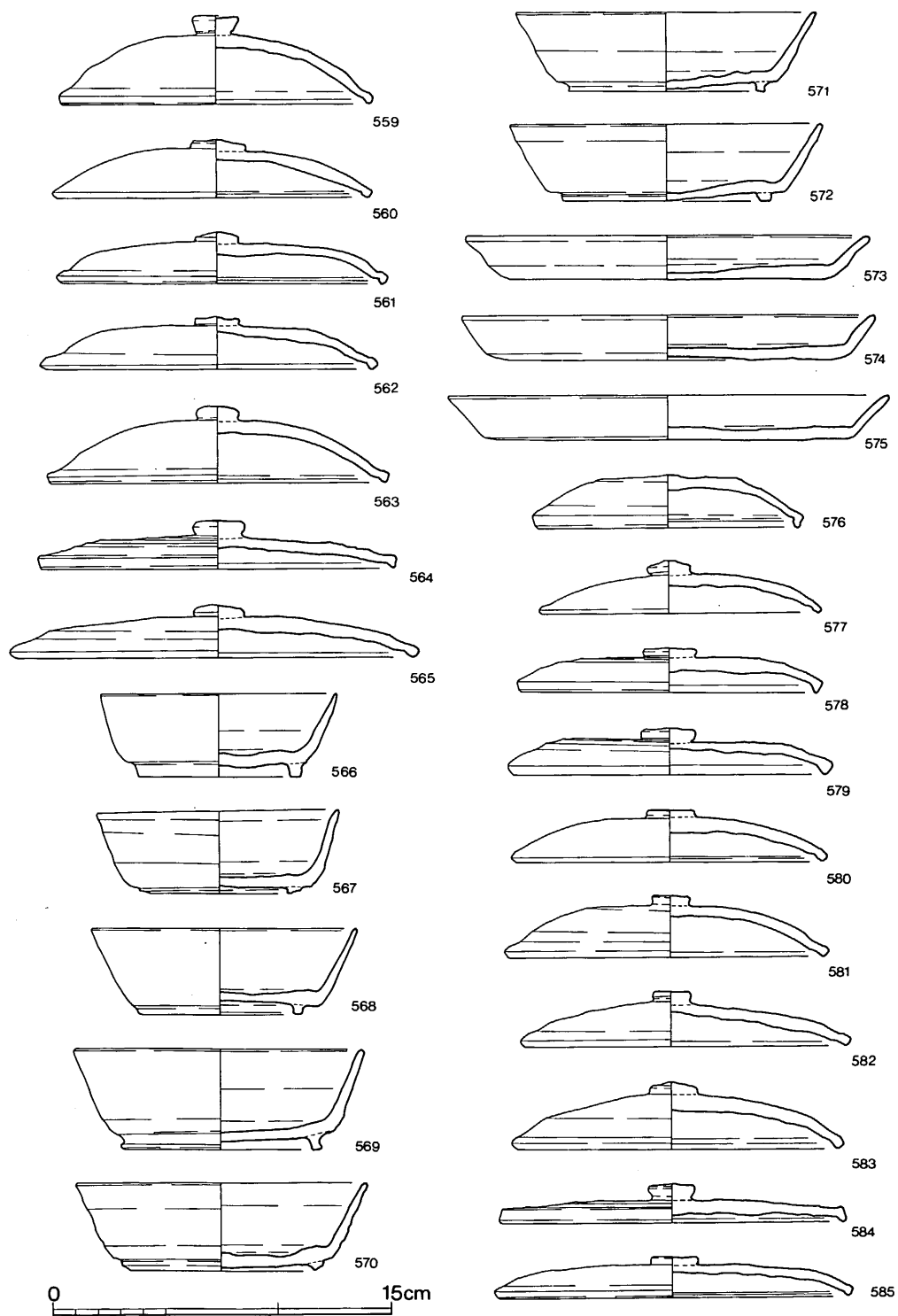
**蓋杯・身 (586～598)** 体部は直線的に外上方へ延び、高台は外底端の内側につく。586の体部はやや内彎気味。590他にくらべ直に近い。

**杯 (599・600)** 無高台のもので体部はやや外反する。外底部は未調整。

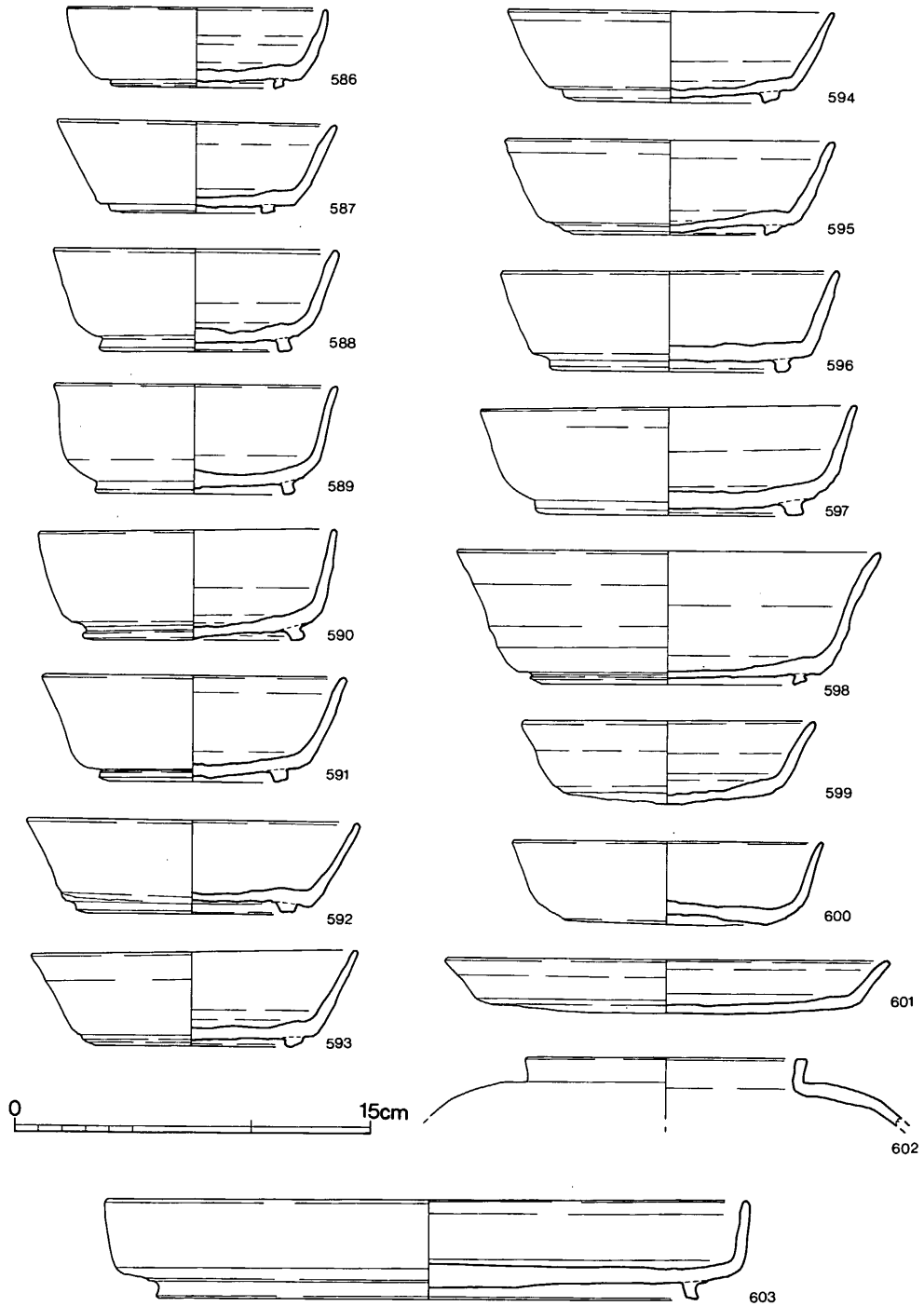
**皿 (601)** 口縁がやや外反気味である。外底部は未調整。

**短頸壺 (601)** 口縁から肩部にかけての破片である。口縁は直に立上り、端部は平坦である。

**盤 (603)** 口径27cmほどに復原できるか焼け歪みで変形する。



第 51 図 19~22・30~32号窯灰原上層(表土層)出土土器実測図① (縮尺 1/3)

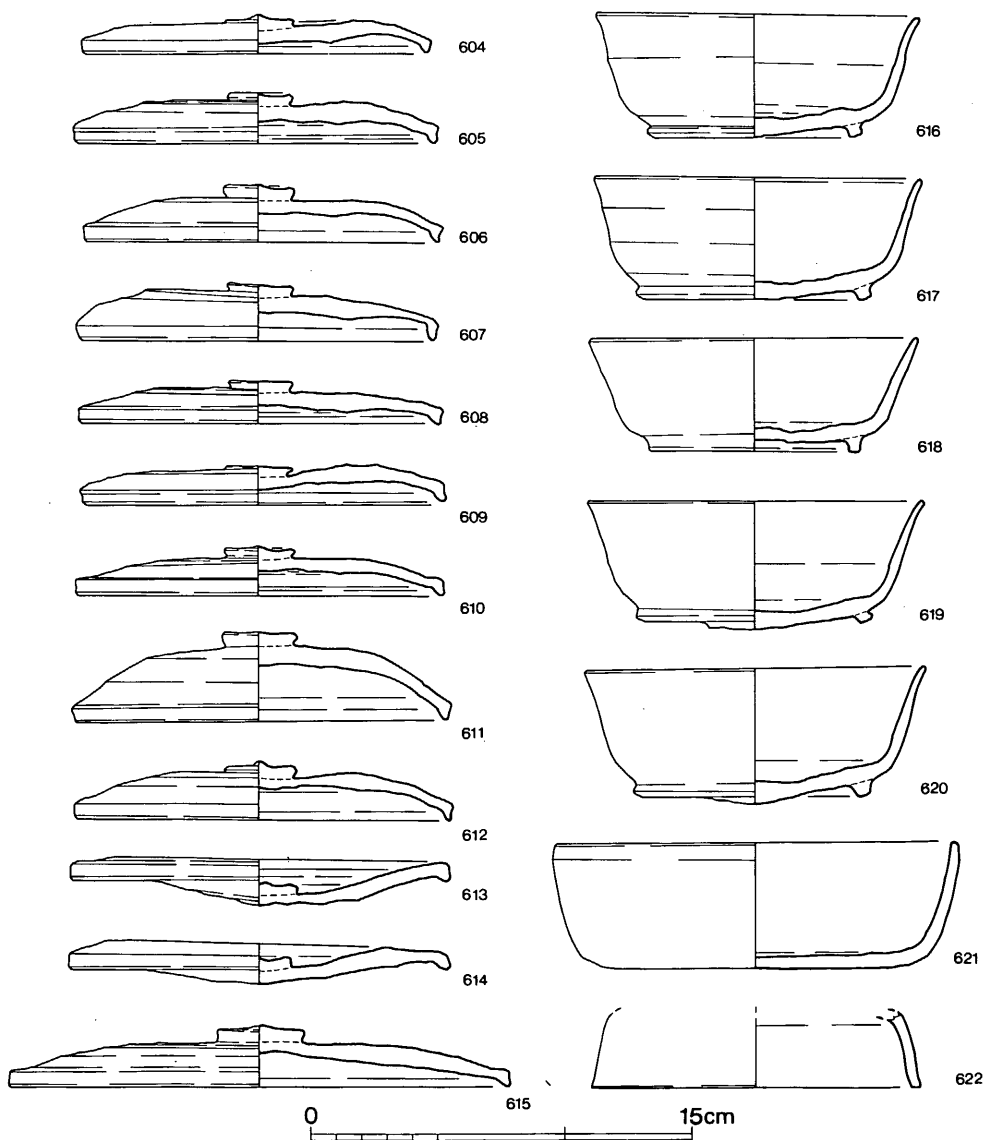


第 52 图 19~22・30~32号窯灰原上層(表土層)出土土器実測図② (縮尺 1/3)

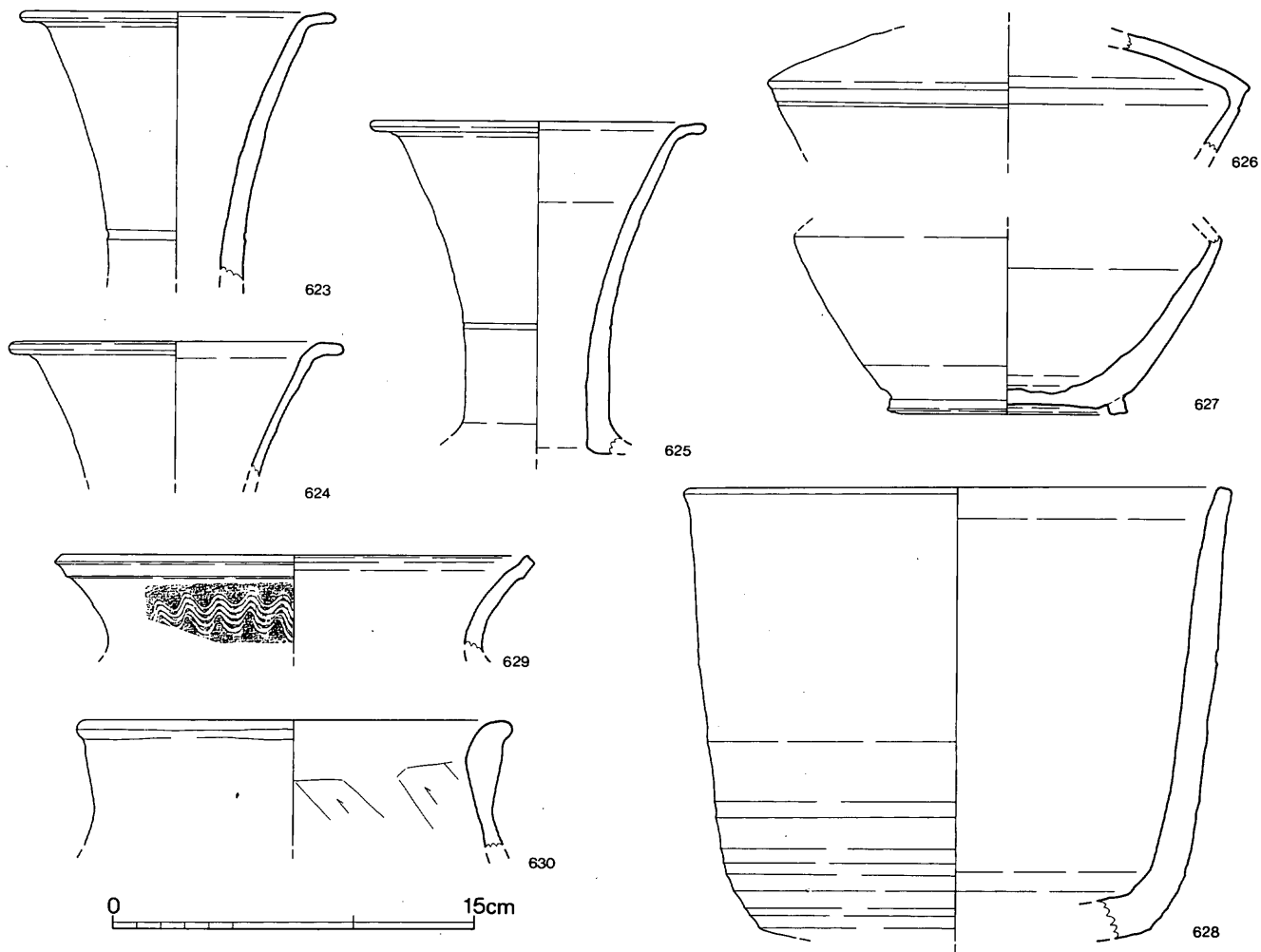
29・33号窯跡灰原 北から南へ傾斜し、標高125～117 mの間に上端幅1.5 m、下端幅約3 m、長さ約7 mの帯状に残る程度で、その大半が斜面の崩壊で沢に流出している。

出土遺物（図版32、第53・54図）

蓋杯・蓋（604～615） 611は天井が高い。他は天井部が平坦である。口縁端は直に下るものとやや内傾するものがある。



第53図 29・33号窯灰原出土土器実測図①（縮尺1/3）



第54图 29·33号窯灰原出土土器実測图② (縮尺1/3)

**蓋杯・身 (616~621)** 616~620は高台付の杯身・621は無高台の杯身である。体部は口縁部付近でやや外反する。高台は短く、外底端に貼付する。

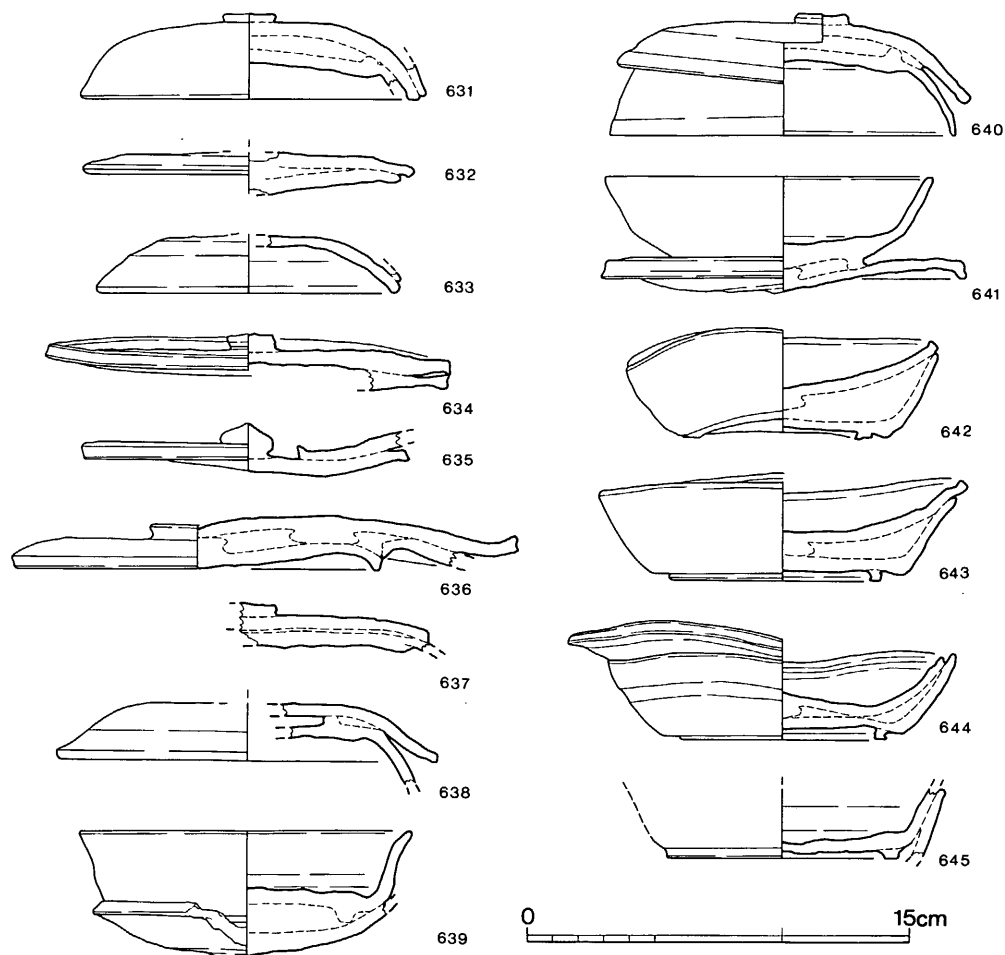
**短頸壺・蓋 (622)** 体部から口縁部にかけての破片である。やや開き気味に下り、端部は平坦である。

**長頸壺 (623~627)** 623~625は口頸部片で、口縁端は水平に屈曲させる。頸部下位に一条凹線が巡る。626は屈曲部で鋭い稜線が入る。627底部は平坦で端に高台がつく。

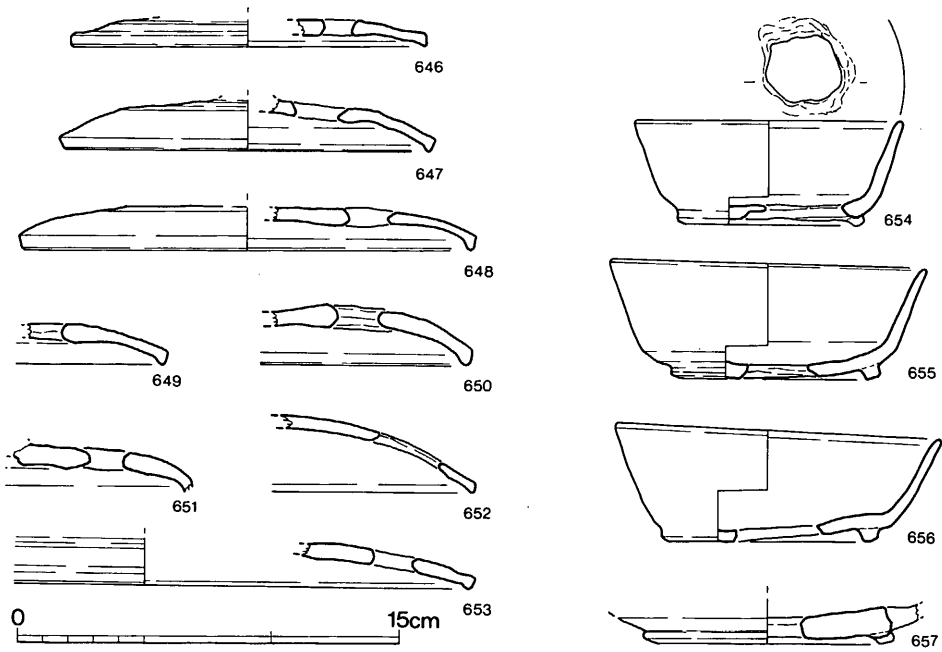
**鉢 (628)** 口縁端部は平坦である。体部下位は回転ヘラ削り調整。

**甕 (629)** 口径20cm、頸部に波状文を施す。

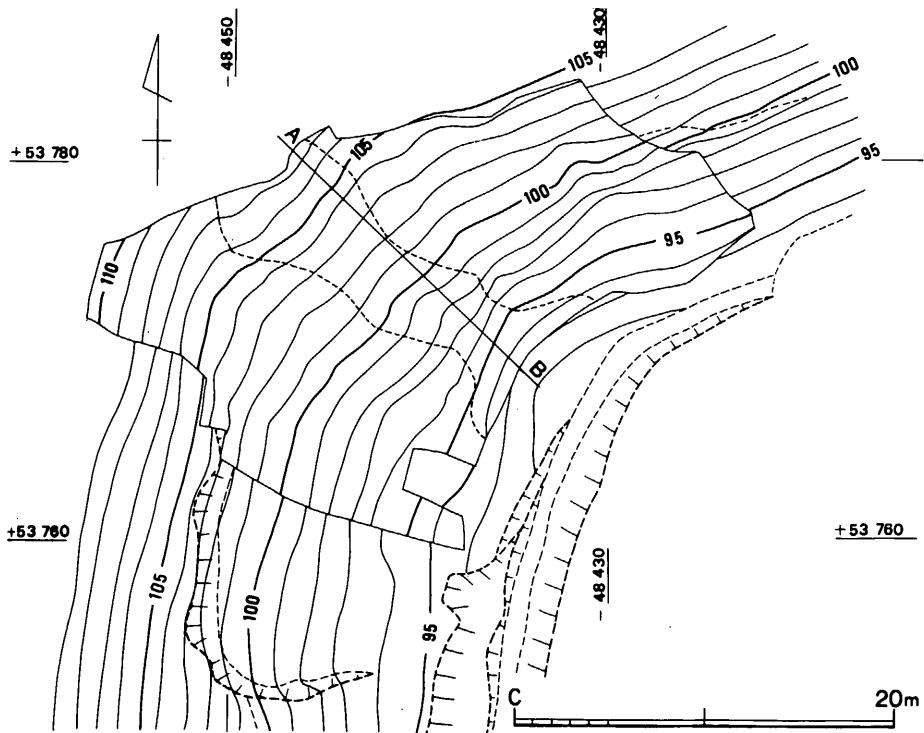
**土師器 (630)** 甕の口縁部片で端は厚く丸味をもつ。内面ヘラ削り調整。



第55図 重ね焼き実測図 (縮尺1/3)



第56图 穿孔土器实测图 (縮尺1/3)



第57图 38・39号竈地形图 (縮尺1/400)

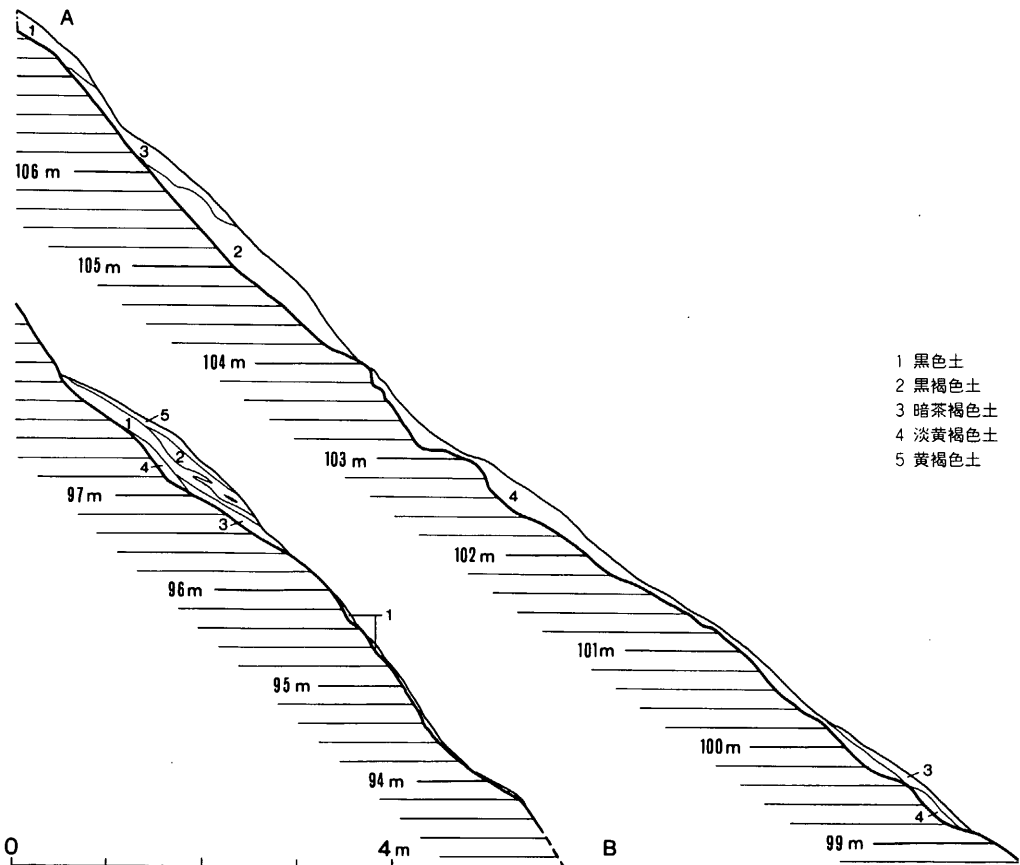
### 重ね焼き・穿孔土器 (図版34～36、第55・56図)

**重ね焼き土器 (631～645)** 重ね焼き土器は、同器種同志と異器種同志とがある。蓋と蓋の組合せは632～637、杯身と杯身の組合せは645、蓋・身との組合せは、631・638～644である。すべて19～22・30～32号窯灰原出土。

**穿孔土器 (646～657)** 646～653は蓋杯・蓋で、焼成前に外面から穿孔されたもの、646・648。内外両面から穿孔されたもの、649・650～653。650は焼成前・後は不明である。654～657は杯身である。654は内外両面から焼成後に穿孔。他は外面からの穿孔で、655は焼成後。656・657は焼成前の穿孔である。657は2孔ある。

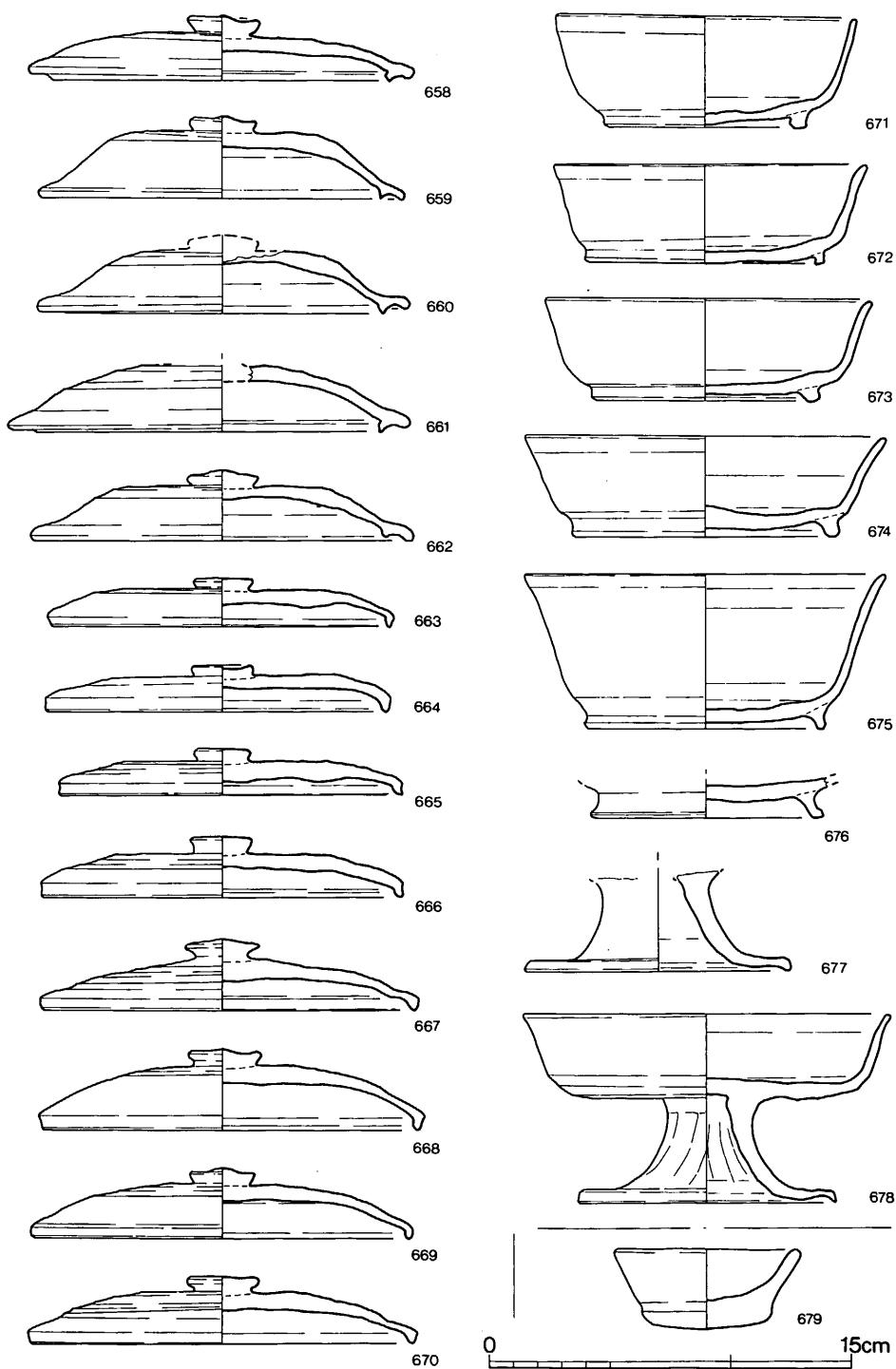
### (14) 38・39号窯跡 (第57図)

B-1地区と・B-2・4地区との谷の分岐点の北西側斜面裾部で灰原と須恵器片の散布が認められた。調査の結果、窯体は土捨場用地外に遺存することが判明した。この地区は、当分

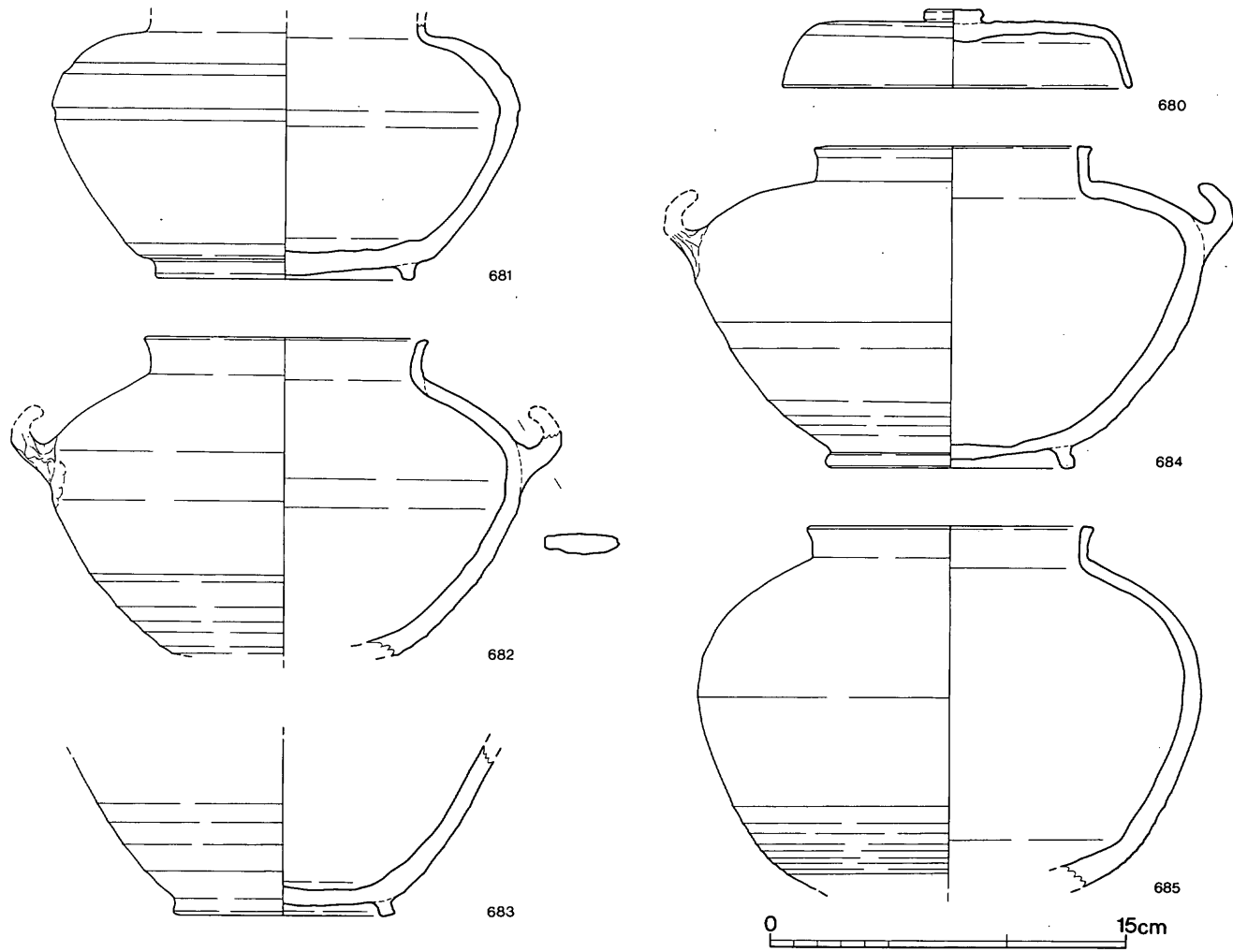


第58図 38・39号窯灰原土層図 (縮尺 1/80)

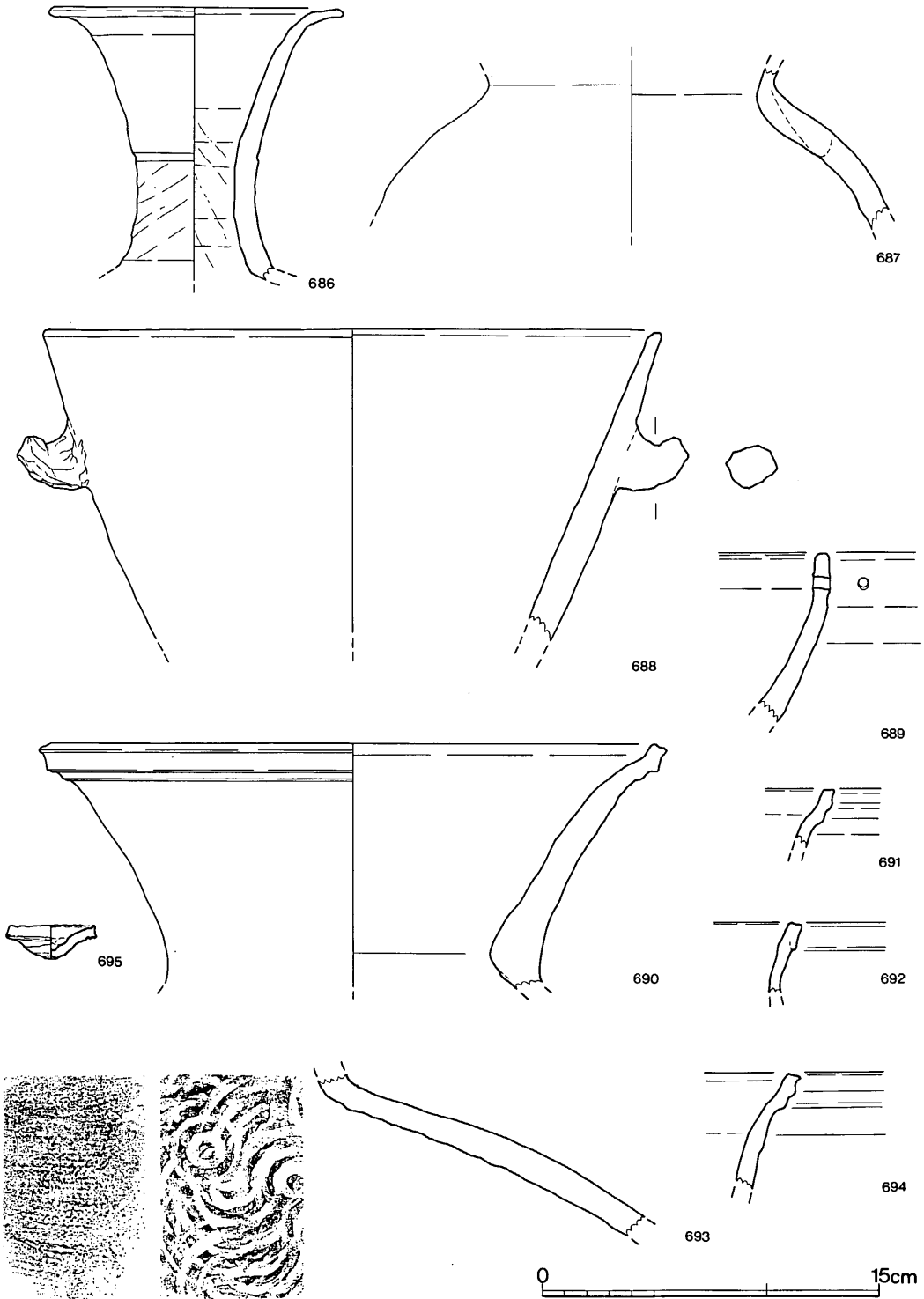




第59图 38·39号窯灰原出土土器実測图① (縮尺1/3)



第60图 38·39号窯灰原出土土器実測図② (縮尺1/3)



第 61 图 38·39号窯灰原出土土器実測图③ (縮尺 1/3)

の間は開発される予定もないことから灰原のみの調査を実施した。

### 灰原（第58図）

灰原は、北西から南東へ傾斜し、標高107.5～93mの間に長さ18m、幅4～9mの帯状の広がり呈している。標高107m付近で約3mの間をおいて黒色土のまとまりが観察でき、この上部にそれぞれ窯跡が遺存するものとする。灰原の流出は著しく、斜面下の沢は灰で黒色を呈していた。斜面では標高96.5～98mの間に最も黒色土が堆積し、図示した土器もほとんどがこの地点からの出土である。

### 出土遺物（図版34、第59～61図）

**蓋杯・蓋（658～670）** 蓋は身受けのかえりを有するものと、かえりのつかないものに大別される。658～662は口縁内部面に身受けのつくもので、かえりが口縁端部より内側におさまるもの659・662と下方に出るもの658・660・661とがある。頂部に径の大きな擬宝珠様のつまみがつく。663～670は身受けのかえりをもたない。天井部が平坦なもの663～666と、天井に丸味をもつ667～670とがある。外天部はいずれも回転ヘラ削りされる。

**蓋杯・身（671～676）** 671の体部はやや内彎気味に立上り、他はやや外反する。675は器高6.4cmを測り深い。外底端に長い八の字の高台がつく。676は高台端部は外へつまみ出す。

**高杯（677・678）** 杯部は深く、口縁端部はやや外反する。脚部は短く大きく開いて下り、脚部端は斜め外方につまみ出す。

**短頸壺・蓋（680）** 天井部は平坦で、体部と境は丸味をもつ、体部はやや開き気味に下る。天井頂部に扁平なつまみを有す。外天井部は回転ヘラ削り調整。

**短頸壺（681～685）** 681は肩部付近に幅の広い凹線を施す。682・684は把手付の短頸壺で最大径はこの部分にあり、底部に向ってすぼまる。685の胴部は丸味をもつ。

**長頸壺（686）** 口頸部片である。口縁部は大きく開く。頸部中央に凹線を巡らす。中位以下の内外面にシボリ痕が認められる。

**壺（687）** 肩部片で全形は不明である。

**杯（679）** 土師器で全体に丸味をもち、器肉は厚い。外底部は未調整。他は摩滅のため不明。

**鉢（688・689）** 把手付きの鉢で、口径27.6cmを測る。689は口縁下に穿孔がある。

**甕（690～694）** 690は口径28cm、頸部径16.7cm。691～694は口縁の小片である。693は肩部片で、外面平行タタキ、内面は同心円の当具痕。

**不明品（695）** 平面形は円形を呈し、中央部を片面へ押出す。端部はヘラ削り、中央の内外面は未調整で他は回転ナデ。

## (15) 小 結

B-1地区は、牛頸川の流れる大谷の一本西側の谷で、入口から谷頭まで約550mあり、約300m付近でB-2・4地区へ通じる谷と二股に分れる。この谷の沢には多数の須恵器片が流入して散乱しており、当初数10基の窯跡の遺存を考えたが、調査の結果二群9基の窯跡と2基分の灰原を検出するに留まった。これは他の調査地区でも同様で、一本の谷で操業される窯数を考える上で重要である。

## 19～22、30～32号窯跡

この7基の窯跡群は、谷頭から約100mほど戻った地点の東側の急斜面（丘陵東斜面）中腹に位置する。この位置は蛇行する谷の窪んだ地点で、谷を登って来ると窯跡群の存在する斜面裾部までこなければ目に入らない。谷を走る風も直接あたる場所ではない。19号窯と30号窯の間も周囲の斜面より窪んでおり、水分が集まりやすく調査中も常に湿った状態であった。長い年月の間に窯は徐々に浸食を受け、灰原を流出させ、斜面が崩壊し岩盤を露出させた。したがって窯の保存状態は不良で、灰原も約1/3を失っていた。窯は標高122～127mの間に横に並列して構築されており先後関係の明らかな窯は22号と32号が重複しており22号窯が新しい。灰原からの先後関係は不明である。窯体は小規模で、改修等は見られなかった。この時期はA-3地区、C地区の側から大形品と小形品を焼成する区分が行なわれており、出土品から見ても小・中形品のみ焼成と考えられる。この7基の窯跡群の操業は8世紀中頃から後半代にかけて行なわれたものと思われる。

## 29・33号窯

19～22・30～32号の窯跡群の対岸の西へ入る小さな支谷の北側斜面下部（丘陵南傾面）から並んで検出された。窯の前庭部と灰原のほとんどが流出している。窯は3m前後と小規模である。33号窯の煙道部上面からは大甕の胴部片が内面を下にして検出された。B-4地区43号・44号窯で見られる様に閉塞時に使用されたものと考えられる。出土遺物から見て両窯の操業は、8世紀前半代～中頃にかけて行なわれたものと思われる。

## 38・39号窯

B-2・4地区へ通じる谷との二股に分れる地点の入口よりの西側の急斜面上部に位置する。土捨場用地外のため窯本体の調査はできなかったが灰原の広がりから2基の存在はまちがいない。灰原からは、蓋杯・高杯・短頸壺・長頸壺・壺・鉢・甕の器種が出土している。出土土器の中に蓋に身受けの短いかえりもつもの、これに伴う深い体部の杯、それに杯部が深く、脚部の短い高杯等が見られ、窯の操業は7世紀後半から8世紀前半代にかけて行なわれたと考えられ、A-2地区の3号灰原の資料のとともに今回調査分の中では古い資料に属する。（池辺）

## 2 B-4 地区（井手窯跡群）の調査

### （1）調査の概要（図版35～38、第62・63図）

B-4 地区は土捨場に存在する4本の谷の内最も西側に位置し、井手窯跡群全体の分布から見るとほぼ中心部にあたる。B-1の谷から二股に分かれ約100mで西から南西に向きをかえて約250mで谷頭となる。谷を形成する斜面は谷頭の部分を除き急である。谷頭から約120m程もどった部分から下位の谷間の沢にはほぼ全面に多量の須恵器片が散布しており、多くの窯の存在が推測できたが、窯の位置を特定するのは非常に困難であった。丘陵斜面の踏査と裾部のトレンチ調査の結果、西側の急斜面で灰原を4ヶ所確認することができた。

調査の結果、斜面上部に2群、斜面下部に2群の計10基の窯を検出した。灰原は、斜面の地滑りによる崩壊でその大半がすでに流出しており残存状況はよくなかった。

なお、調査中、酷暑のため作業員二名が日射病で倒れるという事体も発生した。また、土捨作業の重機の騒音の中で急斜面に身体のバランスに気遣いながらの大変な調査であった。

（池辺）

### （2）40号窯跡（図版40-1、第64図）

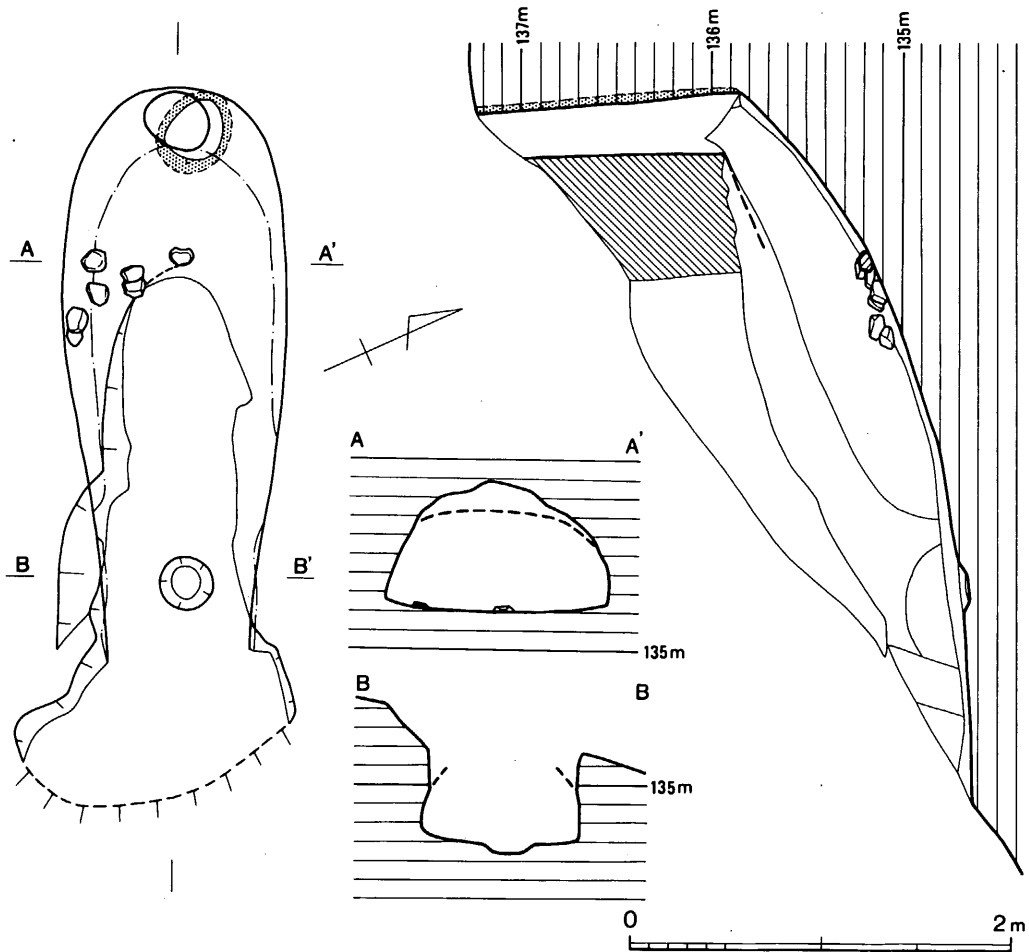
調査区の最も南に位置し、標高は134～137mの地点にある。主軸方位はN-66°-Wとなる。煙出し部付近を除いて天井のほとんどが落ちており、前庭部も幾分流失しているようである。

**焼成部** 中軸線よりやや右に扁する舟底ピットより、焚口右袖の反転部分までの約0.5mを想定できる、床幅は0.8m前後である。いわゆる舟底ピットは径0.3m弱、深さ0.1mに満たない平面円形の小さなものである。

**焼成部** 最大幅部分が奥壁よりあり、流滴形とでもいうべき奥壁の丸い平面プランを有する。舟底ピットから奥壁までの斜長は約2.7m、床面の傾斜は奥まるにつれて急となるが、舟底ピットと奥壁を結ぶラインは25°の角度を有する。床面最大幅1.2mで、煙道部での高さは0.3m。床面には径10cm前後の置台が数点遺存するがすべてが原位置を保つものではない。

**煙出し部** 煙道はその基部が中軸線上にあるものの上端は右へ扁する。断面は、径0.3mの扁円形を呈し、高さ1.4mまで遺存する。約5°の角度をもって前傾。煙道の壁はもちろん、前面に残る窯体上部も地山であり、この部分は地下式構造となっている。なお、煙道上面は幅5cm強の厚みをもって赤色に熱変している（図のスクリーントーンを付した部分）。

**前庭部** 焚口からの開きは左に大きく右に小さい。前庭部としては狭いほうである。



第64図 40号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

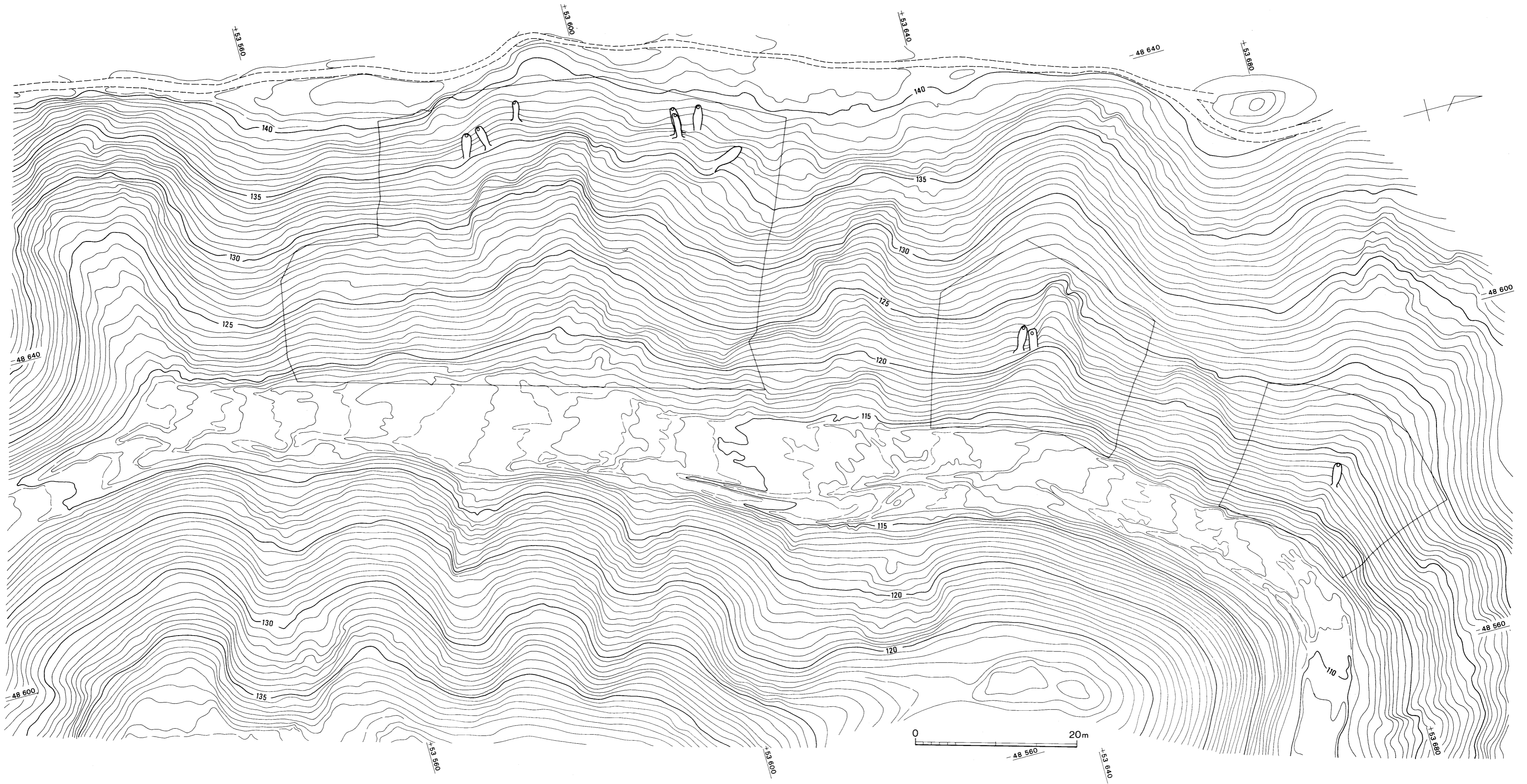
**出土遺物 (第65図)**

窯内埋土中より1点出土している。

**蓋杯・蓋 (1)** 約1/3の残片。体部は強く横ナデされて若干凹面となるものの口縁部との間には41号窯出土資料ほどはっきりとした境を有しない点で古相を示している。

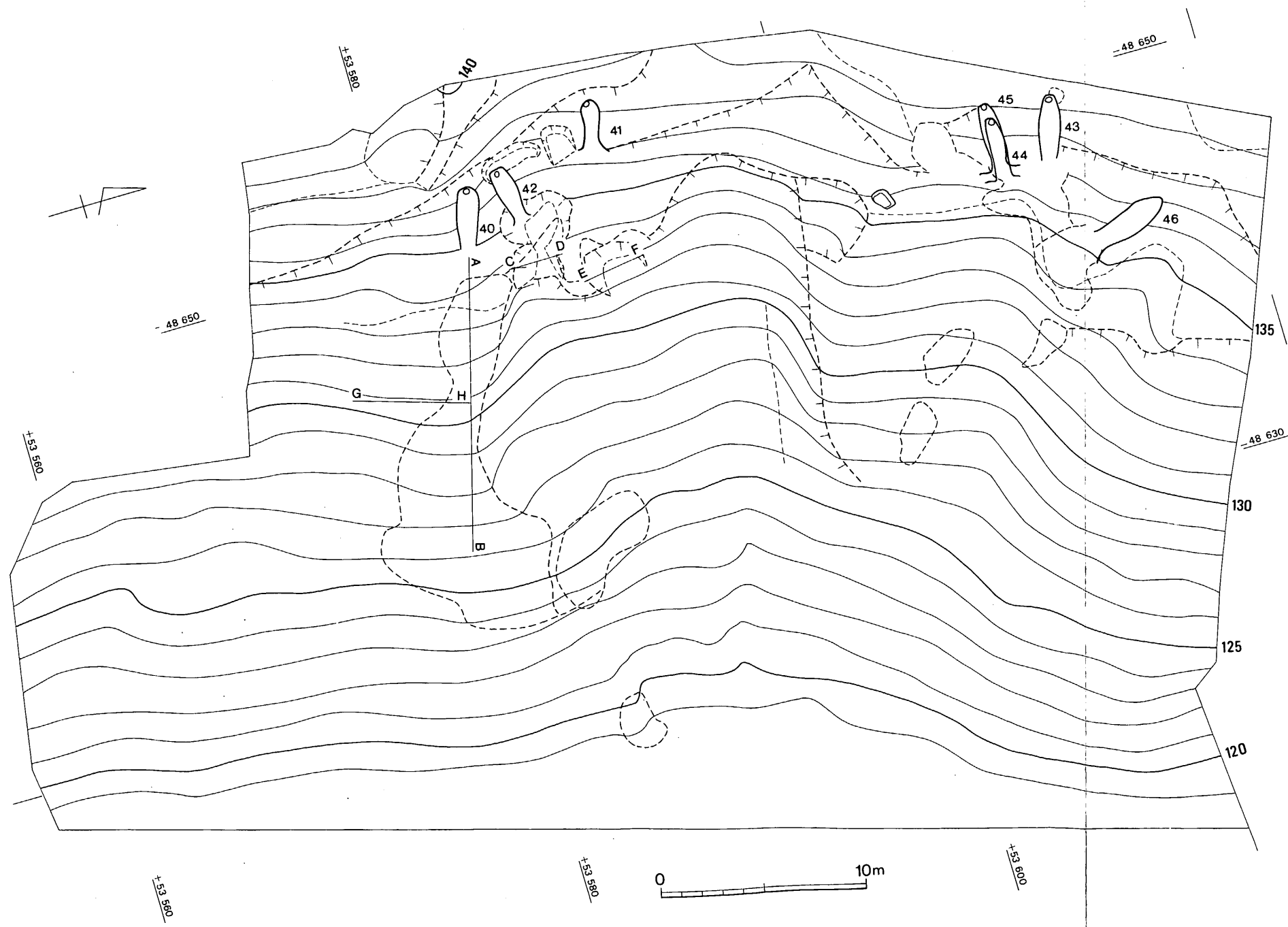
**(3) 41号窯跡 (図版41、第66図)**

B-4地区を設定した急斜面の小さな凹地の最奥近くに立地し、等高線とほぼ直交する。標高136~138m間にN-75°-Wの主軸をもって築成されている。遺存状態は良好で、後述の42・

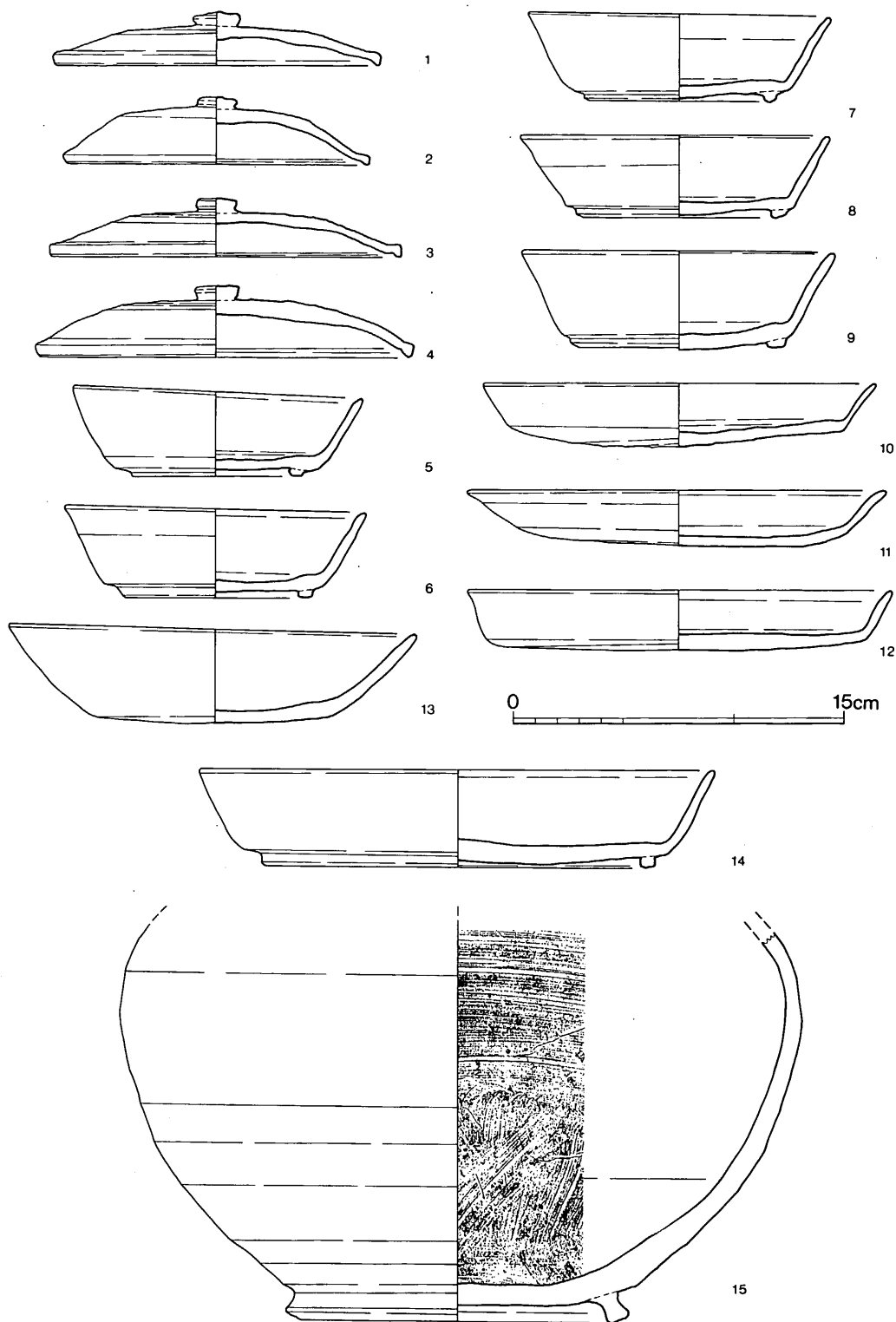


第62图 B-4地区地形图 (缩尺1/400)





第 63 図 40~46号窯跡配置図 (縮尺 1/250)



第 65 图 40号窯窯内・41号窯北側土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）

43号窯との比較からほぼ完存する地下式構造の窯といえる。

**燃烧部** 床面は前庭部中央を最低点として奥壁へ向って傾斜し、かつ床面の平面プランにも焼成部との境を示す痕跡を認められないために部位を特定することが困難である。ただ、42・43号窯では天井の残存架構部と焼成部がほぼ対応しており、それを参考にすると燃烧部の長さは0.6m前後と推測できる。床幅は0.6～0.8mである。

**焼成部** 上述のように燃烧部を想定した場合、斜長1.4mとなり、最大幅0.9m、高さは0.4～0.5mである。床面の傾斜は29°を測る。平面プランは奥壁が丸く、かつ最大幅を有する部位が奥壁近くにある流滴形を呈し、ほぼ左右対称形となる。横断面は蒲鉾形。床面に土製の置台が2個遺存していた。

**煙出し部** 煙道は中軸線より左側に扁し、壁はほぼ直立するために平面図では上下両端が重なっている。径0.3mの円筒形を呈し、立上りは1.1mの高さまで遺存している。

**前庭部** 左に小さく、右に大きく開く。床面プランでは相対する部位に屈曲点がみられる。

**焚口横土壌** 窯本体の南側、谷奥側に位置する。平面プランは長方形に近く、残存規模は上端で1.6×2.1m、下端では1.4×1.5m、深さは1.6mに近い。埋土には置台・土器・焼土等を含むものの、大部分は地山と区別し難い土質であった。

#### 出土遺物（図版51、第65図）

窯内出土遺物はなく、焚口横土壌から出土したものを図示した。

**蓋杯・蓋（2～4）** いずれも口縁部を肥厚させて、断面三角形に仕上げている。

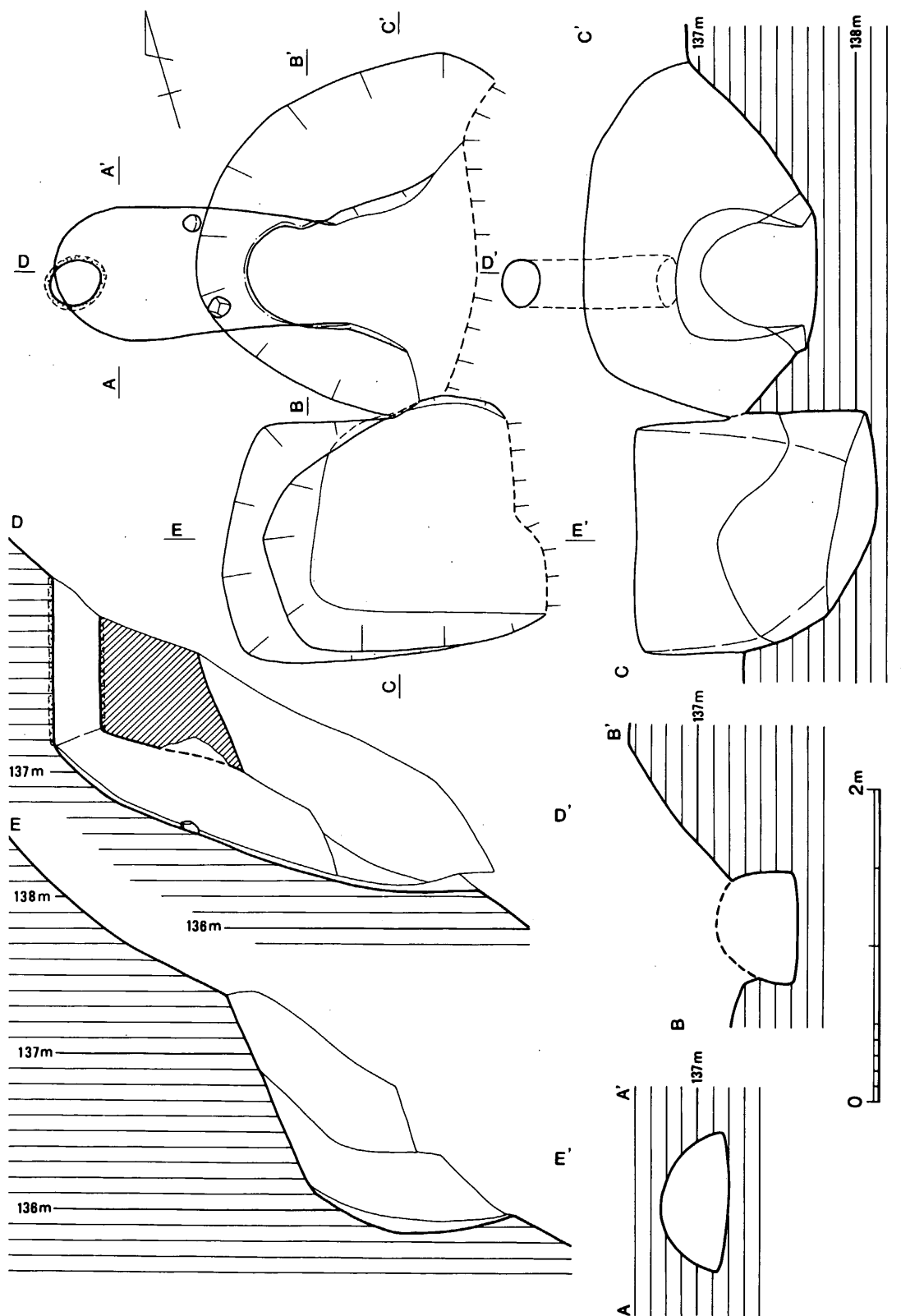
**蓋杯・身（5～9・14）** とともに体部の仕上りは直線的ないしは若干外反気味にのびる。高台は扁平となり、底部から体部へと屈曲する部位の近くにあるもの（8・9）とやや内側に入るもの（5～7・14）とがある。なお、8の内底面には篋状工具の圧痕が残る。

**皿（10～13）** 通有の浅いもの（10～12）と深みをもつもの（13）がある。

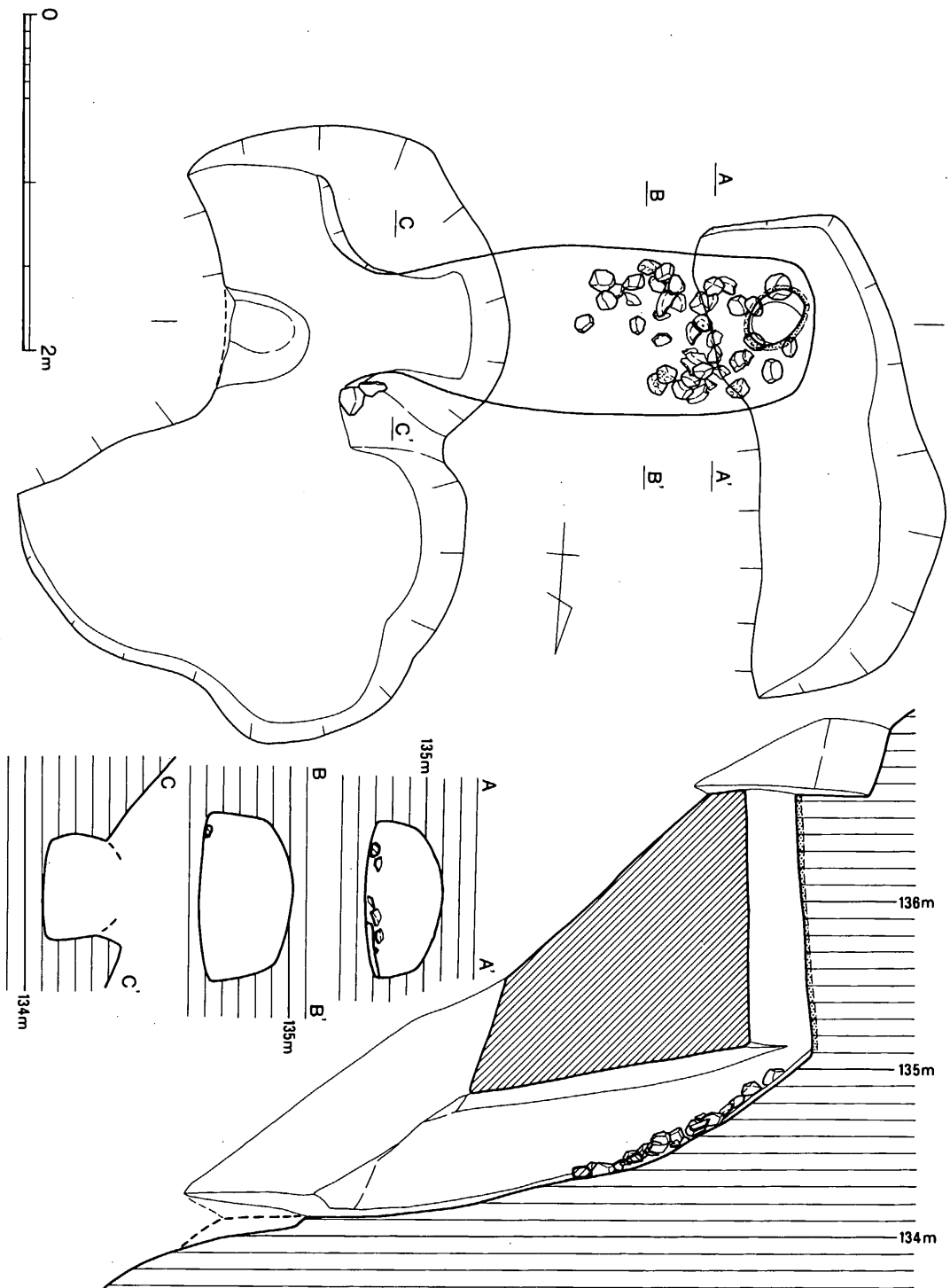
**壺（15）** 窯の下方に広がる灰原出土資料と接合できた。大きな高台が外方へ踏んばる。底面内面は不定方向のナデ、それ以上は横ナデで仕上げる。

#### （4）42号窯跡（図版40-2、第67図）

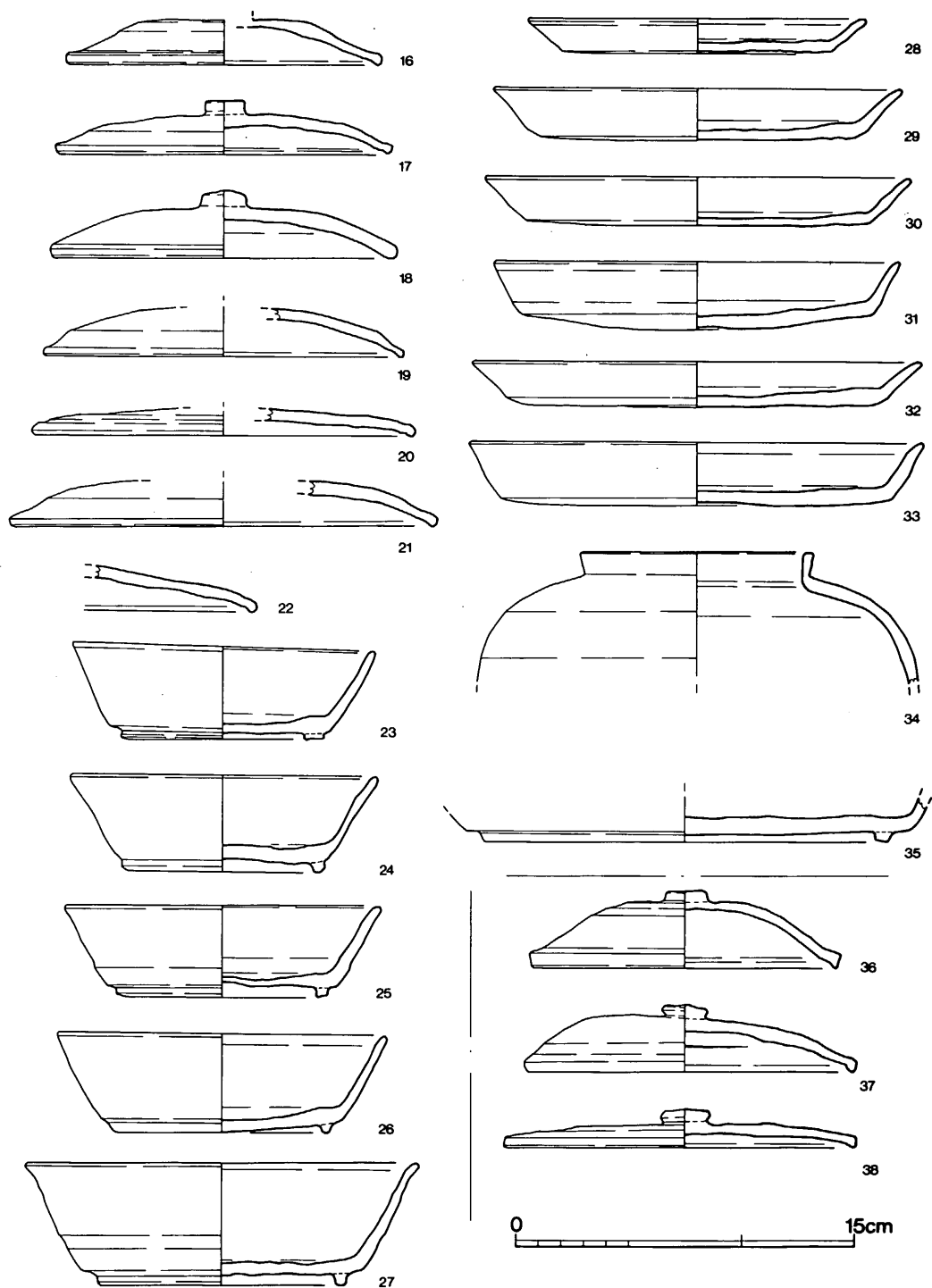
40・41号窯の間、地形的にはまだ小さな凹地の中にあり、等高線に斜交、主軸方位をS-87°-Wにとる。標高は134～137m。これも窯体は完存に近く、ほぼすべての天井が遺存する地下式登窯である。平面プランは奥壁が直線的になり、焼成部の膨みが小さい点で特徴がある。前庭部は「凸」字形を呈するが、南側に連続する土壌がある。



第 66 图 41号窯跡実測图 (縮尺 1/40)



第 67 图 42号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



第 68 图 42号窯内・前庭部出土土器実測図 (縮尺 1/3)

**燃烧部** 舟底ピットがなく、かつ床面の傾斜も漸移的であるために焼成部との境はこれも断定が困難である。しかし傾斜変換部らしき部位を強いて探し、焚口右側袖の貼石（花崗岩）・スサ入り粘土塊までの長さを測ると約0.7mとなり、幅は0.6~0.8mである。この場合の燃烧部・焼成部の境は残存する天井の前端にほぼ一致する。

**焼成部** 先の燃烧部端からあまり開かず、ずん胴形の平面プランを有する。斜長2.3m、最大幅は約1.0mで、24°の傾斜角を有する。高さは煙道近くで0.3m、残存部での最高値は約0.7mを測る。横断面は側壁と天井との間に弱い稜をもつ梯形に近い形を呈する。

奥半では土製の置台・土器片がかなり出土したが、原位置を保つものは少ない。また、奥壁付近の一部に貼床上の低い段が残っていたが、他例にみるモザイク状のものではなく、単に床面表層が剥がれたにすぎないようである。

**煙出し部** 煙道は中軸線上にあり、基部で太く、上へ向って細くなり、上端では径0.3mの扁円形を呈する。立上がりは1.5m強で、約4°前傾。上端の排水溝は下端の幅0.7m以上、深さ0.6m強の規模を有し、その床面に煙道上端がくる。

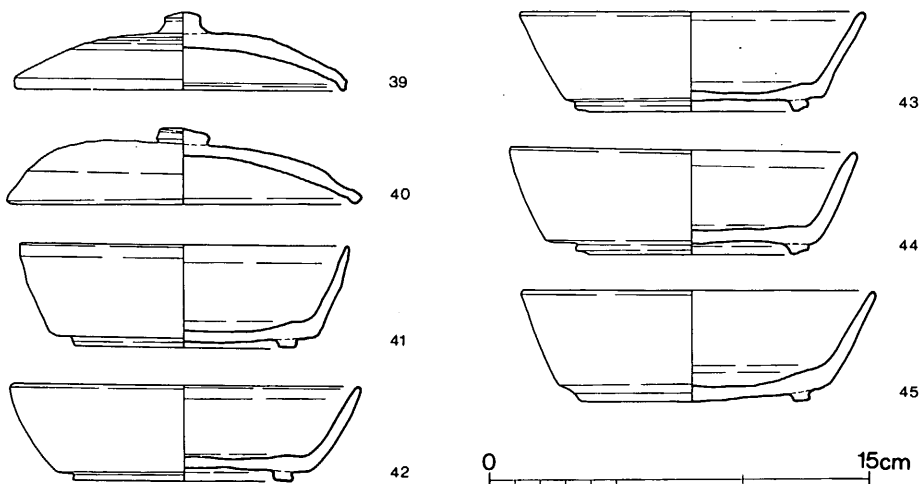
**焚口部横土壌** 焚口の北、谷口側に設置される。北西（斜面下）側の一部を流失するが、径2~2.6mの不整円形に復原できよう。深さは0.7mを測り、その床面は前庭部に連続している。内部にはほぼ全面に炭化物・焼土の混入した堆積土が詰まっていた。

**出土遺物（図版51、第68・69）**

窯内

**蓋杯・蓋（16~22）** 口縁部の形状がバラエティに富む。

**蓋杯・身（23~27・35）** 体部・口縁部の形状、高台の位置・形状などこれも各々異なる。



第 69 図 42号窯・焚口部横土壌出土土器実測図（縮尺 1/3）

皿 (28~33) 体部が外彎気味に立上る。

短頸壺 (34) 口縁部はほぼ直立し、端部に平坦面を形成する。灰原出土資料と接合した。

前庭部

蓋杯・蓋 (36~38) 36・38は口縁端部を小さく垂下させて接地面とする。

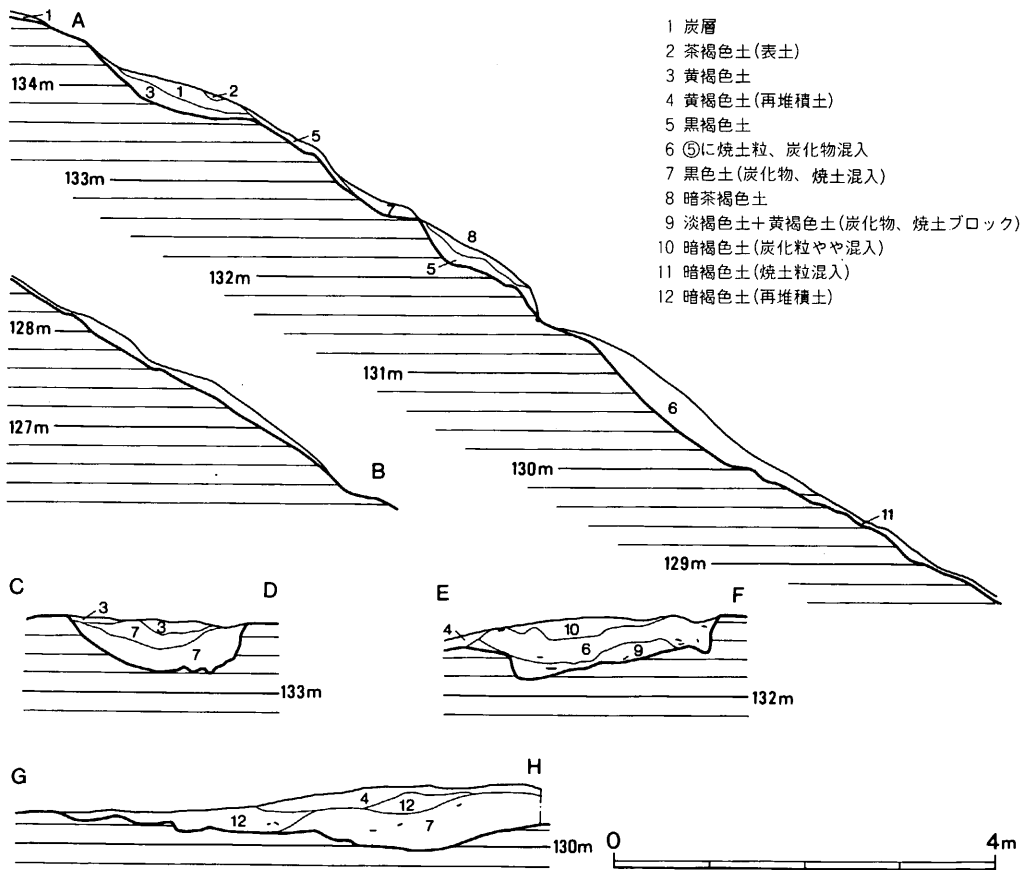
焚口部横土境

蓋杯・蓋 (39・40) 口縁部を折り曲げ (39)、あるいは断面三角形に肥厚させる (40)。

蓋杯・身 (41~45) 底部から体部への屈曲部が明瞭で、やや内側にある高台が弱々しい。

40~42号窯灰原 (第70図)

西から東に傾斜して堆積するが、そのほとんどを斜面の地滑りにより流出している。本来の広がりや標高134~119mの間で、最大幅20m程と推定できるが、現存しているのは、南端部で40号窯の下部に長さ17m、幅3m~8mで帯状を呈する。したがってどの窯に帰属するか不明であり、一括して説明する。





**出土遺物** (図版51・52、第71～74図)

**蓋杯・蓋** (46～67) 口縁形態により次の3種類に分類できる。

a : 天井部から口縁部への移行が連続的(境が不明瞭)であり、かつ両者の器肉の厚みに大きな差異がない。天井は高く、丸味をおびる……48・58・64

b : 天井部と口縁部の境はくびれており、口縁部を断面三角形に肥厚、もしくは端部を折り曲げる……47・49～51・53・54・57・59・61～63

c : 天井部・口縁部の境付近を強く横ナデすることによって反転させ、したがって口縁端部が外側下方に引き出されたようになる……46・52・55・56・60・65・66

以上の分類は当然ながら截然と分れるものではなく、中間的な例も多くある。

なお、46の天井外面にはハケメ原体によるものと思われる不定方向の平行条痕が残る。

**蓋杯・身** (68～88) 高台を付すものとなないものがある。高台のない個体は体部から口縁部にかけて強く外彎し、底部外面は仕上げ調整を行っていない。

有高台の杯身は体部から口縁部にかけての形状は変化に富むが、その傾斜や高さは相似ている。高台は低く、形も整わないものが多く、その位置も底部外縁もしくはやや内側となる。

なお、底部外面に平行タタキ痕を有する例がある(69・70・74等)。

**皿** (89～98) 口縁部が外彎して開く。底部外面の仕上げ調整を行わないもの、タタキ痕が残るものが多く、ナデて仕上げるのは92のみである。

**高杯** (99～107) 杯部は浅く、大きく開いて短い口縁部が直立ないし内傾して立上がる。口縁端部は水平あるいは内傾する面を有する。

脚部はその端部の形状でこれも3種に分類できる。

a : 脚裾へと漸移的にカーブを描いて端部へ至る。端部を肥厚させず、上端を外方へ小さく引き出す……107

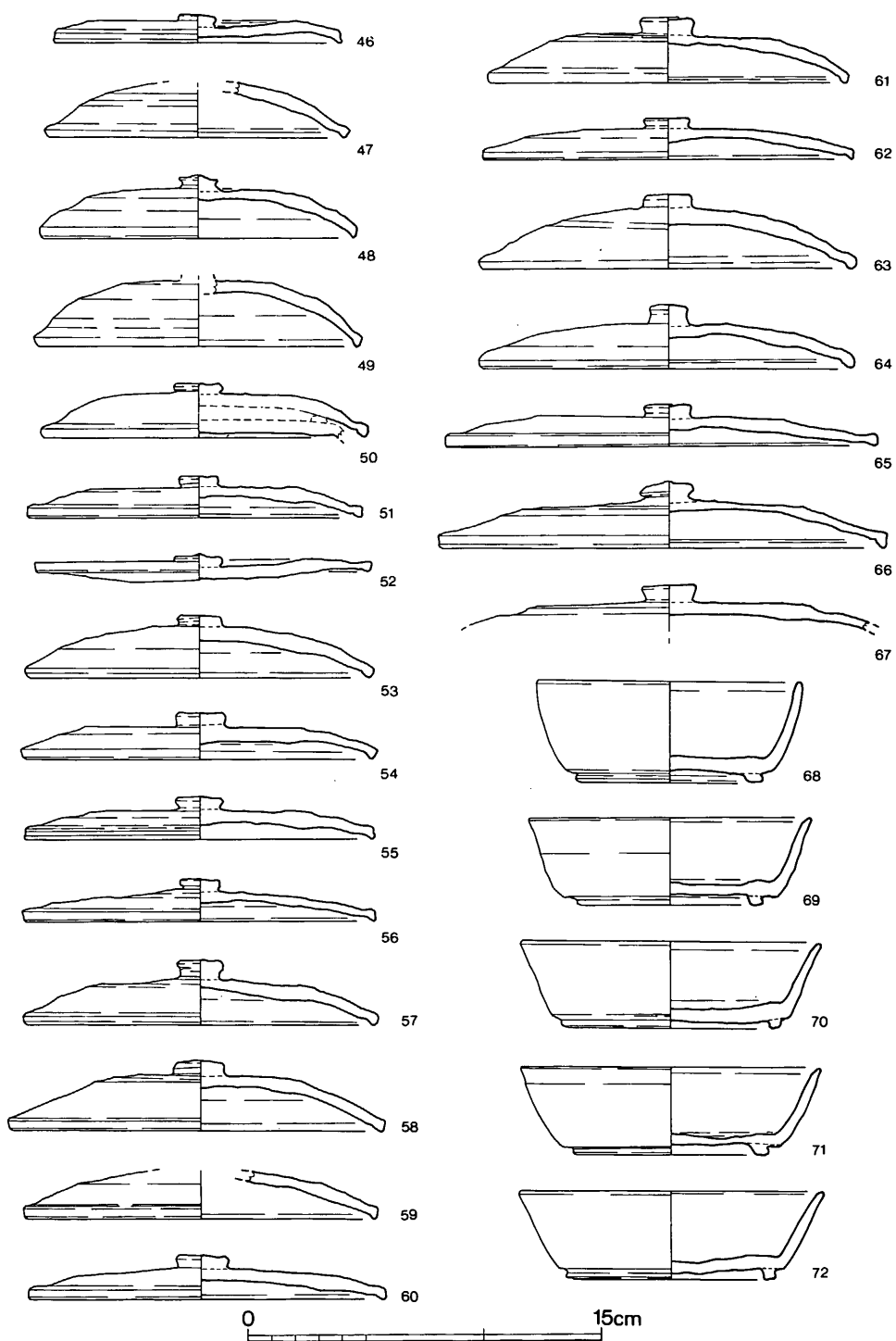
b : 脚裾が反転し、接地点が脚端にないことが多い。脚端部を肥厚させて断面三角形に整形する点で杯蓋に対応する……99・102・104・105

c : b類に似るが、脚端部を肥厚させずに折り曲げて接地点とする……103・106

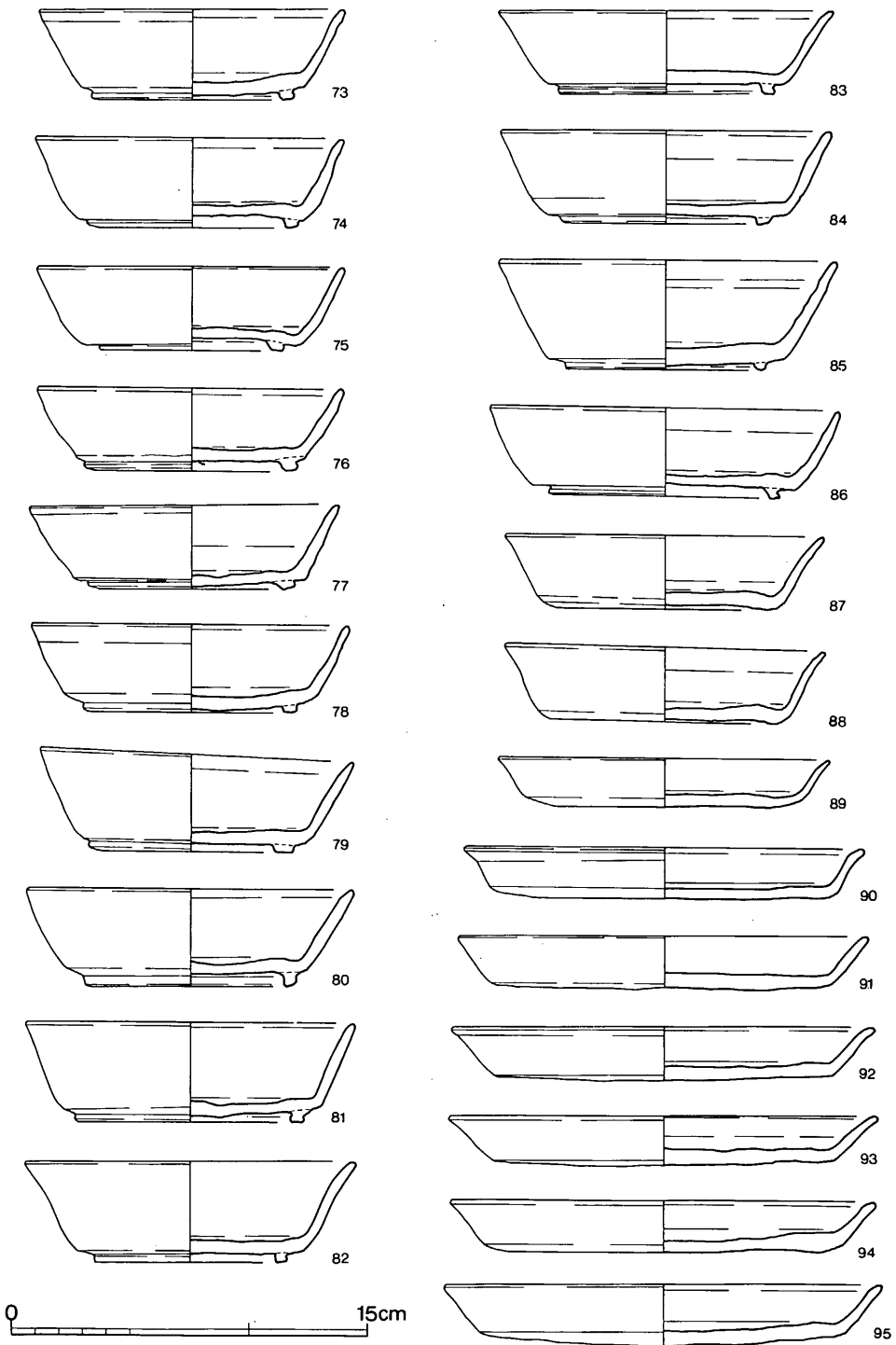
**鉄鉢形鉢** (109) 尖底部の小片。底部付近を横ナデ、以上をヘラ削りする。

**短頸壺** (108) 口縁部が短く外反し、端部は外傾する面をなす。高台は扁平である。

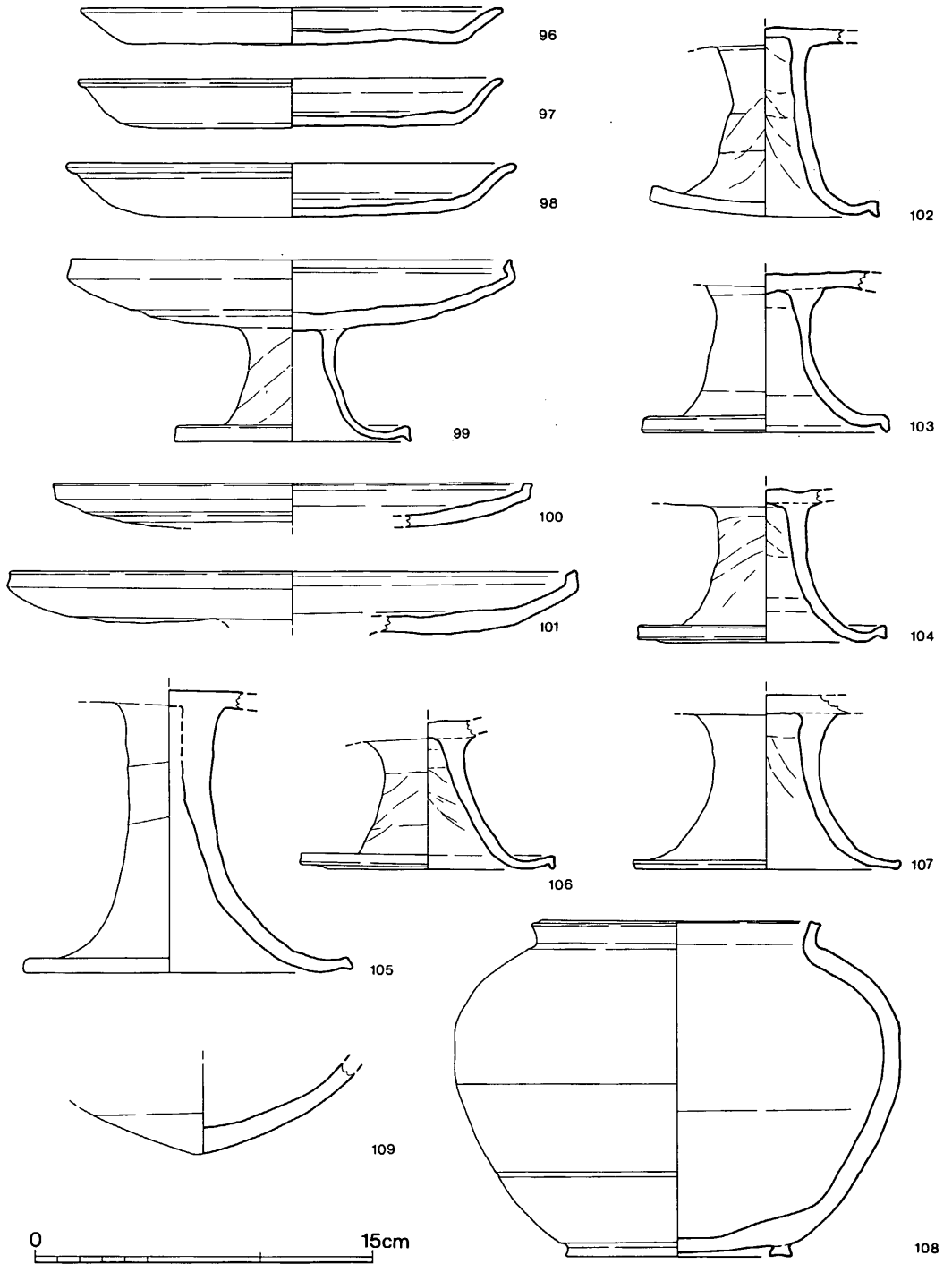
**把手付鉢** (111) 胴部内外面に同心円文・平行タタキ痕を残す。肉厚の把手は断面円形に近い。



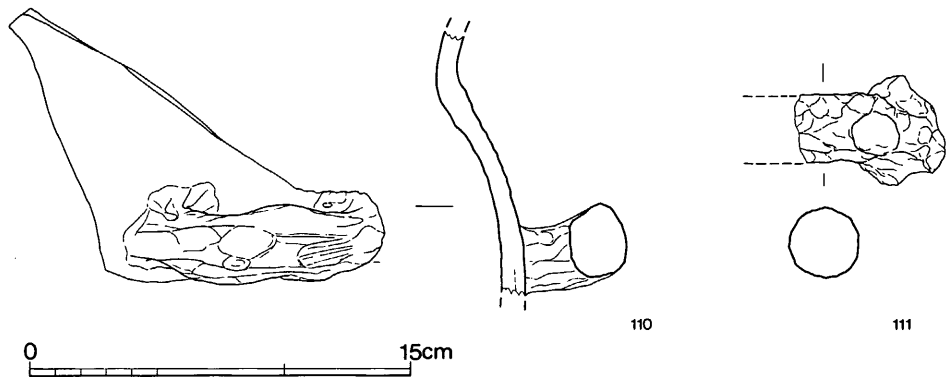
第71图 40~42号窯灰原出土土器実測図① (縮尺1/3)



第72图 40~42号窯灰原出土土器実測図② (縮尺 1/3)



第 73 图 40~42号窯灰原出土土器実測図③ (縮尺 1/3)



第74図 40~42号窯灰原出土土器実測図④ (縮尺1/3)

(5) 43号窯跡 (図版42・43-1、第75図)

40~41号窯から北へ約40mの小さな凹地にあり、主軸方位をN-68°-Wにとる。標高は先の3基のやや上位、136~140mである。

窯体東半(焼成部奥)は天井壁が落ちるものの、上方は残る。天井のない燃焼部付近の掘削部は実測図では方形に整った平面プランを呈するものの、本来は41・42号窯のように丸味をおびていたものと思われる。これも完存に近い。

**燃焼部** 焚口裾は左側が開かず、右側が2段に屈曲して開く非対称形となる。そこから床面の傾斜変換部までの距離は約1.1mあり、この変換部は先の41・42号窯と同様、天井前端にほぼ対応する。床幅は約0.8~1.0mである。

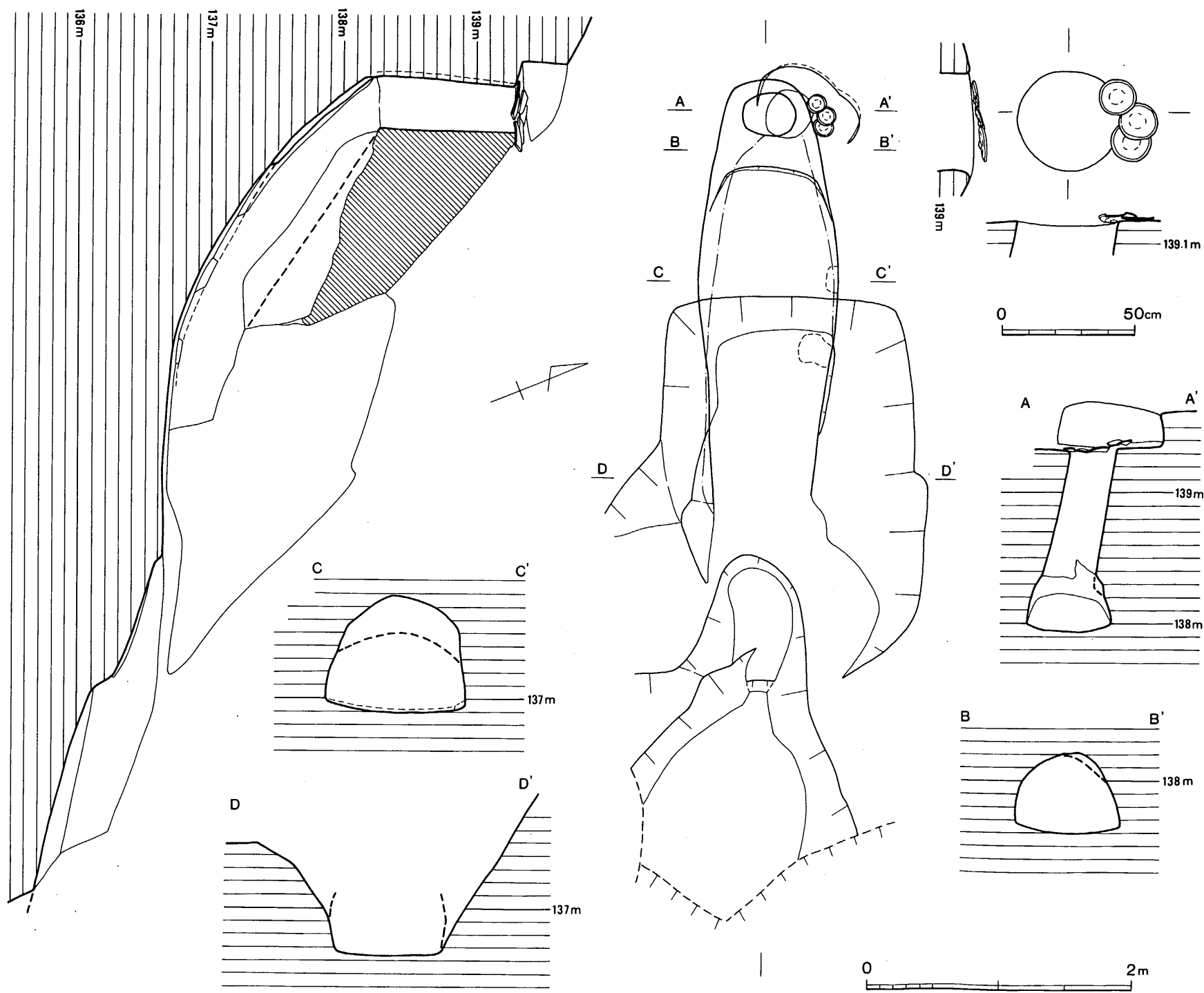
**焼成部** 斜長2.6mで37°の床面傾斜を有する。最大幅の部位は燃焼部に近く、1.1m弱、煙道直下での高さは0.6mある。

奥壁付近および焼成部の一部で床面が5cmほど高くなるが、これも表層剝離の結果であろう。なお、断面形は蒲鉾形に近い。

**煙出し部** 本来の形状を留めると考えられる。径0.4mの正円に近い断面形を有する煙道の基部は中軸線にのるが、上方が北へ傾き(傾斜角13°)、かつ5°の傾斜をもって前傾する。立上りは1.1m。

煙道上端は径0.5~0.8mの扁円形に約0.3m掘り下げてあり、祭祀に供されたと思われる須恵器杯蓋の完形品3点、そして煙道を覆う形で須恵器甕の体部を出土した。

**前庭部** 上述したように右袖が大きく開き、左袖は開かず短く終る。あるいは一部切合う43・44号窯に規制されたものかも知れない。前庭部土壌は窯体に軸を揃えて延びる不整形のも



第 75 图 43号窟迹实测图 (缩尺 1/40)

ので、中に0.1~0.2mの段を有する。

### 出土遺物（図版52、第76図）

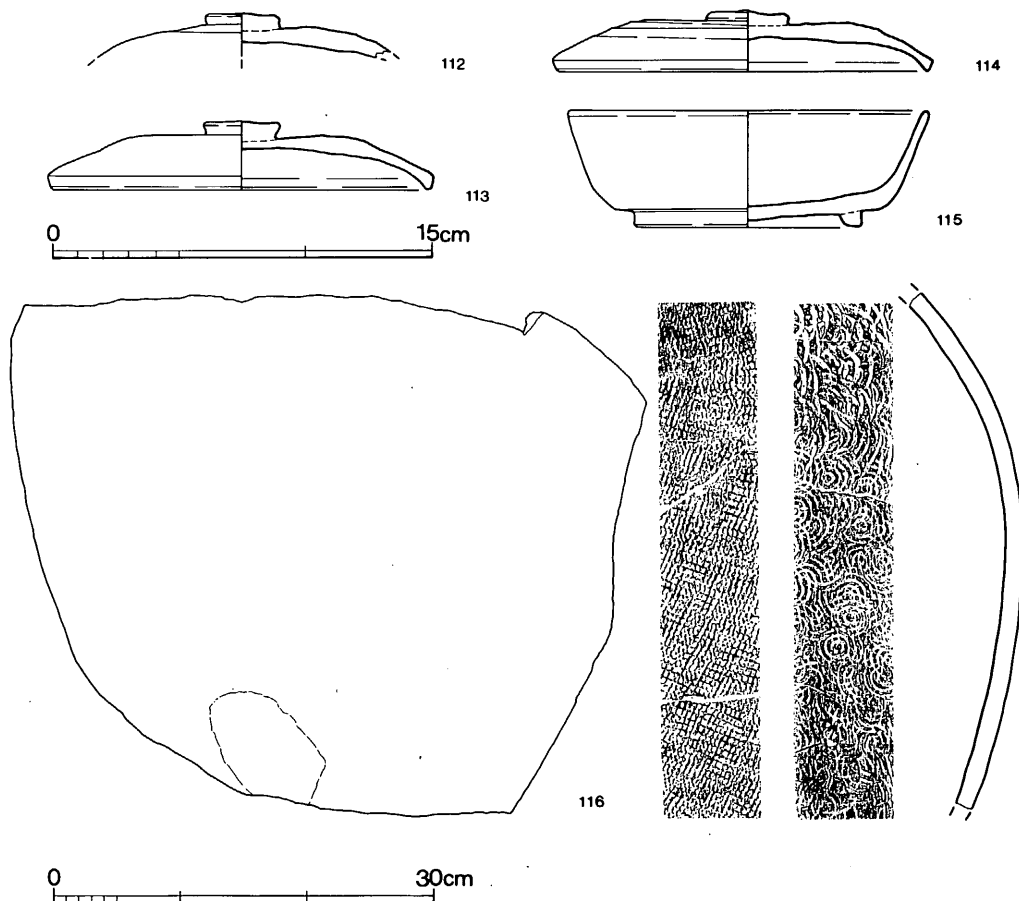
窯内埋土中（115）、煙道上端（112~114、116）、そして灰原（117~129）から出土している。

窯内

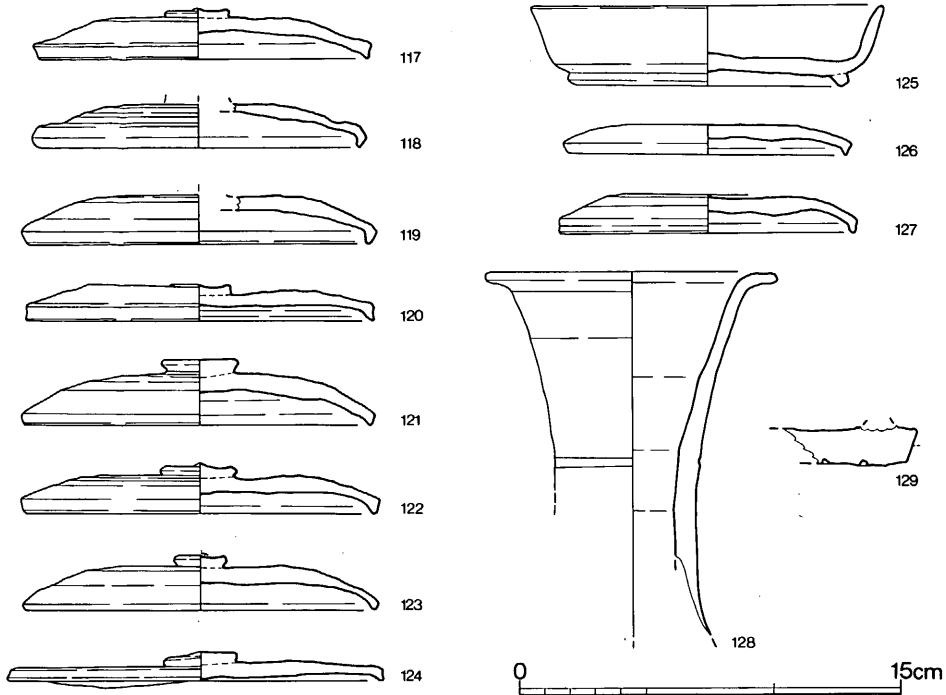
**蓋杯・身（115）** 灰黄色の焼成不良品で、器表も磨滅している。底部からの立上りは明瞭で体部は直線的にのびる。高台も丈夫な造りで、底部外縁からやや離れた位置にある。

煙道

**蓋杯・蓋（112~114）** 3点ともに茶褐色を呈する焼成不良品であり、形態も同じである。口縁部は下方へつまみ出されて断面三角形に近くなるが、天井部との明瞭な境はない。天井部はやや高く、大きなつまみは扁平で、中央部が小さく突出する。



第76図 43号窯窯内・煙道部出土土器実測図（縮尺1/3：1/6）



第77図 43号灰原出土土器実測図 (縮尺1/3)

**甕 (116)** 大型品の体部片。内面に整った同心円文、外面には格子タタキ痕を残す。焼成不良。

灰原

**蓋杯・蓋 (117~124・126・127)** これも口縁形態は煙道出土品に似るが、117~120等やや後出的である。126・127につまみはない。

**蓋杯・身 (125)** 底部から体部への移行は丸く、立上りが低い。高台は底部外縁に近く、断面方形でしっかりしている。

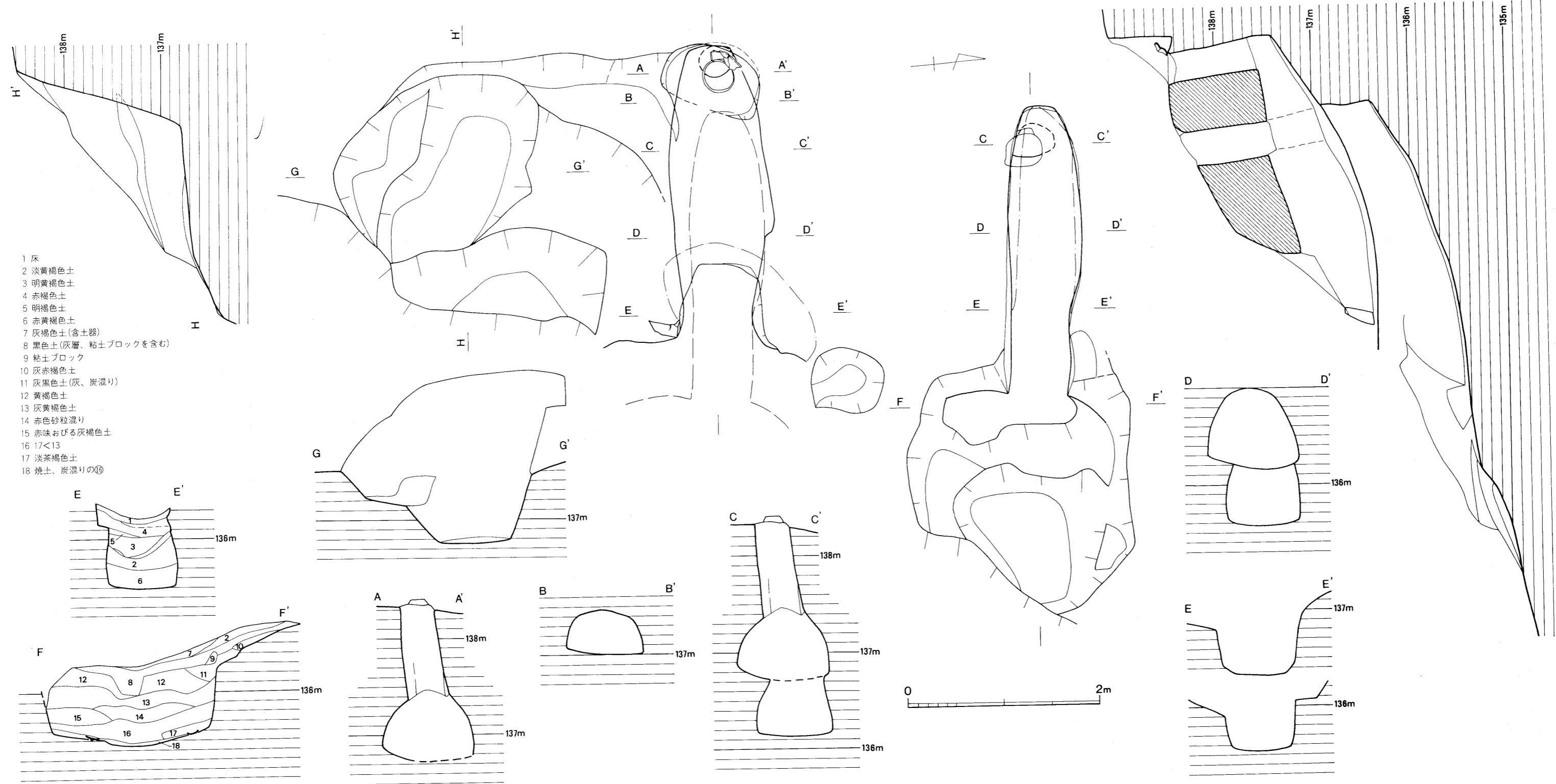
**長頸壺 (128)** 口縁部が外反して水平に近くなる。端部は丸い。

**不明品 (129)** 摺鉢と考えられる。口底部外面に刺突底を有する。 (飛野)

(6) 44号窯跡 (図版43-2・44・45、第78図)

43号窯の南側に並設される。標高136.3~139mの間に等高線に対して直交して構築されている。窯は花崗岩バイラン土を刳り貫いた地下式無階無段登窯である。主軸方位はほぼ東西方向で焚口は東に開いている。窯体の全長は3.15m、最大幅は1.03mを測る。貼床や土製置台等は見られない。下部の45号窯と窯体が重複し、先後関係は明らかである。天井部・焚口の保存は





第78図 44・45号窯跡実測図(縮尺1/40)

良好で原形を保っている。

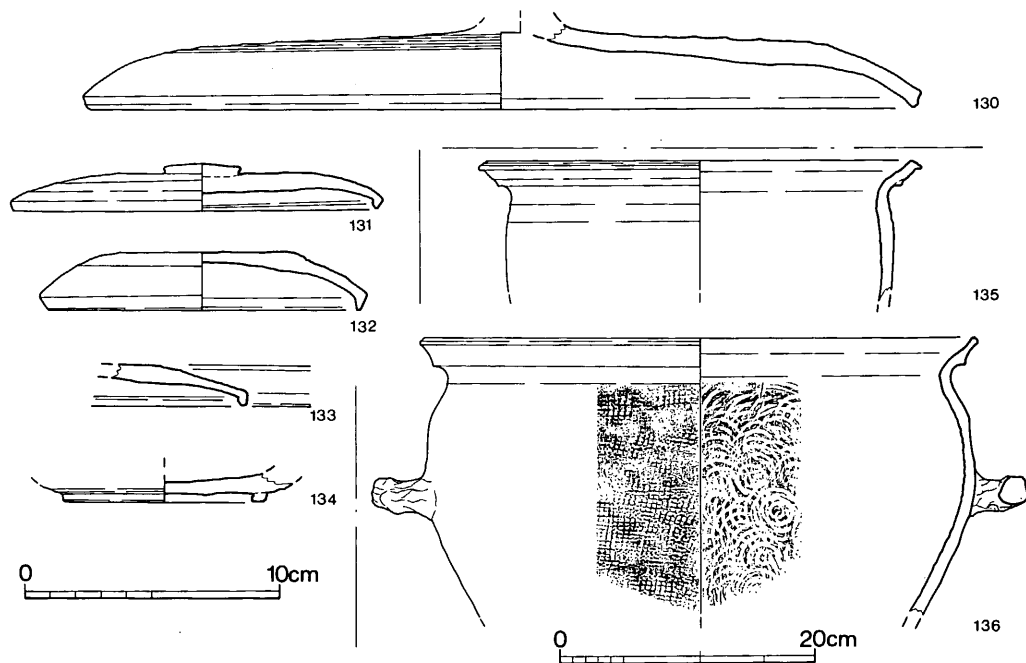
**燃焼部** 焚口の床面幅は0.85mである。天井直下の傾斜変換部までの長さは0.87mを測る。幅は変換部で0.85m、焚口から0.4m付近が最も狭く0.7mである。床面は平坦である。両側壁は内彎して立上る。焚口左側壁は花崗岩の角礫を用いて補強している。

**焼成部** 燃焼部の境から奥壁までの長さ2.28m、斜距離で2.52mを測る。床面のプランは左壁は中央でふくらむ胴張りであるが、右側は変換部から0.3m付近で外側へとび出す。この部分での床幅は1.03mである。壁は火を受け方は他の壁と変化は見られず、構築時の崩れであろう。中央部での床幅約1mで奥壁に向って狭まる。奥壁は直線に近く、側壁との境に角をもつ。床面の傾斜角は変換部から中央部までは15°、中央から奥壁までは32°である。横断面形はカマボコ型を呈し、天井まで高さは中央部で0.7m、奥壁から0.6mの位置で0.45mである。45号窯の煙道から焚口にかけて天井は一部剝落しており、凹凸がある。

**煙出し部** 奥壁の基底部から10°内傾させた筒形の煙道であり、基底部からの高さ1.07m、径は上端0.32m、下端で0.35mである。煙道の平面形は円形を呈するが若干角がある。煙道上部には長軸1.1m、短軸0.7m、斜面上部側の深さ0.6mの隅丸長方形の掘り込みがある。煙道の上端では把手付の甕の口縁部が出土した。

**前庭部** 焚口から約1.2mほどつづいて崖になる。45号窯跡の燃焼部を埋めてかためている。

**焚口南側土壇** 最近の崩壊も認められ、全容性格は不明である。



第79図 44号窯窯内・煙道部出土土器実測図 (縮尺1/3・1/6)

**出土遺物** (図版52、第79図)

窯内の埋土中と煙道部からの出土である。

窯内

**蓋** (130) 口径32.8cmに復原できる。天井部外面は、回転ヘラ削り調整

**蓋杯・蓋** (131~133) 131は焚口出土。天井が低く、口縁は内傾する。132はつまみをもたない。外天井部は未調整。

**甕** (135) 口縁部は外傾し、端部をつまみ出す。器壁の摩滅が著しいが、外面に平行タタキ痕、内面に同心円文が残る。

煙道部

**蓋杯・身** (134) 高台は外底端のやや内側に貼付される。底部外面中央は回転ヘラ削り調整。ヘラ記号がある。

**甕** (136) 二重口縁をなす。体部外面は平行タタキ痕、内面に同心円の当具痕が残る。

(7) 45号窯跡 (図版44・45、第78図)

44号窯の下部に重複して検出した窯である。標高135.4~138.4mの間に等高線に対して直交して構築されている。地山を削り貫いた地下式無階無段登窯である。天井部・煙道の一部は残っていない。床面の形態は、燃焼部最も狭く、焼成部中央部が幅広になるが、他の窯と比べて直線的である。45号窯と同様に側壁と奥壁の境は角をなす。主軸方位はN-88°-Wである。窯体の全長は3m、床面の最大幅は0.76mを測る。焚口、側壁の焼け締りはあまく、短期間の操業と考える。

**燃焼部** 焚口は床幅0.6mである。燃焼部は焼成部の床面での境は不明瞭であるが、両壁の遺存状態から判断できる。長さ約0.8m、幅は中央部で0.62mを測る。床面はわずかに傾斜している。両壁は内彎して立上り、高さ約0.6mを測る。

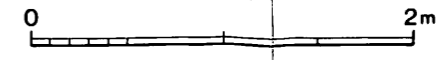
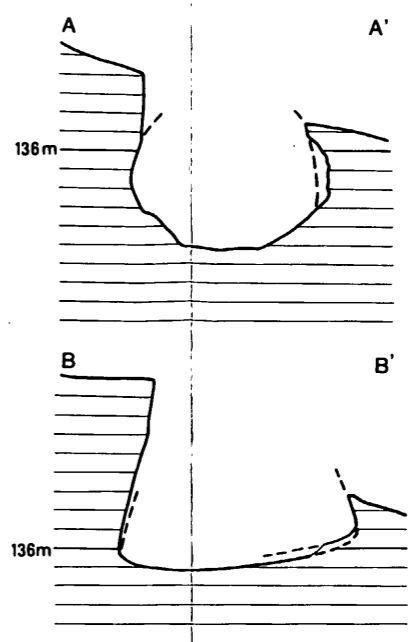
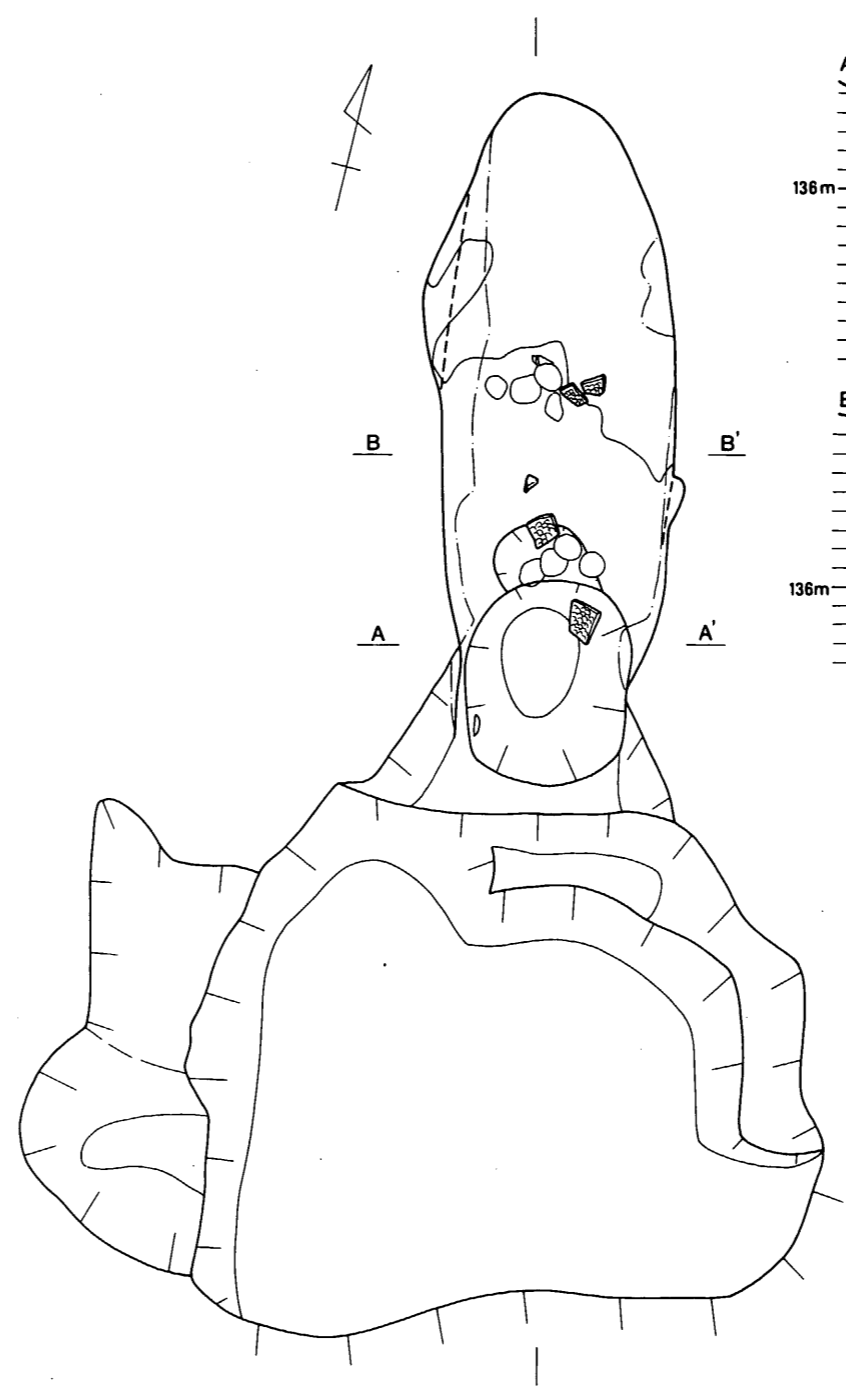
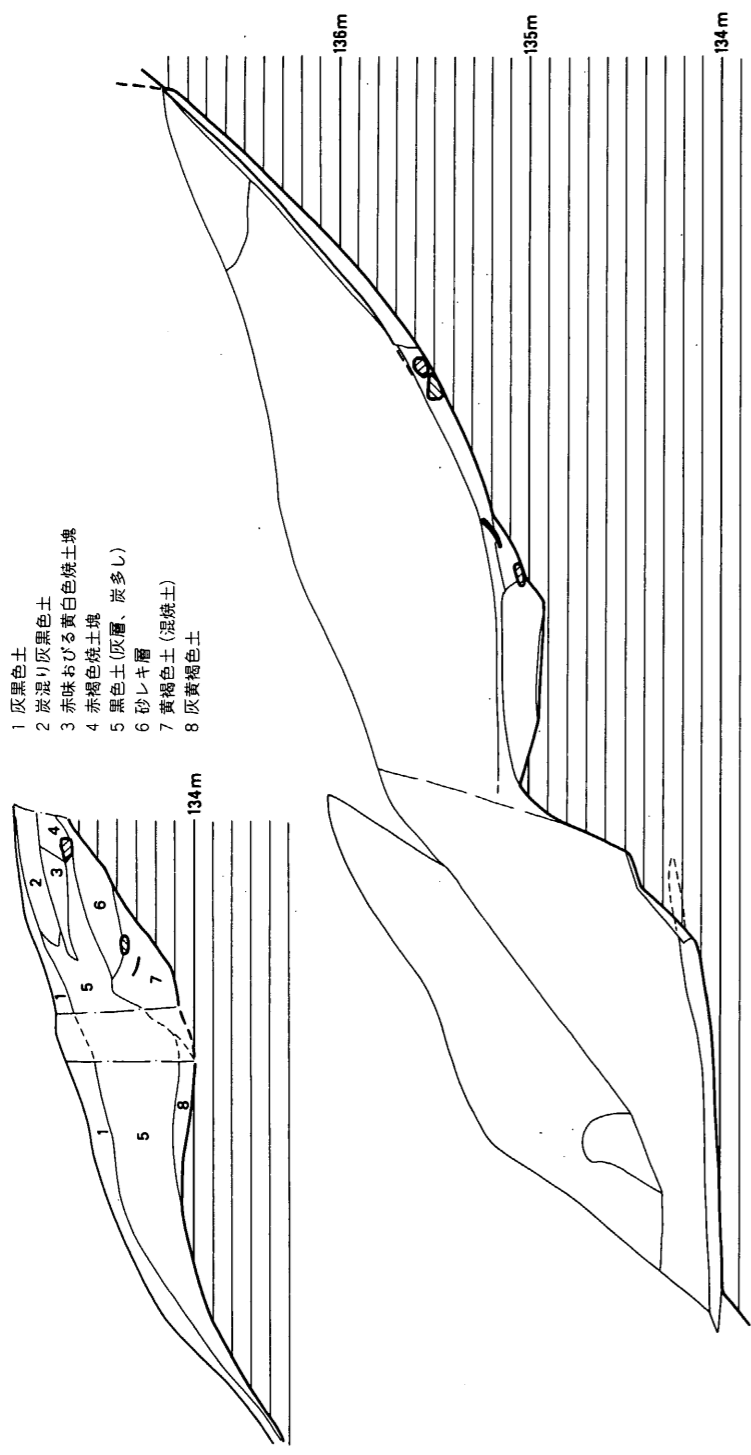
**焼成部** 燃焼部の境から奥壁までの長さに約2.2mを測り、床面の最大幅は0.76mである。奥壁幅は0.33mを測る。両壁はやや内傾し直線的に立上る。床の縦断面は直線的であり、15°~35°の傾斜角がある。

**煙出し部** 奥壁の基底部から8°内傾させた筒形の煙道である。中位付近を44号窯で破壊されている。基底部からの高さは約2mと他の窯に比べて非常に長い。

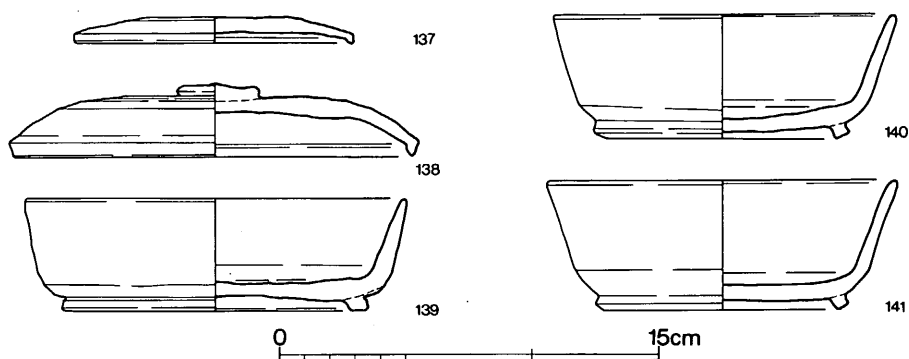
**前庭部** 焚口からほぼ直に広がり、幅2m程の略方形をなす。土壙状の掘込みがあるが明確なものではない。

**出土遺物** (第80図)

全て窯内から出土した。



第 81 図 46号窯跡実測図(縮尺 1/40)



第80図 45号窯出土土器実測図（縮尺1/3）

**蓋杯・蓋 (137・138)** 137は低く、平坦である。つまみはない。口縁部はやや外傾する。138は天井部に丸味をもち、口縁部は内傾する。

**蓋杯・身 (139～141)** 体部は直線的に延び端部は丸い。高台は外底端に貼付される。

(池辺)

#### (8) 46号窯跡 (図版46・47、第81図)

43号窯の北、斜面が凹地へと変換するあたりにある。主軸をN-14°-Wにとり、等高線とは斜交する。窯本体の標高は135～137mにあり、前庭部土壌の床面レベルは134mである。窯体の天井はすべて崩れ落ち、側壁も剝落が著しい。

**燃焼部** 床面に長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形を呈する大型の舟底状ピットがあり、さらに小ピットが重なる。この部分から焚口袖の反転部分までの長さ1.5mを想定できる。幅は0.9～1.1m。

**焼成部** 床面プランは長円形を呈し、最大幅は1.2mである。焼成部後半には径10～20cmの不整形粘土ブロックをモザイク状に敷きつめた貼床が遺存し、剝離・転落したブロックが散在する。断面形は不明だが、床面が傾く雑な造りである。斜長は2.8m、傾斜角は38°を測る。

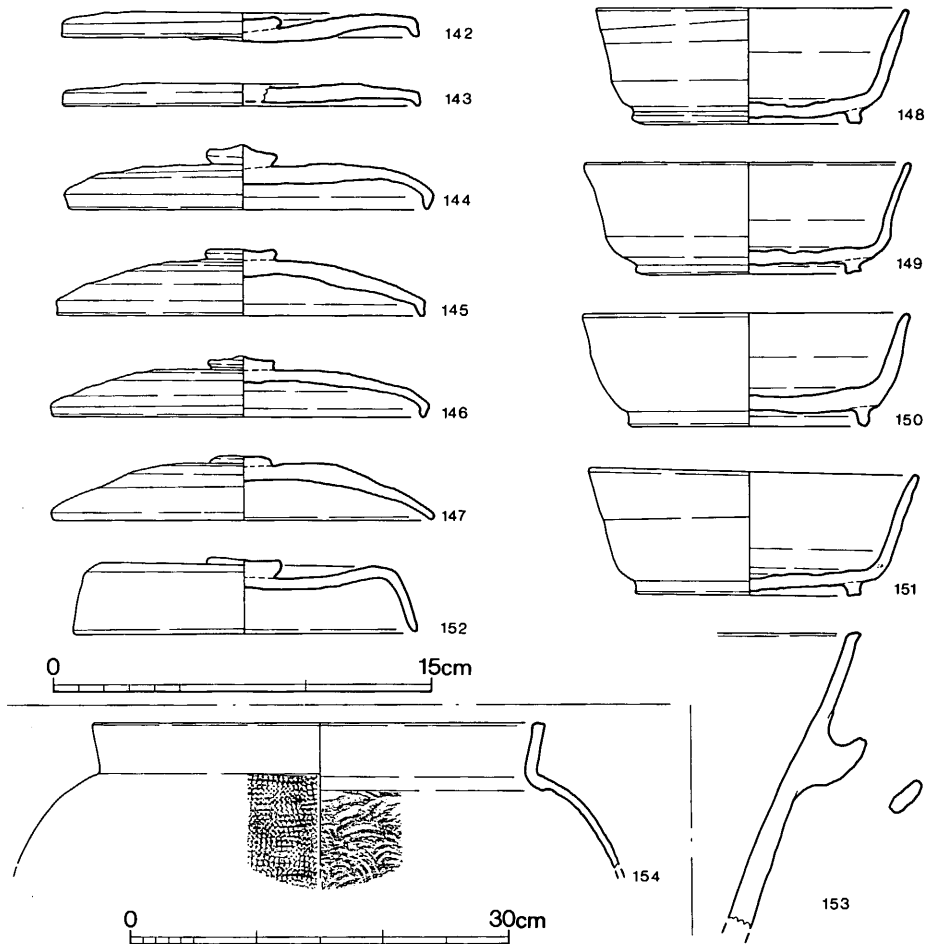
**前庭部** 長軸4m、短軸2.66mの不整形土壌が前庭部を潰す形で存在し、前庭部床からの深さは約1mある。埋土は炭等を含む土層が大部分で、中に貼床ブロックを含む。

**灰原** 窯の前庭部前面にわずかに広がる。部分的ではあるが、42～45号窯から薄く続く灰の上面に被る状態を観察できた。

#### 出土遺物 (図版53・54、第83図)

窯内埋土中 (153・154)、前庭部 (142～152)、灰原 (155～182) より出土している。

窯内



第82図 46号窯窯内・前庭部出土土器実測図(縮尺1/3・1/6)

**短頸壺 (154)** 口縁部はほぼ直立し、端部に水平の面をもつ。外面に格子タタキ、内面に同心円の当具痕を残し、その後の調整を施していない。

**把手付鉢 (153)** 体部は直線的に開き、口縁端部が小さく外方に引き出される。把手は扁平。前庭部

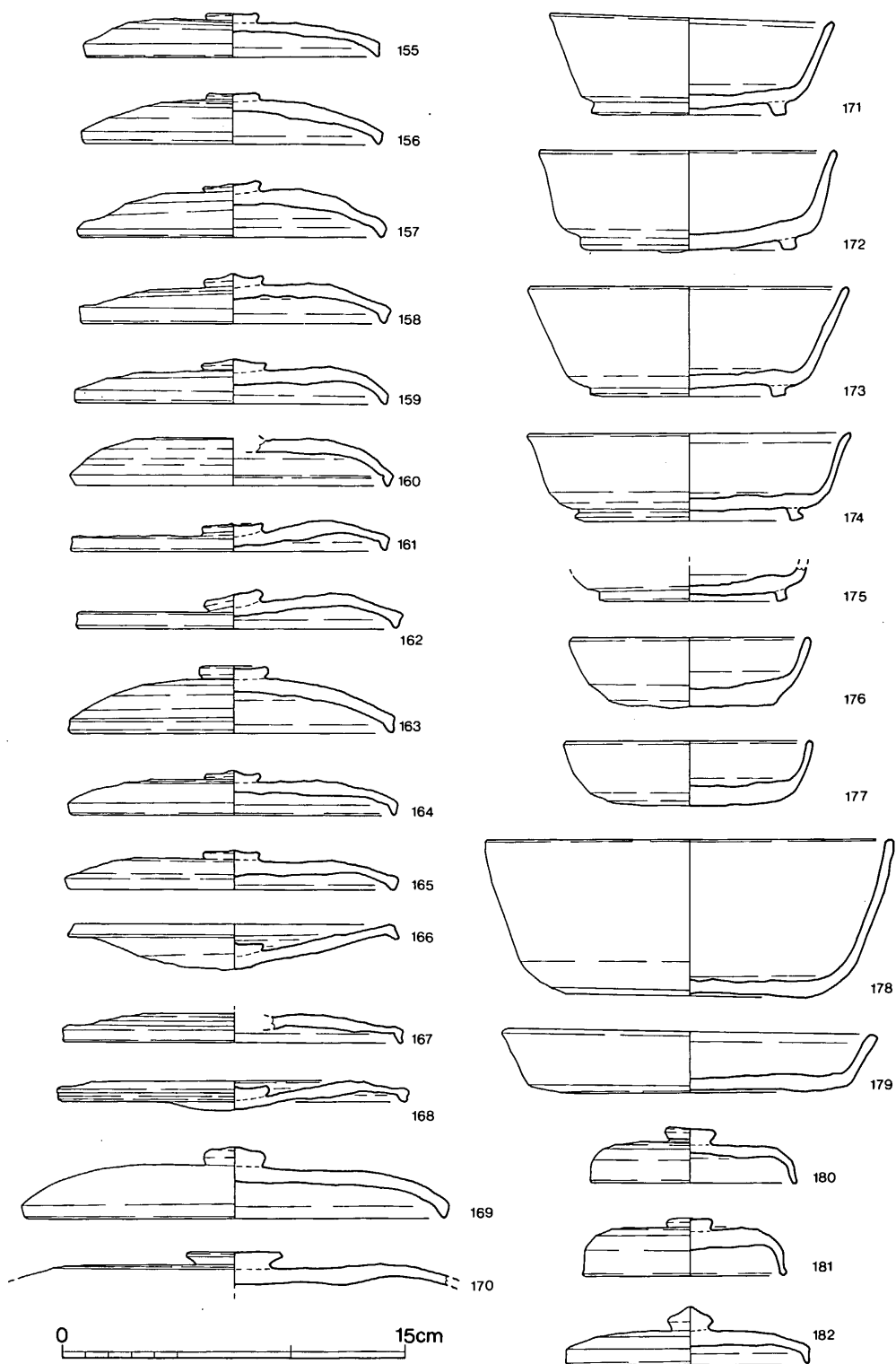
**蓋杯・蓋 (142~147)** 口縁部が断面三角形に近いが、外面では天井部との境が不明瞭である。つまみは大きく、扁平。43号窯出土品と同様である。

**蓋杯・身 (148~151)** 庭部からの立上りがやや丸味をおびるが、高台の形状は整っている。

**短頸壺・蓋 (152)** 口縁部を丸くおさめる。天井部外面はヘラ削りで仕上げる。

灰原

**蓋杯・蓋 (155~170)** 40~42号窯灰原の出土土器に似る。



第 83 图 46号窯灰原出土土器实测图 (縮尺 1/3)

b : ……155～166・169

c : ……167・168

ただし、b類とした155・159はa類に近い。a類の減少は土器群の後出性を示すといえる。

**蓋杯・身** (171～177) 高台は底部外縁をやや離れて位置し、形状は断面四角形になる。

高台を有さない2点は底部が異様に厚く、口縁部へと内彎しつつ移行して、端部を丸くおさめる。特異な形態の土器である。

**鉢** (178) あるいは大形の杯身と呼ぶべきかも知れない。体部は内彎気味に立上り、口縁端部が内傾する面となる。底部全面をヘラ削りで仕上げている。

**皿** (179) 口縁端部に面取りを施し断面方形に仕上げている。

**蓋** (180～182) 小型壺の蓋であろう。180・181は天井が高く、口縁部が小さく外開きとなる。182は蓋杯蓋と同様な形態の本体に擬宝珠状のつまみを付す。 (飛野)

#### 43～46号灰原

ほとんど流出と斜面の崩壊で残っていない。斜面の凹部に堆積した灰原と、裾部で確認した灰原から出土したものを図示した。

#### 出土遺物 (図版54、第84・85図)

**蓋杯・蓋** (183～192) 183～187は天井部が低く、平坦である。188の天井部は高く、体部との境が明瞭である。189～192は天井部にやや丸味をもつ。口縁部はやや内傾させ、端部は尖る。187の口縁部は外傾する。

**蓋杯・身** (193～197) 体部は直線的に外上方へ延びる。底部は平坦で、外底端よりやや内側へ高台が貼付される。

**皿** (198) 口縁端部を外傾させる。焼け歪で底部が下がる。

**短頸壺・蓋** (199～202) 口径9.9cm～14.4cmまである。天井部は水平で、199～201の口縁部は外傾する。202は直立する。外天井部は回転ヘラ削り調整。

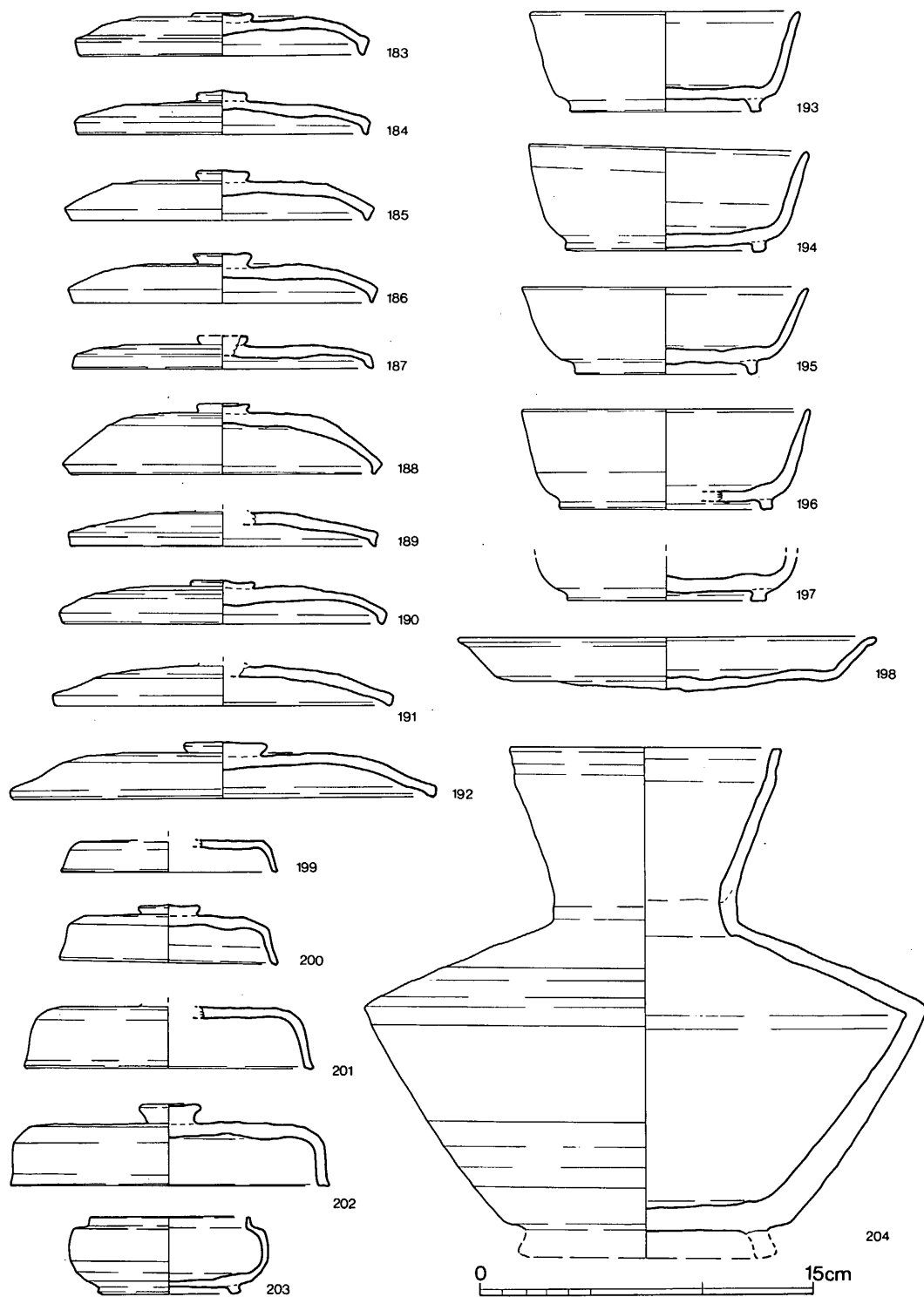
**短頸壺** (203) 広口の小形品で、扁球形の体部に短い口縁部がつく。

**長頸壺** (204) 頸部は上外方に立上り、口縁部でやや内側に変化させる。肩部と体部の境は鋭く屈曲させる。

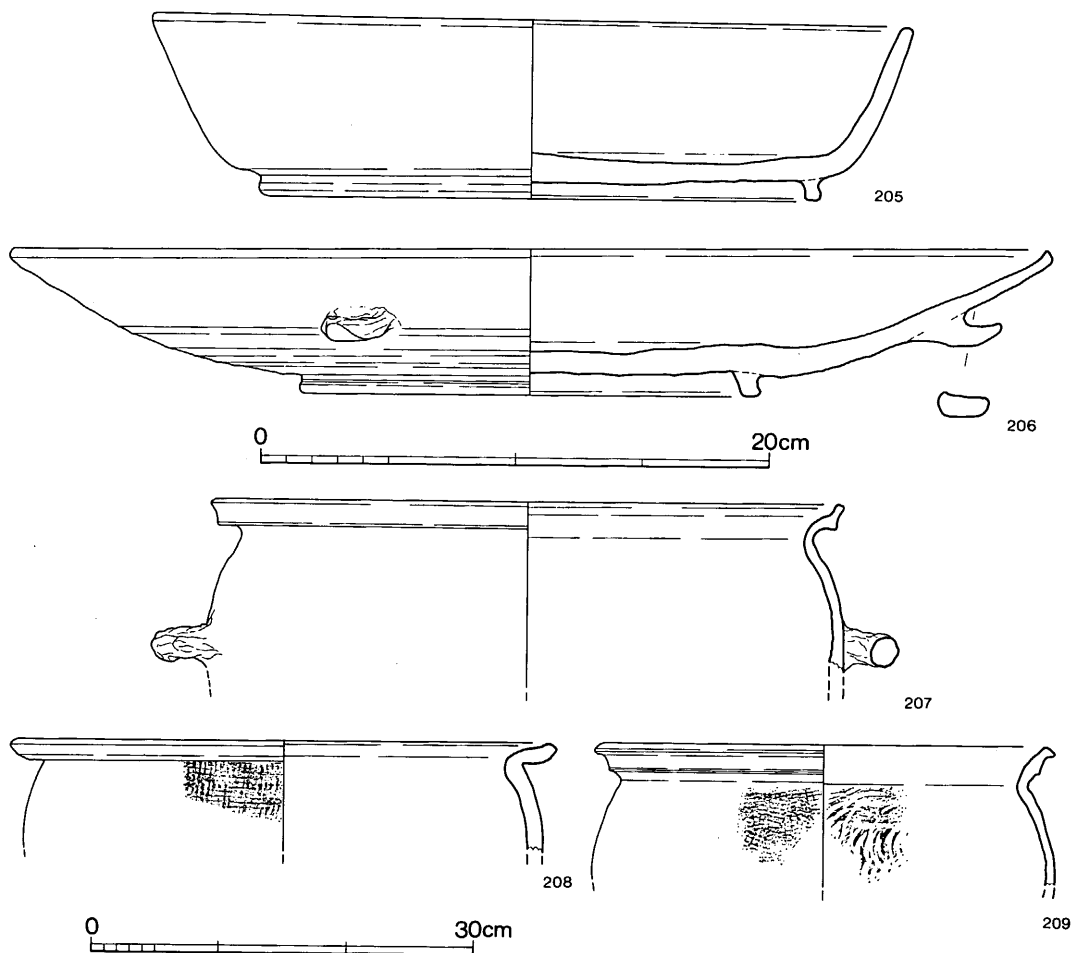
**盤** (205・206) 205は器肉が厚い。体部は直線的に上外方へ延び、端部は丸い。外底端やや内側に直立する高台を貼付する。外底部は未調整。206の体部は浅く開き、口縁端部は上方へつまみ出される。把手は3個。外底部は回転ヘラ削り調整。

**甕** (207～209) 207は二重口縁を呈する。208は急角度を反転する口縁部をもつ。体部外面格子タタキ。209は口縁端部を外方へつまみ出す。外面格子タタキ。内面同心円当具痕。





第 84 图 43~46号窯灰原出土土器実測図①(縮尺 1/3)

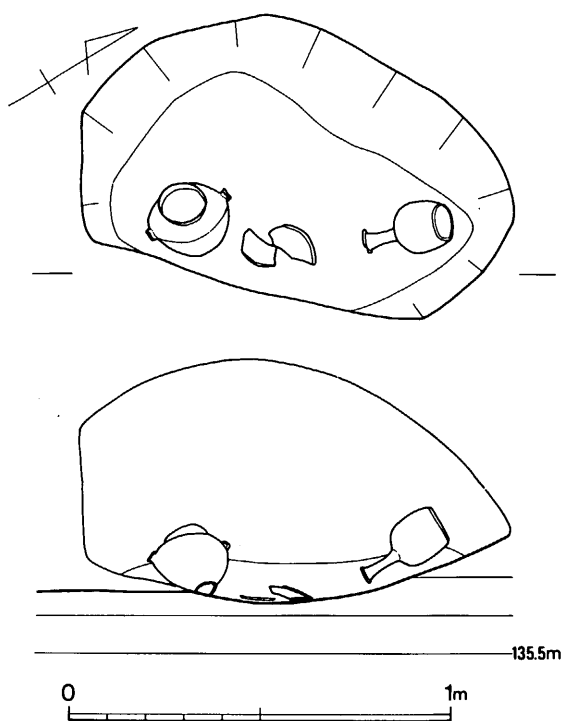


第 85 図 43~46号窯灰原出土土器実測図② (縮尺 1/3・1/6)

(9) 44号南側土壇 (図版45、第86図)

44号窯跡の焚口から南側約6mの標高135.7mの地点で検出した。さらに南側の42号窯とは約16m離れている。平面プランは隅丸長方形を呈し、斜面を抉るように掘られている。1.1m×0.7m程の大きさで、斜面上部側の深さは約0.5mを測る。埋土には炭・灰などは混入は見られず、地山と同様の土で埋っていた。中からは、われた杯蓋・把手を欠損する短頸壺・生焼けの長頸壺がそれぞれ1点出土した。祭祀に関連した遺構と考える。

出土遺物 (図版54、第87図)



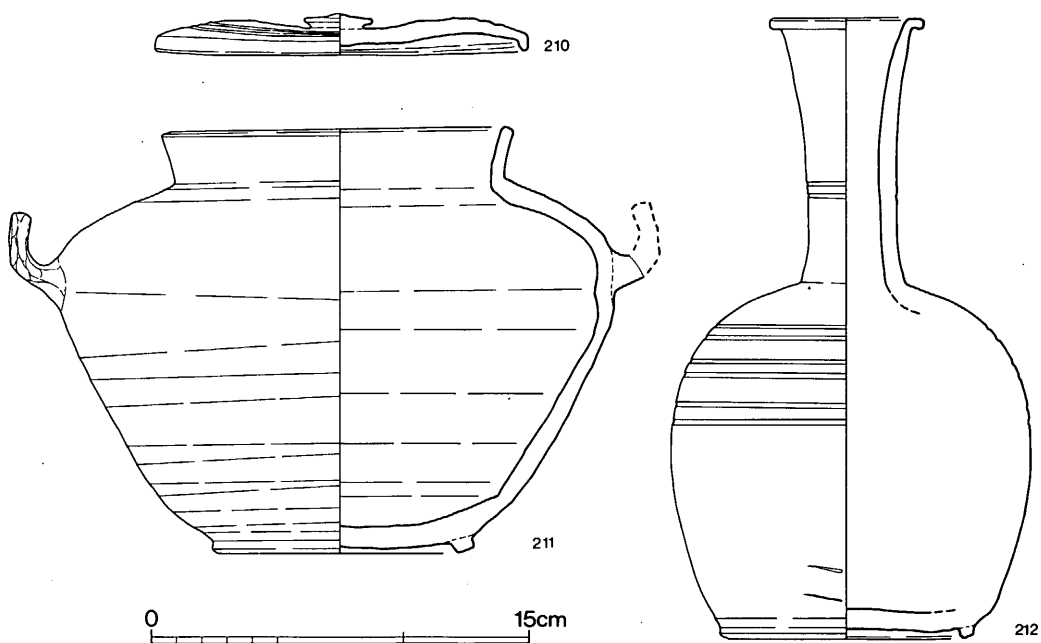
第 86 図 44号南側土城実測図 (縮尺 1/20)

**蓋杯・蓋 (210)** 天井部が低く、口縁部は直立する。外天井部は回転ヘラ削り調整。2条の凹線が巡る。やや歪みで天井部が下がる。

**短頸壺 (211)** 口縁はやや外傾し、端部は丸い。肩部と体部の境が最大径になる。体部は底部に向ってすぼむ。外底端に短い高台を貼付する。体部下半は回転ヘラ削り調整。把手の片方が折損する。

**長頸壺 (212)**

口縁部やや開き気味で、端部を外につまみ出し平坦面となる。体部は丸味をもち、底径は大きい。頸部中央と体部上部に2条一對の凹を巡らす。生焼けて内外共風化著しく調整は不明。



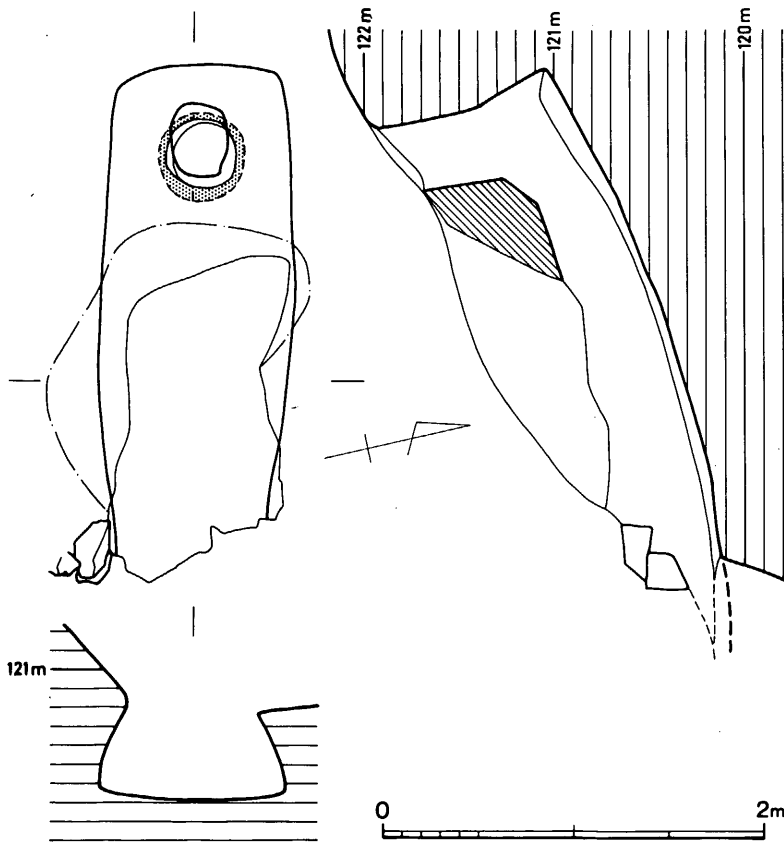
第 87 図 44号南側土城出土土器実測図 (縮尺 1/3)

(10) 47号窯跡 (図版49、第88・89図)

40～46号窯跡のある地点とは約40m北側の斜面下部から48号窯と並んで検出した。周囲の斜面は地滑りで崩壊しているが、窯の部分はかろうじて残っていた。標高120.1～122mの間に斜面の等高線に対して直交して構築されている。斜面裾部との比高は、約6mである。窯は地山を割り貫いた地下式無階無段登窯である。燃焼部と天井部の大半が崩壊している。床面の形態は燃焼部が最も狭く、焼成部はほぼ一定の幅で奥壁まで続く長形状を呈する。窯の現存長は2.7m、最大幅1mを測る。主軸方位はN-76°-Wで、焚口は東に開く。

**燃焼部** 傾斜変換部は不明瞭であるが、床面が広く変化する地点までが燃焼部と考える。ここまでの残存長は0.55m、幅は最も狭まる所で0.8mを測る。両壁は外傾し、床面は傾斜している。焚口左壁は花崗岩の角礫を用いて補強している。

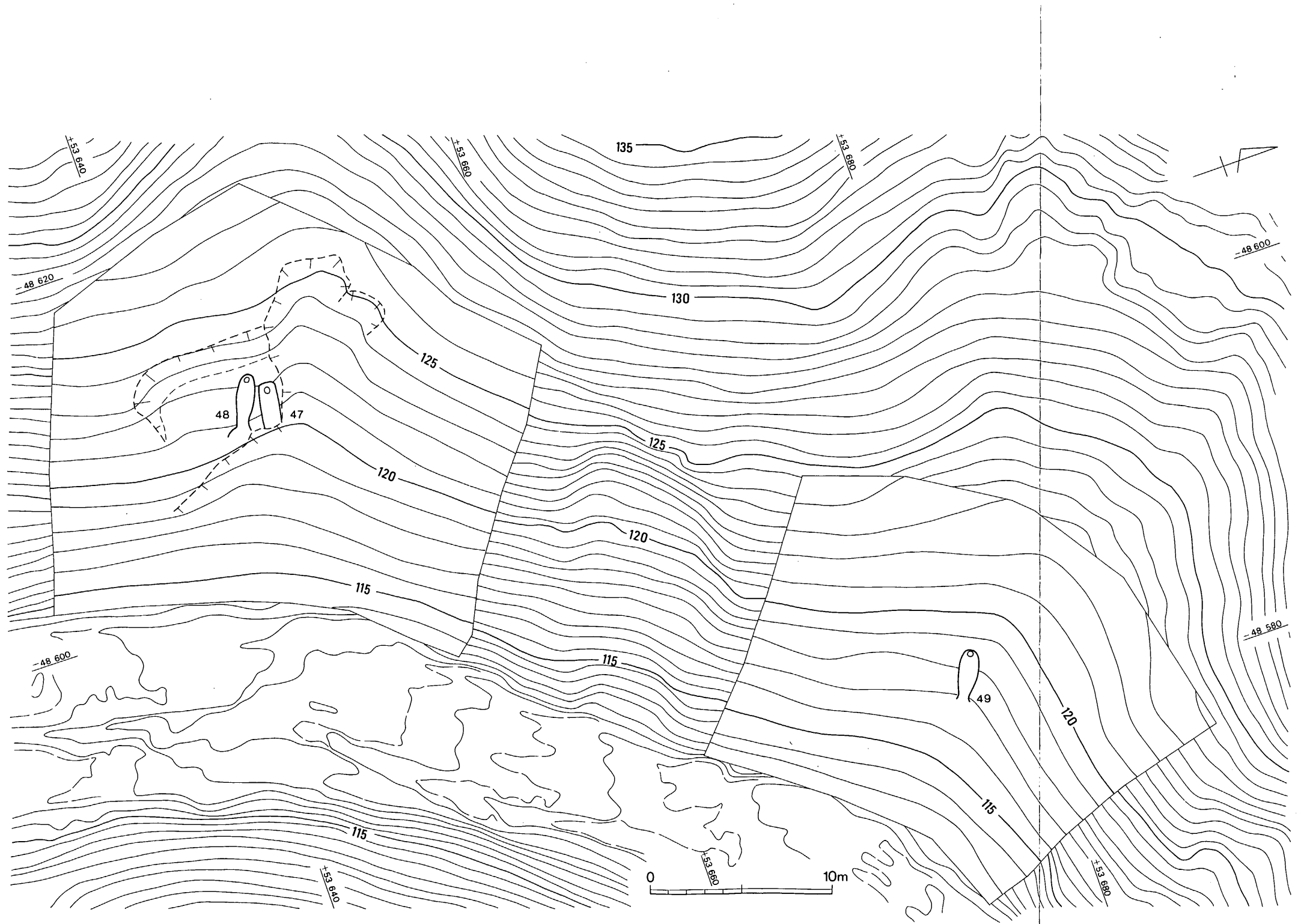
**焼成部** 燃焼部との境から奥壁まで長さは、2.15m、斜距離は2.33mである。床幅は中央部



がややふくらむ。奥壁は両側壁から直につくられる。奥壁幅は0.85mを測る。両壁は内彎し、本来の高さを復原すると0.7m程であろう。床面の傾斜角は15°～30°である。

**煙出し部** 奥壁の基底部からの内傾度は崩壊のため明確ではないが、現状では約15°を測る。平面形はやや角をもつ円形を呈する。基底部からの現高は0.95mを測る。

第89図 47号窯跡実測図 (縮尺1/40)



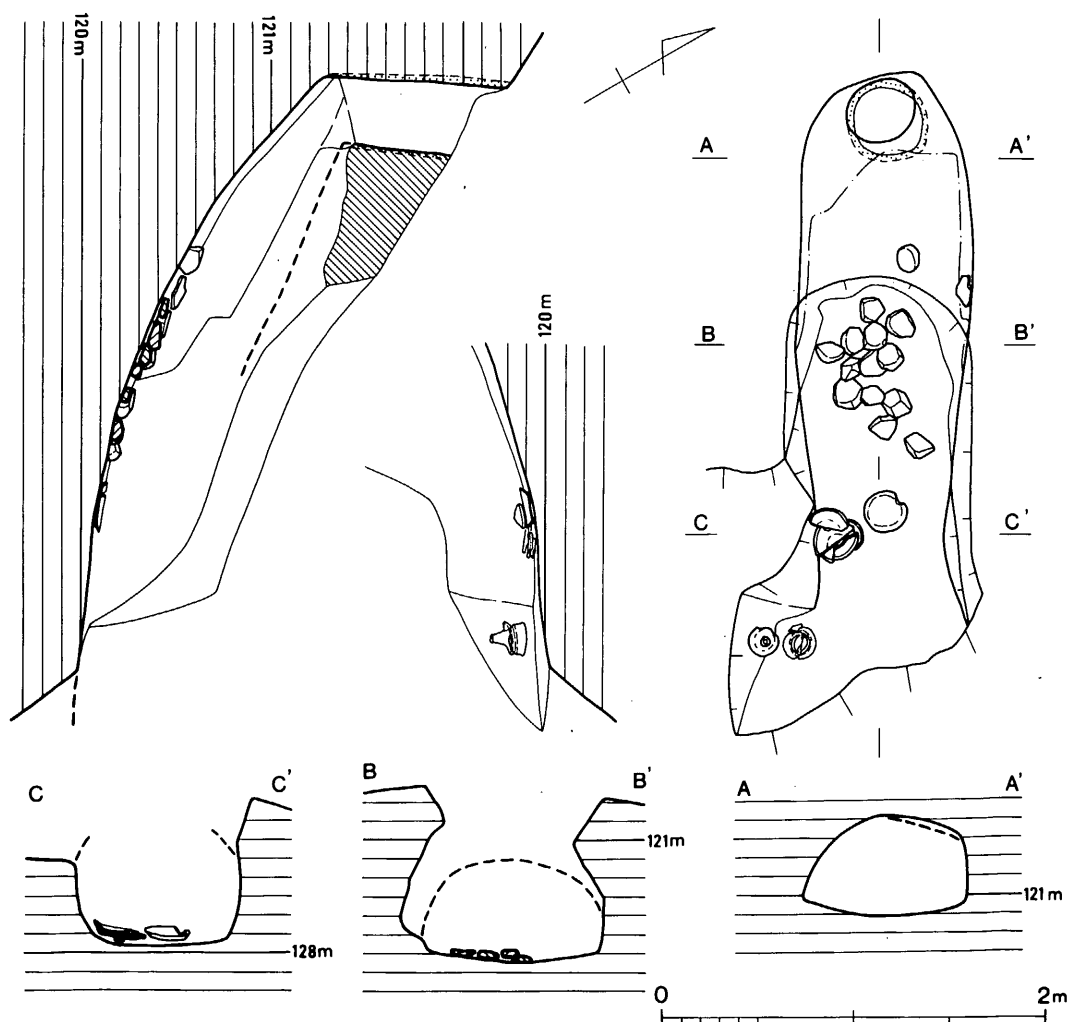
第 88 図 47~49号窯跡配置図 (縮尺 1/250)

## 出土遺物 (図版54、第91図)

蓋杯・蓋 (213) やや変形する。天井は低く平坦である。口縁部は直で端部は丸い。外天井部は回転ヘラ削り調整。内外面に重ね焼きの色の変化が見られる。

## (11) 48号窯跡 (図版49、第90図)

47号窯跡よりやや高位置にある。標高120~122.5mの間に等高線に対して直交して構築されている。前庭部の一部と天井部の大半が崩壊している。窯は地山を削り貫いた地下式無階無段登窯である。形態は燃燒部が最も狭く、焼成部中央が幅が広い胴張りを呈するが、きれいな弧



第90図 48号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

は描かず直線的である。窯の主軸方位は、 $N-62^{\circ}-W$ である。窯体の全長は2.86 mを測る。

**燃烧部** 焼成部との境は不明瞭である。床面幅の変換点まで燃烧部とすると、長さ0.45 m、床幅は中央で0.7 mを測る。右壁が崩壊しているため焚口幅は不明である。床面は緩く傾斜する。

**焼成部** 変換点から奥壁までの長さは2.45 m、斜距離は2.72 m、最大幅は焼成部中央で0.91 mを測る。焼成部の平面形は左右対称ではなく、左壁が直線的で短い。床面の傾斜角は $15^{\circ}\sim 40^{\circ}$ である。中央部で14個の土製置台を検出した。

**煙出し部** 奥壁の基底部から $4^{\circ}$ 内傾させた筒形の煙道で、基底部からの高さは0.95 mである。平面形は0.35 mを円形を呈する。

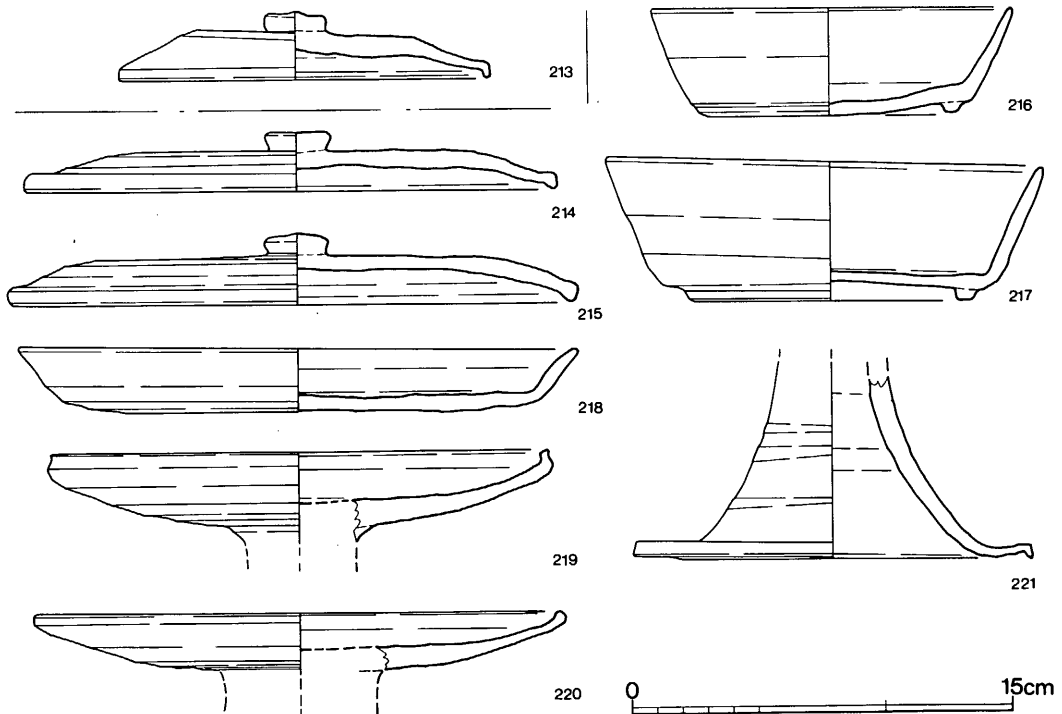
**前庭部** 燃烧部前面は崩壊して全形は不明である。

### 出土遺物（図版55・第91図）

窯内の焼成部と燃烧部の境付近床面から皿・杯蓋、焚口左側床面から高杯・杯身が出土した。窯内埋土中から数点出土した。

**蓋杯・蓋** (214・215) とともに20 cmをこす大形品である。天井が低く平坦である。口縁部は214が直、215はやや内傾する。外天井部は回転ヘラ削り調整。

**蓋杯・身** (216・217) 体部は直線的に立上り、端部は丸い。外底端のやや内側に高台を貼



第91図 47・48号窯出土土器実測図（縮尺1/3）

付する。

皿 (218) 体部・口縁部は外反し、端部は丸い。体部と底部の境は丸味をもつ。外底部は回転ヘラ削り調整。

高杯 (219・221) 219・220は杯部片である。219の口縁部は内傾する。220はわずかにつまみ出し丸くおさめる。221は脚部で大きく開く、脚端はやや外傾させ、端部は鋭い。

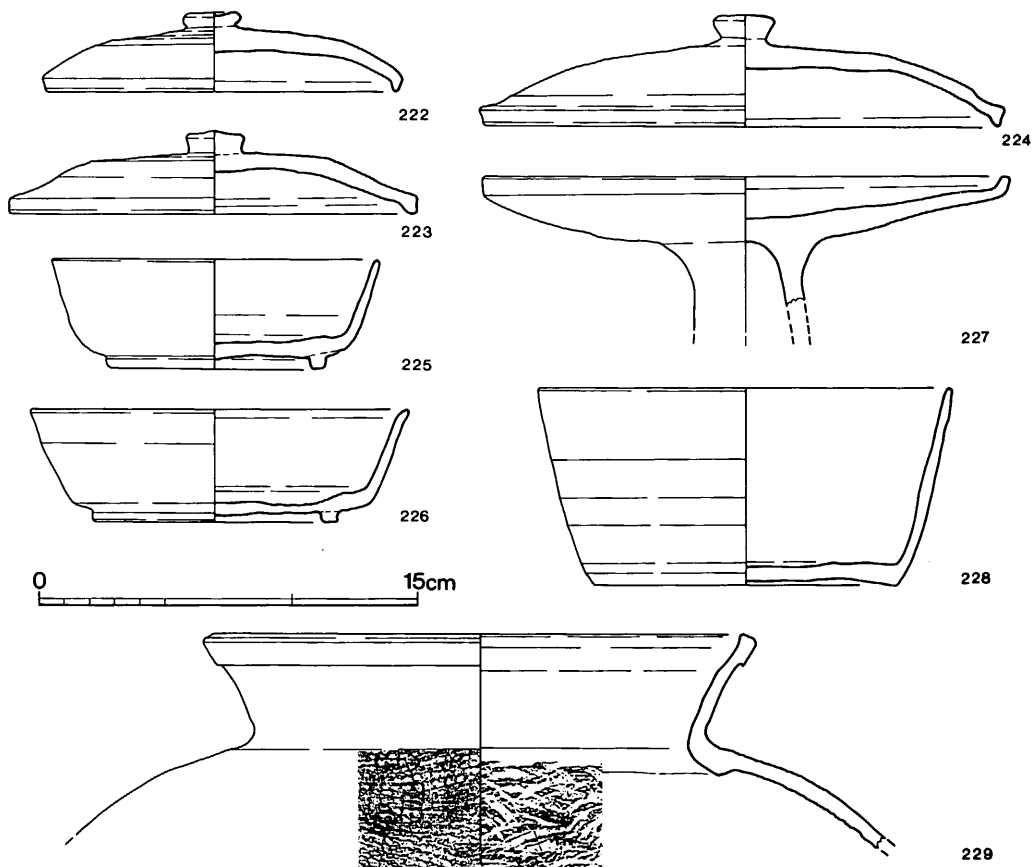
#### 47・48号窯周辺出土遺物 (図版55、第92図)

蓋杯・蓋 (222~224) 222は天井部はやや丸味をもち、口縁部は内傾する。223は天井は平坦で、口縁部は直に下がる。外天井部は回転ヘラ削り調整。224は大形品。

蓋杯・身 (225・226) 体部は直線的に上外方に延る。226の口縁部は小さく外反する。外底端の内側に高台を貼付する。

高杯 (227) 口縁部は小さく外反する。

杯 (228) 体部・口縁部は直線的に立上る。体部と底部の境は明瞭で、底部はやや上げ底と



第92図 47・48号窯周辺出土土器実測図 (縮尺 1/3)



なる。体部下位・外底部は回転ヘラ削り調整。

**甕 (229)** 口縁部は断面長方形をなす。体部外面に格子タタキ痕、内面に同心円文当具痕を残す。

(12) 49号窯跡 (図版50、第94図)

B-1 地区からつづく谷は約120m付近で、南西に屈曲する。この地点の西側斜面下部で検出した窯である。47・48号窯とは北に約40m離れる。

標高118.8~121.2mの間に等高線に直交して構築されている。天井部の半分と煙道上部が崩壊する。窯は地山を削り貫いた地下式無階無段登窯である。床面の形態は、焚口が最も狭く、焼成部中央まで直線的に広がる。ここから奥壁までは若干すぼまり、奥壁との境は角をなす。主軸方位はN-56°-Wである。窯体の全長は、2.8mである。

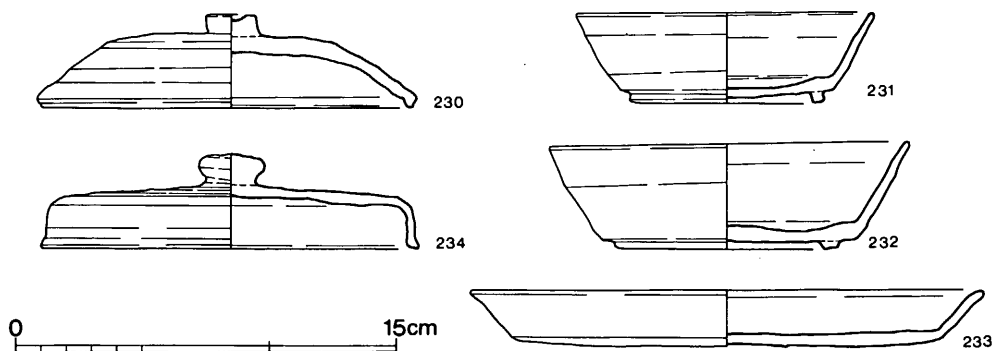
**燃烧部** 焚口の床面幅は0.7mであり、床面は緩く傾斜する。長さは0.4m、幅は中央部で0.68mを測る。焚口から前庭部にかけて、主軸のやや右寄りの床面に楕円形のピットがある。

**烧成部** 燃烧部の境から奥壁までの長さは、2.35m、斜距離は2.55mを測る。最大幅は1.05mである。この部分での断面形は、両壁は内彎気味に立上り、天井は平坦で台形に近い。床面からの高さは0.4mしかなく非常に低い。床の傾斜角は、中央部までは約10°で中央部から奥壁までは約40°と急である。

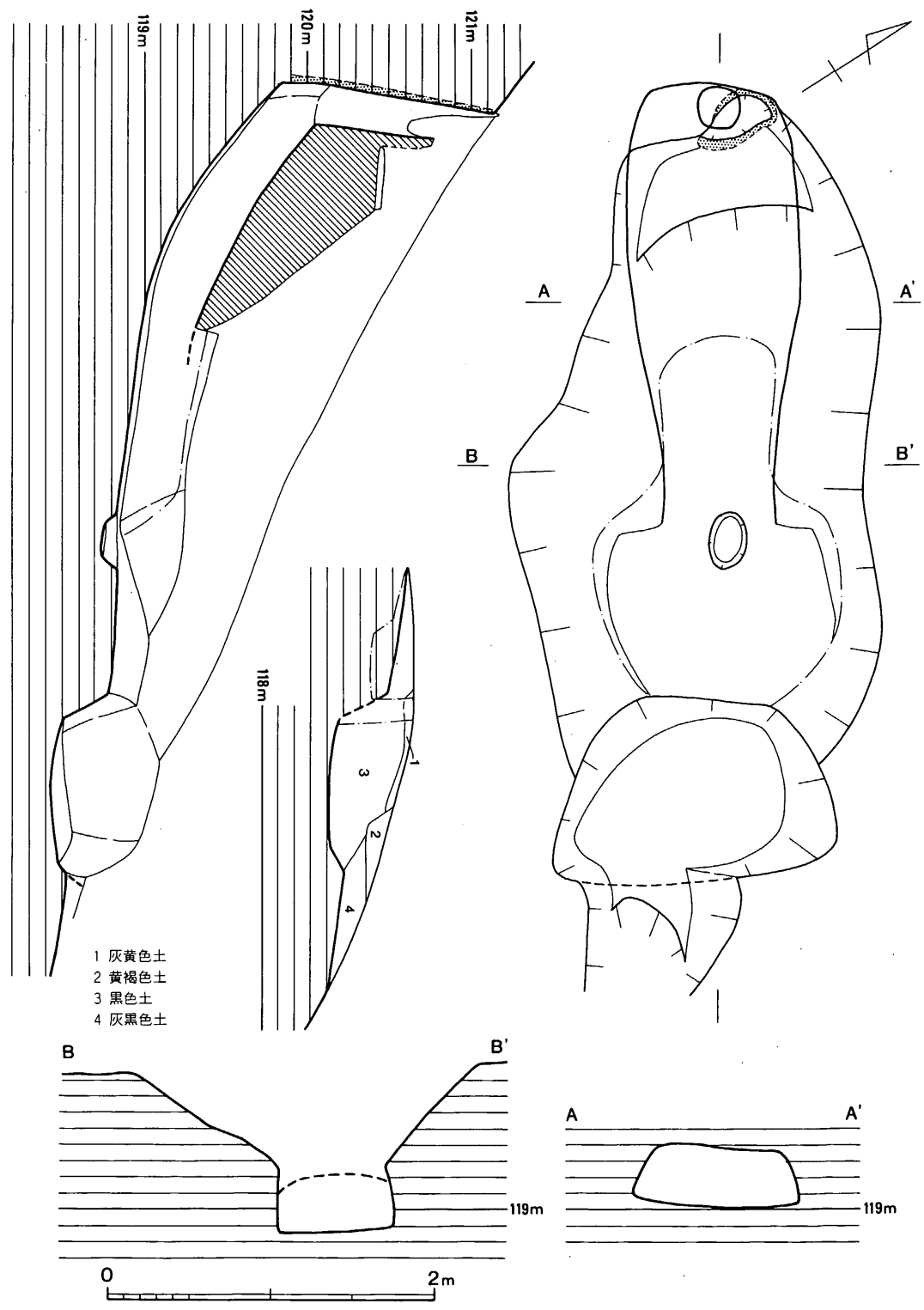
**煙出し部** 奥壁の基底部から約10°内傾させた筒形の煙道である。基底部からの高さは1.3mある。煙道の平面形は隅丸方形を呈する。

**前庭部** 燃烧部前面に両壁から連続させて方形に掘削した前庭部で、長さ約1m、幅約1.5mを測る。床面はわずかに傾斜する。

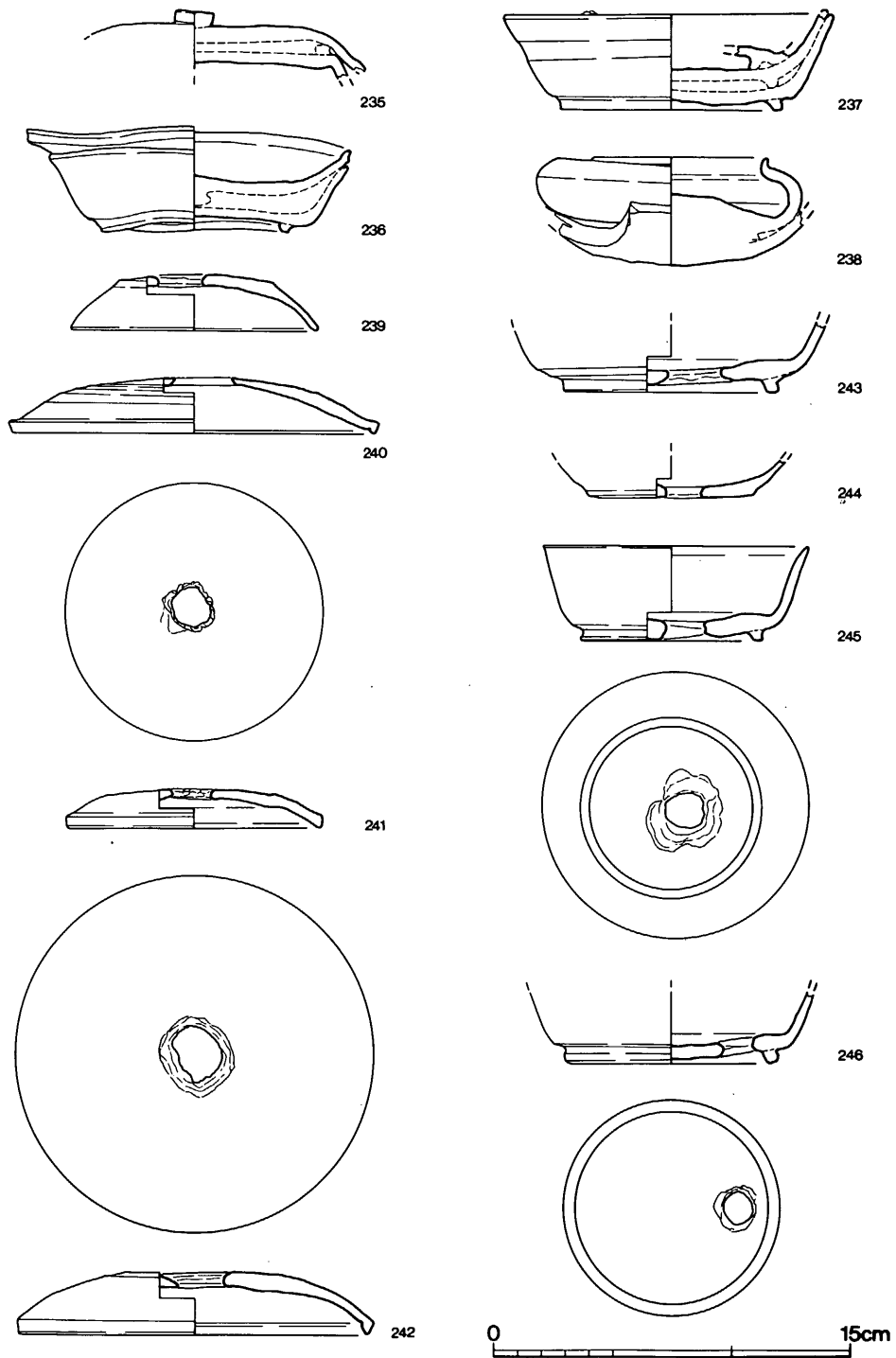
**前庭部土壌** 前庭部前面に掘り込まれた不整隅丸長方形を呈する土壌である。長さ1.1m最大幅約1.7m、深さは約0.6mである。内には炭混入の黒色土が堆積していたが出土土器はほとんど



第93図 49号窯灰原出土土器実測図 (縮尺 1/3)



第 94 图 49号窑跡実測图 (縮尺 1/40)



第95図 重ね焼き・穿孔土器実測図（縮尺1/3）

どない。以下は灰原へと続くが流出して残存しない。

### 出土遺物 (第94図)

前庭部土壌と斜面裾部の灰原からの出土である。

**蓋杯・蓋 (230)** 天井部が高く、口縁部は内傾する。前面を横ナデ、ナデで仕上げる。前庭部土壌からの出土。

**蓋杯・身 (231・232)** 体部は直線的に上外方へ延びる。体部と底部の境は明瞭である。外底端の内側に高台を貼付する。外底部はナデ調整。

**皿 (233)** 口縁部は小さく外反する。体部と底部の境は明瞭である。内面に火ダスキが走り、外底部に平行タタキ痕を残す。

**蓋 (234)** 短頸壺の蓋である。天井部は平坦である。頂部に高いつまみを有す。口縁部は直に下り、端部を外方へつまみ出す。外天井部は回転ヘラ削り調整。

### 重ね焼き・穿孔土器 (図版55、第95図)

**重ね焼き土器 (235～238)** 235～237は40～42号灰原出土。238は44号焚口左側土壌出土。235・236は異器種同志の組み合わせで、杯蓋・杯身。237は同器種同志の組み合わせである最上部にも重ね焼きの痕跡が残り、4段まで確認できた。238は短頸壺の二段重ねである。

**穿孔土器 (239～246)** 239～242は蓋杯である。239は焼成前の内外両面からの穿孔、240は焼成後外側からの穿孔。241は焼成後両側からの穿孔。242は焼成後内側からの穿孔である。243～246は杯身である。243は焼成前に内側からの穿孔。244は焼成前に両側からの穿孔。245は焼成後内側から穿孔。246は焼成前に両側から穿孔される。

### (13) 小 結

南北方向に走る谷の西側斜面(丘陵東斜面)で4群10基の窯跡を検出した。40～46号窯は斜面上部、47～49号窯は斜面下に位置する。41号・42号窯は保存状態がよくほぼ完存していた。それぞれに前庭部から連続する土壌をもち、操業時の作業場と考える。43号窯跡煙路上端部は甕の胴部が覆っており閉塞状態が把握できた。また祭に供された杯蓋を出土した。44号・45号窯は重複して検出された。窯の形態や出土土器からみて短期間の間に作り替えられたものと思われる。44号南側土壌での遺物の出土状態は、窯の祭祀を考える上で貴重な発見となった。46号窯の焼成部床面は粘土ブロックをモザイク状に敷きつめた貼床で今回の調査では例がない。

出土遺物から43～46号窯は8世紀中頃を中心に、40～42号窯・47～49号窯は8世紀中頃～後半にかけて操業されたものと思われる。(池辺)



第96图 J·I地区地形图(缩尺1/1000)

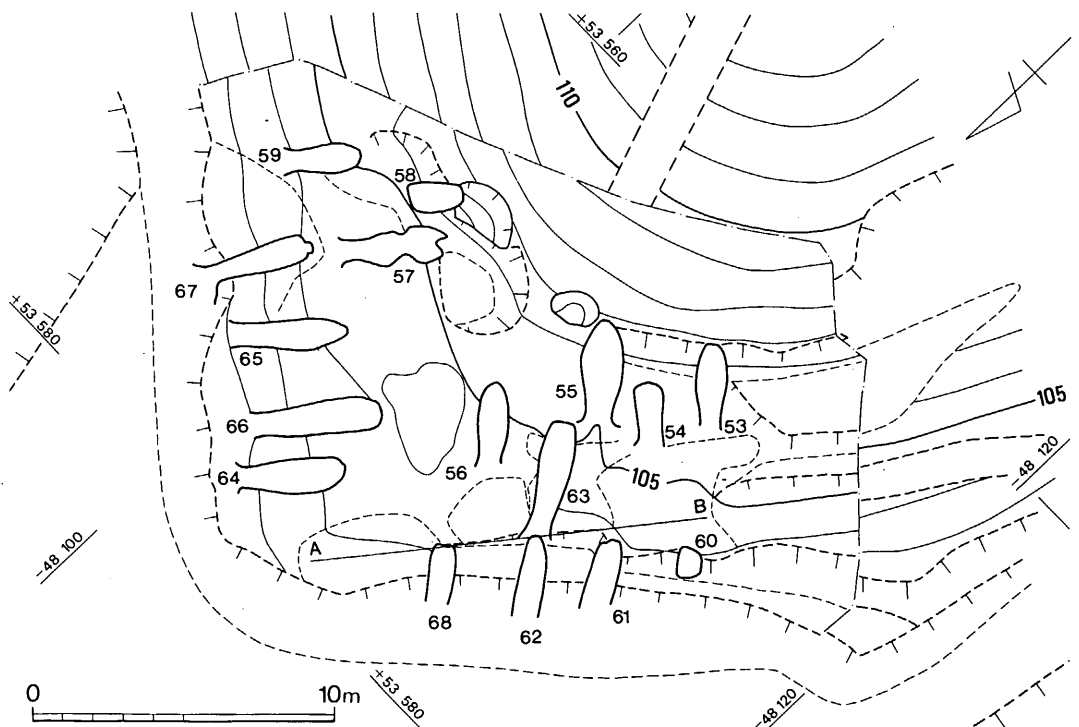
### 3. I 地区（長者原窯跡群）の調査

#### （1）調査の概要（図版56～58、第96・97図）

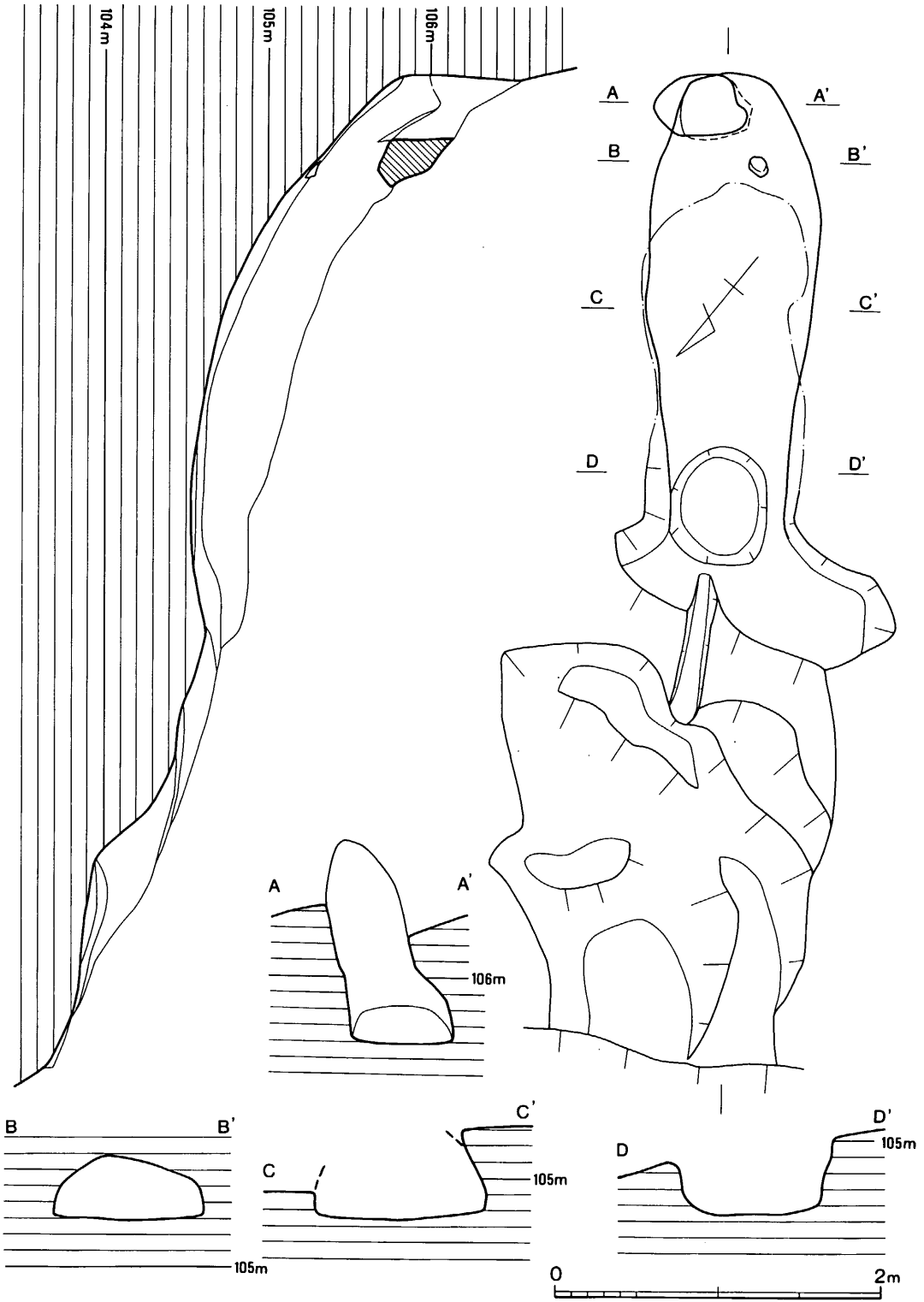
牛頸川流域最深部の可耕地である大野貯水池付近は大きく3つの谷に分かれ、それぞれを刻む小河川は山に阻まれて貯水池北で合流する。合流点のすぐ北、東へ細く入り込む小谷の入口南側斜面にI地点窯跡群は位置する。地形的には本谷から支谷へと鋭角的に屈曲する傾斜地であり、麓に法照寺が立地している。その本堂の造営にあたって窯跡群の裾部（灰原）の大部分が削平されており、かつ窯本体も里道等の地形改変によってかなり損傷を被っている。

窯跡群は谷口に向かう北面する斜面中腹にあり、牛頸川堤防との比高差は12～17mを有する。ほぼ30mの幅の中に上下2段、合せて16基という数は牛頸窯跡群中でも最も密集している地点の一つである。

53号窯から56号窯の前面にかけて浅い灰原が広く分布している。しかし、相互の切合いはさほどなく、先後関係としては55号灰原が54号灰原の上方に間層を挟んで堆積すること、そして63号窯の本体上に55・56号両窯の灰原が載っていることが判明したにすぎない。この重複部分

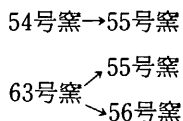


第97図 I地区窯跡配置図（縮尺1/250）



第 98 图 53号窟跡実測図 (縮尺 1/40)

の層序関係は以下のようになる（古→新）。



なお、53・54号、54・63号、55・56号窯のそれぞれの関係は不明である。

## （2）53号窯跡（図版61-1、第98図）

I地区窯跡群の南西端、等高線に直交して構築されている。前庭部は削平のために一部破壊され、天井も煙道付近の一部を除いて崩壊するが、当地区内の窯跡としては遺存状況が良好な部類に属し、先述したように灰原は54～56号窯等と一連の広がり有する。

本体は標高104～107m間に築造され、主軸はS-39°-E。

**燃焼部** 縦断面にみる右側壁の傾斜変換部から、船底状ピット前端までの約1.1mを想定できる。壁体の立上りは0.3～0.5m遺存し、床面の幅は0.7～0.8mを測る。床中央やや左側に長軸0.7m、短軸0.6m、深さ5cmの浅い船底状ピットがある。

**焼成部** 上記燃焼部端から奥壁までの斜長は約2.3m、傾斜角は32°を測るが、奥壁に近いほど急傾斜となる。床面の最大幅は約1.0m、煙道部直前での高さは約0.4mであり、そこでの横断面はほぼ五角形を呈する。

煙道部前の床面に、頂部を水平に近く成形した置台が1点遺存していた。

**煙出し部** 上端で0.4×1.0mの扁円形プランを有する。立上りは0.7mほど遺存し、約3°の傾斜をもって前傾する。煙道基部は中軸線より左へ扁し、煙道自体も左側へ傾斜して立上る。

**前庭部** ほぼ1/2を削平される。船底状ピットからやや離れた位置から、幅1.5m強、深さ0.1m弱の小規模な溝が6°の傾斜をもって階段状を呈する土壇へと続く。この前庭部土壇は幅約2m、深さもほぼ1m近く残っている。土壇内には厚さ0.4mの炭・焼土混りの黒色土層がほぼ前面に堆積していた。

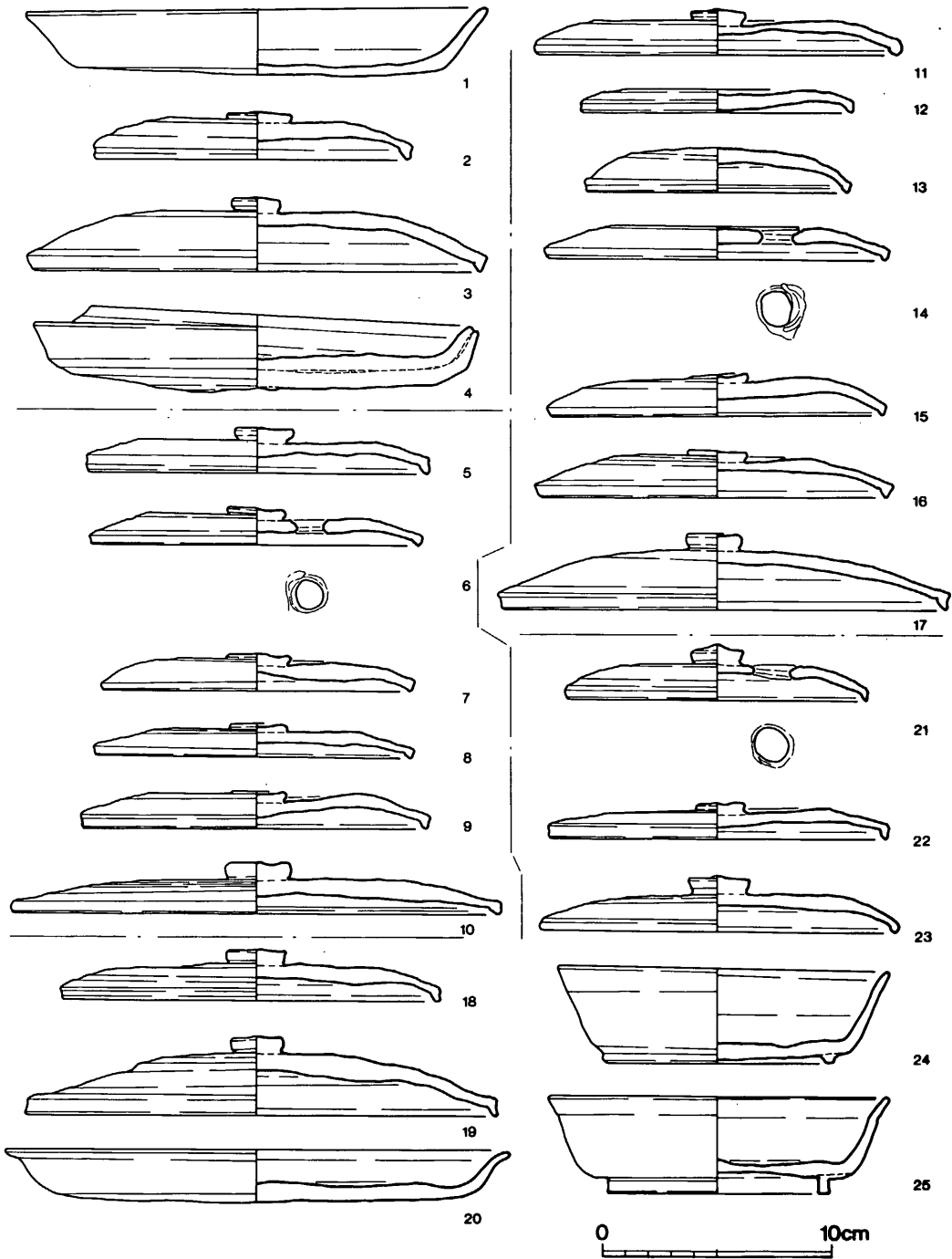
## 出土遺物（図版68、第99図）

窯内（1）、前庭部（2）、同ピット（4）、そして窯体南側表土直下から出土した例（3）も本窯に伴うものとして図示した。

**蓋杯・蓋（2・3）** 2は天井外面をヘラ削りし、口縁部外面を匙面状に整形する。3の天井外面はヘラ切りのままで、口縁部は断面三角形を呈し、やや内傾する。

**皿（1・4）** 1は底部外面をヘラ削り。4は2枚が熔着し、底部外面はヘラ切りのままである。





第99图 53~56号窯床面・前庭部・灰原出土土器実測図(縮尺1/3)

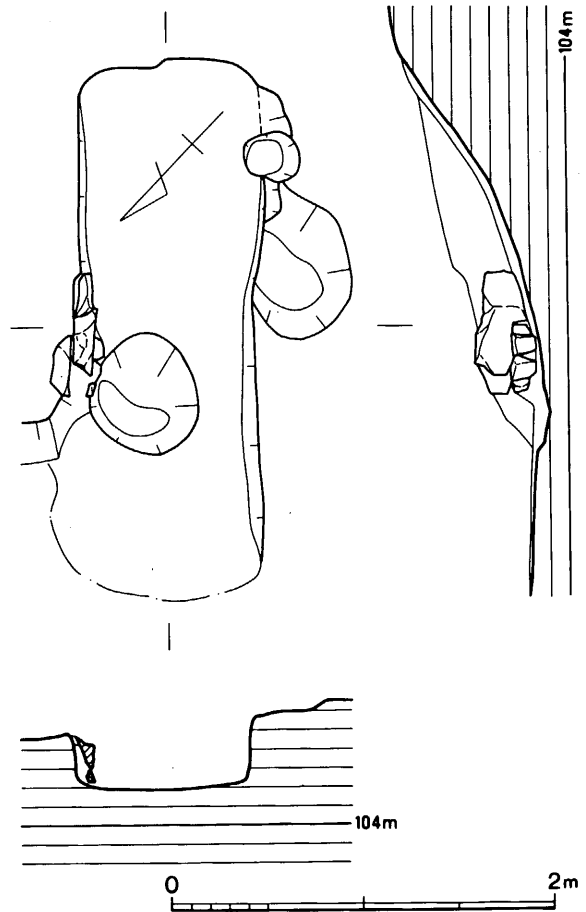
## (3) 54号窯跡 (図版61-2、第100図)

53号窯の北隣り、約1mを隔てて近接し、主軸がS-44°-Eと53号窯に近く、標高もほぼ同様である。窯体の上半部および前面の多くを削平され、遺存する床面は長軸で2.9mである。

**燃烧部** 右側壁では前庭部へ続く屈曲点が認められないが、左側壁のそこから石組端までの長さ0.7mほどの間を比定できる。石組部分で計測した幅は約0.8m、右側壁で0.3mの高さを遺存する。その前面左側に扁する舟底状ピットは径0.6m前後の不整円形で、深さ0.1mに満たない。

**焼成部** 左側壁石組端から斜長で1.3mまで遺存する。幅は0.9m前後。残存部の傾斜は30°を測り、復原数値はさらに大きくなることから傾斜度の大きい部類に属する。

**前庭部・灰原** 床面の一部のみ遺存する。中軸線に沿う灰原の土層の観察では里道にカットされる地点まで焼土等の混入した黑色土層が0.2mの厚さで堆積していた。

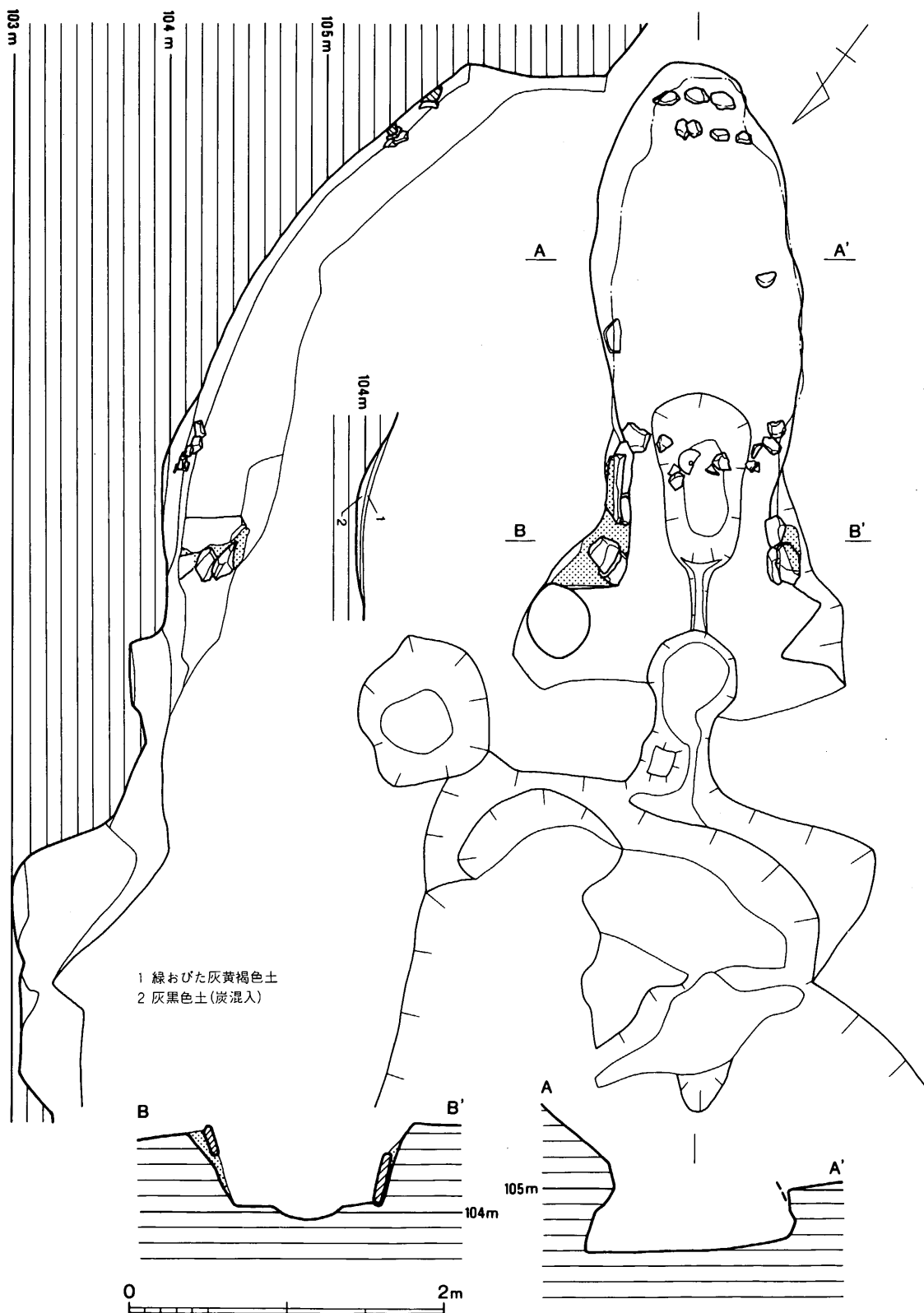


第100図 54号窯跡実測図 (縮尺1/40)

**出土遺物** (図版68、第99図)

窯内(5)、前庭部(6~9)、前庭部ピット黑色土層中(10)より出土している。

**蓋杯・蓋** (5~10) 口縁端部内面に稜をもつ、あるいは凹めて境を意識したもの(5・6・8~10)と、境がなく断面方形に近く終る例(7)がある。天井外面は5がへら切りのままで他はへら削りを行う。また、6の穿孔は焼成後のものである。つまみの形状も頂部が凹むもの(8・9)と突出するものの2種がある。



第101図 55号窯跡実測図(縮尺1/40)

## (4) 55号窯跡 (図版62・63、第101図)

54号窯に北接、窯本体で1 m弱の距離を隔てるのみで、前庭部は本来切合っていたと思われる。主軸はS-38°-Eとなり、53号窯とほぼ同じで、標高も同様である。

天井はすべて崩落しているが、床面はよく遺存している。いびつな平面プランを有し、奥壁から前庭部端までの斜長は約4.6 m。側壁は燃焼部で0.6 m、燃焼部奥で0.3~0.4 m遺存する。

**燃焼部** 両側壁ともに石組を行って強化している。左側壁では前庭部との境に2段積み、そしてやや内側に距離を置いてやはり2段積みを行い、間隙およびその前後に粘土を貼っている。右側壁では前庭部との境に立石と横積みを用いて行い、ここも粘土を貼っている。長さは、左側壁での屈曲点と舟底ピットを勘案すると約1.2 mとでき、幅は床面で0.9~1.2 m。

床面中央部に長軸1.1 m、幅0.5 m前後の瓢箪形に近い舟底状ピットがあり、その深さは最大で0.2 m。その床面には炭混りの焼土が薄く貼りついており、前面からは幅0.1 mのごく浅い溝が延びて前庭部ピットへと続く。

**焼成部** 舟底状ピット後端から奥壁までの斜長は2.7 mとなり、傾斜角度は39°を測る。床面プランはやや不整形であるが、最大幅は1.3 m強で左側へ膨む。

窯尻および中程に置台が8個遺存するほか、燃焼部との境にも土器・置台が転落している。

**煙出し部** 前面は残らない。奥壁より0.35 mの高さまでは約14°の角度をもって前傾し、以上は0.55 mにわたってほぼ垂直方向に立上る。この変換点が天井に対応するものかも知れない。

**前庭部** ほぼ中央に舟底状ピットと浅い溝で結ばれた径0.6 m弱、深さ0.2 mの円形ピットがある。

そこからさらに深さ5 cmの細い溝が延びて、幅2.8 m、深さ1 mの不整土壌へと続く。この中には炭・焼土混りの黒色土層が大部分を占めて堆積していた。最大の厚さは0.8 mである。

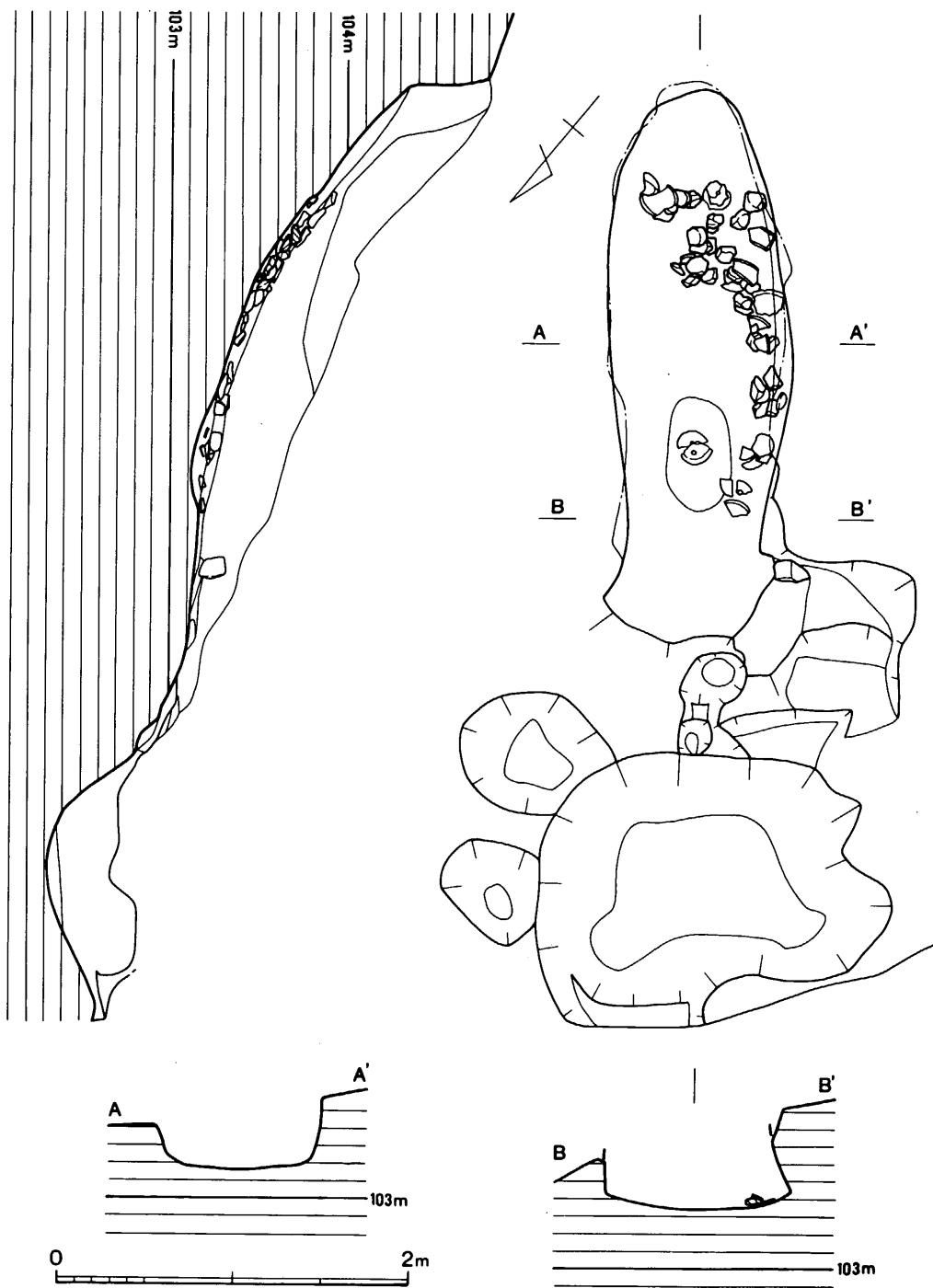
**出土遺物** (図版68・69、第99図)

焚口(11)、前庭部(13・14・16)、同ピット内(12・15・17)より若干量出土している。

**蓋杯・蓋**(11~17) 口縁端部の形状は断面三角形となる例が多く、11の1点のみは巻き込んで丸く終る。天井部の外面調整はいずれもヘラ切りのまま未調整となっている。なお、12・13にはつまみが備わっておらず、14は焼成後の穿孔が残る。

## (5) 56号窯跡 (図版64-1、第102図)

55号窯の北隣り、標高103~105 mの地点に位置し、尾根線に近いために等高線と斜交する。



第 102 图 56号窯跡夷測図 (縮尺 1/40)

天井部はすべて崩れ、前庭部も大部分を失うが、床面残存長は斜距離で約3.5mある。主軸をS-40°-Eにとり、53・55号窯とほぼ平行する。

**燃烧部** 平面プランでみると左側壁は緩く反転し、その前面を失う。右側壁は直角に近く屈曲し、左右非対称となるが、原状を示すものか判らない。前面にある石材は1点のみで、粘土を用いた補強もみられないことから本来的な在り方を示すものか不明である。

左側壁が最もせり出した部分で測った床面幅は0.75mで、高さは約0.4m遺存する。

ここでは舟底状ピットが他例より上位、奥壁よりに設けられており、これを含めて燃烧部は0.9mの長さを有したと考えられる。なお、舟底状ピットは径0.3~0.7mの長円形で、深さは0.1m強。

**焼成部** 舟底ピットから奥壁まで2.1mの斜長を有し、最大幅は約1m。右側壁がやや膨む。この部分の傾斜は約31°を測り、53号窯に近く、55号窯に比して浅い。

窯体内、右側に土器・置台が集中して出土したが、大部分が原位置を保っていない。

**煙出し部** 約0.5m近く立上り部分が残し、その傾斜角はなく、ほぼ垂直方向である。

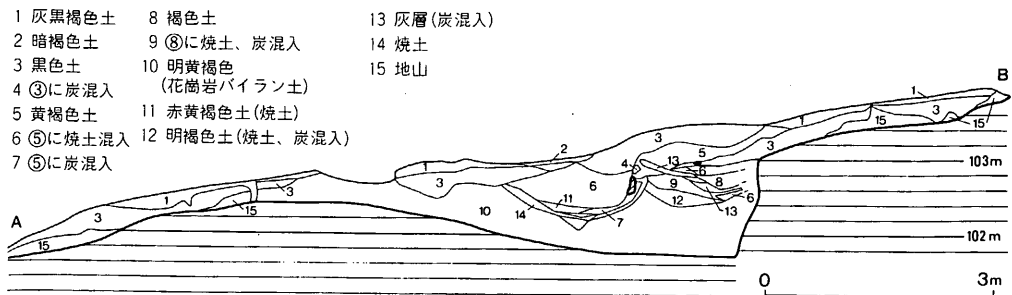
**前庭部** 中央近くの径0.3m、深さ0.2mの円形ピットから、前面の径2.0~1.6mの不整形土壌へと連続的に繋っており、不整形土壌は深さ0.5mである。この土壌は他例と異なり前面も立上る。この土壌内およびそれを覆う形で、0.7mの厚さに及ぶ炭・焼土混りの黒色土が堆積する。

### 出土遺物 (図版69、第99図)

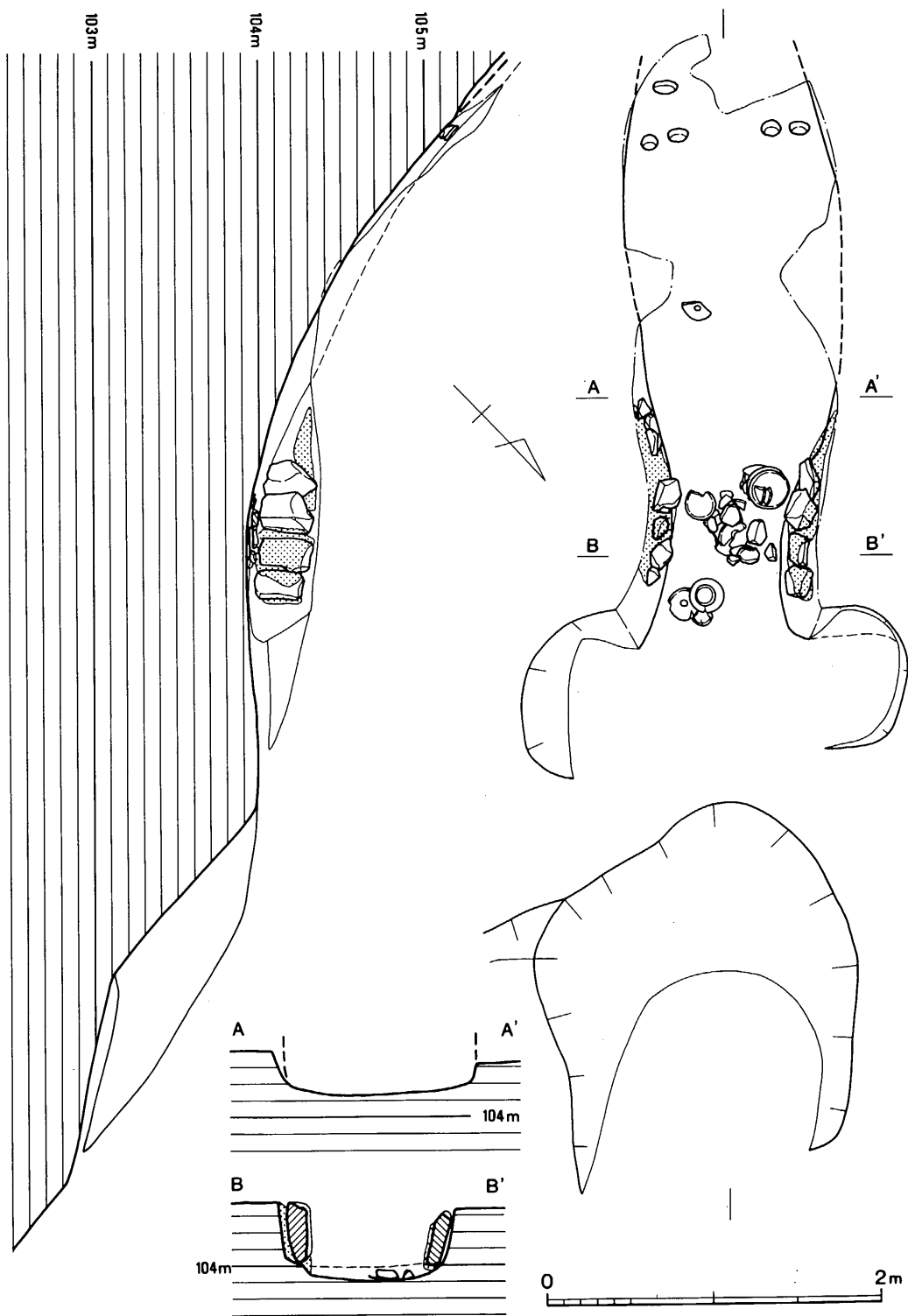
窯内床面 (18~20)、前庭部ピット (21・25)、そして北側灰原出土例 (22~24) も本窯に属する可能性が強いのでここに含めた。

**蓋杯・蓋 (18・19・21~23)** 23が口縁部を肥厚させて玉縁状に丸く終らせる他、小異はあるがいずれも断面三角形に仕上げる。天井外面の仕上げもこれのみへラ切り未調整。なお、21にみる穿孔は焼成前に行ったものである。

**蓋杯・身 (24・25)** ほぼ同じ法量を有する2点であるが、形態はやや異なる。24は低い高台を有し、口縁部はほぼ直線的に立上る。25の高台は形状がシャープで高く踏んばる。口縁部は外折して丸く終る。



第103図 53~56号灰原土層図 (縮尺 1/100)



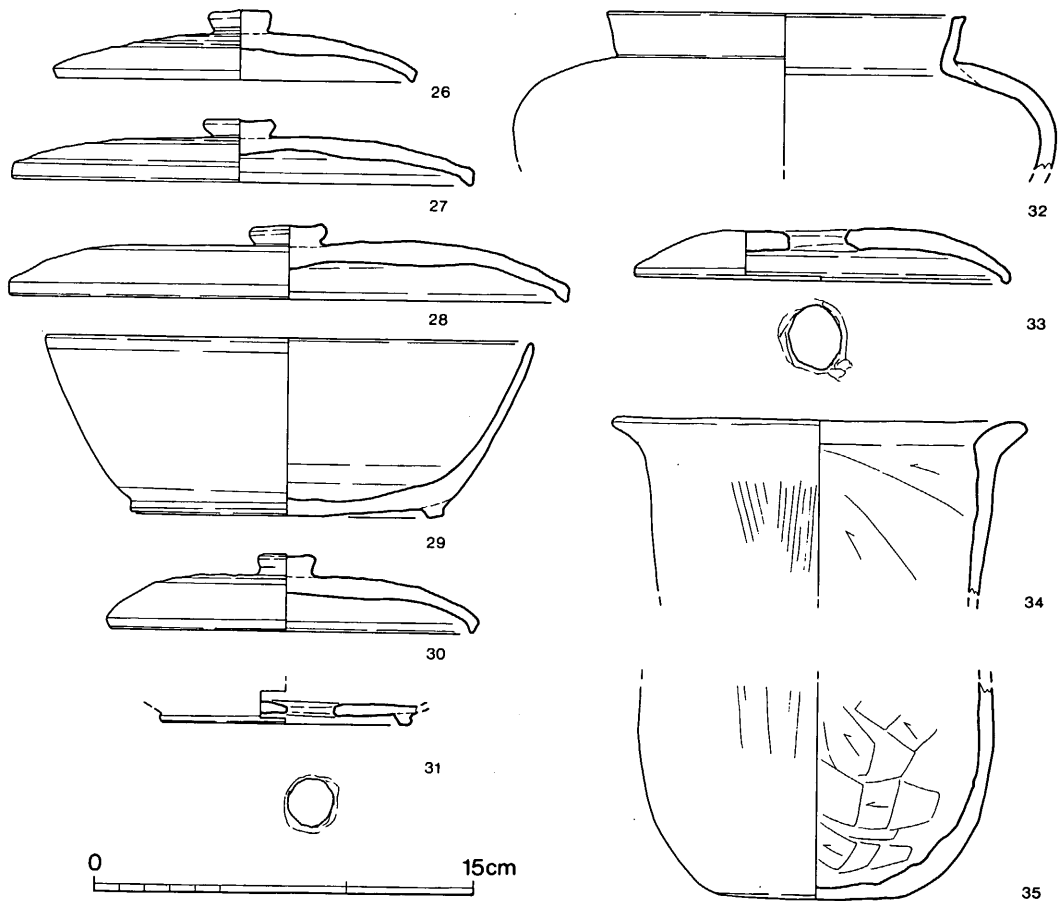
第104图 57号窑迹实测图 (缩尺 1/40)

## (6) 57号窯跡 (図版64-2、第104図)

尾根北側斜面に掘削されている。本来は等高線に対して直交していたようであるが、周辺地形を著しく改変されており、天井部はもちろん、焼成部の壁体、煙出し部ともに破壊される。主軸方位をS-44°-Wにとり、前庭部は標高103.9mの地点に位置する。

**燃烧部** 左右両側壁に花崗岩の角礫を立て据え、目地および周囲に粘土を貼り付けて補強している。左側壁では石組背面に赤褐色に変色した層が灰黄色層を挟んで2層あり、あるいは修復の痕跡を示しているのかも知れない。

床面に著しい傾斜変換点は認められず、また舟底状ピットもないことから燃烧部の範囲を限ることは困難である。しいて右側壁の石積後端から前庭部への屈曲点までを想定すれば長さ1.1mとなる。幅は最も狭い部分で幅0.6m強、焚口部分で約1mとなる。図示したようにこの部分で



第105図 57号窯床面・灰原出土土器実測図 (縮尺1/3)



若干の土器を出土している。

**焼成部** 破壊が著しく、全長は不明。推定できる最大幅は1.3mで、左側へやや膨む。残存部上端近くに径10～15cm程の置台の据付け痕、あるいは土器の安定に供したと考えられる小孔がある。傾斜角は30°強に復原できよう。

**前庭部** I地区所在の窯群中、唯一完存(?)する。平坦地は幅2m、長さ0.8m前後の長方形に近く造成され、前面の土壌が通路を残すような状況で接続する。土壇前面は削平されるが、残存長2.4m、幅2m弱で深さ0.9mの規模を有し、他例に比して単純な形態をしている。この床面から上、0.3～0.4mに黒色土が堆積し、その上方に二次堆積土層等が載っていた。

### 出土遺物 (図版69、第105図)

焚口床面 (26～29)、灰原 (30・32～35) から出土している。31も床面出土である。

須恵器

**蓋杯・蓋** (26～28・30・33) 26は口縁端部が断面方形に近いものの、天井部からの移行は曲線的で境はない。27・28・33は口縁部を折り曲げて作成している。33は小さく屈曲するものの端部を丸くおさめ、つまみのあるべき部位に焼成後の穿孔を施している。26・33の天井外面はヘラ切りのまま未調整。他はヘラ削りしている。

**蓋杯・身** (29・31) 29は底部・体部間に断面方形の高台を付すが、底部に若干の丸味をもち、体部も内彎しつつ丸く終る。31は底部に焼成前の穿孔がある。

**短頸壺** (32) 約1/3の残片。口縁端部が内傾する面となり、肩部の張りが強い。

土師器

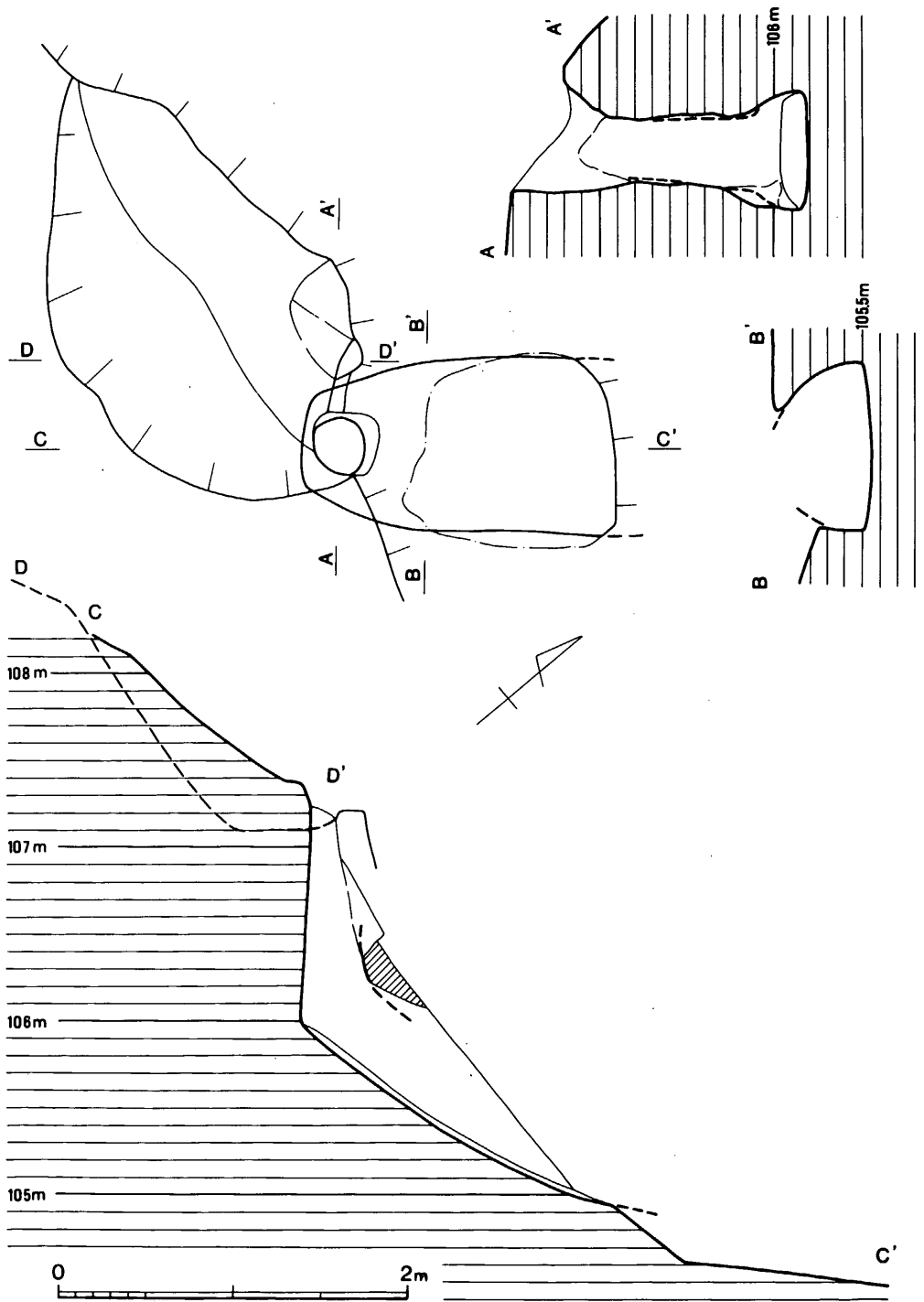
**甕** (34・35) 小片のため図のようになったが、本来同一個体と思われる。口縁部は肥厚して外反、内面に稜を有し、底部は平底に近い。外面を粗い縦ハケ、内面をヘラ削りで仕上げる。

### (7) 58号窯跡 (図版66-2、第106図)

57号窯の東に隣接し、主軸をS-41°-Wにとる。残存部は標高105～107mの位置にあり、57号窯とほぼ同一であるが、焼成部前半以前をすべて破壊される。しかし煙道部付近は比較的良好に遺存している。

**焼成部** 残存斜長は約2m、同最大幅は1.0mで、天井から煙道へ連続する部分の高さは約0.5mである。残存部分から推定できる断面形態は蒲鉾型となる。

**煙出し部** 窯体平面プランおよびそれと煙道基部との配置が整っている。奥壁は高さ1.3mほど遺存し、約3°の傾斜をもって前傾する。煙道は径0.3mの整円に近く、地山削り貫きである。煙道上端には西側へと導く排水溝が掘削される。北半を削平されるが、長さ2.5mまで遺存し、



第106图 58号窠迹实测图 (缩尺 1/40)

最大深度は1.5mに及ぶ。煙道上端は溝底に位置する。

出土遺物はない。

### (8) 59号窯跡 (図版66-2、第107図)

I地区の東端にあり、下半部を削平された58号窯に近接し、主軸方位はS-40°-Wとなる。窯本体は標高103~105mの地点に位置し、等高線に対してやや斜交する。

遺存状況は天井前半部が崩落、前庭部が削平されるものの、煙道部を中心とする天井後半部。床面の大部分が残る。煙道付近の天井が遺存するといっても、たとえば隣接する58号窯や後述する60号窯のあり方を本来的なものとするならば半ば以上が削平されているものと思われる。なお、煙道付近の天井は地山の花崗岩バイランド土で、煙道はそれを割り貫いている。

**燃烧部** 舟底状ピットがなく、平面プランにみる側壁のラインも漸移的で変換点を特定するのが困難である。仮に、置台等が散乱する地点の上端に床面の傾斜変換部を求めるならば燃烧部の長さは約1.2mとなり、窯体水平長の1/2強を占めることとなる。床面幅は0.7~0.8m。

**焼成部** 燃烧部を上のようにした場合、焼成部の斜長は1.9mとなり、その傾斜は41°である。平面プランにみる最大幅部分はその中位にあり、約1mの数値をとり、また、高さは0.7m弱を測る。断面形態は丸味をおびる五角形であるが、側壁と天井部の境が左右両壁で不揃いとなり、床面の形状も奥壁に近くなるほどにより丸く、より急傾斜となっている。

**煙出し部** 焼成部奥よりややせり出して基部が始まり、垂直に延びて約0.3m遺存する。平面的には径0.4m弱の円形で中軸線よりやや左へずれる。

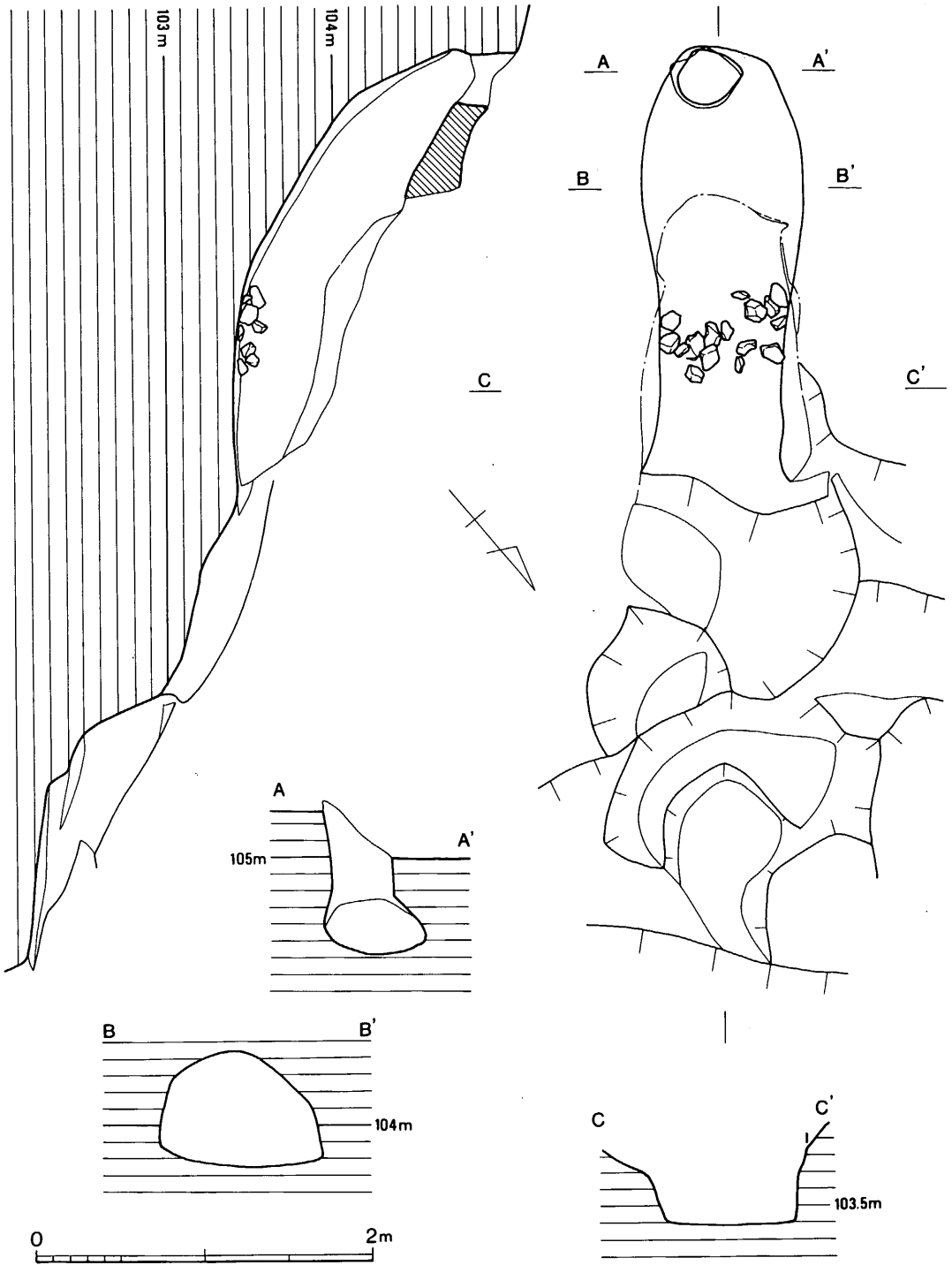
**前庭部** 袖・床の大部分は既に失われているが、前面に不整形土壌を検出した。土壌は幅約1.8m、長さ2.7mまで遺存し、その先を削平されている。前庭部床からの深度は最大で1.2mとなり、階段状を呈する。これが前庭部を破壊して掘り込まれたものか、あるいは本来的なあり方を示すものか把握できていない。なお、埋土の上層部は炭・焼土混りの黒色土であった。

### 出土遺物 (図版70~72、第108図)

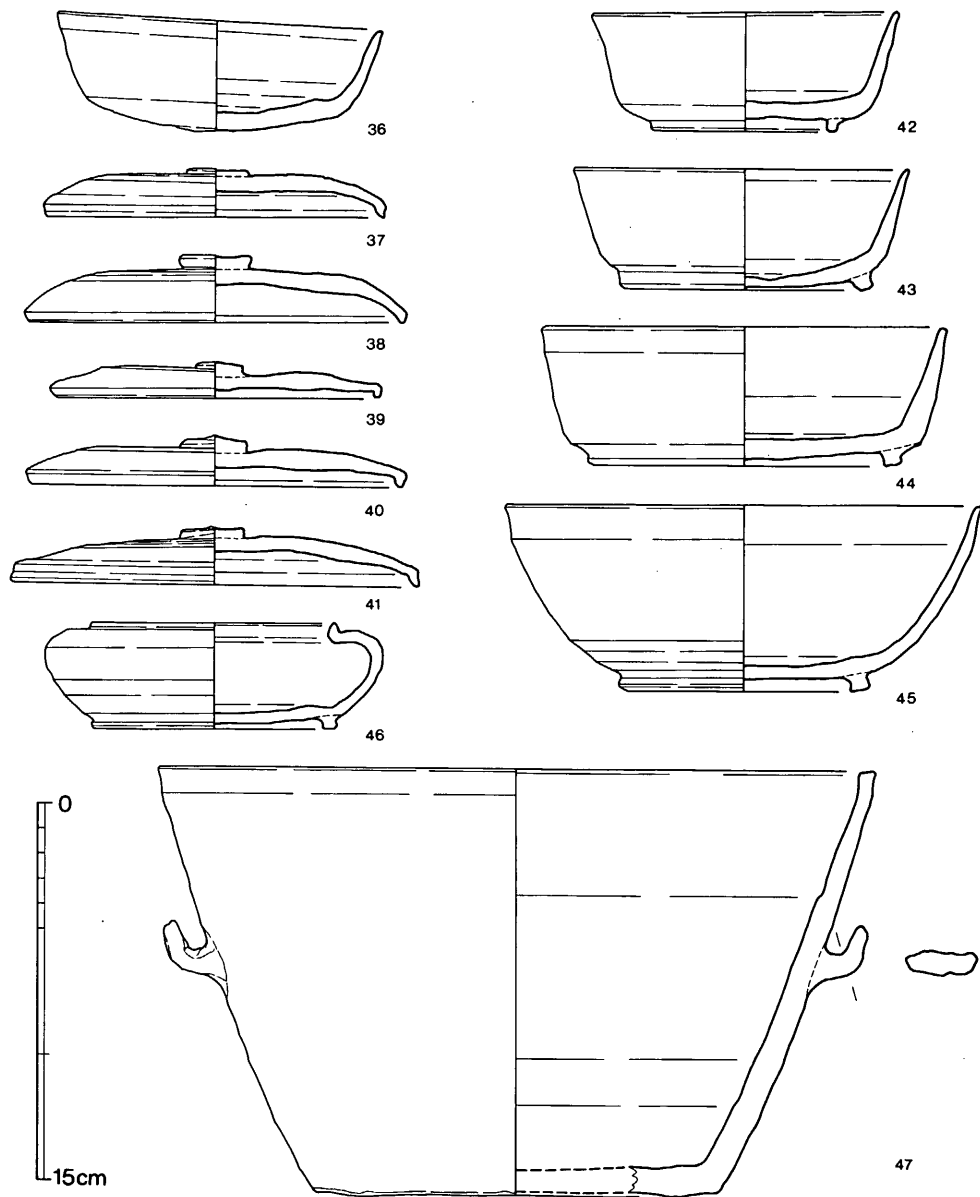
36・40は窯内、42は前庭部右側から、37・38・46・75・80が前庭部ピットから出土した。また、39~41・44は窯体覆土から出土しており、あるいは58号窯に関連する遺物であるかも知れない。

**蓋杯・蓋 (37~41)** 37・38は口縁端部の踏んばりがやや弱く、38は体部との境に弱い稜をもつものの折曲げるまでには至らない。39・40は折曲げが顕著である。

**蓋杯・身 (42~44)** 42・43は体部がともに弱く外反しつつ急角度で立上るが、高台の位置形状は異なる。44は器肉が厚く、体部が直線的に立上り鈍重な感がある。



第 107 图 59号窑迹实测图 (缩尺 1/40)



第 108 図 59号窯窯内・前庭部出土土器実測図 (縮尺 1/3)

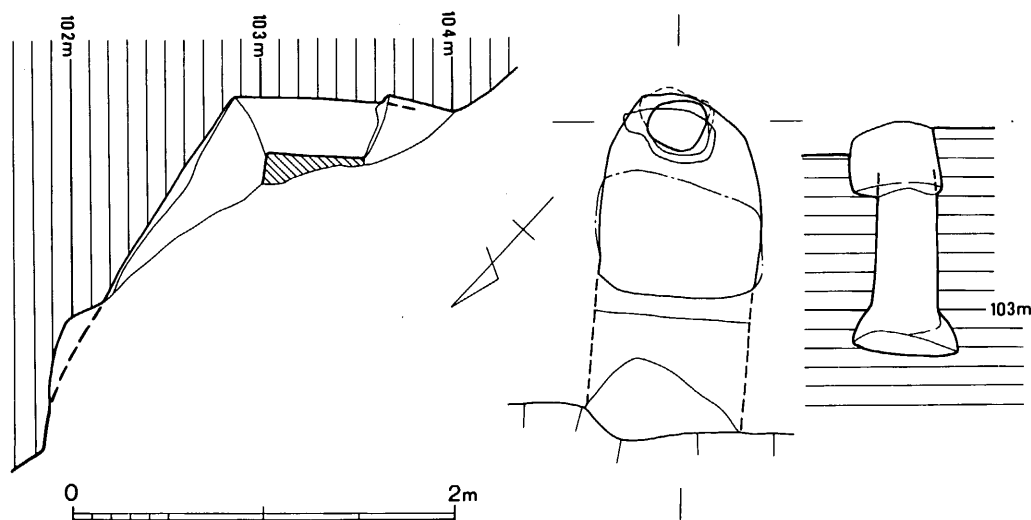
- 碗 (45) 内彎しつつ開く体部を有し、口縁部は小さく外反する。高台はしっかりしている。
- 無頸壺 (46) 肩の張りが著しく、短い口縁部が反転直立する。類例が少ない形態である。
- 鉢 (47) 口縁端部が小さく内折し、端面はほぼ水平な匙面となる。把手は扁平。

## (9) 60号窯跡 (図版60-2、第109図)

調査区の東端、53号窯の下方に位置し、その標高は102~104m間、主軸方位はS-43°-Eで54号窯に近い。窯体の大部分を里道・寺地造成のために失うが、煙道部付近はよく残っている。わずかに残存する天井は地山のバイラン土で、窯体後半部は地山を削り貫いて造作される。

**焼成部** 斜長で1.3mを遺存するのみで、最大幅は0.8m強である。また、煙出し部での高さは0.4m弱となる。奥壁は丸味をおびるが整ったものではない。

**煙出し部** 上端の一部が崩壊する。煙道は径0.3mほどの円形を呈し、約3°の角度をもって前傾し、1.2m立上る。先述したようにすべて地山を削り貫いており、中軸線にのる。

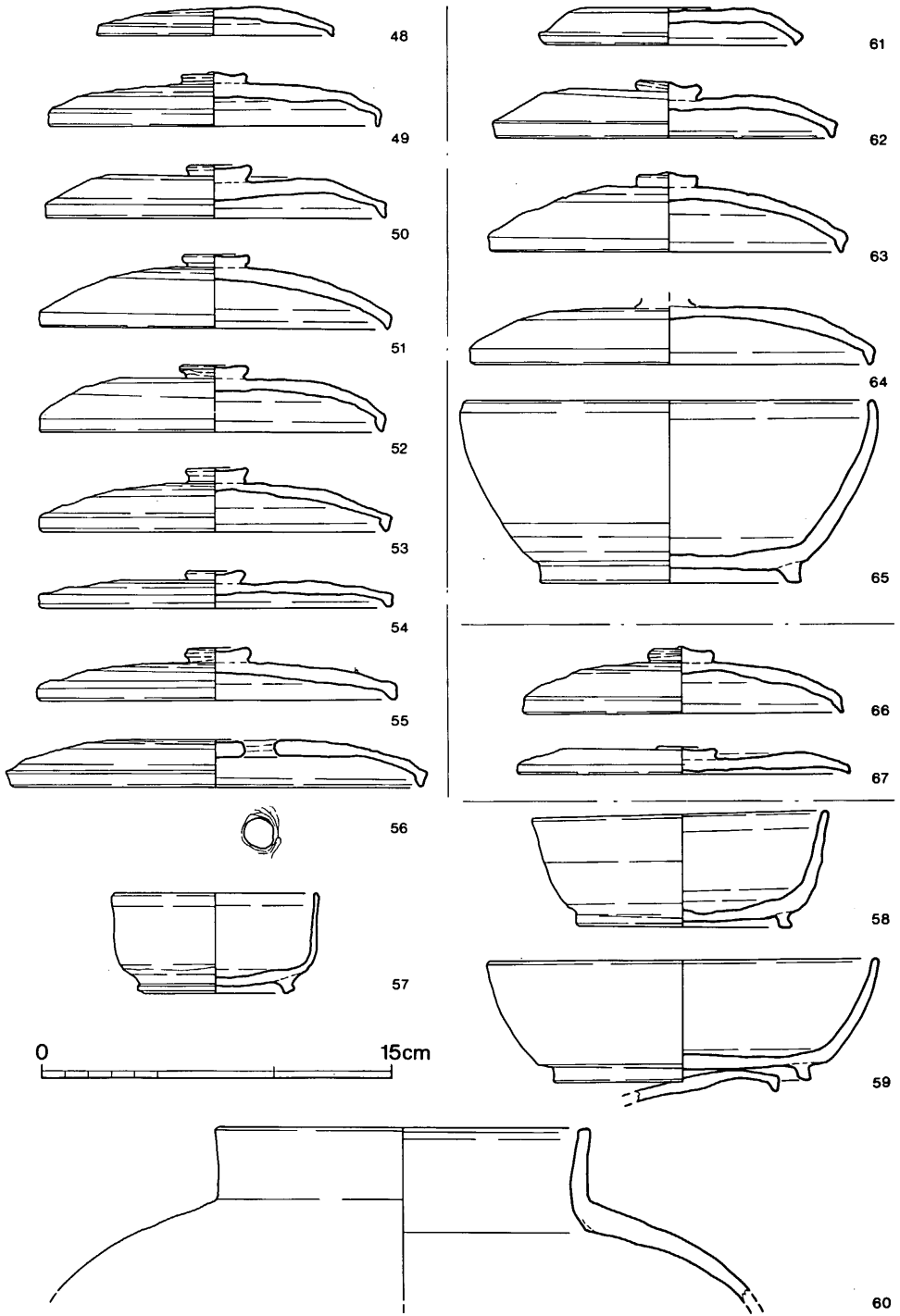


第109図 60号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

## (10) 61号窯跡 (図版60-2、第110図)

60号窯の北、約2mの地点に位置し、標高も101~104mとほぼ同レベルにある。天井部・焼成部前半以前もすべて削平され、かつ焼成部中央付近は里道が横切る。等高線に対してやや斜交し、主軸方位はS-18°-E。

**焼成部** 残存斜長3.1mで、その傾斜角度は35°となる。平面プランでは他に比して中央部の膨み小さく、所謂ずん胴形を呈し、最大幅は約1mを測る。煙道近くでは側壁の床上0.5m部分に天井との境の弱い稜線が観察でき、焼成部中程でも同様であることから53号窯と同様の五角形に近い断面形に復原できよう。



第111图 61·62·63号窯出土土器実測図(縮尺1/3)

いずれも窯体埋土中出土資料である。

**蓋杯・蓋 (48~56)** 口縁端部の形態から3様に分類できる。体・口縁部界に明瞭な区別がないもの(48・51)、口縁端部が肥厚せずに薄いままで折曲げるもの(49)、そして肥厚する断面三角形の形態となるものである。なお、48にはつまみがなく、56の穿孔は焼成前に行ったものである。つまみの有無は不明である。

**蓋杯・身 (57~59)** 57は焼け歪みが大きく、復原すれば通有の形態となる。他の2点も含めて、底部・体部の境界のやや内側に高台の付く点ではよく似るが、体部の形状はそれぞれ異なる。57は器肉が薄く、口縁部下を強く横ナデして若干外反する。58は器肉厚くほぼ直立。59は内彎気味に立上る。底部に蓋天井が熔着する。

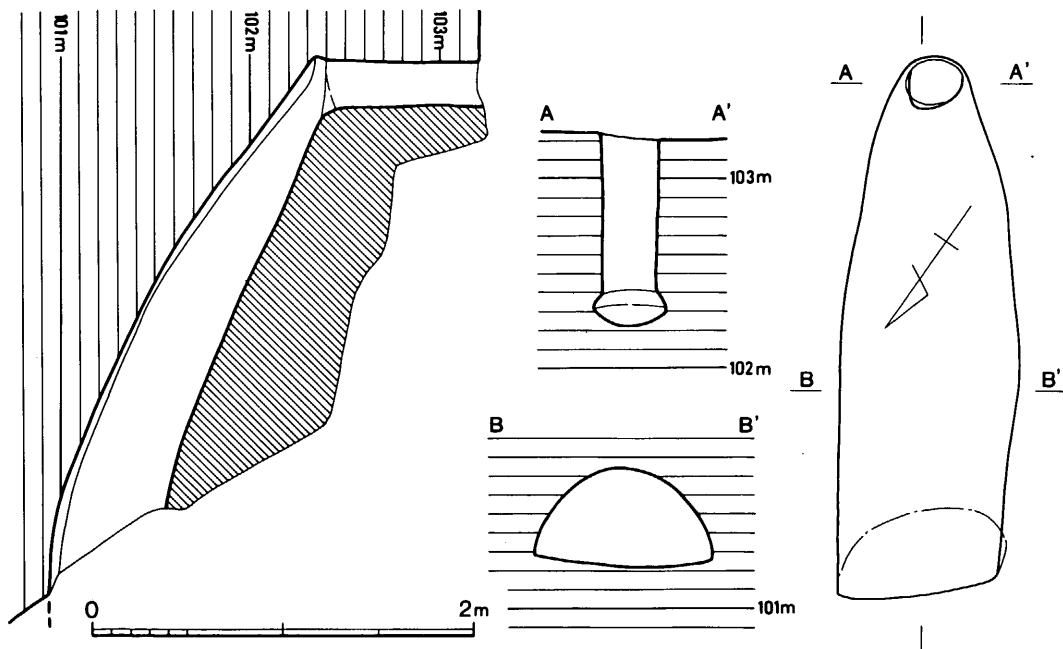
**短頸壺 (60)** 口縁部は直立し、端部が緩く膨む。立上る部分にシボリ痕が残る。

### (11) 62号窯跡 (図版60-2、第112図)

61号窯の北隣り、53~56号窯前面に広がる灰原下に位置し、残存部は101~103mの標高にあり、主軸はS-35°-Eにとる。61号窯との距離は最小で1m弱となろう。

燃焼部前面のすべてを削平されるが、他は非常によく遺存し、残存部はすべて花崗岩パイラン土に掘り込んだ地下式構造で、床に貼床等の施設は全くない。

**焼成部** 舟底状ピットがなく、かつ明瞭な燃焼部の痕跡を残さないためにどの部位からを



第112図 62号窯跡実測図 (縮尺1/40)



焼成部とするかは困難であるが、窯体縦断面では削平された部分から0.3mの地点付近で床面の傾斜が始まることでここを境と考える。焼成部斜長は2.9m、傾斜角は26°となる。

平面プランではやや右側に扁して膨み、最大幅は1m弱である。横断面は側壁・天井が連続して弧状となる蒲鉾形で、天井の高さは最大で0.6m弱、煙道部分では0.3mを測る。

なお、遺構検出面（表土掘削面）までの深さは最大で0.7mとなるが、ここには里道が通っており、本来はより深いものであった。

**煙出し部** 焼成部奥からやや前面にせり出した後、ほぼ垂直に0.8m立上る。煙道は径0.3mの円筒形で非常によく旧状を保っている。

### 出土遺物（図版71、第111図）

いずれも窯内出土資料であり、天井が完存している窯体の状況を考慮するならば本窯に伴うとして間違いなからう。好資料である。

**蓋杯・蓋（61～64）** いずれも口縁端部を断面三角形に仕上げ、天井がやや高い。同外面の仕上げは63がヘラ切りのまま未調整であるが、他はヘラ削りで仕上げる。61の天井につまみはない。

**蓋杯・身（65）** 体部が内彎気味に立上り、端部を内側へ折り曲げる。高台は底部・体部の境の屈曲部にあり、外方に向かってしっかりと踏んばる。

### （12）63号窯跡（第113図）

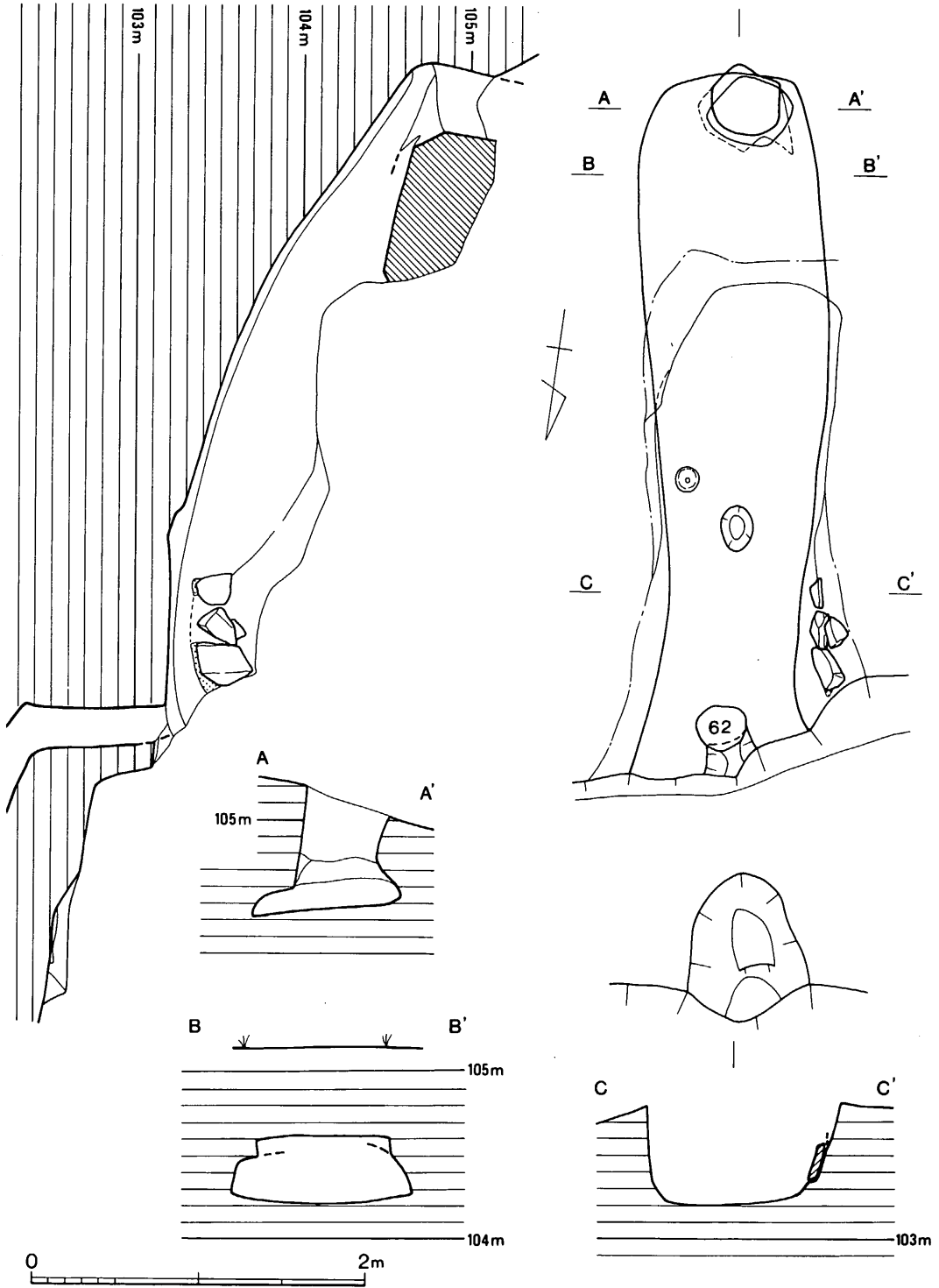
62号窯の煙道を塞ぎ、55号窯等の灰原下にある。標高103～105mの間にあり、主軸をS-7°-Eにとる。煙出し部の天井の一部が残り、床面は前庭部を里道で削平されるもののよく残る。

**燃焼部** 床面プランの描くラインは緩く、左右非対象であって前面を明らかにできないが、右側壁に残る石積を境として舟底状ピットまでを仮定すれば1.5mの長さを有したことになる。石積前面で右側壁下のラインが開くことからここを焚口に想定でき、石積はこれで終ると考えられる。幅は0.8m前後で、高さは0.6mまで遺存する。なお、石材は花崗岩である。

舟底状ピットは中軸線上にあり、径0.2～0.3mの扁円形で他例に比して著しく小さい。

**焼成部** 舟底状ピット上端から奥壁までの斜長は約2.9m、傾斜角は27°である。しかし、縦断面図でみるようにその中程、やや奥で傾斜を変えており、以前では21°、以後では36°とその変位は大きい。平面プランは窯尻へ向って左側へカーブし、その最大幅が奥壁付近にあるという特徴を有し、数値は1.1mとなる。また奥壁は丸というよりも角に近い。横断面では天井を0.4m弱の高さに復原でき、床幅に比して著しく低平な感じとなっている。

**煙出し部** 中軸よりやや右へ扁し、径0.4m前後の円筒形となる。立上りは約13°前傾し、0.4m



第 113 图 63号窠跡実測图 (縮尺 1/40)

の高さまで遺存する。

**前庭部** 削平が大きい前庭部土壌の一部が残る。窯体中軸線上にあり、前庭部からの深さは0.7mで、階段状となる。

#### 出土遺物（図版71、第111図）

焼成部床面（66）、窯内埋土中（67）より出土している。

**蓋杯・蓋（66・67）** 66は天井部が丸く、口縁端部が屈曲し、尖って踏んばるものの、屈曲部の稜が明瞭でない。67は口縁端部が断面方形に近く、66に比してより未発達な形態である。

#### （13）64号窯跡（図版65、第114図）

窯跡群の載る尾根の先端、等高線が東西方向へと変換する付近に立地する。これも灰原を削平されるが、窯本体の崩壊は天井に限られる。前庭部は標高101.6mにあり、煙出し部上端は103.2mである。主軸方位はS-40°-Wにとる。

**燃焼部** 右袖前面の反転部から床面の傾斜変換点（横断面作成部分）までを想定すると長さ0.7mとなり、幅は0.8m弱である。高さは約0.5m遺存する。左袖には花崗岩の角礫を1個立て裾え、粘土で塗り込めている。

**焼成部** 斜長3.1m。平面プランは左壁が直線的かつ開きが小さいのに比して、右壁はやや膨みを有し、最大部分で幅1.2mを測る。側壁の立上りは左側壁より右側壁の方が高く、断面は蒲鉾形を呈していたかと推測される。奥壁左隅は小さく張り出し、そこに粘土を貼り付けている。意味は不明である。

なお、後半部分には置台を設置したか土器を安定させるための小孔が無数に残っていた。

**煙出し部** 後壁のみ遺存する。ほぼ垂直に立上り、高さ0.4mまで確認できる。

**前庭部** 燃焼部中央付近から延びる小溝（幅20cm弱、深さ5cm）の先に不整形の土壌がある。残存する深さは0.2m強である。

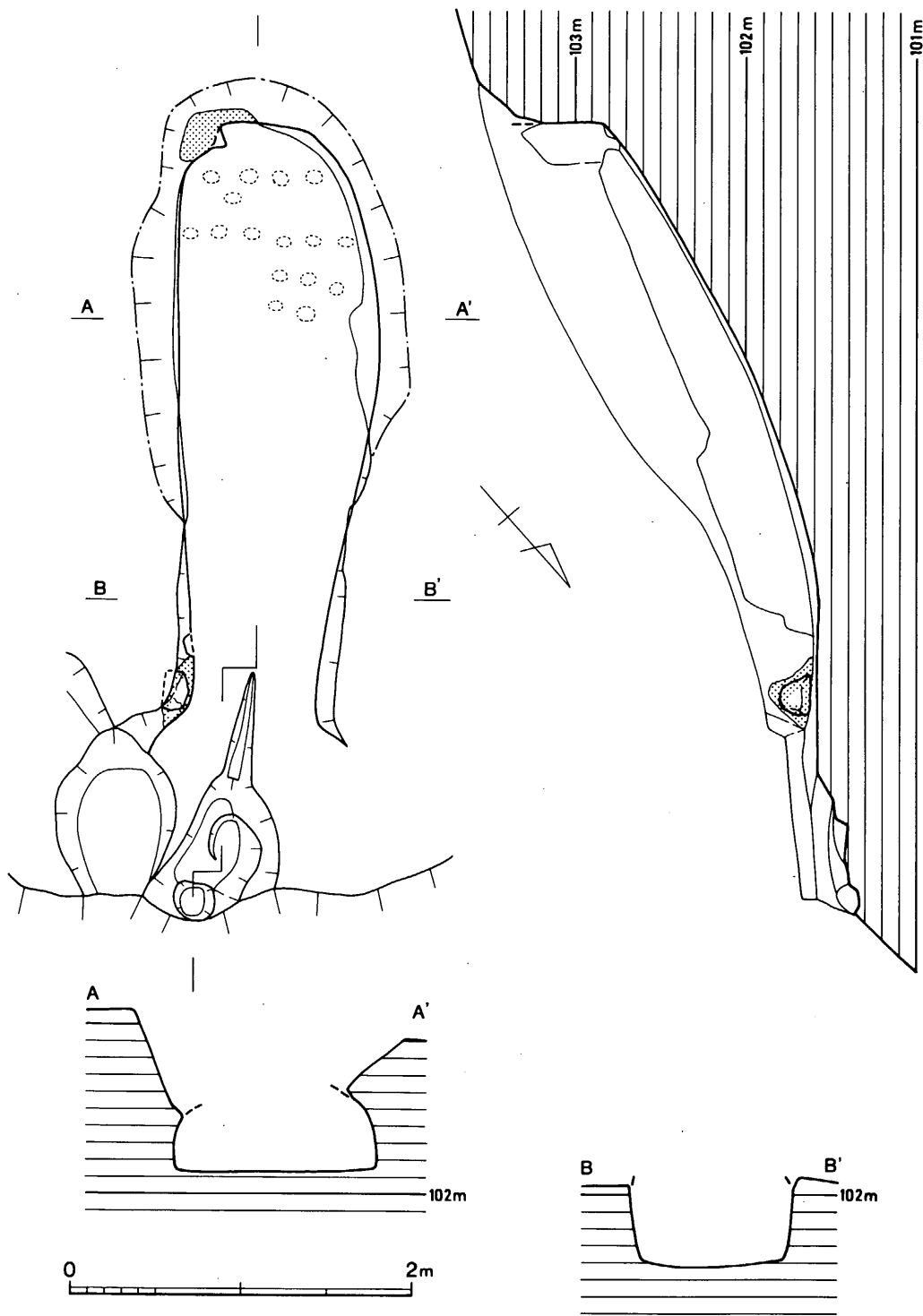
#### 出土遺物（図版71、第115図）

これもすべて窯内埋土より出土した資料である。

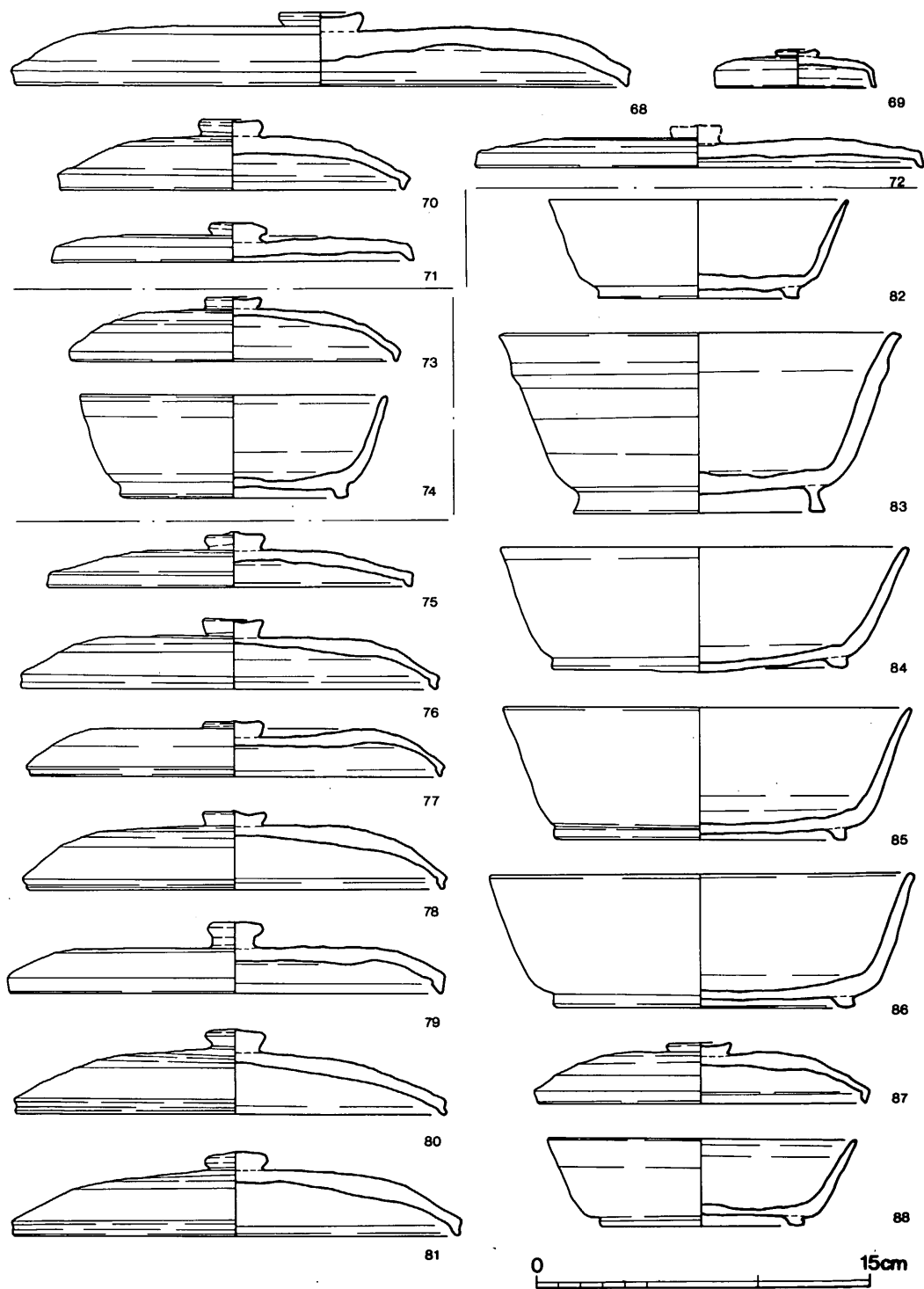
**蓋杯・蓋（68・70～72）** いずれも口縁部が明瞭に屈曲する。68は約1/4の残片だが、口径27.8cmに復原できる大形品である。

**短頸壺・蓋（69）** 口縁部が直立し、天井部はほぼ平らとなる。口縁端部は丸くおさめる。

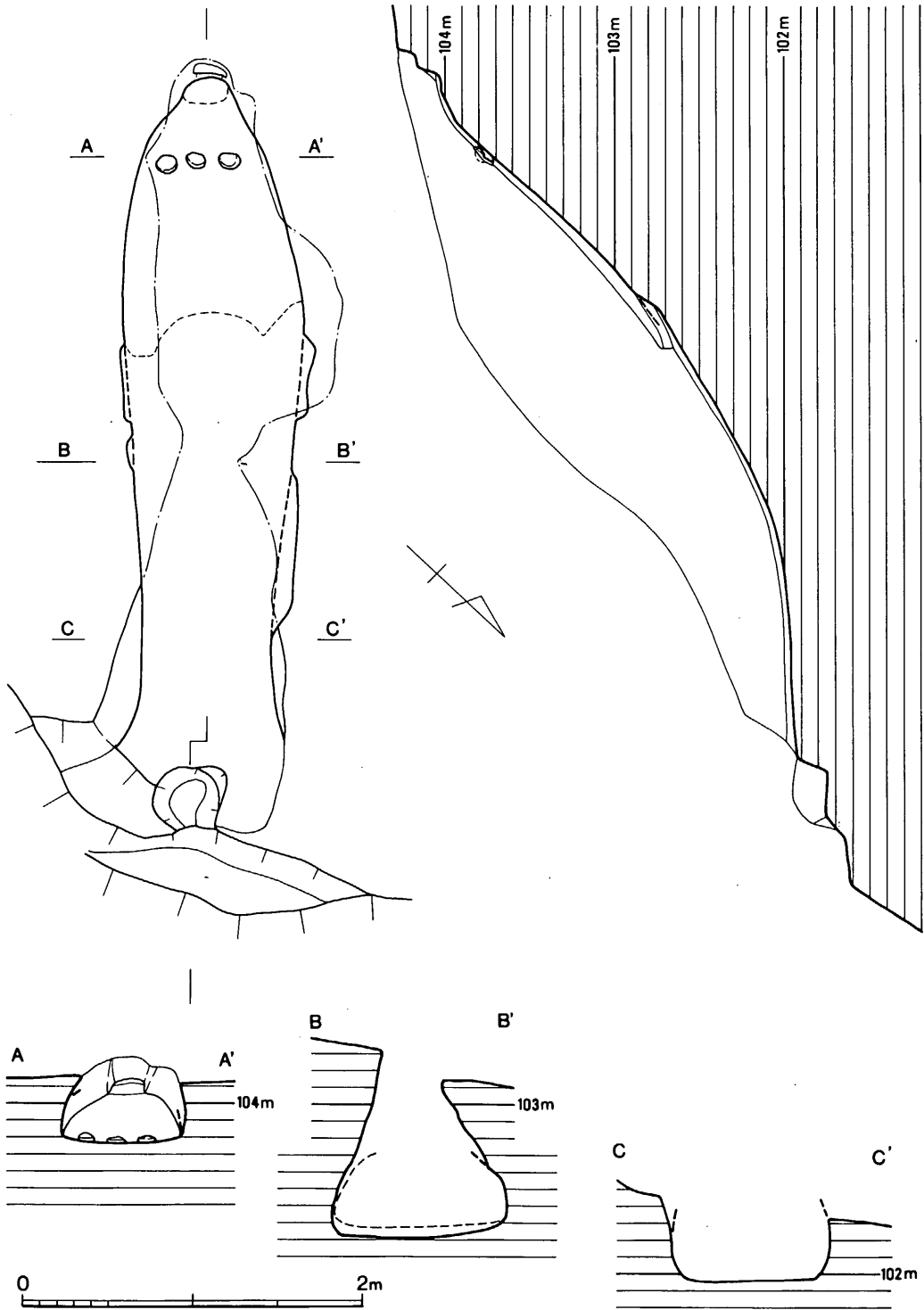
**鉢（89）** 体部は開きが小さく、直線的に立上り、口縁部は小さく外反してやや内傾する端面を形成する。高台は身に比して小造りである。



第114图 64号窑迹实测图(缩尺1/40)



第115图 64~66号窯内・前庭部出土土器実測图(縮尺1/3)



第116图 65号窠迹实测图 (缩尺1/40)

## (14) 65号窯跡 (図版66-1、第116図)

57号窯の北西、やや下った地点にあり、これも灰原を削平されている。窯体はほぼ標高102～104mの位置にあり、主軸をS-46°-Wにとる。天井部は遺存せず、前庭部も大部分破壊される。

**燃焼部** 右側壁の前面は破壊が著しく境は不明である。左側壁の焚口部へと反転する部分から床面の傾斜変換部までの長さは0.4mで、この範囲を燃焼部とできる。幅はほぼ0.8m。

**焼成部** 左右両側壁ともに緩かな膨みをもって広がり、最大幅は1.1m弱となる。斜長は3.8mとI地区残存窯中最長の部類に属し、傾斜は33°で奥まるにつれて増すのは他例と同様である。

焼成部後半の約1/2には径10cm前後の扁平な粘土塊を隙間なく貼りつめた貼床が残り、その厚みは約5cmであった。その上に径10cm強の粘土製置台が3個残っている。

**煙出し部** 平面プランで見ると煙道部が焼成部から矩形に近く突出しており、段を有する点で特徴的である。焼成部は最深部でその傾斜を減じ、さらに10cmの高さの小規模な平坦面を造出しているが、この平坦面が焼成の用でないことは間違いなからう。

なお、煙道は段を含めて0.2m強が残るのみである。

**前庭部** 焚口前面中央付近に径0.4m、深さ0.2mの円形ピットがあり、さらに前面の土壌に連続していたようであるが、削平のためその一部を残すのみである。

**出土遺物** (図版72、第115図)

ともに窯内埋土中より出土した。

**蓋杯・蓋** (73) 天井は丸味を有し、やや丈高となる。口縁部は折り曲げてほぼ直立に成形、断面が三角形となるものの、顕著な肥厚はみられない。

**蓋杯・身** (74) 体部は直線的に立上り、底部との境近くに断面方形の高台がつく。

## (15) 66号窯跡 (図版59-2、第117図)

64・65号窯の間、焚口を北東にむけて位置し、前庭部土壌の一部を削平される。また、煙道と焼成部前半以前の天井も失うが、床面はかなりよく遺存している。標高101.5～104mの間にあり、主軸方位をS-45°-Wへとる。

**燃焼部** 長軸中軸線上では、前庭部土壌の上端から0.8m窯体へ入った地点付近から床面の傾斜がやや変るとともに、左右両壁も広がりを始めることからこの間を燃焼部としておく。他例で前庭部と呼ぶ部分がこの窯ではすぐに土壌となっており、左側壁の外反部分を焚口とみなすと燃焼部長は0.6m、その軸は約0.85mである。立上りは0.5mまで遺存する。

**焼成部** 中軸線を中心としてほぼ左右対称形となる整った平面プランを有する。側壁の膨みは小さく、奥壁近くでの収束率も小さい。斜長は3.9m強、最大幅は1.15m程で、残存する天井までの高さは0.7~0.8mとなる。なお、天井残存部は地山を削り貫いている。

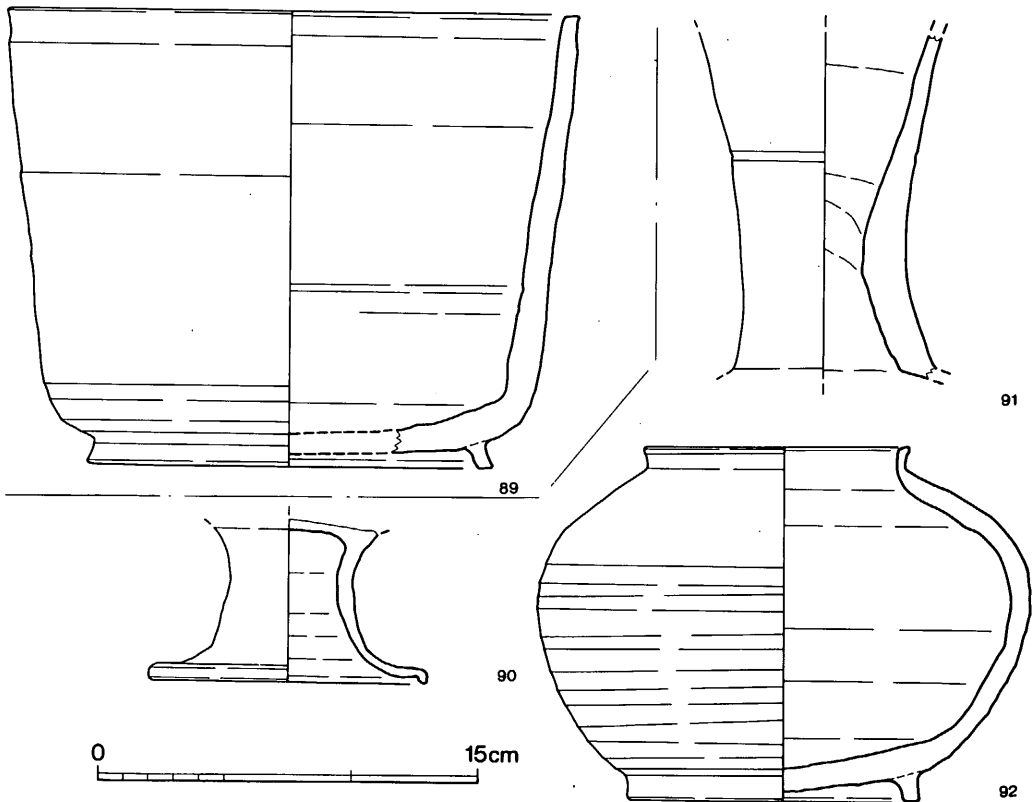
焼成部中程では床が数cmの厚さをもって剥れており、当初は貼床が除かれたものと考えていたが、I-61・65号窯のようなモザイク状の貼床は存在せず、硬化した床面がめくれただけかも知れない。なお、奥壁付近に径10~20cmの凹みがあり、置台の存在したことを示す。

**煙出し部** 隅角をもたず丸く終る奥壁の1/2強は壊れており、細部は不明である。

**前庭部** 先述したように前庭部の平坦面はほとんどなく、すぐに土壌となる。この土壌も中軸線に対してほぼ左右対称形で、中央部が最も低く、かつ階段状になっている。各段差は5cm弱~20cm強で、前庭部からの比高は最大0.5mになる。

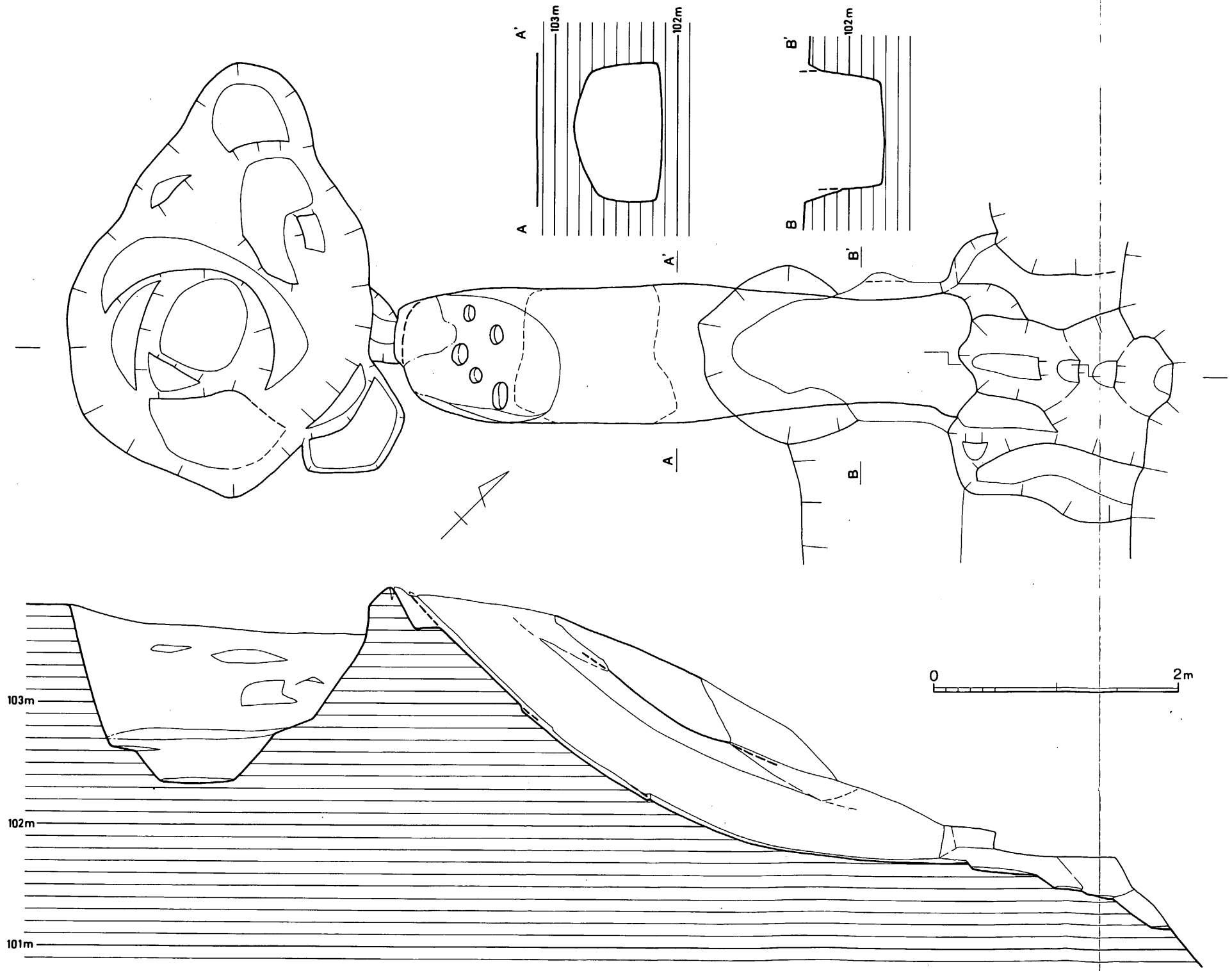
#### 出土遺物 (図版72・73、第118図)

87・88が灰原から、75~86・90~92が窯内から出土。



第118図 64・66号窯出土土器実測図 (縮尺1/3)





第117图 66号窟迹实测图(缩尺1/40)

## 窯内

**蓋杯・蓋** (75~81) 口縁部外面が匙面状に凹み、天井が扁平化したものが多い。体・口縁部界内面にははっきりとした境がある。つまみもまだ立体的といえる。

**蓋杯・身** (82~86) 体部はいずれも直線的に立上り、口縁部はわずかに外反気味となる。高台は体部へと屈曲する部位のやや内側に位置し、高くなくどっしりとしているものが多い。83は肉厚で、口縁下部に幅広く低い突帯を巡せ、口縁端部には外傾する面を形成するほか、高台も細く高いなどの点で他と異なる。さらに調整技法においてもこれのみ底部外面をヘラ削りしているが、他の個体はヘラ切りのまま未調整で終わっている。

**高杯** (90) 太く短い軸部に強く反転・開脚する裾部をもつ。脚端部を丸くおさめ、直角に近く折り曲げて接地面とする。

**瓶** (91) 頸部下端である。中位にヘラ描沈線一条を刻む。

**短頸壺** (92) 口縁部の立上りが短く、端部に内傾する面を形成するとともに外上方へ小さくつまむ。高台は若干開きを有するものの直立に近く、断面も角張っている。

## 灰原

**蓋杯・蓋** (87) 口縁部が直角に近く折れ曲り、天井も幾分膨みを有する。

**蓋杯・身** (88) 体部は直線的に開いて口縁部へと続く。高台は屈曲部のやや内側に位置し、扁平な感をうける。

## (16) 66号窯上部土壌 (図版67、第119図)

長軸3.6m、短軸2.5m、深さ1.5m近い不整円形土壌である。66号窯とは幅0.4~0.6m、深さ0.1mの短い溝によってその奥壁と結ばれるようであるが、確信はもてない。

66号窯の煙道は他例から推して1m以上立上るはずであり、接地してこのような深い土壌が掘削されたとは考えられない。他例でも標高の低い位置にある窯の廃絶後に上方に新窯を築いており、本例も66号窯廃絶後に営まれた土壌と考えられる。土壌の存在する部分は小さな平坦地となり、57号窯などの前庭部がほぼ同一レベルにあることから、57号窯等の築成のために造成(64~66号窯の煙出し部の削平)した後に掘削された遺構といえよう。

埋土はおよそ5層に分れるが、下から2番目の層中に炭小片を混入する他は地山土(パイレン土)に近い、不純物のない土質である。

## 出土遺物 (図版73・74、第120・121図)

数多くの土器(須恵器の焼成品)が出土したが、出土状態は大きく2つに分れる。一つは土壌東壁付近の群で、上層から出土した。器種は蓋杯が主体であり、図に示したように4~5枚

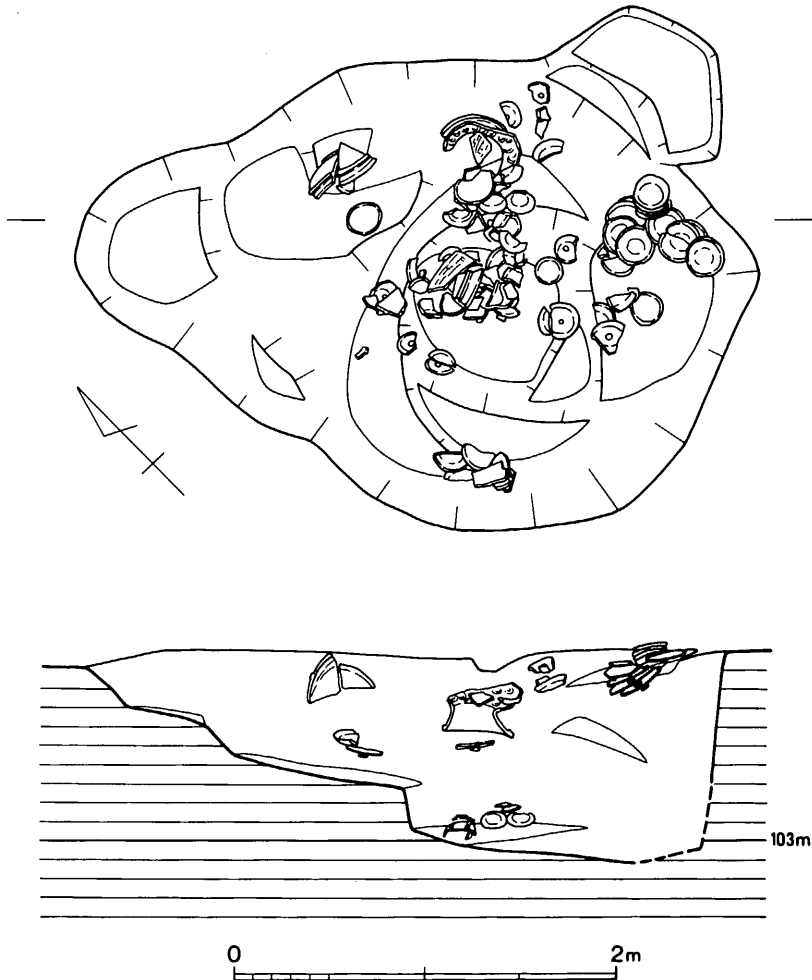
を重ねたまま放置する例がある。他方は土壌中央付近の下層から出土し、これも蓋杯・皿を主体とするが、先のように重ね合せた状態ではなく投棄された感を示す。破損品が多い。

93～130に示した土器が上部不整形土壌中より出土したものである。土器出土状態が大きく2群に分れることは上記したが、接合資料をみても両者間に同一個体はなく、俊別できるものと考えられる。上層に位置した個体は98・100・103～105・108・113・114・117～120・122・124・127・130の番号を付したものである。

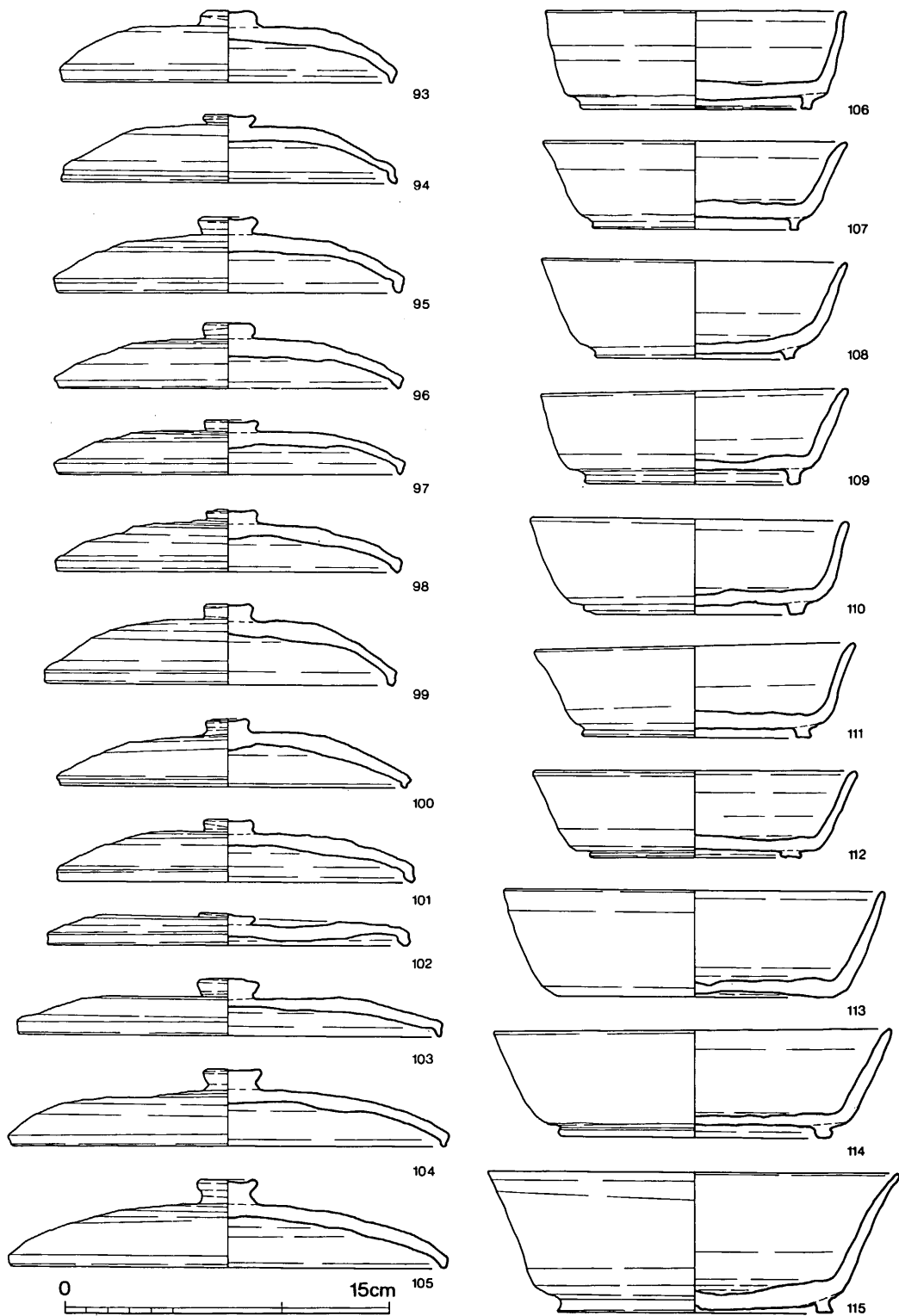
また、他の窯跡との関連を示す遺物もあり、以下に挙げる。

128…54号窯前庭部ピット黒色土、55号窯前庭部ピット黒色土・同窯窯内、66号窯内出土片が接合。上層出土。

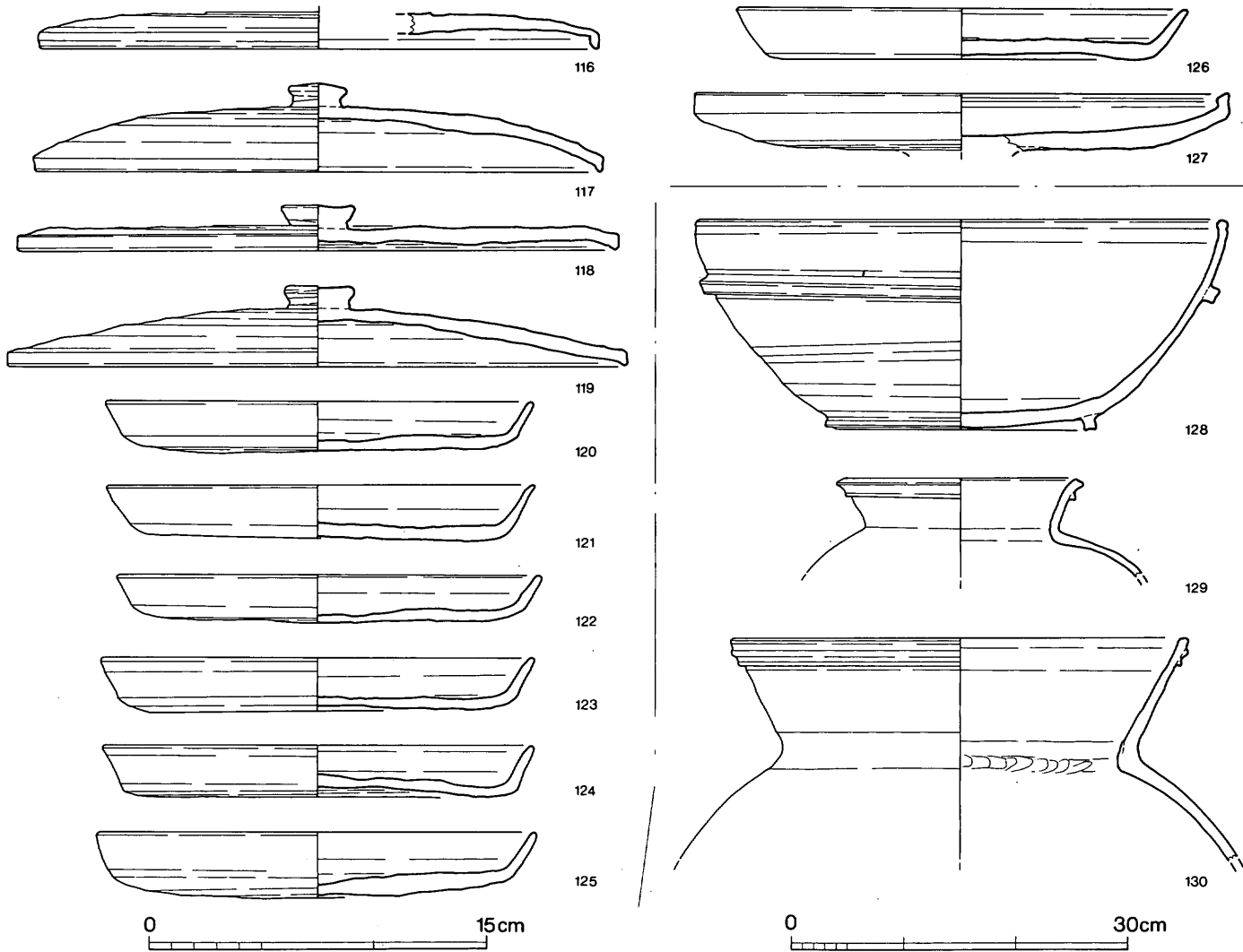
129…59号窯上覆土・同窯埋土中出土資料が接合。これも上層出土。



第119図 66号窯上部土壌実測図(縮尺1/40)



第120图 66号窯上部土城出土土器実測図① (縮尺 1/3)



第121图 66号窟上部土城出土土器实测图② (缩尺 1/3 · 1/6)

**蓋杯・蓋** (93・105・161～191) 口縁部の成形法にバラエティを有する。すなわち、明瞭に折り曲げるもの (94・95・99・101～103・116)、端部を下方に引き出して断面三角形に成形するもの (93・96～98・100・104・117～119)、そしてほぼ直立する面をなすものの、変化を加えていない例 (105) 等である。が、いずれも天井部から緩かに曲線を描いて移行し、顕著な変換点を有さない点で共通し、口縁部の造作の差異は小と考えられる。

**蓋杯・身** (106～115) 体部は106が内彎気味である他は、いずれも直線的ないし若干外反して立上る。高台は体部立上りよりやや内側に位置し、華奢ないし鈍重な感を与えるものである。

**皿** (120～126) これも体部から口縁部へとほぼ直線的に移行する。底部外面はヘラ削り調整を主として用いるが、横ナデも併用している。

**高杯** (127) 口縁部の立上りが小さく、端部に内傾する面を形成する。

**鉢** (128) 口縁部を玉縁状に仕上げ、体部に太い突帯を付す。高台は外方に踏んばる。

**甕** (129・130) 129は口縁端部を角ばった形に造作し、三角突帯を付す。130は口径40.8cmの大形品である。細部は丸くおさめてあり、焼きが悪い。

#### (17) 67号窯跡 (図版66-2、第122図)

調査区の東端近く、57号窯の灰原下に埋もれていた。前庭部以前を大きく削平され、天井も一部破壊されている。本体は標高102～104mの位置にあり、主軸方位はS-33°-Wである。

残存する焼成部の天井は地山で、窯体主要部は地山割り貫きによって造られている。

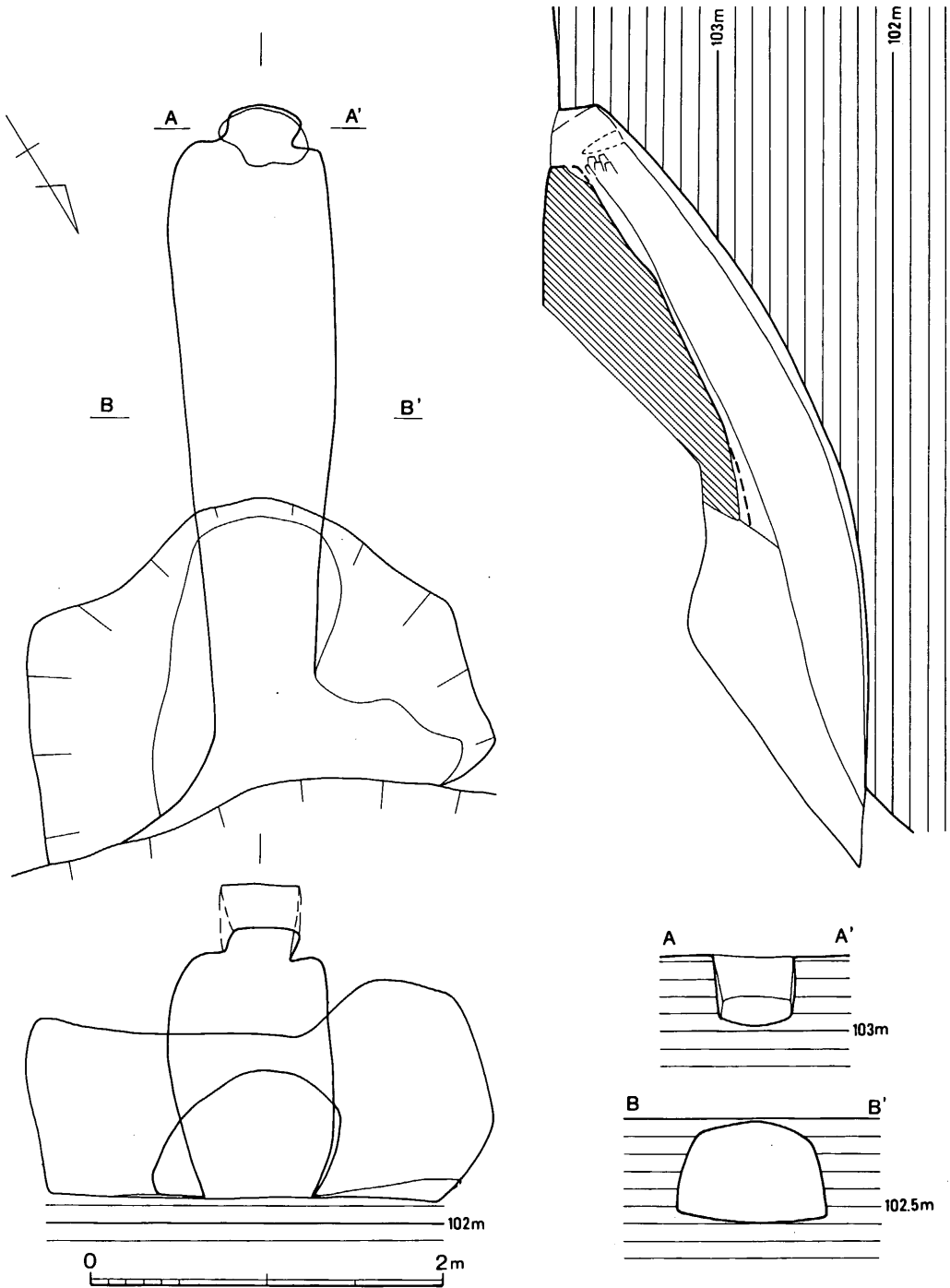
**燃烧部** 平面プランで明らかのように左右両壁は焚口付近で非対称となる。谷口に向う右側壁の開きが大きい点は自然通風を呼び込むための智慧とも考えられるが、63号窯のように逆の場合もあり、即断は控えたい。

焚口としては右側壁の反転部分が考えられ、床面の傾斜が大きくなる約1mの間が燃烧部と考えられる。それは天井の遺存範囲と境をほぼ一にする。幅は0.6～0.75mとなる。

**焼成部** 焚口から左右両側壁ともに直線的に広がって行き、最大幅は奥壁近くで0.95mを測る。先のように燃烧部を推定すると焼成部斜長は2.7mで、傾斜角は33°となる。

天井は原状を保っていると考えられる部分で0.5～0.6mを測り、丸味が乏しい。また、側壁が天井の曲率に比して高いために断面は梯形に近くなっている。

**煙出し部** 直線的に終る焼成部の奥壁中央部を約0.1m張り出して煙道基部とする。立上りが0.2m残るのみで正確さは期せないが、その傾斜角は約5°で前傾する。焼成部との境に粗い布目痕を残している。



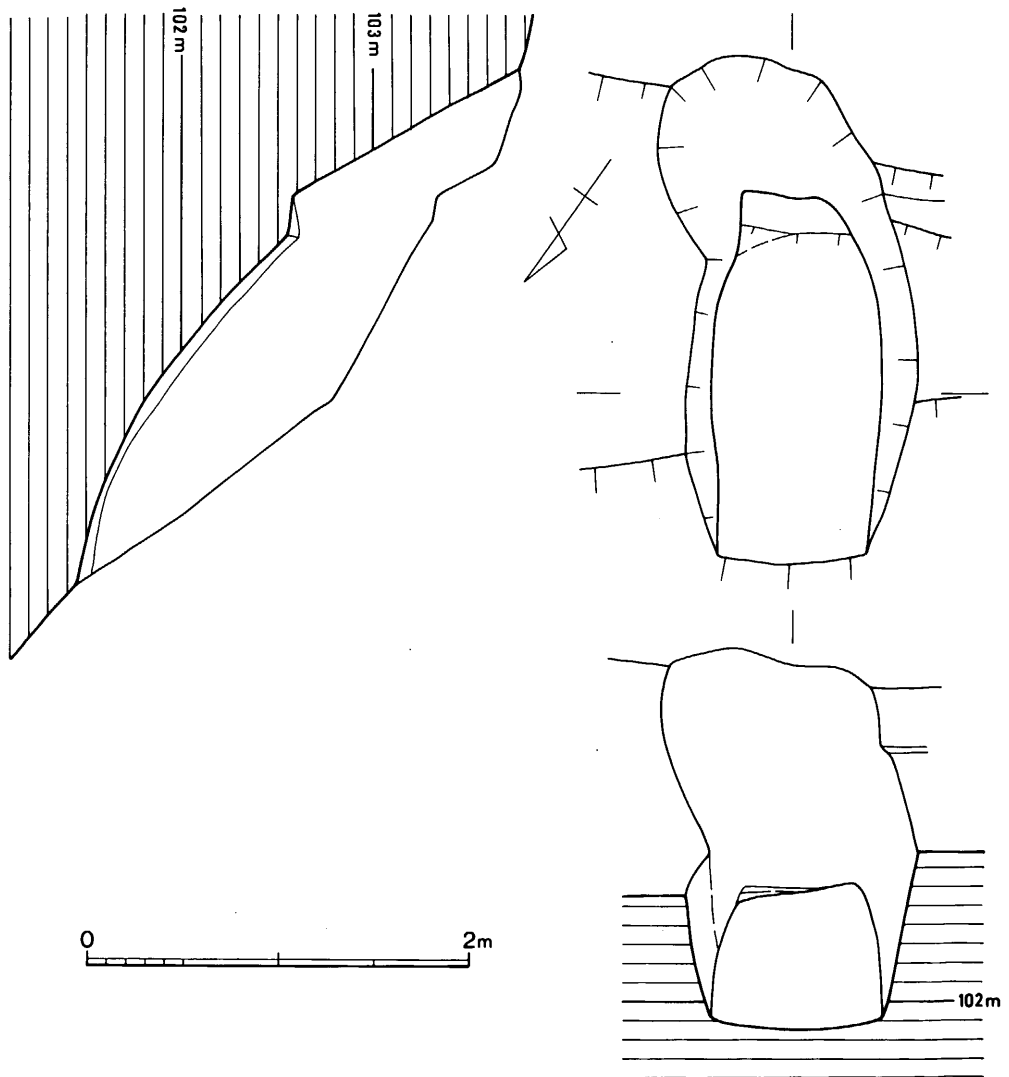
第 122 图 67号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

## (18) 68号窯跡 (第123図)

62号窯の北隣り、標高102~104m付近に立地する。当初は性格不明の落込みであったが、発掘の結果、未完成の窯跡と考えられる。主軸方位はS-36°-Eである。床・側壁ともに熟をうけていない。

**焼成部** 前面を削平されるが、原状で斜長約2.1m、傾斜は31°となる。残存部の床幅は0.8~0.9mで、平面プランは開きが少なく、67号窯のように復原できようか。

**煙出し部** 焼成部奥に平坦面を設けて煙道へと続く。現状で立上りは高さ1.4mあり、28°の角



第123図 68号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



度をもって後方へ開く。このような例は牛頸窯跡群中になく、煙道の崩壊がこの窯を放棄する原因であったのかもしれない。

(19) その他の出土遺物 (第124図)

複数の窯にまたがって出土した土器をまとめた。出土地点は以下の通りである。

131……56号窯灰原・64号窯上表土直下

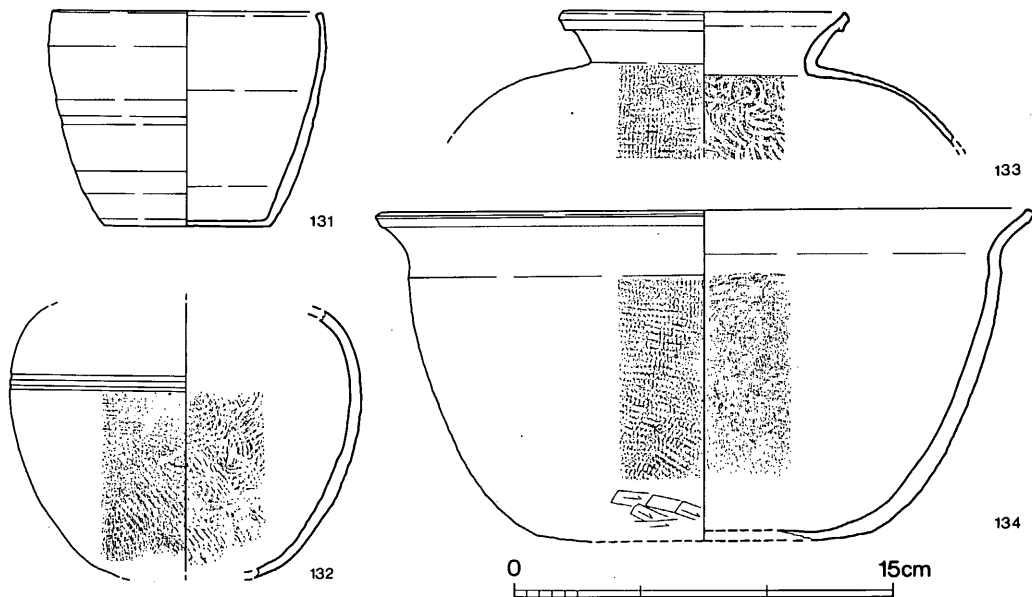
132……57号窯灰原・65号窯上覆土

133……53号窯前庭部ピット、55号窯前庭部ピット、63号窯内埋土中

134……57・58号窯付近表土直下、59号窯内埋土中、67号窯内埋土中

**鉢 (131・134)** 131は口縁部が体部から内彎して立上り、端部内面を肥厚させて断面三角形とする。全体に横ナデを主体として仕上げ、体部下端はヘラ削りを施す。134は口縁部が外反する大形品で、口径52cmに復原でき、口縁部に面取りを行う。体部外面を平行タタキで仕上げ、内面は横ナデを施すものの部分的に同心円文が残る。

**甕 (132・133)** 133は口縁部直下に突帯を付して拡張・加飾する。



第124図 I地区出土土器実測図 (縮尺1/6)

## (20) 小 結

I地区では多くの窯跡を調査したものの、窯本体および灰原の破壊が著しいことから不明な点を多く残す結果となった。殊に各窯跡に伴う出土土器の量の少なさは群構成の変遷を追求する上で大きな障害となっている。それでも灰原・窯本体等の重複関係から、62号窯→63号窯→55・56号窯という前後関係は読み取れる。一般に窯の新規造営に際しては旧窯の前面に広がる灰原を掘削して築くことは考え難く、より高い地点に設定することが容易に推測されるが、それを裏付ける例を得た点で一定の評価は与えられよう。

以上の前提を踏まえ、強いて群形成の過程を考えると、西斜面では60～62（・68）号窯→63（・54）号窯→53・55・56号窯、北斜面では64～67号窯→57・59号窯→58号窯といった2群3段階の変遷が考えられる。乏しい出土土器からみてもこのような大きな変遷に矛盾はなく、両支群の各段階はほぼ対応しているように思われる。

66号窯上部土壌の性格について、それを示す積極的な資料はない。大型の甕・鉢等の破損品が投棄された状態である反面、蓋杯のように重ねられた状態のまま出土した個体もかなりあり、単なる土器捨て場とは思えない。ただ、先述したように57号窯等の築造時に掘削された土壌である可能性は高い。(飛野)

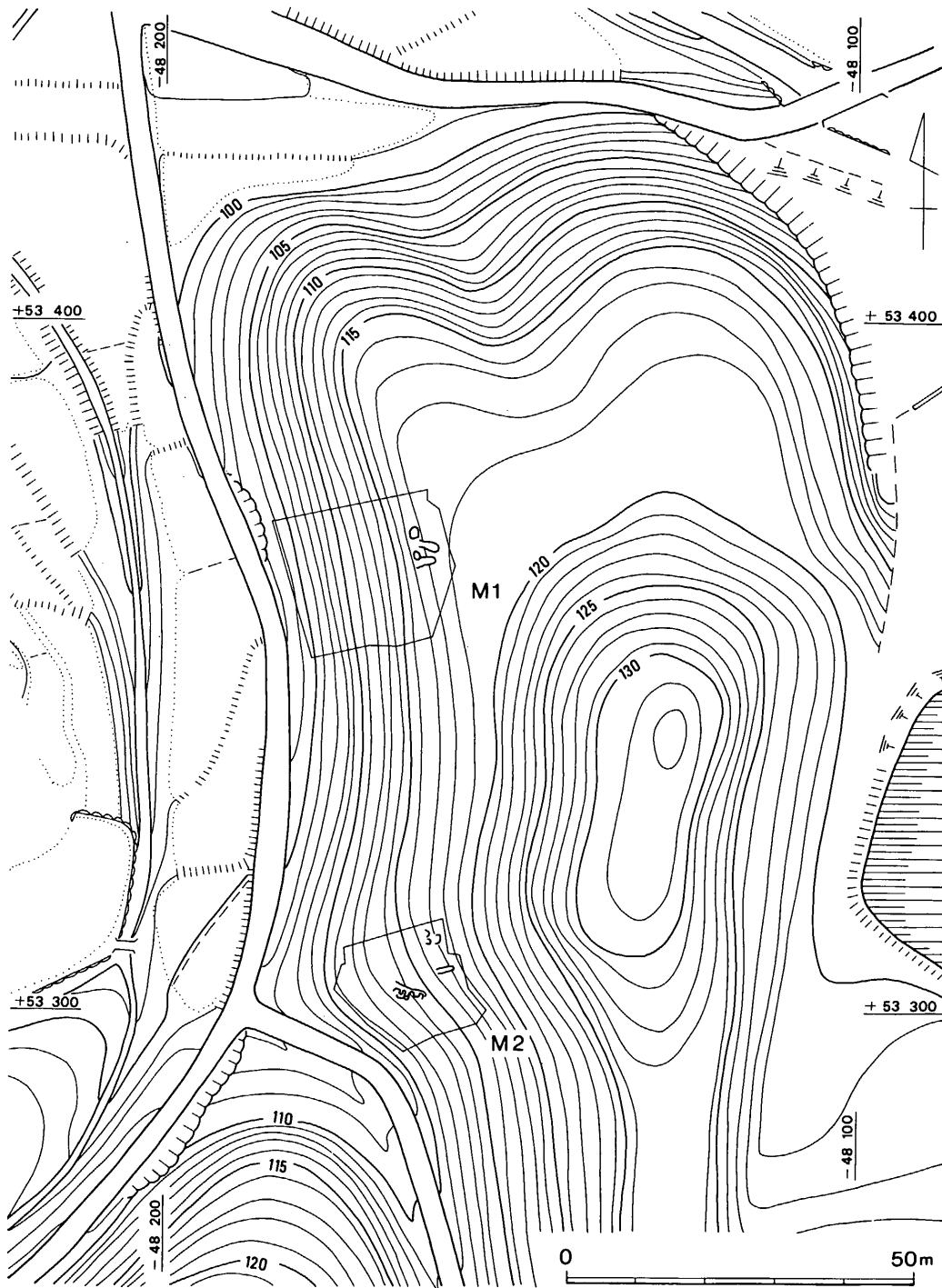
## 4 M-1地区（笹原窯跡群）の調査

### (1) 調査の概要（図版75-1・76-1、第125・126図）

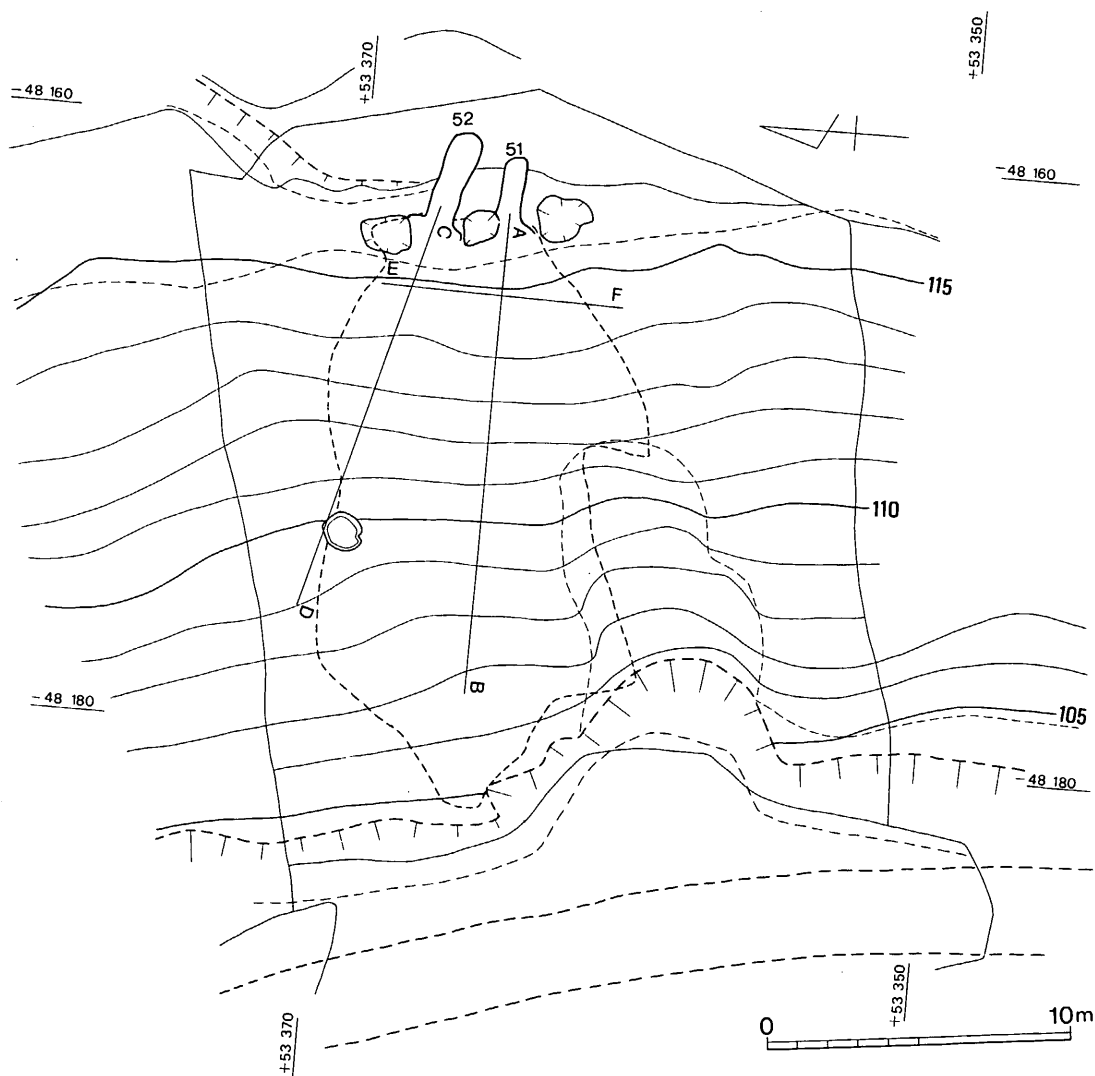
牛頸川上流域は大野貯水池付近は大きく3本の谷に分かれ、それぞれ小河川が流れ、貯水池の北側で合流する。この合流点から南側の牛頸山山麓に向って走る林道を約120m程登った地点の丘陵西側斜面上に位置する。

この地区は、当初の分布調査では見落としていた場所で、昭和59年9月のC地区の調査中に改めて実施した周辺の分布調査でM-2地区とともに発見した。

昭和60年度に入ってダムの工事計画が変更され、大野貯水池解体の際に削平されることになったため、10月になって調査を開始した。調査結果、斜面最上部で窯跡2基を検出した。窯体は貯水地建設の際に上部を削平されており、残りはわなかった。灰原は若干の流出が認められるが残存状況はよく、多量の須恵器片が出土した。



第125图 M-1-2地区地形图 (縮尺1/1,000)



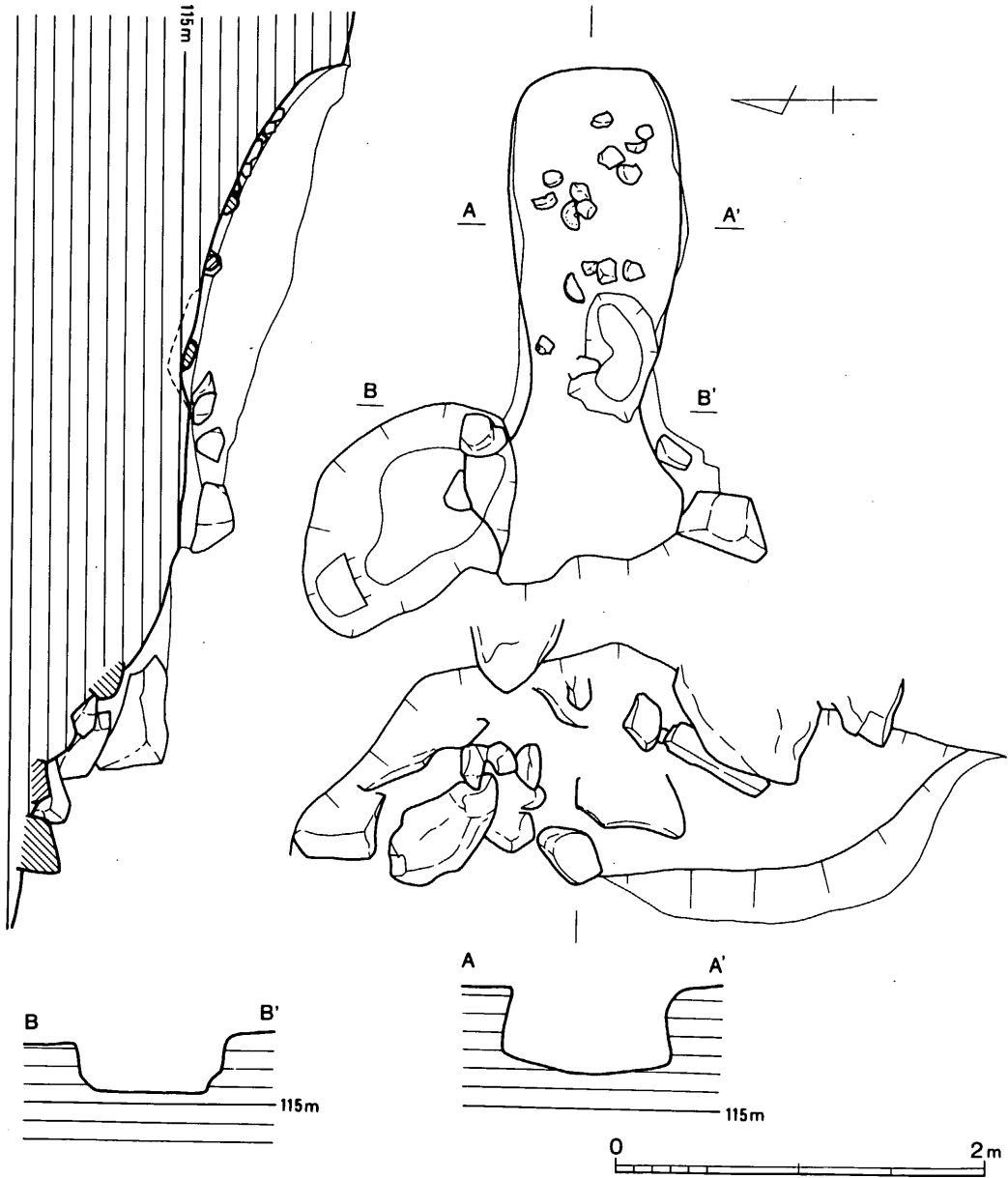
第126図 M-1地区窯跡配置図(縮尺1/250)

## (2) 51号窯跡(図版76-2・77・79-1、第127図)

南北に延びる丘陵の西側斜面上部で52号窯と並んだ状態で検出した。窯跡の上部、標高118～120m間は大野貯水池建設時に削平を受けて平坦面をなす。本窯の焚口床面の標高は約115mで、等高線に対して直交して構築されている。窯体の煙道及び天井部は全て崩壊している。斜面の傾斜で旧地形を復原すると、地山を削り貫いて窯を構築するための十分な深さを得ることができ、地下式の無階無段登窯とあったと推定できる。形態は、燃焼部中央が最も狭く、煙成部中

央が幅の広く胴張りの長方形状を呈する。窯体の全長は2.14 mを測る。主軸方位はS-89°-Eである。

**燃烧部** 焚口の床面は0.85 mをはかる。床面には中央に露出した岩を避けて、主軸線の右側に不整形の舟底状土壇が設けられており、この上端までを燃烧部とすると、長さは0.92 m、幅は中央で0.58 mを測る。両壁は花崗岩を用いて補強している。

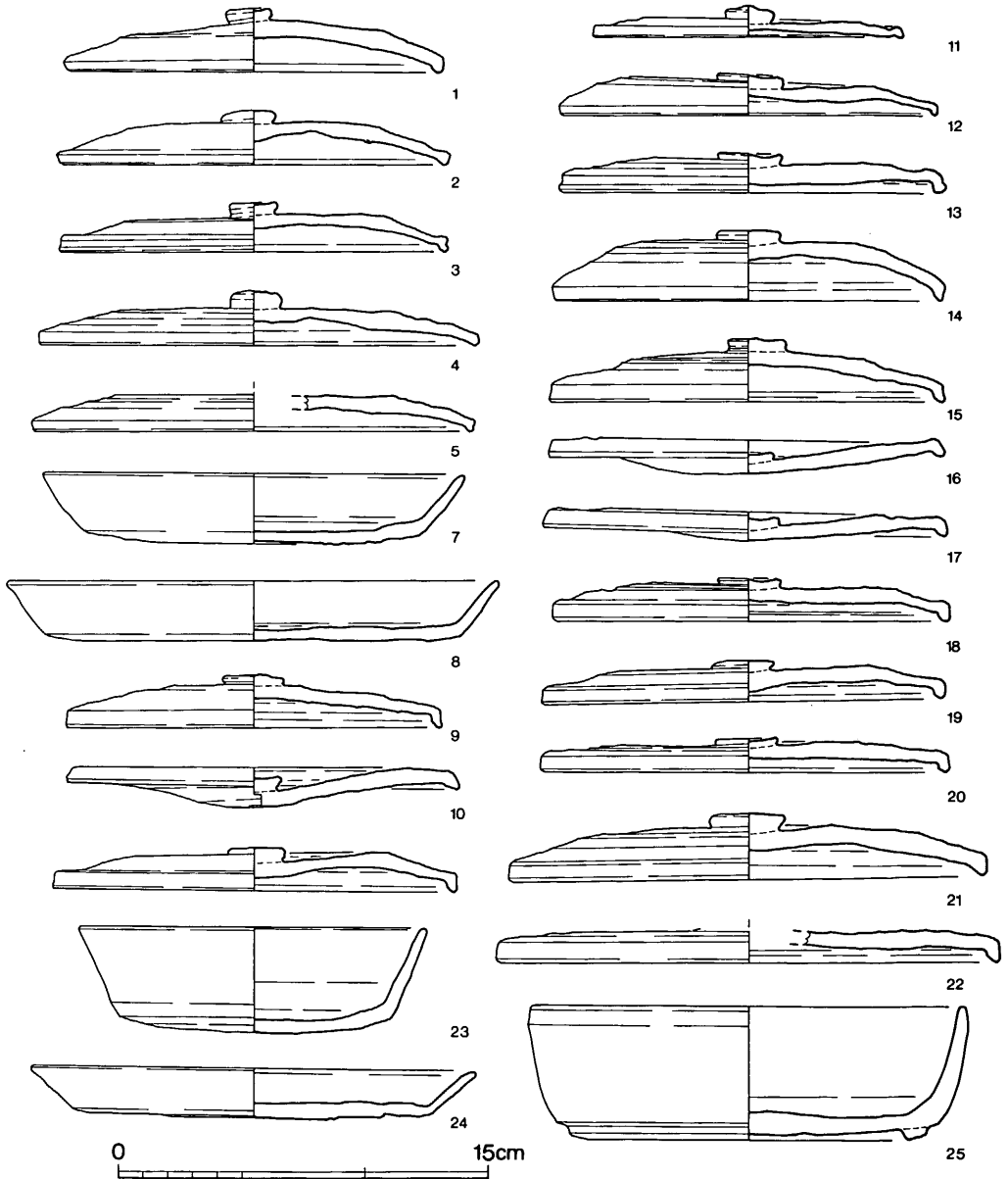


第127図 51号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

**焼成部** 燃焼部の境から奥壁までの距離は、1.22 m、斜距離は1.43 m、床面の最大幅は0.93 mを測る。左右壁とも緩くカーブを描く胴張り形であり、両壁と奥壁の境は、右側は角をもち左側は丸味をもつ。床の傾斜角は $12^{\circ}$ ~ $32^{\circ}$ である。床面に10個の土製置台が認められた。

**煙出し部** 基底部かわずかに残るだけで詳細は不明である。

**前庭部** 焚口から前面に約0.6 m続く。床面はやや傾斜する。



第 128 図 51・52号窯窯内・前庭部出土土器実測図 (縮尺 1/3)

**焚口左側土壇** 1.2m×0.8mの不整形の土壇が設けられ、焚口左側壁の補強に使用された礫を立て据える時に焚口側を埋められている。埋土には炭混入が黒色土が認められた。

**出土遺物** (図版81、第128図)

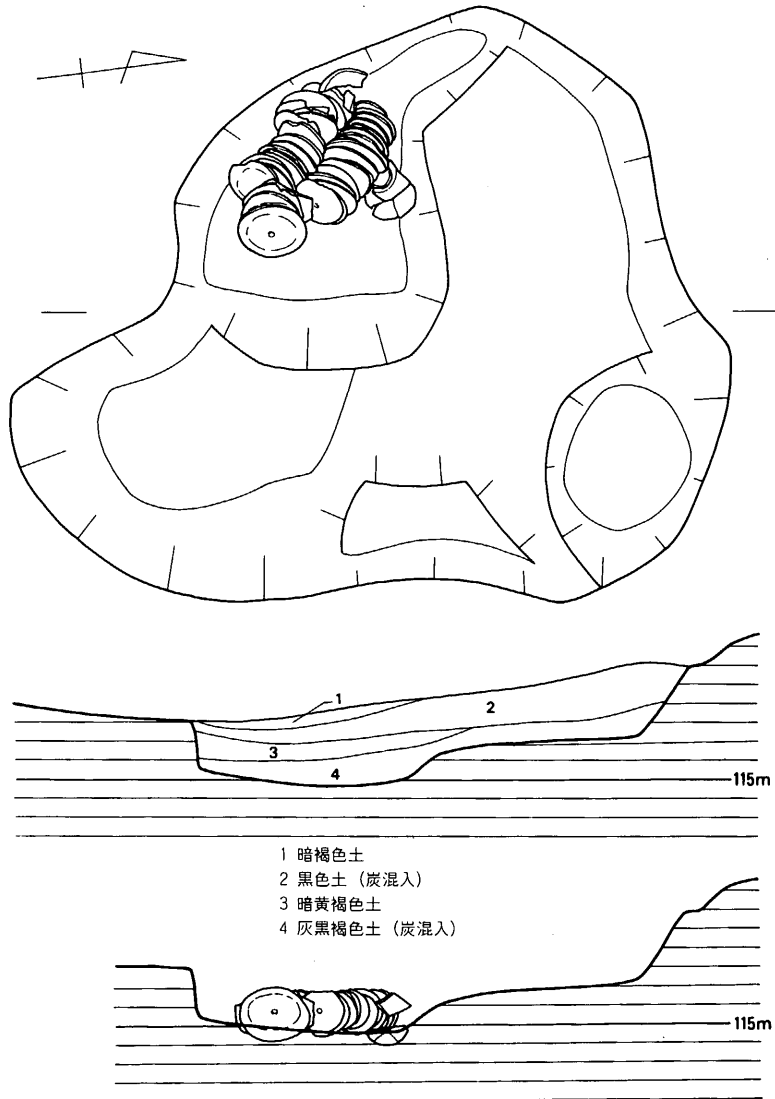
窯内

**蓋杯・蓋 (1~5)** 窯内床面からの出土。口径は15.4cm~17.9cmまで中形品で、天井部は低く、体部との境は明瞭である。口縁は直に下がるものとやや内傾するものがある。

**皿 (6、7)** 体部は直線的に外上方に延びる。7の口縁部はやや外反する。体部と底部の境付近はやや丸味をもつ。外底部は6は末調整。7は板状圧痕を伴う。

前庭部

**蓋杯・蓋 (8・9)** 8は天井が低く、口縁部やや外傾し、端部は丸い。外天井部は末調整。9は焼け歪みで変形する。外天井部は回転ヘラ削り調整。



第129図 51号焚口右側土壇実測図 (縮尺 1/20)

### (3) 51号窯焚口右側土壌 (図版80、第129図)

51号窯の右側(南側)から検出した。南北約1.85m、東西約1.5mの不整形土壌である。深さは0.2m前後を測る。西側の墳底を1段掘り下げた部分に、蓋杯・蓋が整然と二列に並べられた状態で出土した。土器は焼成不良なものが多く、上面には黒色土(炭混入)が被さる。

#### 出土遺物 (図版81~84、第130・131図)

**蓋・杯蓋 (26~73)** 天井部は平坦、あるいは平坦に近く、体部との境が明瞭で、体部の口縁部近くでくぼみをもつものがほとんどである。39・50は天井部に丸味をもつ。口縁部は直に下がるか、やや内傾するもので、口縁端部内面に縞をもつものと、凹めて境界を意識したものがある。66の口縁部は折り曲げずにそのまま外方へ尖らしている。つまみの形状は略台形を呈し頂部に丸みをもつ。部分的な小差は認められない。形態的に大差ない。外天井部は末調整で一部ナデがみられるものもある。焼成は不良なものが多い。

### (4) 52号窯跡 (図版78・79-2、第132図)

51号窯の北側で検出した。51号窯と同様に構築された地下式の無階無段登窯である。天井部と焼成部上部、煙出し部を欠失する。焚口床面での標高は114.85mである。窯の残存長は、3.3mを測り、窯体の主軸方位は、S-75°-Eである。

**燃焼部** 焚口の床面は0.95を測る。床面中央には前庭部にかけて浅い舟底状の窪みがある。焚口から土壌の上端までは0.5m、土壌全体を含めると1mになる。中央部幅は約0.9mを測る。焚口左壁は段々有し、右壁には花崗岩の礫にする補強がみられる。

**焼成部** 上部と天井部を失っている。残存長は燃焼部との境から2.3mを測る。本来の長さは0.4m前後長くなるであろう。床面の形態は、やや胴張り気味であるが、地山の花崗岩のを削りながら掘り進んでいるため左右壁とも蛇行している。最大幅は1.07mを測る。床面も地山の岩石のため直線的である。傾斜面は13°~35°である。焼成部下部で、土製置台や須恵器片を検出した。

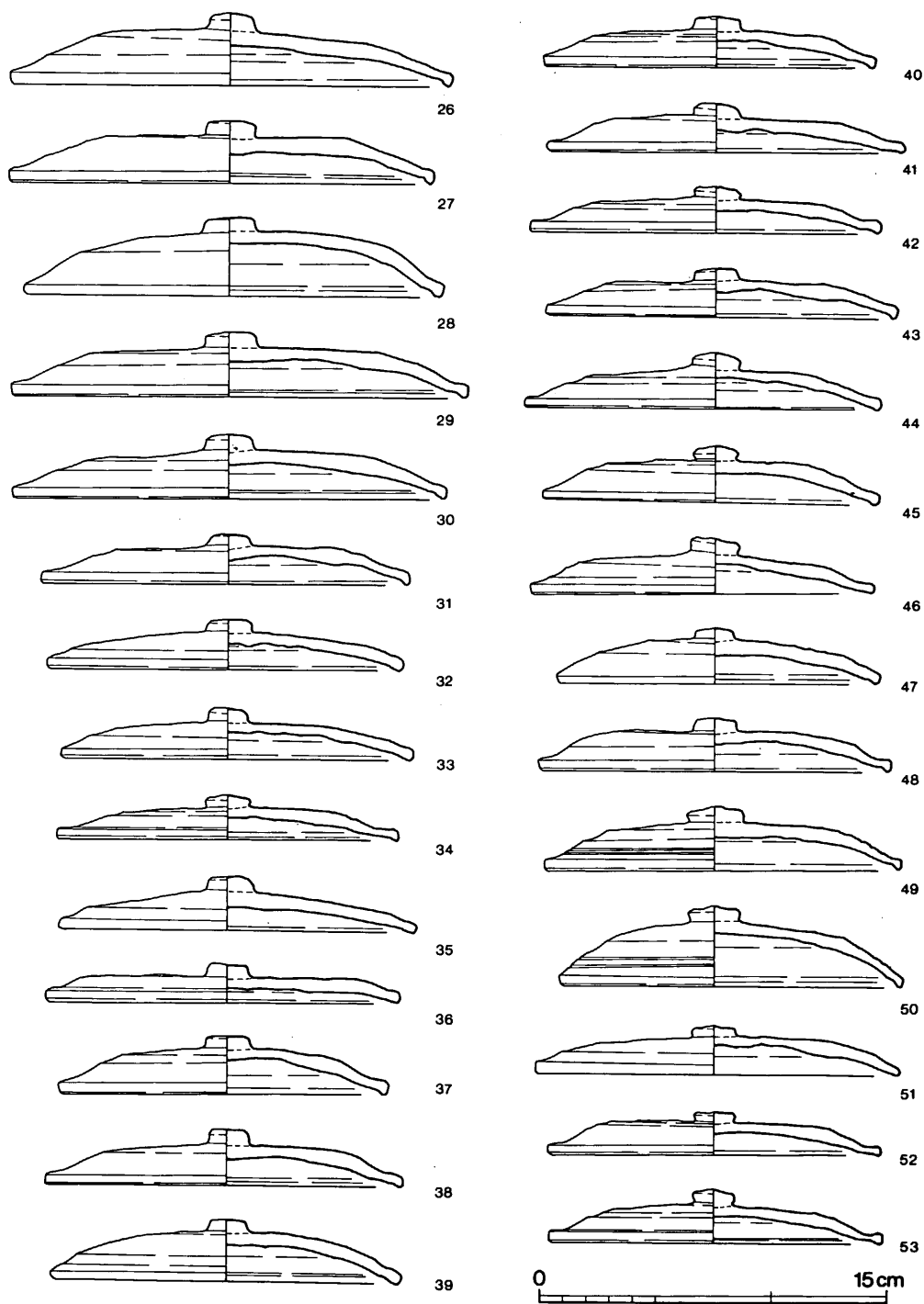
**前庭部左側土壌** 1.55×1.2mの略長方形のプランを呈する。深さは約0.4mで、埋土には炭・灰の混入が認められた。

#### 出土遺物 (図版81、第128図)

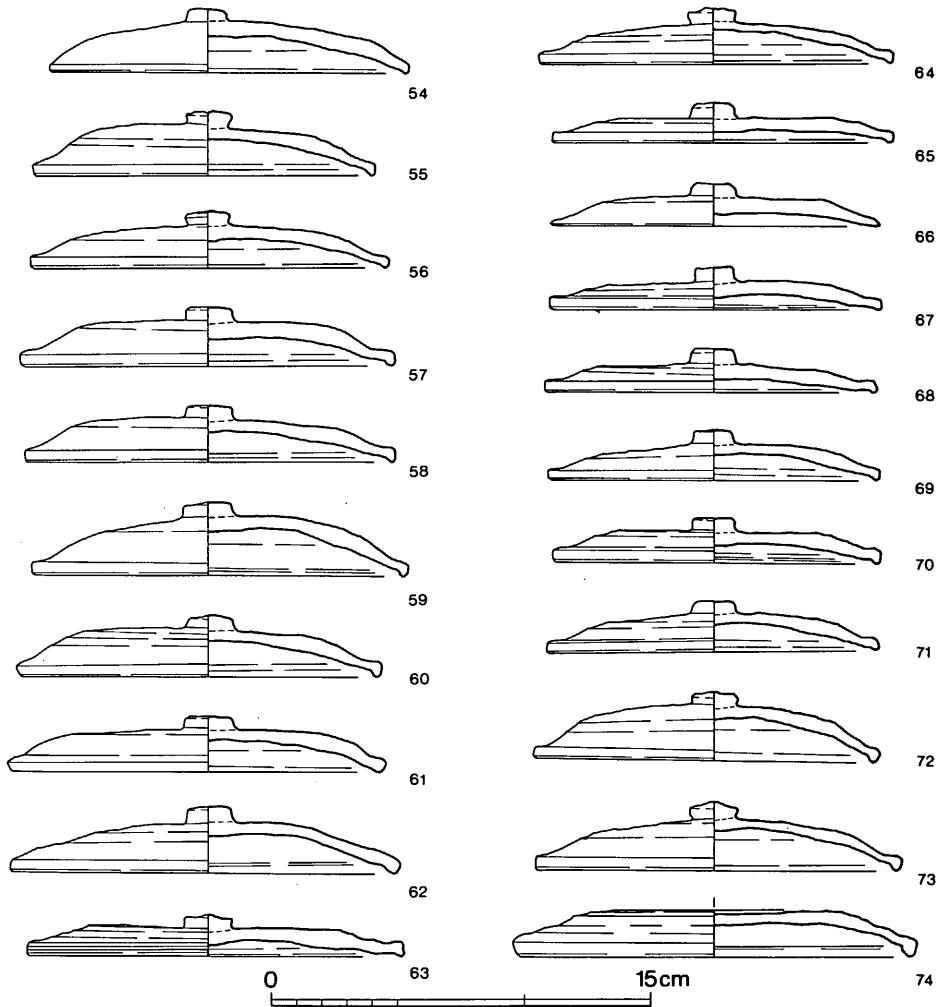
窯内の焼成部床面からの出土である。

**蓋杯・蓋 (11~22)** 天井が低く扁平なものが多い。14・15・21は天井が高い。口縁部は折曲げられ、直行あるいは外傾し、端部は丸い。14は内傾し、断面三角形を呈する。外天井部は





第130图 51号焚口右侧土城出土土器实测图① (縮尺 1/3)



第131図 51号焚口右側土壙出土土器実測図② (縮尺1/3)

11・14・20が末調整で、他は回転ヘラ削り調整である。

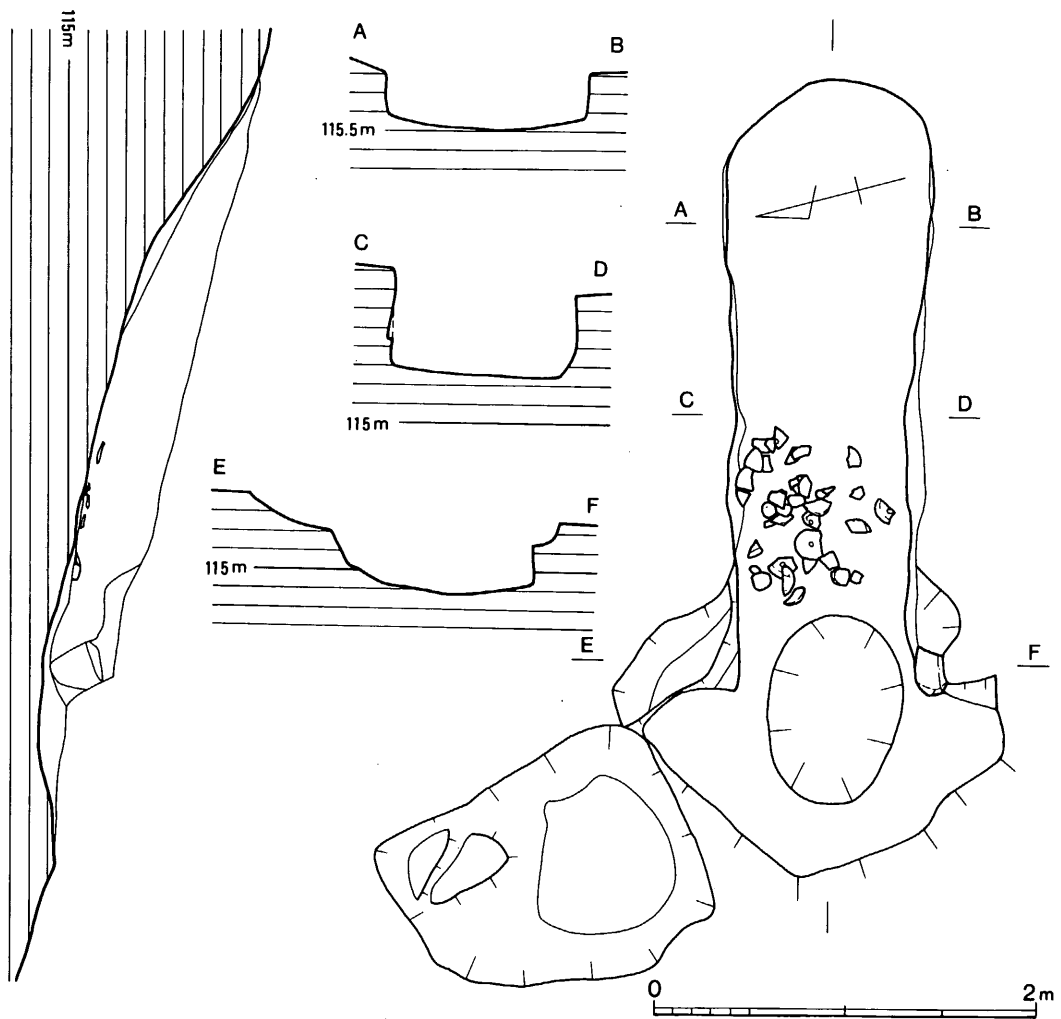
**蓋杯・身 (25)** 口径17.5cmを測る。体部は深く、やや内彎する。高台は外底端に貼付される。底部は回転ヘラ削り調整。

**杯 (23)** 体部は直線的に上外方へ延び、端部は丸い。外底部は末調整である。

**皿 (24)** 体部は外傾し、口縁部をわずかに外反させる。外底部は末調整。

#### 左側土壙

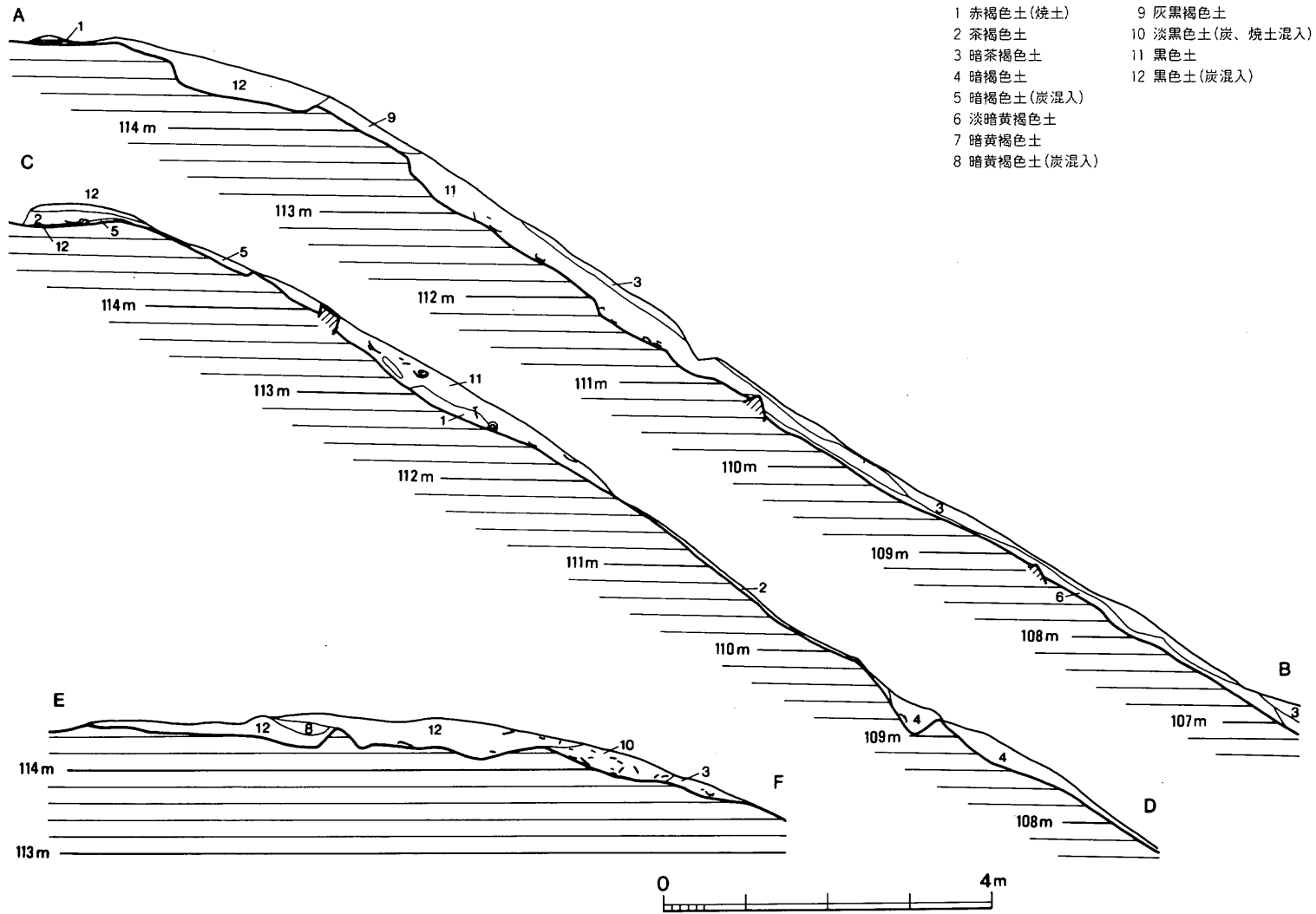
**蓋杯・蓋 (74)** 天井部は平坦で、口縁部は内傾する。つまみはない。天井部と体部の境は回転ヘラ削り調整。



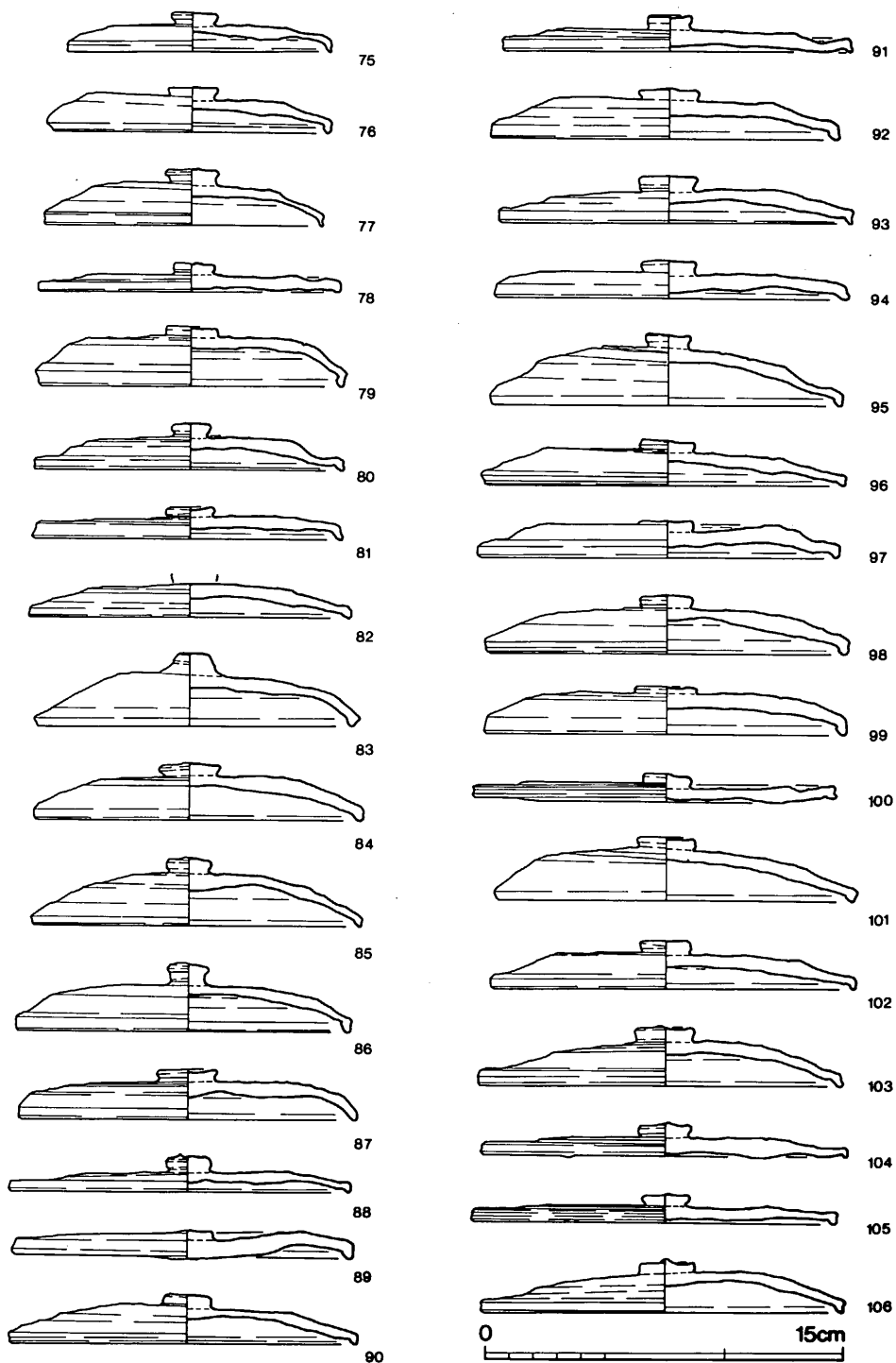
第132図 52号窯実測図(縮尺1/40)

(5) 灰原(図版75-2、第133図)

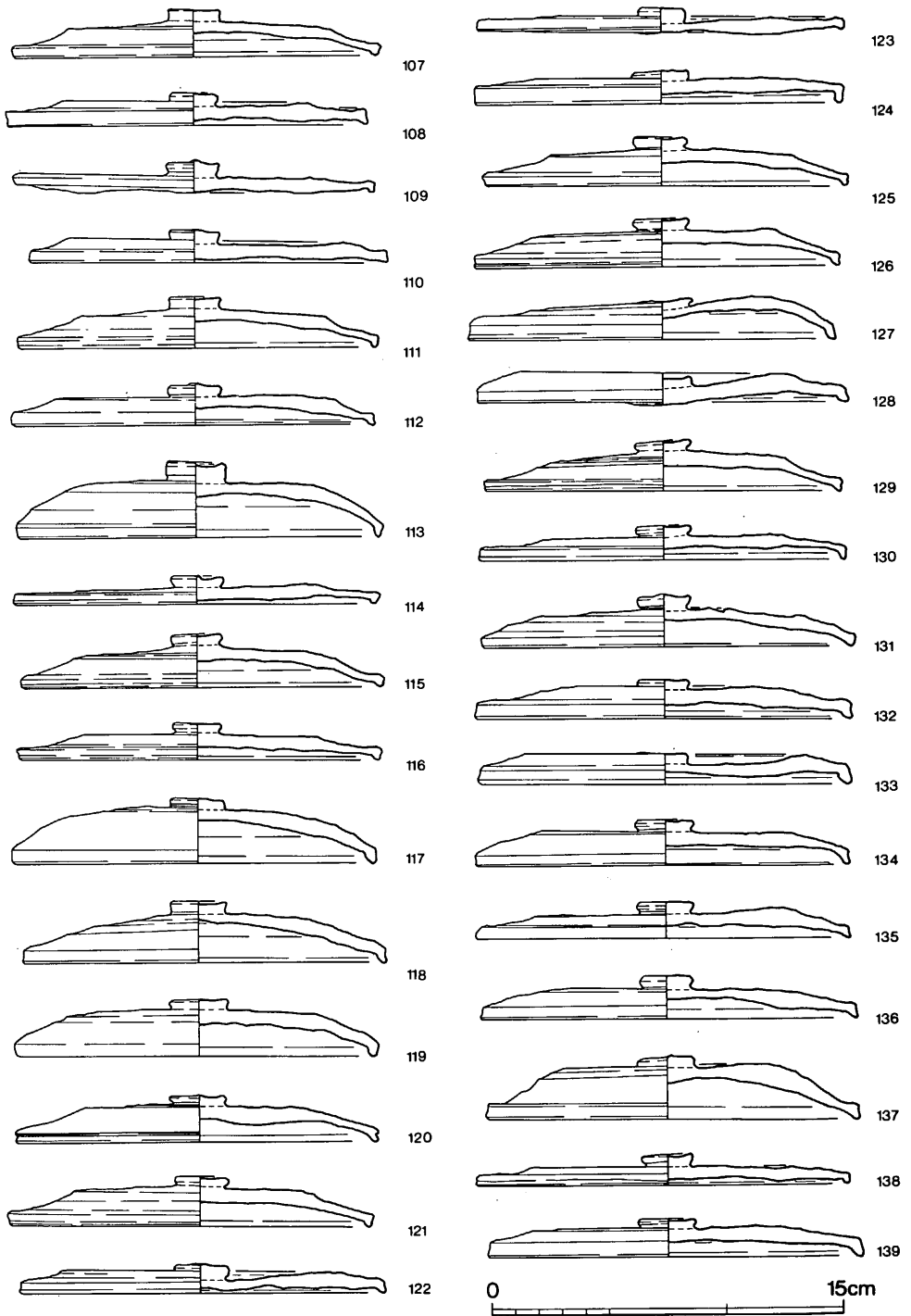
東から西へ傾斜し、標高115mの51・52号窯の前面で幅約6m、標高112m付近で最大幅となり約10mを測り、東西の長さは約20mの広がりをもつ。標高112m以下の南側端は斜面の崩壊のため灰原も流出している。丘陵裾部は林道で削平されている。51号窯の主軸線上の土層観察では、炭を混入した黒色土は、51号窯前面の標高114.2~115mの部分と、標高109~113.6mの間に厚さ約0.4mの堆積層が認められた。52号窯の主軸線上の土層では、標高112~114mの間に焼土・炭を混入した黒色土が厚さ約0.4mの堆積層が認められた。この黒色土の堆積層は斜面の



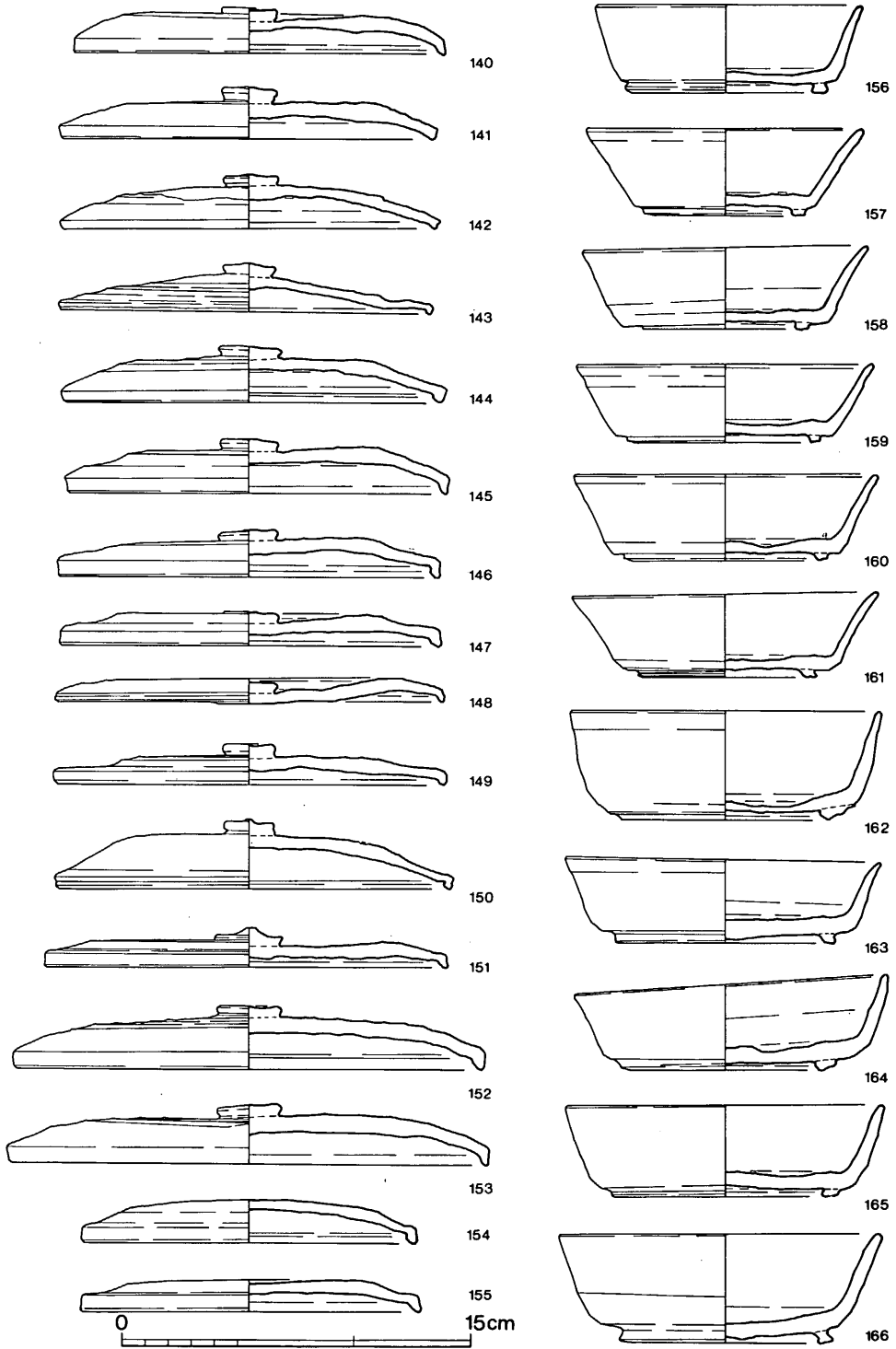
第 133 图 M-1 地区土层图 (缩尺 1/80)



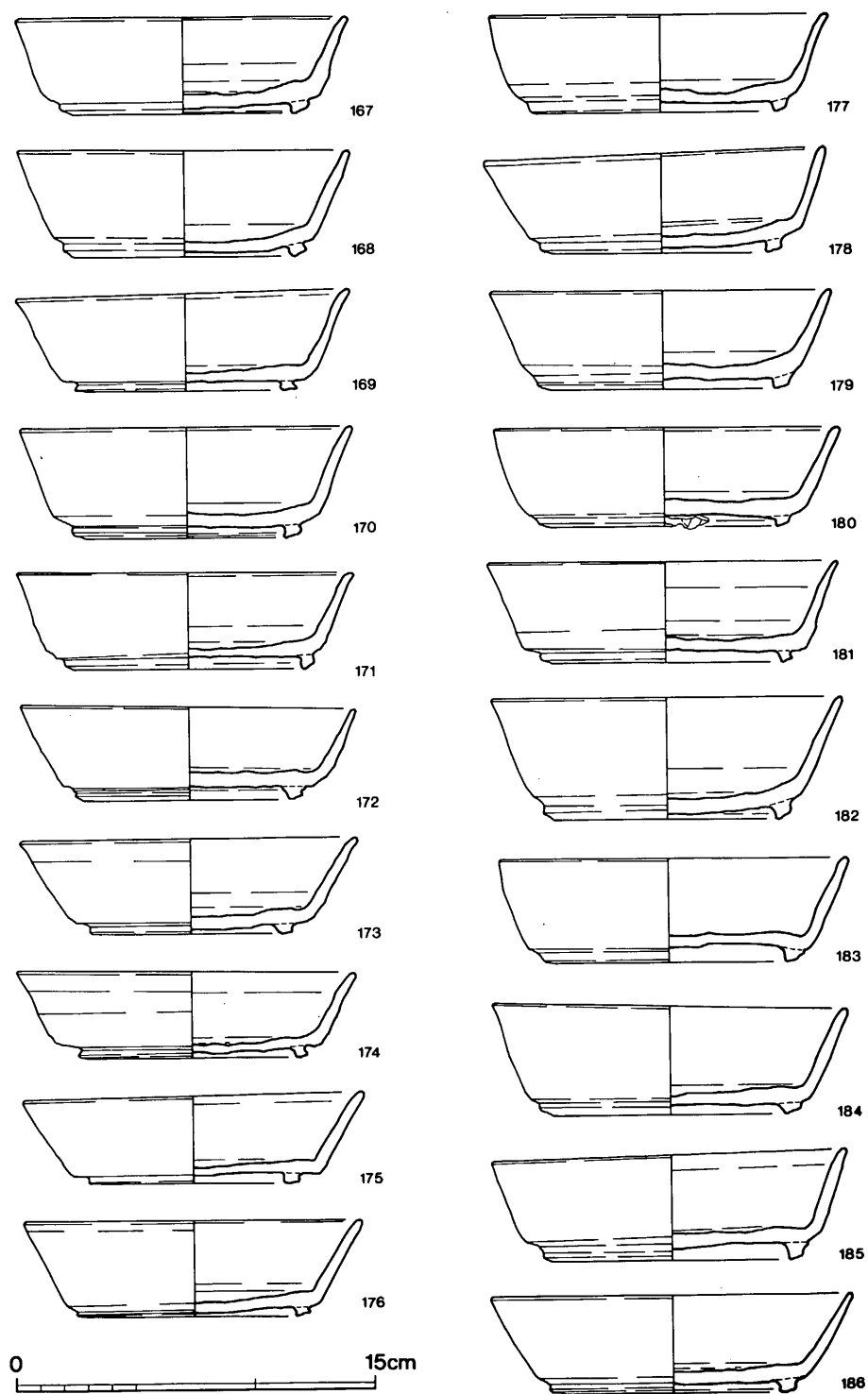
第134图 51·52号窯灰原出土土器実測图①(縮尺1/3)



第 135 图 51·52号窯灰原出土土器実測图②(縮尺 1/3)

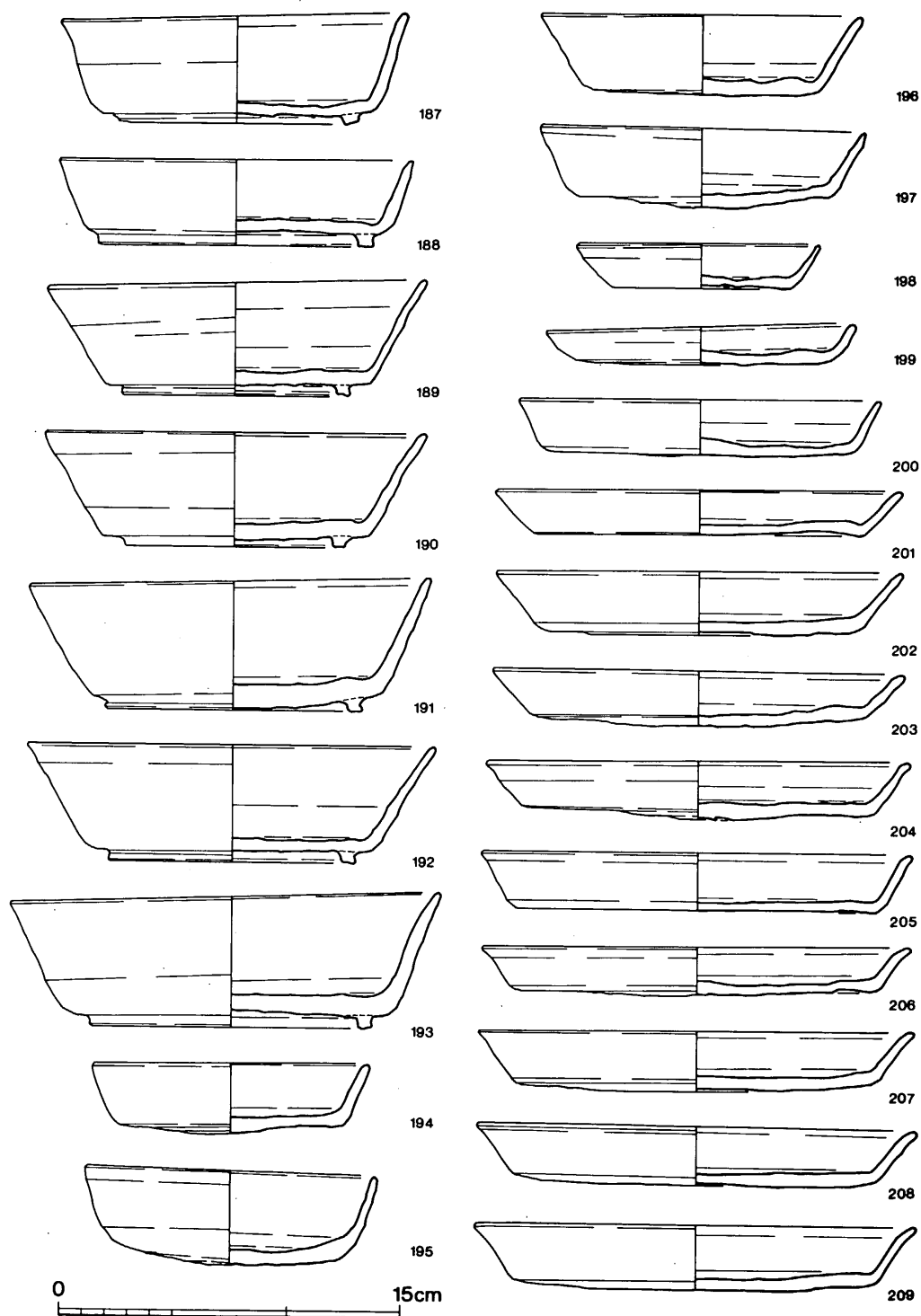


第 136 图 51・52号窯灰原出土土器実測图③ (縮尺 1/3)

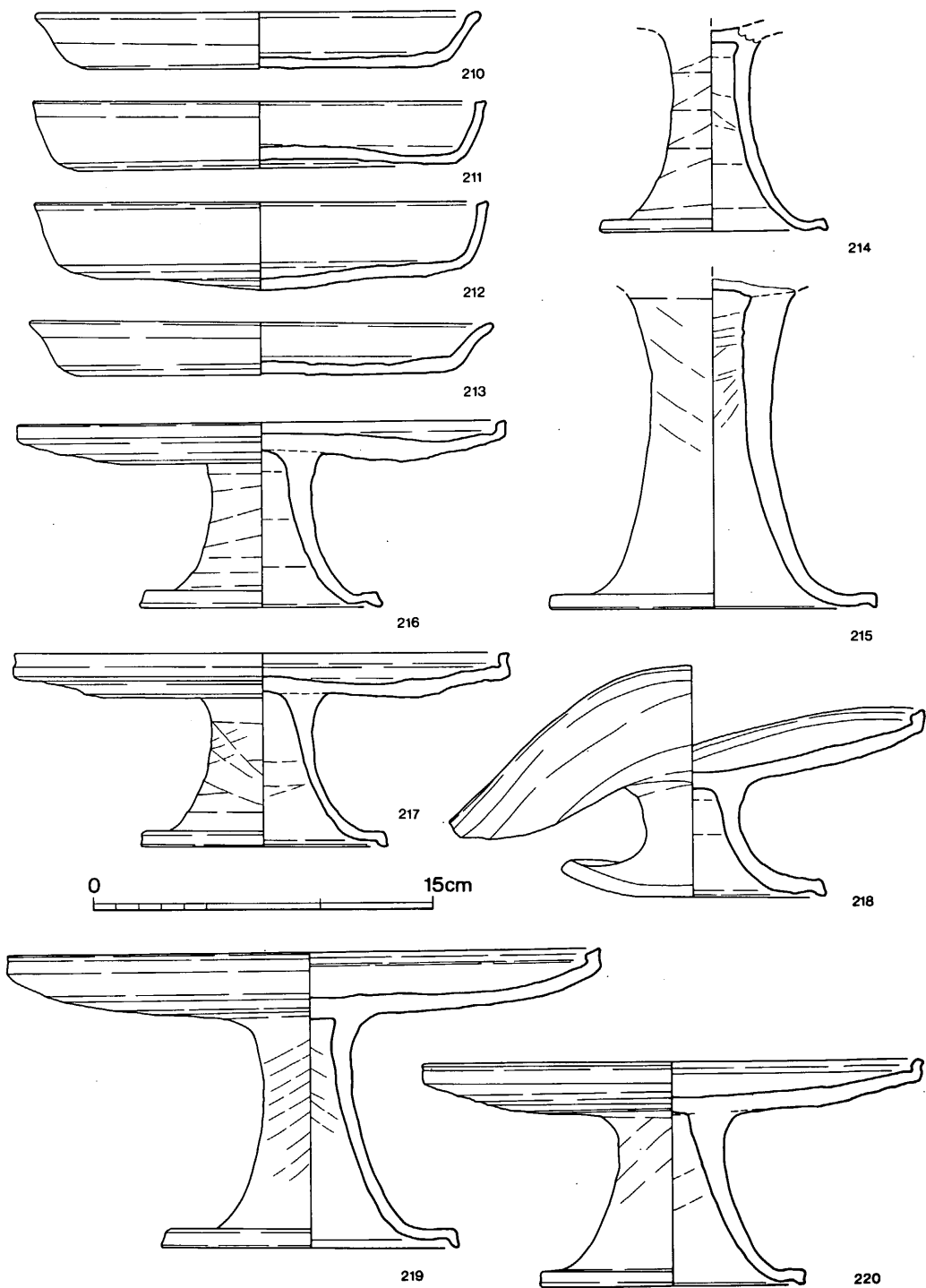


第137图 51・52号窯灰原出土土器実測図④(縮尺1/3)

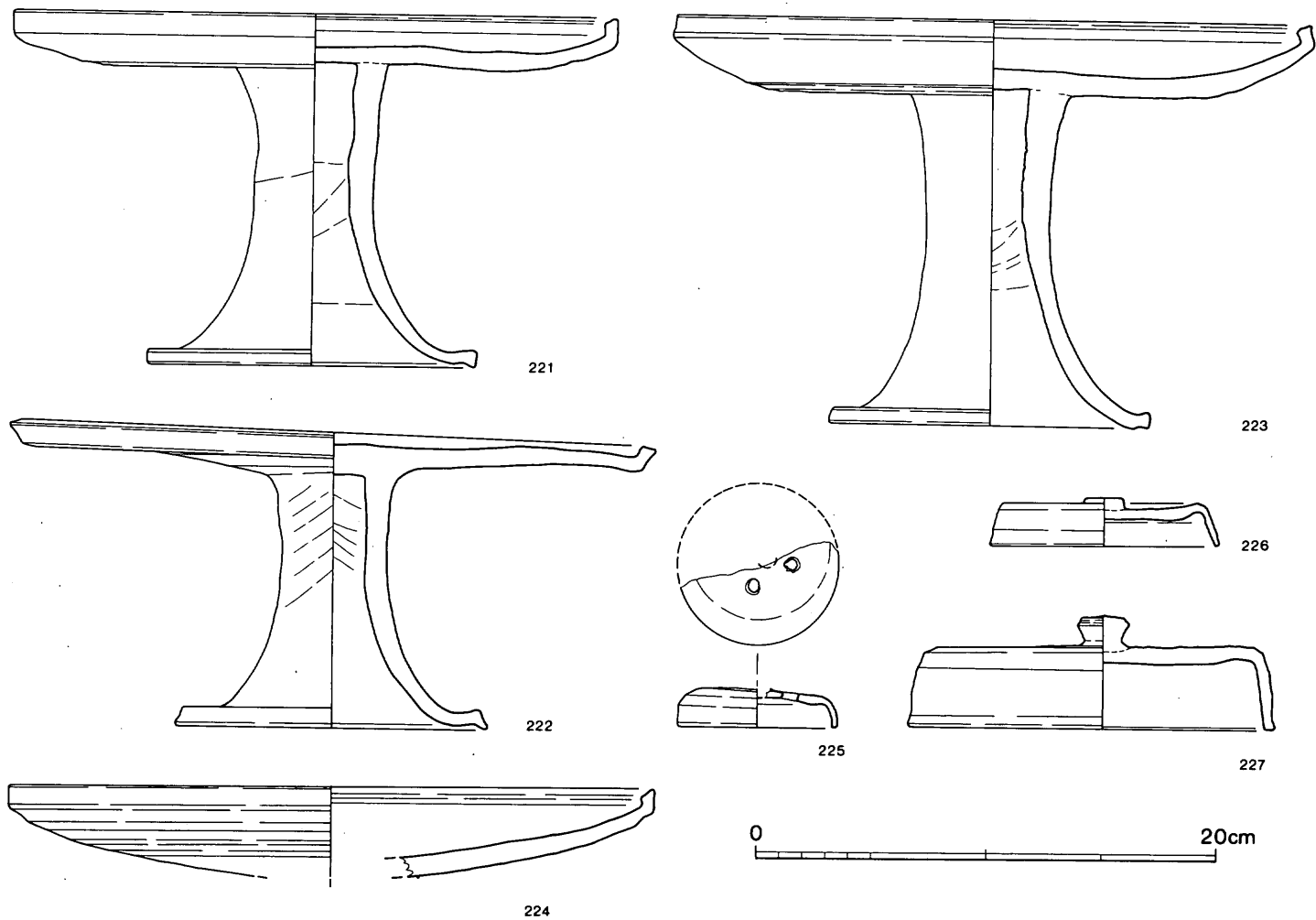




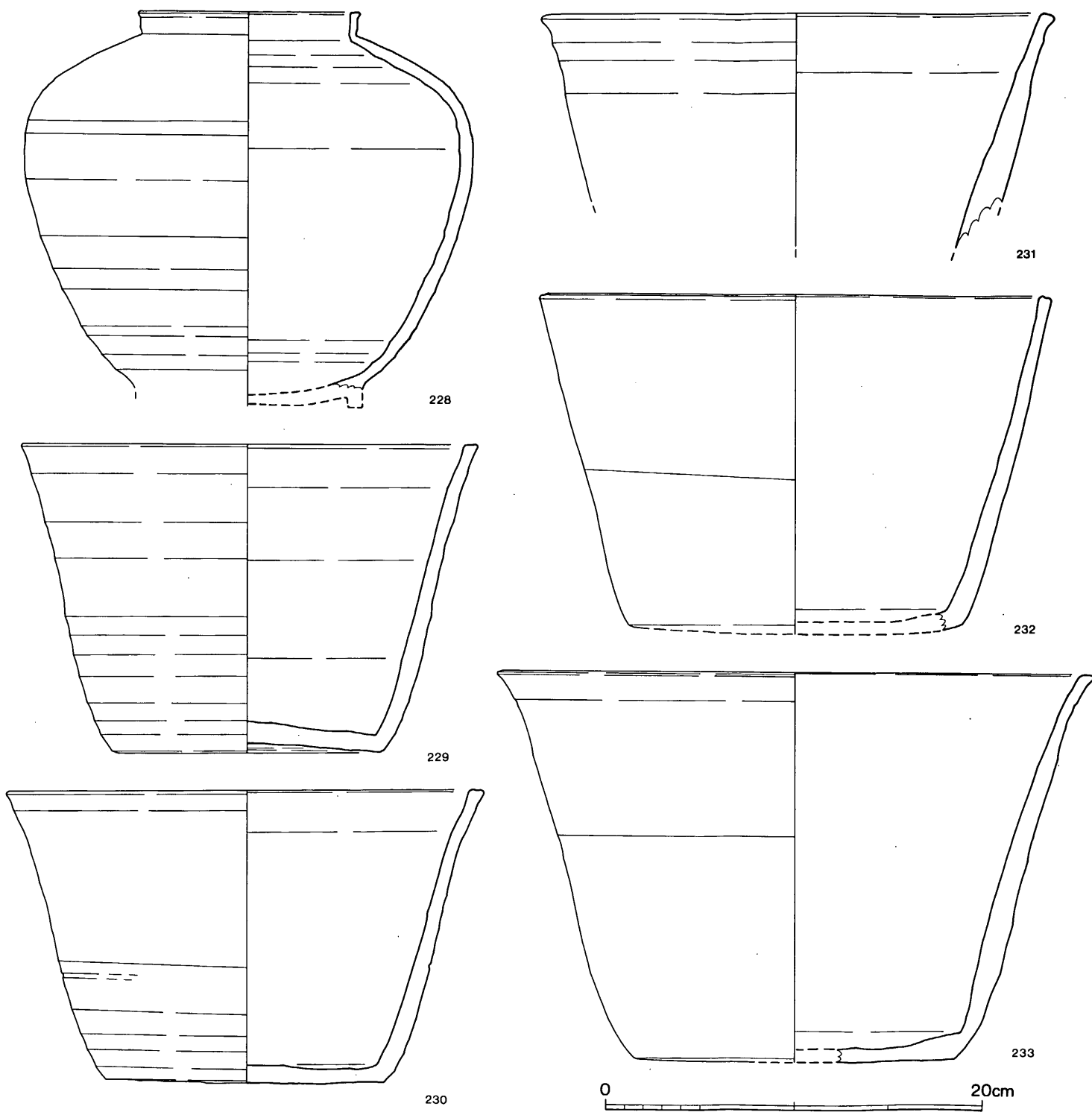
第138图 51·52号窯灰原出土土器実測图⑤(縮尺1/3)



第139图 51·52号窯灰原出土土器実測図⑥ (縮尺1/3)



第140图 51・52号窯灰原出土土器実測図⑦ (縮尺1/3)



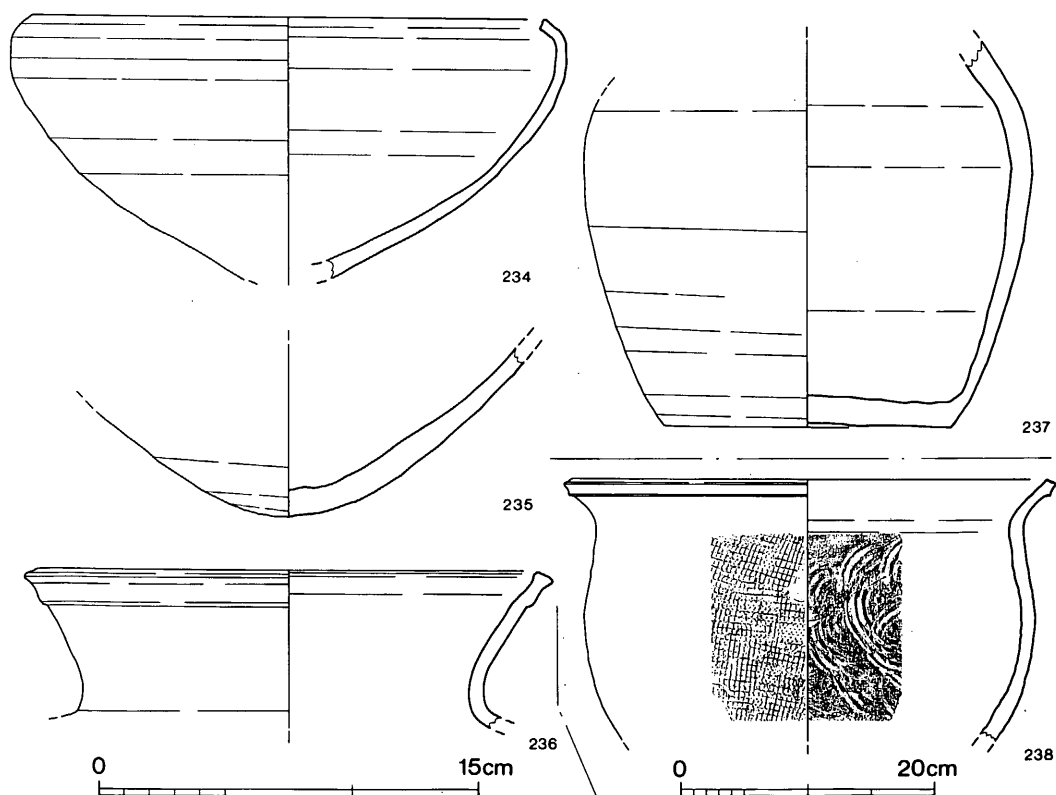
第141图 51·52号窯灰原出土土器実測図⑧ (縮尺1/3)

凹地にあたり、東西・南北幅約6m程の広がりである。土器もここから出土が最も多い。

### 出土遺物（図版84～92、第134～142図）

**蓋杯・蓋（75～155）** 天井部に丸味をもち体部の境が不明瞭なもの（83・85・117・118）。天井部が平坦で、体部との境が明瞭なもの（76・77・79・82・84・86・87・90・92・93・95～99・101・102・106・107・111・112・115・116・119～121・125～129・131・133～137・140～150・152・153）。天井部が低く扁平なもの（75・78・81・88・89・91・94・100・104・105・108・109・110・114・122～124・130・132・138・139・151）。天井部は平坦で、体部は口縁部近くでくぼみをもつもの（80・103）。口縁の形態は、内傾・外側・直に下がるものがある。口縁部の中央を凹めるものや、段を有するものもある。つまみの形状は擬宝珠様のものが多い。131は天井部は工具痕、144はマキアゲの状態が明瞭である。154・155はつまみもたない蓋である。154は天井部に丸味をもち、155は平坦である。

**蓋杯・身（156～193）** 形態で2種に分けられる。体部はやや外反気味に上外方に延び、高台は外底端の内側に貼付されるもの（156～161・163・166・167・169～171・173～174・181・



第142図 51・52号窯灰原出土土器実測図⑨（縮尺1/3・1/6）

187・193)。体部は直線的に上外方に延び、高台を外底端に貼付するもの(178・179・180・182・185・186・188)。高台を外圧端の内側に貼付するもの(168・172・175・176・184・189～192)。

**杯**(194～197) 195は底部と体部の境が丸味をもつ。他は境が明瞭である。

**皿**(198～213) 口径13.7cmから20cmをこす大形品までである。底部と体部の境が明瞭で、口縁部が外反する211・213は底部と体部の境が丸味をもち、体部は内彎気味に立上る。

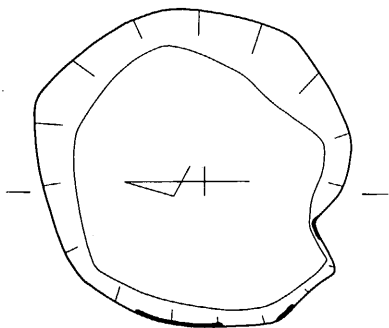
**高杯**(214～224) 杯底部と体部の境が明瞭なもの(216・217・220・221・223と丸味があるもの(219・224)、平坦なもの222がある。脚高6.7～7.5cm(216・217・220)、10.3cm(219・222)、13cm以上のもの(221・223)がある。外杯底部は回転ヘラ削り調整、脚内外面にツボリ痕が認められる。

**短頸壺・蓋**(225～227) 225は1/2の破片で天井部に2個の焼成前の穿孔がある。226は内面体部はヨコ方向の静止ヘラ削りを施す。227は体部が高い、外天井部回転ヘラ削り調整。

**短頸壺**(228) 52号窯埋土中・灰原・表土の破片が接合した。最大径は上位にある。

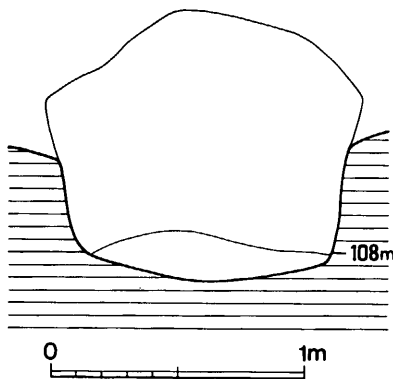
**鉢**(229～233) 口縁部の差異は認められるが、形態的、手法的には大きな変化はない。

**鉄鉢形鉢**(234・235) 234は口縁部大きく内側へ屈曲させる。体部・底部かけて回転ヘラ削り調整。



**壺**(237) 内彎させた胴部と平坦で径の大きな底部との境は鋭い。胴部下位および底部外面は回転ヘラ削り調整。

**甕**(236・238) 中形236と大形238の甕である。238の外面格子文様のタタキ目、内面は孤状の痕跡を残す当具痕がみられる。



#### 土壌(第143図)

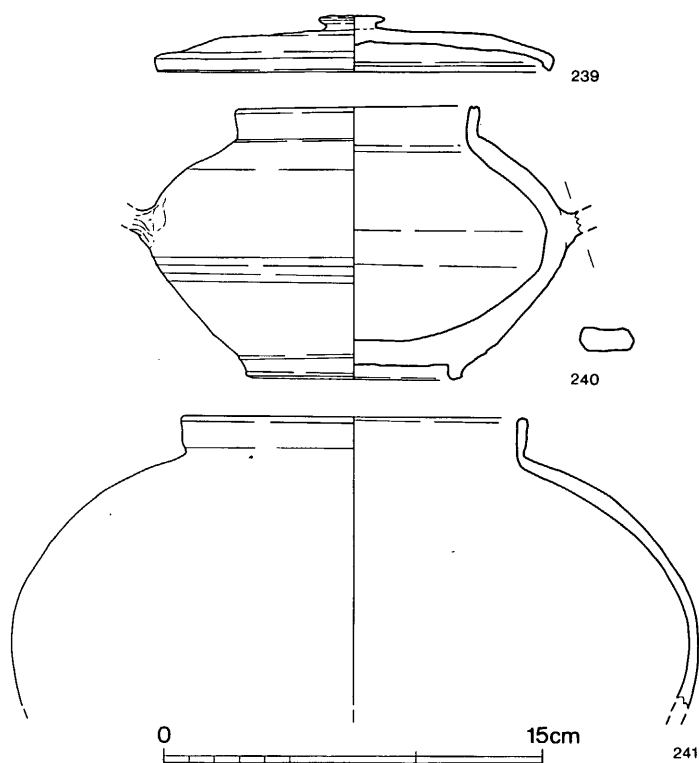
52号窯主軸線上の標高109mの灰原内から検出した土壌で、周壁の一部に熱を受け赤変した部分が認められた。暗褐色土で埋り、須恵片が出土した。土壌の性格は不明である。

#### 出土遺物(第144図)

**蓋杯・蓋**(239) 天井部は低く平坦である。口縁部は内傾する。外天井部は未調整。

**短頸壺**(240・241) 240は小形の把手付の短頸壺で

第143図 灰原内土壌実測図(縮尺1/30)



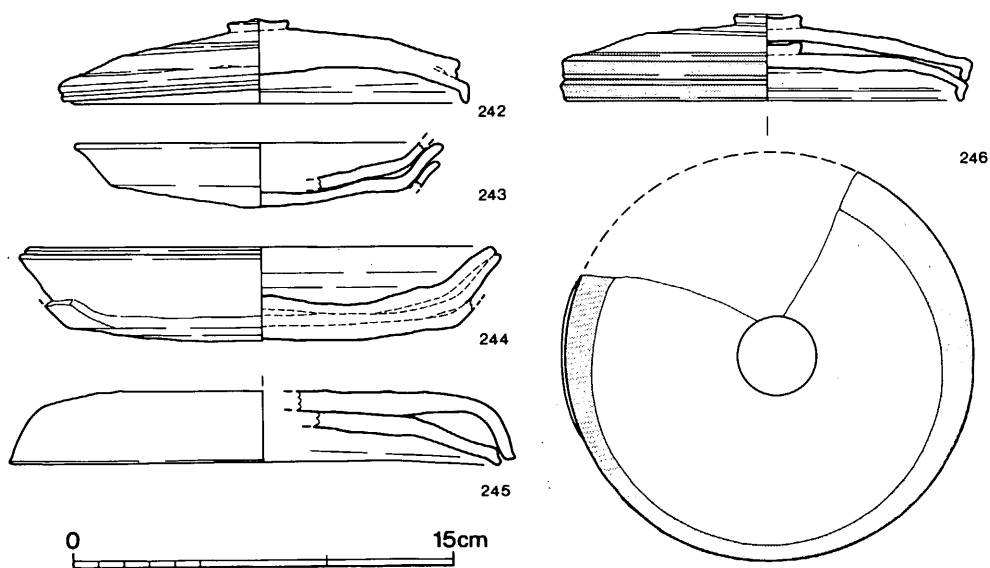
第144図 灰原内土城出土土器実測図（縮尺1/3）

ある。胴部から底部かけての器肉は厚い。底部に水平で、端に高台を貼付する。241は破片で全形は不明である。器壁も摩滅している。

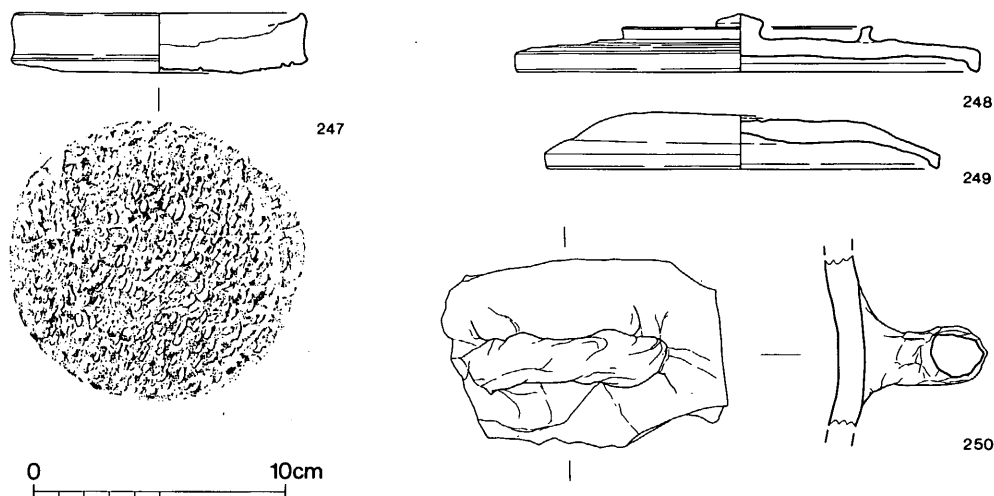
**重ね焼き**（図版92、第145図）

**重ね焼き土器**（242・246）

同器種の組み合わせである。242は上の蓋外面の下の蓋内面に重ね焼きの痕跡があり土器片が付着している。246は重ね焼きによる色の違いが著しい。上部の外面は口径の違う土器を重ねており杯身の可能性もある。やはり土器片がわずかに付着し



第145図 重ね焼き実測図（縮尺1/3）



第146図 灰原表土出土土器実測図(縮尺1/3)

ている。243・244は皿三枚の重ね焼きで、上下の外・内面に重ね焼きの痕跡が残る。245は大形の蓋の組み合わせである。すべて灰原の出土。

#### 灰原・表土出土土器(図版92、第146図)

**不明土器(247)** 片面は剝離している。もう一方はナデ調整の後、ヘラ状工具による刺突文が施される。径11.85cmを測る。

**蓋(248・249)** 248は天井頂部に擬宝珠様のつまみを有し、さらに天井平坦部に径9.9cmの環状のつまみを貼付している。約1/4の破片のため穿孔等は確認できないが、香炉の蓋の可能性もある。249は天井頂部につまみの接合面が認められる。

**把手(250)** 中形鉢の把手と思われる。外面は格子のタタキ目、内面に青海波の当具痕がある。

#### (6) 小 結

丘陵尾根線は大野貯水池の建設時に削平され旧状は明らかではないが、現状では51・52号窯は斜面上部に位置している。両窯ともに上部を削平されていた。地山は花崗岩が露出しており窯を構築するには立地条件は悪い。51号南側から検出した不整形土壇の墳底には杯蓋が二例に整然と並べられた状態で出土した。土壇の埋土は炭が混入した黒色土で、51号窯の灰がすてられたものと思われるが、窯の前庭部より高位置にあり捨場としてはやや疑問が残る。灰原の状態から見て土壇上部に窯の存在は考えられない。当初は作業場として使用されたものであろうか。祭祀土壇の可能性も考えて置く必要がある。出土遺物からこの窯跡群は、8世紀中頃～後半にかけて操業されたものと思われる。(池辺)

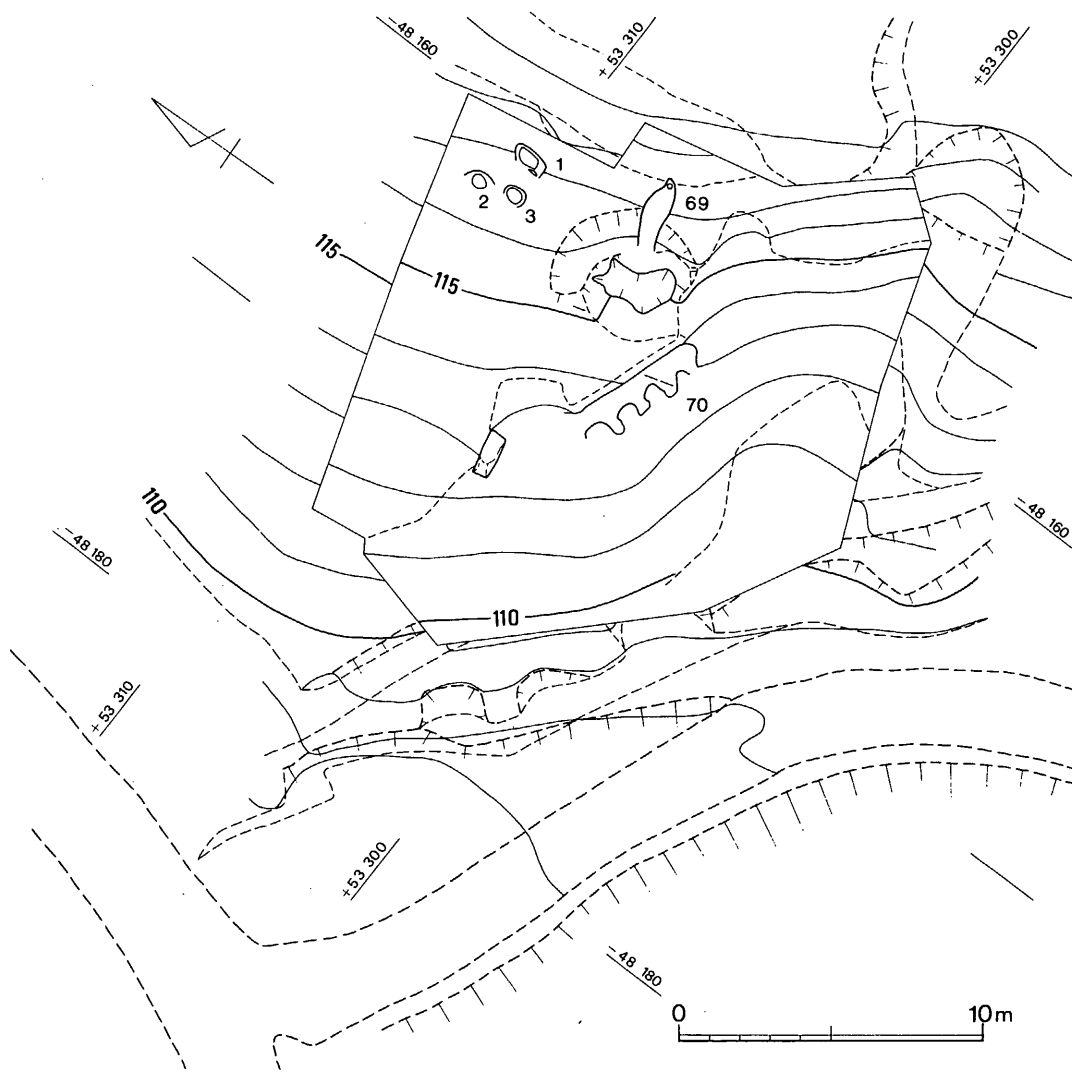


## 5 M-2 地区（笹原窯跡群）の調査

### （1）調査の概要（図版93、第147図）

M-2 地区は、M-1 地区と同一丘陵上に遺存する、M-1 地区とは直線距離で約50mほどの位置である。

調査前からの懸念事項である水没地区の取り扱いについて、ダム事務所と協議の結果、窯本体と灰原は、常時満水位以下に存在すると推定されるため調査を実施することとなった。



第147図 M-2地区窯跡配置図（縮尺1/250）

調査の結果、西側の斜面上に2基の窯跡を検出した。斜面中腹に従来の窯跡群で見られる69号窯と、斜面下部で等高線に並行して構築された。補助燃焼孔をもつ70号窯跡である。この形態の窯は、ダム建設地内では唯一の例となった。

## (2) 69号窯跡 (図版94、第148図)

南西斜面の中腹に花崗岩パイラン土の地山を削り貫いて構築された地下式無階無段の登窯である。窯体の主軸方位はN-80°-Eで丘陵の等高線に対してやや斜交する。窯は標高115.2~117.8mの間に造られ、尾根までの比高差は約15m、裾部の道路までは9mである。天井部の大半と煙出し部の上端を削平されている。両壁天井部の壁も剝落が著しい。窯の全長は3.75m。床面の形態は、燃焼部中央付近が最も狭く、焼成部中央が広がるが、胴張りは左右対称ではなく歪である。貼床等は認められない。

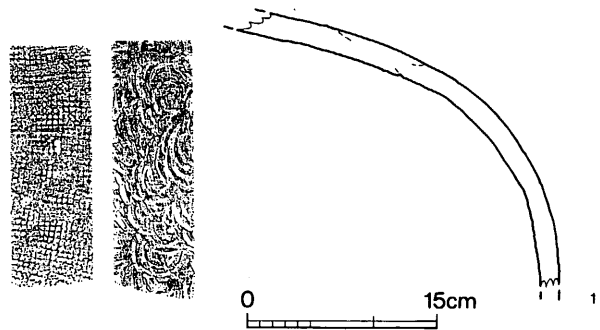
**燃焼部** 焚口の床面は0.85mを測る。傾斜変換部は明瞭ではないが、右側の立石から判断すると約0.85mとなる。左右壁に花崗岩を使用した補強がなされているが、これを除去し立割の結果、左壁で二面の壁が確認できた。右壁は8個の礫が存在しこの間隙には炭や壁体のブロックが含まれていた。除去跡の壁は焼けていない。左壁から判断すると、当初の壁より約0.2mほど幅を狭め、焚口を約0.4m前面に移動して作り直されたことになる。

**焼成部** 傾斜変換点から奥壁までは長さ2.9m、斜距離は3.34m、床面の最大幅は0.97mを測る。窯体の断面形は奥壁から1.1m前面では左壁の内傾度が強いカマボコ型を呈しており天井部までの高さは0.35m程に復原できる。床の縦断面は焼成部中央までは緩く彎曲し、奥壁まではかなり直線的である。傾斜角は、10°~36°である。

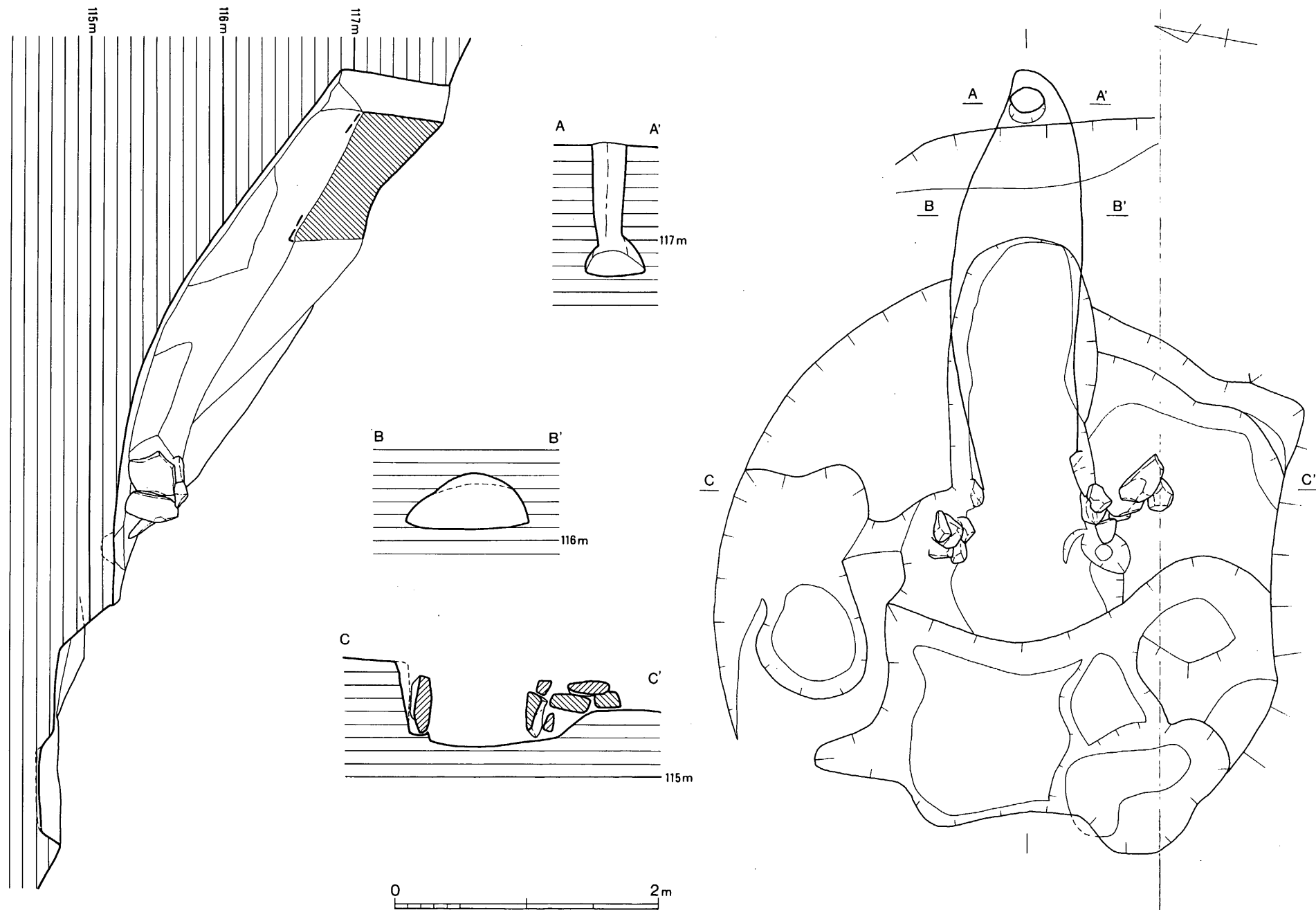
**煙出し部** 奥壁の基底部から7°内傾させた筒形の煙道部であり、基底部からの現存長は0.85m、直径0.27~0.3mである。煙道の平面形は円形というより五角形に近い形状で、一部に工具痕が認められる。

**前庭部** 焼成部前面は、左・右壁から連続させて不整形に掘削されている。長さ約0.6m。

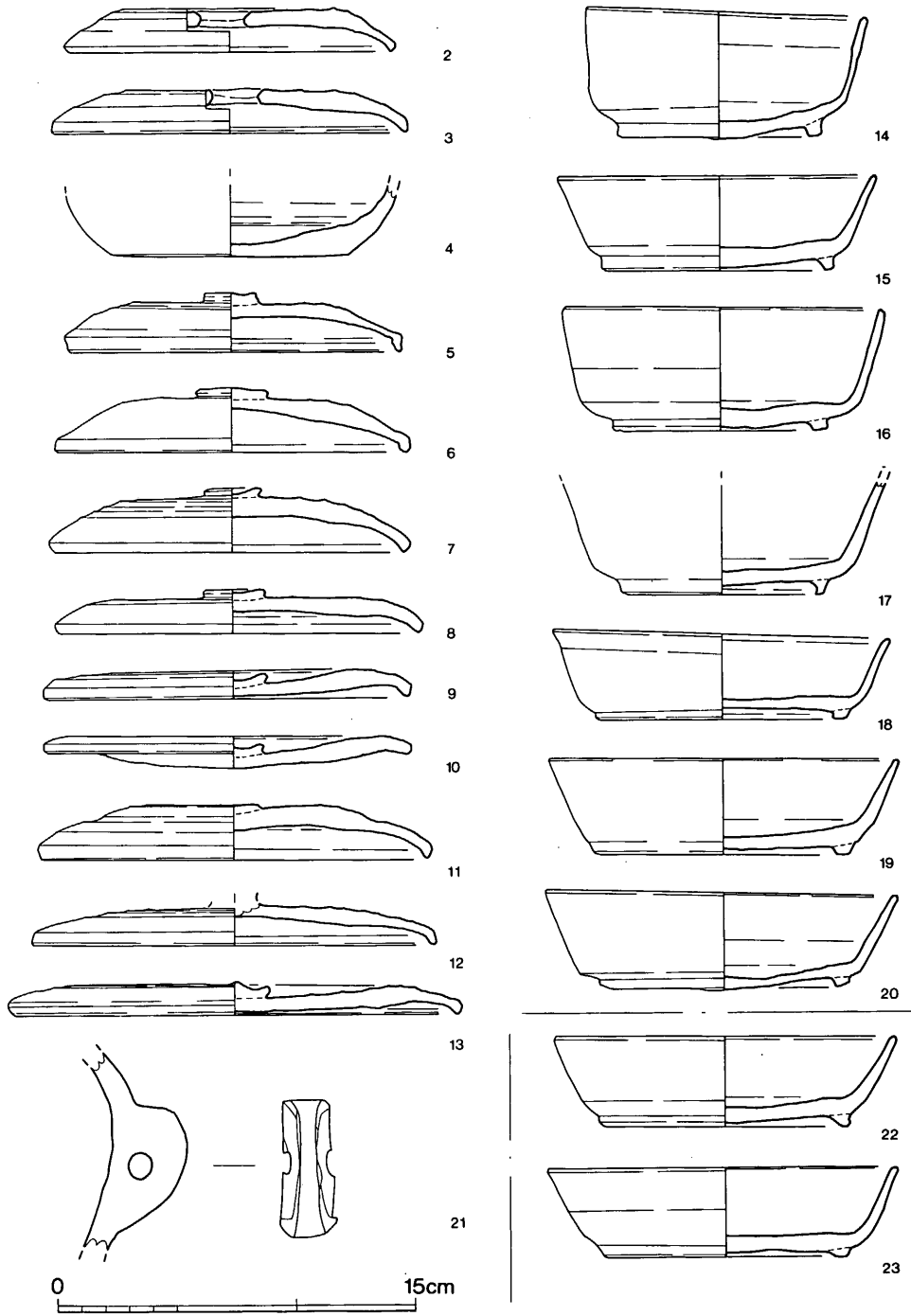
**前庭部土壌** 焚口から0.6m前面に土壌端がある南側は崩壊している。不整形で階段状の平坦部を有する。前庭部床面から最深部まで約0.6mである。埋土は炭が混入した黒色土で須恵器が出土した。



第149図 69号窯出土土器実測図 (縮尺1/6)



第 148 图 69号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



第150图 69号窯前庭部・灰原出土土器実測図（縮尺1/3）

## 灰原

灰原は流出し残っていない。

## 出土遺物（図版100、第149・150図）

### 窯内

**甕（1）** 甕の胴部片である。外面に格子のタタキ目、内面に同心円文の当具痕を残す。

### 前庭部

**穿孔土器（2～4）** 2・3は杯蓋の天井部平坦部中央に焼成前に穿孔される。4は杯の底部に穿孔される。焼成前と思われる。

### 前庭部土壙・灰原

**蓋杯・蓋（5～13）** 5～7は天井部は高くやや丸味をもつ。8・12は天部が低く、平坦である。9・10は焼け歪む。口縁部は、5・6・12が折り曲げ、7・8・9・11・13は下方を引き出して成形される。5・12は重ね焼きの痕跡がある。

**蓋杯・身（14～20）** 14～16・19・20は体部口縁部は直線的に上外方へ延びる。17・18はやや外反気味に立上る。外底部は未調整。

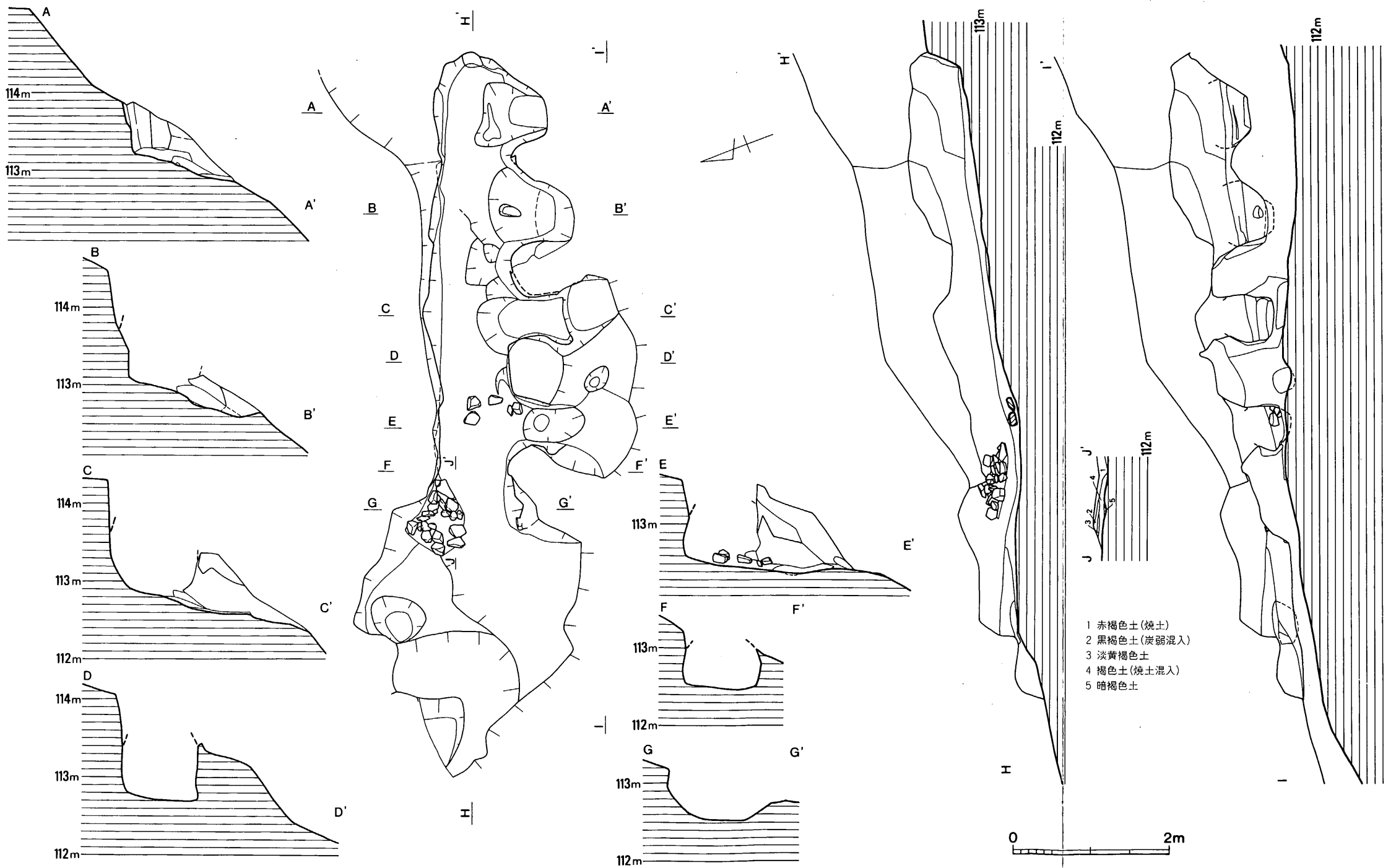
**把手（21）** 全体を削って仕上げる。

## （3）70号窯跡

北東から南西側に傾斜する斜面上に構築された窯である。窯体の天井部および上部窯は崩壊のため遺存していないが、燃焼部および第一燃焼孔の天井部は発掘後の写真撮影の段階で崩壊したため窯の全容はほぼ知ることができた。ただ窯体周辺に斜面の地滑りで付属施設等の有無は明らかにできなかった。窯体は斜面下部の南側にトンネル状を呈する4本（焚口側から第1～第4）の横口（補助燃焼孔）をもつ形態である。残存状態で観察した窯体や燃焼孔の壁面には粘土等による成形は認められず、斜面の傾斜と床面の高さなどから判断して、花崗岩パイラント土を割り貫いた地下式の登窯と考えられる。窯体の主軸方位はN-70°-Eで焚口は西に開く。全長は6.2mを測る。燃焼部の床面中央付近の標高は約112.5mである。

**燃焼部** 現状では焚口の位置は明確ではないが、天井部崩壊前の記録写真から判断すると断面G-G'付近が天井部の端にあたる。この部分での床面は約0.9mである。ここから傾斜変換部まで約1.1m、幅0.75～1.05mが燃焼部と考えられる。床面は中央部が窪んでいる。焚口左側に花崗岩小礫のまとまって検出された。

**焼成部** 燃焼部との傾斜変換部から奥壁までの長さ約4.65mが焼成部と思われる。この変換

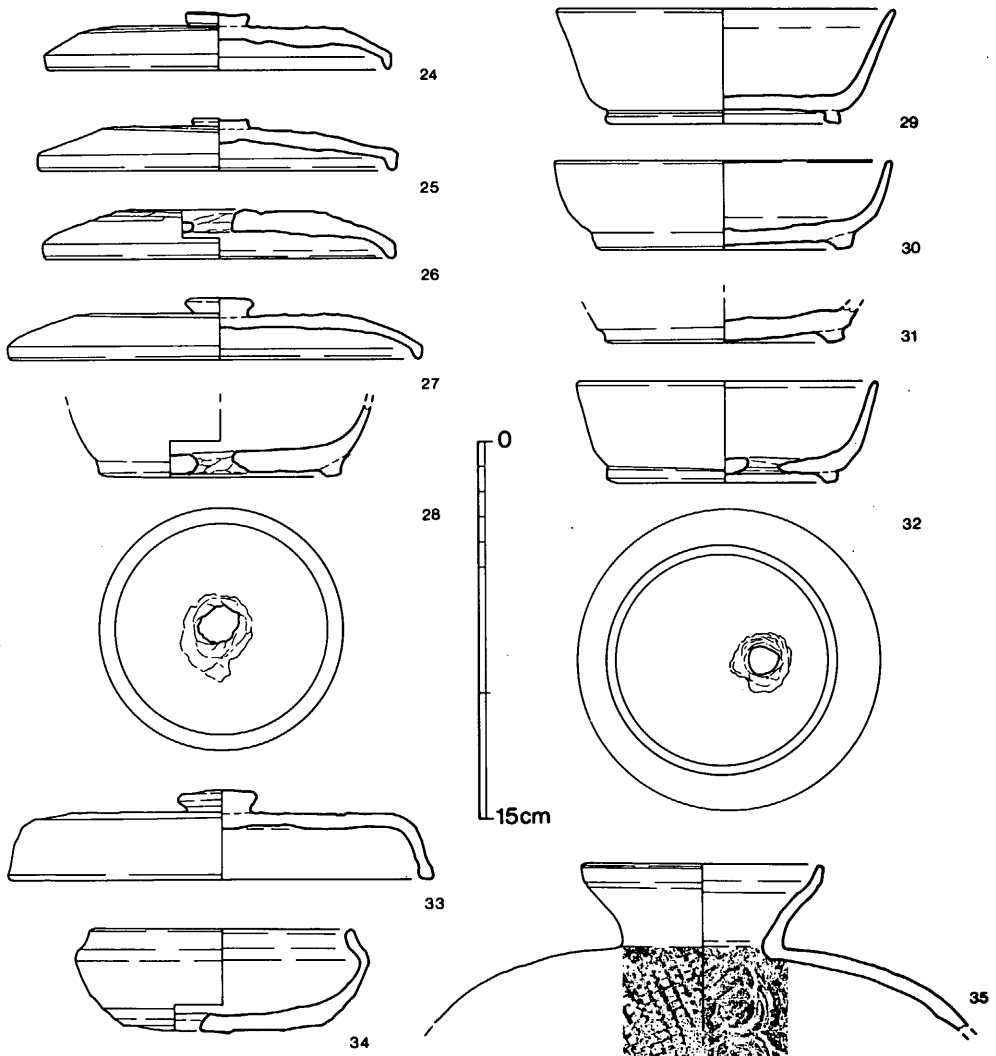


第 151 图 70号窑迹实测图 (缩尺 1 / 30)

部の地点は第1補助燃焼孔の中心線上にあたる。床面プランは長方形を呈する。第1～第2燃焼孔間の床幅は0.76mと最も広く、奥壁から10cm前面では0.6mと狭まる。床面の傾斜は、燃焼部の境から1.1mまでは約15°、ここから奥壁までは9°～10°である。側壁は内彎気味であり、天井までの高さは最も高い所で0.9mほどに復原できる。床面の貼り替え、補修等は認められない。

**補助燃焼孔** 窯体の低斜面側（南側）に4本付設する。焚口床面が窯床面のレベルより低い位置に設けられている。燃焼孔の焚口最大幅は、第1燃焼孔から0.56m・0.6m・0.82mと奥壁に近い程広がる。長さは0.82～1.12mの間で第2燃焼孔が最も長い。床面プランは窯床面に向って徐々に広がる。孔壁は強く熱を受け固く焼け締まっている。

**煙出し部** 奥壁に孤状の抉りが残り、この上部に煙道が削り貫かれたものと考えられるが上



第152図 70号窯窯内・灰原出土土器実測図（縮尺1/3）

部崩壊のため不明である。立上りは内彎気味で、基底部からの現存長は0.4mである。

**前庭部** 焚口から前面に「ハ」字状に開き約1.5mで段落となる。この間には炭混入の黒色土の堆積が認められる、本窯の灰原と69号窯の流出したものとの区別は明らかにはできなかった。前庭部の土壌や排水溝等は検出できない。

#### 出土遺物（図版100、第153図）

24は焚口床面、25は床面、26・29・30は窯内埋土中。他は灰原出土である。70号窯前庭部の灰原は数cmの炭を混入した黒色土が堆積しているが、上部の69号窯の流出した灰原の可能性も高い。

#### 窯内

**蓋杯・蓋**（24～26） 24・25の天井部は低く平坦面をもつ。口縁部は折り曲げて成形し直に下る。外天井部は回転ヘラ削り調整。26は穿孔土器である。

**蓋杯・身**（29・30） 29の体部・口縁部は直線的に立上る。体部と底部の境は丸味をもつ。高台は外底端のやや内側に貼付される。埋土中下層からの出土。30の体部はやや内彎気味に立上る。高台は外底部に貼付する。外底部にタタキ痕を伴う。埋土中上層からの出土。

#### 灰原

**蓋杯・蓋**（27） 天井部は低く平坦である。口縁部は直に下る。端部は丸い。外天井部は回転ヘラ削り調整。

**穿孔土器**（28・32・34） 28・34は焼成前、32は焼成後の穿孔である。34は短頸壺でこの器種の穿孔他に例がない。

**蓋杯・身**（31） 底部片である。高台は低く外方で踏んばる。外面に不定方向の平行タタキ痕が残る。

**蓋**（33） 天井部は平坦で、口縁部は外傾し、端部丸く肥厚する。外天井部は回転ヘラ削り調整。

**横瓶**（35） 口縁部は小さく屈曲し、端部は外傾する。外面に格子タタキ痕、内面に同心円文の当貝痕が残る。

#### （4）土壌（第153図）

調査区の北端から3基の土壌を検出した。69号窯跡と同じレベルに位置することから、同窯の関連遺構とも考えられる。

#### 1号土壌



69号窯の北側4.5mから検出したもので、平面プランは隅丸長方形を呈する。斜面の下側には壁はない。長軸1.45m、短軸0.75m、斜面上部での深さ約0.2mを測る。床面から数cm浮いて杯身2個体が割れて出土した。周壁に熱を受けた痕跡は認められない。床面の標高は116.85mである。

**出土遺物** (図版100, 第150図)

**蓋杯・身** (22・23) 22の体部・口縁部は直線的に延び、23の口縁部は小さく外反する。高台は外底端に貼付される。

**2号土壇**

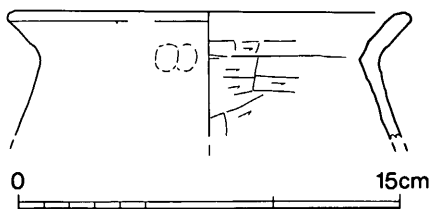
1号土壇の下位で3号土壇と並設されていた。69号窯とは約6m離れた地点である。二段に掘り込まれる。一段目は二段目の径約65cm、深さ7m前後の浅い窪みを弧状に囲んでいる。壁は焼けて赤変している。最深部の標高は約116.3cmである。出土遺物はない。

**3号土壇**

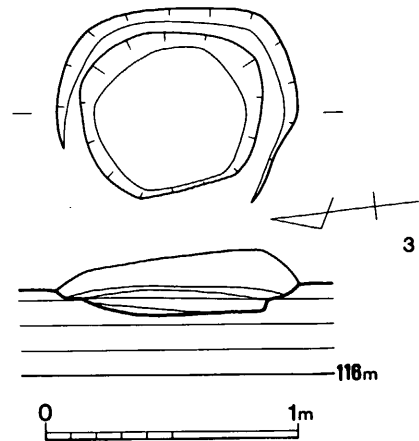
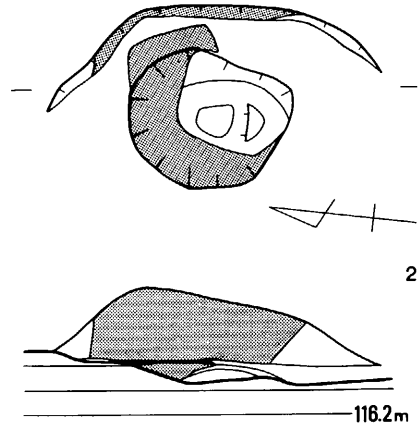
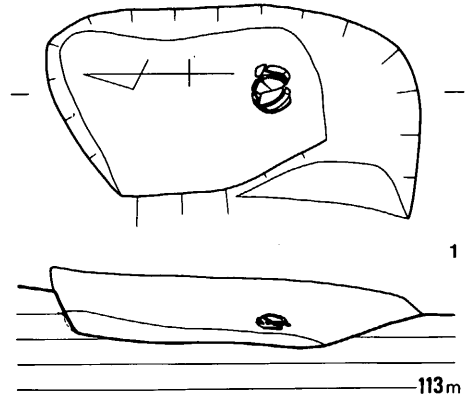
2号土壇南側で検出した土壇で、69号窯から4.8m離れる。二段に掘り込まれる。プランは円形というより六角形に近い。一段目は径0.95m、二段目は径0.65×0.7mである。二段目には炭混入の黒色土がつまっていた。最深部は標高116.25mである。出土遺物はない。

**土師器** (第154図)

甕の口縁部片である。くの字に屈曲する口縁部である。外面頸部に指圧痕が残る。内面頸部以下はヘラ削り調整。



第154図 土師器実測図 (縮尺1/3)



第153図 1～3号土壇実測図 (縮尺1/30)

## (5) 小 結

M-1地区と同一丘陵に存在する。69号窯と70号窯の2基を検出した。69号窯は従来検出される登窯である。70号窯は斜面下部に等高線に対して並行して構築され、斜面下側の側壁に4個の補助燃焼孔を有する木炭窯で、白炭製炭機能を有する。本窯は補助燃焼孔の大きさに特徴がある。禁口は須恵器焼成登窯の焚口を想像させる大きさで、中でも第4燃焼孔の焚口幅は、0.87cmを測る。周辺の太宰府市池田遺跡・志摩町藤原遺跡の炭窯で0.5mをこえるものはなく、形態に若干差が認められる。併設されたと考えられる舟底状土壙は斜面崩壊のため不明である。また伴って発見されることの多い製鉄関係の遺構も検出できなかった。須恵器の登窯との関係を含めて今後の資料増加を待ちたい。窯内・前庭部から須恵器片が出土したが上部の69号窯からの流入と考えられる。69号窯は出土遺物から8世紀中頃から後半にかけての操業と思われる。

(池 辺)

## 6. A-3地区4号窯出土土器

## (1) 4～9号窯灰原出土土器

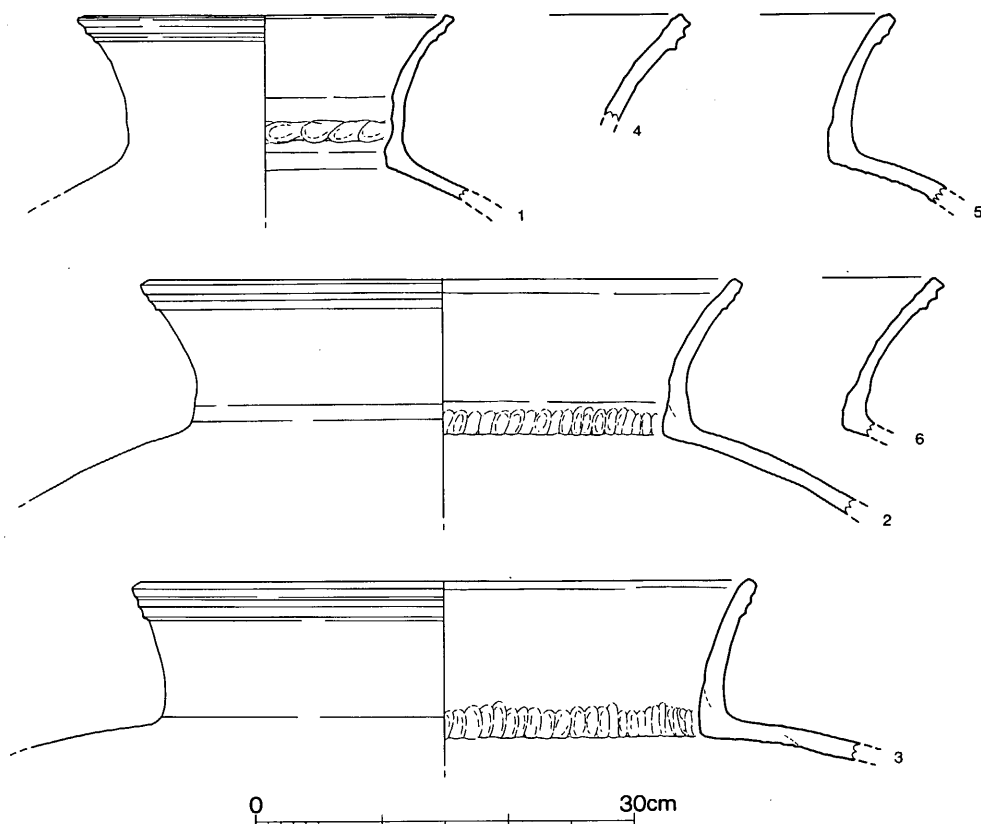
4～9号窯灰原から甕片を採集することができた。4～9号窯の6基のうち、4号窯が最も長大であり、窯内からも甕片が出土しているため、4号窯焼成品と考えてよい。

## 甕 (第155図)

図示した6個体の甕は、頸部の高さが11cm前後のものばかりであるが、復原口径は29cmと短いものと47～49cm大のものとがみられる。頸部はいずれも緩く外反しており、頸部中位は内彎する。口唇部の外側に粘土を貼付し、この部分の2箇所凹線を入れて二条の稜線を配している。口縁端部上面はいずれも平坦面をなしている。1～3は頸基部内面の接合部に接合時の指頭圧痕が残る。いずれの甕も胴部外面は格子目タタキ痕、内面は同心円文が残る。口縁部は内外面とも横ナデ調整する。

## 刻書土器 (図版101・102, 第156図)

いずれも灰原出土品であり、頸部内面にヘラ状工具により線刻された文字が入る甕である。1は頸部上半部のみである。口唇部外面に粘土を貼付して肥厚させ、この部分に二条の凹線を入れて稜のあまい二条の三角突帯を配している。口縁端部上面は平坦であり、やや内彎する。2は口縁部の小片である。口縁部は薄手造りであり、口唇部に粘土を貼付して二条の凹線を入

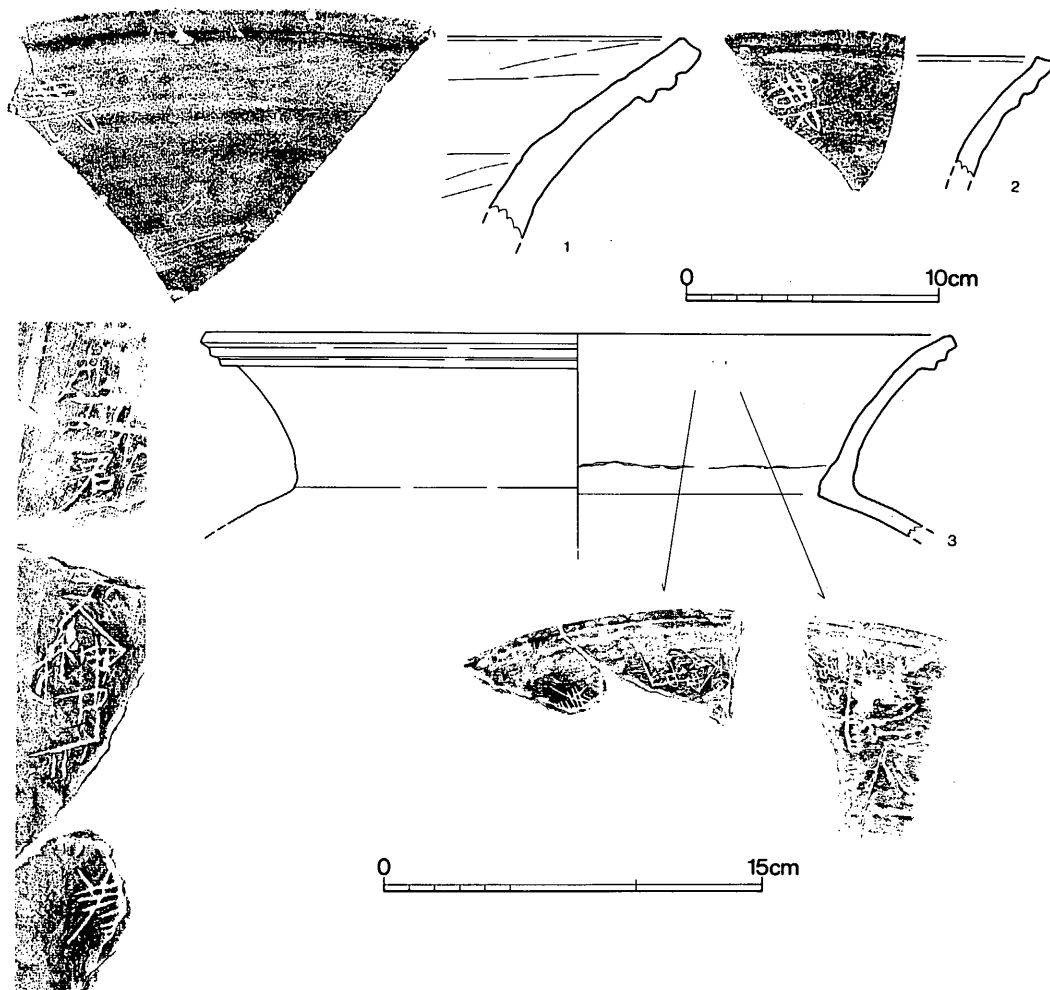


第155図 A-3地区4号窯跡出土甕実測図（縮尺1/6）

れて、稜のあまい二条の三角突帯を配する。口縁端部上面は、やや中くぼみながらも平坦面をなしている。3は口縁部の高さ12cm、口径59.5cmの甕であり頸部は大きく外反して口径をひろげている。口唇部外面に粘土を貼付し、一条の凹線を入れて稜の鋭い二条の三角突帯を配している。口縁端部上面は平坦である。頸基部内面は稜がつく。胴部外面は格子目タタキ、内面は同心円文が残る。胎土は砂粒を含み、焼成は軟質である。

## (2) 刻書文字

前節までに報告されたように、4号窯跡の灰原から、いずれもへら状の工具で口縁部内面に文字が刻まれた大甕の破片が5片検出された。もっとも、このうちの3片はもともと同一個体に属していたと判断されるので、固体数的には都合3点となる。共伴の土器には、この地区では最も古い8世紀中葉ごろに編年されるものも含まれているが、出土遺構が灰原であるため、この大甕の時期推定への直接的な援用は慎重に判断しなければならないだろう。



第 156 図 刻書土器実測図（縮尺1/3・1/6）

ところで、当地の近辺では、去る昭和56年に春日市の九州大学筑紫地区構内遺跡において、口縁部内面に「口𠄎郡口」と刻書された小さな甕片が発見され（以下、九大例という）、また昭和63年には、広義には当窯跡と同じく牛頸窯跡群の一部をなす大野城市の牛頸ハセムシ窯跡群においても、口頸部外面に比較的多くの文字が刻まれた大甕の破片が10点検出された（以下、ハセムシ例という）。これらは出土文字資料としても注目されるものであり、当地出土のものについて考える場合にも参考になる。なお、後者についてはいずれ同市教育委員会から正式に報告されるだろう。以下では、それらを参照しながら、各個に見える文字について概要を報告し、あわせて若干の所見を述べたいと思う。

①「那 口」  
（𠄎カ）

第156図(図版101)に示されているもので、いずれも完形ではないが、2字分が認められる。また、その位置などから見て、これは刻書の冒頭部分と考えられる。

第1字はいわゆる傍の下端部つまりこの文字の最終画の一部を欠損しているが、字形的にはほぼ原形をとどめている。一見して明らかなように、「那」の異体字であり、しかも字体的には古字といわれているものである。その筆順は通例とかなり異なっているが、運筆は比較的にスムーズで、一種の勢いさえ感じられる。それは刻書という技術的な要素とも無関係ではないかもしれないが、あえて推測すれば、この刻者は単に文字を知っているというにとどまらず、必ずしも能筆とはいえないにしても、それなりに書き慣れているように思われる。

第1字の中央部下位、つまり現存片の最下端にも小さな痕跡が見られる。これは偶然についた疵などではなく、明らかに意図的な刻書である。状況的に見て、第1字の一部ではないし、やはり第2字の上端部とみなすべきであろう。現状では2画分が認められるが、大部分を欠くため、これだけではいかなる文字か判断できない。しかし、「那」との関係から推せば、九大例や(3)などに見られる「𠂔」が想起され、現状はそれの第1・2画に当たる「カ」の上端右半部ではないかと推定される。ごく小さな痕跡にすぎないので、断定はできないが、後述のように、「那𠂔」は郡名として意味が通じるので、その可能性は十分に考えられる。

この甕にもともとどのような文字が刻まれていたかは明らかでないが、③と同じように、「那𠂔」には「郡□」などの文字が続いていたのではないだろうか。しかし、その確認はできないので、ここではかかる想定も可能であることを指摘するにとどめておこう。

## ② 「那

第156図(図版101)に示されたもので、1字が残存するのみであるが、これは本来の第1字でもある。傍の下半部を若干欠損しているが、いまだ原形をとどめている。①の第1字と同じように、「那」の異体字である。この筆順は通例のそれと同じであるが、運筆には①ほどの勢いが感じられず、また刻みも比較的に浅い。あるいは使用された工具の相異などによるのかもしれないが、①とは筆順も異なるので、おそらくこれは別人の手になるものではないだろう。わずかに1字にすぎないので、具体的な意味は明らかでないが、これについても①の場合と同じような想定が可能であろう。

## ③ 「那𠂔郡□□<sup>(カ)</sup>大神部□□□

第156図(図版102)に示されたもので、3片が現存する。このうちの2片は完全に接合するが、他の1片は接続しない。しかし、両者の胎土あるいは運筆の状況などを対比すれば、もと

もと同一個体に属していたと考えられる。また、それぞれの文字の位置や字義などから見て、接続しない1片がこれらの冒頭部分であったと判断される。前述の2点がわずかに1～2字にすぎなかったのに対し、これには文字数も多く、それをただちに文章とみなすことはできないにしても、一定の意味をもつ語句を含んでいる点は注目してもよいだろう。

現在、口縁部を復原しているが、このうち第1・2両片の間隔についてはとくに明確な根拠にもとづいているわけではない。ハセムシ例を直接に援用できるかどうかは検討を要するが、それを参考に現状から推測すれば、この甕には相当数の文字が刻まれていたようであり、この間にもかなりの文字が存した可能性も考えられる。その場合はこの間隔をさらに広げなければならないことにもなるが、現状では文字などを特定できないので、とりあえず、あくまでも便宜的な措置としてこのように復原してみた。

なお、昨年度の報告では、第1片と他片とを別個体とみなし、さらに校正ミスもあって後者の釈文を「天神部所国養」と記した。しかし、その後の再検討の結果、これらについては今回の報告のように訂正しなければならないことが判明した。この点を断わっておきたい。

各文字の釈読については若干の補足説明が必要と思われるので、それから始めよう。

第1片の第1字は損傷が著しく、現状ではわずかに「井」のような痕跡が見えるのみであるが、他字の大きさやこの位置などから見て、これは偏の一部と推定される。傍は表面が完全に剝離しているので、明らかではなく、これだけではいかなる文字か判断できない。しかし、第3字から見て、これは第2字とともに郡名をなすと考えられるので、若干の疑問は残るけれども、①や②などの例から「那」の異体字とみなし、現存部はそれの偏の下半部と判断した。第2字もかなりの損傷を受けているが、それと本来の刻書とは一応区別できるので、その全体的な残存字形や上述した第1字との関係などから、九大例にも見える「𠄎」と推定した。第3字は傍の上半部を若干欠いているが、「郡」である。

第2片では、横棒と「大」とからなるように見える冒頭部分をいかに解するかがまず問題になる。一見した限りでは、あたかも1字であるかのようであり、昨年度の報告では「天」あるいは「矢」かと推定していた。しかし、後述のように、これは下位の2字と合わせて氏族名をなすと考えられるが、これまでのところ、天神部あるいは矢神部などという古代の氏族名は知られていないし、このいずれにしても、あえてこれをその初見資料とみなすに十分な根拠は見いだせない。やはり、別の解釈をすべきであろう。

一方、この部分をこまかく観察すれば、横棒と「大」との間が若干離れている点に気づくが、これはありえないことではないにしても、単なる偶然ではないように思われる。これらの諸点から、結論的には、横棒を上位の欠損部にかけて存した文字の最終画とみなし、この部分はそれと第2字の「大」とからなると判断した。後述のように、大神部であれば、意味も通じる。なお、状況的に見て、第1字は「一」ではないだろう。

第3字は偏の上端部に若干の損傷が見られが、全体的な字形から「神」と判断できる。また、第4字には「神」の最終画が重なっているが、古代には例の多い「部」の略字である。

これに対して、第5字は、その字形は比較的明瞭であるにもかかわらず、いかなる文字か想定しがたい。昨年度は「所」の異体字かと推定していたが、それでは省画が過ぎるようにも思われる。一方、最終画を右に曲げている点からすれば、字形的には「示」の異体字にも近似するし、さらに横棒と縦棒は交叉していないが、30を意味する「卅」のようでもある。このように、字形的にはいろいろな場合を想定できるが、そのいずれにも問題が残り、断定できない。「大神部」から続くことからすれば、第3片の第1字、場合によってはその第2字も含んで、人名となる可能成が最も大きいと考えられる。しかし、後述のように、その第2字はともかく、両字ともに具体的な文字を比定しがたい。人名と言う点からも文字を推定できないので、ここでは結論を保留し、後考を俟つことにする。

これに接続する第3片では2字分が認められるが、各字の大きさなどから見て、この2字がそれぞれ第1・2両字であったと考えられる。第1字はわずかに「ノ」状の痕跡が残存するのみであり、いかなる文字かは判断できない。第2字については、昨年度の報告でも触れたように「養」あるいは「着」など羊偏の文字が想定される。しかし、そのいずれであっても、下半部が不明瞭で、しかも欠損部にかかっているため、決定的ではない。字形的には「養」が最も近似するように思われるので、ここでは一応その可能性を指摘しておこう。

さて、以上のように、③には少なくとも10字が見られるにもかかわらず、結局のところ、「那珂郡」と「大神部」という2句の6字しか釈読しえなかった。この2句を核とする一連の文字のもつ意味についてはいろいろ考えられるが、その前に両句について述べておこう。

まず、あらためて述べるまでもないことではあろうが、「那珂郡」は『和名抄』などに見える筑前国那珂郡である。その音からも知られるように、かつて奴国の地であり、現代的には福岡市中央、博多両区の一部から同市南区さらには春日市にかけての地域にあたる。現在までに知られる限りでは、かつての当地は那珂郡の東南に接する御笠郡に属していた。郡境に近い地域でもあるので、ある時期に郡境が変更された可能性も考えられるが、それを示す史料は見られない。ここでは、この甕は那珂郡人の注文によって生産されたものと考えておこう。

ところで、「ナカ」という郡名の表記についていえば、上部を欠く九大例も本来はこれと同じであろうが、ハセムシ例には「奈珂」や「仲」などが見られ、その表記法には少なくとも4例があったことになる。古代においては、たとえ固有名詞であっても、普通文字を借用して表記する場合があるが、それは偶然的でもある。「那珂」や「奈珂」の場合は、同じ表記が複数のに見られることからすれば、単なる偶然ではなく、むしろかなり通用していた表記であったのではないだろうか。また、一定していないことはその表記法がいまだ定着していないことをうかがわせ、必ずしも同時期のものとは断定できないが、甕に見える3例は「那珂」に先行するの

ではないかと考えられる。しかし、定着した時期が明らかでないので、これらが用いられた時期を特定することはできない。ただ、参考までにいえば、ハセムシ例のうち、「那珂」銘のものには和銅6年(713)という年紀が見え、「仲」銘も同時期のものと推定でき、これらが比較的古い表記法であることを示している。

氏族としての大神部は全国各地に分布していたが、筑前国関係では、大宝2年(702)の『嶋郡川辺里戸籍』から現糸島郡地方の同氏が知られていた。また、夜須郡(現朝倉郡三輪町)には延喜式内社の大己貴神社が鎮座しているので、この地方にも同氏の存在が想定されていたが、先年の大宰府史跡の発掘調査において検出された天平年間(729~748)のものと同推定される同郡関係の木簡にその名が見え、想定が証明された。従来、那珂郡関係の同氏については知られていなかったもので、同じくその名が見られるハセムシ例とともに、これは新史料であり、さらに同氏が当国内のかなり広い範囲に分布していたことをうかがわせる。

なお、「養」か推定した文字についても触れておこう。さきに、これは上位の2字と合わせて人名になるかもしれないと述べたが、「養」であれば、藤原宇合の初名が馬養といわれるように、「カイ」という音で人名に用いられる場合があることによるもので、それ以上の理由はない。後述のハセムシ例のように、数人の名前が列記されている可能性も考えられ、氏名とすれば、頭字の場合は「養父」や「養徳」、第2字の場合は「犬養(部)」などが想定される。しかし、前者は単にかかる氏名が知られているという程度で、そのような氏族が当地方に居住していたことを示す史料は見られない。また、現福岡市博多区の博多駅付近はかつての那珂郡犬飼の地で、犬養部氏の存在が考えられているが、これにしても、ただそれだけのことにすぎないので、あくまでも参考までに述べた。なお、「養」は年号の養老にも用いられているが、この位置に年号を想定するのは文章的に不自然であり、その可能性はないだろう。このように、「養」とみなせば、如上以外も含めて、いろいろな場合が考えられるが、いずれも決定的ではない。字形的にも断定できないので、他の文字である可能性も考慮しながら、やはりここでも推定するにとどめておかなければならない。

次に、全体的な意味について検討してみよう。

この刻書が何らかの意味や目的も有するものであることはいうまでもないが、現状でそれを明らかにすることはできない。ハセムシ例は各個体によって残存部分が異なるが、「仲郡手」と見える1点を除けば、その基本的な記載内容は「筑前国奈珂郡手東里□□□□□□并三人奉調大賑一隻和銅六年」(中間の空白部は3人の名前)であったと考えられる。内容的には検討を要する点も見られるが、調としての貢進という趣旨は明白であり、書式的にも貢進物付札木簡のそれに共通し、賦役令調皆隋近条の規定に準拠している。また、延喜主計式によれば、調としての賑は3丁に1口が課せられているが、それとも合致し、その規定が8世紀前半までさかのぼることを示している。とすれば、これにはそれを示唆するような文言は見られないが、



調としての貢進を前提にしていたのであろうか。

両者を対比してみれば、これには国名が記されていない点が異なる。しかし、貢進物付札木簡の場合でも国名が省略されている例は少なくないので、この点はとくに問題にしなくてもよいだろう。それにしても、貢進を前提にしていたとすれば、ハセムシ例が示すように、全体では30数字にもなる。各字の大きさや復原口径などから見て、全文が1行であっても、その刻書は不可能ではないし、現状でも本来はかなりの長文であったことを示唆している。ただ、これはあくまでも可能性としては考えられるということであり、とくに「養」かと推定した文字の前後が明らかでないので、判読できた2句の固有名詞のみにもとづいて、その内容をこれ以上に憶測することは適切ではないだろう。

ところで、両者では刻書の面や状況も異なっている。当地の3点はいずれも口縁部内面に、そして口縁と平行的に刻書されているが、ハセムシ例は口頸部外面であり、口縁とほぼ平行な「仲郡手」の1点を除けば、他は口縁に対して数行にわたる縦書きである。換言すれば、前者がむしろ見やすいように刻書されたのに対し、後者は比較的目立たないように刻書されたかのようである。この相異はそれぞれの刻者の個人差によるもので、特別な意味をもつものではないのかもしれないが、はたしてこの説明だけで十分であろうか。

たとえば、後者の場合、この内容は貢進の際の必要事項ではあるが、受納された後はとくに意味をもつものではないので、刻書に際してもその点に配慮したのに対し、前者ではそれが常に見える必要があったので、いわば上面になる内面に刻書した、とも考えることができる。若干憶測に過ぎる感がしないでもないし、牽強付会という批判があるかもしれないが、少なくとも無意味ではないことを示している。その結論はにわかには出しがたいが、刻書の目的などとも関連することであり、他の例と合わせて検討する必要があるだろう。

以上、3点の甕片に見える文字について報告し、あわせて若干の所見を述べたが、内容が断片的であることもあって、結局のところ、結論的なものを見い出すことはできなかった。最後に、感想的にはなるが、一言しておこう。

甕の製作工程や刻書の目的などの問題とも関係するので、この刻者の身分を特定することは容易でない。しかし、場所を選ばない墨書とは異なり、この場合は焼成前の刻書である。おそらく、それは成形後のいわゆる日干し段階で行われたのであろうし、注文者あるいは第三者が刻書した可能性も完全には否定できないが、それよりも、製作工程の一環であることからすれば工人ないし彼に近い存在の人物によってなされたと考えた方が自然ではないだろうか。換言すれば、一見したところ簡単なようでも、やはりかかる刻書は一種の特殊技術であり、誰にでもできることではないようにも思われる。その意味で、たとえば計帳作製の際の手実からも推定できることであるが、これは、現代のわれわれが考えている以上に、文字が普及していたことを示す例証の一つといえるだろう。

(倉住)

## 7 硯

これまでの調査で4個体分の陶硯が出土している。このうち図化する3点を下に図示しているが、他の1点も含めて、全て脚台に透しを入れた圈足硯で、横田賢次郎氏分類の陶硯I-C-b類である。1は19~21号窯灰原、2・3は40~42号窯灰原より出土した。

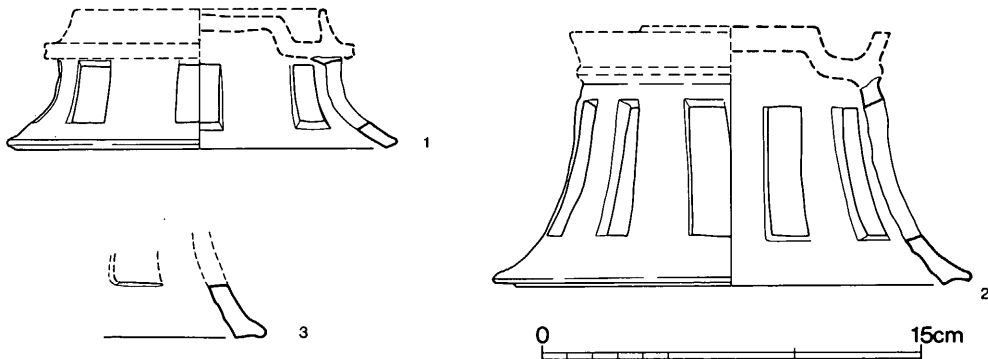
1は、小形圈足硯、圈台の小片である。幾分焼ひずみがあり、復原した径には疑問を残す。圈台は下位に大きく開き、下端部を丸くつくる。透し孔は長方形8個が入れられていたようである。残存する上端に、硯部との貼付面が明瞭に観察できる。他例を参考にすると、硯部に内提を持たないI-C-b・イ類と推測できる。2は圈台が約1/5残存する比較的大き目の破片である。全体の器形は径にくらべてやや高目の器高に復原される。圈台は1と同じく大きく下方に開き、端部は丸く収まっているが、下端部が若干凹んでいる。さらに透し孔上の凸帯は凸線状のものが巡っているだけである。この種の類例は牛頸石坂C-1号窯出土に認められる。その場合、硯は1のように別々に制作した後に接合するのではなく、硯部・圈台ともに連結して作られている。3も2と同様の形態となる脚部の小片であろう。ともにI-C-b・ロ類に入れられる。いずれも内外面ナデ調整、胎土には砂粒を混える。

さて、これら全ては、他の須恵器同様この地で制作されたものの残滓と思われるが、その量は夥しく出土した食器類にくらべてあまりにも貧弱である。この傾向は、生産地をはなれ、消費地であった大宰府出土の陶硯をみた時、その大半が転用硯という杯蓋類の再利用品で占められている状態と一致している。これは他の官衙遺跡でもみられる傾向である。

定形の硯の制作がさほど手間のかかるものとは考えられないことから、生産側の要因ではなく、需要者側の方にその要因がありそうである。刀筆の吏と呼ばれた当時の役人に必需の硯が、転用硯ですまされる何らかの事情があったのかもしれない。(赤司)

注1. 横田賢次郎 「福岡県内出土の硯について」九州歴史資料館研究論集9 1983

注2. 牛頸石坂窯跡 大野城市文化財調査報告書第14集 大野城市教育委員会 1985



第157図 硯実測図(縮尺1/3)

### III 牛頸窯跡群の測量方法について

#### はじめに

近年の高速道路・住宅開発・農地基盤整備事業などの大規模工事に伴って、埋蔵文化財調査もそれまでの「点」から「線」・「面」に変遷している。調査範囲の拡大化によって、それまでの初歩的な測量技術では対応出来なくなり、測量業者に基本杭の設定を委託したりする状況である。しかし、現場内の既設基準点や杭を利用すれば作業も容易になり、またその結果も高い精度なものとなる。ここでは、牛頸ダム関係埋蔵文化財調査で用いた測量方法を説明する。

土木工事の設計及び施工の為に設けられた基準点や杭は、公共工事あるいは大規模な民間工事に於いては、基本測量または公共測量の測量成果に基づいて測量し、その成果は成果表などに記載するように測量法に規定されている。この成果表には、基準点や各杭の位置・標高などが記載され、位置は平面直角座標系の値 $X$ ・ $Y$ 数値で表示されている。

**成果表** 測量の結果を集録したものである。国土地理院で行なった基本測量の成果として、三角点成果表・三角点点の記・水準点成果表・水準点点の記・基準点配点図がある。土木工事の設計及び施工の為に実施された測量の成果としては、全般に基準点成果表・水準点成果表などがあり、道路では、中心点成果表・幅杭点成果表など、宅地開発・土地区画整理・ほ場整備などの場合も同様のものと、現況の地形図作成時の多角測量成果表などがある。

今回の調査に於いては、A地区－付替市道304号線・C地区－管理道路・I地区K地区－転流工・J地区－ダム軸は中心点成果表、B地区・G地区・M地区は多角測量成果表を用いた。

成果表は施主あるいは監督官公庁に保管されている。

**平面直角座標** ある地点が地球上のどの位置にあるかを示す時には、緯度・経度・標高が分かればできるが、緯度・経度の計算は不便なことから比較的狭い地域では $X$ ・ $Y$ で表す平面直角座標が用いられる。測量地域のある地点を原点とし、南北方向を $X$ 軸、東西方向を $Y$ 軸にとり、 $X$ 軸の北方及び $Y$ 軸の東方をそれぞれ正とし、これを基準として各点の位置を $X$ ・ $Y$ で表す方法である。この座標は球面の地球を平面として考えているので、原点から遠く離れると誤差が大きくなるため、座標の使用出来る範囲は限られてくる。そこで、わが国では、現在19の座標系に分けて全国を覆っている。福岡県は九州東(II)系が適用され、原点は経度 $131^{\circ}00'00''$ 、緯度 $33^{\circ}00'00''$ 阿蘇大観峰の西方で、 $X$ 数値は全て正、 $Y$ 数値は京築の一部(国土地理院2.5万分1地図の蓑島・椎田・下河内・中津・土佐井の地区)を除いて負となる。一般には、公共座標

と呼ばれている。この座標を遺構の割りつけに用いると、方位も簡単に表せるし、遺跡・遺構の位置も数値で表すことが出来る。また、昨今、進められているコンピューターによる各種の情報処理に於いても位置の表示には、この公共座標値が用いられている。

**手順** 1. 設計図を持って現地を踏査し、残っている杭を捜す。2. 杭があれば、記載されている記号や番号を認識し、図面から杭の性格を調べる。3. 最初に打てそうな杭の位置を確認する。4. 成果表を入手する。6. 計算する。7. 実測の為の杭打ち。となる。

**計算** 例えば、牛頸ダムB-2地区の場合現地には多角測量に用いられた杭T-49、T-50が近くに残っており、実測用基本杭P1を

打設する時、成果表より座標を調べると、

	X	Y
T-49	53 556.241	-48 518.846
T-50	53 578.212	-48 487.938

であり、これより杭の座標上の関係を出すと

Xは  $53\ 578.212 - 53\ 556.241 = 21.971$   
 Yは  $48\ 518.846 - 48\ 487.938 = 30.908$

第158図の  $\alpha$   $\beta$  は

$\tan \alpha = 30.908 \div 21.971 \quad \alpha = 54^\circ 35' 34''$   
 $\tan \beta = 21.971 \div 30.908 \quad \beta = 35^\circ 24' 26''$

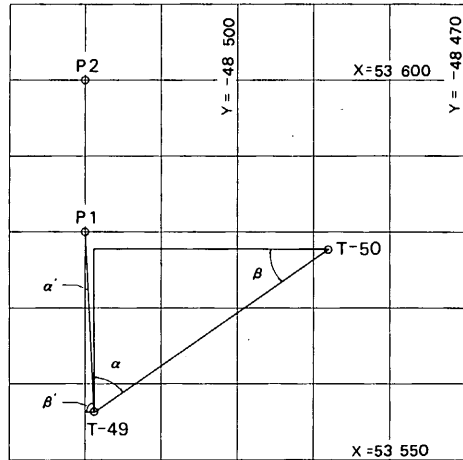
である。

現地に打てる杭P1の座標が X=53 580

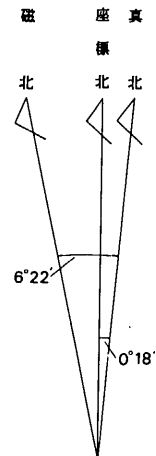
Y=-48 520の場合同様にT-49との関係を出すと  $\alpha' = 2^\circ 46' 51''$

$\beta' = 87^\circ 13' 09''$  となり、P1とT-49の距離は  $L = 23.759 \div \cos 2^\circ 46' 51'' = 23.787$  となる。 $\angle P1, T-49, T-50$  は  $54^\circ 35' 34'' + 2^\circ 46' 51'' = 57^\circ 22' 25''$  で、逆は、 $302^\circ 37' 35''$  故に、P1を打つ場合 トランシットをT-49に据え、T-50を視準し右廻りに  $302^\circ 37' 35''$  振り、距離を23,787mとる。P2 (X=53 600 Y=-48 520) はP1に据えてT-49を視準し右廻りに  $182^\circ 46' 51''$  振り、距離を20mとればよい。このP1→P2が、座標北方向になる。

後は、順次必要な箇所に伸ばせばよい。参考までに、一般に方位を表す時には、真北-T. N.、磁北-M. N.、座標北-G. N.と略記する。これらの関係は、第159図のようになり、調査地点付近では真北に対して座標北は約18' 西偏し、磁北に対する角(磁針偏角)は経年変化するが、1988年12月で計算すると約6°22' 西偏する。



第158図 B-2地区計算図



第159図 方位略図

## おわりに

土木工事の現場に設計や施工の為に設定された杭には、測量時の成果として、位置を示す公共座標数値が記載された測量成果表などがあり、これを使って簡単な計算をすると、公共座標にのせた実測の割り付けが出来ることを平面直角座標の説明を交えて述べてみた。

遺跡、遺構の位置表示を統一する意味でも公共座標を用いた測量方法を取り入れ、報告書の段階では、周辺地形図・遺構配置図には外郭に座標線を少なくとも対応する四対ぐらいは記載したい。『牛頸窯跡群Ⅰ』では記載して無かったので、第160図～第166図で載せた。

また、測量業者に現況図作成や実測杭設定を委託する場合には、周辺に残せる杭（基準杭）を設置することや、測量成果として、基準点の計算簿・点の記・成果表・基準点網図ぐらいは添付するような条件で契約すると良い。測量過程が分かり、近隣の調査時に使用することが出来る。

最後に牛頸ダム関係調査の15地区のうち、10地区程度は、筆者が杭の打設から現況地形図と表土剥ぎ後地形図を測量したが、どこの地区も急傾斜地で観測するのも、実測杭を打設するのも大変苦労した。しかし、見透しの悪い山の谷間あるいは急斜面上に公共座標値を持つ実測杭が打てたのは、工事杭を有効に使ったからである。工事現場には、各種の目的で杭が打設されています、杭の性格を見極めて、この方法を活用して下さい。 (日高)

註1 国土地理院によって行なわれる、すべての測量の基礎になる測量のこと。

註2 国、又は公共団体が土地の測量に要する費用の全部、若しくは一部を負担し、若しくは補助して、基本測量または公共測量の測量成果に基づいて実施する測量のこと。

註3 国土地理院発行の地図に記載されている三角点の成果表で、座標系番号・点の番号及び名称・緯度（B）・経度（L）・直角平面座標値（X・Y）・標高（H）・縮尺係数（その地点での平面座標が縮小あるいは拡大されている割合を示した数値）などが記載されている。

註4 点の記とは、標石の埋設した場所が分かるように、詳しく記載したもの。所在地・敷地所有者・順路・要図などが記載されている。

註5 水準点の成果表には、点の所在地・標石番号・水準点の標高などが記載されている。基本測量の成果は、国土地理院に保管され、必要に応じて閲覧及び謄本交付を受けることが出来る。

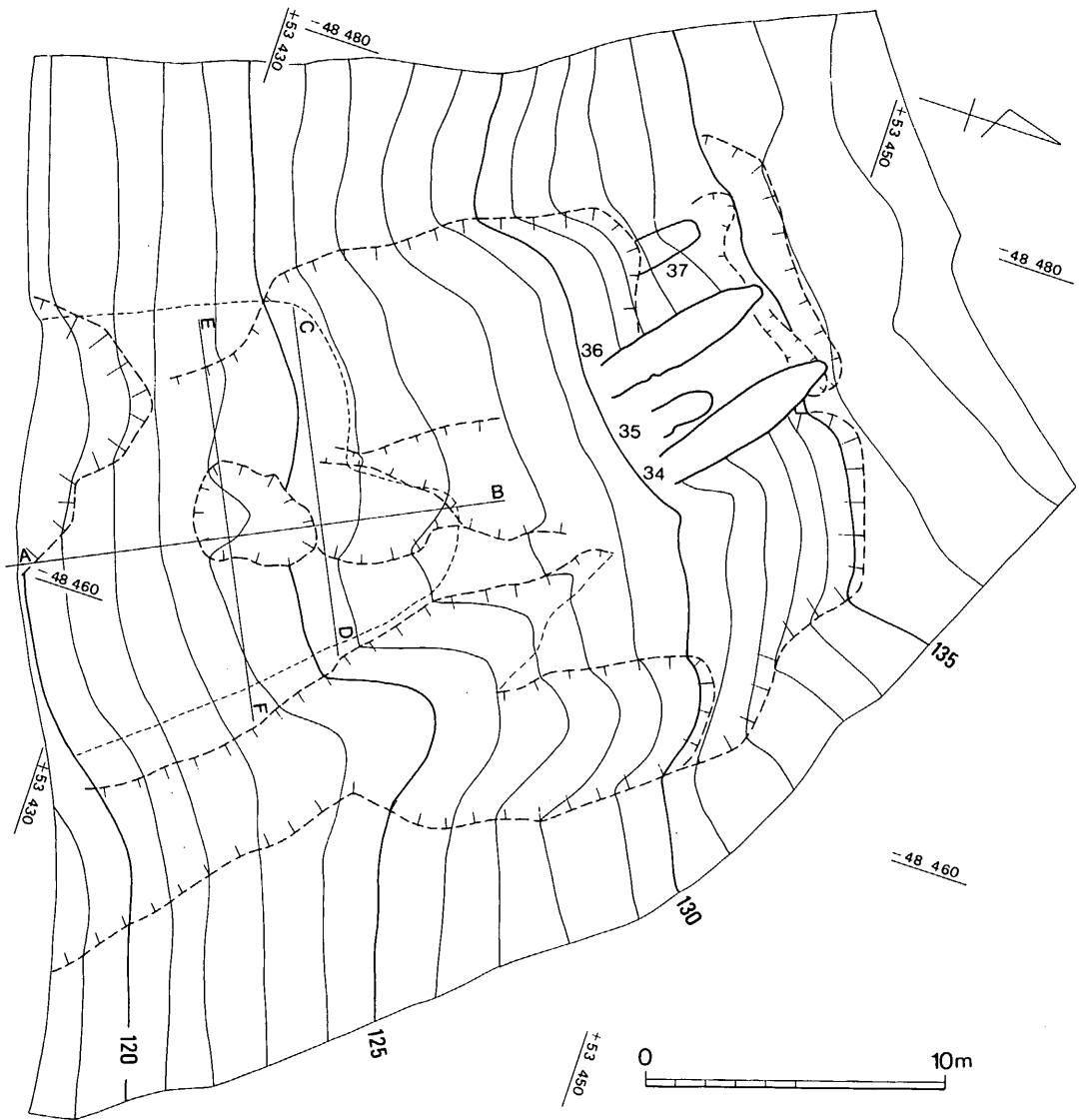
註6 九州横断道の場合は、道路詳細設計書の幅杭座標計算書あるいは巾杭調書にあたる。表を見るとSTA（杭番号）、CL・X CL・Y（中心点座標値）、X・L Y・L（終点に向って左側の巾杭点座標値）、X・R Y・R（右側の巾杭点座標値）などが記載されている。

## 参考文献

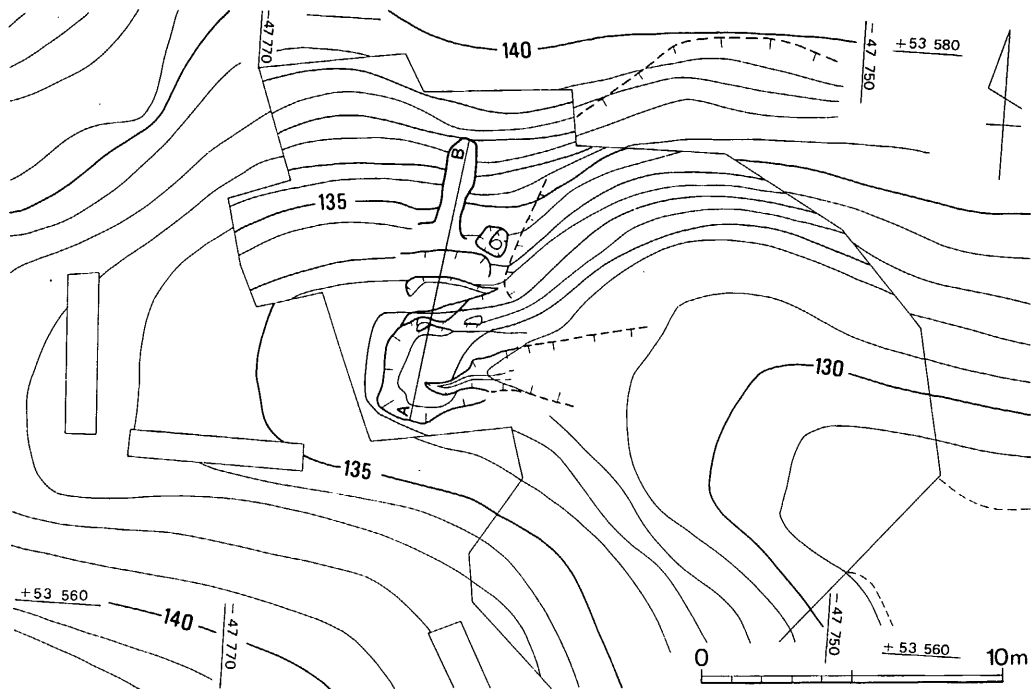
丸安隆和 新制測量(上)(下)オーム社1969年

長田正夫 測量の基礎・水準測量 日本測量協会1983年

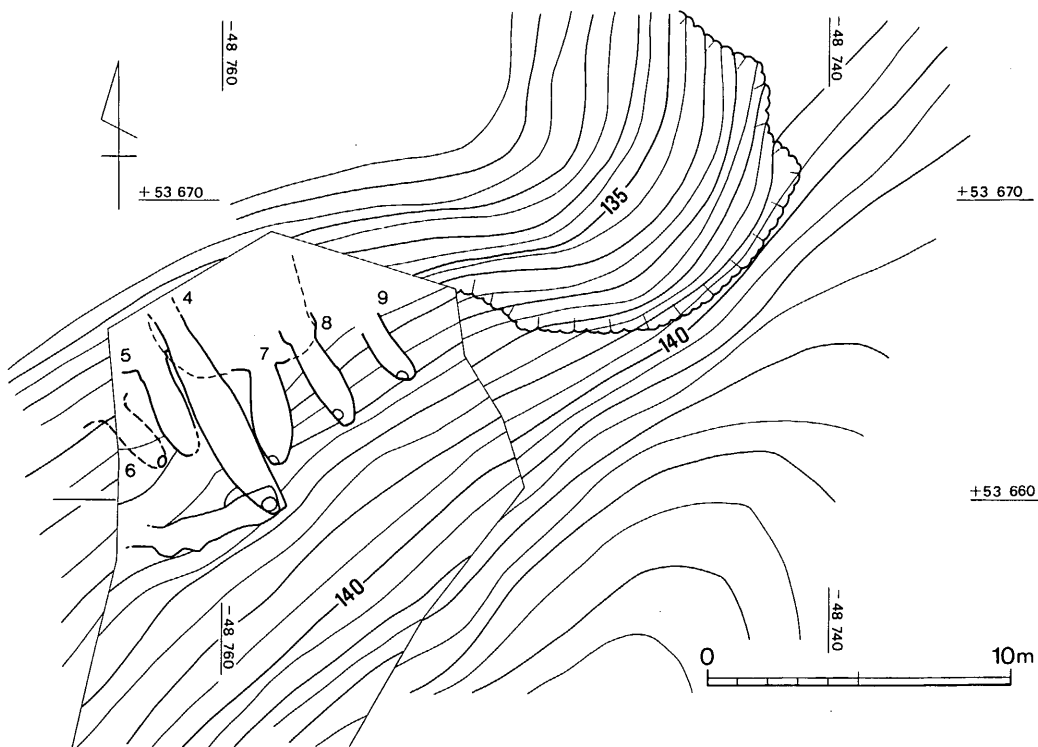
吉田信一 吉村敏夫 測量設計データハンドブック 山海堂1982年



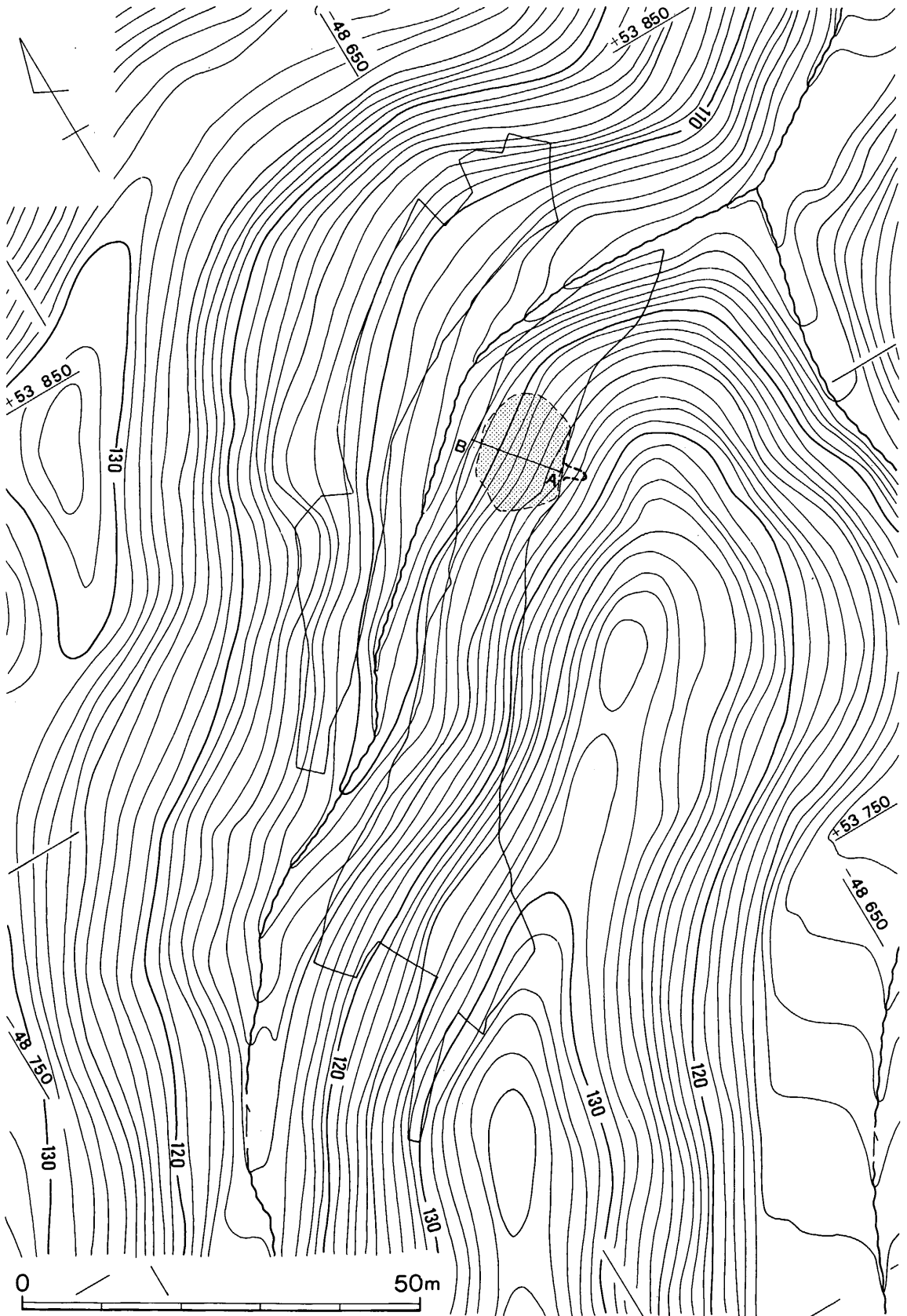
第160図 C地区窯跡配置図(縮尺 1/250)



第161図 A-1地区窯跡配置図(縮尺 1/250)

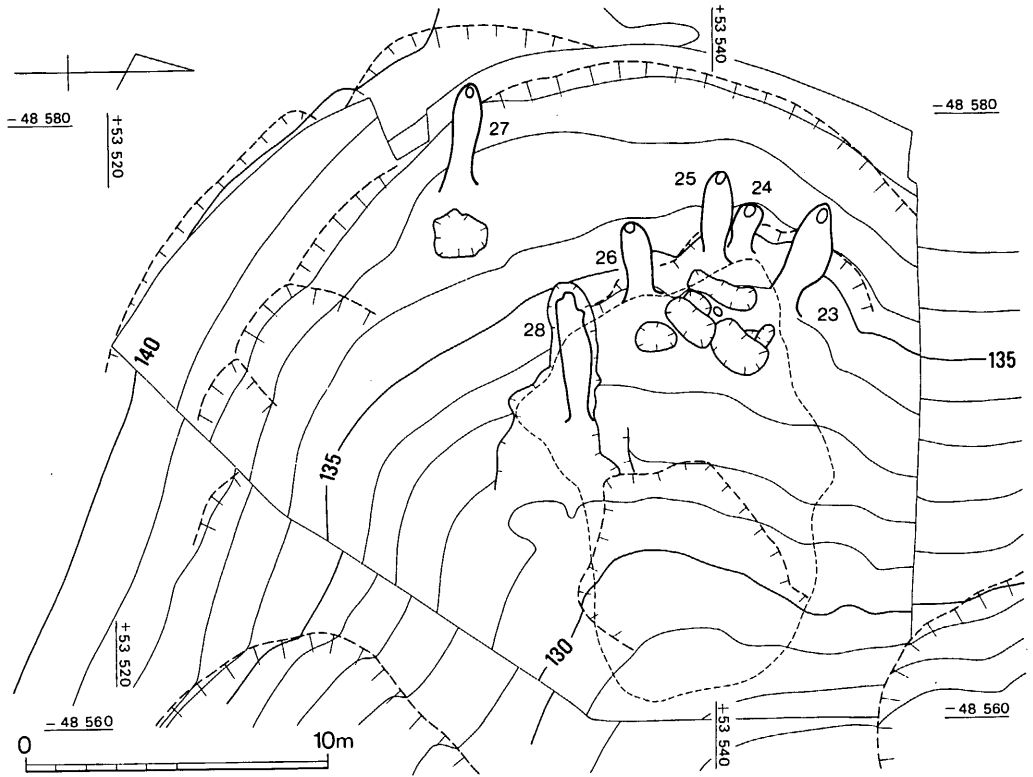


第162図 A-3地区窯跡配置図(縮尺 1/250)

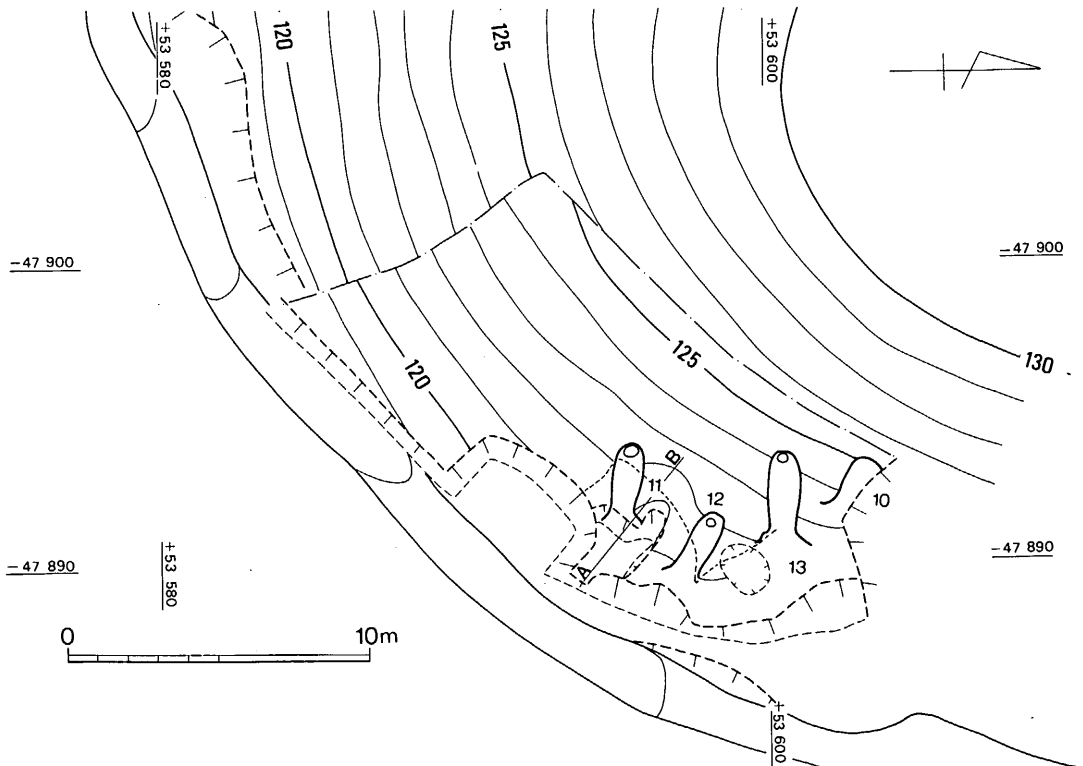


第 163 图 A-2地区窠跡配置图 (縮尺 1/750)

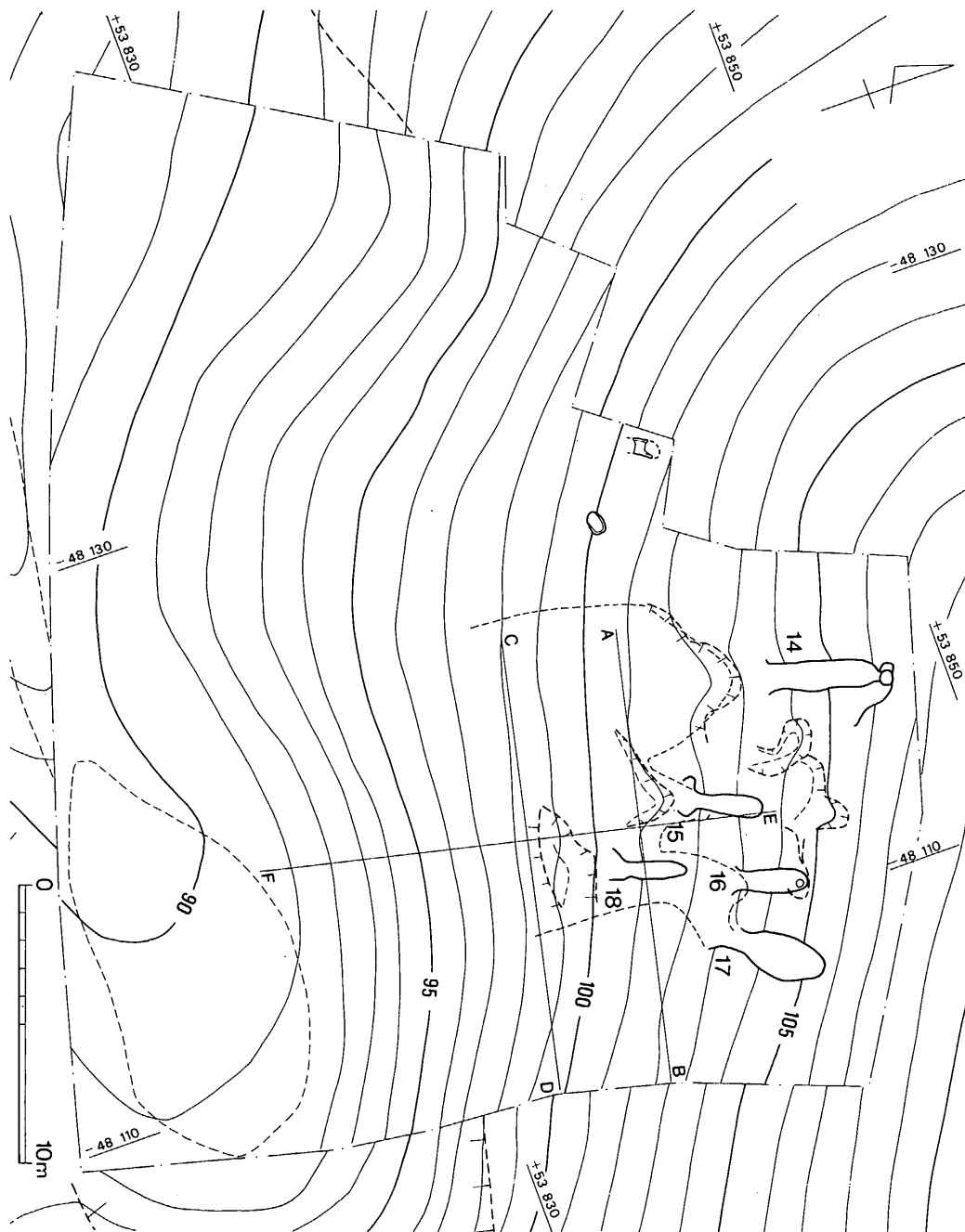




第164図 B-2地区窯跡配置図 (縮尺 1/250)



第165図 C地区窯跡配置図 (縮尺 1/250)



第 166 図 K 地区窯跡配置図 (縮尺 1/250)

## IV 結 語

### (1) 窯の立地と構造

#### 立 地

今回の調査で12地区70基の窯跡を確認した。地形的に見ると、牛頸川右岸では川に直接開いた谷に窯跡群が存在し、左岸では牛頸川に面した丘陵の東斜面は岩盤の露頭が著しく窯跡を検出することはできなかった。窯跡群はいずれも谷を深く分け入った地点に存在していた。窯の構成は、A-3・B-1・2・4・K地区では5～10基の単位で群を形成している。I地区は別格で上下二段に18基の窯が構築されていた。各谷の窯跡群の構成は、平均的に見て約15,000㎡前後の谷に約10基の窯を築くのが限度と考えられる。地形や構築・操業で若干の時間的な誤差はあろうが焼成に使用する薪を集める範囲もこの程度の面積は必要であったと思われる。窯の占有地は、蛇行する谷の窪地を有する斜面で、風の通りは良いが、強い風を直接受けない中腹・上部が選ばれている。これは焼成時の熱（温度）の調節が可能な様に加味されたものであろう。主軸方位も、東西のいずれかにずれ、焚口が北に開くものはない。窯にいたる通路に、集落跡・工房跡・階段等の遺構が検出できず不明であるが、窯の位置や急斜面から考えると丘陵の尾根づたいが最も動きやすい。

#### 構 造

窯体の規模は、2 mに満たない窯も存在するが、全長3.4m前後、焼成部最大幅1.0m前後のものが主流である。今回調査で明らかとなった注目すべき点は、窯跡群単位の中に4～5 m級の窯が必ず存在することと、7 mをこえる長大な窯の存在である。この時期の窯が小形化する傾向の中では特異な存在であるが、今回検出した3基の窯内と前面の灰原では、大形甕の破片が多数出土した。このことから小形の窯では、蓋杯・皿等の小型品。中形の窯では壺・鉢・高杯等の中形品と分業生産体制が確立していたことがうかがえる。

窯の形態は、燃焼部が狭く、焼成部中央付近が最も広い胴張り形を呈する。床面の傾斜角度は30～40°で奥壁に近いほど急角度である。煙道は10°前後の傾斜角で内傾する。

燃焼部壁面には補強用の立石や石組が存在するものがある。中でも36号窯の燃煙部両壁の石組は古墳の羨道を思わせる。その他窯の付設遺構としては、41・42・44号窯のように前庭部横に作業場を設ける窯もある。

また、33・43・44号窯の煙道部上面を覆っていた大甕胴部片は、閉塞用に使用されたと考えられ、頂惠器焼成法を知る上で貴重な例になろう。

表 2 窯跡一覽表

(単位 m)

地 区	No.	立地 (斜面)	窯体標高	主軸 方位	全長	熱 燒 部			燒 成 部			煙道 傾斜角	排水溝	舟底状 ピット	前庭部 土 塙	焚 口 横土塙
						長	幅	壁石組	斜長	最大幅	高さ					
A-1	1	下部	134.3 ~	N5°E	3.18	0.9	0.6 ~0.8	—	2.6	0.97	(0.6)	38°	—			
A-3	4	上部	132.0 ~137.6	S24°E	7.6	2.9+α	1.0	右	4.8	1.5	0.5 ~1.25	25°	1°	煙道	○	
	5	上部	134.5 ~136.1	S25°E	3.9	0.8	1.0	兩	3.0	1.15	(0.7)	40°	-5°			
	7	上部	134.5 ~136.8	S6°E	3.65	1.05	0.85	兩	2.75	1.25	(0.75)	29°	7°			○
	8	上部	134.4 ~137.0	S25°E	4.3	0.95	0.8	—	2.7	1.1	0.75	35°	13°			
	9	上部	135.2 ~	S34°E	2.8+α	0.6+α	0.75	—	2.05	0.8	0.4 ~0.5	40°	0°			
B-1	19	中腹	127 ~	S86°E	3.1+α	0.7+α	0.75	左	2.8	0.95	0.4 ~0.45	34°	14°			
	20	中腹	127.8 ~130.6	S89°E	4.0	0.65	0.85	—	3.25	1.1	—	30°	10°			
	21	中腹	129.4 ~131.1	S57°E	3.35	0.8	0.73	—	2.4	0.9	(0.75)	30°	—			○
	22	中腹	124.7 ~	S52°E	2.1+α	0.4	0.72 ~0.9	—	1.9	0.95	(0.8)	28°	9°			
	29	下部	122.3 ~	N4°E	3.25+α	1.5+α	0.75	—	2.0	0.87	—	37°	—			○
	30	中腹	125.1 ~	S60°E	3.85+α	0.9	0.72	—	3.23	1.07	(0.75)	30°	—			
	31	中腹	124.6 ~	S45°E	4.5	1.95	0.85	右	2.45	1.36	0.65 ~0.8	30°	13°			○
	32	中腹	122.8 ~	S40°E	3.0	0.65	0.75	—	2.45	1.03	—	31°	0°			
	33	下部	122.9 ~	N9°E	2.9+α	0.5	0.6	—	2.65	0.92	(0.45)	28°	(15°)			
	B-2	23	上部	133.7 ~	N77°W	3.5	0.5	0.9	—	3.4	1.3	—	29°	6°		
24		上部	134.1 ~	N65°W	1.6	0.5	0.7	—	1.4	0.9	0.5	29°	7°			○
25		上部	133.8 ~136.5	N79°W	3.1	0.5	0.7	—	2.9	1.0	0.5	27°	5°			○
26		上部	134.0 ~	S85°W	2.5	0.5	0.8	—	2.2	1.0	(0.5)	26°	10°			○
27		上部	136.3 ~138.1	N76°W	3.6	1.0	0.7	—	2.4	0.9	(0.5)	27°	0°			○
28		上部	132.1 ~	S88°W	(4.0)	1.2	0.7	—	—	1.0	(0.6)	27°	—			
B-4		40	上部	134.6 ~137.2	N66°W	3.0	0.5	0.8	—	2.7	1.2	0.3	25°	5°		
	41	上部	136.2 ~137.2	N75°W	1.9	(0.6)	0.6 ~0.8	—	1.4	0.9	0.4 ~0.5	(29°)	0°			○
	42	上部	134.1 ~137.1	S87°W	2.8	0.7	0.6 ~0.8	右	2.3	1.0	0.3 ~0.7	24°	4°	煙道		○
	43	上部	135.7 ~139.7	N68°W	3.3	1.1	0.8 ~1.0	—	2.6	1.1	0.6	37°	5°			○
	44	上部	136.3 ~139.0	N89°W	3.15	0.87	0.7 ~0.85	左	2.52	1.03	0.45 ~0.7	25°	10°			○
	45	上部	135.4 ~138.4	N88°W	3.0	0.8	0.6	—	2.75	0.76	—	20°	8°			
	46	上部	134.0 ~(136.9)	N14°W	3.7	1.5	0.9 ~1.1	—	2.8	1.2	—	38°	—			○
	47	下部	120.1 ~	N76°W	2.7+α	0.55+α	0.8	左	2.33	1.0	(0.7)	22°	15°			
	48	下部	120.0 ~	N62°W	2.86	0.45	0.7	—	2.72	0.91	(0.55)	27°	4°			
	49	下部	118.8 ~121.2	N56°W	2.8	0.4	0.68	—	2.55	1.05	0.4	21°	10°			○
C	34	上部	130.2 ~136.0	N45°W	6.6+α	1.65+α	1.3	—	5.6	1.55	1.1	29°	8°	煙道	○	
	35	上部	~133.3	N37°W	—	—	—	—	2.3+2	1.2	—	—	18°			
	36	上部	129.7 ~135.3	N39°W	6.8+α	1.0 1.8	1.2 1.4	兩	5.05 5.8	1.4	—	31°	11°			○
	37	上部	~134.0	N33°W	—	—	—	—	2.8+2	1.1	0.5	33°	17°			
G	10	下部	~125.0	N56°W	2.3	—	—	左	1.55	(0.95)	—	31°	10°			
	11	下部	120.5 ~	N56°W	2.85	0.7	0.7	—	2.35	0.95	0.6	38°	0°			

地 区	No.	立地 (斜面)	窯体標高	主軸 方位	全長	燃 燒 部			焼 成 部				煙道 傾斜角	排水溝	舟底状 ピット	前庭部 土 壙	焚 口 積土壙
						長	幅	壁石組	斜長	最大幅	高さ	傾斜					
G	12	下部	120.9 ~	N69°W	2.5	0.4	1.0	左	1.75	0.85	0.58	22°	27°				
	13	下部	121.6 ~123.9	N86°W	3.3	1.1	0.9	—	3	1.05	—	24°	0°		○		
I	53	中腹	104.1 ~106.6	S39°E	3.0	1.1	0.7 ~0.8	—	2.3	1.0	0.3 ~0.4	32°	3°	前庭部	○	○	
	54	中腹	104.1 ~	S44°E	2.2+a	1.0	0.8	左	1.3+a	0.9	—	(30°)	—		○		
	55	中腹	104.1 ~106.8	S38°E	3.3	1.2	0.9 ~1.2	両	2.7	1.3	—	39°	0°	前庭部	○	○	
	56	中腹	103.1 ~104.8	S40°E	2.65	0.9	0.7 ~1.0	右	2.1	1.0	—	31°	0°		○	○	
	57	中腹	103.9 ~	S44°W	3.7+a	1.1	0.6 ~1.0	両	2.4+a	(1.3)	—	30°	—			○	
	58	中腹	~107.4	S41°W	—	—	—	—	2.1+a	(1.0)	0.5	(30°)	3°	煙道			
	59	中腹	103.4 ~105.1	S40°W	2.6	1.2	0.7 ~0.8	—	1.9	1.0	0.7	41°	0°			○	
	60	中腹	~104.0	S43°E	—	—	—	—	1.3+a	(0.8)	0.4	33°	3°				
	61	中腹	~103.5	S18°E	—	—	—	—	(3.1)	1.0	—	(35°)	4°				
	62	中腹	~103.3	S35°E	2.85+a	—	—	—	(2.9)	0.9	0.3 ~0.6	(26°)	0°				
	63	中腹	103.2 ~105.1	S 7°E	3.9	1.1	0.8 ~0.9	右	2.9	1.1	0.3 ~0.7	27°	13°			○	
	64	中腹	101.6 ~103.2	S40°W	3.6	0.7	0.7 ~0.8	左	3.1	1.2	—	24°	0°	前庭部		○	
	65	中腹	101.9 ~104.3	S46°W	3.95	0.4	0.8	—	3.8	1.1	—	33°	—			○	
	66	中腹	101.7 ~103.9	S45°W	4.5+a	0.6	0.8 ~0.9	—	3.9+a	1.1	0.7 ~0.8	29°	—			○	
67	中腹	102.1 ~103.9	S33°W	3.3	0.9	0.6 ~0.7	—	2.7	0.9	0.5 ~0.6	33°	5°					
68	中腹	~103.8	S36°E	1.9+a	—	—	—	(2.1)	0.9	—	31°	-28°					
J	50	中腹	99.6 ~	N67°E	3.4	0.8	0.66	両	3.05	1.1	(0.6)	31°	21°			○	
K	14	中腹	103.1 ~106.5	N20°E	5.4	1.35	1.02	左	4.6	1.2	(0.8)	33°	-8°	煙道		○	
	15	中腹	101.4 ~103.8	N30°E	3.2	0.65	0.65 ~0.85	右	2.65	0.8	0.25 ~0.65	31°	5°			○	
	16	中腹	102.0 ~105.0	N23°E	3.25	0.9	0.75 ~0.8	—	2.4	1.0	0.4	35°	13°	煙道			
	17	中腹	102.7 ~	N39°E	5.35	0.6	0.84	—	4.45	1.8	—	33°	10°				
	18	中腹	100.1 ~	N20°E	2.5	0.52	0.6	—	2.3	0.7	0.6	30°	—				
M-1	51	上部	115 ~	S89°E	2.14+a	0.92	0.58	両	1.43+a	0.93	—	(27°)	—		○		○
	52	上部	114.9 ~	S75°E	3.3+a	1.0	0.9	右	2.3+a	1.07	—	21°	—		○		○
M-2	69	中腹	115.2 ~117.8	N80°E	3.75	0.85	0.75	両	3.34	0.97	0.35	30°	7°			○	○

窯体標高…焚口床面～煙道上面

煙道傾斜角…+は内傾・-は外傾

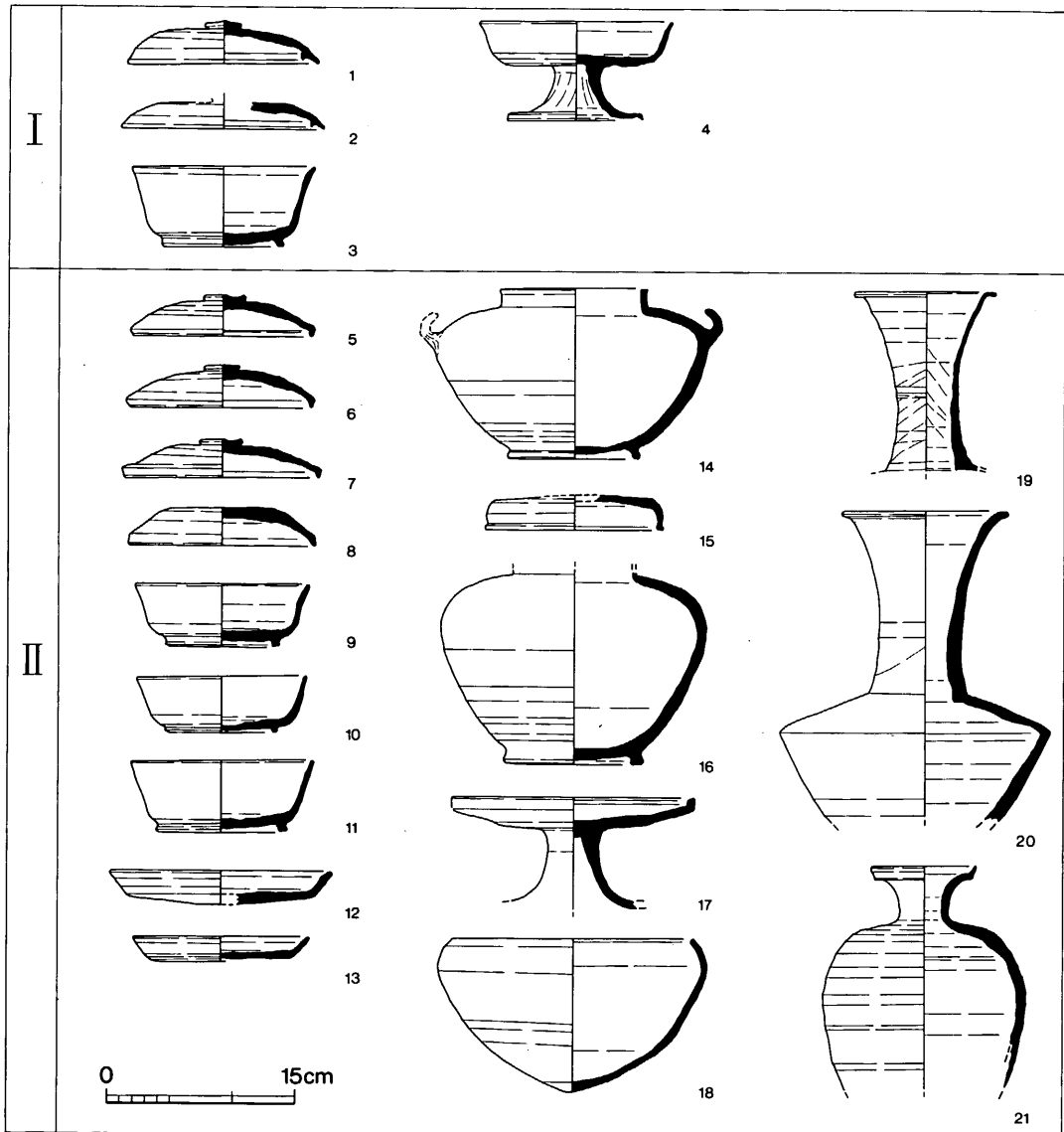
焼成部傾斜…燃焼部との境から奥壁基部をむすんだ線との角度 ( ) …推定値

灰原は急斜面のため残存状況は悪い。堆積も薄く層位によって窯の先後関係や操業次数を知ることは困難であった。また、窯床面での層位も認められず操業次数・期間等は明らかにすることはできなかったが、灰原や窯の規模で短期間の操業と考えるのは若干問題があろう。

各地区で窯の祭祀と考えられる遺構が検出された。いずれも焼成不良品、割れたもの、欠損した土器等が埋納されており、当時の工人達の祈りが伝わってくる。(池辺)

(2) 須恵器について

今回、牛頸窯跡群の調査で総数70基の窯跡が発掘され、出土遺物から7世紀後半代から8世紀後半代にかけて操業された窯跡群であることがわかった。この時期の窯はいずれも小型化しており、長大な構造の窯と違って、一つの窯を永い年月にわたって操業するということをせず、むしろ使い捨ての様な感じで短い期間使用している。このため床の重なりは概して少く、窯内



第167図 出土土器分類①

1～3・8・11～13・15～13・20・21, 3号灰原出土  
4・14, 38・39号灰原出土。 19, 25号窯出土

資料は同一時期のものとして取り扱うことができるものが多かった。ここでは、主として代表的な窯の出土品を抽出して、窯相互の切り合いや、灰原形成の先後関係よりみた窯の新旧関係を援用して須恵器の形態の変遷をⅠ～Ⅳ期までに分類して、各々の時期の特徴を述べることにする。

## Ⅰ期

全体的に見て牛頸窯跡群中からの出土例は少く、また確実に窯内出土品と言えるものはなかったが、3号窯の灰原の資料がこれに相当する。蓋杯の蓋は、内面に身受けの返りを有するものであるが、返りは短く退化傾向にある。つまみは扁平ながらも頂部をやや尖らせたものがつく。天井部と体部の境は丸味を帯びるが器高はあまり高くない。身の特徴としては、体部はやや内彎気味にのびるもので器高は大である。底部と体部の境は明瞭でなく丸味をもち、底端部より少し内側の位置に断面四角形の高台がつく。

高杯は38・39号窯灰原出土品である。高杯の杯部はまだ深く、体部は緩く外反する。脚部は丈が短く脚柱内外ともしぼり痕が入る。

## Ⅱ期

18号窯内出土品と3号灰原の大半の資料がこれに相当する。

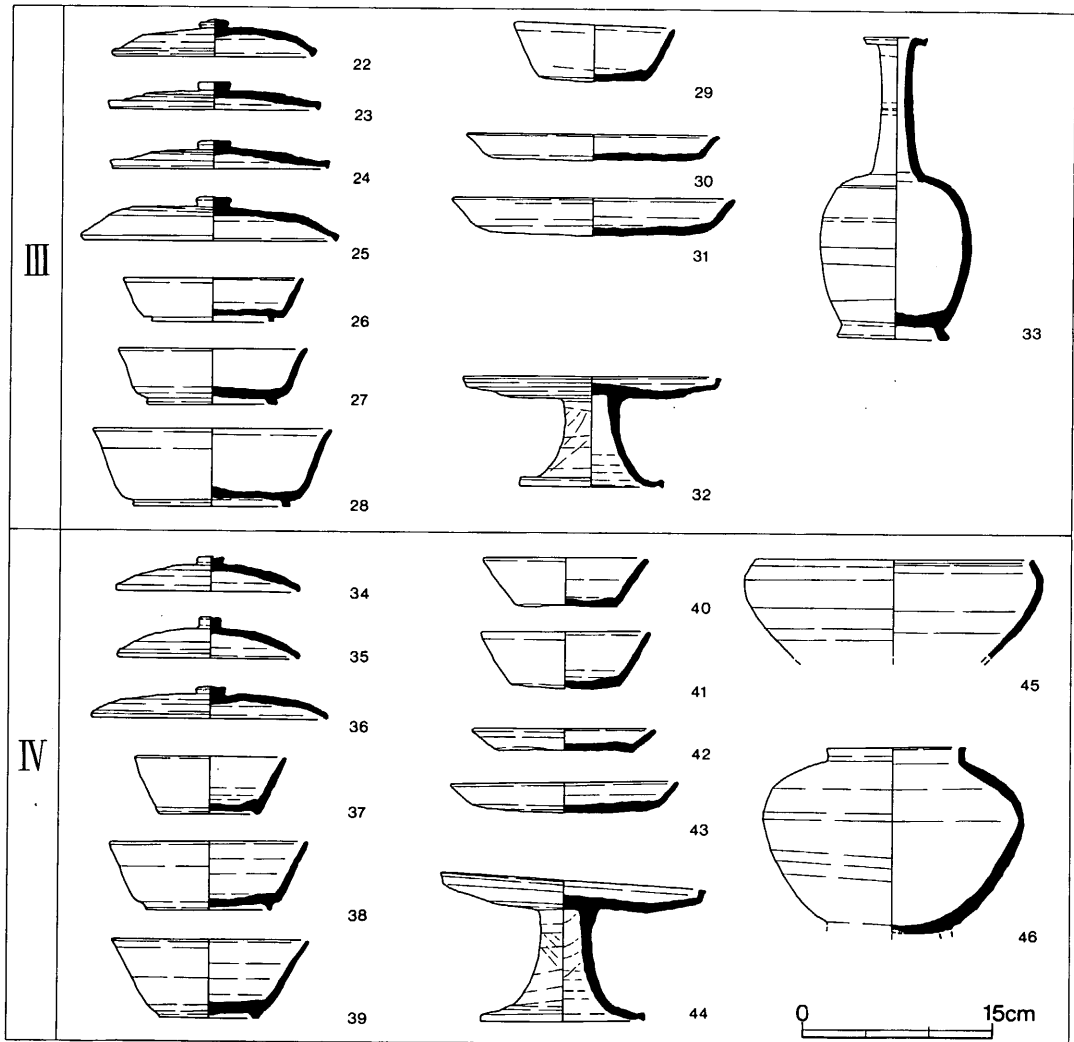
蓋杯は、蓋の天井部は平坦で体部との境に稜をなすものと、天井部・体部の境が不明瞭で丸味をもつものとがみられ、器高はおおむね大である。天井部外面はほとんどの個体が回転ヘラ削り調整している。口縁部は、端部を垂直に折りまげたもの、内傾させるもの、外反させるものの3種類が見られ、Ⅲ期のそれに比して口縁部の丈が長くつくられていて、内面の口縁部と体部の境には稜が明瞭に入る。つまみは扁平なボタン状のもので、頂部をわずかに尖らせるものが多いが、つまみのないものもある。身の体部はほぼ直線的にのびて口縁部近くでわずかに外反するものや、体部中ほどが内彎気味にのびるものとがみられる。底部と体部の境は丸くつくられており、短くて断面四角形の高台が底端部よりやや内側につく。高台は内側が地につき、外側が跳ね上った形態のものも多く見られる。皿は平底のものと、若干丸味をもつものとの両者がある。短頸壺の蓋は天井部は平坦で、体部との境に鋭く稜が入り、口縁端部は平坦で外傾する。壺は肩部が上位に位置しており、内側を接地する高台がつく。有鉤短頸壺は38・39号灰原出土品である。頸部は垂直に短く立ち、口縁端部上面はわずかに凹彎する。肩部は上位に位置しこの部分に把手がつく。胴部下半は広範囲を回転ヘラ削りし、断面四角形の高台がつく。高杯の杯部は浅くなり、口縁端部は平坦で内傾する。脚は丈の低いものであり、長脚のものはみられない。長頸壺は頸部中ほどがしまり、口縁部は外反して口径をひろげ、口縁端部は大きく屈曲して、平坦面をなすものと、わずかに外反して、平坦面を有するものとがみられる。肩

部と胴部の境は鋭く稜がつく。瓶は頸部がまだのびておらず短いもので、口縁部は斜め上方に鋭く屈曲する。鉄鉢は口縁部を著しく内弯させ、端部は内傾する平坦面を有する。底部は鋭く尖る底面をなす。

III期

28号窯内出土品と25号窯出土の長頸壺、27号窯出土の高杯より特徴を述べる。

蓋杯の蓋は、II期に比して口縁部の丈は短くなり退化しつつある。口縁部の断面は三角形に近く、体部より垂直に屈曲したもの、内傾するもの、外反するものの3種類がみられる。天井部は高く水平のもの、丸味をもつものと低く水平のものが見られる。天井部外面はまだ、



第168図 出土土器分類②

22~31・33, 28号窯出土。 32, 27号窯出土  
24~45, 24号窯出土。 46, 11号・12号煙道部間出土



ほとんどが回転ヘラ削り調整である。つまみは扁平なボタン状のものであり、頂部は水平か、わずかに尖る。口縁部と体部の内側の境はまだ明瞭である。身は底部と体部の境が丸く不明瞭なもの、少数ではあるが明瞭に稜がつくもののがみられる。体部はわずかに内彎気味に外反する。高台は、断面四角形を呈し、底端部よりやや内側につくものが多くみられるが、底端部近くにつく新しい傾向のものも若干存在する。皿の底部は平坦であり、体部は直線的に外上方にのび、口縁部は外方へ屈曲する。底部は未調整である。高杯の杯部は浅く、短い体部は直立気味で、口縁端部は水平に近い。脚部はまだ短く、脚端部は直立し、端部は丸い。瓶の頸部は長くのび、中央部に二条の凹線が入る。口縁部は水平に近く屈曲し、端部を上方へひき出す。胴部は丸味をもち、底端部に断面四角形の高台がつく。

#### IV期

24号窯出土品に好資料があり、短頸壺は11～12号窯煙道部間の出土品である。

蓋杯の蓋は口縁部が退化して、口縁端部をただ垂直に近く形成したものとなり、体部と口縁部の内側の境は不明瞭となる。24号窯出土のものは1個体を除いてすべて天井部外面は未調整であり、粗雑化してくる。全体的に天井部は丸くつくられており、器高は低くなる傾向にある。身は体部・口縁部は直線的に外上方にのび、体部と底部の境は明瞭となる。高台は底端部に付設される。つまみは従前通りの扁平なボタン状のものと、径は小さくなるが、丈がやや長くて、円筒形状のつまみが表われてくる。杯の底部は平坦で体部との境は鋭く稜がつく。皿の体部は直線的に外反するもので、底部は平坦なものとはわずかに丸味をもつもののがみられる。高杯は杯部が浅く、口縁端部は平坦でわずかに外傾する。脚部はやや丈が長くなっており、長脚化の傾向にあるが長大な脚部の土器は灰原からは出土しているが窯内からは検出されていない。脚端部の形態は蓋杯の蓋と同じ特徴を有する。鉄鉢はII期のそれに比して、体部が若干浅目のようである他はさしたる相違は見出しえない。短頸壺は口縁部が短く直立し、上面はわずかにくぼませる。胴部の最大径部の位置は少し下方に移動する。(川述)

#### 消費地遺跡(大宰府跡)からみた各期の年代

各期に相当する資料を一括して出土し、また実年代の一端を押えることが可能な大宰府検出の遺構を抽出し、検討してみよう。

#### I期

大宰府跡第I期に相当する。

政庁前面官衙域(不丁地区)第98次調査で検出した不整形な落ち込みから出土した資料に漆容器が多数みられる。これは漆器を製作すると同時に、失柄着装等を予想させるに十分である。この考えが妥当であるとする大宰府第I期は軍事的機能が優先した時期であり、これと相俟っていることになる。政庁第I期の時期は、不丁地区官衙群(第84次調査)において検出した、

S X 2344および政庁地区第26次調査出土品がクロス・チェックを可能としている。S X 2344からは飛鳥・藤原編年Ⅳ、第26次調査出土品では飛鳥・藤原編年Ⅲが出土している。以上のことから670年以降に属するものが大部分と考えることが可能である。第Ⅰ期として図示した1～4はいずれもS X 2480から出土しており、時期をこの頃とすることができよう。

## Ⅱ期

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは大宰府政庁第Ⅱ期に相当する。

第83～85・89・90次調査で検出したS D 2340出土資料が参考になる。このS D 2340からは「天平六年（734）」「天平八年（736）」銘の木簡が出土している。この溝は政庁第Ⅱ期に掘削され、八世紀中頃に埋められたと考えられている。政庁第Ⅰ期の遺構が近在する関係からこの溝から出土する資料に七世紀後半代のもも一部出土したが僅少である。また、八世紀中頃の資料も少ない。つまり、八世紀前半代を中心とする資料といえよう。

杯蓋の口縁部は大きく、杯身体部下半に丸味を残す点など共通するが、11のように体部と底部との境に稜線を有するような新しいタイプも少数みられる。高杯・鉄鉢形鉢・複合口縁にする壺なども共通する。長頸壺20の口縁部片が観世音寺小子房地区整地層から出土しており、参考となろう。有翼の短頸壺は筑紫野市君ヶ畑遺跡から「和同開珎」を副葬した資料と近似する。これらから、全体的にみるとⅡ期を八世紀前半頃として誤りはなからう。

## Ⅲ期

八世紀中頃を中心とする一括資料は未だ持ち合わせてはいない。

杯蓋の縁部を屈曲する新しいタイプの出現や杯身に付く高台は端部には貼付される例がない点、更に無高台杯29のように体部と底部との境を明瞭にする点などを考えるとⅡ期に後行し、Ⅳ期に先行することは確実である。そこで、一応Ⅳ期との関係からここでは八世紀中頃を代表する資料としておこう。

## Ⅳ期

学校院北部第18次調査検出の井戸S E 400、政庁後背地第102次調査検出の不整形の土壌状遺跡S X 2999を代表的遺構としてあげることができる。S E 400とS X 2999出土資料には高台付杯に微妙な差を見出すことができる。また、共伴の土師器には明確な差がある。従前に、S E 400を九世紀前半代、S X 2999を八世紀後半代として来た。両遺構出土の蓋の口縁部は既に退化小形化しているため、八世紀後半代と九世紀前半代と明確に区分することは今の時点ではできない。無高台杯40・41も同様である。杯身37・39はS E 400では代表的な資料であり、杯身38はS X 2999出土の大部分と共通する。しかし、新たな器形たとえば、体部と頸との境や頸部に突帯を巡らす壺などがみられないことなどから、Ⅳ期の中心を八世紀後半代としたい。しかしながら、既述したような特徴から九世紀前半代も考慮に入れなければならないであろう。

以上のことから、Ⅰ期を七世紀後半代、Ⅱ期を八世紀前半代、Ⅲ期を八世紀中頃、Ⅳ期を八世紀後半代から九世紀初頭頃にその実年代を求めたい。

(森田)

## 表3 遺物一覽表

### 凡 例

1. 遺物番号は窯跡群ごとに通し番号とし、実測図番号・写真番号と共通である。
2. 観察欄のAは色調、Bは胎土、Cは焼成、Dは残存率を示す。

B-1 地区 (井手窯跡群)

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第10図 1	蓋杯 (蓋)	19号窯 煙道	口径 15.9 器高 1.7 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は下端を小さく垂下させて成形、内傾する。 天井部は低く、外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒 ～灰色 B 小、粗砂若干含 C 良好 D 完存
2	蓋杯 (蓋)	20号窯 窯内	口径 13.0 器高 2.4 つまみ径 1.6 つまみ高 0.8	口縁部は小さく折り曲げて成形、外傾する。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、茶色 外、灰色～茶褐色 B 小砂1ヶ含 C 良好 D 完存
3	蓋杯 (蓋)	20号窯 窯内	口径 14.2 器高 2.7 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8	口縁部は下端を引き出して成形、外傾する。 天井部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色～白 灰色 B 砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存
4	蓋杯 (蓋)	20号窯 窯内	口径 14.4 器高 2.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は丸くおさめて終る。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、白灰色～白 灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
5	蓋杯 (蓋)	20号窯 窯内	口径 14.6 器高 3.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は小さく折り曲て成形、細部は丸い。 天井部との境がくびれる。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～茶灰 色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
6	蓋杯 (蓋)	20号窯 窯内	口径 16.5 器高 2.7 つまみ径 2.0 つまみ高 0.9	口縁部は折り曲げて成形、細部は丸い。 天井部外面は未調整。重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色～肌色 外、白灰色 B 小砂少含 C 不良
7	蓋杯 (身)	20号窯 窯内	口径 13.2 器高 3.7 高台径 8.8 高台高 0.4	体部は直行、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸味をおび、やや内側の高台は直立する。 底部外面は未調整	A 内・外、黄褐色～黒 灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 4/5
8	皿	20号窯 窯内	口径 17.8 器高 2.8 底径 16.2	口縁部は直行する。 酸化炎焼成。	A 内・外、明黄褐色 ・口縁部黄色味黒色 B 細砂多含 C 不良 D 1/3強
第14図 9	蓋杯 (蓋)	22号窯 窯内	口径 16.8 器高 3.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	口縁部は下端を垂下、肥厚させる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
10	蓋杯 (蓋)	22号窯 床面	口径 13.8 器高 2.5 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は端部を垂下、内傾する。 天井部外面は横ナデ調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色～暗灰色 外、黄灰色～黒灰色 B 砂粒多含 C 良 D 9/10
11	蓋杯 (身)	22号窯 床面	口径 9.0 器高 2.6 底径 5.3	口縁部は直行する。 体部下～底部の外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色 B 細砂ほとんど含まず C 良好 D 1/2
12	蓋杯 (身)	22号窯 窯内	口径 11.4 器高 4.6 高台径 8.4 高台高 0.5	体・口縁部は直行。 高台は屈曲部にあり、外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～黒 B 微砂多含 粗砂少含 C 良好 D 5/6
13	皿	22号窯 床面	口径 18.0 器高 2.3 底径 14.8	体・口縁部は直行し、下半分が穿孔がある。 底部外面はナデか。 酸化炎焼成	A 内・外、白味茶褐色 B 細砂少含 精良 C 不良 D 1/2弱
14	短頸壺	22号窯 窯内上層	口径 11.8 器高 18.6 底径 13.5	最大径部分が上位にある。 口縁部は小さく外傾して立上り、水平な端面をもつ。 体部下半は回転ヘラ削り、底部外面は横ナデ調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 胴部 1/2
第16図 15	蓋杯 (蓋)	29号窯 窯内床面	口径 13.3 器高 1.7 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、小さく内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 つまみは扁平。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色 外、暗灰色 B 細小砂多含 C 良好 D 完存
16	蓋杯 (蓋)	29号窯 窯内	口径 13.6 器高 3.1 つまみ径 2.3 つまみ高 1.0	口縁部は下方に引き出して成形、内傾する。 器表は磨滅する。	A 内・外、白灰色～肌 色 B 細砂多量に含む C 不良 D 2/3
17	蓋杯 (蓋)	29号窯 窯内床面	口径 14.4 器高 2.9 つまみ径 2.5 つまみ高 1.1	口縁部は下方に引き出して成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、黄橙色～灰色 外、灰色～黒 B 細砂多含 C 不良 D 5/6

## B-1 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
18	蓋杯 (蓋)	29号窯 窯内床面	口径 14.6 器高 2.2 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は外側下方に引き出して成形、外傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 口縁部内面～外面に灰を被る。重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、青灰色 B 細小砂多含 C 良好 D 2/3
19	蓋杯 (蓋)	29号窯 窯内床面	口径 15.5 器高 2.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は外側下方に引き出して成形、細部は丸い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、白灰色～橙灰色 B 細小砂多含 C 不良 D ほぼ完存
20	蓋	29号窯 窯内床面	口径 17.7 器高 4.7 つまみ径 3.3 つまみ高 0.8	口縁部は外傾し、端部が膨む。 天井部は平らで外面を回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、灰色～橙灰色 B 細小砂多含 C 不良 D 2/3
21	蓋杯 (蓋)	30号窯 窯内	口径 15.7 器高 1.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は下方に小さく引き出し成形、内傾する。 天井部外面は横ナデ調整。 焼け歪む。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～灰色 B 砂粒少含 C 普通
22	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	つまみ径 1.4 つまみ高 0.8	天井部外面は回転ヘラ削り調整。 つまみは擬宝珠形となる。	A 内・外、灰色 B 細小砂を含む C 良好 D ほぼ完存
23	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 12.7 器高 1.6 つまみ径 1.9 つまみ高 0.3	口縁部は面取りを施して断面四角形とし、内傾する。 天井部外面は未調整。 つまみは扁平。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、黒色～暗青灰色 B 小砂少含 C 良好
24	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 12.6 器高 1.6 つまみ径 1.6 つまみ高 0.4	口縁部は変化を加えずに丸くおさめる。 つまみは扁平。 器表は磨滅する。	A 内・外、白灰色～淡褐色 B 細砂多粗砂少含 C 不良 D ほぼ完存
25	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 12.6 器高 2.5 つまみ径 1.9 つまみ高 0.4	口縁部は端部を折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸く、外面は横ナデ調整。 つまみは扁平。	A 内・外、黄味灰色 B 細砂少含 C 不良
26	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 13.9 器高 1.8 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	口縁部は端部を折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、黄土色 外、灰色～黄土色 B 小砂少含 C 不良 D 2/3
27	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 14.2 器高 2.3 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は面取りを施して成形、外傾する。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、青灰色 外、灰色～黒 B 微砂若干含む C 良好 D 2/3
28	短頸壺	31号窯 窯内	口径 13.8	口縁部は小さく外面し、端面はほぼ水平となる。 焼け膨れ、灰被りがみられる。	A 内、青灰色 外、灰色～黒～黒灰色 B 良好 C 良好 D 1/3
29	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 14.1 器高 2.8 つまみ径 1.8 つまみ高 0.3	口縁部は小さく折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は横ナデ調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、黒色～暗青灰色 B 細砂少含 C 良好
30	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 15.0 器高 2.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部は面取りを施すのみで、内傾する。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～黒灰色 B 微小砂少含 C 良
31	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 15.0 器高 2.2 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は変形を加えずに端部を丸くおさめる。 天井部外面は横ナデ調整。 器表磨滅。	A 内・外、灰味黄色 B 細砂少し含む C 不良
32	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 15.0 器高 1.3 つまみ径 2.1 つまみ高 0.3	口縁部は下端を小さく引き出して形成、細部は丸い。 天井部は低く、外面を横ナデ調整する。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固
33	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 15.1 器高 1.3 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は小さく折り曲げ、外傾し細部は丸い。 体部との境がくびれる。 天井部は低く偏平で、外面は未調整。	A 内・外、灰味黄色～灰色 B 細砂少含 C 普通
34	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 15.4 器高 2.0 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部は小さく折れて、丸くおさめる。 器表磨滅。	A 内、灰色～茶灰色 外、灰色 B 小砂少含 C 普通

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
35	蓋杯 (蓋)	31号窯 窯内	口径 16.2 器高 2.1 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は緩く折り曲げて成形、外傾する。 天井部は低く、外面は回転ヘラ削り調整。 穿孔あり、外面に灰を被る。	A 内・外、灰色 B 細小砂多含む C 良好 D 1/3
36	蓋杯 (身)	31号窯 窯内	口径 13.0 器高 3.9 底径 8.3 高台高 0.4	体・口縁部は直行して開く。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 内外面に灰を被る。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 微砂多含 細砂少含 C 良好 D 2/3
37	蓋杯 (身)	31号窯 窯内	口径 13.0 器高 4.6 底径 9.0 高台高 0.6	体・口縁部は内彎気味に立上る。 底部との屈曲部は丸味おび、やや内側の高台は直立する。 底部外面は横ナデ調整。	A 内、紫灰色 外、白灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
38	蓋杯 (身)	31号窯 窯内	口径 13.8 器高 3.1 底径 8.6 高台高 0.5	体部は直行し、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、内側に離れて付く高台は直立する。 底部外面は未調整。器内が薄い	A 内・外、灰色 B 微砂多含 C 良好 D ほぼ完存
39	蓋杯 (身)	31号窯 窯内	口径 14.0 器高 4.0 底径 8.7 高台高 0.3	体・口縁部は直行。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は扁平。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内、青灰色 外、青 灰色～黒～緑灰色 B 微砂多含 C 良好 D 2/3
40	蓋杯 (身)	31号窯 窯内	口径 14.1 器高 3.4 底径 9.8 高台高 0.4	体部の器肉厚く、口縁部は薄くなって外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は低い。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
41	蓋杯 (身)	31号窯 窯内	口径 14.7 器高 3.3 底径 9.7 高台高 0.5	体部の器肉厚く、口縁部は薄くなって外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 全体を横ナデ・ナデ調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色 ～暗灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
第20図 42	蓋杯 (蓋)	32号窯 窯内	口径 11.9 器高 1.8 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色～黒 外、黒 B 小砂少含 C 良好 D 完存
43	蓋杯 (蓋)	32号窯 窯内	口径 14.9 器高 3.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	口縁部は小さく折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸く、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～肌色 B 細砂少含、小砂 少含 C 良好
44	蓋杯 (蓋)	32号窯 窯内	口径 9.7 器高 2.7 つまみ径 2.4 つまみ高 0.9	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰被り、焼け歪む。	A 内・外、暗緑灰色～黒 B 小砂少含、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
45	蓋杯 (蓋)	32号窯 窯内	口径 20.3 器高 2.7 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
46	蓋杯 (身)	32号窯 窯内	口径 11.5 器高 3.5 底径 8.0 高台高 0.5	体・口縁部は外彎気味に立上る。 底部との屈曲は明瞭で、高台は外方へ踏んばる。 底部外面は横ナデ調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂多含 C 不良
47	蓋杯 (身)	32号窯 窯内	口径 12.9 器高 3.4 底径 9.1 高台高 0.5	体部は内彎し、口縁部は外反して薄く終る。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側の高台は直立する。 底部外面は回転ヘラ削り調整を行い、中心部にヘラ状工具の刺突 が残る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 精良 C 良好 D ほぼ完存
48	蓋杯 (身)	32号窯 窯内	口径 14.4 器高 3.7 底径 10.0 高台高 0.6	体部は直行、口縁部は外反する。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は肉厚で外方へ踏んばる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
49	蓋杯 (身)	32号窯 窯内	口径 17.2 器高 5.3 底径 11.8 高台高 0.5	口縁部は小さく外反し、薄く終る。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は小振り直立する。 全体を横ナデ・ナデ調整。 外面に灰を被る。	A 内、白灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/1
50	皿	32号窯 窯内	口径 13.7 器高 3.6	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸く、底部外面は未調整。	A 内・外、白黄色 B 砂粒を少含 C 普通
51	皿	32号窯 窯内	口径 14.2 器高 3.9 底径 10.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸く、底部外面は未調整。 器表磨滅。	A 内・外、黄灰色～黒 B 粗砂少含 C 不良 D 3/4

## B-1 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
52	皿	32号窯窯内	口径 14.6 器高 4.3 底径 11.2	体・口縁部は直線的に立上る。 底部との屈曲部は丸味をおびる。 底部外面は未調整。	A 内・外、白灰色 B 小砂少含 C 不良 D 1/2
53	皿	32号窯窯内	口径 14.8 器高 3.7 底径 12.4	口縁部は緩く外反する。 底部との屈曲部は丸味をおびる。 器表磨減。	A 内・外、白黄色 B 細砂少含 C 不良 D 3/4
54	皿	32号窯窯内	口径 19.0 器高 2.2 底径 16.3	体部の立上りが浅く、口縁部は小さく外反。 底部外面は未調整。 外面に火ダスキが走る。	A 内・外、暗青灰色～暗緑灰色 B 細・小砂含 C 良好 D 3/5
55	高杯	32号窯窯内	口径 20.1 器高 8.5 底径 11.5	口縁部は直立し、ほぼ水平な端面をもつ。 杯部外面は回転ヘラ削り調整。 脚端部は折り曲げて直立する。 内外面に灰を被る。	A 内、灰色 杯中中心黒化 外、灰色～黒色 部分的に黒化 B 細砂多含 C 良好 D 皿部 1/2
56	長頸壺	32号窯窯内	底径 10.1	体部下半は深く立上り、外面を回転ヘラ削り調整する。 底部外面は横ナデ調整。	A 内・外、青灰色 B 細、小砂少含 C 良好 D 1/2
57	長頸壺	32号窯窯内	胴径 19.0 底径 11.8	肩部が球形に近く、底部がすまららない。 最大径部分以下、底部外面までを回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、白灰色 B 小砂少含 C 普通 D 2/5
58	蓋杯(蓋)	33号窯窯内	口径 15.0 器高 2.7 つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、外内傾する。 天井部外面はつまみの周囲は未調整、天井部・体部に回転ヘラ削りを行う。	A 内、黄味灰色 外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/3
59	蓋杯(蓋)	33号窯窯内		つまみの位置に焼成後の穿孔を行う。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～茶灰色 B 小砂少含 C 良好
第22図 60	甕	33号窯煙道部		外面に格子タタキ痕、内面に同心円文当具痕を残す。 土器等が熔着。	A 内、灰色～暗灰色 外、暗青灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
第24図 61	蓋杯(蓋)	1号土城	口径 2.4 器高 12.5 つまみ径 1.1 つまみ高 0.5	口縁部は変形を加えずに面取りを施す。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、茶褐色～暗灰色 外、暗茶褐色～緑灰色 B 細砂少含 C 良好
62	蓋杯(蓋)	1号土城	口径 13.5 器高 2.3 つまみ径 2.3 つまみ高 0.3	口縁部は小さく下方を引き出し、内傾する端面をもつ。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、紫灰色～黒 外、灰味赤紫～灰色 B 微砂少含 C 良好
63	蓋杯(蓋)	1号土城	口径 14.6 器高 2.2 つまみ径 1.6 つまみ高 0.5	口縁部は小さく下方を引き出し、全体に丸味をもつ。 器表磨減。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色 外、灰色～黒 B 微砂少含 C 不良 D 3/5
64	蓋杯(蓋)	1号土城	口径 14.8 器高 2.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗緑灰色～黒 B 細砂少含 C 良好 D 5/6
65	蓋杯(蓋)	1号土城	口径 14.9 器高 1.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部は低く、外面は未調整。	A 内・外、暗青灰色 B 細砂少含 C 良好 D 口縁部 1/8 欠損
66	蓋杯(蓋)	1号土城	口径 15.0 器高 2.7 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、緑灰色～黒 B 小砂少含 C 良好 D 5/6
67	蓋杯(蓋)	1号土城	口径 15.1 器高 2.3 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立し体部との境がくびれる。 全体を横ナデ・ナデ仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固
68	蓋杯(蓋)	1号土城	口径 15.2 器高 2.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は下端を小さく引き出し、ほぼ直立する。 器表磨減。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～黒 B 細小砂・粗砂少含 C 不良

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観 察
69	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 15.2 器高 1.1 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は下端を小さく引き出し成形、直立する。 天井部は低く扁平で、全体を横ナデ・ナデ調整。	A 内、灰色 外、黄味灰色 B 細砂少し含む C 良好
70	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 15.2 器高 2.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は下方を小さく引き出して肥厚させ、内傾する。 天井部外面は未調整。 つまみは扁平。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色 外、灰色～黒 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
71	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 18.1 器高 3.4 つまみ径 10.1 つまみ高 1.3	口縁部は下端を小さく引き出し、やや内傾する。 天井部外面と横ナデ調整。 輪状のつまみをもつ。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色～黒 B 微砂少含 C 良好 D 1/3
72	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 15.3 器高 2.6 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は丸くおさめ、体部との境が小さくくびれる。 全体を横ナデ・ナデ調整する。 内外面に灰を被り、重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
73	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 15.4 器高 3.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	口縁部は、小さく折り曲げて成形、丸く膨む。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗黒灰色～ 暗青灰色 B 細砂 ほとんど含まず C 良好
74	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 15.6	口縁部は小さく折り曲げて成形、丸く膨む。 天井部を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、緑灰色～黒 B 小砂少含 C 普通 D 3/4
75	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 15.6 器高 2.7 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、外側面は凹み直立する。 天井部外面は未調整。	A 内、黄味灰色 外、黄味灰色～黒色 B 砂粒少含 C 普通
76	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 15.6 器高 2.3 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は下方へ小さく引き出して成形、ほぼ直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
77	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 15.6 器高 2.1 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は端部を面取りして成形、直立する。 天井部外面は未調整。 内外面に灰を被る。	A 内、青灰色～暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 小砂少含 C 良好 D 5/6
78	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 15.7	口縁部は端部を丸く肥厚させて成形する。 天井部外面は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 微砂少含 C 普通 D 3/4
79	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 15.8 器高 1.8 つまみ径 2.2 つまみ高 0.4	口縁部は体部との間を屈曲させ、下端を小さくつまみ出して成形。 天井部は低く、外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
80	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 16.8 器高 2.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	口縁部は小さく折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗青灰色～ 暗灰色 B 粗砂少含 C 良好
81	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 20.5 器高 1.3 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は体部との境をくびれさせ、丸くおさめる。 天井部は低く扁平。 器表磨滅。	A 内・外、黄味灰色～ 黒灰色 B 砂粒少含 C 普通
82	蓋杯 (蓋)	1号土城	口径 19.9 器高 2.8 つまみ径 2.6 つまみ高 1.1	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 焼成前に2孔を穿つ。	A 内・外、緑灰色～暗 緑灰色 B 細小粗砂少含 C 良好 D 1/3
第25図 83	蓋杯 (身)	1号土城	口径 12.2 器高 3.7 底径 7.7 高台高 0.4	体・口縁部は直線的に立上る。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、暗緑灰色 B 微砂多含 小石少含 C 良好
84	蓋杯 (身)	1号土城	口径 12.9 器高 3.9 底径 8.5 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部はやや丸味をおび、高台は低い。 外面に灰を被り、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色 B 微砂多含 粗砂少含 C 良好
85	蓋杯 (身)	1号土城	口径 13.3 器高 3.8 底径 8.4 高台高 0.5	体部は直行、口縁部は緩く外彎する。 底部との屈曲は明瞭で、高台は小さく外方へ踏んばる。 外面に灰を被り、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好



## B-1 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
86	蓋杯 (身)	1号土城	口径 13.4 器高 4.2 底径 9.1 高台高 0.6	体部は直行し、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、断面方形の高台は直立する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、褐色 外、茶灰色～褐色 B 小砂少含 C 良好
87	蓋杯 (身)	1号土城	口径 13.6 器高 4.1 底径 9.9 高台高 0.4	体部は直行し、口縁部は小さく内折する。 底部との屈曲は明瞭で、高台は磨滅して角がとれる。 底部外面は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 3/4
88	蓋杯 (身)	1号土城	口径 13.6 器高 4.0 底径 9.0 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は鋭く、小さい高台が外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色 B 微砂多含 C 良好
89	蓋杯 (身)	1号土城	口径 13.7 器高 3.7 底径 8.8 高台高 0.4	口縁部が大きく開く。 底部との屈曲は丸味をおび、高台はほぼ直立。 外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、灰色 B 微砂多含 細砂少含 C 良好 D 3/4
90	蓋杯 (身)	1号土城	口径 13.7 器高 3.6 底径 9.0 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は丸味をおび、高台は直行する。 底部外面は横ナデ調整。 外面に灰を被る。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～黒色 B 小砂少含 C 良好
91	蓋杯 (身)	1号土城	口径 14.0 器高 3.7 底径 9.2 高台高 0.5	体部は内彎気味に立上る。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台はほぼ直立する。 底部外面は未調整。 重ね焼き痕跡あり。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 小砂少含 C 良好
92	蓋杯 (身)	1号土城	口径 14.8 器高 4.1 底径 9.9 高台高 0.5	口縁部が大きく外反する。 底部との屈曲部に高台が付き、外方へ踏んばる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、緑灰色 外、緑 灰色～暗緑灰色 B 細小砂少含 C 良好 D 3/4
93	蓋杯 (身)	1号土城	口径 17.0 器高 5.3 底径 11.2 高台高 0.5	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は鋭く、やや内側の高台は小さく直立。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 小砂少含 C 普通 D 3/5
94	蓋杯 (身)	1号土城	口径 18.3 器高 3.4 底径 9.5 高台高 0.5	体・口縁部が大きく、浅く開く。 底部との屈曲部に高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 大きく焼け歪む。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/3
95	皿	1号土城	口径 14.0 器高 1.7 底径 12.2	口縁部は直行する。 底部外面は未調整。 内外に灰を被い、焼け歪む。	A 内・外、緑灰色～黒 B 細小砂少含 C 良好 D 3/4
第27図 96	蓋杯 (蓋)	2号土城	口径 12.8 器高 2.7 つまみ径 1.8 つまみ高 0.3	口縁部は小さく反転して丸く終り、体部との境がくびれる。 天井部は丸く、外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～ 暗灰色 B 細砂少含 C 良好
97	蓋杯 (蓋)	2号土城	口径 14.8 器高 2.4 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、丸味をもつ。 天井部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
98	蓋杯 (蓋)	2号土城	口径 15.1 器高 1.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は下端を引き出して成形、直立する。 天井部は低く扁平で、全体に横ナデ・ナデ調整を行う。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含 C 普通
99	蓋杯 (蓋)	2号土城	口径 16.1 器高 1.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、丸く終る。 天井部は低く扁平で、外面を静止ヘラ削りで仕上げるが、不定方向の平行タタキ痕を残す。	A 内・外、明緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/5
100	蓋杯 (蓋)	2号土城	口径 16.1 器高 1.6 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は低く扁平で、外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～白橙 色 B 細小砂少含 C 普通
101	蓋杯 (身)	2号土城	口径 13.0 器高 3.9 底径 8.8 高台高 0.4	体部は内彎気味に立上し、口縁部は小さく外反する。 体部との屈曲は鋭角となり、高台は外方へ踏んばる。 底部外面は平行タタキ痕を残す。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
102	蓋杯 (身)	2号土城	口径 13.1 器高 4.0 底径 8.8 高台高 0.3	体部は直行、口縁部は外反して薄く終る。 底部との屈曲は明瞭で、高台は低く扁平。 底部外面は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
103	蓋杯(身)	2号土城	口径 13.1 器高 3.3 底径 8.5 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや離れて付く高台は小さく内傾する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げるが、底部外面には平行タタキ痕を残す。	A 内・外、黄灰色 B 微砂多含 C 普通 D 口縁部1/3欠損
104	蓋杯(身)	2号土城	口径 13.1 器高 3.4 底径 8.6 高台高 0.3	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、低い高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 微砂多含 C 良好 D 口縁部1/6欠損
105	蓋杯(身)	2号土城	口径 13.4 器高 3.4 底径 9.4 高台高 0.4	体・口縁部は直行。 底部との屈曲は鋭く、高台は直立する。 器表磨滅。	A 内・外、白黄色 B 細砂ほとんど含まず C 不良 D 口縁部1/4欠損
106	蓋杯(身)	2号土城	口径 13.7 器高 3.8 底径 10.0 高台高 0.3	体・口縁部は直行するが、中央で小さくくびれる。 底部との屈曲は明瞭で、大きな高台は外方へ踏んばる。 底部に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、緑灰色 B 微砂多含 C 普通 D 口縁部1/8欠損
107	皿	2号土城	口径 15.0 器高 1.9 底径 12.8	体・口縁部は肉厚で、緩く外彎する。 底部外面に不定方向の平行タタキ痕を残す。	A 内・外、暗灰色 B 精良 C 良好 D 1/4
108	蓋杯(身)	2号土城	口径 19.7 器高 2.1 底径 16.5	口縁部は外反する。 底部外面は未調整。	A 内・外、明緑灰色 B 微砂少含 C 普通
109	無頸壺	2号土城	口径 10.7 器高 7.5 底径 10.2	体部の張りが弱く、底径が大きい。 口縁部は短く直立、丸く終る。 底部外周に静止ヘラ削りを行い、内側は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色一黒色 B 小砂多含 C 良好 D 3/4
110	鉢	2号土城	口径 23.8	体・口縁部は直行し、口端部が内側に肥厚して内傾する面をもつ。 体部中位以下を回転ヘラ削りで仕上げる。 口縁部に火ダスキが走り、内外面に灰を被る。	A 内、茶灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
第30図 111	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 12.0 器高 2.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は下端を小さく引き出して成形、丸味をおびる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 焼け歪みあり。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 微砂少含 C 良好 D 5/6
112	蓋杯(蓋)	灰原 G IV	口径 12.5 器高 2.5 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒 B 細、小砂少含 C 良好 D 3/5
113	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 12.7 器高 2.0 つまみ径 2.9 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、直立し、外側面は匙面となる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 粗砂少含 C 良好 D 3/5
114	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 12.9 器高 2.5 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、丸味をおびる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
115	蓋杯(蓋)	灰原 G IV	口径 13.2 器高 1.5 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は端部を引き出して成形、直立する。 天井部は低く、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 つまみは扁平。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、黒灰色 外、黄灰色～灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 5/6
116	蓋杯(蓋)	灰原 上層	口径 13.4 器高 1.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.5	口縁部は端部を引き出して成形、内傾する。 天井部は低く、外面を回転ヘラ削り調整する。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、暗緑灰色～黒色 外、灰色～黒色 B 少砂少含 C 良好 D 3/4
117	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 13.5 器高 2.1 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、小さく内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 少砂少含 C 良好
118	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 13.6 器高 1.3 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部は下端を引き出して成形、内傾し細部は鋭い。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 口縁部内面～外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒 ～灰色 B 小砂少含 C 良好 D 3/4
119	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 13.6 器高 1.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は扁平で、外面に回転ヘラ削り調整を行う。	A 内・外、緑灰色 B 微砂多含 C 良好 D 3/4

## B-1地区

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
120	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 13.7 器高 1.9 つまみ径 2.2 つまみ高 1.2	口縁部は折り曲げて成形、直立し、細部は丸い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 つまみは擬宝珠形で高く突出する。 焼け歪む。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好
121	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 13.7 器高 2.6 つまみ径 2.5 つまみ高 1.2	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、端部は鋭い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 つまみは擬宝珠形で高く突出する。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～黒 B 小砂少含 C 良好
122	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 14.0 器高 1.7 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立し、体部との境がくびれる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内、暗青灰色 外、暗灰色～黒 B 粗砂少含 C 良好
123	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 14.0 器高 2.7 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部は高く、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
124	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 14.0 器高 2.6 つまみ径 2.3 つまみ高 1.4	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は低く、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 つまみは擬宝珠形となり、高く突出する。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
125	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.0 器高 2.1 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、青灰色 外、青灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2弱
126	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 14.1	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 2/3
127	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.2 器高 2.0 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細小少含 C 不良 D 1/2
128	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 14.3 器高 2.6 つまみ径 2.9 つまみ高 0.3	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸味をもって高く、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、紫褐色 外、紫褐色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
129	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.3 器高 2.2 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は低く扁平で、外面はナデ調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒 B 細小砂少含 C 良好 D 5/6
130	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 14.4 器高 1.6 つまみ径 2.7 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、内傾し端部は鋭い。 天井部は丸く、外面は回転ヘラ削り調整。 焼け歪む。	A 内、黄味灰～黒 外、灰色～黒灰色 B 細、小、粗砂少含 C 良好 D 2/3
131	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 14.5 器高 2.4 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は、折り曲げて成形、ほぼ直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、緑灰色 B 細小砂少含 C 良好 D 3/4
132	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.5 器高 2.8 つまみ径 2.2 つまみ高 0.9	口縁部は下端をつまみ出して成形、内傾する。 天井部は扁平で、回転ヘラ削り調整を行う。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色、口 唇部黒色 B 細砂少含 C 良好、堅固
133	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.6 器高 1.4	口縁部は折り曲げて成形、外傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰被り、内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細小砂少含 C 良好
134	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 14.6 器高 2.1 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部は低く、回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D 2/3
135	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 14.6 器高 2.0 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色 外、灰色～黄灰色 B 粗砂少含 C 普通 D 5/6
136	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.7 器高 2.3 つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部は丸味をおび、外面をヘラ削りで調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
137	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 14.7 器高 3.3 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、端部は鋭い。 天井部は丸味をおびて高く、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、褐色 B 細粗砂少含 C 普通 D 7/8
138	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 14.7 器高 2.3 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部は扁平で、外面を回転ヘラ削りで調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
139	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 14.7 器高 2.1 つまみ径 2.9 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は扁平で、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、茶褐色 B 細粗少含 C 普通 D 3/4
140	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 14.8 器高 2.0 つまみ径 2.8 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は低く、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 小粗砂少含 C 良好 D 3/4
141	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 14.8 器高 1.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、外傾し、端部は鋭い。 天井部は扁平で、外面を回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好
142	蓋杯(蓋)	灰原	口径 14.8 器高 2.5 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、丸味をおびる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 不良 D 2/3
第31図 143	蓋杯(蓋)	灰原	口径 14.3 器高 2.6 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸味をもち、回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、白灰色 B 礫少含 C 不良 D 3/5
144	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 14.7 器高 2.2 つまみ径 2.8 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、体部境がくびれて強調される。 天井部は丸味をもち、外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、暗青灰色～黒 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
145	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 15.0 器高 2.5 つまみ径 2.9 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、ほぼ直立する。 天井部は丸味をおび、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 内面に重ね焼き痕あり。	A 内・外、茶灰色～橙色 B 細砂少含 C 良好
146	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 14.8 器高 3.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.5	口縁部は下端を外方につまみ出して成形。 天井部は丸味をおび、外面は回転ヘラ削り調整。 内面に重ね焼き痕あり。	A 内・外、茶褐色～暗緑灰色 B 細小砂少含 C 良好
147	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 15.0 器高 2.1 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は端部を肥厚させて成形、丸味をおびる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 焼け歪む。	A 内・外、灰色～緑灰色 B 小砂少含 C 良好 D 3/4
148	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 15.0 器高 2.9 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、外側面は凹む。 天井部は高く、外面を回転ヘラ削り調整する。 外面に灰を被る。	A 内、白灰色 外、茶褐色～白灰色 B 細砂多含 C 良好
149	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 15.1 器高 2.8 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は下端を引き出して成形、ほぼ直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、黄灰色～褐色 B 細小砂少含 C 不良 D 5/6
150	蓋杯(蓋)	灰原	口径 15.0 器高 2.2 つまみ径 2.8 つまみ高 0.7	口縁部は下端を外方へ引き出して成形、外側面は凹む。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D 3/4
151	蓋杯(蓋)	灰原	口径 15.0 器高 2.6 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁部は下端を小さく引き出して成形、内傾する。 天井部は丸味をもち、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内、黄土色 外、黄土色～茶灰色 B 細、小砂少含 C 不良 D 2/3
152	蓋杯(蓋)	灰原 G I	口径 15.3 器高 2.9 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸味をもち、外面を回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D 4/5
153	蓋杯(蓋)	灰原 G II	口径 15.4 器高 2.1 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は外傾する面取りを施して成形する。 天井部は低く、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗青灰色 外、緑灰色 B 微砂、粗砂少含 C 良好 D 3/4

B-1 地区

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
154	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 15.5 器高 2.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げ、全体に薄手である。 内外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗青灰色 B 細砂少含む C 良好 D 口縁部 1/4 欠損
155	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 15.8 器高 1.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、体部境がくびれる。 天井部は低平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含む C 良好、堅固
156	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 16.0 器高 1.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.3	口縁部は外上方に小さく肥厚させる。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、緑灰色 外、灰色～黒 B 小粗砂少含む C 良好
157	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 16.1 器高 2.0 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は下端を拡張して成形、内傾する。 天井部は低平で、外面を回転ヘラ削り調整する。 焼け歪む。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含む C 良好 D 1/4
158	蓋杯 (蓋)	灰原 G III	口径 16.7 器高 2.8 つまみ径 3.2 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形し、外傾、外側面は凹む。 天井部は高く、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 粗砂少含む C 不良
159	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 17.6 器高 2.3 つまみ径 2.4 つまみ高 0.9	口縁部は下端を外方へ引き出して成形する。 天井部は低く、外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に灰を被る。	A 内・外、緑灰色～黒灰色 B 小砂少含む C 良好 D 1/3
160	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 23.1 器高 3.2 つまみ径 3.4 つまみ高 0.7	口縁部は下端を垂下して成形、ほぼ直立する。 屈曲して立上る天井は高く、外面を回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含む C 良好
161	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 24.0	口縁部は外傾する端面をもつ。 屈曲して立上る天井部は高く、外面を回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、橙褐色 B 砂粒、金雲母多含む C 不良 D 1/4
162	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 11.0 器高 2.1	口縁部は外側下方へ引き出して成形。 天井部は丸く、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 内面に火ダスキが走る。	A 内、白灰色 外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含む C 良好 D 3/5
163	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 11.3 器高 0.8	口縁部は折り曲でけ成形、内傾する外側面はシャープ。 天井部は低平で、外面を回転ヘラ削り調整する。 外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 小砂少含む C 良好
164	蓋杯 (蓋)	灰原 G II	口径 13.6 器高 1.4	口縁部は内傾するシャープな面をもつ。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、灰色～黒色 B 砂粒少含む C 良好
165	蓋杯 (身)	灰原	口径 10.3 器高 3.3 底径 7.5 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲と明瞭で、すぐ内側に直立する高台がつく。 底部外面は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 砂粒多含む C 良好
166	蓋杯 (身)	灰原 G II	口径 10.8 器高 3.9 底径 7.0 高台高 0.7	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲部は丸く、高台は外方へ踏んばる。 内外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、灰色～黒 B 細小砂少含む C 良好
167	蓋杯 (身)	灰原 G II	口径 12.3 器高 4.5 底径 8.4 高台高 0.6	体・口縁部は外彎気味に立上る。 底部との屈曲部は丸く、高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含む C 良好
168	蓋杯 (身)	灰原 G II	口径 12.8 器高 4.9 底径 8.9 高台高 0.6	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は丸味をもち、高台は外方へ踏んばる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄味暗灰色 B 精良 C 普通 D 3/4
169	蓋杯 (身)	灰原 G II	口径 12.8 器高 4.1 底径 9.0 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側の高台は低い。 底部外面に平行タタキ痕を残す。 焼け歪む。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂少含む C 良好 D 7/8
第32図 170	蓋杯 (身)	灰原	口径 12.8 器高 4.8 底径 8.9 高台高 0.7	口縁部は小さく外反。 底部との屈曲部は丸く、すぐ内側に細身の高台が外方に踏んばって付く。 底部外面は未調整。 底部内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～黒 B 小砂少含む C 良好 D 1/2

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
171	蓋杯(身)	灰原 G II	口径 13.0 器高 4.4 底径 9.5 高台高 0.5	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
172	蓋杯(身)	灰原	口径 13.0 器高 4.5 底径 8.4 高台高 0.4	口縁部は緩く外反する。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は低く小さい。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 1/2
173	蓋杯(身)	灰原 G I	口径 13.0 器高 4.7 底径 8.7 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は丸く、高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、外、灰色 B 細砂多含 C 普通
174	蓋杯(身)	灰原	口径 13.0 器高 4.0 底径 9.4 高台高 0.6	口縁部は緩く外反。 底部との屈曲部は丸く、すぐ内側の高台は肉厚で外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、白灰色 B 小砂少含 C 不良 D 1/3
175	蓋杯(身)	灰原 G II	口径 13.1 器高 4.4 底径 8.6 高台高 0.5	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は丸味をおび、直立する高台は低い。 底部外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、青灰色 外、暗青灰色～黒色 C 良好 D 3/4
176	蓋杯(身)	灰原 G II	口径 13.1 器高 4.4 底径 9.3 高台高 0.6	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲部が高位にあり、高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、明緑灰色 B 細砂多含、粗砂少含 C 普通 D 3/4
177	蓋杯(身)	灰原 G III	口径 13.1 器高 3.7 底径 8.8 高台高 0.5	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲部は丸く、高台は外方へ踏んばる。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
178	蓋杯(身)	灰原 G II	口径 13.2 器高 4.5 底径 9.0 高台高 0.5	体・口縁部は弱く外反する。 底部との屈曲部は丸く、小振りの高台が外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
179	蓋杯(身)	灰原	口径 13.3 器高 4.4 底径 8.6 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部はやや丸味をおび、高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 7/8
180	蓋杯(身)	灰原	口径 13.4 器高 4.3 底径 8.7 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に小さく高台がつく。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色～暗灰色 B 砂粒雲母少含 C 良好 D 1/3
181	蓋杯(身)	灰原	口径 13.4 器高 4.6 底径 9.0 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は丸味をおび、すぐ内側につく高台は外方へ踏んばる。 酸化炎焼成で器表磨滅。	A 内、黄橙 外、橙色～茶色 B 砂粒雲母 角閃石含 C 普通 D 1/2
182	蓋杯(身)	灰原 G II	口径 13.6 器高 4.1 底径 9.2 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は明瞭で、すぐ内側にくる高台は小さく低い。 底部外面は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 砂粒雲母 角閃石多含 C 良好
183	蓋杯(身)	灰原 G II	口径 14.0 器高 5.4 底径 10.1 高台高 0.6	体・口縁部はやや外彎気味に立上る。 底部との屈曲部は丸味をおび、高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、白褐色 B 小砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D 3/4
184	蓋杯(身)	灰原	口径 14.0 器高 4.9 底径 10.8 高台高 0.5	体・口縁部は外彎しつつ立上る。 底部との屈曲部は丸く、すぐ内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面は回転ヘラ削り調整。 焼け歪む。	A 内・外、暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
185	蓋杯(身)	灰原 G II	口径 14.0 器高 4.6 底径 8.6 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は明瞭で、やや内側で小さな高台が外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、白灰色～黄灰色 B 粗砂、雲母少含 C 不良 D 3/4
186	蓋杯(身)	灰原 G II	口径 14.2 器高 3.9 底径 9.4 高台高 0.3	体部は直行し、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲部は明瞭で、すぐ内側の高台は歪む。 底部外面は未調整。 高台部分に灰を被る。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好
187	杯	灰原	口径 14.0 器高 4.3 底径 9.4	底部が丸く、体・口縁部はほぼ直行する。 底部外面は未調整。 器内が厚い。	A 内・外、黄灰色 B 粗砂多含 C 不良 D 3/4

## B-1 地区

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第33図 188	長頸壺	灰原		体部最大径部分に鋭い稜をもつ。 残存部下端は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/3
189	鉢	灰原	口 径 22.5	体・口縁部が連続的に内彎する。 口縁部は内傾する面をもつ。 底部付近のみ回転ヘラ削り調整。 酸化炎焼成。	A 内・外、橙褐色 B 細粗砂 赤色粒子 金雲母含 C 良好 D 1/4
190	把手	灰原 G II		断面が扁平な角形把手。 須恵質。	A 内・外、灰色 B 粗砂少含 C 良好
191	長頸壺	灰原	口 径 5.2	口縁部は外反して終り、外傾する端面をもつ。 中位に1条の沈線を刻む。	A 内・外、黄灰色 B 細砂含、黒色粒子含 C やや軟質 D 頸部のみ完存
第34図 192	蓋杯 (蓋)	灰原 G61	口 径 15.0 器 高 1.8 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、灰色～黒色 B 砂粒含 C 良好
193	蓋杯 (蓋)	灰原 G58	口 径 11.6 器 高 2.5 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は高く、外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗青 灰色～黒色 B 細砂含、粗砂少含 C 良好 D 1/3
194	蓋杯 (蓋)	灰原	口 径 11.7 器 高 2.5 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は下端を小さく引き出して成形、細部は丸い。 天井部外面は未調整。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好
195	蓋杯 (蓋)	灰原	口 径 11.8 器 高 2.3 つまみ径 1.3 つまみ高 0.9	口縁部は小さく折り曲げて成形、内傾する。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
196	蓋杯 (蓋)	灰原 G58	口 径 11.9 器 高 2.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は低く、外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色～黒色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固
197	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口 径 11.9 器 高 2.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は小さく折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、暗 灰色～暗黒灰色 B 粗砂少含 C 良好 D 3/4
198	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口 径 12.2 器 高 2.4 つまみ径 1.7 つまみ高 0.5	口縁部は弱い面取りを施して成形、外傾し、端部は丸い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固
199	蓋杯 (蓋)	灰原 G16	口 径 12.2 器 高 1.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 口縁部1/4欠損
200	蓋杯 (蓋)	灰原 G16	口 径 12.3 器 高 2.1 つまみ径 1.9 つまみ高 0.4	口縁部は端部を小さく折り曲げ、丸味をもつ。 天井部は丸く、外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、灰色～暗青 灰色～黒 B 微砂多含、細小、少含 C 良好
201	蓋杯 (蓋)	灰原	口 径 12.3 器 高 2.1 つまみ径 1.7 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、紫灰色 外、紫灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
202	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口 径 12.4 器 高 2.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、細部は丸味をおびる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 口縁部一部欠損
203	蓋杯 (蓋)	灰原	口 径 12.5 器 高 2.2 つまみ径 1.9 つまみ高 0.8	口縁部は変形を加えず、内傾する面をもって終る。 天井部外面は未調整。	A 内・外、茶灰色～暗 緑灰色 B 小砂少含 C 良好
204	蓋杯 (蓋)	灰原	口 径 12.6 器 高 1.9 つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	口縁部は肥厚して終り、細部は丸い。 天井部は平らとなる。	A 内・外、青灰色 B 小砂少含 C 良好 D 1/5

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
205	蓋杯 (蓋)	灰原 G51	口径 12.5 器高 2.7 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部はほぼ丸くおさめ、変形させない。 天井部は丸く、外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色～灰色 B 細、小砂少含 C 良好 D 1/3
206	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 12.7 器高 2.6 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部は小さく肥厚し、丸く終る。 天井部は丸く、外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好
207	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 12.7 器高 2.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.3	口縁部はほぼ丸くおさめ、変形させない。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 5/6
208	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 12.3 器高 2.6 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は緩く折り曲げて成形し、丸く仕上げる。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
209	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 12.4 器高 2.2 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は断面三角形に肥厚させ、直立する。細部は甘い。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色～黒 B 粗砂少含 C 良好
210	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 13.4 器高 3.1 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	口縁部は変形させずに弱い面取りを施す。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～黒 B 細砂多含、小砂少含 C 良好
211	蓋杯 (蓋)	灰原 G22	口径 13.0	口縁部は変形せずに弱い面取りを施す。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
212	蓋杯 (蓋)	灰原 G44~47	口径 13.0 器高 2.0 つまみ径 1.5 つまみ高 0.5	口縁部は下端を小さく引き出し、やや内傾する。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデ調整する。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
213	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 13.0 器高 1.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は下端を小さく引き出し、内傾する。 天井部は丸味をおび、全体を横ナデ・ナデ調整する。 内面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、灰色 B 微砂多含、細砂少含 C 良好 D 1/2
214	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 13.0 器高 1.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は下端を小さく引き出し、丸味をもって終る。 天井部は低平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 小砂少含 C 良好
215	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 13.0 器高 1.5 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は下端を小さく引き出すとともに体部境がくびれる。 天井部は低く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色 B 小砂少含 C 良好 D 3/4
216	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 13.1 器高 2.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部は丸く、外面を回転ヘラ削り調整する。 内外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、暗黒灰色～黒色 B 小砂少含 C 良好 D 3/4
217	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 13.1 器高 1.3 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は上下に肥厚させて直立する。 天井部は低平で、外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒、雲母少含 C 良好 D 5/6
218	蓋杯 (蓋)	灰原 G22	口径 13.4 器高 2.1 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細粒少含 C 良好
219	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 13.2 器高 1.9 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部は肥厚させて、断面方形とする。 天井部は低く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 焼け歪む。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 3/4
220	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 13.2 器高 2.6 つまみ径 1.5 つまみ高 1.1	口縁部は下端を小さく引き出し、体部境がくびれる。 全面を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、茶褐色～褐色味暗灰色 外、暗灰色～灰味茶褐色 B 細砂少含 C 良好
221	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 13.2 器高 2.2 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、体部境がくびれる。細部は丸い。 天井部外面はヘラ切り未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。 酸化炎焼成。	A 内・外、橙褐色～灰味黄褐色 B 細砂少含 C 良好



## B-1地区

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
222	蓋杯 (蓋)	灰原 G22	口径 13.3 器高 2.5 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は面取りを施して成形、体部境がくびれる。 天井部は丸く、外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通
223	蓋杯 (蓋)	灰原 G52	口径 13.3 器高 2.1 つまみ径 1.9 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、肥厚し、内傾する。 天井部は低く、外面は未調整。 内外面に灰を被る。	A 内・外、緑灰色～黒 B 細砂少含 C 良好
第35図 224	蓋杯 (蓋)	灰原 G41	口径 13.4 器高 1.3 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	口縁部は変形を加えず、丸味をもって終る。 天井部は低平で全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 焼け歪みが大きい。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固
225	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 13.4 器高 2.8 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、細部は丸い。 天井部は高く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2強
226	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 13.5 器高 1.3 つまみ径 1.7 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出すが、全体に丸く終る。体部境がくびれる。 天井部は低平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、青灰色 B 細砂少含 C 良好
227	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 13.5 器高 3.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は小さく内側に巻き込む感があるが、丸く終る。 天井部は高く丸味をもち、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
228	蓋杯 (蓋)	灰原 G60	口径 13.5 器高 3.1 つまみ径 1.8 つまみ高 0.8	口縁部は変形を加えず、面取りを施して終る。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデ調整する。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、青灰色 外、黒色～暗青灰色 B 細、小砂少含 C 良好
229	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 13.6 器高 2.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は小さく折り曲げて断面三角形に肥厚する。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデ調整する。	A 内・外、暗灰色 B 精良 C 良好、堅固
230	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 13.6 器高 1.8 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、外傾する。 天井部は低く、外面は未調整。 全体に薄手。内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、茶灰色～黄 灰色 B 微砂多含 C 良好 D 1/3
231	蓋杯 (蓋)	灰原 G61	口径 13.7 器高 1.5 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固
232	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 13.4 器高 2.5 つまみ径 2.2 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸く、外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 小砂少含 C 良好 D 4/5
233	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 13.9 器高 1.3	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 厚手で鈍重な感あり。焼け歪みが大。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好
234	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 13.8 器高 3.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8	口縁部は小さく引き出して成形、細部は丸い。 体部境はくびれる。 天井部は高く丸い、全体を横ナデ・ナデ調整する。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
235	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 13.8	口縁部は折り曲げて成形、細部は丸い。 天井部は丸く高く、全体を横ナデ・ナデで調整。	A 内・外、暗灰色 B 精良、細砂少含 C 良好、堅固
236	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 13.9 器高 3.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は大きく変形せず、面取りを施して成形。 天井部は高く丸く、外面は未調整。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好
237	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 13.9 器高 2.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部は高く丸く、外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色～黒 B 小、粗砂少含 C 良好
238	蓋杯 (蓋)	灰原 G45	口径 13.9 器高 1.2 つまみ径 2.9 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 焼け歪み大。	A 内・外、暗灰色～黒 B 精良、粗砂少含 C 良好、堅固 D 3/4

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
239	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.0 器高 3.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は小さく断面方形に成形する。 天井部は高く丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2強
240	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.1 器高 1.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、上方にも肥厚して直立。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪み大。	A 内・外、暗灰色～暗黒灰色 B 細砂多含 小砂少含 C 良好 D 1/3
241	蓋杯 (蓋)	灰原 G55	口径 14.1 器高 3.0	口縁部は下端を引き出して成形、細部は丸い。 天井部は高く丸く、外面は未調整で終る。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
242	蓋杯 (蓋)	灰原 G61	口径 14.1 器高 2.1 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整を行う。 灰を被る。	A 内・外、緑灰色～黒 B 粗砂少含 C 良好 D 3/4
243	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.2 器高 3.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、体部境がくびれる。 天井部は高く丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固
244	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.2 器高 2.3 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は下端を小さくつまみ出し、丸味おびて終る。 天井部は低く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
245	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.2 器高 2.9 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は大きな変形を加えず、面取りを施して成形。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、緑灰色 B 小砂少含 C 良好
246	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.2 器高 3.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は変形させずに丸く終る。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好
247	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 14.2 器高 2.7 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部は変形を加えずに、面取りを施して成形。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒少含 C 良好
248	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.2 器高 2.3 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	口縁部は小さく折り曲げて成形、細部は丸い。 天井部は低く、全体を横ナデ・ナデで終る。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 小砂少含 C 良好 D 1/3
249	蓋杯 (蓋)	灰原 G17	口径 14.2 器高 3.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は下端を小さく引き出して成形、内傾する。 天井部は丸く高く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 口縁部に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 12強
250	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.4 器高 1.8 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は低平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、褐色味灰色 B 細砂少含 C 良好
251	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.3 器高 2.5 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立し、体部境がくびれる。 天井部は丸く、外面は未調整で終る。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、黒色～暗青灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
252	蓋杯 (蓋)	灰原 G22	口径 14.4 器高 2.1 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾し、体部境は緩くくびれる。 天井部は低く、全体に横ナデ・ナデ調整を施す。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4弱
第36図 253	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.4 器高 2.5 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	口縁部は下端を引き出して成形、小さく内傾する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2強
254	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.5 器高 3.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は変形を加えずに面取りを施して成形。 天井部は丸く高く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
255	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.5 器高 1.7 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は小さく折り曲げて成形、細部は丸い。 天井部は低平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色 B 精良 C 良好、堅固

## B-1 地区

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
256	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.6 器高 2.7 つまみ径 1.8 つまみ高 0.4	口縁部は端部を巻込んで成形し、細部は丸い。 天井部は丸く高く、外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、粗砂少含 C 良好
257	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.6 器高 3.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は大きな変形を加えず、丸く終る。 天井部は丸く高く、外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色 B 精良 C 良好
258	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 14.6	口縁部は下方を小さく引き出して成形、内傾する。 天井部は丸く高く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色～黒 B 細砂少含 C 良好
259	蓋杯 (蓋)	灰原 G17	口径 14.6 器高 1.0 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形し、細部は丸い。 天井部外面は未調整。 焼け歪み大。	A 内、緑灰色 外、 緑灰色～暗緑灰色 B 粗砂少含 C 良好
260	蓋杯 (蓋)	灰原 G61	口径 14.6 器高 1.9 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、体部境がくびれる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被り、内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色～黒 外、黒 B 粗砂少含 C 良好
261	蓋杯 (蓋)	灰原 G16	口径 14.6 器高 2.1 つまみ径 2.2 つまみ高 0.9	口縁部は上下端を引き出して拡張、直立する。 天井部は低平で、外面は回転ヘラ削り調整。 内外に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、青灰色～黒 B 細砂少含 C 良好 D 口縁一部欠損
262	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.7 器高 2.8 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は下方に小さく引き出し、外側面は丸味をおびる。 天井部は丸く全体を横ナデ・ナデ調整する。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、青灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 7/8
263	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.6 器高 3.0	口縁部は折り曲げて成形、細部は丸い。 天井部外面は未調整。 焼け歪み大。	A 内、褐色～暗緑灰色 外、暗緑灰色 B 細砂少含 C 普通
264	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.8 器高 3.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は変形を加えずに、丸く終り体部境が小さくくびれる。 天井部外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色 B 細砂含まず C 良好 D 1/4
265	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 14.8 器高 2.4 つまみ径 1.7 つまみ高 0.5	口縁部は端部を小さくつまみ出し、内傾する。 天井部は低く、全体は横ナデ・ナデ仕上げ。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色 外、暗灰色～灰色 B 小砂少含 C 良好 D 3/5
266	蓋杯 (蓋)	灰原 G17	口径 14.8 器高 2.4 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、細部はあまい。 天井部外面は未調整で終る。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗青灰色～ 黒 B 小砂少含 C 良好
267	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 14.8 器高 2.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部は低く、外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
268	蓋杯 (蓋)	灰原 G17	口径 14.8 器高 2.9 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に火ダスキが走る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4 強
269	蓋杯 (蓋)	灰原 G17	口径 14.8	口縁部は折り曲げて成形、細部は丸い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4 弱
270	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 14.8 器高 3.1 つまみ径 3.4 つまみ高 0.8	口縁部は下端を小さく引き出して成形、内傾し、細部は鋭い。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/3
271	蓋杯 (蓋)	灰原 G44～47	口径 14.9 器高 3.1 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、細部は鋭い。 天井部は丸く高く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 精良 C 良好、堅固
272	蓋杯 (蓋)	灰原 G53	口径 14.4 器高 3.4 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	口縁部は大きな変形を加えず、面取りを施す。 天井部は扁平で、外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 小砂少含 C 良好

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
273	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 14.9 器高 2.3 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は大きな変化を加えず、丸く終る。 天井部は低く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、灰色～緑灰色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好
274	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.9 器高 2.7 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形し、小さく内傾する。 天井部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内、灰色 外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好
275	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.9 器高 1.7 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、断面方形となる。 天井部は低平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色 B 微砂多含 C 普通 D 1/2強
276	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.0 器高 3.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は下端を小さく引き出して成形、断面方形に近い。 天井部は高く、外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒灰色 B 砂粒含 C 良好
277	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.0 器高 3.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は断面方形に近く成形。 天井部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、灰色 B 小砂少含 C 良好 D 3/5
278	蓋杯 (蓋)	灰原 G22	口径 15.0 器高 2.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、細部は丸い。 天井部は低く、全体を横ナデ・ナデ調整する。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗緑灰色 外、暗緑灰色～黒灰色 B 粗砂少含 C 良好
279	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.0 器高 2.9 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は端部を丸く肥厚させる。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 小砂少含 C 良好 D 5/6
280	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.1 器高 1.7 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は下端を肥厚させて成形、直立する。 天井部は低平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固
281	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.2 器高 2.5 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は端部を小さく折り曲げて成形、丸味をおびる。 天井部は丸味をもち、外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗青灰色～暗緑灰色～黒 B 細、小、粗砂少含 C 良好
第37図 282	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 15.2 器高 2.2 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、丸味をおびる。 天井部は低く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 普通
283	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 15.2 器高 2.7 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、側面は丸い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
284	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 15.2 器高 2.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は下端を小さく引き出して成形、直立する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げ、造りが薄い。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
285	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.2 器高 2.5 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、細部は丸い。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
286	蓋杯 (蓋)	灰原 G59	口径 15.2 器高 1.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は低平で、外面は回転ヘラ削り調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒 B 小、粗砂少含 C 良好
287	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 15.2 器高 1.7 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、体部境がくびれる。 天井部は低平で、外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～黒 B 小、粗砂少含 C 良好
288	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.3 器高 2.5 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は大きく変化せず、丸味をもって終る。 天井部外面に粗い平行タタキを残す。 焼け歪む。	A 内・外、黄褐褐色 B 細砂少含 C 良好
289	蓋杯 (蓋)	灰原 G58	口径 15.3 器高 1.7 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	口縁部は緩く屈曲し、丸く終る。 体部界が大きくくびれる。 天井部外面はヘラ切り未調整。	A 内・外、白灰色 B 細、小砂少含 C 良好 D 口縁部 1/4 欠損

## B-1 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
290	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 15.3 器高 2.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁は大きな変化を加えず、下端を小さく引き出す。 天井部は平らで、全体を横ナデ・ナデ調整する。	A 内、肌色 外、肌色 ~白灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
291	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.3 器高 2.1 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は体部界をくびれさせて成形、内傾する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄味暗灰色 B 細砂少含 C 良好
292	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.3 器高 1.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	口縁部は面取りを施して成形、内傾する。 天井部は低平で、外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色~灰色 B 細砂多含 C 良好
293	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.4 器高 1.4 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、外傾する。 天井部は低平で、外面は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 精良、細砂少含 C 良好
294	蓋杯 (蓋)	灰原 G35	口径 15.2 器高 3.1 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は下端を小さく引き出して成形、直立する。 天井部は丸く、外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色~暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好
295	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.4 器高 1.7 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、直立し、細部は丸い。 天井部は低平で、外面は未調整。 焼け歪む	A 内・外、黄灰色~黒 B 小砂少含 C 良好
296	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.4 器高 2.3 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は下端を引き出して成形、外側面に沈線(?)を施す。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄味褐色 B 細砂少含 C 普通
297	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.4 器高 2.1 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	口縁部は端部を丸く肥厚させ、体部境を薄くする。 天井部は丸味をおび、外面は未調整。	A 内・外、黄灰色~暗 灰色 B 精良、細砂少含 C 良好
298	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 15.5 器高 2.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、ほぼ直立する。 体部境がくびれる。 天井部は扁平で、外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D ほぼ完存
299	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 15.5 器高 2.8 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は丸味をもって肥厚し、体部境が薄くなる。 天井部は丸味をおび、外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色~暗灰 色 B 砂粒少含 C 普通 D 7/8
300	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.5 器高 2.6 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は断面方形に近く成形し、端部は丸味をもつ。 体部境が薄くなる。 天井部外面は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 普通
301	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 15.6 器高 2.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、直立し、体部境が薄くなる。 天井部は丸味をおび、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
302	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 15.6 器高 1.0 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は下端を小さく引き出し、体部境が薄くなる。 天井部は低平で、外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、緑灰色~暗 灰色 B 小砂少含 C 良好
303	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 15.7 器高 1.1 つまみ径 1.9 つまみ高 0.4	口縁部は断面方形に近く成形し、直立、肉厚となる。 天井部は低平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、褐色味暗灰 色 B 精良、細砂少含 C 良好
304	蓋杯 (蓋)	灰原 G57	口径 15.7 器高 1.2 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は小さく折り曲げて成形、直立し、細部は鋭い。 天井部は低平で、外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、暗灰色~黒 B 小砂少含 C 良好
305	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.8 器高 2.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.4	口縁部は面取りを施して断面方形に近く成形、細部は鋭い。 天井部は丸味をおび、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、黄味暗灰色~ 黒灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
306	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.8 器高 1.4 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は丸味をもって肥厚し、体部境が薄くなる。 天井部は低平で、外面は回転ヘラ削りの後に横ナデを施す。 焼け歪み大。	A 内・外、褐色味暗灰 色 B 細砂少含 C 良好

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
307	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 15.8 器高 1.8 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は下端を引き出して肥厚させ、外傾する。細部は丸い。 天井部は扁平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰味黄色 B 細砂少含 C 普通
308	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 16.0	口縁部は折り曲げて成形し、直立。細部は丸い。 天井部は扁平で、体部が強く反転する。 天井部周縁に粗い平行タタキ痕がある。	A 内・外、緑灰色 B 微砂少含 C 良好 D 1/4
309	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 16.0 器高 1.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して成形、直立する。 天井部は低平で、外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、緑灰色 B 小、粗砂少含 C 良好
310	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 16.1 器高 1.5 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は面取りを施して断面方形とし、体部境がくびれる。 天井部は扁平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、褐色味暗灰色 B 精良 C 良好
311	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 16.2 器高 2.1 つまみ径 2.4 つまみ高 1.1	口縁部は下端を小さく引き出し、全体を丸く成形する。 天井部は低平で、外面はヘラ切り未調整。	A 内・外、灰黄褐色 B 細砂少含 C 良好
312	蓋杯 (蓋)	灰原 G46	口径 16.3 器高 1.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、褐色～緑灰色 B 細砂少含 C 良好
313	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 16.5 器高 2.3 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は下端を小さく引き出して成形、内傾し、細部は丸い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰味褐色 外、黄灰色 B 細砂多含 C 不良 D 1/3
第38図 314	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 16.6 器高 3.0 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は下端を小さく引き出し、丸味おびる。 天井部は高く丸く、外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好
315	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 17.0 器高 2.3 つまみ径 1.9 つまみ高 0.8	口縁部は面取りを施して断面方形に成形する。 天井部は扁平に近く、外面は未調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 小砂少含 C 良好 D 7/8
316	蓋杯 (蓋)	灰原 G57	口径 17.2 器高 2.7 つまみ径 3.0 つまみ高 0.5	口縁部は下端を肥厚させて内傾面をもつ。 天井部は丸味をおび、外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色～灰色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好 D 4/5
317	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 17.2	口縁部は小さく肥厚し、断面方形に近く仕上がる。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデ調整する。	A 内、茶灰色 外、黄灰色 B 粗砂少含 C 良好 D 1/6
318	蓋杯 (蓋)	灰原 G17	口径 18.0 器高 2.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8	口縁部は下端を引き出して成形、内傾し、造りは鋭い。 天井部外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗緑灰色～黒色 B 小、粗砂少含 C 良好 D 3/4
319	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 18.0 器高 2.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	口縁部は面取りを施して断面方形に近く成形し、器肉は天井から均一。 天井部は扁平で外面は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 3/4
320	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 18.0 器高 1.7 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は下端を小さく引き出し、丸味をもって終る。 天井部は低平で、外面は未調整。 大きく焼け歪む。	A 内・外、暗灰褐色 B 精良 C 良好
321	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 18.2 器高 2.1 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	口縁部は小さく折り曲げて成形、外側面は内傾する。 天井部は扁平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
322	蓋杯 (蓋)	灰原 G58	口径 18.7 器高 1.9 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部は扁平で全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、緑灰色～暗緑灰色 B 細砂多含、小、粗砂少含 C 良好
323	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 18.9 器高 2.0 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	口縁部は下端を引き出して成形、内傾し、端部は丸味をおびる。 天井部は低く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 焼け歪む。	A 内・外、黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固

## B-1 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
324	蓋杯 (蓋)	灰原 G33	口径 19.1 器高 2.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、外側面は内傾する凹面となる。 天井部外面は一部未調整部分を残すが、概ね横ナデで仕上げる。 内面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、黒灰色～黒～灰色 外、暗灰色～黒色 B 小、粗砂少含 C 良好 D 1/2
325	蓋杯 (蓋)	灰原 G34	口径 19.1 器高 2.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、直立し、端部は丸い。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 5/6
326	蓋杯 (蓋)	灰原 G23	口径 19.4 器高 2.6 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は下端を外方に引き出して成形、細部は丸味おびる。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、黄味灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 3/5
327	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 18.8 器高 2.7 つまみ径 2.7 つまみ高 0.9	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、黄白灰色 外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 2/5
328	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 19.8 器高 3.4 つまみ径 2.7 つまみ高 0.9	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は高く扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色～明茶灰色 外、灰色～明茶灰色 B 小、粗砂少含 C 良好
329	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 19.8 器高 1.9 つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、直立して高く立つ。 天井部は低平で、外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細、小砂多含 C 良好 D 2/3
330	蓋杯 (蓋)	灰原 G30	口径 20.0 器高 2.1 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	口縁部は肥厚し、外側面は直立する。 天井部は低平で、外面は一部回転ヘラ削り調整を行う。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色～黒～暗青灰色 外、灰色～暗青灰色 B 細、小、粗砂少含 C 良好 D 1/2
331	蓋杯 (蓋)	灰原 G58	口径 20.0 器高 3.6 つまみ径 3.2 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、直立して高く立つ。端部は丸い。 天井部は丸味をもち、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～茶灰色 外、茶色 B 小砂少含 C 良好 D 1/3
332	蓋杯 (蓋)	灰原 G34	口径 20.0 器高 2.1 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、体部境がくびれる。 天井部外面には平行タキ痕を残す。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～黒 B 細砂多含 C 良好 D 5/6
333	蓋杯 (蓋)	灰原 G29	口径 20.3 器高 3.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は下端を大きく引き出して成形、内傾する。 天井部は高く扁平で、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、赤灰色～灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 4/5
334	蓋杯 (蓋)	灰原 G41	口径 20.3 器高 2.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、直立し、外側面は凹面となる。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好
335	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 10.0 器高 3.0 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は先端を鋭くつまみ出し、内傾する外側面をもつ。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 内面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 1/3
336	蓋杯 (蓋)	灰原 G46	口径 21.4 器高 2.9 つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部は上端を拡張して肥厚、直立する。 天井部は扁平で外面は回転ヘラ削り調整。 酸化炎焼成。	A 内・外、橙褐色 B 精良、細砂少含 C 普通 D 1/2
337	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 16.2	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は直線的に高くなり、外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色～黒 外、暗青灰色～黒 B 細、小、粗砂少含 C 良好 D 1/3
338	蓋杯 (蓋)	灰原 G61	口径 10.7 器高 2.0	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は丸味をもち、外面は回転ヘラ削り調整。 つまみはない。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
339	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 11.2 器高 1.6	口縁部は緩く折り曲げて成形、直立する。 天井部は丸く、外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被る。つまみはない。	A 内、灰色 外、灰色～黒 B 小、粗砂少含 C 良好
340	蓋杯 (蓋)	灰原 G17	口径 14.0	口縁部は折り曲げて成形、天井部から器肉は一様になる。 器表磨滅。	A 内、白灰色 外、暗灰色 B 微砂多含 C 不良 D 1/4

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第39図 341	蓋杯 (身)	灰原 G16	口径 10.6 器高 3.3 底径 5.4 高台高 0.2	体部は直行、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、高台はやや内側にあつてごく扁平となる。 全体を横ナデ・ナデで調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色～黒色 B 小、粗砂少含 C 良好
342	蓋杯 (身)	灰原	口径 10.8 器高 3.7 底径 6.7 高台高 0.5	体・口縁部は小さく外反しつつ立上る。 底部との屈曲は明瞭で、小振りの高台が直立する。 底部外面に平行タキ痕あり。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
343	蓋杯 (身)	灰原 G53	口径 16.5 器高 3.3 底径 7.6 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低い高台がつく。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色～白灰色 B 細、小砂少含 C 良好 D 1/3
344	蓋杯 (身)	灰原 G52	口径 11.0 器高 3.8 底径 7.6 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に高台がつく。 底部外面は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好
345	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 11.5 器高 3.2 底径 6.8 高台高 0.3	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は低い。 底部外面は未調整。重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
346	蓋杯 (身)	灰原 G22	口径 11.4 器高 3.2 底径 7.0 高台高 0.3	体部は弱く外反し、口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸味をもち、すぐ内側につく高台は低い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/3
347	蓋杯 (身)	灰原 G57	口径 11.5 器高 3.3 底径 8.3 高台高 0.3	体・口縁部は直線的に立上る。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に小振りの高台を付す。 底部外面は未調整。 内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 4/5
348	蓋杯 (身)	灰原 G61	口径 11.5 器高 4.4 底径 7.8 高台高 0.6	体・口縁部は小さく外反しつつ立上る。 底部との屈曲は丸く、大振りの高台が外方へ踏んばって立つ。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、白緑灰色 B 微砂多含 C 良好 D 3/4
349	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 11.6 器高 3.1 底径 7.8 高台高 0.3	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低く高台がつく。 底部外面は未調整。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～黒 B 微砂多含、細砂少含 C 良好 D 4/5
350	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 11.6 器高 4.2 底径 7.9 高台高 0.4	体部は小さく外反し、口縁部は直行、立上りが高い。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に直立する高台を付す。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/5
351	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 12.0 器高 3.5 底径 8.0 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は丸味をおび、高台は扁平。 外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂多含、小粒少含 C 良好
352	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 12.0 器高 3.3 底径 7.0 高台高 0.4	体・口縁部は外反しつつ立上る。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は直行する。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 微砂多含、小粒少含 C 良好 D 7/8
353	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 11.9 器高 3.6 底径 7.0 高台高 0.3	体・口縁部は緩く曲線を描いて立上る。 底部との屈曲は丸く、やや内側に扁平な高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 普通
354	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 12.0 器高 3.6 底径 8.0 高台高 0.3	体部は直行、口縁部は外反する。 底部との屈曲部は丸味をおび、やや内側に低い高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 4/5
355	蓋杯 (身)	灰原 G34	口径 12.2 器高 3.8 底径 7.9 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部に高台を付す。 底部外面は未調整。	A 内・外、明緑灰色 B 微砂少含 C 不良 D 4/5
356	蓋杯 (身)	灰原	口径 12.2 器高 3.8 底径 7.9 高台高 0.4	体部中位で外折し、口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に小振りの高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げるが、底部外面に平行タキ痕が残る。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好
357	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 12.2 器高 3.6 底径 7.0 高台高 0.4	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲はやや丸味をおび、やや内側に低い高台を付す。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 普通 D 2/3



## B-1 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
358	蓋杯 (身)	灰原	口径 12.3 器高 3.4 底径 7.8 高台高 0.4	体・口縁部はほぼ直立する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に高台を付す。 底部外面は未調整。焼け歪む。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～黒色 B 小砂少含 C 良好 D 7/8
359	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 12.4 器高 4.1 底径 9.2 高台高 0.6	体・口縁部は内彎気味に立上り、器肉が厚い。 底部との屈曲部は丸味をもち、すぐ内側に大振りの高台が付く。 底部外面は平行タタキ痕を残し、未調整。 内外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 細、小砂少含 C 良好
360	蓋杯 (身)	灰原 G22	口径 12.4 器高 3.5 底径 9.0 高台高 0.4	体部は直立し、口縁部は薄くなって小さく外反する。 底部との屈曲部は丸味をおび、すぐ内側に高台を付す。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
361	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 12.4 器高 3.0 底径 8.3 高台高 0.2	体部は直立し、口縁部が薄くなって小さく外彎する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に低平な高台を付す。 全面を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
362	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 12.5 器高 3.3 底径 8.4 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に変形する高台を付す。 底部外面はヘラ切り未調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
363	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 12.7 器高 3.9 底径 8.2 高台高 0.5	体・口縁部は直行するが、中位が小さく凹む。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に高台が付く。 底部外面は未調整。 全体に器肉が厚い。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
364	蓋杯 (身)	灰原 G61	口径 12.5 器高 4.4 底径 9.0 高台高 0.6	体・口縁部は内彎しつつ立上る。 底部との屈曲はやや丸味をもち、やや内側の高台は高い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄味茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D 5/6
365	蓋杯 (身)	灰原 G61	口径 12.5 器高 4.4 底径 9.8 高台高 0.5	口縁部が緩く外反する。 底部との屈曲は丸くなり、すぐ内側に大振りの高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、淡茶灰色 B 細砂多含 C 不良
366	蓋杯 (身)	灰原 G34	口径 12.5 器高 4.1 底径 9.0 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に外方へ踏んばる高台が付く。 底部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 小、粗砂少含 C 良好 D 5/6
367	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 12.6 器高 4.1 底径 9.1 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、緑灰色 B 微砂多含、細砂少含 C 良好
368	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 12.6 器高 3.7 底径 8.4 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸味をおび、やや内側に小振りの高台が付く。 底部外面は未調整。外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
369	蓋杯 (身)	灰原	口径 12.6 器高 4.1 底径 8.3 高台高 0.5	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲部は直立する高台を付す。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 精良、細砂少含 C 普通 D 7/10
370	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 12.7 器高 4.0 底径 8.4 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は直立する。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～暗黒灰色 B 細砂少含 C 良好
371	蓋杯 (身)	灰原 G61	口径 12.7 器高 4.4 底径 9.3 高台高 0.6	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は丸味をおび、やや内側の高台は大振り。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 酸化炎焼成。	A 内・外、黄橙色 B 微砂多含、細砂、赤色粒少含 C 良好
372	蓋杯 (身)	灰原 G22	口径 12.7 器高 3.8 底径 8.9 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に貧弱な高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
第40図 373	蓋杯 (身)	灰原 G22	口径 12.7 器高 4.3 底径 8.8 高台高 0.4	体・口縁部は内彎気味に立上る。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に付く高台は低い。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
374	蓋杯 (身)	灰原	口径 12.8 器高 3.2 底径 8.9 高台高 0.5	口縁部が小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に貧弱な高台が付く。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内、緑灰色～黒 外、緑灰色 B 小、粗砂少含 C 良好 D 3/4

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
375	蓋杯 (身)	灰原 G17	口径 12.9 器高 3.3 底径 9.2 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は鋭く、すぐ内側に低い高台が付く。 底部外面は未調整で、平行タタキ痕を残す。	A 内・外、暗緑灰色 B 微砂多含 C 良好 D 1/2
376	蓋杯 (身)	灰原 G61	口径 12.9 器高 4.4 底径 9.1 高台高 0.6	体・口縁部は外彎気味に立上る。 底部との屈曲部は丸味をおび、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
377	蓋杯 (身)	灰原 G61	口径 12.9 器高 4.6 底径 9.8 高台高 0.6	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸くなり、やや内側の高台は大振りて外方へ踏んばる。 器表は磨滅、器肉は厚い。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒、雲母多含 C 普通 D 1/3
378	蓋杯 (身)	灰原 G58	口径 13.0 器高 4.0 底径 9.0 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲はややあまく、すぐ内側の高台も歪む。 底部外面は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒 B 小砂少含 C 良好 D 2/3
379	蓋杯 (身)	灰原 G43	口径 13.0 器高 3.9 底径 8.0 高台高 0.4	体・口縁部は緩く外彎して立上る。 底部との屈曲は鋭く、やや内側に直立する小振りの高台が付く。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
380	蓋杯 (身)	灰原	口径 13.0 器高 3.9 底径 9.0 高台高 0.4	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側の高台は小振りで直立。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、黄灰色～灰色 B 細砂多含 C 普通 D 3/4
381	蓋杯 (身)	灰原 G62	口径 13.0 器高 4.1 底径 9.8 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部に外傾する高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
382	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.1 器高 4.0 底径 8.9 高台高 0.4	口縁部が外反する。 底部との屈曲は鋭く、やや内側の高台は直立する。 底部外面と平行タタキ痕を残す。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗青灰色 外、 暗青灰色～灰色～黒 B 小砂少含 C 良好 D 5/6
383	蓋杯 (身)	灰原	口径 13.1 器高 4.0 底径 8.4 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に小振りの高台が付く。 底部外面に平行タタキ痕あり。	A 内・外、茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D 7/8
384	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.1 器高 3.7 底径 8.0 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に直立する高台が付く。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
385	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.1 器高 3.9 底径 8.3 高台高 0.5	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/3
386	蓋杯 (身)	灰原 G58	口径 13.2 器高 3.5 底径 8.3 高台高 0.4	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は低く直立する。 底部外面は未調整。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、青灰色 外、青灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
387	蓋杯 (身)	灰原	口径 13.2 器高 4.1 底径 8.7 高台高 0.5	体部は直行、口縁端部は小さく内彎する。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は細く直立する。 底部外面は未調整。 焼き歪む。	A 内、暗緑灰色～緑灰色 外、緑灰色 B 粗砂少含 C 良好 D 3/4
388	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.2 器高 3.9 底径 8.9 高台高 0.5	体・口縁部は直行。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に高台が付く。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内・外、白茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
389	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.2 器高 3.6 底径 8.2 高台高 0.4	体・口縁部は直行。 底部との屈曲はやや丸味をもち、やや内側の高台は直立する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
390	蓋杯 (身)	灰原	口径 13.2 器高 4.0 底径 8.5 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲はやや丸味をもち、やや内側の高台は低く直立。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、黄味茶色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
391	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.2 器高 3.3 底径 8.3 高台高 0.3	体部は内彎、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に扁平な高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、黒灰色 外、暗灰色～黒 B 微砂多含、小砂少含 C 良好 D 3/4

## B-1 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
392	蓋杯 (身)	灰原 G34	口径 13.2 器高 4.0 底径 8.2 高台高 0.4	体・口縁部は外彎気味に立上る。 底部との屈曲はやや丸味をおび、やや内側の高台は直立する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 小砂少含 C 良好 D 3/4
第41図 393	蓋杯 (身)	灰原 G61	口径 13.3 器高 4.3 底径 9.8 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側の高台は肉厚で外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細、小砂多含 C 良好
394	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 13.3 器高 3.7 底径 9.1 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低い高台が直立する。 底部外面に不定方向の平行タタキ痕を残す。	A 内・外、暗灰褐色 B 精良 C 普通 D 3/4
395	蓋杯 (身)	灰原 G61	口径 13.4 器高 4.5 底径 9.5 高台高 0.6	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸味をおび、やや内側の高台は高く外方へ踏んばる。 全体に磨減著しい。	A 内・外、黄灰色 B 微砂多含 C 不良
396	蓋杯 (身)	灰原 G58	口径 13.4 器高 3.5 底径 8.3 高台高 0.6	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲はやや丸味をおび、やや内側の高台は高い。 底部外面は未調整、平行タタキ痕を残す。	A 内、暗灰色 外、暗緑灰色～黒色 B 小、粗砂少含 C 良好
397	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.4 器高 4.0 底径 8.7 高台高 0.4	体・口縁部は直行するが、外面は横ナデによる凹凸が著しい。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低い高台が付く。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/6
398	蓋杯 (身)	灰原 G57	口径 13.5 器高 3.4 底径 9.2 高台高 0.4	口縁部は外反する。 底部との屈曲部に高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好
399	蓋杯 (身)	灰原 G40	口径 13.5 器高 3.6 底径 9.0 高台高 0.4	口縁部がやや大きく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に外方へ踏んばる高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～黒灰色 B 細、小、粗砂少含 C 良好 D 4/5
400	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.5 器高 3.9 底径 8.5 高台高 0.3	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、断面方形の高台は直立する。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒、雲母少含 C 良好 D ほぼ完存
401	蓋杯 (身)	灰原 G16	口径 13.5 器高 3.4 底径 8.8 高台高 0.4	体・口縁部は内彎気味に立上る。 底部との屈曲部は明瞭で、高台はやや外方へ踏んばる。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、黄味暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 3/8
402	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 13.5 器高 3.6 底径 7.8 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は明瞭で、小振りの高台は直立する。 全体を横ナデ・ナデで調整	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好、堅固
403	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 13.5 器高 3.5 底径 8.4 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は明瞭で、高台は低い。 全体を横ナデ・ナデで調整。	A 内・外、黄味灰色～暗灰色 B 砂粒ほとんど含まず C 普通 D 2/3
404	蓋杯 (身)	灰原 G22	口径 13.6 器高 3.9 底径 8.9 高台高 0.4	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲部は丸味をおび、すぐ内側の高台は直立する。 全面を横ナデ・ナデで調整。 内外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黄褐色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
405	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.6 器高 3.9 底径 9.0 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は明瞭で、すぐ内側に低く直立する高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 3/4
406	蓋杯 (身)	灰原 G34	口径 13.6 器高 3.7 底径 9.8 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲部は明瞭で、すぐ内側に低い高台が直立して付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄味褐色 B 砂粒、雲母含 C 普通
407	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.7 器高 3.7 底径 9.6 高台高 0.4	体部は直行、口縁部は2段に折れる。 底部との屈曲部は丸味をおび、低い高台が外方に踏んばる。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、暗緑灰色 B 細、小砂少含 C 良好 D 1/3
408	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 13.7 器高 4.0 底径 8.9 高台高 0.5	体・口縁部は直行するが、口縁部下を凹めて変化を付ける。 底部との屈曲部は鋭く、高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 内外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
409	蓋杯 (身)	灰原 G30	口径 13.7 器高 3.8 底径 9.0 高台高 0.6	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台はほぼ直立する。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、青灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好
410	蓋杯 (身)	灰原 G57	口径 13.7 器高 3.8 底径 9.2 高台高 0.4	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は低い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、暗灰色 外、白灰色～暗灰色 B 微砂多含、細砂少含 C 良好
411	蓋杯 (身)	灰原 G57	口径 13.7 器高 3.6 底径 8.8 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、小振りの高台が付く。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
412	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.7 器高 3.7 底径 9.0 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に低い高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好
413	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.7 器高 4.0 底径 9.3 高台高 0.4	口縁部は薄くなって外反する。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側に小振りの高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒少含 C 普通
414	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.7 器高 4.1 底径 8.7 高台高 0.5	体・口縁部はほぼ直行し、口縁部は肥厚する。 底部との屈曲は比較的明瞭で、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、褐色味暗灰色 B 細砂少含 C 普通
第42図 415	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.9 器高 3.8 底径 9.2 高台高 0.5	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に高台が付く。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固 D 1/3
416	蓋杯 (身)	灰原	口径 13.8 器高 4.2 底径 8.4 高台高 0.7	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は高い。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、灰色～緑灰色 B 粗砂少含 C 不良 D 3/4
417	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.8 器高 3.8 底径 9.2 高台高 0.3	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低く高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒少含 C 普通
418	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.8 器高 3.5 底径 9.5 高台高 0.4	体・口縁部は内彎気味に立上る。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側の高台は外方へ踏んばる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 粗砂少含 C 良好
419	蓋杯 (身)	灰原 G34	口径 13.8 器高 4.2 底径 9.6 高台高 0.3	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側の高台は低い。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 小砂少含 C 良好 D 3/4
420	蓋杯 (身)	灰原 G58	口径 13.7 器高 3.9 底径 9.8 高台高 0.4	体・口縁部は内彎気味に立上る。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低い高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
421	蓋杯 (身)	灰原 G40	口径 10.4 器高 3.3 底径 8.3 高台高 0.3	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は小さく直立する。 底部外面は未調整。	A 内・外、暗黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
422	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.9 器高 4.1 底径 14.5 高台高 0.4	体部中位で緩く外反する。 底部との屈曲は鋭く、やや内側の高台は低く外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/3
423	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.9 器高 4.6 底径 9.3 高台高 0.5	口縁部は緩く外反する。 底部との屈曲は明瞭で、高台はやや内側に付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、青灰色～黒 灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
424	蓋杯 (身)	灰原 G61	口径 13.9 器高 4.4 底径 10.2 高台高 0.5	体部は外反し、口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸くなり、やや内側の高台はほぼ直立する。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/3
425	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.9 器高 3.7 底径 8.8 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は低い。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/3

## B-1 地区

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
426	蓋杯 (身)	灰原 G41	口径 13.9 器高 4.1 底径 9.5 高台高 0.4	口縁部が小さく外反する。 底部との屈曲は比較的明瞭で、すぐ内側に小振りの高台が付く。 底部外面に不定方向の細い平行タタキ痕が残る。	A 内・外、黄味暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 3/4
427	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.9 器高 3.8 底径 9.0 高台高 0.3	体・口縁部はほぼ直立する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は貧弱。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、灰色 外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 3/4
428	蓋杯 (身)	灰原 G22	口径 13.9 器高 3.4 底径 8.9 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は低い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
429	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 13.9 器高 3.9 底径 9.1 高台高 0.3	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側の高台は低い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
430	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 13.9 器高 3.2 底径 8.2 高台高 0.3	体部は中位で内折し、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、内側に離れて低い高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。重ね焼きの痕跡あり。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒灰色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D 2/3
431	蓋杯 (身)	灰原 G52	口径 14.0 器高 3.3 底径 8.9 高台高 0.4	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は小振りである。 底部外面は未調整。 口縁部外面に灰を被る。	A 内、暗緑灰色 外、暗緑灰色 B 微砂多含 C 良好 D 2/3
432	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 14.0 器高 3.9 底径 9.8 高台高 0.5	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸味をおび、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 小、粗砂少含 C 良好 D 3/4
433	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 14.0 器高 3.8 底径 9.8 高台高 0.5	口縁部は外反する。 底部との屈曲は比較的明瞭で、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面に平行タタキ痕が残る。 焼け歪む。	A 内、緑灰色 外、灰色～黒 B 細砂少含 C 良好 D 4/5
434	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 14.1 器高 4.0 底径 8.7 高台高 0.4	体・口縁部は緩く外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側で低い高台が直立する。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 3/4
435	蓋杯 (身)	灰原 G40	口径 14.2 器高 5.0 底径 9.8 高台高 0.5	口縁部は外反する。 底部との屈曲は丸く、やや内側の高台は小さく外反する。 底部外面は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細、小砂多含 C 良好
436	蓋杯 (身)	灰原 G52	口径 14.2 器高 3.7 底径 10.0 高台高 0.4	口縁部は緩く外反する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に貧弱な高台が付く。 器表磨滅。	A 内・外、黄灰色 B 小、粗砂少含 C 不良
第43図 437	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 14.3 器高 3.2 底径 8.5 高台高 0.3	口縁部は外反する。 底部との屈曲は丸味をもち、やや内側の高台は歪む。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色～暗 灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 2/3
438	蓋杯 (身)	灰原 G34	口径 14.3 器高 3.9 底径 9.5 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は比較的明瞭で、すぐ内側に直立する高台が付く。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、緑灰色 B 微砂多含 C 良好 D 3/4
439	蓋杯 (身)	灰原 G29	口径 14.4 器高 3.9 底径 9.5 高台高 0.3	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低い高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内、黄灰色 外、 黄灰色～暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
440	蓋杯 (身)	灰原 G58	口径 14.8 器高 4.6 底径 10.6 高台高 0.5	体・口縁部はほぼ直行し、肉厚となる。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側に外方へ踏んばる高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
441	蓋杯 (身)	灰原 G23	口径 15.0 器高 3.7 底径 10.0 高台高 0.5	体・口縁部は緩く外反してのびる。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に高い高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内、緑灰色 外、暗緑灰色 B 小砂少含 C 良好 D 3/4
442	蓋杯 (身)	灰原 G52	口径 15.1 器高 3.7 底径 10.3 高台高 0.6	体部は腰折れとなり、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、高台は外方へ高く踏んばる。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
443	蓋杯(身)	灰原 G29	口径 15.1 器高 4.1 底径 8.8 高台高 0.4	体・口縁部は内彎して立上る。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低い高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄味暗灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 3/4
444	蓋杯(身)	灰原 G40	口径 15.3 器高 3.8 底径 10.7 高台高 0.5	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲部に小さく外傾する高台が付く。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 5/6
445	蓋杯(身)	灰原 G23	口径 15.6 器高 4.2 底径 9.9 高台高 0.4	体・口縁部は直行して薄く終る。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低い高台が付く。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
446	蓋杯(身)	灰原 G58	口径 15.9 器高 4.2 底径 10.6 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低い高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
447	蓋杯(身)	灰原 G29	口径 16.0 器高 4.3 底径 10.0 高台高 0.3	体・口縁部は外彎しつつ立上る。 底部との屈曲は明瞭で、内側に離れて低い高台が付く。 底部外面は未調整。 内外面に灰を被る。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
448	蓋杯(身)	灰原	口径 16.2 器高 3.9 底径 12.2 高台高 0.5	口縁部は外彎して薄く終る。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に直立する高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、茶灰色 外、茶灰色～褐色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
449	蓋杯(身)	灰原 G23	口径 16.4 器高 4.9 底径 11.2 高台高 0.5	体・口縁部は内彎しつつ立上る。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低い高台が付く。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～茶灰色 B 小砂少含 C 普通 D 4/5
450	蓋杯(身)	灰原 G52	口径 16.6 器高 5.4 底径 10.6 高台高 0.5	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に小振りな高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、白橙色 外、白緑色 B 細砂、赤色粒子多含 C 良好 D 2/3
451	蓋杯(身)	灰原	口径 16.6 器高 4.6 底径 11.6 高台高 0.5	体・口縁部はほぼ直立する。 底部との屈曲は丸味をおび、やや内側に高台が付く。 底部外面に細い平行タキ痕を残す。	A 内、灰色 外、灰色～黒 C 良好 D 1/3
452	蓋杯(身)	灰原 G29	口径 17.0 器高 5.7 底径 10.5 高台高 0.4	体・口縁部は外彎して立上る。 底部との屈曲は丸味をおび、内側に離れて小さな高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄味茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D 2/3
453	蓋杯(身)	灰原	口径 17.0 器高 4.8 底径 11.5 高台高 0.4	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側の高台は小振り。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、黄味灰色 外、 黄味灰色～黒灰色 B 細砂多含 C 普通 D 3/4
454	蓋杯(身)	灰原	口径 17.1 器高 5.4 底径 9.6 高台高 0.4	口縁部は小さく外反し、肉厚で終る。 底部との屈曲は丸味をおび、やや内側に高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄味灰色 B 細、小砂少含 C 不良 D 体部 1/5 欠損
455	蓋杯(身)	灰原	口径 17.2 器高 5.1 底径 11.1 高台高 0.5	口縁部は外反する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側の高台は小振り。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
第44図 456	蓋杯(身)	灰原 G17	口径 16.8 器高 5.0 底径 10.7 高台高 0.3	体部は直行し、口縁部は小さく内彎する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に低い高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 5/8
457	蓋杯(身)	灰原 G23	口径 17.3 器高 5.5 底径 10.8 高台高 0.7	口縁部は外折する。 底部との屈曲は丸味をおび、内側に離れて大振りの高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰味黄褐色 B 細砂少含 C 不良
458	蓋杯(身)	灰原 G33	口径 18.0 器高 5.6 底径 11.4 高台高 0.5	体部は直行し、口縁部は小さく内折する。 底部との屈曲は丸味をおび、やや内側に直立する高台が付く。 底部外面は回転ヘラ削り調整。 焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒 B 細砂多含、小砂少含 C 良好 D 3/4
459	蓋杯(身)	灰原 G23	口径 18.4 器高 5.8 底径 12.0 高台高 0.7	口縁部は外折する。 底部との屈曲は丸く、やや内側に高い高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細、小砂少含 C 不良 D 2/5

## B-1地区

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
460	蓋杯(身)	灰原 G23	口径 18.5 器高 6.5 底径 12.1 高台高 0.7	体部は直行し、口縁部は小さく外反して薄く終る。 底部との屈曲は丸く、すぐ内側に高い高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 不良 D 3/4
461	蓋杯(身)	灰原	口径 19.0 器高 6.5 底径 12.6 高台高 0.6	口縁部は小さく外彎する。 底部との屈曲は丸く、やや内側に直立する高台が付く。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内・外、白灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 不良
462	蓋杯(身)	灰原 G23	口径 19.2 器高 5.5 底径 13.2 高台高 0.6	口縁部は小さく外彎する。 底部との屈曲は丸くなり、やや内側に外傾する高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内、黄土色 外、黄土色～黒色 B 砂粒、金雲母多含 C 普通 D
463	蓋杯(身)	灰原 G34	口径 12.0 器高 3.7 底径 8.0	口縁部は緩く外彎して立上る。 底部外面に平行タタキ痕を残す。 口縁部に灰を被る。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
464	蓋杯(身)	灰原 G34	口径 12.1 器高 3.8 底径 7.9	口縁部は大きく外彎する。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、暗灰色 B 小砂多含 C 普通 D 1/6 口縁部 1/4 欠損
465	蓋杯(身)	灰原 G29	口径 13.0 器高 3.8 底径 9.5	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は明瞭。 底部外面は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 微砂多含 C 良好
466	蓋杯(身)	灰原 G23	口径 13.0 器高 3.5 底径 9.8	口縁部は緩く外彎する。 底部外面は未調整。	A 内・外、緑灰色～黄灰色 B 砂粒少含 C 良好
467	蓋杯(身)	灰原 G29	口径 13.1 器高 3.6 底径 10.0	体・口縁部はほぼ直行する。 底部外面は未調整。	A 内・外、暗茶灰色 B 微砂多含 C 良好
468	蓋杯(身)	灰原 G35	口径 13.2 器高 2.9 底径 9.8	口縁部は小さく外彎する。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
469	蓋杯(身)	灰原 G23	口径 13.6 器高 3.8 底径 10.1	体・口縁部は直行する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げ、肉厚となる。	A 内・外、黄灰色 B 小砂少含 C 不良 D 3/4
470	蓋杯(身)	灰原 G34	口径 13.75 器高 4.2 底径 10.5	体・口縁部はほぼ直行する。 器表磨減。	A 内・外、灰味薄黄褐色 B 細砂、褐色粒多含 C 不良
471	蓋杯(身)	灰原	口径 15.0 器高 3.9 底径 9.4	体部は直行して肥厚し、口縁部は薄くなって小さく外反する。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
472	蓋杯(身)	灰原 G45	口径 15.8 器高 3.8 底径 13.2	口縁部は強く外反し、薄く終る。 底部外面は未調整。 内面に火タスキが走る。	A 内、灰色 外、白灰色 B 小砂少含 C 良好
473	皿	灰原 G29	口径 13.0 器高 2.0 底径 10.5	底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 4/5
474	皿	灰原 G34	口径 13.0 器高 2.1 底径 11.0	底部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、紫灰色～黒 B 小砂少含 C 良好
475	皿	灰原 G29	口径 13.1 器高 1.8 底径 11.1	口縁部は強く外反して薄く終る。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 小砂少含 C 良好 D 1/3
476	皿	灰原 G29	口径 13.1 器高 2.1 底径 11.3	底部外面は未調整。	A 内・外、灰褐色 B 粗砂少含 C 普通

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第45図 477	皿	灰原	口径 13.3 器高 1.9 底径 10.8	口縁部は外反する。 底部外面は未調整。 器肉が薄い。	A 内・外、灰色 B 精良 C 良好 D 2/3
478	皿	灰原	口径 13.4 器高 1.8 底径 11.3	口縁部は外反する。 底部外面は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細小砂少含 C 良好 D 1/2
479	皿	灰原 G41	口径 13.5 器高 2.0	口縁部は浅く大きく開く。 底部は丸味をもち、外面は未調整。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 3/4
480	皿	灰原 G29	口径 13.8 器高 1.5 底径 11.9	底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 精良 C 良好
481	皿	灰原 G23	口径 13.8 器高 1.8 底径 10.9	口縁部は浅く開く。 底部外面は未調整。 外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 粗砂少含 C 良好
482	皿	灰原 G22	口径 14.0 器高 2.2 底径 11.0	底部外面は未調整。	A 内・外、青灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/5
483	皿	灰原 G17	口径 14.0 器高 1.8 底径 11.8	全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、褐色～灰色 B 微砂多含 C 普通 D 1/2弱
484	皿	灰原	口径 14.0 器高 1.9 底径 11.8	体・口縁部は強く外彎する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色～黒 灰色 B 微砂多含 C 良好 D 1/2
485	皿	灰原 G23	口径 14.2 器高 1.4 底径 11.6	体・口縁部は浅く大きく開く。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 精良 C 良好 D 体部1/4欠損
486	皿	灰原 G23	口径 14.2 器高 1.5 底径 11.5	体・口縁部は小さく外彎する。 底部は平らで、外面は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 2/3
487	皿	灰原 G41	口径 14.5 器高 1.9 底径 12.5	体・口縁部は外彎して立上る。 底部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2強
488	皿	灰原 G28	口径 14.5 器高 2.2 底径 11.8	口縁部が小さく外折する。 底部外面はヘラ削り調整で、火ダスキが走る。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/3
489	皿	灰原 G58	口径 14.6 器高 2.1 底径 12.3	体・口縁部は浅く大きく開く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 器肉が薄い。	A 内・外、紫灰色～灰色 B 微砂多含 細砂少含 C 良好 D 5/6
490	皿	灰原 G15	口径 15.0 器高 1.9 底径 12.8	体・口縁部は外彎する。 底部外面は未調整。	A 内、白灰色～明橙色 外、白灰色～茶褐色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
491	皿	灰原 G22	口径 15.0 器高 2.0 底径 13.5	底部外面に不定方向の平行タタキ痕が残る。	A 内・外、灰味褐色 B 細砂少含 C 良好 D 1/8
492	皿	灰原 G58	口径 15.1 器高 2.1 底径 12.7	体・口縁部は大きく外彎する。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄味灰色 B 細砂多含 C 良好
493	皿	灰原	口径 16.0 器高 2.2 底径 13.5	口縁部は肉厚となる。 底部外面に不定方向の平行タタキ痕が残る。	A 内・外、黄味灰色～ 黒灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 1/2



## B-1 地区

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
494	皿	灰原 G23	口径 17.2 器高 2.6 底径 14.1	底部外面は未調整で、粘土紐巻上げ痕が残る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 精良 C 良好
495	皿	灰原 G52	口径 17.6 器高 2.3 底径 15.2	底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 口縁部 1/4 欠損
496	皿	灰原 G23	口径 17.6 器高 2.6 底径 14.8	口縁部は弱く外反して薄く終る。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好
497	皿	灰原 G23	口径 17.8 器高 2.9 底径 15.5	底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒含 C 良好
498	皿	灰原	口径 17.9 器高 2.2 底径 15.3	全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄味灰色 B 精良 C 普通 D 1/2
499	皿	灰原 G23	口径 18.0 器高 3.3 底径 14.2	底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒、雲母含 C 良好
500	皿	灰原 G22	口径 18.0 器高 2.1 底径 16.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は鋭く、底部外面は未調整。	A 内・外、青灰色 B 砂粒含 C 良好
501	皿	灰原 G34	口径 18.0 器高 2.9 底径 15.3	底部は丸底となり、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、緑灰色 B 小砂少含 C 良好 D 5/6
502	皿	灰原 G35	口径 18.2 器高 2.4 底径 14.5	口縁部は強く外反する。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
503	皿	灰原 G23	口径 18.8 器高 1.9 底径 15.4	口縁部は強く外反する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 普通 D 1/2
504	皿	灰原 G17	口径 19.0 器高 2.3 底径 17.4	底部外面は未調整。	A 内・外、明緑灰色 B 粗砂少含 C 普通 D 3/5
505	皿	灰原 G22	口径 19.0 器高 1.9 底径 16.1	全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄味暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
506	皿	灰原	口径 19.0 器高 1.9 底径 15.8	体・口縁部の開きが大きく浅い。 底部外面は未調整のようである。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
507	皿	灰原 G16	口径 19.2 器高 1.9 底径 15.3	体・口縁部の開きが大きく浅い。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 精良 C 良好 D 1/2
508	皿	灰原	口径 19.2 器高 1.8 底径 16.0	体・口縁部の開きが大きく浅い。 底部外面は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2 弱
第46図 509	皿	灰原 G58	口径 19.4 器高 3.3 底径 17.5	底部は丸味をおびる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げ、底部外面にヘラ記号を刻む。	A 内・外、白灰色 B 精良、細砂含 C 良好 D 3/5
510	皿	灰原 G45	口径 19.5 器高 2.9 底径 17.4	底部は丸味をおびる。 底部外面は回転ヘラ削り調整のようである。	A 内・外、白黄色 B 細、小砂多含 C 不良

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
511	皿	灰原 G29	口径 20.0 器高 2.7 底径 17.6	口縁部はやや強く外反する。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 精良 C 普通 D 1/2
512	皿	灰原 G22	口径 21.0 器高 2.0 底径 16.8	体・口縁部は浅く大きく開く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/6
513	皿	灰原 G59	口径 21.4 器高 3.3 底径 19.7	底部は丸く、外面全体を回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、暗灰色～緑 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
514	盤	灰原 G52	口径 20.3 器高 2.8 底径 16.0	腰折れとなり、口縁部は外彎する。 高台はほぼ直立する。 底部外面は未調整。	A 内、灰色 B 外、灰色～黒 C 小砂少含 D 良好 1/4
515	盤	灰原 G22	口径 24.0 器高 4.5 底径 20.2 高台高 0.7	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸く、すぐ内側に直立する高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、肌色 B 細砂少含 C 普通 D 1/8
516	盤	灰原 G23	口径 24.0 器高 4.8 底径 19.2 高台高 0.7	体・口縁部は直行し、高く立上る。 底部との屈曲は丸味をおび、やや内側に大振りの高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、緑灰色 B 外、緑灰色～黒 C 小砂少含 D 良好 1/4
517	盤	灰原	口径 25.0 器高 4.0 底径 21.5 高台高 0.7	体・口縁部は深く立上り、直行する。 底部との屈曲は丸味をもち、やや内側の高台は小振りである。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄灰色～灰色 B 微砂少含 C 不良 D 1/3
518	盤	灰原 G45	口径 24.1 器高 3.7 底径 19.5 高台高 0.7	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側に直立する高台が付く。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 小砂少含 C 良好
519	盤	灰原 G34	口径 28.7 器高 4.3 底径 23.6 高台高 0.7	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸味をもち、すぐ内側に直立する高台が付く。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 小砂少含 C 普通 D 1/5
520	高杯	灰原 G44~47	口径 21.0	口縁部はやや内傾し、端面は丸味をおびる。 杯部下半外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、青灰色 B 砂粒、礫少含 C 良好
521	高杯	灰原 G34	口径 22.0	口縁部はやや外傾し、端部は丸味をおびる。 屈曲部以下の外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被る。	A 内、黒～暗灰色 B 外、灰色～黒 C 粗砂少含 D 良好 1/5
522	高杯	灰原	口径 15.8	口縁部は外傾し、端部は肥厚して水平な面をつくる。 杯部下半外面を回転ヘラ削り調整する。 内外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/8
523	高杯	灰原 G22	口径 27.0	口縁部は外傾し、端部は肥厚して端面は丸味をおびる。 杯部下半外面は回転ヘラ削り調整。	D 1/6
524	高杯	灰原 G58	底径 12.5	脚端部を折り曲げて直立させる。	A 内、黒～灰色 B 外、黒灰色 C 細砂少含 D 良好
525	高杯	灰原 G35	底径 12.1	脚端部を折り曲げて外傾させる。	A 内、青灰色 B 外、青灰色～黒灰色 C 砂粒少含 D 良好
第47図 526	高杯	灰原 G23	口径 25.4 器高 12.6 底径 11.9	口縁部はやや外傾し、端面も外傾する平坦面となる。 脚端部は下端を引き出して直立させる。 杯部外面の中位を回転ヘラ削り調整。 内外面に灰を被る。	A 内・外、緑灰色～黒 B 細砂少含 C 良好 D 5/6
527	高杯	灰原 G59	口径 29.0 器高 9.8 底径 12.7	口縁部は直立し、端部は丸味をおびる。 脚端部は折り曲げて直立させる。 杯部外面の中位を回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、淡緑灰色 B 小砂・角閃石少含 C 普通 D 1/2

B-4 地区

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
528	蓋	灰原 G58	口径 14.6 器高 3.3 つまみ径 2.9 つまみ高 1.1	体部は外傾し、口縁端部を外方へつまみ出す。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整する。 内外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
529	蓋	灰原 G57	口径 15.0 器高 4.2	体部は直立、口縁部は内側に面をもつ。 天井部外面は回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、緑灰色 B 小・細砂少含 C 良好 D 1/7
530	短頸壺	灰原 G40	口径 10.2 器高 15.0 底径 9.0 高台高 0.7	頸部は曲線を描いて反転、口縁部はやや外傾する平坦面をもつ。 体部は張りが弱く、最大径部分以下を回転ヘラ削り調整する。 底部外面は横ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
531	短頸壺	灰原	口径 12.0 器高 14.6 底径 11.0	口縁部は直立し、水平な面をもつ。 体部最大径部分は上位にあり、下端付近を回転ヘラ削り調整する。 高台は大きく、外方へ踏んばる。	A 内、暗紫灰色 外、暗紫灰色～暗緑灰色 B 細・小・粗砂少含 C 良好 D 1/2
532	短頸壺	灰原 G26	底径 12.1 高台高 1.0 胴径 21.7	体部の張りが弱く、下半を回転ヘラ削り調整する。 高台は細身で、外方へ踏んばる。	A 内、白褐色 外、緑灰色～褐色 B 小砂少含 C 不良 D 1/4
533	短頸壺	灰原 G62	口径 11.8 胴径 21.4	口縁部は小さく外傾し、端部を丸くおさめる。 体部は張りが弱い。 器表外面は磨滅。	A 内、白褐色 外、白褐色～白灰色 B 小砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D 1/4
第48図 534	短頸壺	灰原 G57	口径 12.2 胴径 21.2	口縁部は器肉が薄くなり、ほぼ水平な面をもつ。 体部は張りがなく、中位以下の外面を回転ヘラ削り調整する。 体部外面上半は灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～黒 B 粗砂少含 C 良好 D 1/4
535	短頸壺	灰原 G41	口径 13.4	口縁部はほぼ直立し、端面は小さく内傾する。 体部の開きが大きい。	A 内、黄土色 外、黄灰色～茶褐色 B 小砂少含 C 良好 D 2/5
536	短頸壺	灰原 G29	底径 12.0 胴径 23.6	体部は丸味をおび、中位以下を回転ヘラ削り調整する。 高台は外方へ踏んばる。底部外面は横ナデで仕上げる。 535と同一個体か。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～黒 B 細・小・粗砂少含 C 良好 D 1/2
537	短頸壺	灰原 G60	底径 15.0 胴径 27.4	体部中位以下を回転ヘラ削り調整する。 高台は外方へ踏んばる。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄土色 外、黄灰色～茶褐色 B 細・小砂少含 C 良好 D 1/2
538	短頸壺	灰原	底径 10.0	残存する体部・底部外面は回転ヘラ削り調整する。 高台は小振りで直立する。	A 内、灰色 外、灰色～黒 B 小砂少含 C 良好 D 1/4
539	短頸壺	灰原 G40		残存する体部下半は回転ヘラ削り調整で、一条の沈線を刻む。	A 内・外、灰色 B 小砂少含 C 良好 D 1/4
第49図 540	長頸壺	灰原 G62	口径 13.0	口縁部は折り曲げて水平にし、端部は丸く終る。 内外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/4
541	長頸壺	灰原 G61	底径 9.8 高台高 0.7	体部屈曲部以下・底部の外面は回転ヘラ削り調整。 高台は肉厚で外方へ踏んばる。外面は灰被り。	A 内、灰色～紫灰色 外、灰色～暗灰色 B 細・小砂少含 C 良好 D 1/4
542	長頸壺	灰原 G58	胴径 19.4 底径 10.0 高台高 0.7	体部下半は回転ヘラ削り調整。 底部は丸味をもち、外面はナデで仕上げる。 高台は外方へ踏んばる。	A 内、えび茶色 外、えび茶～黒灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 1/2
543	長頸壺	灰原 G43	底径 9.8 高台高 0.8	体部下半は回転ヘラ削り調整。 底部は丸味をもち、外面は横ナデで仕上げる。 高台は外方へ踏んばる。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒・礫少含 C 良好 D 1/3
544	長頸壺	灰原 G58	胴径 19.7 底径 10.2 高台高 0.6	体部下半は回転ヘラ削り調整。 高台は直立し、形が歪む。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/3

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
545	長頸壺	灰原 G61	胴径 21.0	体部下半は回転ヘラ削り調整。	A 内、青灰色 外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好
546	長頸壺	灰原		残存部外面は回転ヘラ削り調整。	
547	長頸壺	灰原 G61	底径 10.3 高台高 0.8	体部下半は回転ヘラ削り調整。 底部は丸味をおび、外面は回転ヘラ削り・ナデを併用する。 高台は外方へ踏んばり、形は歪つ。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
548	鉄鉢	灰原 G52		口縁部は内彎し、端面は内傾する。 体部外面は中位を回転ヘラ削り、下位を静止ヘラ削りで仕上げる。 口縁部内面のあたりはヘラミガキを行うよう。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
549	鉄鉢	灰原 G52	口径 22.8	口縁部は内彎し、端部は丸く終る。 体部外面は中位を回転ヘラ削り、下位を静止ヘラ削りで仕上げる。 内面はヘラガキで仕上げるか。	A 内・外、灰色～暗灰色 ～茶灰色 B 粗砂少含 C 良好 D 1/3
第50図 550	鉄鉢	灰原 G41	口径 21.1 胴径 23.5	口縁部は内彎し、端部を小さく肥厚させて断面方形に近く仕上げる。 体部は中位以下の外面を回転ヘラ削り、内面をナデで仕上げる。	A 内・外、明緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
551	甌	灰原 G57		体部下半外面を回転ヘラ削り調整する。	A 内、黄灰色 外、白灰色 ～黄灰色 B 細・小砂少含 C 良好 D 1/4
552	甌	灰原 G58	口径 45.2	口縁部は内彎し、端面は小さく内傾する。 残存部は横ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色 B 微砂少含 C 良好 D 1/5
553	甌	灰原 G23	口径 26.0	体・口縁部は外彎気味に立上り、ほぼ水平な端面をもつ。 体部下半外面は回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 普通
554	甌	灰原 G44-47		体・口縁部は直行し、端部は丸味をもって終る。 把手は扁平。	A 内・外、白灰色 B 粗砂少含 C 不良
555	鉢	灰原	口径 26.0	口縁部は2段に外折する。 体部は外面に格子タタキ痕、内面に同心円文当具痕を残す。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/4
556	鉢	灰原 G57		体部下半外面を回転ヘラ削り、他の残存部を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、肌色 外、黄味灰色 B 砂粒・赤褐色粒少含 C 不良 D 1/6
557	把手	灰原		通常の角状把手。	A 内・外、白灰色 B 小砂含まず C 良好
558	把手	灰原		断面扁平で、強く反り上る。 体部内外面は横ナデ調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好
第51図 559	蓋杯 (蓋)	灰原 上層	口径 14.0 器高 3.9 つまみ径 2.1 つまみ高 0.9	口縁部は小さく折り曲げて成形、端部は丸い。 天井部は丸味をもって高く、外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗緑灰色～黒 B 粗砂少含 C 良好
560	蓋杯 (蓋)	灰原 上層	口径 14.2 器高 2.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は下端を小さく引き出して、断面方形に成形する。 天井部は丸味をもち、外面は未調整。 重ね焼きの痕跡があり、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒 灰色 B 粗砂少含 C 良好
561	蓋杯 (蓋)	灰原 上層	口径 14.5 器高 2.3 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、体部境も大きくくびれる。 天井部は丸味をもち、外面は未調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 小・粗砂少含 C 良好 D 6/7

B-1 地区

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第51図 562	蓋杯 (蓋)	灰原 上層	口径 14.6 器高 2.3 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	口縁部は下端を引き出して肥厚させ、体部境がくびれる。 天井部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内、黄味灰色 外、黄 味灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
563	蓋杯 (蓋)	灰原 上層	口径 15.0 器高 3.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 小・粗砂少含 C 良好 D 3/4
564	蓋杯 (蓋)	灰原 上層	口径 15.9 器高 2.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.9	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整する。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、緑灰色～黒 B 細・小砂少含 C 良好 D 4/5
565	蓋杯 (蓋)	灰原 上層	口径 18.2 器高 2.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部は低く、外面は未調整。	A 内・外、黄味灰色 B 粗砂少含 C 良好 D 1/2
566	蓋杯 (身)	灰原 上層	口径 10.5 器高 3.7 底径 7.2 高台高 0.6	体・口縁部は直立し、端部は薄くなって終る。 底部との屈曲部に直立する大振りの高台が付く。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内・外、緑灰色～黒 B 粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
567	蓋杯 (身)	灰原 上層	口径 10.9 器高 3.7 底径 7.2 高台高 0.3	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に貧弱な高台が付く。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内・灰色 外・灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
568	蓋杯 (身)	灰原 上層	口径 11.9 器高 3.8 底径 7.4 高台高 0.4	体・口縁部は直立する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に小振りの高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 微砂少含 C 普通 D 3/4
569	蓋杯 (身)	灰原 上層	口径 13.0 器高 4.5 底径 9.0 高台高 0.7	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸味をおび、高台は外方へ高く踏んばる。 外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、白灰 色～灰色 B 微砂多含、細砂 C 良好 D 3/4
570	蓋杯 (身)	灰原 上層	口径 13.0 器高 3.9 底径 9.0 高台高 0.3	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は丸味をもち、すぐ内側に低い高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 3/4
571	蓋杯 (身)	灰原 上層	口径 13.4 器高 3.5 底径 8.8 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、すぐ内側に小振りの高台が付く。 底部外面は未調整。 内外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好 D 1/2
572	蓋杯 (身)	灰原 上層	口径 14.0 器高 3.4 底径 9.3 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は比較的明瞭で、やや内側に低い高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 7/8
573	皿	灰原 上層	口径 18.0 器高 2.0 底径 14.7	口縁部は外反する。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒多含 C 普通
574	皿	灰原 上層	口径 18.4 器高 2.0 底径 16.3	口縁部は直行する。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 小・粗砂少含 C 不良 D 1/3
575	皿	灰原 上層	口径 19.5 器高 2.0 底径 16.3	口縁部は小さく外彎する。 底部外面は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 小・粗砂少含 C 良好 D 1/4
576	蓋杯 (蓋)	灰原 上層	口径 11.8 器高 2.4	口縁部は折り曲げて成形し、内傾する。 天井部は丸くなり、外面は未調整。	A 内・外、茶褐色 B 細・小粗少含 C 普通 D 1/4
577	蓋杯 (蓋)	灰原 上層	口径 12.6 器高 2.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は端部を小さく面取りする。 天井部は丸く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰 色～黒色 B 小・粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
578	蓋杯 (蓋)	灰原 上層	口径 13.3 器高 2.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、端部は鋭い。 天井部は低く、外面は回転ヘラ削り調整を行う。 内外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内、暗灰色～黒 外、灰色～黒 B 細砂少含 C 良好 D 5/6

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
579	蓋杯 (蓋)	灰原上層	口径 14.1 器高 2.1 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	口縁部は下端を大きく引き出して成形、断面三角形とし、端部は鋭い。 天井部は低く、外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、暗青灰色～黒色 外、灰色～黒 B 細・小・粗砂少含 C 良好 D 5/6
580	蓋杯 (蓋)	灰原上層	口径 14.0 器高 2.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.4	口縁部は下端を引き出し、断面方形に近く成形する。 天井部は丸味をもち、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、暗緑灰色～黒色 B 微砂多含 C 良好 D 3/5
581	蓋杯 (蓋)	灰原上層	口径 14.4 器高 2.8 つまみ径 1.7 つまみ高 0.5	口縁部は下端を引き出して断面三角形とし、体部境がくびれる。 天井部は丸味をもって高く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好・堅固 D 1/2
582	蓋杯 (蓋)	灰原上層	口径 14.6 器高 2.4 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	口縁部は面取りを施して断面方形に近く仕上げる。 天井部外面は未調整。 つまみの位置がずれ、焼け歪む。 天井部外面にヘラ記号 (?) あり。	A 内・外、暗緑灰色 B 細・小砂少含 C 良好 D 1/2
583	蓋杯 (蓋)	灰原上層	口径 14.7 器高 3.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	口縁部は下端を小さくつまみ出して成形、端部は丸い。 天井部は丸味をもち、外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 精良 C 良好 D 1/2
584	蓋杯 (蓋)	灰原上層	口径 15.4 器高 1.8 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、外傾する。 天井部は低平で、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 精良 C 良好 D 1/2
585	蓋杯 (蓋)	灰原上層	口径 15.7 器高 1.8 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、緑灰色～黒 B 小砂少含 C 良好 D 4/5
第52図 586	蓋杯 (身)	29・33号窯 灰原	口径 11.0 器高 3.4 底径 7.3 高台高 0.4	体・口縁部は内彎して立上り、薄くなって終わる。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に小振りの高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・暗灰色 外・灰色、暗灰色 B 微砂少含 C 良好 D 1/2
587	蓋杯 (身)	29・33号窯 灰原	口径 11.8 器高 3.8 底径 7.0 高台高 0.4	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は明瞭で、内側に離れて低い高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内・外、茶灰色 B 小砂少含 C 普通
588	蓋杯 (身)	29・33号窯 灰原	口径 12.0 器高 4.3 底径 8.1 高台高 0.6	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗黒灰色～灰色 B 細・小砂少含 C 良好
589	蓋杯 (身)	29・33号窯 灰原	口径 12.0 器高 4.6 底径 8.4 高台高 0.5	体・口縁部は緩く「S」字状を描く。 底部との屈曲は丸くなり、すぐ内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内、黒灰色 外、暗灰色～黒色 B 小砂少含 C 良好 D 1/4
590	蓋杯 (身)	29・33号窯 灰原	口径 12.6 器高 4.6 底径 9.4 高台高 0.5	体・口縁部は急角度で立上り、直行する。 底部との屈曲は丸く、すぐ内側に外方へ踏んばる高台が付く。 底部外面は未調整。 酸化炎焼成。	A 内・外、黄褐色 B 微砂少含 C 不良
591	蓋杯 (身)	29・33号窯 灰原	口径 12.9 器高 4.5 底径 8.0 高台高 0.5	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
592	蓋杯 (身)	29・33号窯 灰原	口径 14.0 器高 4.0 底径 9.3 高台高 0.4	体・口縁部は外彎しつつ立上る。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は直立する。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
593	蓋杯 (身)	29・33号窯 灰原	口径 13.8 器高 4.0 底径 9.4 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲はやや丸味をもち、やや内側の高台は歪む。 底部外面に平行タタキ痕を残す。 外面に灰を被る。	A 内・外、淡緑灰色 B 小砂少含 C 良好 D 3/4
594	蓋杯 (身)	29・33号窯 灰原	口径 13.8 器高 3.9 底径 9.1 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲はやや甘くなり、少し内側に外傾する高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D 7/8
595	蓋杯 (身)	29・33号窯 灰原	口径 14.0 器高 4.0 底径 9.1 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側の高台は歪む。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、茶灰色 外、茶灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2

## B-1 地区

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
596	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 14.3 器高 4.3 底径 10.1 底台高 0.6	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に直立する高台が付く。 底部外面は未調整。	A 内、黄土色 外、黄土色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好
597	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 16.0 器高 4.5 底径 11.4 底台高 0.6	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸く、すぐ内側の高台は外方へ踏んばる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄灰色 B 精良 C 良好 D 2/3
598	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 18.0 器高 5.6 底径 11.8 底台高 0.4	体・口縁部は外反しつっ大きく開く。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は小振り。全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、褐色 B 微砂多含 C 普通 D 1/3
599	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 12.2 器高 3.1 底径 8.7	体・口縁部は外彎しつっ開く。 底部は丸味をおび、外面は未調整。 内面は重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～茶灰色 B 細砂少含 C 普通
600	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 13.2 器高 3.5 底径 8.6	口縁部は小さく外反し、薄く終る。 底部外面は未調整。 焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細・小砂少含 C 良好
601	皿	29・33号窯灰原	口径 18.8 器高 2.3 底径 16.2	口縁部は外彎して開く。 底部は扁平で、外面は未調整。 粘土紐の巻上げ痕を残す。	A 内・外、茶灰色 B 細・小砂少含 C 良好 D 3/4
602	短頸壺	29・33号窯灰原	口径 12.0 器高	肩が張り、口縁部は直立して端面は水平。 外面に灰を被る。	A 内、暗紫灰色 外、灰色 B 小砂少含 C 良好 D 1/4
603	盤	29・33号窯灰原	口径 27.2 器高 4.2 底径 22.8 底台高	体・口縁部は直立する。 底部との屈曲は丸味をおび、高台は高い。 底部外面は未調整。	
第53図 604	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 13.7 器高 1.5 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、直立し、端部は鋭い。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 口縁部内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
605	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 14.0 器高 2.0 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立して外側面は小さく凹む。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 不良
606	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 14.0 器高 2.2 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾して外側面は凹む。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
607	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 14.1 器高 2.2 つまみ径 2.7 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立し、端部は丸い。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 9/10
608	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 14.3 器高 1.7 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は下端を大きく引き出して断面三角形とし、直立する。 天井部は低平で、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
609	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 14.1 器高 1.6 つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、外傾し、外側面は凹む。 天井部は低平で、外面は回転ヘラ削り調整。 口縁部内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、茶褐色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好 D ほぼ完存
610	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 14.6 器高 2.0 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、小さく外傾する。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、青灰色 外、黄灰色～黒灰色 B 砂粒多含 C 良好
611	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 14.7 器高 3.5 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は下端を大きく引き出して成形、内傾する。 天井部は丸く高い。 器表磨減。	A 内、黄味灰色 外、白灰色 B 砂粒多含 C 不良 D 3/4
612	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 14.8 器高 2.3 つまみ径 2.9 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、直立し、外側面は凹面となる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黒灰色 B 砂粒・礫少含 C 良好 D 3/4

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
613	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 14.9 器高 1.8 つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	口縁部は下端を大きく引き出して成形する。天井部外面は回転ヘラ削り調整。大きく焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 2/3
614	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 15.0 器高 1.6 つまみ径 2.9 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、端部は丸味をもつ。大きく焼け歪む。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
615	蓋杯(蓋)	29・33号窯灰原	口径 19.9 器高 2.5 つまみ径 3.5 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、直立する。天井部は低く、全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固 D 2/3
616	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 12.7 器高 4.9 底径 8.4 高台高 0.5	口縁部は大きく外彎する。底部との屈曲は丸く、高台は小さく外方へ踏んばる。底部外面は未調整。外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好 D 1/2
617	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 12.9 器高 4.8 底径 9.2 高台高 0.6	口縁部は外彎する。底部との屈曲は丸く、高台は外方へ踏んばる。底部外面は未調整。	A 内、灰色 外、黄味灰色～暗灰色 B 細砂多含、礫少含 C 普通 D 4/5
618	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 12.9 器高 4.5 底径 8.3 高台高 0.6	体・口縁部は直行する。底部との屈曲は丸味をもち、やや内側の高台はほぼ直立する。全体を横ナデ・ナデで仕上げる。外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
619	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 13.3 器高 5.0 底径 9.2 高台高 0.3	口縁部は外反して開く。底部との屈曲は丸く、小さな高台が外方へ踏んばる。底部外面は未調整。	A 内・外、黄味灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 3/4
620	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 13.4 器高 5.3 底径 9.3 高台高 0.6	口縁部は外反して開く。底部との屈曲は丸く、高台は外方へ踏んばる。底部外面は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 不良 D 5/6
621	蓋杯(身)	29・33号窯灰原	口径 16.0 器高 4.9 底径 12.0	体・口縁部は内彎しつつ立上る。底部外面は静止のヘラ削りで仕上げる。外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
622	蓋	29・33号窯灰原	口径 13.0	口縁部は外傾し、端面は水平となる。内外面に水膨れがみられる。	A 内・外、暗灰色～黒 B 微砂少含 C 良好 D 1/6
第54図 623	長頸壺	29・33号窯灰原	口径 13.2	口縁部は折り曲げてやや内傾する平坦面となる。頸部中位に1条の凹線を刻む。内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～黒 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
624	長頸壺	29・33号窯灰原	口径 14.0	口縁部は折り曲げて外傾し、端部は丸い。外面に灰を被る。	A 内、暗緑灰色 外、茶灰色～黒 B 微砂多含、粗砂少含 C 良好 D 1/2
625	長頸壺	29・33号窯灰原	口径 14.0	口縁部は折り曲げてほぼ水平面とし、端部は丸い。頸部中位やや下方に1条の凹線を刻む。内外面に灰を被る。	A 内・外、黒灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/2
626	長頸壺	29・33号窯灰原		屈曲部直下に稜を設け、やや下方に1条の寛描沈線を刻む。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好
627	長頸壺	29・33号窯灰原	底径 10.0 高台高 0.7	残存部前面を横ナデ調整する。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/5
628	鉢	29・33号窯灰原	口径 22.6 底径 16.1	体部は深く直行し、口縁部は小さく外反する。底部付近外面を回転ヘラ削り調整する。外面に灰を被る。	A 内、暗青灰色 外、灰色～黒 B 細砂多含、粗砂少含 C 良好 D 1/4
629	甕	29・33号窯灰原	口径 20.0	口縁部は鋭く屈曲して段を設け、断面方形とする。端部は鋭い。頸部外面に整美な櫛描波状文を施す。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/8



## B-1地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
630	土師器甕	29・33号窯 灰原	口径 18.2	口縁部は著しく肥厚し、弱く外反する。 内面はヘラ削り調整、外面は不明。	A 内、褐色 外、茶褐色 B 小・粗砂少含 C 良好 D 1/4
第59図 658	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 16.0 器高 2.7 つまみ径 3.0 つまみ高 1.0	身受けのかえりを有し、その端部は断面方形となり接地点となる。 天井部は低く、外面は回転ヘラ削り調整。 天井部外面にヘラ記号あり、焼け歪む。	A 内・外、暗緑灰色 B 細砂多含 C 良好
659	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 15.1 器高 3.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	身受けのかえりを有し、その端部は鋭く尖る。 天井部は高く扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
660	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 15.3	身受けのかえりを有し、その端部は鋭く尖って、接地点となる。 天井部は高く扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
661	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 15.6	身受けのかえりを有し、端部は尖って接地点となる。 天井部は高く、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含、小砂少含 C 普通 D 4/5
662	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 15.8 器高 2.9 つまみ径 3.0 つまみ高 0.8	身受けの短いかえりを有し、その端部は丸い。 天井部は高く扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 普通 D 1/4弱
663	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 14.0 器高 2.0 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立し、端部は丸味をもつ。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 微砂少含 C 良好 D 1/2
664	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 14.2 器高 1.9 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、端部は丸い。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 小砂少含 C 良好 D 4/5
665	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 14.2 器高 3.0 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、外傾する。 天井部は低平で、外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
666	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 15.0 器高 2.6 つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は低く、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、白灰色～緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D 2/5
667	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 15.5 器高 3.0 つまみ径 3.0 つまみ高 1.0	口縁部は折り曲げて成形、体部境は強くくびれる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 小砂少含 C 不良 D 2/3
668	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 15.7 器高 3.4 つまみ径 3.0 つまみ高 0.9	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸く、外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、暗灰色～茶灰色 B 微砂多含、小砂少含 C 普通 D 1/2
669	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 15.8 器高 2.9 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、端部は丸い。 天井部は丸く、外面は回転ヘラ削り調整する。	A 内・外、灰色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好 D 1/2
670	蓋杯(蓋)	38・39号窯 灰原	口径 15.9 器高 2.9 つまみ径 3.0 つまみ高 0.9	口縁部は下端を引き出して成形、内傾し、体部境がくびれる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 微砂多含、小砂少含 C 良好 D 4/5
671	蓋杯(身)	38・39号窯 灰原	口径 12.4 器高 4.6 底径 8.6 高台高 0.6	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸くなり、高台は直立する。 底部外面は未調整。	A 内・外、白緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
672	蓋杯(身)	38・39号窯 灰原	口径 13.0 器高 4.1 底径 10.0 高台高 0.5	口縁部は外反する。 底部との屈曲は丸くなり、小振りの高台が小さく外傾して行く。 底部外面は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 微砂多含 C 普通 D 3/4
673	蓋杯(身)	38・39号窯 灰原	口径 13.6 器高 4.2 底径 9.5 高台高 0.6	体・口縁部は外彎して立上る。 底部との屈曲は丸く、高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
674	蓋杯(身)	38・39号窯灰原	口径 15.0 器高 4.2 底径 11.1 高台高 0.8	体・口縁部は外彎して開く。 底部との屈曲は丸味をおび、すぐ内側に外傾する高台が付く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
675	蓋杯(身)	38・39号窯灰原	口径 15.0 器高 6.4 底径 10.0 高台高 0.8	体・口縁部は外彎しつつ高く立上る。 底部との屈曲は丸く、細身の高台が外傾してつく。 底部外面は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/4
676	蓋杯(身)	38・39号窯灰原	底径 9.6 高台高 1.1	細身の高い高台が外傾してつく。 底部外面は未調整で、ヘラ記号を残す。	A 内・外、褐色 B 小砂少含 C 不良
677	土師器杯	38・39号窯灰原	口径 7.8 器高 3.4 底径 5.4	杯形の土師器。 底部が著しく厚い。 器表磨滅。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 普通 D 2/3
678	高杯	38・39号窯灰原	口径 15.3 器高 7.8 底径 10.8	脚端は緩く折り曲げて成形、端部は丸い。 剥離面に接合の便に刻んだ円形の沈線がある。	A 内・外、白灰色～緑灰色 B 細・小砂多含 C 良好
679	高杯	38・39号窯灰原	口径 7.8 器高 3.3 底径 5.4	杯部は立上りが高く大きく、端部は外反して面をもつ。 杯部下半外面は回転ヘラ削り調整。 脚端は折り曲げ、薄く終わる。	A 内・外、黄褐色 B 細・小・粗砂・赤褐色粒少含 C 良好 D 1/2
第60図 680	蓋	38・39号窯灰原	口径 14.6 器高 3.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は外傾し、端部は丸味をもつ。 天井部は扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 口縁部内外面に灰を破る。	A 内・外、灰色～暗灰色～黒 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
681	短頸壺	38・39号窯灰原	口径 19.7 底径 11.0 高台高 0.7	体部最大径部分と肩部に甘い凹線を各1条刻む。 体部下半外面は回転ヘラ削り調整、底部外面はナデで仕上げる。 外面に灰を破る。	A 内、紫灰色 外、暗灰色～黒灰色～黄灰色 B 粗砂少含 C 良好
682	短頸壺	38・39号窯灰原	口径 12.0	口縁部は外彎して立上り、端部は内傾して膨む。 頸部反転部分は丸味をもつ。 把手は扁平で反り返る。 体部下半外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～黒 B 細・小・粗砂少含 C 良好 D 1/4
683	短頸壺	38・39号窯灰原	底径 9.4 高台高 0.7	体部下半・底部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を破る。	A 内・外、暗青灰色 B 小砂少含 C 良好
684	短頸壺	38・39号窯灰原	口径 11.6 器高 13.6 底径 10.4 高台高 0.9	口縁部は外側に肥厚して、ほぼ水平な面をもつ。 体部は張りが強く、下半外面を回転ヘラ削り調整する。 底部外面も回転ヘラ削り調整。 把手は扁平で反り返る。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒 B 細・小・粗砂少含 C 良好
685	短頸壺	38・39号窯灰原	口径 12.0 胴径 21.0	口縁部は外側に肥厚して外傾する面をもつ。 体部の張りは弱く、下半外面を回転ヘラ削り調整する。	A 内、茶褐色 外、淡橙～黒灰色 B 小・粗砂少含 C 普通
第61図 686	長頸壺	38・39号窯灰原	口径 13.1	口縁部は外彎しつつ丸く終る。 頸部中位に1条の凹線を刻む。 外面に灰を破る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
687	壺	38・39号窯灰原		体部内面下半を回転ヘラ削り、他を横ナデで調整。 焼け歪む。	A 内・外、黄土色 B 細・小砂少含 C 不良 D 2/5
688	鉢	38・39号窯灰原	口径 27.6	体・口縁部は直行し、口縁部は内傾する面をもつ。 把手は肉厚で短い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒ほとんど含まず C 普通 D 口縁部の2/3
689	鉢	38・39号窯灰原		口縁部は折れて直立し、端部は小さな面となる。 鋭い穿孔がある。 残存部下端外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄褐色 B 細砂多含 C 良好
690	甕	38・39号窯灰原	口径 28.0	口端部は外傾する面となり、直下に2条の断面三角突帯を付す。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/5

## B-4 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
691	甕	38・39号窯 灰原		口縁部外面を強く横ナデして凹凸を加える。 口端面は水平な凹面となる。	A 内・外、白灰色 B 細砂ほとんど含まず C 良好
692	甕	38・39号窯 灰原		口縁部は外側に巻き込んで肥厚させる。 口端面は外傾する。	A 内・外、肌色 B 細砂少含 C 不良
693	甕	38・39号窯 灰原		外面は格子タタキ痕、内面に同心円文当具痕を残す。	A 内、緑灰色 外、暗灰色 B 微砂少含 C 良好
694	甕	38・39号窯 灰原		口縁部直下を強く横ナデして凹凸を加える。 口端面は外傾する凹面となる。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好
695	不明整品		口径 4.0 器高 1.5	中央を凹ませる、凹凸部は未調整、周辺は削られる。	A 内・外、黄灰色 B 小砂含まず C 良好

## B-4 地区 (井手窯跡群)

第65図 1	蓋杯 (蓋)	40号窯 窯内	口径 15.0 器高 2.5 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は、下端を引き出して成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整	A 内・外、紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
2	蓋杯 (蓋)	41号窯 横土塋	口径 13.9 器高 3.0 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は、下端を引き出して成形、直立し、天井部との境は崩れる。 天井部外縁は未調整。だが、タタキ痕(?)残る。 重ね焼痕が内外面にある。 焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 5/6
3	蓋杯 (蓋)	41号窯 横土塋	口径 16.0 器高 2.6 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	口縁部は、小さく折れ、鳥嘴状取って直立。 天井部外面はヘラ削り調整。 内外に灰被り、重ね焼痕あり。 焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/4
4	蓋杯 (蓋)	41号窯 横土塋	口径 17.0 器高 3.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部外面はヘラ削り調整。 焼け歪む。	A 内・外、暗緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
5	蓋杯 (身)	41号窯 横土塋	口径 13.2 器高 3.8 高台径 7.2 高台高 0.3	体・口縁部は直線的にのびる。 高台の造りは雑。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 普通 D ほぼ完存
6	蓋杯 (身)	41号窯 横土塋	口径 13.7 器高 4.0 高台径 8.6 高台高 0.4	体・口縁部は直線的にのびる。 高台は低い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、白黄灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒多含、礫少含 C 普通 D 4/5
7	蓋杯 (身)	41号窯 横土塋	口径 13.8 器高 4.0 高台径 8.8 高台高 0.5	体・口縁部は直線的にのびる。 高台は低い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、白灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
8	蓋杯 (身)	41号窯 横土塋	口径 14.0 器高 3.7 高台径 9.4 高台高 0.3	体・口縁部は直線的にのびる。高台は低い。 全体を横ナデ・ナデで仕上げるが、底部内面に刷毛目(あるいは強くナデた結果か)残る。 内面に土器片熔着。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
9	蓋杯 (身)	41号窯 横土塋	口径 14.3 器高 4.5 高台径 9.7 高台高 0.4	体・口縁部は外反気味にのびる。 高台は低く、底部外縁にある。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 完存
10	皿	41号窯 横土塋	口径 17.8 器高 2.9 底径 15.2	底部は膨らみをもち、口縁部は外反しつつのびる。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
11	皿	41号窯 土塋	口径 19.1 器高 2.5 底径 15.1	底部は丸味みをもち、口縁部は外彎気味に開き、器肉が厚い。 底部外面中心部は未調整。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 細砂粒含 C 良好 D 1/4

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
12	皿	41号窯横土壙	口径 19.3 器高 2.7 底径 16.5	底部は平底で、口縁部は直線に近くのみる。 底部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 6/7
13	皿	41号窯横土壙	口径 18.5 器高 4.2 底径 10.7	口縁部が直線的に大きくのみ、深い。 器表磨滅し、調整痕不明。 酸化炎焼成で、生焼け。	A 内・外、橙色 B 砂粒、雲母多含赤褐色粒少含 C 不良 D 6/7
14	盤	41号窯横土壙	口径 23.4 器高 4.4 底径 17.9 高台高 0.5	口縁部は直線的にのみる。 底部外面は回転ヘラ削りのようである。 酸化炎焼成で、生焼け。器表の磨滅が進行。	A 内・外、白黄褐色 B 砂粒少含 C 不良 D 2/3
15	短頸窯(身)	41号窯横土壙	高台径 15.6 高台高 0.5 胴部最大径 30.8	胴部外面下半は回転ヘラ削り。 高台は外方へ踏んばる。 外面に灰被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂、砂粒多含 C 良好
第68図 16	蓋杯(蓋)	42号窯窯内	口径 14.0	口縁部は下端を引き出して成形。直立し、細部は丸い。 全体を横ナデで仕上げる。 天井部外面に粘土紐巻上げ痕残る。	A 内・外、黄味灰色 B 細砂多含 C 普通 D 1/4
17	蓋杯(蓋)	42号窯窯内	口径 14.8 器高 2.4 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	口縁部は下端を小さくつまみ出して成形。天井部との境は緩く回転する。 全体を横ナデで仕上げる。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/3
18	蓋杯(蓋)	42号窯窯内	口径 15.2 器高 3.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	天井部から口端部へとなだらかに移行し、口縁部を變形しない。 造りは全体に鈍重。 生焼けで、器表磨滅著しい。	A 内・外、青灰色 B 砂粒多含 C 不良 D 1/3
19	蓋杯(蓋)	42号窯窯内	口径 16.0	天井・口縁部境を薄くして口縁部を強調する。 口縁部を肥厚させるが、丸味をおびている。 酸化炎焼成に近く、焼成不良。調整痕残らず。	A 内・外、灰色～橙褐色 B 砂粒多含、黒色粒多含 C 不良 D 1/5
20	蓋杯(蓋)	42号窯窯内	口径 17.0	天井・口縁部境が小さく締まるが、口縁部の變形はみられない。 天井部外面は未調整か。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/5
21	蓋杯(蓋)	42号窯窯内	口径 19.0	口縁部は端部を小さくつまみ出す。細部は丸くおさめる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げるようである。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含、黒色粒含 C 良好 D 1/6
22	蓋杯(蓋)	42号窯窯内		口縁部を小さく屈曲させるが、造りはあまい。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 天井部外面にヘラ記号(一条の線刻)あり。	A 内・外、緑灰色～褐色 B 砂粒少含 C 普通
23	蓋杯(身)	42号窯窯内	口径 13.3 器高 4.1 高台径 9.0 高台高 0.2	体・口縁部は内彎気味に直立する。 高台は底部外縁にあり、扁平。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 5/6
24	蓋杯(身)	42号窯窯内	口径 13.6 器高 4.3 高台径 9.0 高台高 0.5	体・口縁部は外反気味に立上がり、器肉の厚さに変化がある。 高台は底部外縁にあり、やや外方に踏んばる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/5
25	蓋杯(身)	42号窯窯内	口径 14.0 器高 4.1 高台径 9.3 高台高 0.4	体・口縁部は直線的に開き、器肉が厚い。 高台は底部外縁にあり、方形に近い断面を育てる。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含、黒色粒含 C 良好 D 1/5
26	蓋杯(身)	42号窯窯内	口径 14.6 器高 4.4 高台径 9.5 高台高 0.3	体部は直線的にのみ、口縁部は小さく外反する。 高台は底部外縁にあり、角が潰れる形態となる。 底部外面は未調整のよう。	A 内・外、灰色 B 砂粒、礫少含 C 普通 D 4/5
27	蓋杯(身)	42号窯窯内	口径 17.4 器高 5.5 高台径 11.0 高台高 0.5	平底の底部から明瞭に屈曲する。体部は直線的にのみ、口縁部は小さく外反する。 底部外面は未調整のよう。 高台は屈曲部のやや内側に位置し、小振りである。	A 内、白黄色 外、白黄色～黒灰色 B 砂粒、礫少含 C 普通 D 4/5
28	皿	42号窯窯内	口径 15.0 器高 1.5 底径 12.0	口縁部は直線的に開く。 底部外面にタタキ痕(?)があるが、不明瞭。 底部外面を除き、横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、白黄色 外、白黄色～黒灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 3/5

## B-4 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
29	皿	42号窯窯内	口径 18.0 器高 2.3 底径 13.9	口縁部は緩く外反する。 底部外面に平行タキ痕残る。 酸化炎焼成で、生焼けに近い。	A 内・外、淡橙色～灰色 B 細砂多含 C 普通 D 1/8
30	皿	42号窯窯内	口径 18.9 器高 2.2 底径 15.3	口縁部は直線的にのびる。 外面調整は不明。内面は横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色 B 砂粒、黒色粒含 C 普通 D 1/4
31	皿	42号窯窯内	口径 18.0 器高 3.0 底径 15.6	底部が膨らみ、口縁部は外反気味に直線的にのびる。 外部外面の大部分は未調整。	A 内、緑灰色～茶灰色 外、茶灰色～暗緑灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 2/3
32	皿	42号窯窯内	口径 20.0 器高 2.1 底径 16.8	口縁部は外反してのびる。 酸化炎焼成で生焼けのために器表の磨減が著しい。	A 内・外、黄灰色 B 細砂、砂粒少含 C 不良 D 1/4
33	皿	42号窯窯内	口径 20.0 器高 2.8 底径 17.2	体・口縁部が緩く「S」字状の曲線を描く。 器肉が厚い。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 1/5
34	短頸壺(身)	42号窯灰原	口径 10.3	球形胴から屈曲して口縁部が直立する。 口縁端部は水平な面を形成する。 全体を横ナデ調整する。 一部外面に重ね焼きの痕跡ある。	A 内、灰色 外、気味灰色 B 細砂多含 C 良好
35	蓋杯(身)	42号窯窯内	高口径 17.8 高台高 0.4	底部は平らで、高台は外縁のやや内側にある。 高台は断面方形。 高台内側に一部回転ヘラ削りを用いる。 内外に火ダスキ痕あり。	A 内・外、青灰色 B 砂粒含 C 良好 D 底部残 2/5
36	蓋杯(蓋)	42号窯前庭部	口径 13.5 器高 3.4 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁端部が下方へつまみ出される。 ほぼ直立する端面はシャープに仕上げる。 天井部外面をヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、青灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
37	蓋杯(蓋)	42号窯前庭部	口径 14.4 器高 3.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁端部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部外面も含めて横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に重ね焼きの痕跡を留める。	A 内・外、暗灰色 B 暗灰色～黒灰色 C 砂粒少含 D 完存
38	蓋杯(蓋)	42号窯前庭部	口径 15.5 器高 1.8 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁端部を小さく下方へ引き出す。 天井は低く、つまみが突出する。 天井外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒灰色 B 砂粒少含 D 完存 C
第69図 39	蓋杯(蓋)	42号窯横土壇	口径 13.2 器高 3.0 つまみ径 1.5 つまみ高 0.8	口縁端部を折り曲げて成形、直立する。 天井部外面にヘラ削りを用いる。 酸化炎焼成で焼きが甘い。	A 内・外、茶褐色 B 細砂、砂含少含 C 不良 D ほぼ完存
40	蓋杯(蓋)	42号窯横土壇	口径 14.0 器高 3.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	口縁部下端が小さく引き出され、天井部との境は外面が曲面を描いて凹む。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 焼け歪みが大きい。	A 内・外、暗灰色 B 細砂、少含 C 良好 D 完存
41	蓋杯(身)	42号窯横土壇	口径 13.0 器高 4.0 高台高 8.9 高台高 0.3	底部から体部への屈曲がシャープで、体・口端部が内彎して立上がる。 高台は底部外縁のやや内側にあり、形状は扁平。 底部外面に平行タキ痕が弱く残る。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
42	蓋杯(身)	42号窯横土壇	口径 13.9 器高 3.8 高台高 8.7 高台高 0.4	体・口縁部は内彎気味に立上がり、底部との屈曲は鋭い。 高台は底部外縁のやや内側にあり、扁平となる。 底部外面も含めて横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒含 C 良好 D 完存
43	蓋杯(身)	42号窯横土壇	口径 13.7 器高 3.9 高台高 9.2 高台高 0.4	体・口縁部は直線的に立上がり、底部との屈曲は鋭い。 高台は屈曲部のやや内側にあり、ひしゃげる。 底部は一部ナデるが、大部分は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
44	蓋杯(身)	42号窯横土壇	口径 13.8 器高 4.1 高台高 9.2 高台高 0.4	体・口縁部は直線的に立上がり、器肉が厚い。底部との屈曲は明瞭。 高台は屈曲部近くにあり、形状が整わない。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
45	蓋杯(身)	42号窯横土壇	口径 14.1 器高 4.4 高台高 9.3 高台高 0.4	体・口縁部は直線的にのびる。 屈曲部はやや丸味をおび、直下に扁平な高台がつく。 生焼けて器表が磨減・剝離し、外面調整は不明。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第71図 46	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 12.3 器高 1.2 つまみ径 1.6 つまみ高 0.5	口縁端部が外側下方へ引き出される。 天井頂部に不定方向の平行タタキ痕あり、その外縁を回転ヘラ削りする。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、紫灰色~暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/2
47	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 13.0	口縁部がつまみ出され、内傾する。 天井部外面に中心部から外側に走る1条のヘラ記号が残る。	A 内・外、暗灰色 B 精良 C 良好 D 1/5
48	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 13.6 器高 2.7 つまみ径 1.6 つまみ高 0.7	口縁部は小さく下方へつまみ出される。 天井部は丸くなり、つまみの形状が特徴的である。 天井部外面に不定方向の平行タタキ痕が残り、仕上げは全体を横ナデ・ナデを用いて行う。	A 内、暗灰色 外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
49	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 13.7	口縁部は断面三角形に成形され、天井部との境はくびれる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/6
50	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 13.9 器高 2.3 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は断面三角形に成形しようと試みたのであろうが、丸いもので終る。天井部との境はくびれ、強く反転する。 天井部外面は未調整。 内面に蓋杯身の底部が、外面にも同口縁部が熔着する。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
51	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 14.2 器高 1.8 つまみ径 1.7 つまみ高 0.5	口縁部は断面三角形となり直立。その頂部が水平になるとともに天井部との間がくびれる。 天井部外面はほとんど未調整。 口縁部内外面が灰を被る。	A 内・外、灰色~暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 2/3
52	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 14.3 器高 1.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は下端を下方へ引き出して内傾する。 全体を横ナデ・ナデを仕上げる。 焼け歪みが大きい。	A 内、暗灰色~黒色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
53	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 14.8 器高 2.6 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は下端を下方に、引き出して内傾する。 天井部が丸味をもち、やや高い。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡がある。	A 内・外、紫灰色~灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
54	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 14.8 器高 2.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は下端を下方に引き出して成形し、内傾する。 天井部は低く、外面中心は未調整、周縁を回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、灰色~暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 4/5
55	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 14.9 器高 1.8 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部下端が外方へ引き出され、端面が匙面となる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 酸化炎焼成。	A 内・外、灰色~暗灰色 B 精良 C 不良 D 1/2
56	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 15.0 器高 1.8 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部下端が外方へ引き出され、端面が匙面となる。 全体に造りが繊細。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色~暗灰色 B 精良 C 良好 D 1/2
57	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 15.0 器高 2.7 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8	口縁部は下端を下方に引き出し、内傾する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色~暗灰色 外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
58	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 16.0 器高 3.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁端部は小さく下方へつまみ出してやや内傾。 天井部は高く、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、青灰色~灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
59	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 15.0	口縁部は下端を引き出して成形、直立する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、灰味黄褐色~黒色 B 精良 C 良好 D 1/5
60	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 15.2 器高 2.3 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	口縁部は下端を外方へ引き出して成形、天井部との境がくびれる。 天井部外面は未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、白灰色 外、白灰色~灰色 B 細砂少含 C 普通 D 4/5
61	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 15.3 器高 2.7 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は小さく折り曲げて成形、直立する。 天井部外面中心は未調整、外縁は回転ヘラ削り。 焼け歪む。	A 内・外、黄味灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
62	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 15.8 器高 1.7 つまみ径 1.9 つまみ高 0.3	口縁部は端部を小さく折り曲げて成形、直立する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 天井部外面にヘラ記号(?)ある。	A 内・外、暗茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/5

B-4 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
63	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 15.9 器高 3.1 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、端部は丸い。 天井部外面は未調整。	A 内・外、青灰色~暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
64	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 16.0 器高 2.7 つまみ径 1.6 つまみ高 0.5	口縁部は鈍角に小さく折り曲げて形成され、端部は丸くおさめる。 天井部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D 2/3
65	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 18.4 器高 1.8 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は下端を引き出し、天井部との境を反転させて強調する。 天井部外面は平行タタキ痕を残す。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、緑灰色 外、暗緑灰色 B 細砂多含 C 不良 D 2/3
66	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	口径 19.0 器高 2.8 つまみ径 2.3 つまみ高 0.9	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 全体に薄手である。 天井部外面に未調整部分、回転ヘラ削りを行う部分がある。	A 内、暗灰色 外、暗灰色~黒灰色 B 細砂、砂粒含 C 良好 D 1/3
67	蓋杯 (蓋)	40~42 号窯 灰原	つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	天井部外面は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
68	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 11.4 器高 4.3 つまみ径 8.0 つまみ高 0.4	器肉厚く、体・口縁部は内彎してのびる。 底部間の屈曲は明瞭。 全面を横ナデ・ナデで仕上げるようである。 高台は外方へ歪む。	A 内、褐色 外、灰色~緑灰色 B 細砂含 C 普通 D 1/3
69	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 12.0 器高 3.7 つまみ径 7.9 つまみ高 0.4	体・口縁部は小さく外彎気味に立上がる。 底部間の屈曲は明瞭。 高台は底部外縁のやや内側にあり、外方へ踏んばる。 底部外面に平行タタキ痕(?)あり。	A 内、青灰色 外、青灰色~黒色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
70	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 12.8 器高 3.6 つまみ径 9.3 つまみ高 0.4	底部からの屈曲は鋭く、体・口縁部は外反して開く。 高台は屈曲部のすぐ内側にあり、直立する。 底部外面に放射状に配された平行タタキ痕あり。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
71	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 12.8 器高 3.7 つまみ径 8.3 つまみ高 0.4	体部は内彎気味に立上がり、口縁部は外反して薄く終る。 高台は屈曲部のやや内側にあって、外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内、灰味赤色 外、灰味赤色~灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
72	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	高台径 8.8 高台高 0.6	底部からの屈曲部が丸味をおび、やや内側に高台を付す。 高台は高く、形状も整う。 底部外面の中心は未調整で、ヘラ記号あり。その周縁は回転ヘラ削り。	A 内、暗灰色 外、暗灰色~黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/5
第72図 73	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 12.9 器高 3.8 高台径 8.5 高台高 0.4	底部からの屈曲部は鋭く、体部は直線的に開く。口縁部は小さく外反。 高台は屈曲部のやや内側にあり、やや歪む。 底部外面に粘土紐巻上げ痕と指頭痕が残る。外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
74	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 13.0 器高 3.8 高台径 9.0 高台高 0.3	底部からの屈曲部は丸味をおびるが鋭く、体部は内彎して、口縁部は外反して開く。 屈曲部に接する高台はほぼ直立する。 底部外面に不定方向の平行タタキ痕(?)あり。外面に灰を被る。	A 内、紫灰色 外、灰色~暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
75	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 13.0 器高 3.5 高台径 7.8 高台高 0.4	底部が盛り上がり、強く屈曲して直線的に開く。体・口縁部へと続く。 高台は屈曲部のやや内側にありほぼ直立する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
76	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 13.0 器高 3.5 高台径 9.0 高台高 0.5	底部から体部への屈曲は明瞭で、立上がりは直線的。 屈曲部に近く付される高台は雑な造りで外方へ踏んばる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、灰色 外、灰色~暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
77	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 13.1 器高 3.5 高台径 8.8 高台高 0.4	体・口縁部は鋭く屈曲して立上がり、直線的に開く。 屈曲部のやや内側にある高台は外方へ踏んばる。 底部外面に不定方向の平行タタキ痕が残る。 全体に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、緑灰色~暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
78	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 13.3 器高 3.7 高台径 9.0 高台高 0.3	底部界の屈曲部は丸味をおび、体・口縁部は直線的に立上がる。 口縁端部はやや肥厚する。 高台は屈曲部のやや内側にあり、扁平となる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。外面に灰被り、焼け歪む。	A 内、緑灰色 外、緑灰色~黒色 B 細砂砂粒少含 C 良好 D 2/3
79	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 13.3 器高 4.1 高台径 8.6 高台高 0.4	底部界の屈曲部は丸味をおび、体・口縁部は直線的にのびる。 屈曲部のやや内側にある高台は扁平な四角形。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内・外、灰色~暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 5/6

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
80	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 13.8 器高 4.1 高台径 8.9 高台高 0.6	底部からの屈曲部は丸味をもち、体・口縁部は直線的に開く。 屈曲部のすぐ内側にある高台は高く、整っている。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色~黒色 B 細砂含、砂粒少含 C 良好 D 4/5
81	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 13.8 器高 4.2 高台径 9.6 高台高 0.5	底部界の屈曲は鋭く、体・口縁部が直線的に開く。 屈曲部のやや内側にある高台は変形する。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒少含 C 不良 D 3/4
82	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 13.9 器高 4.3 高台径 8.1 高台高 0.4	底部界の屈曲部はやや丸味をもち、体・口縁部は大きく外反する。 高台は屈曲部のやや内側にあり、小さく直立する。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被り、火膨れもある。	A 内、黒灰色 外、黒灰色~黒色 B 細砂含 C 良好 D 3/4
83	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 14.0 器高 3.5 高台径 9.0 高台高 0.4	体部は直線的にのび、口縁部は小さく外反する。 屈曲部は明瞭で、やや内側にある高台は外方へ踏んばる。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色~黒色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 4/5
84	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 14.0 器高 3.9 高台径 8.7 高台高 0.3	体部は直線的にのび、口縁部は小さく外反する。 屈曲部は明瞭で、やや内側にある高台は扁平。 焼成悪く、全体に磨滅する。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 4/5
85	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 14.2 器高 4.6 高台径 8.3 高台高 0.3	体・口縁部は直線的に開き、底部との屈曲部は明瞭。 やや内側に属する高台は小さくて貧弱である。 全体に磨滅。	A 内・外、灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 不良 D 2/3
86	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 14.8 器高 3.7 高台径 9.8 高台高 0.5	体・口縁部は内彎気味に立上がり、底部境の屈曲部は鋭い。 高台は屈曲部のやや内側にあり、外方へ踏んばる。 底部外面に平定方向の平行タタキ痕あり、灰を被る。	A 内・外、黄味灰色 B 精良 C 良好 D 1/3
87	皿	40~42 号窯 灰原	口径 13.5 器高 3.1 底径 9.8	体・口縁部は外彎しつづ開く。 底部外面に不定方向の細かい平行タタキ痕が残る。 口縁部内面~外面にかけて灰被り。	A 内、灰色 外、灰色~黒色 B 細砂・砂粒少含 C 良好 D 2/3
88	皿	40~42 号窯 灰原	口径 13.6 器高 3.1 底径 9.6	体・口縁部は外彎しつづ開く。 口縁端部を小さく内側上方へつまみ出す。 底部外面に同一方向の浅い溝が走る。板材圧痕か、平行タタキ痕。 外面は灰を被る。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
89	皿	40~42 号窯 灰原	口径 14.0 器高 2.1 底径 10.2	口縁部は弱く外彎して開き、端部は薄く終る。 底部外面は未調整。	A 内、青灰色~黒色 外、黒灰色~暗灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 3/4
90	皿	40~42 号窯 灰原	口径 17.0 器高 2.2 底径 14.7	口縁部が強く外反する。 底部外面に不定方向の粗い平行タタキ痕を残す。	A 内・外、暗灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/6
91	皿	40~42 号窯 灰原	口径 17.4 器高 2.2 底径 14.4	体・口縁部が直線的に開く。 全体を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内・外、暗灰色 B 細砂、砂粒多含 C 良好・堅緻 D 完存
92	皿	40~42 号窯 灰原	口径 17.8 器高 2.3 底径 14.2	口縁部が小さく外方へ反転させ、底部からの屈曲部がシャープである。 底部外面に不定方向の平行タタキ痕あり、周縁はナデ消す。	A 内・外、緑灰色 B 緻砂粒多含、砂粒少含 C 良好 D 1/3
93	皿	40~42 号窯 灰原	口径 18.0 器高 2.1 底径 14.2	体部の開きが浅く、口縁部が小さく外反する。 底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 1/4
94	皿	40~42 号窯 灰原	口径 18.0 器高 2.2 底径 15.0	体・口縁部は小さく外反するが、器肉が厚いために浅くみえる。 底部外面に不定方向の平行タタキ痕を残す。	A 内・外、灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 1/4
95	蓋杯 (身)	40~42 号窯 灰原	口径 13.0 器高 3.9 高台径 8.2 高台高 0.6	体部は直線的に開き、口縁部は小さく外反する。 底部界の屈曲部は丸味をもち、内側の高台は高く、形状が整う。 底部外面は未調整で、ヘラ記号あり。 外面は灰を被る。	A 内、黄灰色 外、黄灰色~黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/4
第73図 96	皿	40~42 号窯 灰原	口径 18.8 器高 1.7 底径 14.8	体・口縁部の開きが浅い。 底部外面に不定方向の粗い平行タタキ痕を残す。	A 内・外、緑灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/3



## B-4 地区

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
97	皿	40~42号窯 灰原	口径 18.9 器高 2.2 底径 15.2	口縁部が外反してやや膨らむ。 底部外面に不定方向の細かい平行タタキ痕が残る。	A 内、黒色 外、黒色～黒褐色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/6
98	皿	40~42号窯 灰原	口径 20.0 器高 2.4 底径 15.5	口縁部が外反して小さく膨らむ。 底部からの立上がりは丸く、漸移的である。 底部外面に不定方向の粗い平行タタキ痕を残す。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/4
99	高杯	40~42号窯 灰原	口径 19.6 器高 8.0 脚底径 10.6 脚部高 5.0	杯口縁端は急角度で内傾する面をもつ。 脚部は断面三角形に仕上げ、やや外方へ踏んばる。 杯部外面に全面に灰を被る。	A 内、黄味灰色～黒色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
100	高杯	40~42号窯 灰原	口径 21.2	口縁部はやや外傾気味に短く直立。水平な面をもつ。 外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内、青灰色～黒色 外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/2
101	高杯	40~42号窯 灰原	口径 25.0	口縁部は小さく内傾。内傾する面をもつ。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/3
102	高杯	40~42号窯 灰原	底径 10.1	脚部は大きく反転、端部を折り曲げ、細部はシャープに仕上がる。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 底部残存 1/4
103	高杯	40~42号窯 灰原	底径 10.9	脚部の反転は比較的緩く、脚部を折り曲げるが細部は丸い。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好
104	高杯	40~42号窯 灰原	底径 11.0	脚部は大きく反転、端部を折り曲げる。 内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 精良 C 良好 D 底部残存 1/4
105	高杯	40~42号窯 灰原		脚部は大きく反転、端部は下方へ引き出されて外傾する。	A 内・外、青灰色～黒灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/8
106	高杯	40~42号窯 灰原	底径 11.4	脚部は大きく反転、端部は鋭角的に折り曲げる。	A 内・外、灰色 B 精良 C 良好 D 底部残存 1/2
107	高杯	40~42号窯 灰原	底径 11.7	脚部の外反は弱く、端部は上方へ引き出される。	A 内・外、白灰色 B 微妙多含 C 普通 D 底部残存 1/2
108	短頸壺	40~42号窯 灰原	口径 12.8 器高 14.8 底径 10.0 高台高 0.5	体部は丸く、最大径部分がやや上位にある。 口縁部は強く外反し、端面は外傾する。高台は直立するが扁平。 体部下半は回転ヘラ削り、底部外面は横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、橙色 外、白黄灰色～灰味赤茶 B 砂粒多含、雲母少含 C 普通 D 1/5
109	鉢	40~42号窯 灰原		底部を横ナデ、以上を回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好
第74図 110	鉢	40~42号窯 灰原		体部は外面に平行タタキ痕、内面に同心円文当具痕跡を残す。 酸化炎焼成	A 内、白橙色 外、白橙色～灰色 B 精良 C 不良
111	把手	40~42号窯 灰原		須恵質である。	A 内・外、暗灰色 B 細、小砂少含 C 良好
第76図 112	蓋杯 (蓋)	43号窯 煙道部	つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	天井部外面は回転ヘラ削りを用いる。 酸化炎焼成。	A 内、緑灰色 外、茶灰色 B 小砂少含、粗砂少含 C 不良
113	蓋杯 (蓋)	43号窯 煙道部	口径 15.0 器高 2.7 つまみ径 3.0 つまみ高 0.8	口縁部は端部を下方につまみ出して成形、内傾する。 天井部が高い。 器表は磨滅著しい。	A 内・外、茶褐色 B 細砂少含 C 不良 D 1/3

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
114	蓋杯 (蓋)	43号窯煙道部	口径 15.0 器高 2.4 つまみ径 3.3 つまみ高 0.6	口縁部は端部に引き出して成形、内傾する。 天井部が高い。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 酸化炎焼成。	A 内・外、茶褐色 B 細砂多含、少砂 赤褐色粒少含 C 不良
115	蓋杯 (身)	43号窯窯内	口径 14.2 器高 4.6 底径 9.0 高台高 0.6	体・口縁部は直線的に立上がる。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は造りが丈夫。 酸化炎焼成。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～橙色 B 小砂少含 C 不良 D 2/3
116	甕	43号窯煙道部		外面は格子タタキ痕を、内面には同心円文を残す。 二次的火熱を受ける。	A 内・外、黄灰色 B 小砂少含 C 不良
第77図 117	蓋杯 (蓋)	43号窯灰原	口径 13.0 器高 2.0 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	口縁部は肥厚させて下端を引き出し、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被る。 酸化炎焼成。	A 内、茶褐色 外、暗灰色 B 細砂多含、赤褐色粒少含 C 良好 D 1/2
118	蓋杯 (蓋)	43号窯灰原	口径 13.2	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、灰味褐色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2 弱
119	蓋杯 (蓋)	43号窯灰原	口径 13.6	口縁部は折り曲げて成形し、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 酸化炎焼成	A 内、橙褐色 外、褐色 B 細砂少含 C 不良 D 1/3
120	蓋杯 (蓋)	43号窯灰原	口径 13.7 器高 1.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形し、外傾する。 外側面は凹面となる。 天井部外面は回転ヘラ削りで焼成。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 口縁部 1/6 欠損
121	蓋杯 (蓋)	43号窯灰原	口径 13.8 器高 2.5 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は下端を小さく引き出し、内傾する。 天井部はやや高く、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 酸化炎焼成。	A 内、黄褐色 外、黄褐色～橙褐色 B 砂粒、赤色粒、雲母少含 C 不良
122	蓋杯 (蓋)	43号窯灰原	口径 14.0 器高 2.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は下端を下方に引き出して成形、内傾する。 天井は扁平で、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内、暗灰色 外、黒灰色～暗赤褐色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
123	蓋杯 (蓋)	43号窯灰原	口径 14.0 器高 2.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	口縁部は下端を小さく引き出して成形、端部は丸い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 普通 D 1/2 弱
124	蓋杯 (蓋)	43号窯灰原	口径 14.9 器高 1.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は端部を下方へ引き出して成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 焼け歪む。	A 内・外、褐色味黒色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
125	蓋杯 (身)	43号窯灰原	口径 13.9 器高 3.1 底径 11.1 高台高 0.5	体・口縁部は外彎気味に短く立上る。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
126	蓋杯 (身)	43号窯灰原	口径 10.9 器高 1.2	口縁部は下端をつまみ出し、内傾する。細部はシャープ。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 つまみはない。 内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/3
127	蓋杯 (身)	43号窯灰原	口径 11.6 器高 1.5	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 つまみはない。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好
128	長頸壺	43号窯灰原	口径 11.6	口縁部はカーブを描いて外反、水平となる。 端部は丸い。 頸部中央に一条の沈線あり。	A 内・外、灰色～黒色 B 砂粒多含 C 良好
129	摺鉢	43号窯灰原		残存部は全面を横ナデ・ナデで仕上げる。 底部外面に刺突痕あり。	A 内・外、灰色 B 微砂少含 C 良好
第79図 130	蓋	44号窯窯内	口径 32.8	口縁部は下端を小さくつまみ出して成形、内傾する。 天井部は広く回転ヘラ削りを行う。	A 内、灰色 外、灰色～黒 B 小砂少含 C 良好 D 1/2

B-4 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
131	蓋杯 (蓋)	44号窯 窯内	口径 14.2 器高 1.9 つまみ径 3.0 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、端部は鋭い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含、黒色粒子含 C やや軟質 D 口縁部 1/2 欠損
132	蓋杯 (蓋)	44号窯 窯内	口径 12.4 器高 2.3	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は未調整。 つまみはない。 焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～茶褐色 B 小、粗砂少含 C 普通
133	蓋杯 (蓋)	44号窯 煙道部		口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 中心部から外方へ向う一条のヘラ記号あり。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒 B 細砂多含、小砂含 C 良好
134	蓋杯 (身)	44号窯 煙道部	底径 8.0 高台高 0.4	高台は底・体部屈曲部のやや内側にあり、断面は四角形だが扁平。 底部外面は回転ヘラ削り調整。 底部外面にヘラ記号あり。	A 内・外、暗青灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
135	甕	44号窯 窯内	口径 35.0	口縁部は外傾する端部をもち、端部を外方へつまみ出す。 内面は同心円文が残るようである。 器表の磨滅著しいが、体部外面に平行タキ痕を残す。 酸化炎焼成。	A 内・外、赤味紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D 口縁部 1/8 残存
136	甕	44号窯 煙道部	口径 44.0	口縁部は二重口縁ようになる。 体部外面に平行タキ痕、内面に同心円文当具痕を残す。	A 内・外、明灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
第80図 137	蓋杯 (蓋)	45号窯 埋土中	口径 11.1 器高 1.0	口縁部は小さく折り曲げて成形、やや外傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 つまみはない。 内外面に灰を被り、重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、黒～暗灰色 B 細、小、粗砂多含 C 良好 D 5/6
138	蓋杯 (蓋)	45号窯 埋土中	口径 15.9 器高 2.9 つまみ径 3.3 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸味をもち、高い。外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。 酸化炎焼成。	A 内・外、茶褐色 B 細、小砂少含 C 不良
139	蓋杯 (身)	45号窯 埋土中	口径 15.0 器高 4.5 底径 12.1	体部は短く、直線的に外上方へのびる。 高台は外底端やや内側に貼付する。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 小砂多含 C 良好
140	蓋杯 (身)	45号窯 埋土中	口径 13.6 器高 4.9 底径 10.1	体・口縁部は直線的に外上方へのびる。 底部からの屈曲は丸く、すぐ内側に外方へ踏んばる肉厚の高台がつく。 底部外面はナデで仕上げる。 酸化炎焼成。	A 内、淡橙色 外、淡橙色～黒色 B 砂粒、雲母少含 C 不良
141	蓋杯 (身)	45号窯 埋土中	口径 13.8 器高 5.1 底径 10.0 高台高 0.6	体・口縁部は直線的に外上方へのびる。 底部との屈曲部は丸く、そこに外方へ踏んばる肉厚の高台がつく。 酸化炎焼成。	A 内・外、茶褐色 B 細、小砂少含 C 不良 D 1/5
第82図 142	蓋杯 (蓋)	46号窯 前庭部	口径 14.2 器高 1.1 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、小さく外傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整で、ヘラ記号あり。 焼け歪む。	A 内・外、暗緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/5
143	蓋杯 (蓋)	46号窯 前庭部	口径 14.2	口縁部は下端を垂下して成形、小さく外傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2 弱
144	蓋杯 (蓋)	46号窯 前庭部	口径 14.4 器高 2.6 つまみ径 2.9 つまみ高 0.9	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで調整。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 5/6
145	蓋杯 (蓋)	46号窯 前庭部	口径 14.6 器高 2.6 つまみ径 2.8 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、直立して外側面は凹む。 天井部外面は回転ヘラ削り調整で、ヘラ記号あり。	A 内、黄味灰色 外、褐色 B 細砂少含 C 良好 D 1/5
146	蓋杯 (蓋)	46号窯 前庭部	口径 14.8 器高 2.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、端部は丸い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、紫灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
147	蓋杯 (蓋)	46号窯 前庭部	口径 15.0 器高 2.5 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は変形を加えず終り、端部は丸い。 天井部外面は回転ヘラ削りのよう。つまみは扁平。 酸化炎焼成。	A 内・外、黄橙色 B 細砂多含、赤褐色粒、金雲母含 C 不良 D 1/2

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
148	蓋杯(身)	46号窯前庭部	口径 12.4 器高 4.5 底径 10.1 高台高 0.5	体・口縁部は小さく外彎しつつ立上る。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は小さく外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
149	蓋杯(身)	46号窯前庭部	口径 12.9 器高 4.4 底径 8.9 高台高 0.5	体・口縁部は外反して立上る。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は小さく外方へ踏んばる。 底部外面は未調整で、ヘラ記号あり。 外面は灰を被る。	A 内、紫灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
150	蓋杯(身)	46号窯前庭部	口径 13.0 器高 4.4 底径 9.6 高台高 0.7	体部は内彎気味に立上り、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は高く踏んばる。 器壁が厚い。 酸化炎焼成。	A 内・外、赤褐色 B 細砂多含、小砂、赤色粒、金雲母含 C 不良 D 1/2
151	蓋杯(身)	46号窯前庭部	口径 13.1 器高 4.8 底径 8.9 高台高 0.5	体・口縁部は外彎気味に立上る。 底部との屈曲は明瞭で、肉厚の高台はほぼ直立する。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
152	蓋杯(蓋)	46号窯前庭部	口径 13.7 器高 2.9 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は外傾して直行する。 天井部との境は丸く、外面は回転ヘラ削りを行う。	A 内・外、青灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/2
153	鉢	46号窯窯内		体・口縁部は直線的に立上り、口端部に小さく内傾する面をもつ。 残存部全体を横ナデで仕上げ上げる。	
154	甕	46号窯窯内	口径 36.0	体部の張りが弱く、小さく内傾する口縁部は水平な端面をもつ。 体部外面は格子タタキで仕上げ、内面に同心円文を残す。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅固
第82図 155	蓋杯(蓋)	46号窯灰原	口径 12.9 器高 1.9 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は下端を小さく引き出して成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げ上げる。	A 内、黒灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
156	蓋杯(蓋)	46号窯灰原	口径 13.1 器高 2.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 焼け膨れあり。	A 内・外、青灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/3
157	蓋杯(蓋)	46号窯灰原	口径 13.4 器高 2.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、端部は丸い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整でヘラ記号を刻む。 全体に造りがあまい。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
158	蓋杯(蓋)	46号窯灰原	口径 13.5 器高 2.2 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げ上げる。	A 内、暗褐色 外、黄味灰色～暗 B 砂粒少含 C 良好 D 3/4
159	蓋杯(蓋)	46号窯灰原	口径 13.7 器高 1.9 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は下方に引き出して成形、ほぼ直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 焼け歪む。	A 内・外、灰色～黒色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/2
160	蓋杯(蓋)	46号窯灰原	口径 13.7	口縁部は折り曲げて成形、細部の造りは鋭い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
161	蓋杯(蓋)	46号窯灰原	口径 13.9 器高 1.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、造りは鋭い。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げ上げる。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪み著しい。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 口縁部一部欠損
162	蓋杯(蓋)	46号窯灰原	口径 14.2 器高 1.6 つまみ径 1.7 つまみ高 0.6	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げ上げる。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
163	蓋杯(蓋)	46号窯灰原	口径 14.3 器高 2.9 つまみ径 3.1 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、外側面が凹んで小さく反り返る。 天井部は丸く、外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被る。	A 内、青灰色～紫灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 普通
164	蓋杯(蓋)	46号窯灰原	口径 14.4 器高 2.0 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、直立し、細部の造りは鋭い。 天井部外面は回転ヘラ削りで調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、青灰色～暗灰色 外、暗灰色～灰色 B 細、小、粗砂少含 C 良好

## B-4 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
165	蓋杯 (蓋)	46号窯 灰原	口径 14.4 器高 1.8 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は端部を肥厚させて断面三角形とする。 天井部外面に灰被り著しく調整不明、同所に重ね焼きの痕あり。	A 内・外、黄味暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
166	蓋杯 (蓋)	46号窯 灰原	口径 14.5 器高 1.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 焼け歪み著しく、天井部外面に重ね焼きの痕あり。	A 内、黄味暗灰色 外、暗灰～黒色 B 細砂多含 C 良好
167	蓋杯 (蓋)	46号窯 灰原	口径 15.0	口縁部は折り曲げて成形、外側面は匙面となって外彎する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整で、ヘラ記号あり。	A 内、暗灰色 外、暗灰～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
168	蓋杯 (蓋)	46号窯 灰原	口径 15.5 器高 1.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、肥厚が著しい。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被り、土器片の熔着あり。 焼け歪む。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
169	蓋杯 (蓋)	46号窯 灰原	口径 18.5 器高 3.1 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は下端を引き出して成形、内傾するが、細部の造りはあまい。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 酸化炎焼成。	A 内・外、黄橙色 B 細砂、赤褐色粒少含 C 普通 D 3/4
170	蓋杯 (蓋)	46号窯 灰原	つまみ径 4.2 つまみ高 0.8	天井部外面は回転ヘラ削り調整で灰を被る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 細砂少含 C 良好
171	蓋杯 (身)	46号窯 灰原	口径 12.5 器高 4.2 底径 8.5 高台高 0.6	体・口縁部は直線的に立上る。 底部との屈曲は丸く、やや内側の高台は肉厚で外方へ踏んばる。 底部外面はナデ調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒灰色 B 精良 C 良好 D 1/2
172	蓋杯 (身)	46号窯 灰原	口径 13.0 器高 4.4 底径 9.4 高台高 0.5	口縁部は直線的に立上り、口縁部は外反して丸く終る。 底部との屈曲部は少し丸味をもち、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内、赤橙色 外、橙色 B 細、粗砂少含 C 普通 D 2/3
173	蓋杯 (身)	46号窯 灰原	口径 14.0 器高 4.8 底径 4.6 高台高 0.5	体・口縁部は直線的に立上る。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 焼け歪む。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含、粗砂少含 C 良好 D 1/2
174	蓋杯 (身)	46号窯 灰原	口径 14.2 器高 3.9 底径 10.0 高台高 0.6	体部は直線的に立上り、口縁部は大きく外反する。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内、灰色 外、黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/3
175	蓋杯 (身)	46号窯 灰原	底径 8.0 高台高 0.5	高台は断面四角形となり、小さく外方へ踏んばる。 底部外面は未調整で、ヘラ記号あり。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～黒色 B 小砂少含 C 良好 D 1/2
176	蓋杯 (身)	46号窯 灰原	口径 10.6 器高 3.1 底径 7.3	底部は厚く、平底となり立上りが内彎する。 底部外面は未調整。 無高台。	A 内・外、こげ茶色 B 赤褐色粒、雲母多含 C 不良 D 4/5
177	蓋杯 (身)	46号窯 灰原	口径 10.9 器高 2.9 底径 7.4	底部は厚くレンズ底となり、立上りは小さく内彎する。 底部外面は未調整。 無高台。 酸化炎焼成。	A 内・外、橙褐色～黒色 B 雲母多含、砂粒少含 C 普通 D 3/4
178	蓋杯 (身)	46号窯 灰原	口径 17.9 器高 6.9 底径 10.6	体・口縁部は底部から丸く立上り、ほぼ直行する。 口縁部は内傾する面をもつ。 底部外面に回転ヘラ削り調整。 無高台。	A 内、黄味暗灰色 外、黄味暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
179	皿	46号窯 灰原	口径 16.4 器高 2.7 底径 14.0	体部は底部とに明瞭な稜をもって立上り、直行する。 口縁部は外傾する面をもつ。 底部外面は回転ヘラ削りで仕上げ、火ダスキの痕がある。 底部外面にヘラ記号あり。	A 内、茶色～黒色 外、灰色～黒灰色 B 砂粒多含 C 普通
180	蓋	46号窯 灰原	口径 9.0 器高 2.4 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は小さく外反する。 天井部は平らで、外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好 D 3/4
181	蓋	46号窯 灰原	口径 9.0 器高 2.5 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は小さく外反する。 天井部は平らで、外面を回転ヘラ削り調整する。 内外に重ね焼きの痕を残し、火膨れする。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒～茶色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
182	蓋	46号窯 灰原	口径 10.6 器高 2.6 つまみ径 2.0 つまみ高 1.0	口縁部は折り曲げて成形、直立し細部は鋭い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 擬宝珠形つまみを付す。 内外面に重ね焼き痕あり。	A 内・外、灰色～緑色 B 砂粒、角閃石多含 C 良好 D 口縁部一部欠損
第84図 183	蓋杯 (蓋)	43～46 号窯 灰原	口径 13.0 器高 1.9 つまみ径 2.8 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、外面天井部境がくびれる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に灰を被る。	A 内・外、青灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/3
184	蓋杯 (蓋)	43～46 号窯 灰原	口径 13.2 器高 2.0 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 1/5
185	蓋杯 (蓋)	43～46 号窯 灰原	口径 13.5 器高 2.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、細部の造りは鋭い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～黒 B 小砂少含 C 良好 D 1/3
186	蓋杯 (蓋)	43～46 号窯 灰原	口径 13.6 器高 2.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、内傾し、細部の造りは鋭い。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げ、ヘラ記号あり。	A 内・外、暗緑灰色～黒 B 小砂少含 C 良好 D 1/2
187	蓋杯 (蓋)	43～46 号窯 灰原	口径 13.6 器高 1.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、外傾する。 天井部は扁平で、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 ヘラ記号あり。	A 内・外、暗灰色 B 精良 C 良好 D 1/4
188	蓋杯 (蓋)	43～46 号窯 灰原	口径 13.8 器高 3.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は高く、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、紫灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
189	蓋杯 (蓋)	43～46 号窯 灰原	口径 13.9	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部は低く、外面を回転ヘラ削りで調整、ヘラ記号あり。	A 内、黒灰色～黒褐色 外、黒色～褐色 B 細砂少含 C 良好 D 1/5
190	蓋杯 (蓋)	43～46 号窯 灰原	口径 14.5 器高 2.0 つまみ径 2.9 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 つまみの頂部にヘラ記号あり。	A 内、灰色 外、灰色～黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/3
191	蓋杯 (蓋)	43～46 号窯 灰原	口径 15.2	口縁部は下方に小さく引き出して成形、小さく内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、黒灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
192	蓋杯 (蓋)	43～46 号窯 灰原	口径 19.1 器高 2.6 つまみ径 3.7 つまみ高 0.7	口縁部は下端を小さく引き出して成形、直立し、端部は丸い。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 酸化炎焼成。	A 内・外、橙褐色 B 細砂多含、小砂少含 C 不良 D 3/4
193	蓋杯 (身)	43～46 号窯 灰原	口径 12.2 器高 4.5 底径 8.6 高台高 0.6	体部は直行、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は外方に踏んばる。 底部外面はヘラ切り未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
194	蓋杯 (身)	43～46 号窯 灰原	口径 12.6 器高 4.7 底径 9.0 高台高 0.5	体・口縁部はほぼ直行。 底部との屈曲部は丸味をおび、やや内側の高台は直立する。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好 D 3/4
195	蓋杯 (身)	43～46 号窯 灰原	口径 13.0 器高 3.9 底径 8.2 高台高 0.6	体部は直行、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台はやや外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色 B 細、小、粗砂少含 C 良好 D 1/4
196	蓋杯 (身)	43～46 号窯 灰原	口径 13.0 器高 4.5 底径 9.6 高台高 0.5	体・口縁部はほぼ直行する。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は直立する。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 微砂、粗砂少含 C 良好 D 2/3
197	蓋杯 (身)	43～46 号窯 灰原	底径 9.0 高台高 0.5	底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は直立する。 底部外面はナデ調整で、ヘラ記号あり。	A 内、白灰色 外、灰色～赤茶灰色 B 細砂少含 C 良好
198	皿	43～46 号窯 灰原	口径 18.8 器高 2.4 底径 15.4	体部は直行し、口縁部は外折する。 底部外面は未調整。	A 内・外、明灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4

B-4 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
199	蓋	43~46号窯灰原	口径 9.9	口縁部は外傾、端部は外方へ小さくつまむ。天井部は平らで、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細、小砂少含 C 良好 D 1/2
200	蓋	43~46号窯灰原	口径 9.9 器高 2.6 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は外傾し、端部は丸い。天井部外面は回転ヘラ削り調整。外面に重ね焼き痕あり。	A 内、青灰色 外、黒変 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
201	蓋	43~46号窯灰原	口径 13.0	口縁部は外傾し、端部を小さく外方へつまむ。天井部外面は回転ヘラ削り調整。外面に灰を被り、内面に火ダスキ痕あり。	A 内、黒灰色 外、黒灰色 色~暗緑灰色~褐色 B 細、小砂少含 C 良好 D 1/2
202	蓋	43~46号窯灰原	口径 14.4 器高 3.7 つまみ径 2.8 つまみ高 1.0	口縁部はほぼ直立し、端部が外方へつまみ出される。天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
203	短頸壺	43~46号窯灰原	口径 7.3 器高 3.4 底径 6.4 高台高 0.4	肩のはる扁球形の体部に短く直立する口縁部がつく。口縁部は丸くおさめ、高台は外方へ踏んばる。体部下半を回転ヘラ削り、他を横ナデ・ナデで仕上げる。	A 内、青灰色 外、青灰色~黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
204	長頸壺	43~46号窯灰原	口径 12.2 器高 22.9 底径 12.2 胴径 25.4	口縁部は直行し、端部に変化を加える。体部は算盤玉形となり、最大径部上方と下半に回転ヘラ削りを用いる。	A 内、灰色~暗灰色 暗灰色~赤味茶褐色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
第85図 205	盤	43~46号窯灰原	口径 30.0 器高 7.0 底径 22.0 高台高 0.8	体・口縁部は直口し、肉厚である。底部との屈曲部は丸味をもち、やや内側の高台は直立する。底部外面は未調整か。酸化炎焼成。	A 内、暗灰色~褐色 外、茶色~褐色 B 細、小砂多含、粗砂少含 C 不良 D 2/3
206	盤	43~46号窯灰原	口径 41.0 器高 5.8 底径 18.1 高台高 1.0	体部は浅く開き、口縁部を小さくつまみ出す。高台は外方へ踏んばる。底部外面は回転ヘラ削り調整。把手は3個か。	A 内・外、暗灰色~黒 B 小砂少含 C 良好 D 2/3
207	甕	43~46号窯灰原	口径 49.8	口縁部は二重口縁となる。体部にタタキ、当具痕残る。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 口縁部 1/6
208	甕	43~46号窯灰原	口径 43.0	体部に膨みが少なく、口縁部は急角度で反転する。体部外面に格子タタキ、内面に同心円文当具痕を残す。	A 内、灰色~黒 外、黒 B 細、小砂少含 C 良好 D 1/7
209	甕	43~46号窯灰原	口径 36.4	口縁部は二重口縁を思わせる。体部外面に格子タタキ痕、内面に同心円文当具痕を残す。	A 内・外、暗灰色 B 細、小砂少含 C 良好 D 1/6
第87図 210	蓋杯(蓋)	44号窯南側土壇	口径 14.8 器高 1.7 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、直立する。端部は丸い。天井部は回転ヘラ削りで仕上げ、2条の凹線を刻む。	A 内、暗灰色 外、灰色 B 細砂多含、黒色粒含 C 固緻 D ほぼ完存
211	短頸壺(身)	44号窯南側土壇	口径 13.9 器高 16.8 高台径 16.3 高台高 0.4	最大径部分は上位にあり、丸い。口縁部は小さく外傾し、端部は丸い。体部下半は回転ヘラ削り、底部外面はヘラ切り未調整。把手は片方欠損。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 堅緻 D 完存
212	長頸壺	44号窯南側土壇	口径 6.1 器高 24.7 口頸高 10.7 高台径 10.0 高台高 0.4	口頸部は開きが小さく、口端部は外折して平坦面となる。体部は張りが弱く、底径が大きい。2条一對の沈線を刻む。体部下半はヘラ削りのようである。酸化炎焼成。	A 内・外、橙褐色 B 細砂含、赤色粒含 C 不良 D 完存
第91図 213	蓋杯(蓋)	47号窯窯内	口径 14.7 器高 2.7 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、端部は丸い。天井部外面は回転ヘラ削り調整。内外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、青灰色~黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
214	蓋杯(蓋)	48号窯焚口左側	口径 21.1 器高 2.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は小さく折り曲げて成形、直立する。天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内、白灰色 外、黄灰色~黒灰色 B 砂粒少含、角閃石少含 C 不良 D ほぼ完存
215	蓋杯(蓋)	48号窯焚口左側	口径 22.4 器高 2.9 つまみ径 2.6 つまみ高 0.9	口縁部は下端をつまみ出し、肥厚させて内傾する。天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色~黒灰色 B 砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出地	土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
216	蓋杯(身)	48号窯	焚口左側	口径 14.2 器高 4.2 高台径 10.2 高台高 0.4	体・口縁部は直線的に立上る。 底部との屈曲は鋭く、すぐ内側の高台は弱々しい。 酸化炎焼成。	A 内・外、黄味褐色 B 砂粒多含、赤褐色粒、雲母少含 C 不良 D 6/7
217	蓋杯(身)	48号窯	焚口左側	口径 17.2 器高 5.5 高台径 11.3 高台高 0.4	体・口縁部は直線的に立上り、底部との屈曲部は丸味をもつ。 すぐ内側の高台は低く直立する。 底部外面はナデで仕上げる。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
218	皿	48号窯	焚口左側	口径 22.0 器高 2.5 底径 18.7	体・口縁部は外反して開く。 底部外面は回転ヘラ削り調整。 酸化炎焼成。	A 内、白黄灰色 外、黄褐色 B 砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存
219	高杯	48号窯	窯内	口径 19.8	口縁部は内折し、端部は内傾する面となる。 杯部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、白色～白灰色 外、白灰色 B 細砂多含 C 不良 D 杯部残13
220	高杯	48号窯	窯内	口径 21.0	杯端部は口縁部を丸くおさめる。 杯部外面は横ナデで仕上げる。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D 杯部残1/2
221	高杯	48号窯	焚口左側	脚底径 15.8	脚端部は折り曲げて成形、造りは鋭い。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 脚底部残2/3
第92図 222	蓋杯(蓋)	47・48号窯	表土直下	口径 14.0 器高 3.1 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸く、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 重ね焼き痕あり。	A 内・外、黄灰色～黄褐色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
223	蓋杯(蓋)	47・48号窯	表土直下	口径 16.2 器高 3.2 つまみ径 2.3 つまみ高 1.0	口縁部は端部を引き出して成形、肥厚する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
224	蓋杯(蓋)	47・48号窯	表土直下	口径 20.5 器高 4.5 つまみ径 2.5 つまみ高 1.0	口縁部は下端を引き出して成形、肥厚し、内傾する。 天井部は丸く、外面は横ナデ調整。 酸化炎焼成。	A 内、白黄灰色 外、白黄灰色～黒色 B 砂粒、金雲母多含 C 不良 D ほぼ完存
225	蓋杯(身)	47・48号窯	表土直下	口径 13.0 器高 4.3 高台径 8.6 高台高 0.6	体・口縁部は直線的に立上る。 底部との屈曲は丸く、やや内側の高台は小さく外方へ踏んばる。 底部外面は横ナデ調整し、ヘラ記号が残る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
226	蓋杯(身)	47・48号窯	表土直下	口径 15.0 器高 4.4 高台径 9.7 高台高 0.4	体部は直行し、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、離れて位置する高台は低い。 底部外面は横ナデで仕上げる。	A 内・外、青灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
227	高杯	47・48号窯	表土直下	口径 16.4 器高 7.8 底径 12.0	口縁部は小さく外傾し、端部は丸味をおびる。 全面を横ナデ・ナデで仕上げる。 酸化炎焼成。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 堅緻 D 1/3
228	杯	47・48号窯	表土直下	口径 20.7	体・口縁部は直線的に立上り、底部は上げ底になる。 体部中位～底部外面を回転ヘラ削りで仕上げ、屈曲部は鋭い。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒、角閃石、雲母少含 C 普通 D 杯部ほぼ完存
229	甕	47・48号窯	表土直下	口径 22.0 頸部径 18.0	口縁部は断面長方形に成形。 体部外面に格子タキ痕、内面に同心円文当具痕を残す。 内外面に灰を被る。	A 内・外、黒灰色～黒色 B 微砂少含 C 良好 D 口頸部残1/5
第94図 230	蓋杯(蓋)	49号窯	前庭部土壇	口径 15.0 器高 3.6 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部外面は横ナデ調整。 つまみは円筒形。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
231	蓋杯(身)	49号窯	灰原	口径 11.7 器高 3.6 高台径 7.8 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側の高台は外方に踏んばる。 底部外面は横ナデ調整。	A 内・外、黄灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
232	蓋杯(身)	49号窯	灰原	口径 14.2 器高 4.1 高台径 8.8 高台高 0.3	体部は直線的にのび、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、やや内側に低い高台がつく。 底部外面は横ナデ調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存



## I 地区

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
233	皿	49号窯 灰原	口径 20.2 器高 2.2 底径 17.0	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭。 内面に火ダスキが走り、底部外面に平行タタキ痕を残す。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/3
234	蓋	49号窯 灰原	口径 14.9 器高 3.7 つまみ径 2.6 つまみ高 1.2	口縁部はほぼ垂直に立上り、端部を外方へ引き出す。 天井部は平らで、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3

## I 地区 (長者原窯跡群)

第99図 1	皿	53号窯 窯内	口径 20.0 器高 2.9 底径 15.9	底部からの屈曲部は明瞭で、体・口縁部は若干外反しつつ開く。 底部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 内面に火ダスキが走る。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含、粗砂少含 C 良好 D 完存
2	蓋杯 (蓋)	53号窯 前庭部 土壇	口径 13.8 器高 2.1 つまみ径 2.9 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立し、外側面が凹む。 天井部との境は薄くなり、くびれる。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、茶褐色～暗 灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 完存
3	蓋杯 (蓋)	53号窯 前庭部	口径 19.5 器高 3.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形し、内傾する。 天井部が高く、外面はヘラ切りのまま未調整である。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 4/5
4	皿	53号窯 前庭部 土壇	口径 19.4 器高 2.7	口縁部は小さく外反する。 底部・体部間の屈曲部はヘラ削りを行って面取りを施す。 底部外面はヘラ切り未調整。 皿3枚が熔着。	A 内・外、暗灰色 B 微砂多含 C 良好 D 1/2
5	蓋杯 (蓋)	54号窯 窯内	口径 15.0 器高 1.9 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 2/3
6	蓋杯 (蓋)	54号窯 前庭部 土壇	口径 14.3 器高 1.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は、下方へ引き出して断面三角形となり、内傾する。 天井部外面はヘラ切り未調整。 焼成後の穿孔あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/4
7	蓋杯 (蓋)	54号窯 前庭部	口径 13.5 器高 1.6 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は大きく変形せず、端部を小さくつまみ出す。 天井部外面をヘラ削り調整。 全体に灰を被る。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 礫少含 C 良好 D 完存
8	蓋杯 (蓋)	54号窯 前庭部 土壇	口径 13.8 器高 1.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は小さく折り曲げ、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり、全体に焼け歪む。	A 内・外、紫灰色～灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 完存
9	蓋杯 (蓋)	54号窯 前庭部 土壇	口径 15.0 器高 1.6 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は小さく折り曲げ、内傾する。 天井部外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 内外面に灰を被り、焼け歪みあり。	A 内・外、白灰色～灰色 B 砂粒、礫含 C 良好 D 完存
10	蓋杯 (蓋)	54号窯 前庭部 土壇	口径 21.1 器高 2.2 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、丸味をおびる。 細部の仕上げは丸い。 天井部外面をヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 微砂多含 C 普通 D 完存
11	蓋杯 (蓋)	55号窯 焚口	口径 15.8 器高 2.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部を折り曲げて成形するが、細部が丸い。 天井部外面はヘラ切り未調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 4/5
12	蓋杯 (蓋)	55号窯 前庭部 土壇	口径 11.9 器高 1.0	口縁部は折り曲げて成形し、直立する。 天井部外面は、未調整で終る。 内外面に灰を被り、焼け歪む。 つまみをもたない。	A 内・外、茶灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 2/3
13	蓋杯 (蓋)	55号窯 前庭部 土壇	口径 11.4 器高 1.9	口縁部は折り曲げて成形、内傾する。 天井部は丸味をもち、外面はヘラ切り未調整で終る。 つまみをもたない。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 3/4
14	蓋杯 (蓋)	55号窯 前庭部 土壇	口径 14.8 器高 1.4	口縁部は折り曲げて成形、小さく内傾する。 天井部外面はヘラ切り未調整。 焼成後の穿孔があり、全体に灰を被る。 つまみの有無は不明。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/4

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
15	蓋杯 (蓋)	55号窯 前庭部 土壇	口径 14.5 器高 1.8 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形し、内傾する。 天井部はやや高く、外面はヘラ切り未調整で終る。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 4/5
16	蓋杯 (蓋)	55号窯 前庭部 土壇	口径 15.1 器高 2.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は断面三角形となり、細部は鋭い。 天井部外面はヘラ切り未調整で終り、ヘラ記号がある。 内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
17	蓋杯 (蓋)	55号窯 前庭部 土壇	口径 19.4 器高 3.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	口縁部は折り返して成形、外側面は外彎しつつ内傾する。 天井部との境は一旦折れる。 天井部は丸味をもち、外面はヘラ切り未調整。 全体に灰を被る。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
18	蓋杯 (蓋)	56号窯 床面	口径 16.4 器高 2.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形し、直立。外側面は小さく凹む。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 4/5
19	蓋杯 (蓋)	56号窯 床面	口径 20.5 器高 3.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形し、強く外彎しつつ外傾する。 体部外面は、強く横ナデされて凹む。 天井部は高く、外面は回転ヘラ削りで調整。 口縁部内面から外面にかけて灰を被る。	A 内、白灰色～暗灰色 外、暗灰色 B 微少多含、礫少含 C 良好 D 2/3
20	皿	56号窯 床面	口径 21.8 器高 2.3	口縁部が強く外反する。 底部から体部へかけては丸く移行する。 底部外面は未調整。	A 内、黄灰色～暗緑灰色 外、緑灰色～暗緑灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
21	蓋杯 (蓋)	56号窯 前庭部 土壇	口径 13.1 器高 2.5 つまみ径 2.3 つまみ高 1.0	口縁部は折り曲げて成形し、直立する。 焼成悪く、器表磨滅する。 焼成前に穿孔を行う。	A 内、白黄色 外、白黄色～暗灰色 B 精良 C 不良 D 1/8
22	蓋杯 (蓋)	56号窯 灰原	口径 14.7 器高 1.6 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形し、外側面は匙面状に凹ませて直立。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 4/5
23	蓋杯 (蓋)	56号窯 灰原	口径 14.7 器高 2.5 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は小さく折り曲げて、丸く成形する。 天井部外面はヘラ切り未調整。 内外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色～茶褐色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
24	蓋杯 (身)	56号窯 灰原	口径 14.5 器高 4.1 高台径 10.0 高台高 0.3	体・口縁部は小さく外彎しつつ立上る。 底部界の屈曲は明瞭で、やや内側にある高台は弱々しい。 底部外面は未調整。	A 内・外、淡黄茶色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/3
25	蓋杯 (身)	56号窯 前庭部 土壇	口径 14.8 器高 4.2 高台径 9.7 高台高 0.7	体部は内彎気味に立上り、口縁部は外折する。 底部界の屈曲部は丸く、やや内側の高台は断面方形で高い。 底部外面は未調整。 外面に灰を被り、焼け歪みが大きい。	A 内、暗黄灰色 外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 5/6
第105図 26	蓋杯 (蓋)	57号窯 焚口 床面	口径 14.2 器高 2.8 つまみ径 2.5 つまみ高 1.0	天井部と口縁部間に明瞭な境をもたない。 口縁部は下端を小さく引き出し、外側面をシャープに仕上げる。 天井部外面はヘラ切未調整。 口縁内面～外面にかけて灰を被る。	A 内・外、茶灰色～灰色 ～黒色 B 微砂少含 C 良好 D 完存
27	蓋杯 (蓋)	57号窯 焚口 床面	口径 18.3 器高 2.6 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は下端を引き出して成形し、ほぼ直立する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、白黄灰色 ～暗灰色～黒色 B 微砂多含 C 良好 D 完存
28	蓋杯 (蓋)	57号窯 焚口 床面	口径 22.0 器高 3.0 つまみ径 3.1 つまみ高 1.0	口縁部は下端を引き出して、断面三角形となり直立する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 生焼け。	A 内・外、黄味白色 B 砂粒少含 C 不良 D 完存
29	蓋杯 (身)	57号窯 焚口 床面	口径 19.3 器高 7.0 高台径 12.4 高台高 0.4	体・口縁部は内彎して高く立上る。 高台は底部から体部への屈曲部にあり、外方へ踏んばる。 酸化炎焼成で、焼きがあまり。	A 内、白橙色 外、橙色～暗橙色 B 砂粒少含 C 不良 D 完存
30	蓋杯 (蓋)	57号窯 灰原	口径 14.4 器高 3.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.9	口縁部は、下端を引き出して断面三角形となるが肥厚せず、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 天井部は丸味おびる。	A 内・外、茶灰色～暗紫灰色 B 砂粒少含、礫 C 普通 D 完存
31	蓋杯 (身)	57号窯 床面	高台径 10.0 高台高 0.4	焼成前に底部に穿孔を行う。 高台は外方へ踏んばる。 器肉薄く、生焼け。	A 内・外、白黄色 B 精良 C 不良

## I 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
32	短頸壺	57号窯 灰原	口径 14.2 頸部径 13.3	体部は肩がはり、口縁部は大きく屈曲反転する。 口縁部端面はやや内傾する。 肩部に重ね焼きの痕跡あり。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/3
33	蓋杯 (蓋)	57号窯 灰原	口径 14.8 器高 2.1	口縁部は小さく折り曲げて成形し、端部は丸味をもって終る。 天井部外面はヘラ切り未調整。 穿孔は焼成後に行う。	A 内・外、白黄色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
34	土師器 甕	57号窯 灰原	口径 16.2	口縁部は肥厚して反転。 頸部内面は鋭い稜をもつが、外面は緩くカーブする。 外面を粗いハケ目、内面はヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、茶褐色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 2/5
35	土師器 甕	57号窯 灰原	底径 7.5	34と同一個体。 下膨れし、底部は平底に近い。	A 内、茶褐色 外、茶褐色 ～黄土色～黒色～桃褐色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好
第108図 36	皿	59号窯 窯内	口径 12.9 器高 4.4 底径 9.0	口縁部はほぼ直行して開く。 底部外面は丸く、未調整である。 あるいは蓋かも知れない。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒多含、黒粒多含 C 良好 D 完存
37	蓋杯 (蓋)	59号窯 前庭部 土壇	口径 13.4 器高 1.9 つまみ径 2.4 つまみ高 0.2	口縁部は折り曲げ、小さく外彎して直立する。 外面に天井部との明瞭な境はない。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～緑灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 完存
38	蓋杯 (蓋)	59号窯 前庭部 土壇	口径 15.0 器高 2.7 つまみ径 2.9 つまみ高 0.5	口縁部は面取りを施すのみで終る。 天井部外面は中央付近が未調整、外縁をヘラ削りで調整する。	A 内・外、黄灰色～黒色 B 砂粒少含 C 不良 D 7/8
39	蓋杯 (蓋)	59号窯 窯上 覆土	口径 13.0 器高 1.4 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	口縁部はほぼ直角に折り曲げて成形し、端部は丸味をもつ。 天井部外面はヘラ切り未調整、但し外縁は大きな匙面となる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、茶色～黒灰色 外、茶色 B 砂粒少含 C 普通 D 完存
40	蓋杯 (蓋)	59号窯 窯上 覆土	口径 14.8 器高 2.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形し、外側面は内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D 完存
41	蓋杯 (蓋)	59号窯 窯上 覆土	口径 16.3 器高 2.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形し、外側面は匙面状に凹み外彎する。 天井部との外面の境はあまい。 天井部外面はヘラ切り未調整。	A 内・外、緑灰色～暗茶褐色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
42	蓋杯 (身)	59号窯 前庭部	口径 12.2 器高 4.7 高台径 7.4 高台高 0.5	体部は直線的に立上り、口縁部は小さく外反する。 底部界の屈曲部は丸くなる。 底部外面は未調整。屈曲部やや内側の高台は断面四角形で直立するが、肉薄である。 外面に灰を被る。	A 内、暗青灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
43	蓋杯 (身)	59号窯 前庭部 土壇	口径 13.3 器高 4.8 高台径 10.0 高台高 0.3	体部は直線的に立上り、口縁部は小さく外反する。 底部境の屈曲部は丸く、そこにある高台は肉厚で外方に踏んばる。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、白灰色 外、白灰色～茶褐色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
44	蓋杯 (身)	59号窯 窯上 覆土	口径 16.1 器高 5.5 高台径 12.5 高台高 0.5	底部、体部境の屈曲部は鋭く、体、口縁部は直線的に立上る。 底部、高台ともに器肉が厚い。 外面はヘラ切り未調整。 酸化炎焼成。	A 内、赤味灰色 外、赤味灰色～灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 4/5
45	蓋杯 (身)	59号窯 前庭部 土壇	口径 18.9 器高 7.4 高台径 10.0 高台高 0.6	体部は内彎して立上り、口縁部は反転外反する。 高台は外方へ力強く踏んばる。 椀と呼ぶにふさわしい。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 1/3
46	短頸壺	59号窯 前庭部 土壇	口径 9.8 器高 4.2 高台径 9.8 高台高 0.3 胴部最大径 13.5	肩部の張りが著しく、口縁部が小さく直立する。 高台は断面四角形で直立する。 体部下半、底部外面を回転ヘラ削りで、調整する。 焼け歪み、外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 3/4
47	鉢	59号窯 窯内	口径 28.4 器高 16.9 底径 16.2	体部は直行し、口縁部は小さく内折、直立して端部に水平な面をもつ。 把手は2個1対で偏平。 底部外面に平行タキ痕?を残す他は横ナデ、ナデで仕上げる。 全体に灰を被る。	A 内・外、灰色～黒色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/3
第111図 48	蓋杯 (蓋)	61号窯 窯内	口径 10.2 器高 1.2	口縁部は折り曲げて成形し、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 口縁部内面～外面に灰を被る。 内、外面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
49	蓋杯 (蓋)	61号窯 窯内	口径 14.2 器高 2.3 つまみ径 2.8 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて直立し、薄く尖って終る。 天井部との境は強く横ナデしてくびれる。 天井部外面はヘラ切り未調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒多含 C 良好 D 4/5
50	蓋杯 (蓋)	61号窯 窯内	口径 14.6 器高 2.3 つまみ径 2.8 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形し、外方へ踏んばる。 天井部との境は薄くなり、外面は小さく凹む。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 内外面に灰を被る。	A 内・外、暗茶褐色～ 茶褐色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 完存
51	蓋杯 (蓋)	61号窯 窯内	口径 15.0 器高 3.2 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は、下方に小さくつまみ出され、外側面は内傾する。 天井は丸味を回転ヘラ削りで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり、外面に灰を被る。	A 内・外、黄灰色～灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
52	蓋杯 (蓋)	61号窯 窯内	口径 14.8 器高 2.9 つまみ径 3.0 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形し、端部は小さく外反する。 天井部は丸味をもち、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 酸化炎焼成のようである。	A 内・外、黄橙褐色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D 3/4
53	蓋杯 (蓋)	61号窯 窯内	口径 15.0 器高 2.7 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて断面三角形に成形し、小さく内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる 全体に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
54	蓋杯 (蓋)	61号窯 窯内	口径 15.1 器高 1.7 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて断面三角形に仕上げ、外側面が凹む。 天井部外面はヘラ切り未調整。 外面灰被り、焼け歪みが大きい。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
55	蓋杯 (蓋)	61号窯 窯内	口径 15.4 器高 2.3 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形し、天井部との境がくびれる。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 灰を被り、焼け歪む。	A 内、赤味紫灰色 外、暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
56	蓋杯 (蓋)	61号窯 窯内	口径 17.6 器高 2.0	口縁部は折り曲げて成形し、内傾する天井部との境がくびれる。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 焼成前の穿孔あり。 つまみの有無は不明。	A 内・外、明茶色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/4
57	蓋杯 (身)	61号窯 窯内	口径 9.0 器高 4.3 高台径 6.7 高台高 0.5	体部から口縁部にかけては一旦薄くなり、口縁部は丸く膨む。 高台は大きく、外方へ踏んばる。 底部外面はナデ調整。 大きく焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
58	蓋杯 (身)	61号窯 窯内	口径 12.7 器高 4.8 高台径 9.2 高台高 0.5	体部は直線的に立上り、口縁部は小さく外反する。 屈曲部は丸くなり、すぐ内側にある高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄灰色～白灰色 B 微砂多含 C 良好 D 完存
59	蓋杯 (身)	61号窯 窯内	口径 16.8 器高 5.2 高台径 11.0 高台高 0.7	体・口縁部は内彎して立上る。 屈曲部は明瞭で、やや内側にある高台は下方へ踏んばる。 内外面に重ね焼きの痕跡あり。 内外面に灰を被る。	A 内、暗灰色 外、暗青灰色～黒色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D 4/5
60	短頸壺	61号窯 窯内	口径 16.1 頸部径 15.9	口縁部は直立し、端面は丸味をもつ。 口縁部外面にシボリ痕残る。 残存部は前面を横ナデ調整する。	A 内・外、灰色～黒色 B 微砂少含 C 良好 D 1/6
61	蓋杯 (蓋)	62号窯 窯内	口径 10.9 器高 1.6	口縁部は下方につまみ出され、内傾する。 天井部は高く、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 つまみはない。	A 内、灰色～茶灰色 外、暗灰色～茶褐色 B 砂粒礫含 C 良好 D 3/4
62	蓋杯 (蓋)	62号窯 窯内	口径 14.6 器高 2.4 つまみ径 2.8 つまみ高 0.9	口縁部は下方につまみ出され、小さく内傾する。 天井部はやや高く、外面を回転ヘラ削り調整する。 内外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、茶灰色～明褐色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
63	蓋杯 (蓋)	62号窯 窯内	口径 15.1 器高 3.4 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて断面三角形とし、外側面は凹む。 天井部は丸味をもち、外面はヘラ切り未調整で仕上げる。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 完存
64	蓋杯 (蓋)	62号窯 窯内	口径 17.2	口縁部は折り曲げて成形し、やや内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 酸化炎焼成。	A 内・外、黄褐色 B 砂粒多含、金雲母、 角閃石、赤褐色粒含 C 良好 D 4/5
65	蓋杯 (身)	62号窯 窯内	口径 17.7 器高 7.8 高台径 11.2 高台高 0.6	体部は内彎気味に立上り、口縁部は巻き込む。 高台は屈曲部にあり、外方に踏んばる。 底部外面は未調整。 酸化炎焼成。	A 内・外、赤味茶色 B 砂粒多含 C 良好 D 2/3

I 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
66	蓋杯 (蓋)	63号窯床内	口径 13.8 器高 2.9 つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げるが、外方へ踏んばる。 天井部は丸味をもち、外面は回転ヘラ削り調整。内面は未調整。 酸化炎焼成。	A 内・外、黄味茶色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 完存
67	蓋杯 (蓋)	63号窯窯内	口径 14.2 器高 1.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は、下方に小さくつまみ出す。 天井部外面はヘラ削り未調整。 内外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
第115図 68	蓋杯 (蓋)	64号窯窯内	口径 27.8 器高 3.3 つまみ径 3.8 つまみ高 1.0	口縁部は下方に小さくつまみ出し、やや内傾する。 天井部との境は強く横ナデされて小さく凹む。 天井部外面はヘラ削り未調整。 内外面に灰被り、重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、明灰色～灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/4
69	蓋	64号窯窯内	口径 7.3 器高 1.7 つまみ径 2.0 つまみ高 0.3	天井部は平坦に近く、ほぼ直角に屈曲して、やや外傾する口縁部に続く。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 内面に灰を被る。	A 内、暗茶灰色 外、灰色～緑灰色 B 砂粒、礫多含 C 良好 D 完存
70	蓋杯 (蓋)	64号窯窯内	口径 15.6 器高 3.1 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁部は鋭く折れ曲り、内傾する。外側面は凹む。 天井部は高く、回転ヘラ削りで仕上げる。 口縁部内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D 3/4
71	蓋杯 (蓋)	64号窯窯内	口径 16.4 器高 1.8 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、外方に踏んばる。 天井部は低く偏平、外面は回転ヘラ削りで調整。外面に灰を被る。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～灰色 B 砂粒、礫多含 C 良好 D 完存
72	蓋杯 (蓋)	64号窯窯内	口径 20.3	口縁部は折り曲げて成形、外方に踏んばる。 天井部は偏平で、外面を回転ヘラ削りで調整。 口縁部内面～外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、白灰色～灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 2/3
73	蓋杯 (蓋)	65号窯窯内	口径 14.8 器高 2.9 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形、ほぼ直立する。端部は丸味をもつ。 天井部との境は小さくくぼむ。 天井部は丸味をもち、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 砂粒、礫多含 C 良好 D 完存
74	蓋杯 (身)	65号窯窯内	口径 14.0 器高 4.6 高台径 10.4 高台高 0.4	体・口縁部は直線的に開く。 底部との境は明瞭に屈曲し、すぐ内側にある高台は四角形となり外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
75	蓋杯 (蓋)	66号窯窯内	口径 16.5 器高 2.5 つまみ径 2.7 つまみ高 0.9	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は偏平で、外面は回転ヘラ削り調整。 内外面に灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 5/6
76	蓋杯 (蓋)	66号窯窯内	口径 18.8 器高 3.1 つまみ径 2.8 つまみ高 0.9	口縁部は折り曲げて成形し、外反しつつ直立する。 天井部は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 4/5
77	蓋杯 (蓋)	66号窯窯内	口径 18.5 器高 2.5 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形し、外反しつつ内傾する。 天井部は丸味をもち、外面はヘラ削り未調整。 口縁部に灰を被る。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 5/6
78	蓋杯 (蓋)	66号窯窯内	口径 18.8 器高 3.6 つまみ径 2.9 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形し、外反しつつ内傾する。 天井部は丸く、外面はヘラ削り調整する。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、暗緑灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
79	蓋杯 (蓋)	66号窯窯内	口径 19.6 器高 3.2 つまみ径 2.5 つまみ高 1.3	口縁部は折り曲げて成形し、小さく内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 焼け歪みある。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 砂粒、礫少含 C 普通 D 7/8
80	蓋杯 (蓋)	66号窯窯内	口径 19.5 器高 3.8 つまみ径 2.8 つまみ高 1.1	口縁端部は外方へつまみ出され、外側面が内彎する。 天井部は丸味をもち、外面部は回転ヘラ削りする。	A 内、白灰色 外、白灰色～黒色 B 微砂多含 C 良好 D 完存
81	蓋杯 (蓋)	66号窯窯内	口径 20.2 器高 3.8 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁端部は下方へひき出され、外側面が凹む。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色～黒色 外、白灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 完存
82	蓋杯 (身)	66号窯窯内	口径 13.6 器高 4.4 高台径 9.1 高台高 0.4	口縁部は小さく外反し、薄く終る。 底部との屈曲は丸く、すぐ内側にある高台は低く外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 灰被り、焼け歪む。	A 内、紫灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 3/4

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
83	蓋杯(身)	66号窯窯内	口径 18.1 器高 8.2 高台径 11.3 高台高 1.1	体部は直線的に立上り、口縁との境に突帯を付す。 口縁部は小さく外反し、外傾する面をもつ。 底部との屈曲は鋭く、高台は高い。 体部下半～底部外面を回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒多含、黒色粒含 C 良好 D 4/5
84	蓋杯(身)	66号窯窯内	口径 18.4 器高 5.5 高台径 13.3 高台高 0.4	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は明瞭で、高台は外方へ踏んばる。 底部外面はヘラ切り未調整。	A 内・外、白黄色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
85	蓋杯(身)	66号窯窯内	口径 18.4 器高 6.0 高台径 13.1 高台高 0.5	口縁部は小さく外反して薄く終る。 底部との屈曲は丸く、やや内側にある高台は外方へ踏んばる。 底部外面はヘラ切り未調整。	A 内、白黄色 外、白灰色～灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 2/3
86	蓋杯(身)	66号窯窯内	口径 19.2 器高 6.0 高台径 13.6 高台高 0.5	体・口縁部はほぼ直線的に立上る。 底部の屈曲部は丸く、すぐ内側にある高台は低く外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～黒色 B 砂粒多含 C 不良 D ほぼ完存
87	蓋杯(蓋)	66号窯前庭部	口径 14.8 器高 2.7 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は折り曲げて成形し、若干内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、茶灰色～黒灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 5/6
88	蓋杯(身)	66号窯前庭部	口径 14.0 器高 3.9 高台径 9.2 高台高 0.5	体・口縁部は直線的に開く。 底部の屈曲部は明瞭で、やや内側にある高台は低く外方へ踏んばる。 底部外面に平行にタタキ痕あり。 外面に灰を被る。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
第118図 89	鉢	64号窯窯内	口径 22.6 器高 17.9 高台径 16.0 高台高 0.9 脚底径 11.0	体部は直線的にのび、口縁部は小さく外反する。端部はほぼ水平な面となる。 屈曲部は緩く、高台は高く、外方へ踏んばる。 体部下端～底部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 砂粒少含、黒色粒含 C 良好 D 1/6
90	高杯	66号窯窯内		脚端部は折り曲げて成形、端部は丸い。	A 内、白黄色 外、白黄色～暗灰色 B 砂粒多含 C 不良 D 1/2
91	長頸壺	66号窯窯内		外面に一条の沈線あり。 内面にシボリ痕残る。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含 C 普通
92	短頸壺	66号窯窯内	口径 10.4 器高 14.0 脚部最大径 19.5 高台径 11.5 高台高 0.8	体部は球形に近く、口縁部は直立して内傾する端面をもつ。 高台はやや外方へ踏んばる。 最大径部分のやや上から底部外面まで回転ヘラ削り調整を行う。	A 内、茶灰色 外、茶色～黒灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D ほぼ完存
第120図 93	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壌	口径 15.3 器高 3.3 つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部は下方を垂下させて成形、外側面は内傾する。 酸化炎焼成で、器表磨滅。	A 内・外、白黄色～黄褐色 B 細砂多含 C 良好 D 2/3
94	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壌	口径 15.6 器高 3.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形し、端部をさらに外折する。 天井部外面はヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/2
95	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壌	口径 15.9 器高 3.5 つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形し、やや内傾する。 天井部外面はヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、明灰色～暗灰色 B 精良 C 良好 D 2/3
96	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壌	口径 15.9 器高 3.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は端部を下方へ引き出して成形。内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 2/3
97	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壌	口径 16.0 器高 2.5 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は端部を下方へ引き出して成形、内傾する。 天井部は低く、外面はヘラ切り未調整。 外面に灰を被る。	A 内、白灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 5/6
98	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壌	口径 16.0 器高 2.3 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は端部を下方へ引き出して成形、やや内傾する。天井部との境は小さくくびれる。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 外面に灰を被る。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 砂粒含 C 良好 D 3/4
99	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壌	口径 16.2 器高 3.7 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は弱く折り曲げて成形し、端部を丸くおさめる。 天井部は高く、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、白灰色～灰色 外、白灰色～灰色～茶褐色(鉄分) B 細砂含 C 良好 D 完存

## I 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
100	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壇	口径 16.0 器高 3.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は端部を引き出して成形、小さく突出する。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 口縁部に灰を被り、焼け歪む。	A 内、白灰色～灰色 外、白灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
101	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壇	口径 16.6 器高 2.9 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は折り曲げて成形、外傾し、外側面が凹む。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
102	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壇	口径 16.7 器高 1.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立するが端部が丸い。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 灰を被り、焼け歪む。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
103	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壇	口径 19.6 器高 2.6 つまみ径 2.8 つまみ高 1.0	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部は低く、外面はヘラ切り未調整。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
104	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壇	口径 20.0 器高 3.5 つまみ径 2.7 つまみ高 0.1	口縁部は端部をつまみ出して成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
105	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壇	口径 20.1 器高 4.1 つまみ径 2.8 つまみ高 1.1	口縁部は端部をつまみ出して成形、ほぼ直立し、端丸は丸い。 天井部は丸味をもち、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
106	蓋杯(身)	66号窯上部土壇	口径 14.0 器高 4.5 高台径 10.7 高台高 0.6	体部は直線的に立上り、口縁部は小さく外反する。 底部からの屈曲は明瞭で、やや内側にある高台は断面四角形で直立する。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/3
107	蓋杯(身)	66号窯上部土壇	口径 14.0 器高 4.1 高台径 9.6 高台高 0.4	体部は直線的に立上り、口縁部は外反する。 底部との屈曲部は丸く、すぐ内側の高台は小振りである。 底部外面はナデで仕上げる。 外面に灰被り、焼け歪む。	A 内、紫灰色 外、紫灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/3
108	蓋杯(身)	66号窯上部土壇	口径 14.1 器高 4.5 高台径 9.3 高台高 0.4	体・口縁部とも直線的に開く。 底部との屈曲部は丸く、やや内側にある高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄茶色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
109	蓋杯(身)	66号窯上部土壇	口径 14.2 器高 4.3 高台径 9.9 高台高 0.7	体部は直線的に立上り、口縁部は小さく外反する。 底部からの屈曲は明瞭で、すぐ内側の高台は直立する。 底部外面はナデで仕上げる。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
110	蓋杯(身)	66号窯上部土壇	口径 14.6 器高 4.4 高台径 10.1 高台高 0.5	体部は内彎気味に立上り、口縁部は小さく外反してやや肥厚する。 底部との屈曲部は丸く、やや内側の高台は丈夫なつくりである。 底部外面は未調整のようである。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 砂粒含、礫少含 C 良好 D 3/4
111	蓋杯(身)	66号窯上部土壇	口径 14.7 器高 4.2 高台径 10.5 高台高 0.4	体・口縁部は外反気味に立上る。 底部との屈曲部は明瞭で、やや内側の高台は外方へ踏んばる。 底部外面は未調整のようである。	A 内、紫灰色 外、紫灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
112	蓋杯(身)	66号窯上部土壇	口径 15.0 器高 4.0 高台径 9.7 高台高 0.3	体部は直行し、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲部は明瞭で、やや内側の高台は偏平となる。 底部外面はナデ調整。 外面に灰を被る。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
113	杯	66号窯上部土壇	口径 17.6 器高 4.9 底径 12.6	体部は内彎気味に立上り、口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲部はヘラ削りを施してシャープに仕上げる。 内外面に灰を被る。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/3
114	蓋杯(身)	66号窯上部土壇	口径 18.3 器高 5.0 高台径 12.5 高台高 0.6	体・口縁部は直線的に開く。 底部との屈曲部はやや丸味をもち、高台はやや内側にある。 底部外面は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 不良 D 3/4
115	蓋杯(身)	66号窯上部土壇	口径 19.0 器高 6.5 高台径 12.6 高台高 0.4	体・口縁部は大きく外反して開く。 底部からの屈曲は丸くなり、すぐ内側の高台はしっかりしている。 底部外面はヘラ削り未調整。 外面に灰を被る。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
第121回 116	蓋杯(蓋)	66号窯上部土壇	口径 24.8	口縁部は折り曲げて成形、直立し、内面に切れ込みをもつ。 天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 灰を被る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/8

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
117	蓋杯 (蓋)	66号窯 上部 土壇	口径 25.2 器高 3.9 つまみ径 2.6 つまみ高 1.0	口縁部は端部を下方につまみ出して成形、やや内傾する。 天井部は丸味をおび、外面を回転ヘラ削りにして仕上げる。 口縁部内外面に灰を被り、内面に火ダスキが走る。	A 内、白灰色～灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
118	蓋杯 (蓋)	66号窯 上部 土壇	口径 26.7 器高 2.0 つまみ径 3.3 つまみ高 1.0	口縁部は端部を下方につまみ出し、直立。天井が小さくくびれる。 天井部は低く扁平で、外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰被り、内面に火ダスキあり。	A 内、青灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
119	蓋杯 (蓋)	66号窯 上部 土壇	口径 27.6 器高 3.6 つまみ径 3.1 つまみ高 1.0	口縁部は下方へ小さくつまみ立して成形、外傾する。 天井部は直線的に高まり、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。 重ね焼きの痕跡あり、内面に火ダスキあり。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
120	皿	66号窯 上部 土壇	口径 19.0 器高 2.2 底径 15.0	体・口縁部は小さく外反しつ立つ上る。 底部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に灰被り、内面に火ダスキあり。	A 内、白灰色 外、白灰色～茶褐色 B 砂粒多含 C 良好 D 2/3
121	皿	66号窯 上部 土壇	口径 19.0 器高 2.4 底径 15.5	体・口縁部はほぼ直行し、端部は薄く終る。 底部外面はナデで仕上げる。 口縁部外面に灰被り、火ダスキあり。	A 内・外、白灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 3/5
122	皿	66号窯 上部 土壇	口径 19.0 器高 2.1 底径 15.0	体・口縁部は直行する。 底部外面は回転ヘラ削りで調整。 内外面に火ダスキあり。	A 内・外、白灰色～緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
123	皿	66号窯 上部 土壇	口径 19.3 器高 2.4 底径 14.9	体・口縁部はほぼ直行。 底部外面は回転ヘラ削り調整。 外面に火ダスキ、口縁部内外面に灰被り。	A 内、白灰色 外、白灰色～茶灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 完存
第124図 124	皿	66号窯 上部 土壇	口径 19.2 器高 2.3 底径 17.4	体・口縁部は外反して立上る。 底部はもり上り、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
125	皿	66号窯 上部 土壇	口径 19.5 器高 2.9 底径 15.6	体・口縁部は直口。底部外面は横ナデで仕上げる。 内外面に灰を被る。	A 内・外、灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
126	皿	66号窯 上部 土壇	口径 20.0 器高 2.2 底径 16.8	体・口縁部は直行。 底部外面は未調整。 内外面に火ダスキが走る。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
127	高杯	66号窯 上部 土壇	口径 23.8	口縁部が短く立上り、内傾する面をもつ。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 杯部残12
128	鉢	66号窯 上部 土壇	口径 47.0 器高 18.5 高台径 24.0 高台高 1.0	体部は内彎して立上り、玉縁状の口縁部へ続く。 体部上位の突帯は大きく、断面四角形となる。 底部との境は丸くなり、高台は外方へ踏んばる。 体部下半をヘラ削り、他を横ナデ、ナデで仕上げる。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 3/4
129	甃	66号窯 上部 土壇	口径 21.9	口縁部に外傾する端面をもつ。 口縁直下の突帯は見かけ上口縁部と連続する。 体部外面は平行タタキ痕、内面に同心円文当具痕残る。 内面に火膨れあり、焼け歪む。	A 内・外、灰色～黒色～緑色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 口縁部ほぼ完存
130	甃	66号窯 上部 土壇	口径 40.8	口縁部は内傾する面をもち、直下に断面「M」字形の突帯を付すが、細部は丸い。 頸部内面にナデの痕あり。 体部は外面に格子タタキ、内面に同心円文当具痕を残す。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 口縁部1/3
131	鉢	66号窯 上部 土壇	口径 21.6 器高 16.9 底径 13.3	体部から口縁部にかけて緩く内彎する。 口縁部は肥厚し、内傾する面をもつ。 体部大半を回転ヘラ削りで仕上げる。 内外面に灰を被り、火ダスキが走る。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 1/3
132	壺	胴部最大径	28.0	形の張りが弱く、下方に二条の沈線を刻む。 タタキは平行線文。	A 内・外、黒灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 1/4
133	甃	口径	23.0	外傾する口端面に三角突帯を付す。 体部外面に平行タタキ痕、内面に同心円文当具痕を残す。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 口縁部1/3



## M-1 地区

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
134	鉢		口径 52.0 器高 26.4 底径 26.8	口縁部が大きく外反し、土師器の器形に似る。 体部は平行タタキ痕と同心円文当具痕を残す。 底部外面～体部外面下半は削りのようである。	A 内、緑灰色 外、暗緑灰色～白灰色 B 微砂多含 C 良好 D 1/4

## M-1 地区

第128図 1	蓋杯 (蓋)	51号窯 窯内	口径 15.2 器高 2.5 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	焼け歪みでやや変形する。天井部は低く、口縁部はやや内傾する。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 微砂多含、粗砂少含 C 不良 D 1/2
2	蓋杯 (蓋)	51号窯 窯内	口径 15.8 器高 2.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部はやや内傾する。 外天井部は未調整。	A 内・外、青灰色～黒色 B 微砂少含 C 良好 D 1/4
3	蓋杯 (蓋)	51号窯 窯内	口径 15.8 器高 1.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 体部と口縁部の境は窪む。口縁中央に凹線。 外天井部ナデ調整。外口縁部に重ね焼きによる色の变化がある。	A 内・外、黄味灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
4	蓋杯 (蓋)	51号窯 窯内	口径 17.8 器高 2.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	天井部は低く平坦である。口縁部は直に下がる。 外天井部は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 不良 D 1/2
5	蓋杯 (蓋)	51号窯 窯内	口径 17.9	天井部は低く平坦である。口縁部はやや内傾する。 外天井部は未調整。	A 内・外、白灰色～黒色 B 粗砂少含 C 不良 D 1/3
6	皿	51号窯 窯内	口径 17.0 器高 2.8 底径 13.5	体部は直線的に外上方にのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 微砂多含 C 良好 D 1/4
7	皿	51号窯 窯内	口径 20.0 器高 2.4 底径 16.8	体部は直線的に外上方にのび、口縁部はわずかに外反する。 外底部はナデ、板状圧痕を伴う。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/6
8	蓋杯 (蓋)	51号窯 前庭部	口径 15.2 器高 2.1 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	天井部が低く扁平である。口縁部は折り曲げやや外傾する。 外天井部は未調整。	A 内、白灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
9	蓋杯 (蓋)	51号窯 前庭部	口径 16.0 器高 1.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	焼け歪みで変形する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
10	蓋杯 (蓋)	51号窯 前庭部	口径 16.4 器高 1.8 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	焼け歪みで天井部がやや窪む。天井部と体部の境は明瞭である。 口縁部は直に下がる。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
11	蓋杯 (蓋)	52号窯 焚口	口径 12.5 器高 1.3 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8	小形の扁平な蓋である。口縁部はやや外傾する。 外天井部未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
12	蓋杯 (蓋)	52号窯 焚口	口径 15.2 器高 1.7 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	天井部が低く、体部との境が明瞭である。口縁部はやや内傾する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 完存
13	蓋杯 (蓋)	52号窯 焚口	口径 15.7 器高 1.6 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	天井部が低く平坦である。体部と口縁部の境は窪む。 口縁部は中央は強くナデ凹線をつくる。端部は丸い。 外天井部回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色 外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
14	蓋杯 (蓋)	52号窯 焚口	口径 15.7 器高 2.8 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	天井部がやや高い。口縁部は内傾しやや鋭い。 外天井部1/3回転ヘラ削り調整。 外面にヘラ記号あり。	A 内・外、白黄灰色～灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 4/5
15	蓋杯 (蓋)	52号窯 焚口	口径 16.0 器高 2.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	焼け歪みで変形する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
16	蓋杯 (蓋)	52号窯 焚口	口径 16.0 器高 1.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.3	焼け歪みで変形する。 外天井部回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 4/5
17	蓋杯 (蓋)	52号窯 窯内	口径 16.3 器高 1.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	焼け歪みで変形する。 外天井部未調整。	A 内・外、黄灰色～ 灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 4/5
18	蓋杯 (蓋)	52号窯 焚口	口径 16.1 器高 1.8 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	天井部は低く平坦で、体部の境は明瞭である。 口縁部は、直に下り、端部は丸い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 3/4
19	蓋杯 (蓋)	52号窯 窯内	口径 16.3 器高 1.7 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	天井部は低く平坦で、体部は窪む。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白黄灰色～ 灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 1/2
20	蓋杯 (蓋)	52号窯 窯内	口径 16.5 器高 1.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.3	天井部は低く、扁平である。 口縁部は直に折り曲げ、端部はやや鋭い。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
21	蓋杯 (蓋)	52号窯 窯内	口径 19.3 器高 2.7 つまみ径 3.1 つまみ高 0.8	天井部は低く、やや丸味をもつ、口縁部はやや外傾する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白黄灰色 B 砂粒多含 C 不良 D 1/2
22	蓋杯 (蓋)	52号窯 焚口	口径 20.4	天井部は低く、扁平である。口縁部はやや外傾し、端部は丸い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。ヘラ記号あり。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/5
23	杯	52号窯 焚口	口径 14.1 器高 4.3 底径 11.0	体部は直線的に上方へのび、端部は丸い。 外底端はやや丸味をもつ。 外底部は未調整。外底端にヘラ記号あり。	A 内・外、灰色～暗灰 色 B 砂粒少含 C 良好 D 3/4
24	皿	52号窯 窯内	口径 18.0 器高 2.0 底径 14.6	体部は直線的に上方へのび、口縁部はわずかに外反させ、端部は丸い。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色～黒 微砂多含、砂粒少含 B 良好 D 1/5
25	蓋杯 (身)	52号窯 焚口	口径 17.5 器高 5.4 高台径 14.4 高台高 0.4	体部は深く、内彎気味に立上る。端部は平坦である。 外底端に高台を貼付する。 外底部2/3は回転ヘラ削り調整、中心部は未調整。	A 内・外、灰色～赤味 灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 1/2
第130図 26	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壌	口径 18.7 器高 3.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8	天井部は平坦に近いが、やや丸味をもつ。 口縁部は小さく折り曲げ、やや内傾する。 外天井部は磨滅のため調整不明。	A 内、黄土色～灰色 外、 黄土色 B 砂粒多 含、赤褐色粒、雲母少含 C 不良 D 4/5
27	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壌	口径 18.4 器高 2.7 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	天井部は平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は、小さく折り曲げ、やや内傾する。 外天井部は、あらいナデ、工具痕が認められる	A 内、黄灰色 外、灰色 B 砂粒多含 C 普通 D ほぼ完存
28	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壌	口径 17.9 器高 3.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	天井部は高く、丸味をもつ。体部は口縁部近くでやや窪む。 口縁部は内傾する。 外天井部はナデか。	A 内・外、黄灰色～黒 灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 4/5
29	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壌	口径 19.7 器高 2.8 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	天井部は平坦である。体部と口縁部の境はやや窪む。 口縁部は短く、やや内傾する。 外天井部は未調整、一部にナデ調整が認められる。	A 内、橙色～灰色～黒灰色 外、灰色～黒灰色 B 砂粒、赤褐色粒、金雲母含 C 不良 D 4/5
30	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壌	口径 18.7 器高 2.8 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	天井部は平坦である。口縁部は小さく折り曲げ、内傾される。 外天井部は未調整、一部ナデ調整される。	A 内・外、灰色～黄灰 色～黒色 B 砂粒多含 C 不良 D 4/5
31	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壌	口径 16.0 器高 2.1 つまみ径 1.7 つまみ高 0.4	天井部は低く平坦である。口縁部は直に下る。 外天井部は磨滅のため不明。	A 内・外、灰色～緑灰 色 B 砂粒少含 C 不良 D 4/5
32	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壌	口径 15.4 器高 2.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	天井部は低く、丸味をもつ。口縁部は丸味をもつ。 磨滅のため調整不明。 内天井部にうず巻状のマキアゲが認められる。	A 内・外、灰色 B 細砂、角閃石、雲母 多含 C 不良 D ほぼ完存

M-1 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
33	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 15.4 器高 2.3 つまみ径 1.7 つまみ高 0.6	天井部は低い。体部との境は不明瞭。口縁部は丸味をもつ。 磨滅のため調整不明。 内天井部にうず巻状にマキアゲが認められる。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒雲母少含 C 不良 D 4/5
34	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 14.8 器高 1.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	天井部は低い。体部と口縁部の境を窪める。 口縁部は直に下る。 外天井部は未調整、一部にナデ調整が認められる。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 3/4
35	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 15.3 器高 2.4 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	天井部と体部の境はなく、口縁部近くでわずかに窪ませ、そのまま口縁部にいたる。 外天井部は未調整である。	A 内・外、灰色 B 砂粒、角閃石多含 C 普通 D 4/5
36	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 15.4 器高 1.6 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	天井部は低く扁平である。口縁部は外方へつまみ出してつくられる。 外天井部は未調整である。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒、礫、角閃石多含 C 普通 D ほぼ完存
37	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 14.1 器高 2.5 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	天井部と体部の境はわずかに丸味をもつ。 口縁部は内傾する。 外天井部は未調整である。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
38	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 15.4 器高 2.4 つまみ径 1.8 つまみ高 0.8	天井部は低く、体部との境はやや丸味をもつ。 体部は口縁部近くでやや窪む。口縁部は直に下る。 外天井部はナデ調整か。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 普通 D 4/5
39	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 14.8 器高 2.7 つまみ径 1.6 つまみ高 0.5	天井部に丸味をもちそのまま口縁部にいたる。 外天井部は未調整である。	A 内・外、黄褐色 B 砂粒多含 C 普通 D ほぼ完存
40	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 14.3 器高 2.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	天井部は低く平坦である。口縁部は内傾させ、端部は丸い。 外天井部はナデ調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒・金雲母少含 C 良好 D ほぼ完存
41	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 15.5 器高 2.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	天井部は低く平坦である。口縁部は外方につまみ出し、わずかに折る。端部は丸い。 外天井部は回転ナデ調整。	A 内・外、黄灰色～灰色 B 砂粒少含、金雲母含 C 普通 D 4/5
42	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 15.2 器高 2.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	天井部は低く平坦である。体部は口縁部近くで窪む。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内、橙褐色～黄灰色 外、黄灰色～灰色 B 砂粒・角閃石雲母多含 C 不良 D 4/5
43	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 15.1 器高 2.1 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	天井部は低く、体部の境は明瞭である。 口縁部は丸く仕上げる。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～黄灰色 B 砂粒、金雲母角閃石多含 C 不良 D 4/5
44	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 15.5 器高 2.5 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	天井部は低く、体部の境はわずかに丸味をもつ。 口縁部は直下り、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄土色 B 細砂、金雲母多含 C 不良 D 4/5
45	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 14.5 器高 2.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	天井部は低く、体部との境はわずかに丸味をもつ。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄土色～灰色 B 砂粒・礫多含 C 不良 D 4/5
46	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 14.8 器高 2.4 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	天井部は低く、平坦に近い。体部は口縁部近くで窪ませ、そのまま口縁を外へ引き出す。 外天井部は未調整である。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存
47	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 13.8 器高 2.4 つまみ径 1.6 つまみ高 0.5	天井部・体部は、丸味をもちそのまま口縁部にいたる。 端部はわずかにつまむ。 外天井部は未調整、工具痕が残る。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
48	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 15.2 器高 2.3 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	天井部は低く、平坦で、体部との境はわずかに丸味をもつ。 口縁との境は窪ませる。口縁部は内傾させ、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 精良 C 普通 D ほぼ完存
49	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 15.5 器高 2.8 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	天井部は低く、平坦で、体部との境はわずかに丸味をもつ。 口縁部は小さく折り曲げ、直に下り、端部は丸い。 外天井部は未調整。体部に2条の凹線が走る。	A 内・外、黄味灰色～黒灰色 B 砂粒含 C 普通 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
50	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 14.8 器高 3.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	天井部は高く丸味をもつ。口縁端部をわずかにつまむ。 外天井部は未調整で、一部ナデ調整される。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 4/5
51	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 15.7 器高 2.1 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	天井部は低く、体部との境は丸味をもち、そのまま口縁部にいたる。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 不良 D 3/4
52	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 14.4 器高 1.9 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。口縁部は外方へ引き出され、体部との境に窪みをつくる。 天井部外面は未調整。	A 内・外、白灰色 B 精良 C 普通 D 4/5
53	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 14.4 器高 2.3 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	天井部は低く、平坦である。口縁部は外方へ引き出され、肥厚させる。体部との境は窪む。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒・礫少含 C 良好 D 4/5
第131図 54	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 14.2 器高 2.5 つまみ径 1.6 つまみ高 0.5	天井部は低く、丸味をもち、そのまま口縁部にいたる。 口縁部は直に下る。 外天井部は磨減気味で調整不明。	A 内・外、灰色 B 砂粒・礫少含 C 普通 D 4/5
55	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 13.6 器高 2.6 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	天井部は低く、体部との境は丸味をもつ。 口縁部は直に下り、端部は丸い。体部との境は窪む。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 精良 C 良好 D ほぼ完存
56	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 14.3 器高 2.3 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	天井部は低く、体部との境は丸味をもつ。 口縁部は直に下り、端部は丸い。体部との境は窪む。 外天井部は未調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
57	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 15.0 器高 2.4 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭だがやや丸味をもつ。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒、角閃石、雲母少含 C 普通 D ほぼ完存
58	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 14.7 器高 2.3 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	天井部は低く、平坦である。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 精良 C 良好 D ほぼ完存
59	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 15.0 器高 2.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	天井部はやや高く、丸味をもつ。口縁部は直に下り、端部はやや鋭い。 外天井部は未調整で、一部工具痕が見られる。	A 内・外、灰色 B 砂粒・金雲母少含 C 良好 D 完存
60	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 14.3 器高 2.5 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	天井部はやや高く、平坦である。口縁部は折り曲げ端部は丸い。 外天井部は未調整で、一部ナデ調整される。	A 内・外、暗灰色～黒灰色 B 精良 C 普通 D 完存
61	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 14.7 器高 2.2 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	天井部はやや高く、体部との境はやや丸味をもつ。 口縁部は内傾し、端部は丸い。 外天井部はナデ調整される。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒、角閃石少含 C 普通 D 完存
62	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 15.4 器高 2.7 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	天井部はやや高く、丸味をもつ。口縁部は内傾し端部丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒、角閃石少含 C 普通 D 完存
63	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 15.0 器高 1.6 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	天井部は低く、体部との境は明瞭である。 口縁部は直に下る。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 完存
64	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 14.0 器高 2.3 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	天井部は低く、体部かけてやや丸味をもつ。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、青灰色～黒灰色 B 精良 C 良好 D 完存
65	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 13.6 器高 1.6 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	天井部は低く、扁平である。口縁部は直に下る。 端部はやや平坦である。 外天井部は未調整で、一部ナデ調整される。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒、雲母少含 C 普通 D 2/3
66	蓋杯(蓋)	51号窯焚口 右側土壇	口径 13.2 器高 1.7 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	天井部は低く、平坦である。口縁は折り曲げずにその外方へ引き出し、端部は尖る。 磨減のため調整は不明である。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 完存

## M-1地区

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
67	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 13.2 器高 1.7 つまみ径 1.6 つまみ高 0.7	天井部は低く、平坦である。口縁部は直に下る。 外天井部はナデ調整。	A 内、黄灰色～灰色 外、灰色～黒灰色 B 砂粒、雲母少含 C 良好 D 完存
68	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 13.2 器高 1.8 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	天井部は低く、平坦である。口縁部は引き出されわずかに折り曲げる。 外天井部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 砂粒、雲母少含 C 良好 D 完存
69	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 13.2 器高 2.0 つまみ径 1.7 つまみ高 0.6	天井部は低く、体部との境はやや丸味をもつ。 口縁は内傾させ、端部をわずかにつまみ出す。 外天井部は未調整で、一部ナデが見られる。	A 内・外、青灰色 B 精良 C 良好 D 完存
70	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 13.0 器高 1.8 つまみ径 1.7 つまみ高 0.5	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁は内傾させ、端部は丸い。 外天井部はナデ調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 4/5
71	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 13.2 器高 2.0 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	天井部は低く、体部との境はやや丸味をもつ。 口縁部は引き出し、小さく折り曲げる。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 4/5
72	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 13.6 器高 2.7 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	天井部はやや高く、体部との境はやや丸い。 口縁部はやや内傾させ、端部は丸い。体部との境は窪む。 外天井部は未調整で、一部ナデが見られる。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
73	蓋杯 (蓋)	51号窯 焚口 右側土壇	口径 14.4 器高 2.7 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	天井部はやや高く、体部との境は丸味をもつ。 口縁部はやや内傾し、体部との境は窪む。 外天井部は未調整である。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
74	蓋杯 (蓋)	52号窯 焚口 左側土壇	口径 15.8	天井部は平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は肥厚して、折り曲げる。 天井部と、体部の境は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/6
第134図 75	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 11.1 器高 1.6 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	天井部は低く平坦である。口縁部は折り曲げられ、端部はやや尖る。 外天井部 1/2 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
76	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 11.6 器高 1.9 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	天井部は低く平坦である。体部との境は明瞭。 口縁は折り曲げられる。内傾し端部は丸い。 外天井部 1/2 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶褐色～黒灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
77	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 11.7 器高 2.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	天井部はやや高く、体部との境は明瞭である。 体部、口縁部は薄く仕上げられる。口縁部は直に下り、中央が窪む。 外天井部 1/2 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
78	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 12.7 器高 1.2 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	天井部は低く、扁平である。体部を窪ませる。 口縁部は直に下り、端部はやや鋭い。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
79	蓋杯 (蓋)	52号窯 灰原	口径 12.8 器高 2.5 つまみ径 2.2 つまみ高 0.4	天井部は高く、体部は立上がる。口縁部は折り曲げて内傾させる。 外天井部は未調整。	A 内、紫灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
80	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 13.0 器高 1.9 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	天井部は低く、体部との境は明瞭である。 体部は窪ませて、口縁部を折り曲げる。端部はやや鋭い。 外天井部はナデ調整。	A 内・外、黄灰色～灰色 B 細砂多含 C 普通 D 完存
81	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 13.1 器高 1.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	天井部は低く、扁平である。口縁部は折り曲げて、やや外傾させる。中央がやや窪む。 外天井部 1/2 回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂・砂粒少含 C 良好 D 完存
82	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 13.5	天井部は低く、体部との境は明瞭である。 口縁部はわずかに曲げて、外傾させる。 外天井部 1/2 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 4/5
83	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 13.6 器高 3.1 つまみ径 1.8 つまみ高 0.8	天井部はやや高く、体部との境は丸味をもつ。 口縁部は内傾させ、端部はやや鋭い。 外天井部・体部は回転ナデ調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
84	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 13.8 器高 2.3 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	天井部は平坦で、体部との境はわずかに丸い。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部 2/3 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、橙褐色、橙 味黒色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
85	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 13.8 器高 2.8 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	天井部は高く丸味をもち。体部との境は不明瞭である。 口縁部はわずかに折り曲げて内傾させる。 端部はやや鋭い。外天井部 1/2 未調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 微砂多含 C 良好 D ほぼ完存
86	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 13.9 器高 2.9 つまみ径 1.7 つまみ高 1.0	天井部は低く平坦である。体部は薄くつくられる。 口縁部は折り曲げやや内傾させる。 外天井部はあらいナデ調整。	A 内・外、緑灰色 B 微砂多含 C 普通 D 完存
87	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.2 器高 2.1 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	天井部は平坦で、体部に丸味をもち口縁部にいたる。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部 1/2 回転ヘラ削り調整。 体部との境は未調整。工具痕が著しい。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
88	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.4 器高 1.6 つまみ径 1.9 つまみ高 0.8	天井部は低く、平坦である。全体に薄く仕上げられる。 口縁部はわずかに折り曲げる。 外天井部はナデ調整。	A 内・外、黄味灰色～ 黒色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
89	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.4 器高 1.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	焼け歪みで変形する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 精良 C 良好 D 完存
90	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.5 器高 2.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	焼け歪みでわずかに変形する。天井部は平坦で、体部との境は明 瞭である。口縁部はわずかに折り曲げる。端部はやや鋭い。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
91	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.6 器高 1.5 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	天井部は低く扁平である。体部は口縁部近くで窪みをもつ。 口縁部は直に下り、端部はやや鋭い。 外天井部は未調整。外面に重ね焼きの痕が残る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
92	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.7 器高 2.2 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	天井部は平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は折り曲げて、やや外傾させ、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内、暗灰色、一部黒灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
93	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.8 器高 2.0 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	天井部は低く平坦である。口縁部は小さく折り曲げ、端部は鋭い。 外天井部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 完存
94	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.9 器高 1.6 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	天井部は低く、扁平である。口縁部は折り曲げて外傾させる。端 部は丸い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色、一 部黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
95	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.9 器高 3.0 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	天井部はやや高く、平坦である。体部は窪ませる。 口縁部は折り曲げて内傾させる。 外天井部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
96	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.1 器高 1.9 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	天井部は平坦で、体部との境が明瞭である。 口縁部は内傾し、端部をわずかにつまみ出す。 外天井部は未調整。	A 内・外、緑灰色～暗 灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 完存
97	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.2 器高 1.6 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	やや変形する。体部は窪む。口縁部は直に折り曲げ端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、茶灰色～赤 味灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
98	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.2 器高 2.5 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	天井部平坦に近いがやや丸味をもつ。口縁部は折り曲げて、内傾 させる。端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、茶灰色～赤 味灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
99	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.2 器高 2.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.3	天井部は低く、平坦である。体部との境はやや丸味をもつ。 口縁部はやや外傾させる。端部は丸い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、薄橙褐色 B 細砂多含 C 普通 D 完存
100	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.2 器高 1.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	天井部は低く扁平である。体部と境付近が肥厚する。 口縁部は直で中央がやや窪む。外天井部は未調整。 外面に重ね焼きの痕が残る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存

## M-1地区

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
101	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.2 器高 2.7 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	やや変形する。天井部は平坦に近い。 口縁部は内傾させ、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
102	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.3 器高 2.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は小さく折り曲げ、端部は丸い。 外天井部は未調整。内・外面に重ね焼痕が残る。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
103	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.3 器高 2.5 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	変形する。天井部は平坦に近い。口縁部は直に折り曲げる。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
104	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.3 器高 1.4 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	天井部は低く扁平である。体部との境付近を肥厚する。 口縁部は外方に引き出し、小さく折り曲げる。端部は丸い。 外天井部2/3回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
105	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.3 器高 1.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.4	天井部は低く、扁平である。体部との境付近を肥厚する。 口縁部は外方に引き出し、直に折り曲げる。端部は丸い。 体部・天井部の境を回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
106	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.3 器高 2.3 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	やや変形する。天井部は平坦に近い。体部はやや窪む。 口縁部は直に下がり、中央が窪む。 外天井部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
第135図 107	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.9 器高 2.0 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	天井部は平坦で、体部との境は明瞭である。 体部はやや窪む。口縁部は内傾し、中央が窪む。 外天井部1/3回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰味褐色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
108	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.4 器高 1.4 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	天井部は低く、扁平である。体部との境を肥厚する。 口縁部は直に下り、中央が窪む。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 2/3
109	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.4 器高 1.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	天井部は低く、扁平である。体部との境を肥厚する。 口縁部は外方に薄く引き出し、直に折り曲げる。 外天井部1/2はナデ、1/2は未調整。	A 内、灰色 外、明灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
110	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.4 器高 1.4 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	天井部は低く、扁平である。体部との境は明瞭。 体部は窪ませ、口縁にいたる。口縁部はやや外傾する。 外天井部は未調整。	A 内、暗灰色 外、黄味灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
111	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.4 器高 2.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	天井部は低く、体部との境は明瞭である。 体部は窪ませて、口縁部はやや内傾し、端部は丸い。 外天井部は粗いナデ調整。	A 灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
112	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.5 器高 1.8 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭。 体部は窪ませる。口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部磨滅気味で調整不明。	A 内・外、白黄色～暗灰色 B 微砂少含 C 不良 D 完存
113	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.5 器高 3.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.9	天井部は高く、平坦である。体部は立ち上りやや丸味をもつ。 口縁部は内傾し、端部は鋭い。 天井部と体部の境は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
114	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.5 器高 1.2 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	天井部は低く扁平である。体部との境を肥厚する。 口縁部は外方に薄く引き出され、小さく折り曲げる。 端部は丸い。 外天井部は未調整で部分的にナデ調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
115	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.5 器高 2.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	天井部は低く、平坦で、体部との境は明瞭。 体部をやや窪ませる。口縁部はやや内傾させ、端部は丸い。 外天井部はナデ調整、天井部と体部の境付近は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄味灰色一部黒褐色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
116	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.5 器高 1.6 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	天井部は低く、平坦で、体部との境は明瞭。 体部をやや窪ませる。口縁部は内傾させ、端部は丸い。 外天井部は粗いナデ調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
117	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 15.6 器高 2.8 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	天井部は高く丸味をもつ。体部との境は不明瞭。 口縁部は直に折り曲げて、端部はやや尖る。 外天井部は未調整、マキアゲ痕が残る。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 不良 D 完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
118	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.6 器高 2.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	天井部はやや高く丸味をもつ。体部との境は不明瞭。 口縁部は直に下り、端部はやや丸い。中央が窪む。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 2/3
119	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.6 器高 2.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	天井部はやや高く、平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部の折り曲げはあまく、丸味をもち、端部も丸い。 外天井部は未調整、部分的にナデがみられる。	A 内、橙褐色 外、橙褐色～褐色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
120	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.6 器高 2.1 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 体部はやや窪み、口縁部は中央で段がつく。 外天井部1/3回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
121	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.6 器高 2.1 つまみ径 2.3 つまみ高 0.3	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は小さく折り曲げて内傾させる。端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰味黄褐色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
122	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.7 器高 1.3 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	天井部は低く、扁平である。体部との境付近を肥厚する。 口縁部はやや外傾させる。 外天井部はナデ未調整。	A 内・外、白黄色 B 精良 C 不良 D 完存
123	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.7 器高 1.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	天井部は低く、扁平である。体部との境付近を肥厚する。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
124	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.7 器高 1.5 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	天井部は低く、扁平である。 口縁部は薄く引き出し、直に高く折り曲げる。端部は丸い。 外天井部は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
125	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.7 器高 2.1 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	天井部は低く、平坦である。 体部をやや窪ませる。 口縁は小さく内傾させ、端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、暗灰色～茶 灰色 B 細砂少含、微砂多含 C 良好 D 完存
126	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.7 器高 2.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	天井部は低く平坦で、体部をとの境は明瞭である。 口縁部は、直に下り、中央を窪める。 外天井部1/2ナデ調整。体部との境は工具によるナデ。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
127	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.8 器高 1.7 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	焼け歪みで変形する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
128	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.8 器高 1.8 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	焼け歪みで変形する。 外天井部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 完存
129	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.9 器高 2.1 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は内傾させ、中央が窪む。 外天井部1/2回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～褐色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
130	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.8 器高 1.5 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	天井部は低く平坦である。体部は薄く仕上げる。 口縁部は直に下がり、端部は丸い。 外天井部はナデ調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好堅緻 D 完存
131	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 15.9 器高 2.3 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	天井部は低く、平坦に近い。 口縁部は内傾させ、端部は丸い。 外天井部は未調整、工具痕が明瞭に残る。	A 内・外、緑灰色～黒 灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/3
132	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 16.0 器高 1.7 つまみ径 2.2 つまみ高 0.4	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 体部をやや窪ませる。口縁部は直に下り、端部やや丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
133	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 16.0 器高 1.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.4	焼け歪みで変形する。 外天井部は未調整。	A 内、紫灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 4/5
134	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 16.0 器高 1.8 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	天井部は低く、平坦で、体部との境は明瞭である。 体部をやや丸味をもつ。口縁部は直に下り、中央が窪む。 外天井部は回転ヘラ削り調整。マキアゲ痕が残る。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4



## M-1地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
135	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.0 器高 1.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は外傾させ、端部はやや鋭い。 外天井部は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D 4/5
136	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.0 器高 1.8 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は外傾させ、端部はやや鋭い。 外天井部は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
137	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.0 器高 2.7 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	天井部は高く、平坦である。体部との境はやや丸味をもつ。 体部は口縁部付近で窪ませる。口縁部はやや外傾し、端部は丸い。 天井部・体部の境付近は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、暗茶褐色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
138	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.0 器高 1.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	天井部は低く扁平である。口縁部は外方へ引き出し、小さく折り曲げる。端部は丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
139	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.0 器高 1.7 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	天井部は低く扁平である。口縁部は外傾させ、端部はやや鋭い。 外天井部は、1/2回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
第136図 140	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.1 器高 1.9 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	天井部は低く、平坦である。体部は丸味をもつ。 口縁部はやや外傾させ、端部わずかに平坦面をもつ。 外天井部と体部の境付近は、回転ヘラ削り調整。	A 内、褐色味灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
141	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.2 器高 2.3 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	天井部は低く、平坦である。口縁部は内傾させる。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
142	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.2 器高 2.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	天井部は低く、平坦に近い。体部との境に段がつく。 口縁部はわずかにつまみ出す。 外天井部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 微砂多含 C 普通 D 完存
143	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.2 器高 2.1 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	焼け歪みで変形する。 口縁部は、小さく折り曲げ、端部は丸い。 外天井部は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄味灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
144	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.3 器高 2.4 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は内傾し、端部は丸い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。調整が悪くマキアゲ痕が明瞭である。	A 内・外、白黄灰色 B 砂粒少含 C 不良 D 4/5
145	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.4 器高 2.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	天井部は低く平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は内傾させ、中央を窪ませる。外天井部は未調整。 外天井部と体部の境付近は回転ヘラ削り調整。	A 明灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
146	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.4 器高 2.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	天井部は平坦で、体部との境は明瞭である。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
147	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.4 器高 1.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	焼け歪みで変形する。 外天井部は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 完存
148	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 16.8 器高 1.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	焼け歪みで変形する。 外天井部は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
149	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 17.0 器高 1.8 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	天井部は低く、平坦である。体部は若干窪む。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は1/3回転ヘラ削り調整。中央部は平行タタキ痕が残る。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/3
150	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 17.1 器高 3.0 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	天井部はやや高く、平坦に近い。体部との境は丸味をもつ。 口縁部は小さく折り曲げ、中央が窪む。端部はやや鋭い。 外天井部は未調整。	A 内・外、暗灰色～黒灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 3/4
151	蓋杯(蓋)	51・52号窯灰原	口径 17.3 器高 1.7 つまみ径 3.0 つまみ高 0.8	天井部は低く、扁平である。体部との境付近を肥厚させる。 口縁部はやや外傾させ、端部は丸い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。ヒビ割れでやや変形する。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
152	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 20.3 器高 2.7 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	天井部は低く、平坦である。体部はやや丸味をもつ。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 2/3
153	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 20.7 器高 2.5 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	天井部は低く、平坦である。体部はやや丸味をもつ。 口縁部は直に下り、端部は丸い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰味黄色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
154	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.5 器高 1.9	天井部は低く、丸味をもつ。体部はやや窪む。 口縁部はやや外傾させ、端部は丸い。 外天井部はナデ調整、平行タタキ痕が残る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
155	蓋杯 (蓋)	51・52 号窯 灰原	口径 14.7 器高 1.4	天井部は低く、平坦である。体部はやや窪む。 口縁部はやや外傾させ、端部はやや鋭い。 外天井部は未調整、平行タタキ痕が残る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
156	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 11.5 器高 3.8 高台径 8.8 高台高 0.4	体部はやや外反気味に上外方へのびる。 体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端のやや内側に貼付する。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好、堅緻 D 完存
157	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 12.0 器高 3.8 高台径 7.0 高台高 0.3	体部はやや外反気味に上外方へのびる。 体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端のやや内側に貼付する。 外底部に平行タタキ痕が残る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/5
158	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 12.4 器高 3.5 高台径 7.2 高台高 0.3	体部はやや外反気味に上外方へのびる。 体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端より内側に貼付する。 外底部はナデ調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
159	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 12.8 器高 3.4 高台径 8.3 高台高 0.3	体部は直線的にのび、口縁部がやや外反する。 体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端より内側に貼付する。 外底部はナデ、中央に板圧痕が残る。	A 内・外、灰色 B 微砂多含 C 良好 D 1/2
160	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 13.1 器高 3.7 高台径 8.8 高台高 0.3	体部はやや外反気味に上外方へのびる。 体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端より内側に貼付する。 外底部未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/3
161	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 13.2 器高 3.6 高台径 7.7 高台高 0.3	体部は外反し、上外へのびる。 体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端より内側に貼付する。 外底部は未調整。板圧痕が残る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 微砂、細砂多含 C 良好 D 1/2
162	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 13.4 器高 4.7 高台径 10.2 高台高 0.4	焼け歪みで変形する。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 1/3
163	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 13.5 器高 3.5 高台径 9.4 高台高 0.4	体部は外反気味にのび、口縁部はさらに外反する。 体部と底部の境は丸味をもつ。 高台は外底端の内側に貼付する。 外底部はナデ調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
164	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 13.5 器高 3.7 高台径 9.3 高台高 0.4	焼け歪みで変形する。 砂粒が多く器壁があれ、調整不明。	A 内・外、灰色～黒色 ～松葉色 B 小砂多含、砂粒少含 C 普通 D 完存
165	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 13.7 器高 3.9 高台径 9.8 高台高 0.3	体部はわずかに内彎気味である。 体部と底部の境は丸味をもつ。 高台は外底端のやや内側に貼付する。 外底部はナデ調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
166	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 13.9 器高 4.7 高台径 9.2 高台高 0.5	体部は外反気味にのび、底部の境は明瞭である。 高台はやや長めで、外底端のやや内側に貼付する。 外底部1/2回転ナデ、中央1/2は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 堅緻 D 完存
第137図 167	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 14.0 器高 4.1 高台径 10.6 高台高 0.4	体部は外反気味にのびる。体部と底部の境は丸味をもつ。 高台は外底端のやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
168	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 14.0 器高 4.5 高台径 10.2 高台高 0.5	体部は直線的に上外方へのびる。 体部と底部の境はやや丸い。 高台は外底端のやや内側に貼付される。 外底部はナデ調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好堅緻 D 完存

## M-1地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
169	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.0 器高 4.0 高台径 9.3 高台高 0.4	体部は直線的に上外方へのび、口縁部は外反する。 体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端のやや内側につく。 外底部はナデ調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
170	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.0 器高 4.6 高台径 9.6 高台高 0.5	体部はやや外反気味に上外方へのび、体部と底部の境は丸味をもつ。 高台は外底端の内側につく。 外底部に板圧痕が残る。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D 2/5
171	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.1 器高 4.0 高台径 10.4 高台高 0.5	体部は外反気味にのびる。体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端のやや内側に貼付する。 外底部は未調整。外面は灰を被り黒化している。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
172	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.1 器高 3.9 高台径 9.6 高台高 0.5	体部は直線的にのび、口縁部にかけて薄く仕上げる。 体部と底部との境は明瞭である。 高台は外底端のやや内側に貼付する。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
173	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.2 器高 4.0 高台径 8.6 高台高 0.4	体部は外反気味にのびる。 体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端のやや内側に貼付する。 外底部はナデ調整。	A 内・外、白黄色 B 精良 C 普通 D 完存
174	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.2 器高 3.6 高台径 9.6 高台高 0.4	体部は外反気味にのびる。 体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端のやや内側に貼付する。 外底部はナデ調整。	A 内、緑灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 4/5
175	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.2 器高 3.6 高台径 8.8 高台高 0.4	体部は直線的にのび、口縁部がやや外反する。 体部と底部の境は明瞭である。 高台は外底端の内側に貼付する。 外底部は未調整。工具痕が残る。	A 内、暗青灰色 外、灰色～黒色 B 微砂多含 C 良好 D 完存
176	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.2 器高 4.0 高台径 9.8 高台高 0.3	体部はわずかに外反してのび、底部との境は明瞭である。 高台は外底端の内側に貼付する。 外底部は板状圧痕が残る。	A 内・外、白灰色 B 細砂、砂粒少含 C 不良 D 2/3
177	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.2 器高 4.1 高台径 10.7 高台高 0.4	体部は外反気味にのびる。底部との境は丸味をもつ。 高台は外底端に貼付する。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外 黄味 灰色～一部黒色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
178	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.4 器高 4.2 高台径 10.1 高台高 0.5	体部は直線的に外上方へのびる。底部との境はやや丸い。 高台は外底端に貼付する。 外底部はナデ調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
179	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.4 器高 4.1 高台径 10.6 高台高 0.4	体部は直線的に外上方へのび、底部との境は不明瞭。 高台は外底端に貼付する。 外底部はナデ調整。	A 内・外、黄褐色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
180	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.5 器高 4.2 高台径 10.5 高台高 0.4	体部は直線的に外上方へのび、底部との境は丸い。 高台は外底端に貼付する。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
181	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.7 器高 4.2 高台径 10.6 高台高 0.5	体部は外反気味にのび、底部との境は明瞭である。 高台は外底端の内側に貼付する。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 普通 D 完存
182	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.7 器高 5.1 高台径 10.4 高台高 0.6	体部は深く、直線的にのびる。底部との境は丸味をもつ。 高台は外底端に貼付する。 外底部はナデ調整。	A 内・外、白褐色 B 微砂多含、金雲母、 赤褐色粒含 C 普通 D 完存
183	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.7 器高 4.3 高台径 10.7 高台高 0.6	焼け歪みでやや変形する。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
184	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 14.8 器高 4.5 高台径 11.0 高台高 0.4	やや変形する。体部は直線的にのびる。底部との境は明瞭である。 高台は外底端やや内側に貼付する。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
185	蓋杯(身)	51・52号窯灰原	口径 15.0 器高 4.4 高台径 10.9 高台高 0.7	体部は直線的にのび、底部との境は明瞭である。 高台は外底端に貼付される。 外底部はナデ調整。	A 内・外、灰味褐色 B 細砂多含 C 普通 D 完存

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
186	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 15.1 器高 4.1 高台径 10.3 高台高 0.4	体部は直線的にのび、底部との境は明瞭である。 高台は外底端に貼付される。 外底部は未調整。	A 内・外、茶灰色 B 細砂多含 C 普通 D 完存
第138図 187	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 15.3 器高 4.8 高台径 10.6 高台高 0.4	体部は直線的に立上り、口縁部はやや外反する。 高台は外底端のやや内側に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
188	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 15.6 器高 3.8 高台径 12.2 高台高 0.5	体部は直線的に上方外のびる。底部との境は丸い。 高台は外底端に貼付する。 外底部は未調整。	A 内・外、白緑灰色～ 赤味灰色 B 微砂多含、細砂少含 C 良好 D 完存
189	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 16.7 器高 5.0 高台径 10.0 高台高 0.4	体部は直線的に上方外のび、底部との境は明瞭である。 高台は外底端の内側に貼付する。 外底部はナデ調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
190	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 16.8 器高 5.0 高台径 9.8 高台高 0.5	体部は直線的に上方外のび、底部との境は明瞭である。 高台は外底端の内側に貼付する。 外底部はナデ調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含、金雲母含 C 普通 D 完存
191	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 17.7 器高 5.7 高台径 11.3 高台高 0.4	体部は直線的に上方外のび、底部との境はやや丸い。 高台は外底端のやや内側に貼付する。 外底部は未調整。	A 内、白茶色 外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
192	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 18.0 器高 5.1 高台径 10.8 高台高 0.5	体部は直線的に上方外のび、底部との境はやや丸味をもつ。 高台は外底端の内側に貼付する。 外底部は未調整。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
193	蓋杯 (身)	51・52 号窯 灰原	口径 19.0 器高 5.8 高台径 12.4 高台高 0.6	体部はやや外反気味にのび、底部との境はやや丸味をもつ。 高台は外底端の内側に貼付する。 外底部は未調整。	A 内・外、明黄橙色～ 明茶色 B 細砂多含 C 普通 D 4/5
194	杯	51・52 号窯 灰原	口径 12.2 器高 3.1 底径 9.7	体部は直線的にのびる。口縁部は丸い。 底部との境は明瞭である。 外底部は未調整である。	A 内・外、薄黄褐色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
195	杯	51・52 号窯 灰原	口径 12.8 器高 4.2 底径 9.8	体部はやや内彎気味立上る。 底部との境は丸味をもつ。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 完存
196	杯	51・52 号窯 灰原	口径 14.2 器高 3.5 底径 9.9	体部はやや外反気味である。底部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内・外、白黄色～灰色 B 細砂多含 C 不良 D 完存
197	杯	51・52 号窯 灰原	口径 14.3 器高 3.5 底径 10.9	体部はやや外反する。底部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
198	皿	51・52 号窯 灰原	口径 10.7 器底径 8.0	体部は直線的にのびる。底部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
199	皿	51・52 号窯 灰原	口径 13.7 器底径 11.2	体部は短く、外反する。底部との境に丸味をもつ。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 普通 D 完存
200	皿	51・52 号窯 灰原	口径 16.0 器底径 13.8	体部はやや外反する。底部との境はやや丸い。 外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、灰色 B 細砂、砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存
201	皿	51・52 号窯 灰原	口径 18.0 器底径 14.6	体部は外反気味にのび、底部との境は明瞭である。 外底部は未調整。板圧痕が残る。	A 内・外、暗緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/4
202	皿	51・52 号窯 灰原	口径 18.0 器底径 13.7	体部はやや外反気味にのび、底部との境に丸味をもつ。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 微砂少含 C 良好 D 1/5

M-1 地区

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
203	皿	51・52号窯灰原	口径 18.1 器高 2.5 底径 14.7	体部は直線の立上り、口縁部はやや外反する。外底部はナデ調整。他は未調整で工具痕が残る。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒、礫少含 C 普通 D 完存
204	皿	51・52号窯灰原	口径 18.7 器高 2.6 底径 15.5	体部は直線的に立上り、口縁部は上外方につまみ出す。外底部は未調整。工具痕が残る。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D 4/5
205	皿	51・52号窯灰原	口径 19.0 器高 2.6 底径 15.8	体部は直線的に立上り、口縁部は上外方へつまみ出す。外底部は未調整。板圧痕が残る。	A 内、暗灰色～黒灰色 外、暗灰色 B 微砂少含 C 良好 D 1/4
206	皿	51・52号窯灰原	口径 19.0 器高 2.1 底径 15.7	体部は外反気味に立上り、口縁部は上外方へつまみ出す。外底部は未調整で凹凸が著しく、板圧痕が残る。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/4
207	皿	51・52号窯灰原	口径 19.2 器高 2.6 底径 16.0	体部は外反気味に立上る。底部との境は明瞭である。外底端から1/2はナデ調整、1/2は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 2/5
208	皿	51・52号窯灰原	口径 19.4 器高 2.6 底径 16.0	体部は直線的に立上り、口縁部を外反させる。底部との境は明瞭である。外底部は未調整で、板圧痕、工具痕が残る。	A 内・外、暗灰色～淡肌色 B 微砂少含 C 普通 D 1/3
209	皿	51・52号窯灰原	口径 19.6 器高 2.9 底径 16.0	体部・口縁部は外反する。底部との境は明瞭である。外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色～黄灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 1/5
第139図 210	皿	51・52号窯灰原	口径 19.8 器高 2.6 底径 15.8	体部は直線的に立上り、口縁部は肥厚させる。底部との境は明瞭である。外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
211	皿	51・52号窯灰原	口径 20.0 器高 3.0 底径 18.0	体部は内彎する。口縁端部は中央がやや窪む。底部との境は丸味をもつ。外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
212	皿	51・52号窯灰原	口径 20.1 器高 3.8 底径 18.3	体部は内彎する。口縁端部は、中央がやや窪んで内傾させる。底部との境は丸味をもつ。外底部中央はナデ調整。2/3は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 3/4
213	皿	51・52号窯灰原	口径 20.6 器高 2.3 底径 17.3	体部・口縁端部は外反する。底部との境は丸味をもつ。外底部は未調整。工具痕が残る。	A 内・外、白灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
214	高杯	51・52号窯灰原	脚底径 10.0 脚部高 8.5	脚部はやや長く、脚底部は大きく開き端部は外傾する。内、外面にシボリ痕がみられる。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～一部灰色 B 細砂多含 C 良好 D 脚底残 1/4
215	高杯	51・52号窯灰原	脚底径 14.5 脚部高 13.8	脚部は長く、裾近くで開き、端部は直に下る。ナデ調整される、シボリ痕が残る。	A 内・外、白味黄褐色 B 細砂少含 C 普通 D 脚部ほぼ完存
216	高杯	51・52号窯灰原	口径 21.4 器高 8.2 脚底径 10.6 脚部高 6.8	口頸部は直立し、端部は内傾する。脚は大きく開き、端部は肥厚し外傾する。杯底部外面は回転ヘラ削り調整、他はナデ調整。脚にシボリ痕がのこる。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 5/6
217	高杯	51・52号窯灰原	口径 21.8 器高 8.5 脚底径 10.8 脚部高 6.8	口頸部は外反気味に立上る。端部は平坦面を有す。脚は大きく開く。端部は折り曲げて外傾させる。杯底外面は回転ヘラ削り調整。脚にシボリ痕が残る。	A 内・外、黄味灰色 B 細砂多含 C 良好 D 5/6
218	高杯	51・52号窯灰原	口径 21.0 器高 8.2 脚底径 12.0 脚部高 5.0	杯・脚部ともに焼け歪みで、大きく変形する。杯底外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 6/7
219	高杯	51・52号窯灰原	口径 26.3 器高 13.0 脚底径 13.2 脚部高 10.3	口頸部は直立し、端部は内傾する。脚は長く、裾近くで大きく開く。端部は外傾させる。杯底外面は1/2回転ヘラ削り調整。脚部は回転ナデ調整、シボリ痕が残る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
220	高杯	51・52号窯 灰原	口径 22.0 器高 10.0 脚底径 11.6 脚部高 8.7	口頸部は直立し、端部は平坦面を有す。 脚部はやや短く、大きく開く。端部は直に下る。 杯底外面は回転ヘラ削り調整。 脚部は回転ナデ調整、シボリ痕が残る	A 内・外、灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 完存
第140図 221	高杯	51・52号窯 灰原	口径 26.4 器高 15.1 脚底径 14.3 脚部高 13.0	口頸部は直立し、端部は内傾する。 脚は長く、裾近くで大きく開く。端部は直に下る。 杯底外面は1/2回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白黄色 B 細砂、砂粒少含 C 不良 D 2/3
222	高杯	51・52号窯 灰原	口径 28.2 器高 12.7 脚底径 13.6 脚部高 11.2	口頸部は外傾する。端部は平坦で内傾する。 杯底部は浅く平坦である。脚部は長く、端部は外傾する。 杯底部外面は回転ヘラ削り調整。 脚部は回転ナデ、シボリ痕が残る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 4/5
223	高杯	51・52号窯 灰原	口径 27.7 器高 17.5 脚底径 14.0 脚部高 14.2	口頸部は内傾する。端部は中央がやや窪む。 杯部は深い。脚部は長く、端部は直に下る。 杯底端は回転ヘラ削り調整。脚部は回転ナデ。 脚部内面にシボリ痕が残る。	A 内・外、白黄色 B 砂粒、礫少含 C 不良 D 2/3
224	高杯	51・52号窯 灰原	口径 28.2	口頸部は直立し、端部は内傾する。 杯部は深い。杯底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄味灰色 B 細砂多含 C 良好 D 杯部残5/6
225	短頸壺 (蓋)	51・52号窯 灰原	口径 7.0	天井部は平坦で、体部はやや丸味をもつ。 口縁端部は平坦。 外天井部は回転ナデ調整。焼成前の穿孔が2孔ある。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
226	短頸壺 (蓋)	51・52号窯 灰原	口径 9.9 器高 2.1 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	天井部は平坦で、体部はやや外傾する。 外天井部は回転ヘラ削り調整、体部内面は横方向の静止ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 精良 C 良好 D 完存
227	短頸壺 (蓋)	51・52号窯 灰原	口径 16.0 器高 4.9 つまみ径 2.2 つまみ高 1.5	天井部は平坦である。体部は直に下る。口縁下は平坦。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰褐色～黒色 外、灰褐色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/2
第141図 228	短頸壺 (身)	51・52号窯 窯内 灰原	口径 11.8 胴部最大径 23.8	口頸部は直立し、端部は平坦である。 胴部最大径は上位にある。 最大胴部付近と胴部下位外面は、回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗緑灰色 外、青灰色～黒色 B 微砂少含 C 良好 D 1/3
229	鉢	51・52号窯 灰原	口径 24.0 器高 16.5 底径 14.2	体部はわずかに外反する。口縁端部は平坦面を有す。 体部・底部の境は明瞭で底径が大きい。 体部下位、外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄味灰色～ 灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 完存
230	鉢	51・52号窯 灰原	口径 25.3 器高 15.5 底径 14.8	体部は外傾し、口縁端部は大きく開く。端部は中央が窪む。 体部下位、外底部は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～赤茶 褐色 B 砂粒多含 C 良好 D 5/6
231	鉢	51・52号窯 灰原	口径 27.0	口縁下に緩やかな段をつくる。端部やや外傾する。 磨滅のため調整不明。	A 内、黄灰色 外、白灰色～黒灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 1/2
232	鉢	51・52号窯 灰原	口径 27.1 器高 18.0 底径 17.5	体部は直線的に外傾する。 体部外面中位以下は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、淡黄褐色 B 細砂少含 C 普通 D 4/5
233	鉢	51・52号窯 灰原	口径 31.6 器高 20.7 底径 16.8	口縁部を外反させる。端部は外方へつまみ出す。 体部外面中位以下は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、淡黄褐色 B 細砂多含 C 良好 D 1/3
第142図 234	鉄鉢形 鉢	51・52号窯 灰原	口径 20.3	口縁部端は、中央がやや窪む。 体部外面上位以下は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、青灰色～黒 灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 1/2
235	鉄鉢形 鉢	51・52号窯 灰原		底部片。外面は回転ヘラ削り調整。 内面は回転ナデ、内面底部はナデ調整。	A 内・外、橙色～暗灰色 B 細砂多含、金雲母含 C 良好
236	甕	51・52号窯 灰原	口径 20.9	大きく外反する、口縁部は肥厚させ、端部は外傾する。 内外面、回転ナデ調整。	A 内、緑灰色～茶灰色 外、灰色～緑灰色 B 微砂多含、細砂少含 C 普通

M-2 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
237	壺	51・52号窯 灰原	底径 11.3	胴部は内彎する。底部との境は明瞭で、底径は大きい。 胴部外面中位以下回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好
238	甕	51・52号窯 灰原	口径 39.0 胴部最大径 36.0	頸部は外反し、口縁部は肥厚させ、端部は平坦面をつくる。 胴部外面格子のタタキ、内面は青海波状の当具痕が残る。	A 内、灰色～黒灰色 外、黒色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 口縁部残 1/5
第144図 239	蓋杯 (蓋)	灰原 土壙	口径 15.7 器高 2.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	天井部は低く、体部との境は不明瞭。 口縁部は内傾させ、端部は丸い。 外天井部は未調整。工具痕あり。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 4/6
240	短頸壺 (身)	灰原 土壙	口径 9.8 器高 10.7 高台径 8.6 高台高 0.5	口頸部は直立する。端部は平坦面を有す。 胴部最大径は中央にあり、ここに把手が付く。外底端に高台を貼付する。把手下部・外底部回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
241	短頸壺	灰原 土壙	口径 13.8	口頸部は直立する。端部は肥厚させ、端部は平坦である。 器壁は磨滅し、調整不明。	A 内・外、白橙色 B 細砂多含 C 不良 D 口縁部残 1/4
第146図 247	すり鉢	灰原	底径 11.9	上部は剝離している。底部はナデ調整の後、ヘラ状工具による刺突文が施される。	A 内・外、灰色～黒灰色 ～黒色 B 細砂少含 C 良好
248	蓋	表土	口径 18.4 器高 2.3 つまみ径 1.9 つまみ高 1.0	天井部は低く、扁平である。口縁部は直に下り、端部はまるい。 天井部頂部に擬宝珠様のつまみを有し、さらに天井部平坦部環状のつまみを貼付する。体部外面は回転ヘラ削り調整。 外天井部は回転ナデ調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
249	蓋	表土	口径 15.6	天井部は平坦で、体部はやや窪む。口縁部はやや内傾させ、端部はやや鋭い。天井頂部につまみの接合面が観察できる。 外天井部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 普通 D つまみ欠

M-2 地区 (笹原窯跡群)

第149図 1	甕	69号窯 焚口		外面に格子タタキ、内面に同心円文当具痕を残す。	A 内、黒灰色 外、灰色～黒色 B 礫、少含 C 良好
第150図 2	蓋杯 (蓋) 穿孔土器	69号窯 前庭部 灰原	口径 14.8 器高 1.8	口縁部は下端を小さく引き出して成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 焼成前穿孔。	A 内・外、黄土色 B 微砂多含、砂粒少含 C 不良 D 1/4
3	蓋杯 (蓋) 穿孔土器	69号窯 前庭部 灰原	口径 15.0 器高 1.8	口縁部は緩く折り曲げて成形、端部は丸い。 天井部外面は一部回転ヘラ削り調整。 焼成前穿孔。	A 内・外、黄土色 B 砂粒少含 C 不良 D 1/3
4	杯 穿孔土器	69号窯 前庭部 灰原		外面は磨滅著しい。 焼成前穿孔。	A 内・外、黄土色 B 細砂少含 C 不良 D 1/5
5	蓋杯 (蓋)	69号窯 灰原	口径 14.1 器高 2.5 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼け歪む。	A 内、灰色～黒色 外、暗灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
6	蓋杯 (蓋)	69号窯 灰原	口径 15.0 器高 2.7 つまみ径 3.1 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 磨滅甚しい。	A 内・外、白黄褐色 B 砂粒少含 C 不良 D 3/4
7	蓋杯 (蓋)	69号窯 灰原	口径 15.2 器高 2.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	口縁部は下端を引き出して成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 口縁部内面～外面にかけて灰を被る。	A 内・外、灰色 B 細砂、砂粒少含 C 普通 D 3/5
8	蓋杯 (蓋)	69号窯 灰原	口径 15.3 器高 1.8 つまみ径 2.6 つまみ高 0.3	天井は低く、外面を回転ヘラ削りで仕上げる。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含、赤褐色粒、 金雲母含 C 不良 D 3/5

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
9	蓋杯 (蓋)	69号窯 灰原	口径 15.5 器高 1.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.4	口縁部は下端を小さく引き出して成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄味灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 普通 D 4/5
10	蓋杯 (蓋)	69号窯 灰原	口径 15.5 器高 1.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	口縁部は変形せず、あまい面取りを行う。 天井部外面は回転ヘラ削りの調整。 大きく焼き歪む。	A 内・外、黄灰色～黒灰色 B 砂粒多含 赤褐色粒少含 C 良好 D ほぼ完存
11	蓋杯 (蓋)	69号窯 灰原	口径 16.3 器高 2.3 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は下端を引き出して成形、端部は丸い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 つまみは欠損。	A 内・外、灰色 B 砂粒、角閃石、雲母少含 C 普通 D 3/4
12	蓋杯 (蓋)	69号窯 灰原	口径 17.0	口縁部は折り曲げて成形、外傾する。 天井部は回転ヘラ削り調整。 重ね焼きの痕跡あり、焼き歪む。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～暗灰色～黒色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 6/7
13	蓋杯 (身)	69号窯 灰原	口径 18.7 器高 1.4 高台径 2.9 高台高 0.7	口縁部は下方へ引き出して成形、内傾する。 天井部外面は回転ヘラ削り仕上げ。 焼け歪む。	A 内・外、茶褐色～黒灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
14	蓋杯 (身)	69号窯 灰原	口径 11.9 器高 5.4 高台径 8.7 高台高 0.7	体・口縁部は直線的に立ち上がり、口端部が肥厚する。 底部との屈曲は丸味おび、高台は肉厚で外方へ踏んばる。	A 内、茶褐色 外、黄褐色～明茶色 B 砂粒、礫少含 C 普通 D 3/5
15	蓋杯 (身)	69号窯 灰原	口径 13.4 器高 3.9 高台径 9.8 高台高 0.6	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は丸く、高台は外方へ踏んばる。 器表は磨滅する。	A 内・外、黄味灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 2/3
16	蓋杯 (身)	69号窯 灰原	口径 13.5 器高 5.1 高台径 9.1 高台高 0.4	体・口縁部は直行し、開きが小さい。 底部との屈曲は丸く、高台は低い。 底部外面はナデ調整か、外面に灰を被る。	A 内、黄灰色 外、黄土色～暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 2/5
17	蓋杯 (身)	69号窯 灰原	高台径 8.5 高台高 0.6	体部はやや外反気味に立上る。 底部との屈曲は丸味おび、高台は内傾する。 底部外面は未調整で、ヘラ記号?あり。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/3
18	蓋杯 (身)	69号窯 灰原	口径 14.1 器高 3.6 高台径 10.5 高台高 0.4	口縁部は小さく外反する。 底部との屈曲は丸味おび、すぐ内側の高台と低く変形する。 底部外面はナデ調整。	A 内・外、黄褐色～茶褐色 B 砂粒多含 C 普通 D 4/5
19	蓋杯 (身)	69号窯 灰原	口径 14.6 器高 4.0 高台径 10.7 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 高台は屈曲部にあり、肉厚である。 底部外面は未調整。	A 内、黄土色 外、黄土色～黒色 B 細砂多含 C 不良 D 1/3
20	蓋杯 (身)	69号窯 灰原	口径 14.7 器高 4.1 高台径 10.5 高台高 0.4	体・口縁部は直行する。 底部との屈曲は明瞭で、高台は変形する。 底部外面は未調整。	A 内・外、白黄灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 3/4
21	把手	69号窯 灰原		全体を削り仕上げる。	A 内、灰色 外、黒灰色 B 精良 C 良好
22	蓋杯 (身)	69号窯 左側土壇	口径 14.3 器高 3.8 高台径 10.7 高台高 0.5	体・口縁部は直行。 高台は屈曲部にあり、外方に踏んばる。 酸化炎焼成で、器表磨滅。	A 内・外、明茶色 B 砂粒、赤褐色粒、雲母多含 C 不良 D 5/6
23	蓋杯 (身)	69号窯 左側土壇	口径 14.7 器高 3.7 高台径 10.2 高台高 0.4	口縁部は小さく外反。 底部との屈曲は丸味おび、高台は変形。 酸化炎焼成で器表磨滅。	A 内・外、黄褐色 B 砂粒、赤褐色粒含 C 不良 D 2/3
第150図 24	蓋杯 (蓋)	70号窯 焚口	口径 13.7 器高 2.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 内面に焼け膨れ、灰被りあり。	A 内・外、黒色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
25	蓋杯 (蓋)	70号窯 床面	口径 14.2 器高 2.0 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。 内外に重ね焼き痕あり。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 3/4



M-2 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
26	蓋杯 (蓋) 穿孔土器	70号窯 窯内	口径 14.0 器高 2.0	口縁部は下方に引き出して成形、端部は丸い。 天井部は横ナデで仕上げる。 器表磨減。	A 内・外、黄土色 B 細砂少含 C 不良 D 1/4
27	蓋杯 (蓋)	70号窯 灰原	口径 16.4 器高 2.4 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は折り曲げて成形、直立する。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/2
28	蓋杯 (身) 穿孔土器	70号窯 灰原	高台径 9.6 高台高 0.4	体部は内彎して立上る。 高台は屈曲部にあり、外方へ踏んばる。 底部外面は未調整。 焼成前穿孔。	A 内・外、黄土色 B 砂粒少含 C 不良 D 1/2
29	蓋杯 (身)	70号窯 窯内	口径 13.3 器高 4.5 高台径 9.4 高台高 0.5	体・口縁部は直線的に立上る。 底部との屈曲は丸味をおび、高台は直立する。 底部外面は未調整。 外面に灰を被る。	A 内、紫灰色 外、黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/2
30	蓋杯 (身)	70号窯 窯内	口径 13.4 器高 3.5 高台径 10.2 高台高 0.6	体部は内彎して立上る。 高台は屈曲部であり、肉厚となる。 底部外面はナデ調整で、平行タタキ痕が残る。	A 内、青灰色 外、灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/3
31	蓋杯 (身)	70号窯 灰原	高台径 9.5 高台高 0.4	高台は低く外方へ踏んばる。 底部外面に不定方向の平行タタキ痕を残す。	A 内・外、灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/4
32	蓋杯 (身) 穿孔土器	70号窯 灰原	口径 12.0 器高 4.0 高台径 9.2 高台高 0.4	体部は内彎気味に立上り、直口縁となる。 高台は屈曲部にあり、外方へ踏んばる。 焼成後穿孔？。	A 内・外、灰色 B 細砂、砂粒少含 C 不良 D 1/2
33	蓋	70号窯 灰原	口径 17.0 器高 3.6 つまみ径 3.1 つまみ高 0.9	口縁部は外傾し、端部が丸く肥厚する。 天井部は平らで、外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D 3/4
34	短頸壺 穿孔土器	70号窯 灰原	口径 10.5 器高 4.1 底径 7.9	口縁部は内傾し、外反して端部は丸い。 最大径部分以下は回転ヘラ削り調整。 焼成前穿孔。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 不良 D 2/5
35	横瓶	70号窯 灰原	口径 9.6	口縁部は小さく屈曲し、外傾する面をもつ。 外面に格子タタキ痕、屈曲内面に同心円文当具痕を残す。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/3

# 図 版

B-1 地区



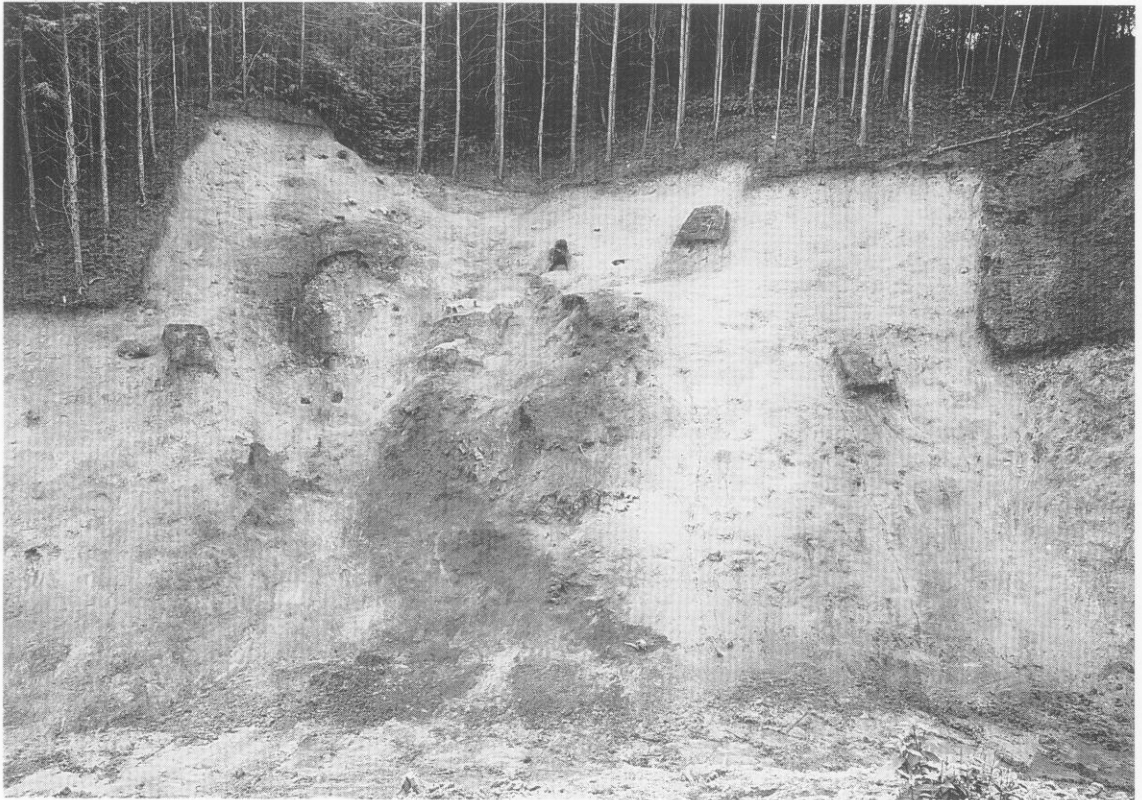
1. 伐採・防災工事後の状況 1



2. 伐採・防災工事後の状況 2



1. 伐根作業状況



2. 19~22号・30~32号窯跡灰原検出状態

B-1 地区



1. 19~22号・30~32号窯跡灰原調査状況



2. 灰原須恵器出土状態



1. 19~22号・30~32号窯跡（西から）



2. 19~21号・30・31号窯跡（南から）



1.  
19  
└ 22号・30  
└ 32号窯跡 (西上空から)

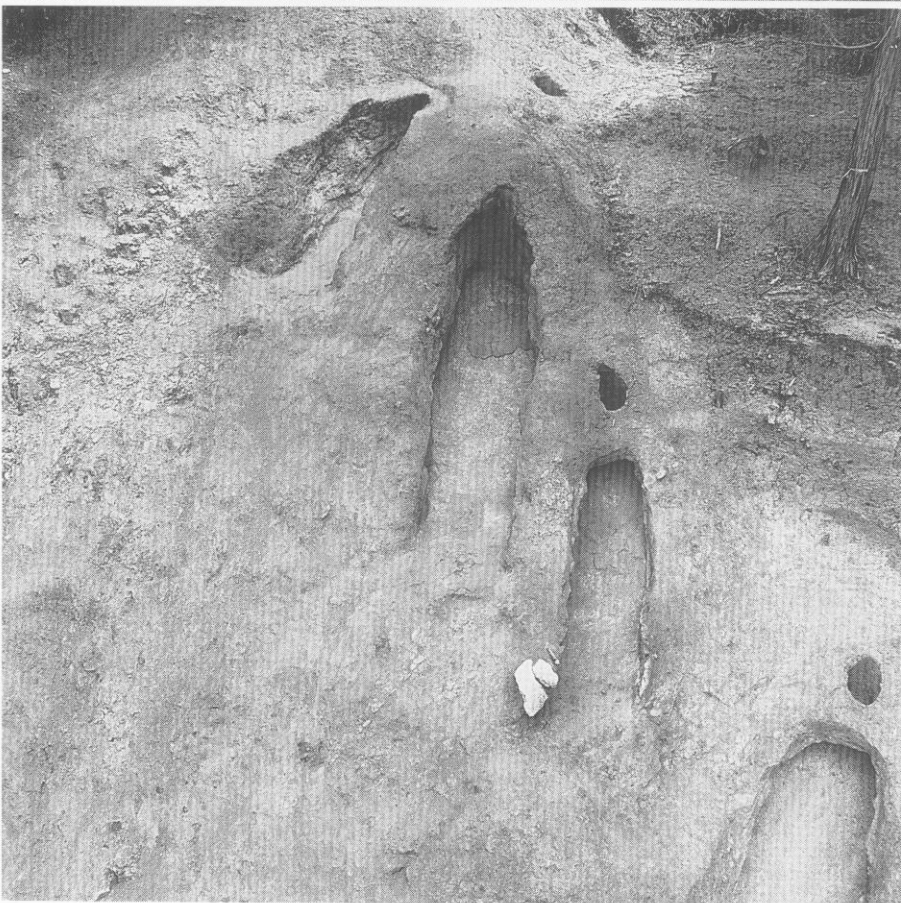


2.  
19  
└ 22号・30  
└ 32号窯跡 (上空から)



B-1 地区

1.  
19 \ 22号・30 \ 32号窯跡 (上空から)



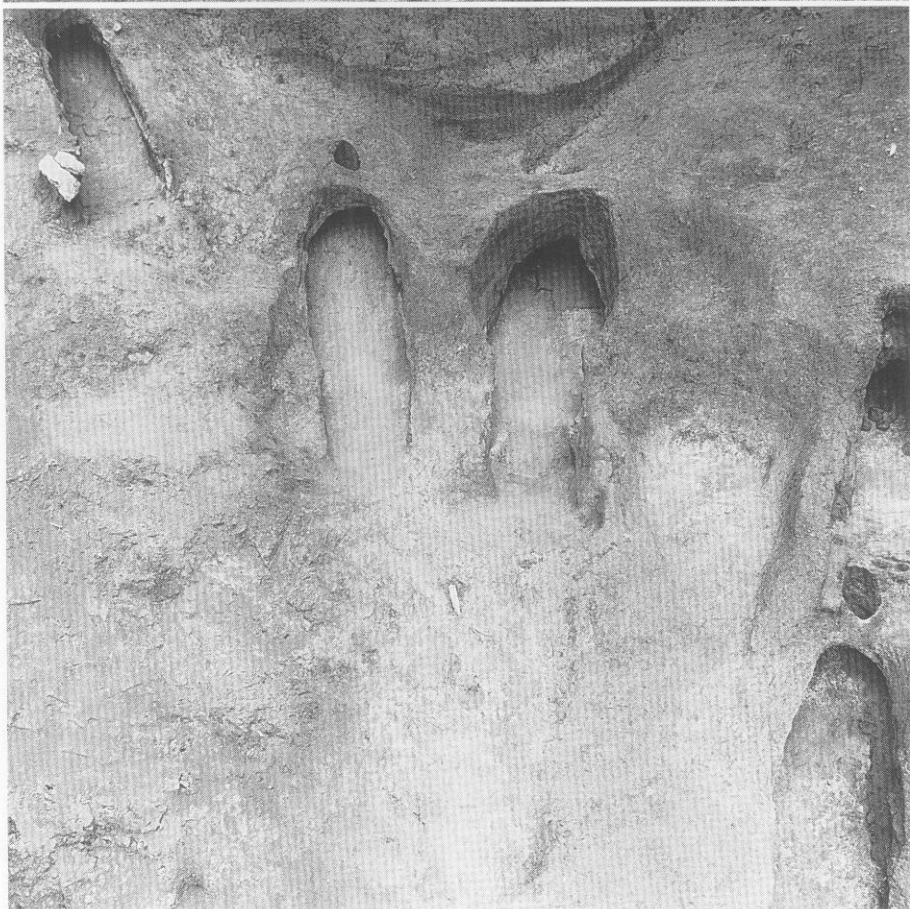
2.  
19 \ 21号窯跡 (西上空から)



1.  
22・31  
・32号窯跡  
(南上空から)



2.  
30・31号窯跡  
(南上空から)





1. 19号窑迹



2. 20号窑迹

B-1 地区



1. 21号窑迹



2. 22号窑迹

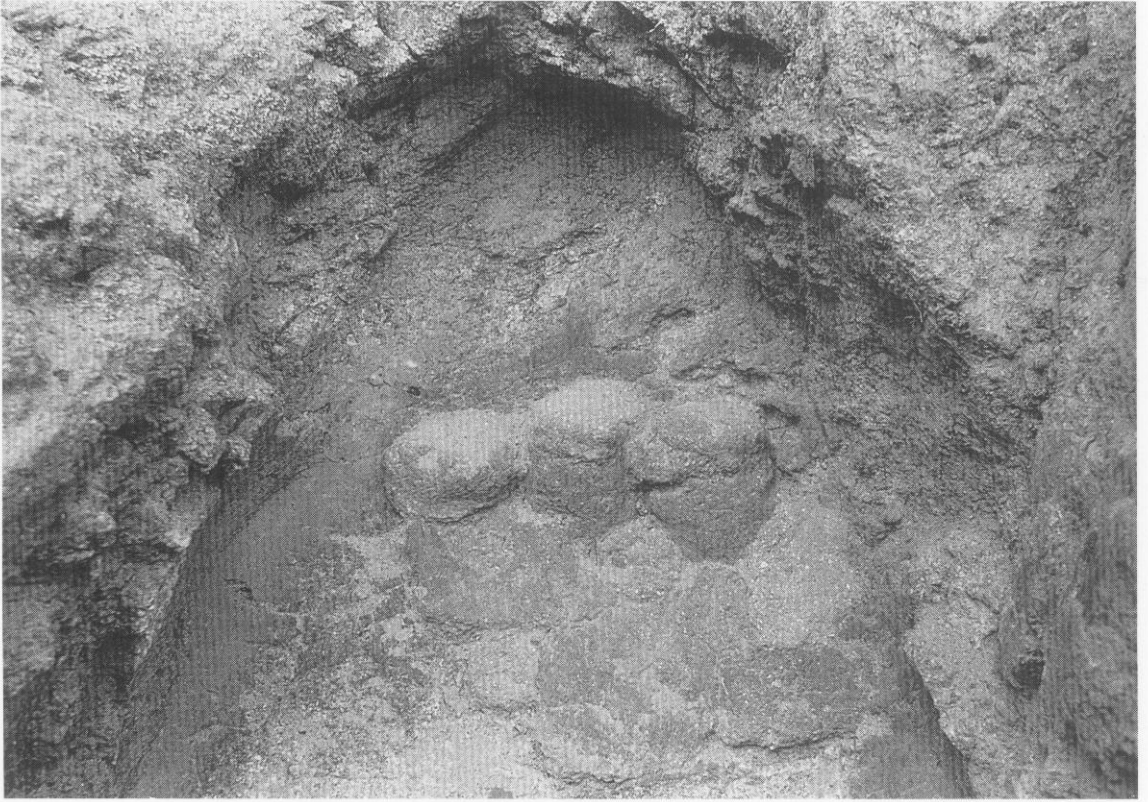


1.  
29号窯跡（南上空から）

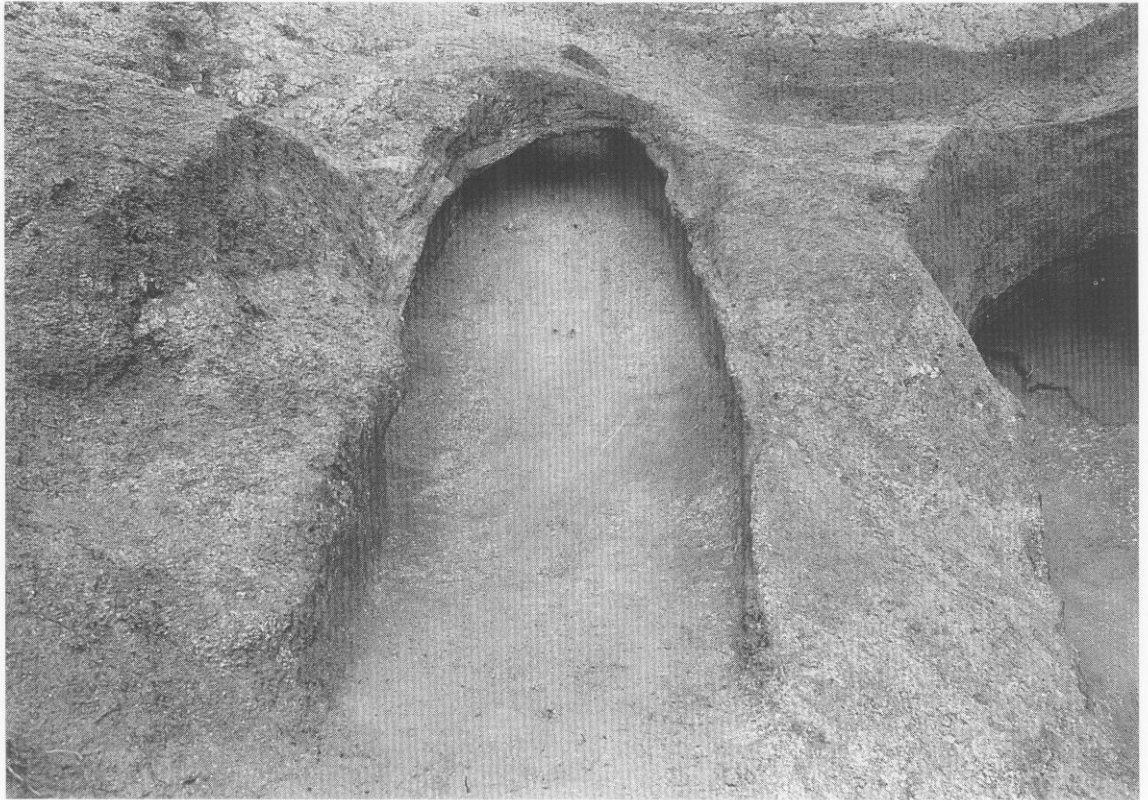


2.  
29号窯跡（南上空から）

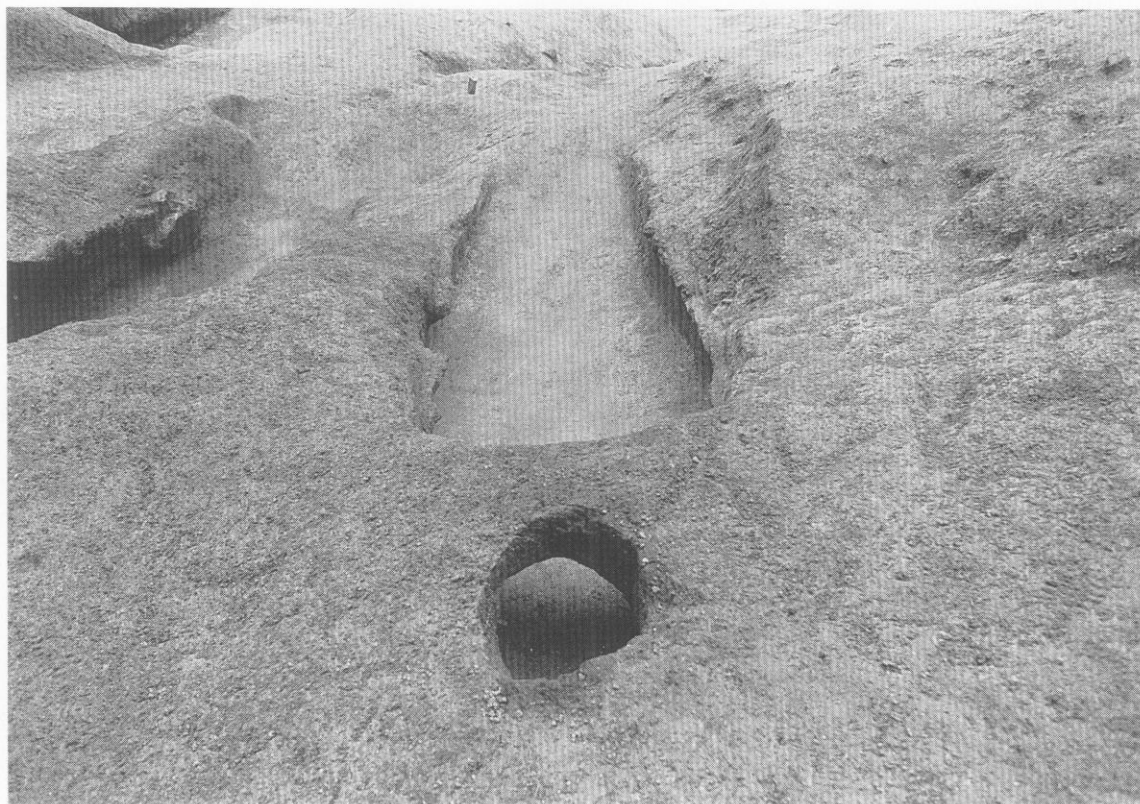
B-1 地区



1. 29号窯跡 置台検出状態



2. 30号窯跡

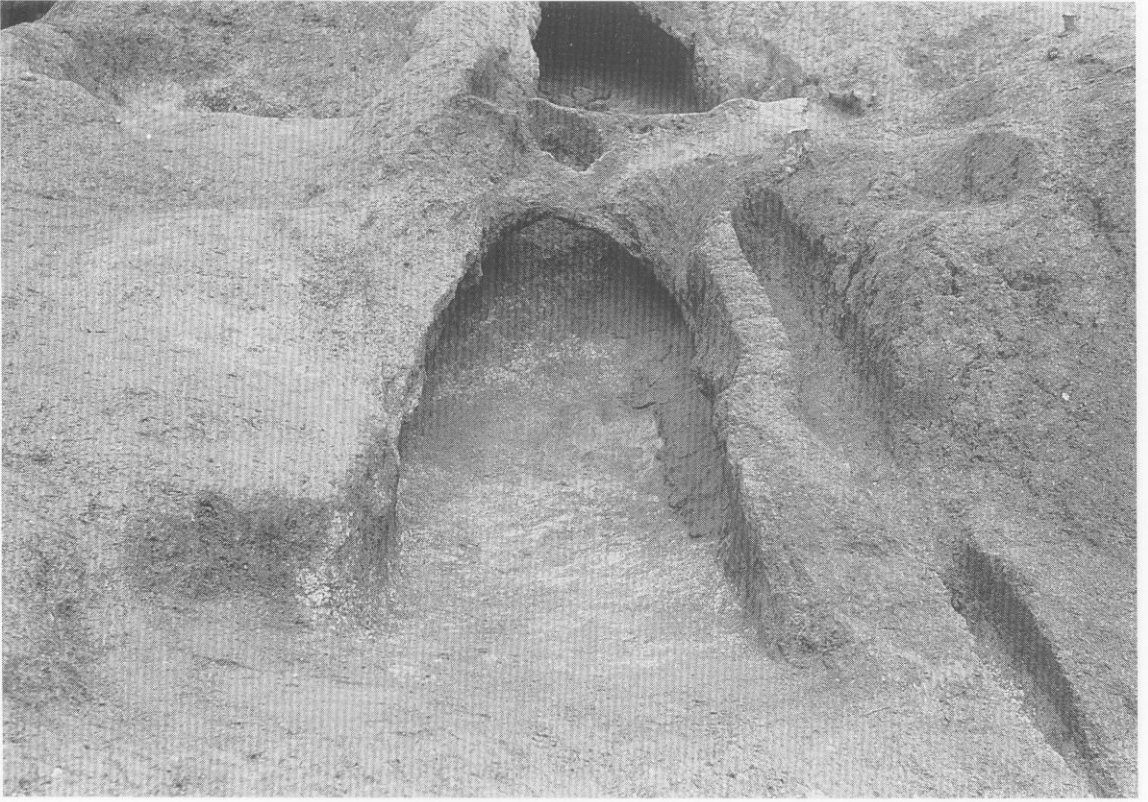


1. 30号窑迹



2. 31号窑迹

B-1 地区



1. 32号窯跡



2. 29・33号窯跡（南から）



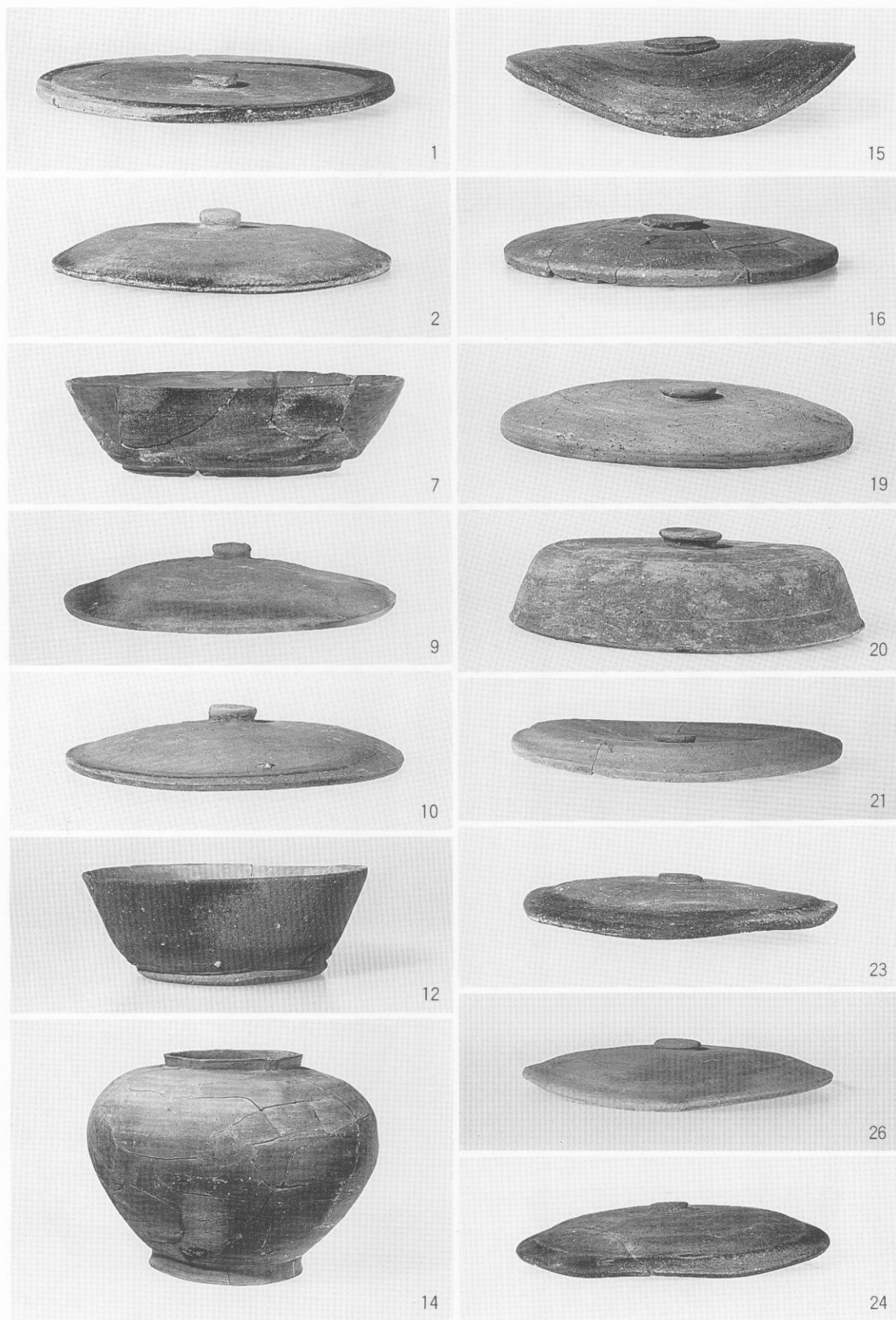
1. 33号窯跡煙道上部須惠器出土状態



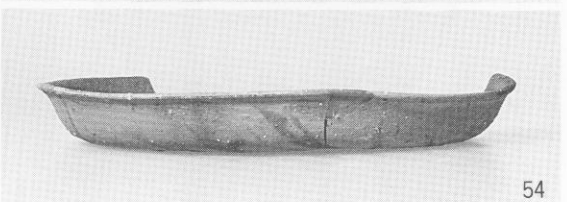
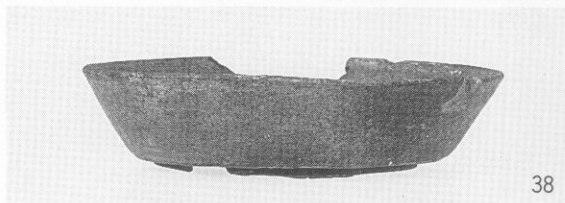
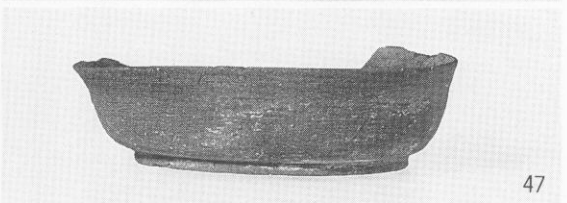
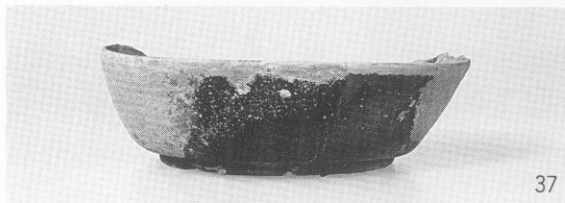
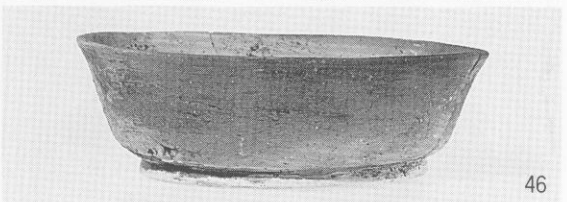
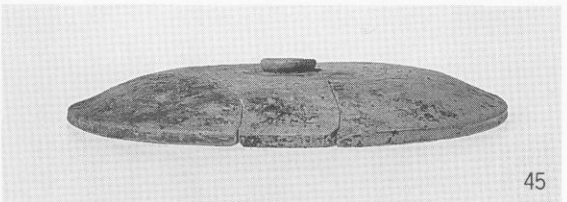
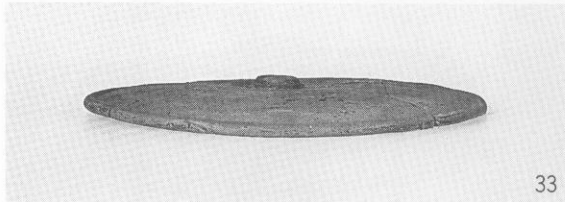
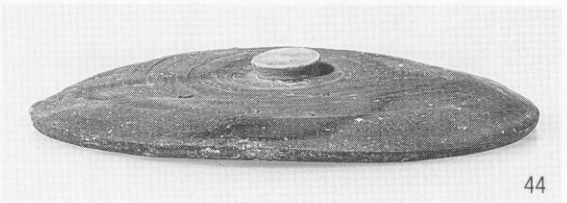
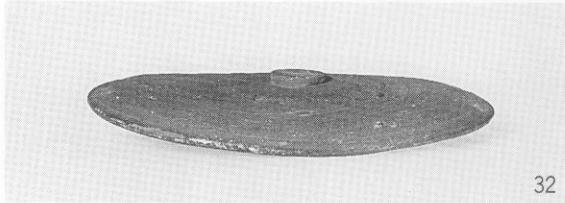
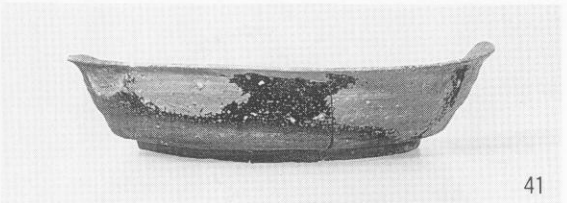
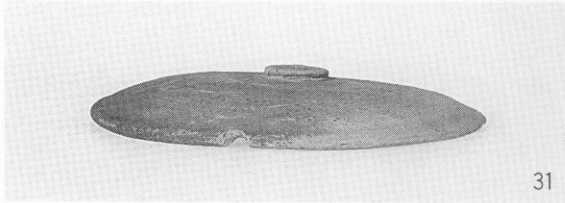
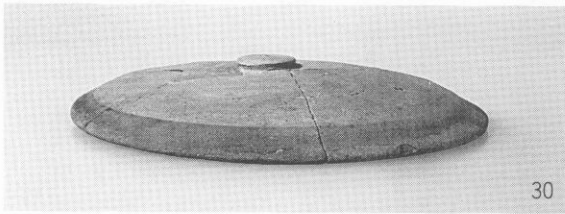
2. 33号窯跡



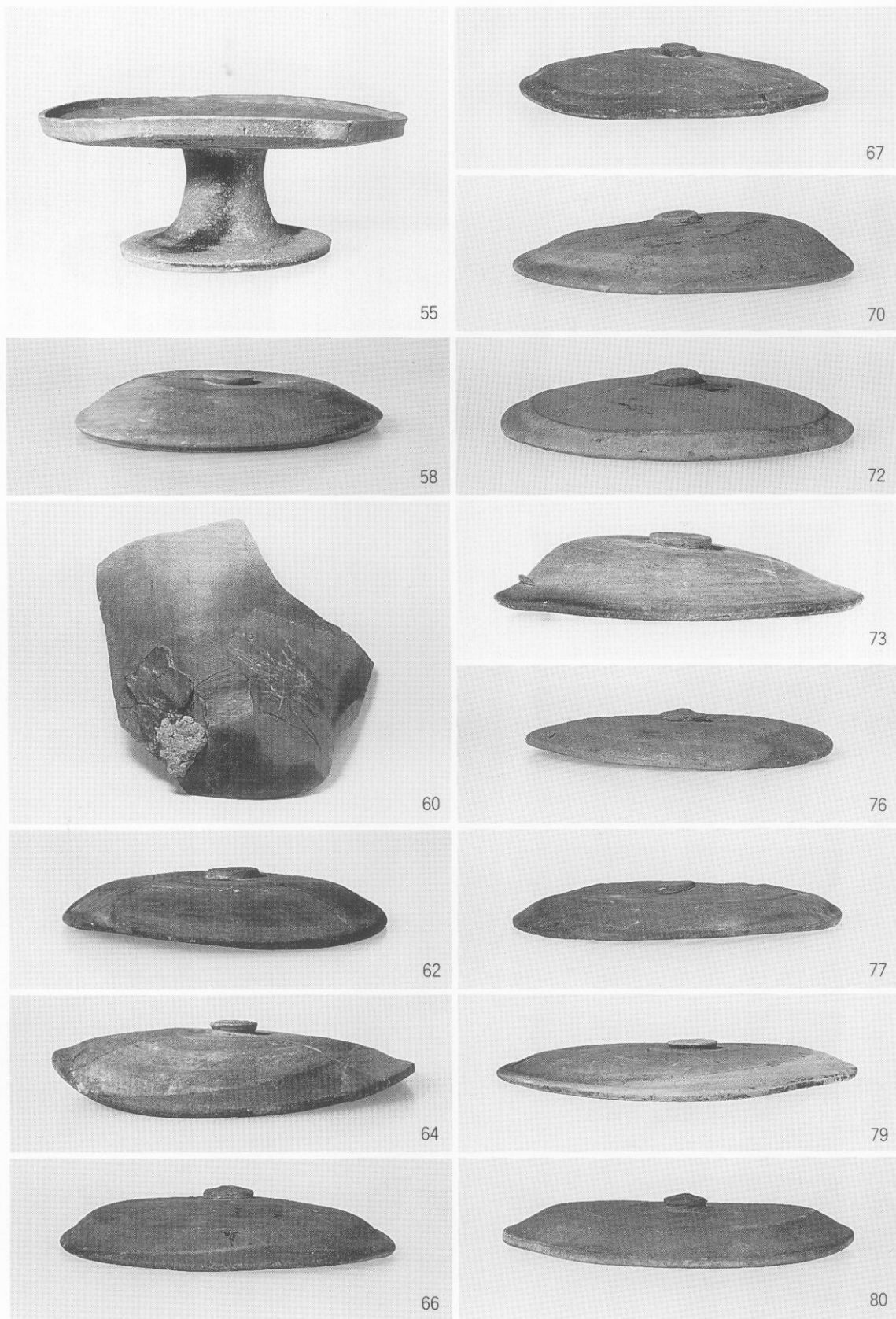
B-1 地区



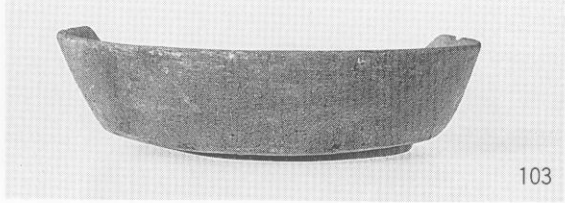
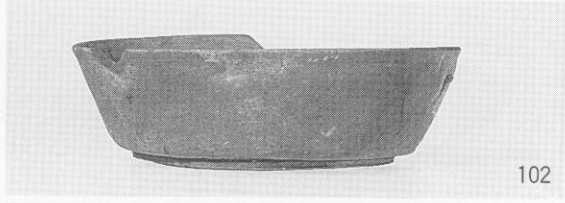
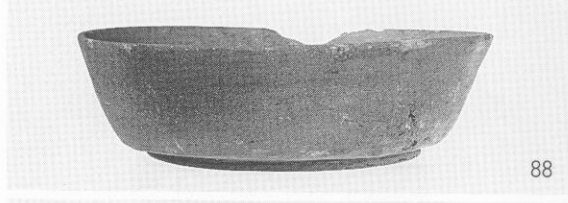
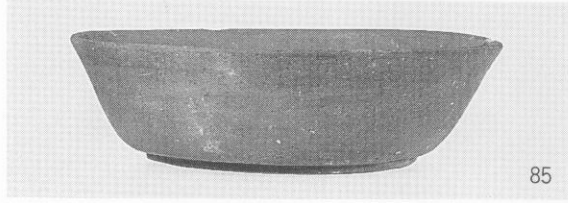
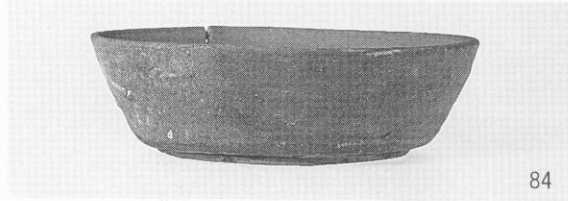
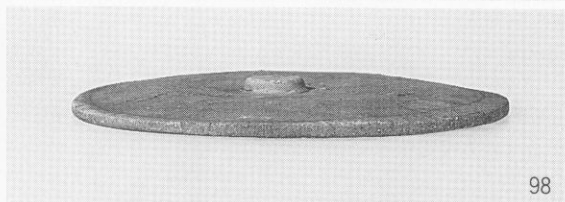
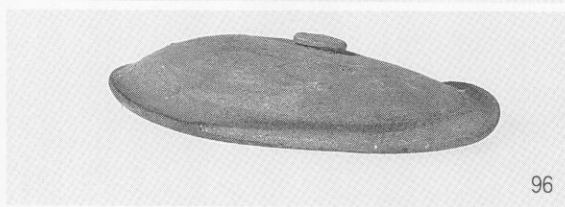
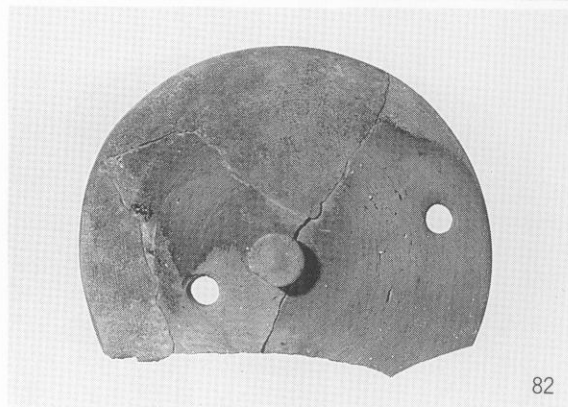
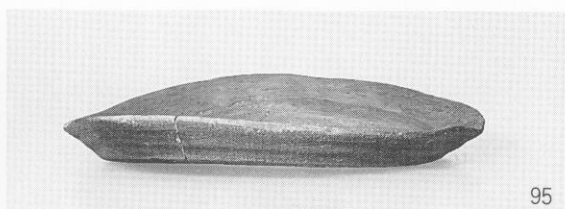
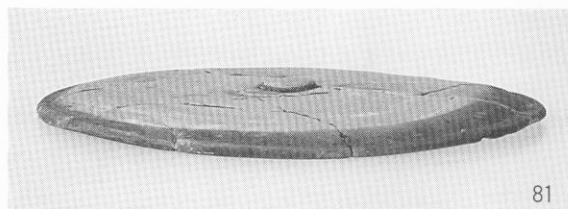
B-1 地区出土土器 1



B-1 地区

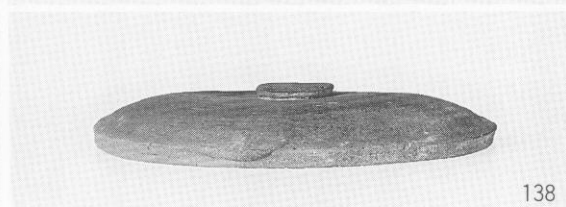
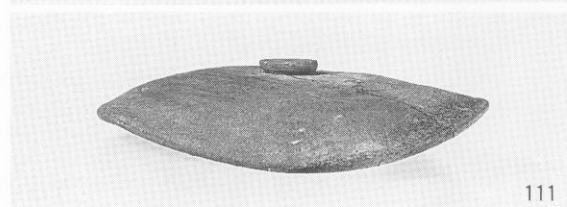
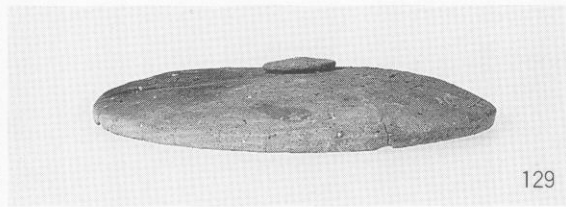
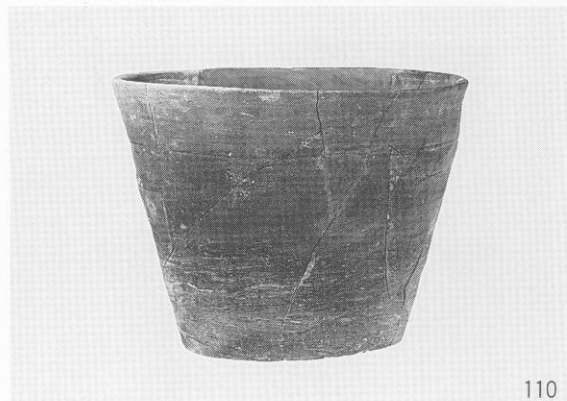
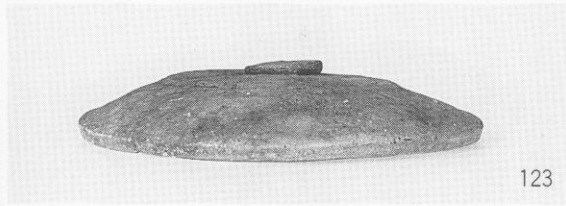
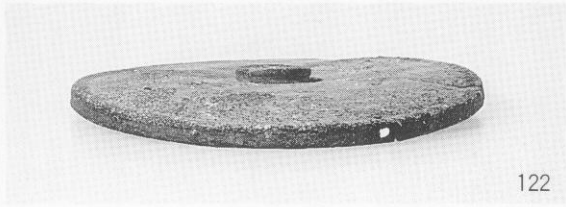
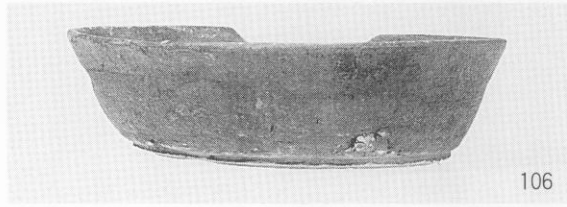
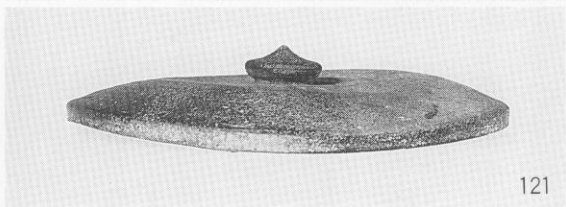
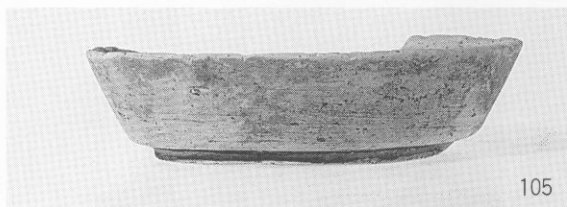
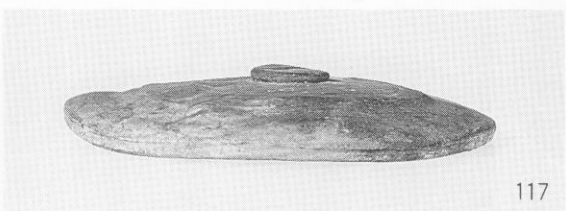


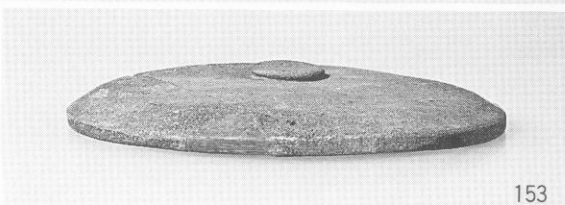
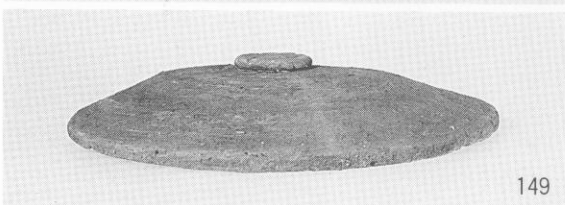
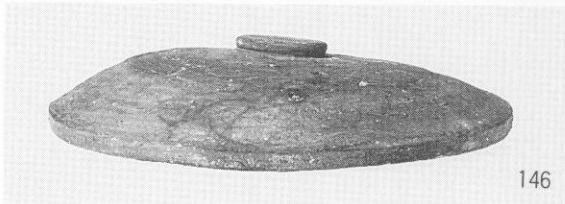
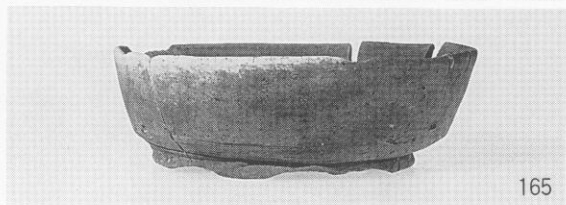
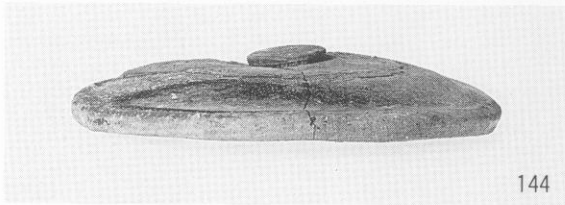
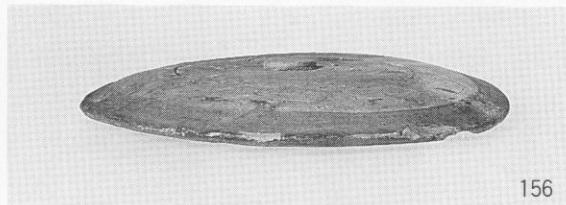
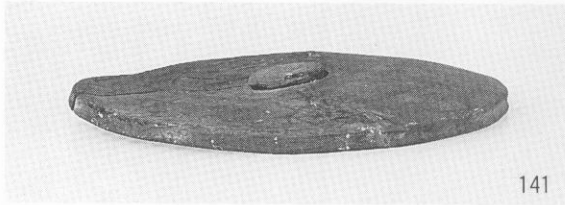
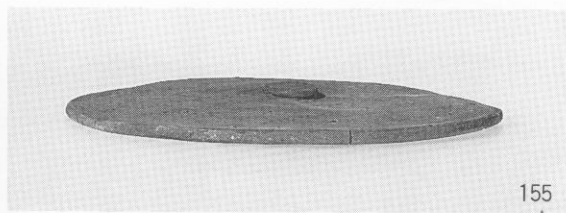
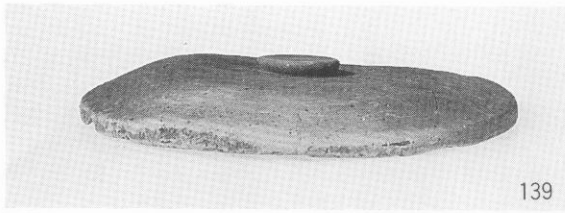
B-1 地区出土土器 3



B-1 地区出土土器 4

B-1 地区





B-1 地区



177



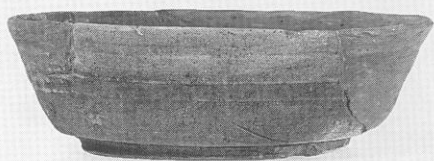
194



178



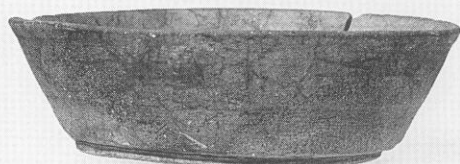
197



180



198



182



199



183



200



191



202



203



192



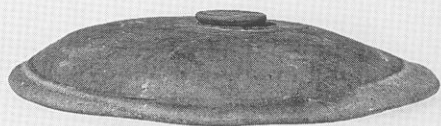
205



206



218



207



220



208



222



209



223



210



224



212



225



216



227



217



228



B-1 地区



229



244



230



247



232



250



234



251



236



254



237



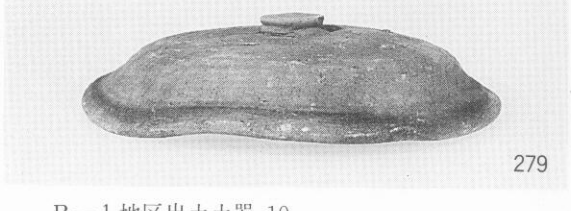
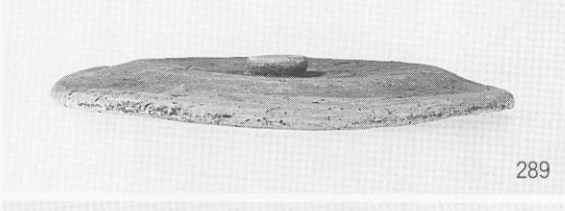
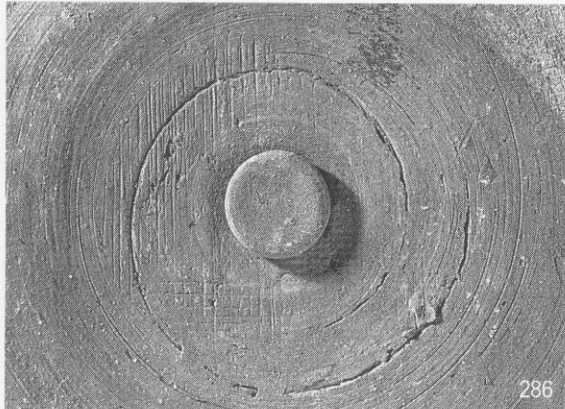
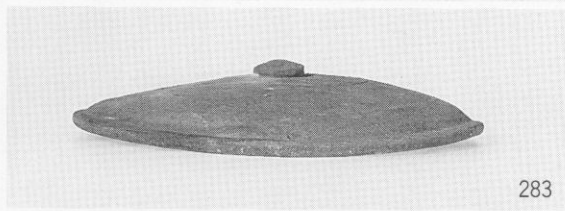
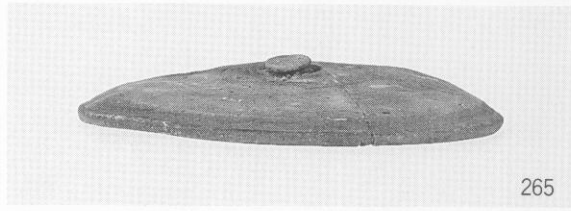
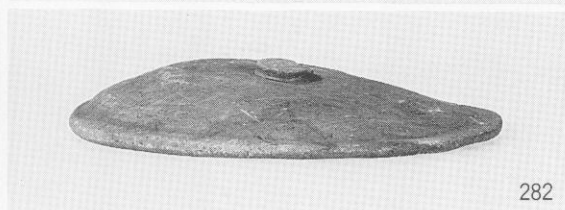
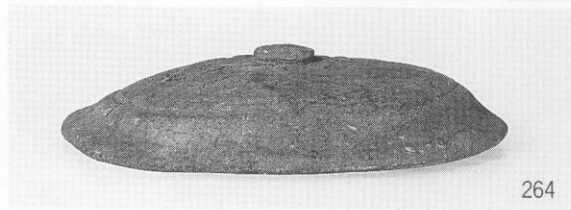
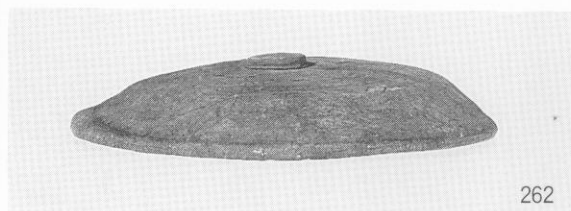
257



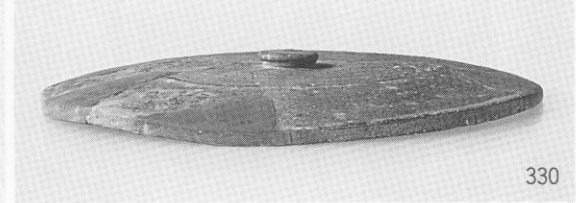
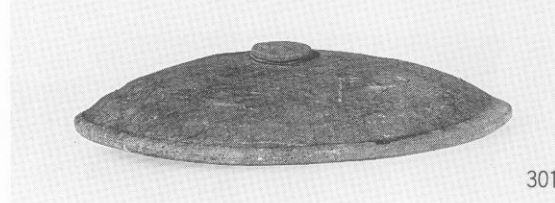
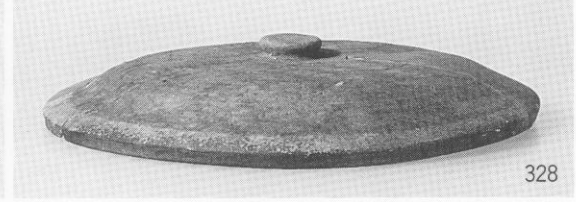
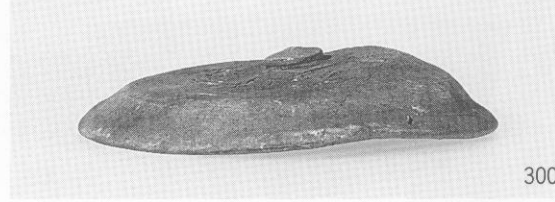
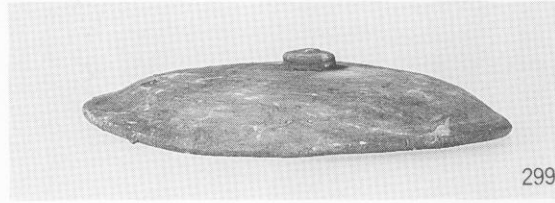
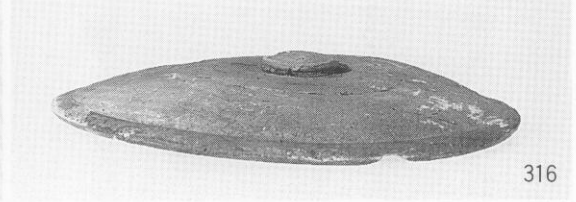
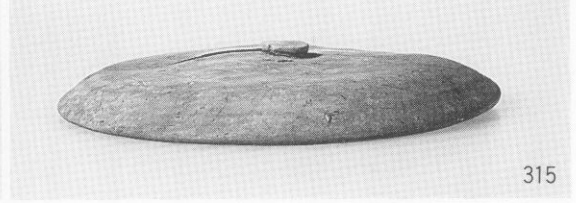
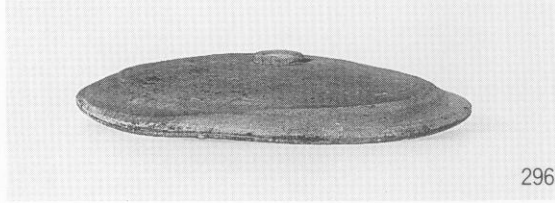
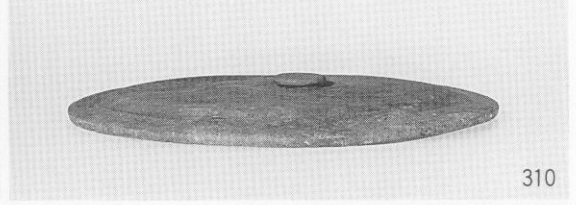
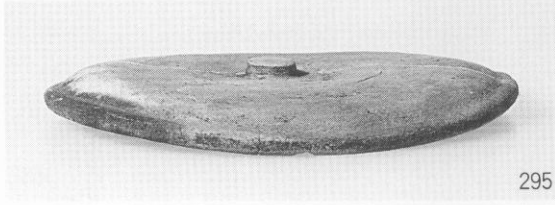
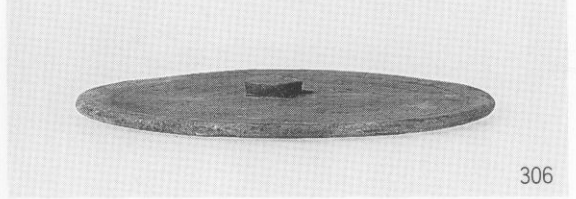
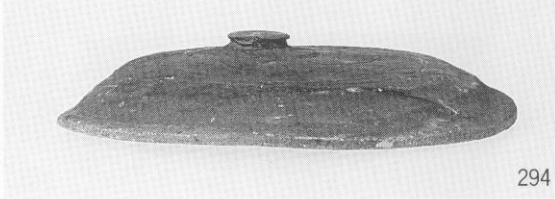
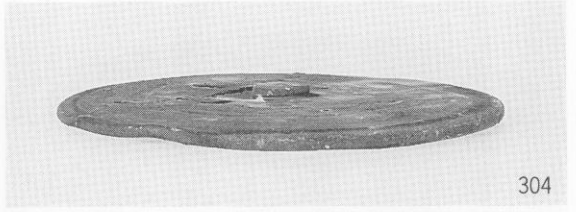
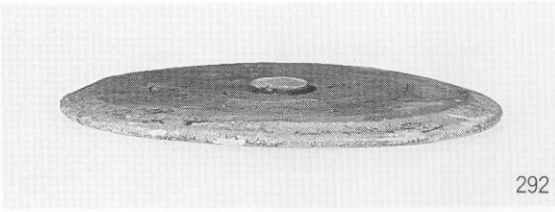
243

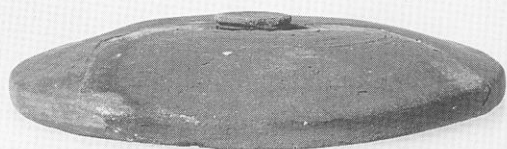


258



B-1 地区





331



351



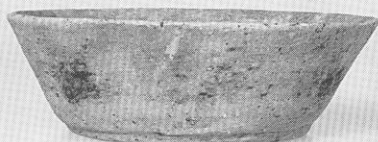
332



353



338



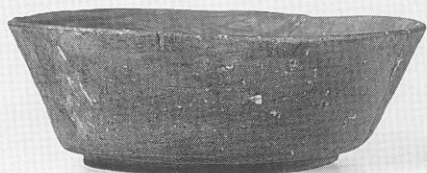
355



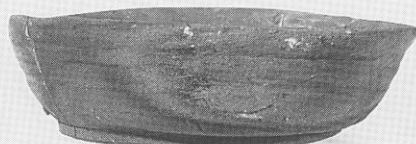
339



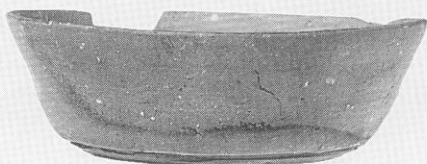
358



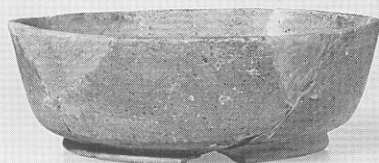
342



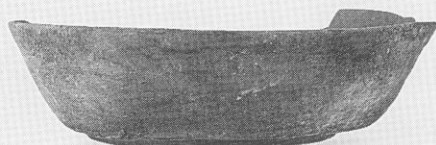
359



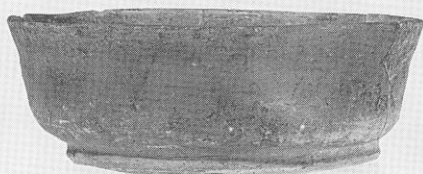
344



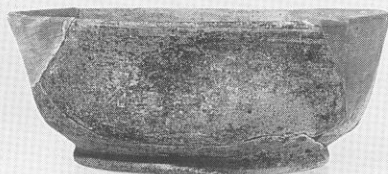
364



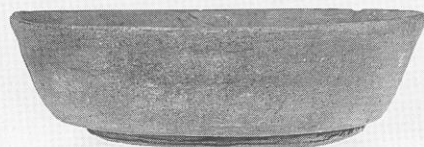
345



365

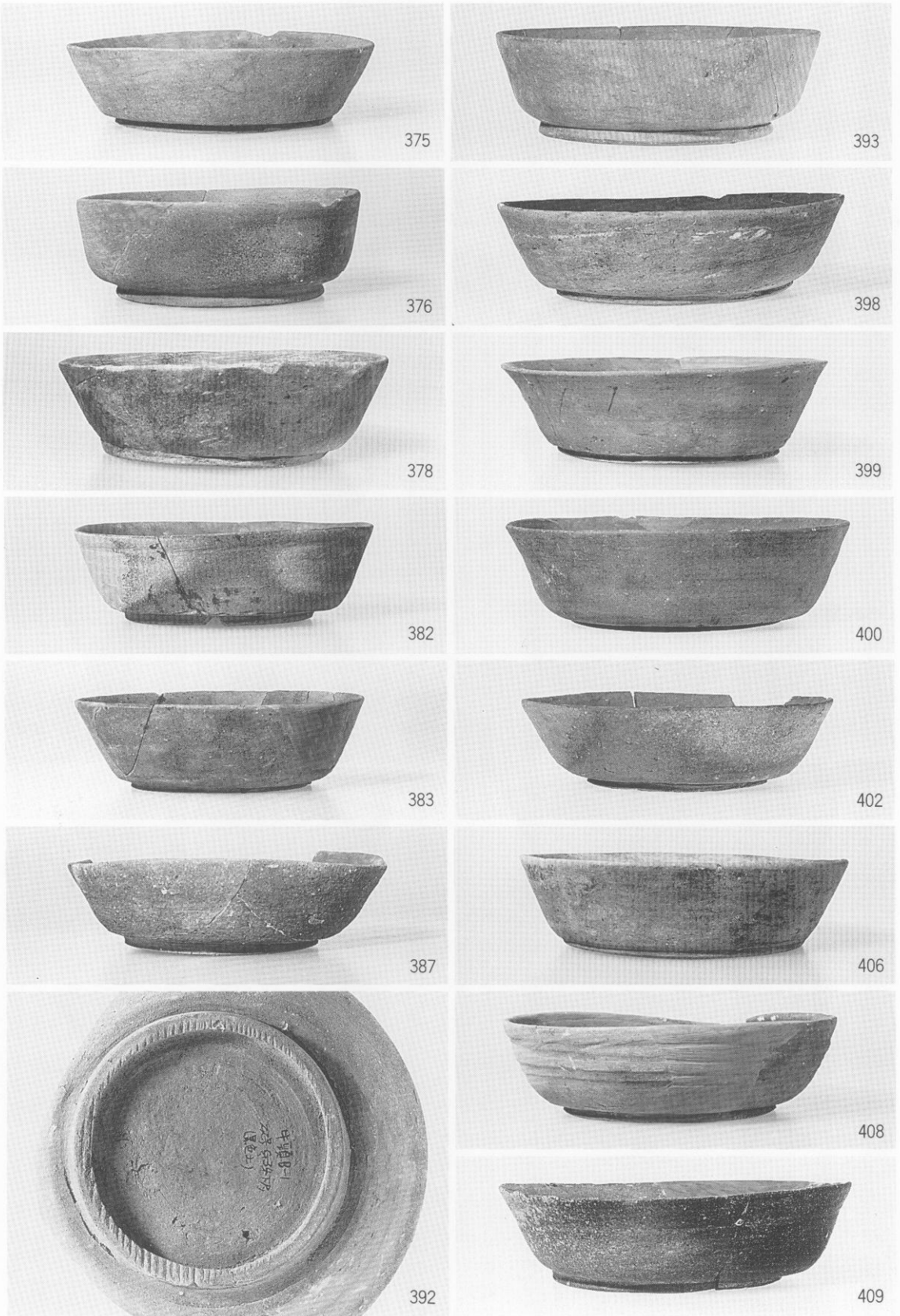


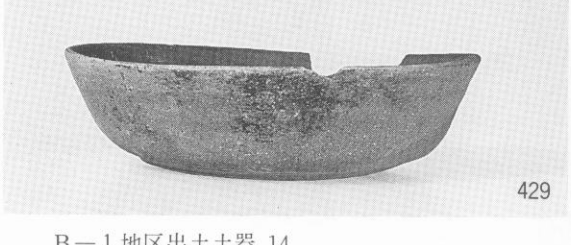
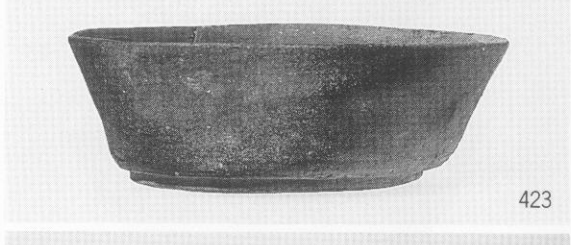
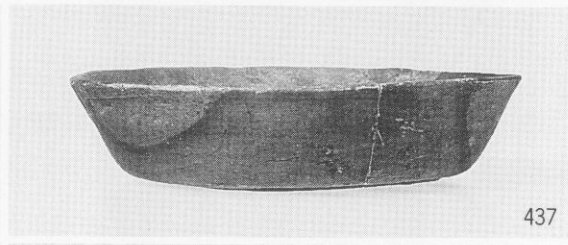
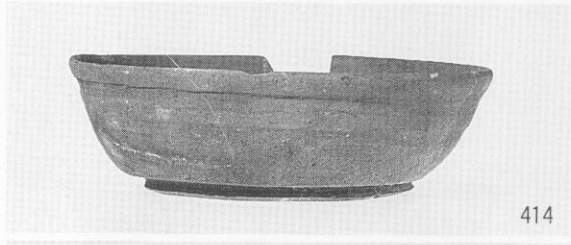
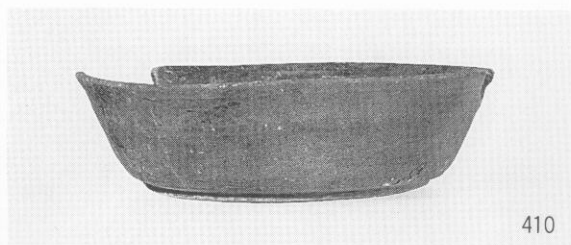
348



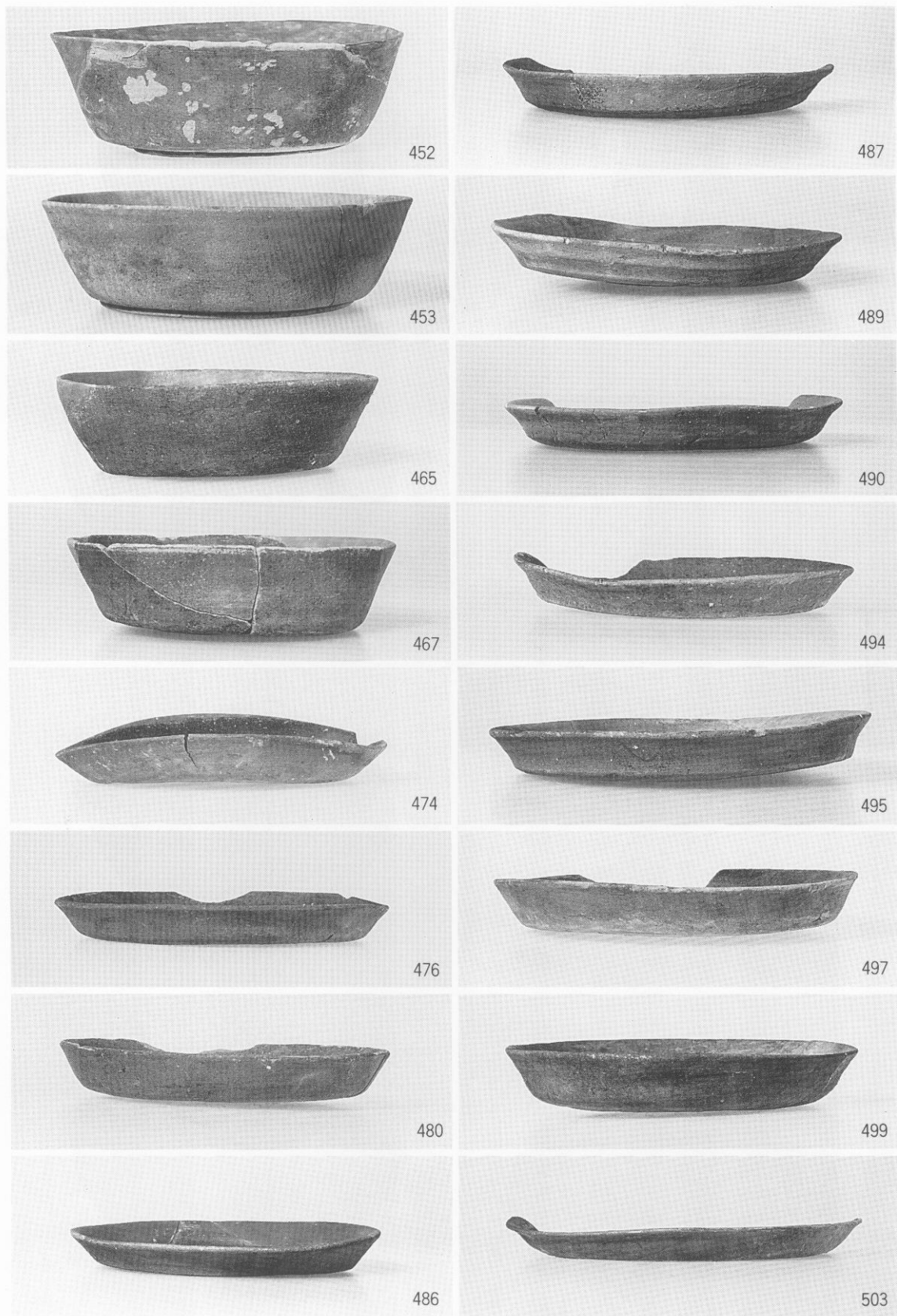
368

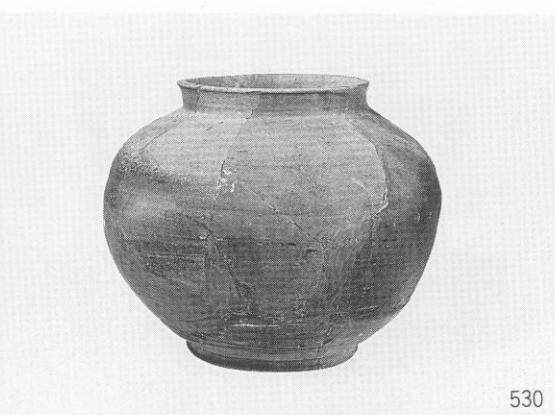
B-1 地区





B-1 地区









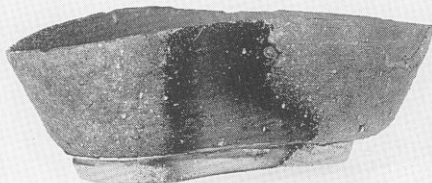
543



564



544



566



567



547



577



578



559



581



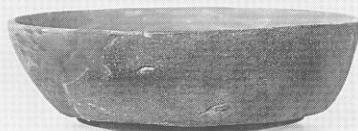
560



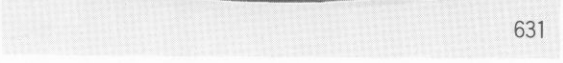
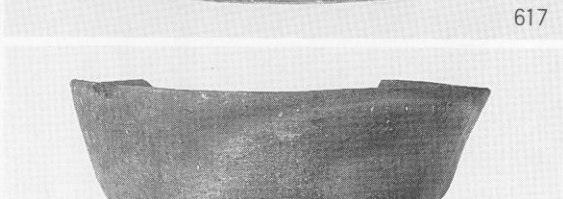
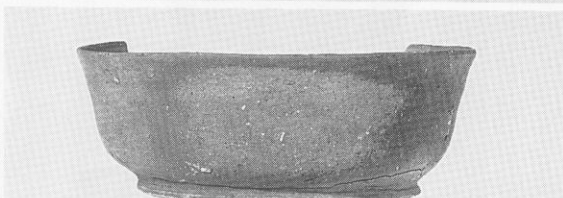
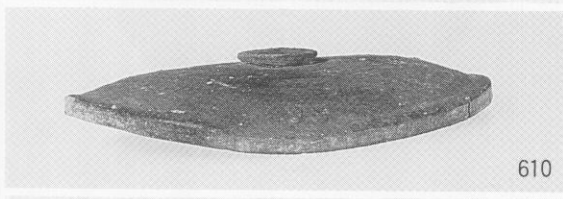
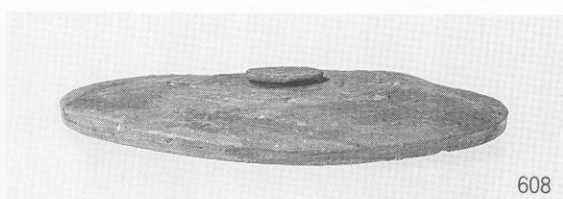
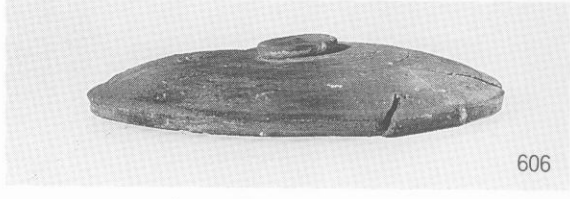
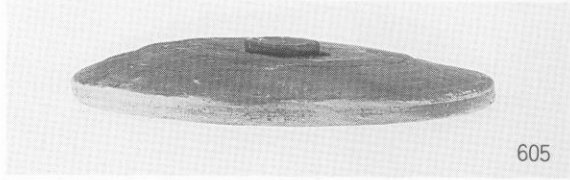
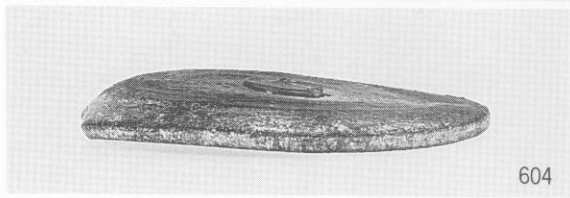
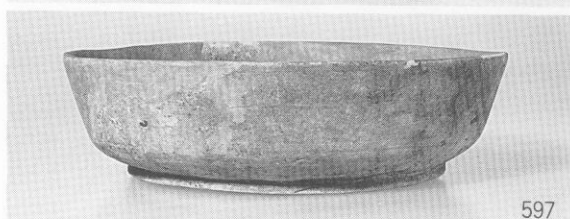
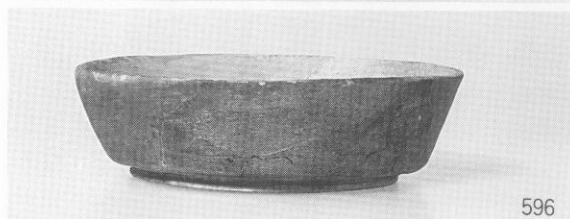
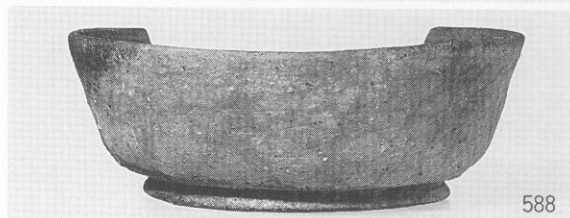
582



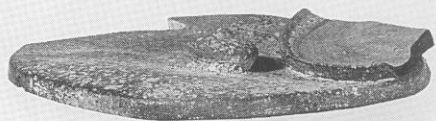
561



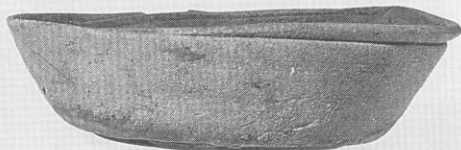
586



B-1 地区



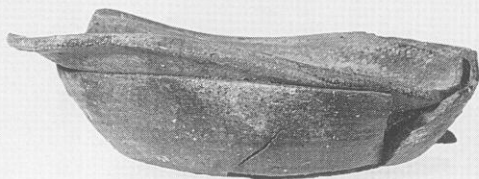
635



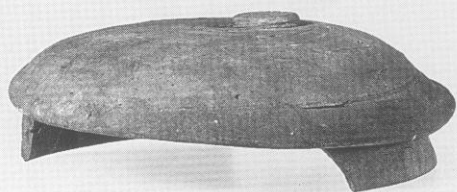
643



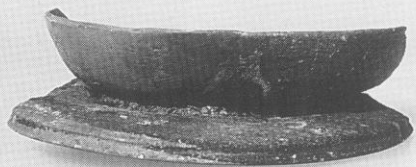
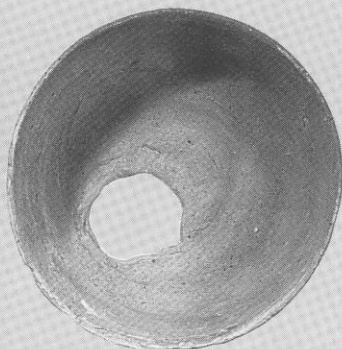
639



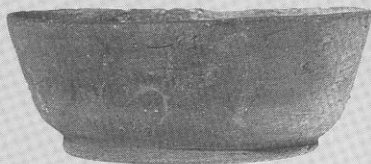
644



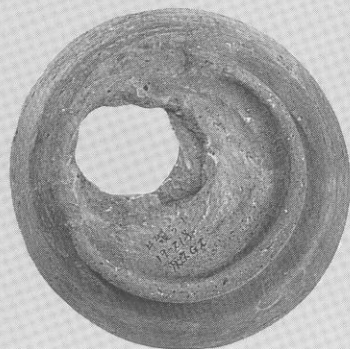
640



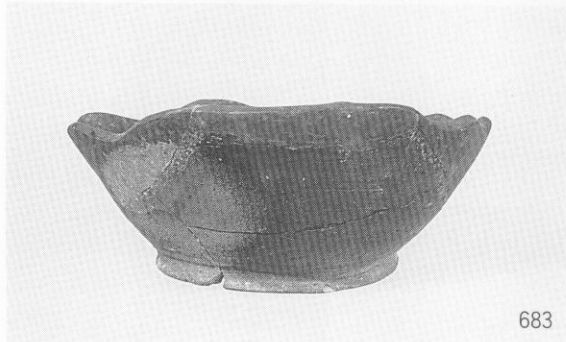
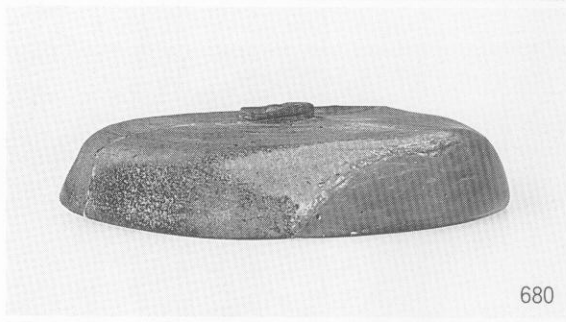
641



642



654



B-4 地区



1. 伐採後の遺構確認調査状況



2. 40~42号窯跡灰原検出状況



B-4 地区

1. 調査地区全景（南東上空から）



2. 40～46号窯跡（東上空から）



1.  
40 \ 46号窯跡 (東上空から)

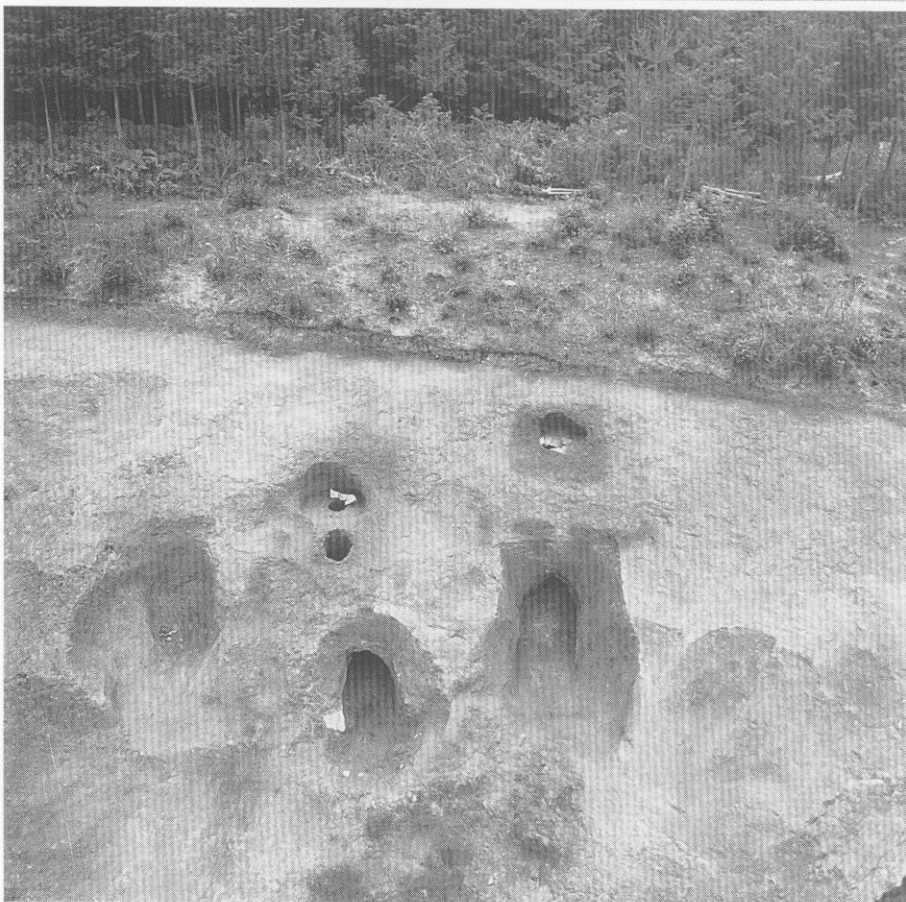


2.  
40 \ 42号窯跡 (東上空から)



B-4 地区

1.  
43  
46号窯跡  
(東上空から)



2.  
43  
45号窯跡  
(東上空から)



B-4 地区



1. 40~42号窯跡



2. 43~46号窯跡

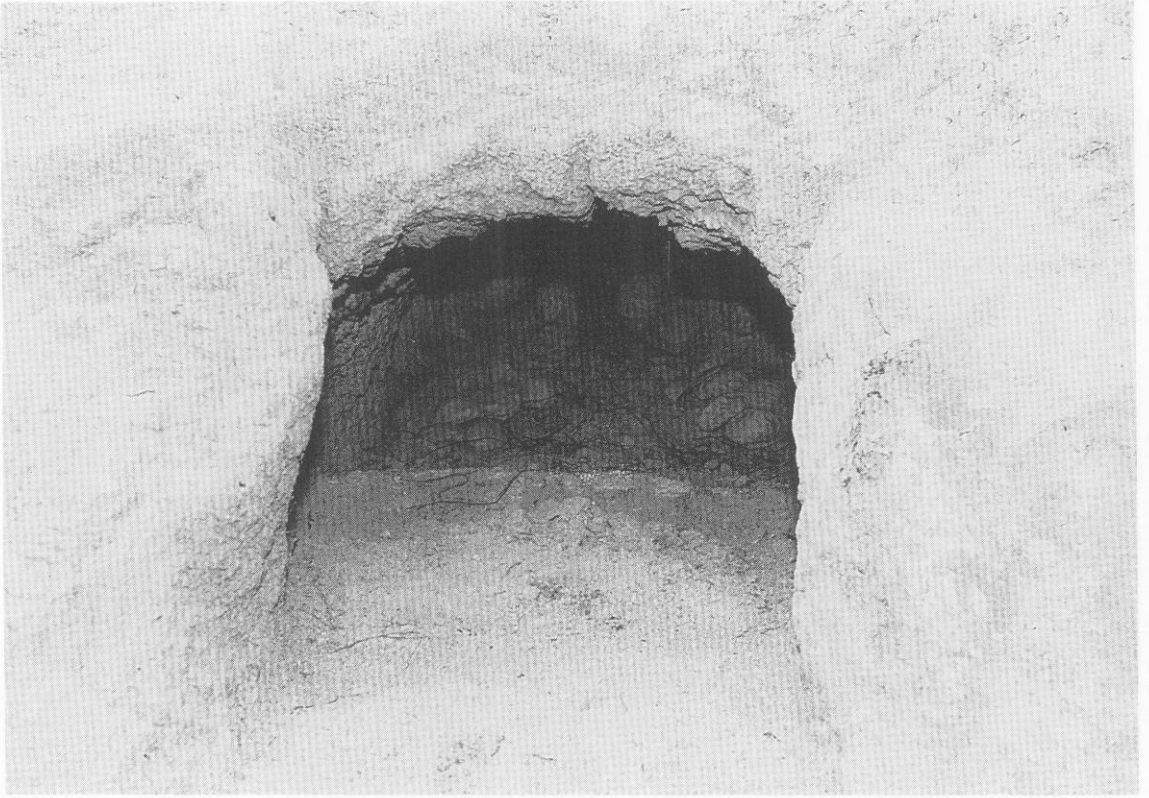


1. 40号窯跡

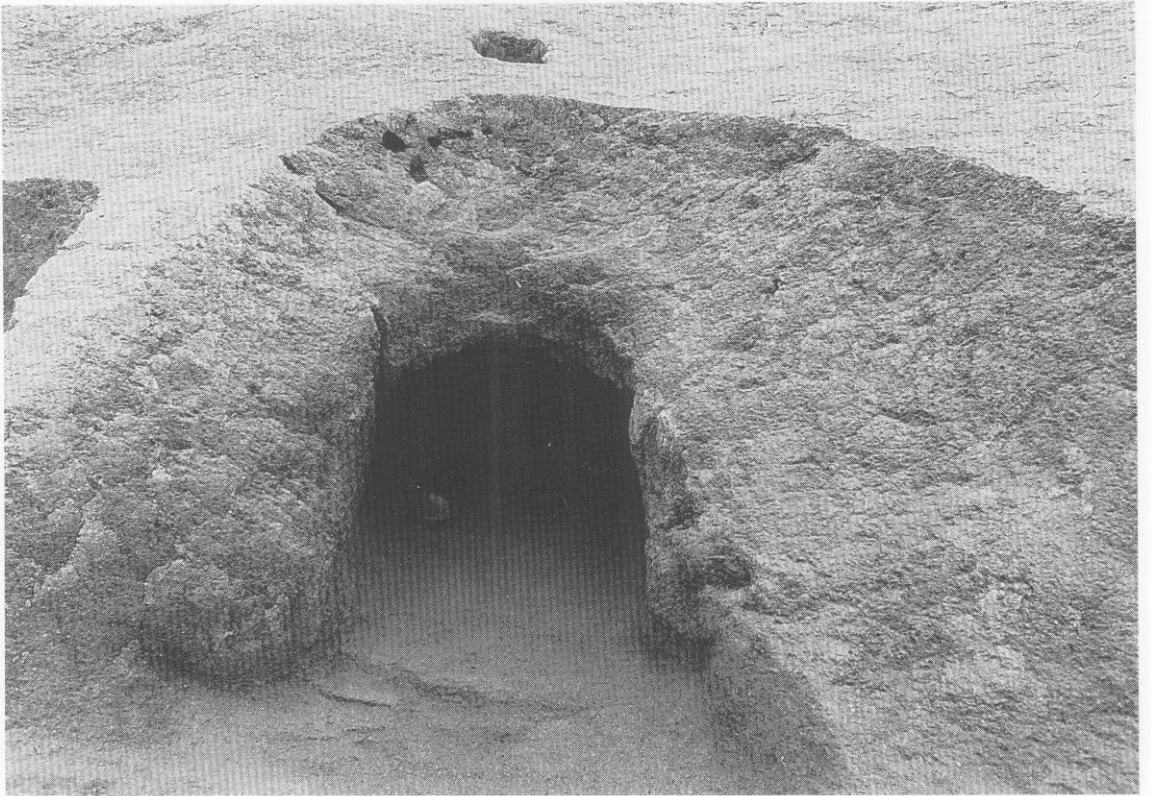


2. 42号窯跡煙道上部

B-4 地区



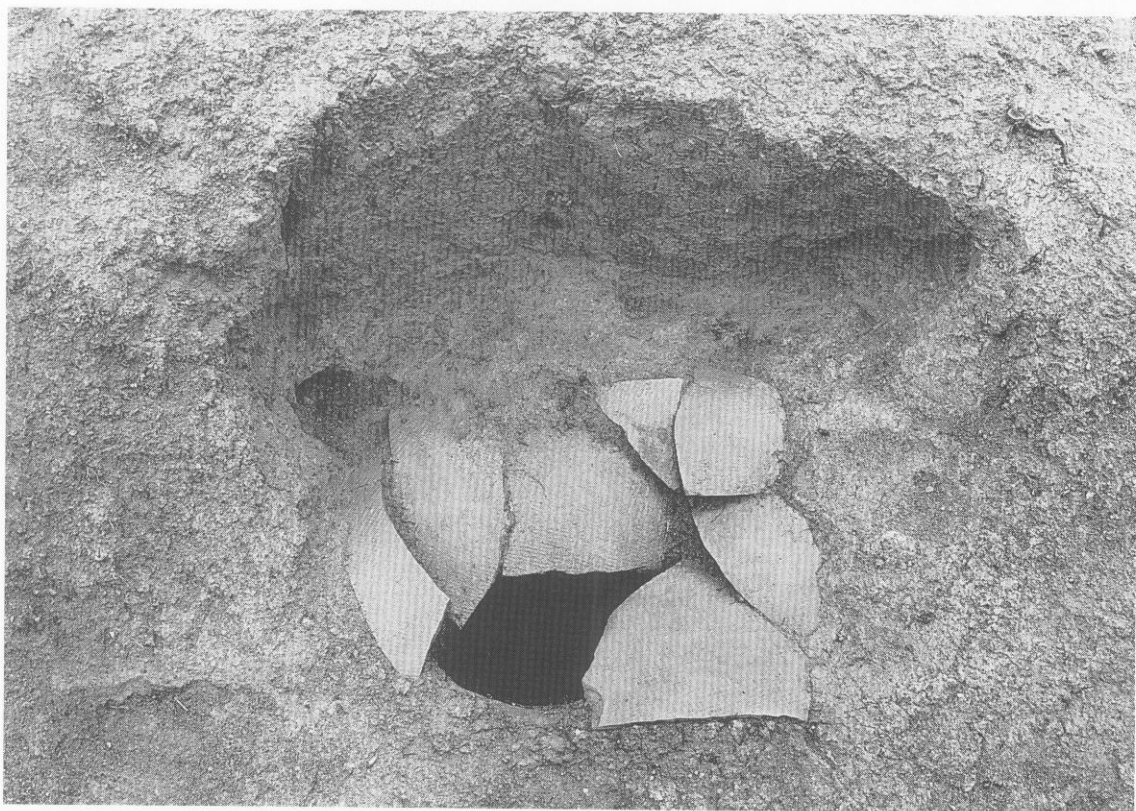
1. 41号窑迹



2. 41号窑迹

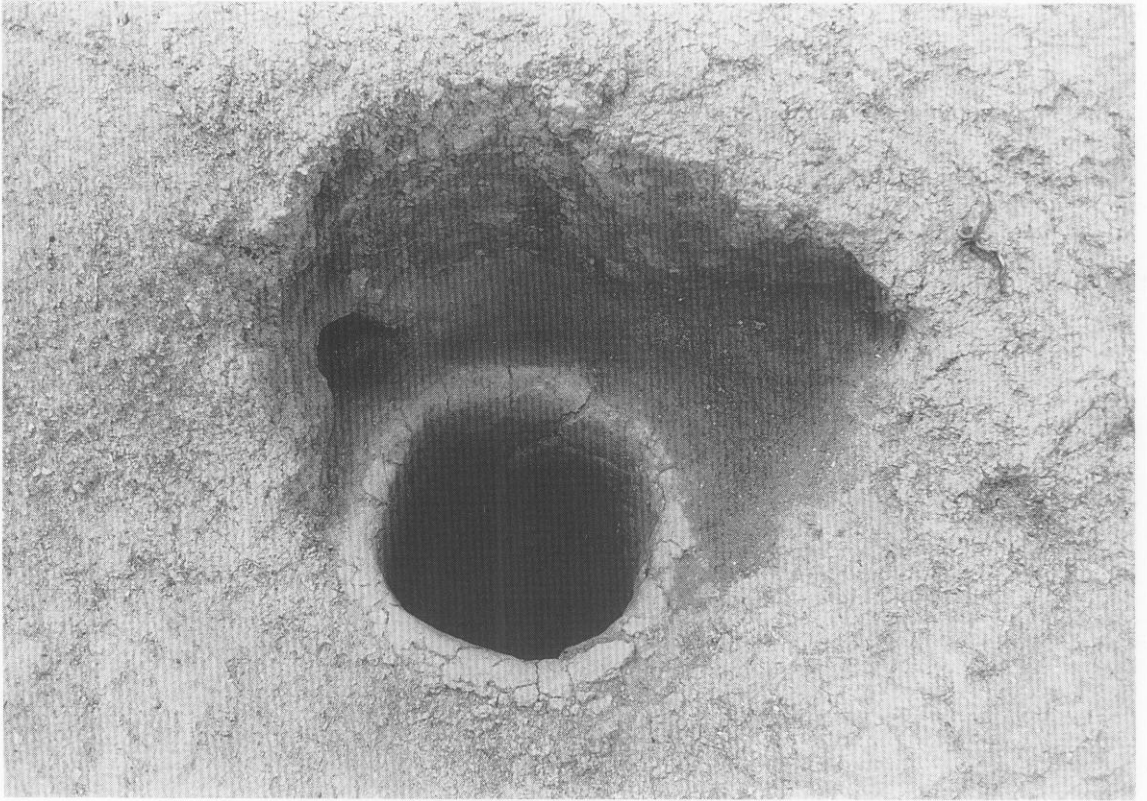


1. 43号窑迹

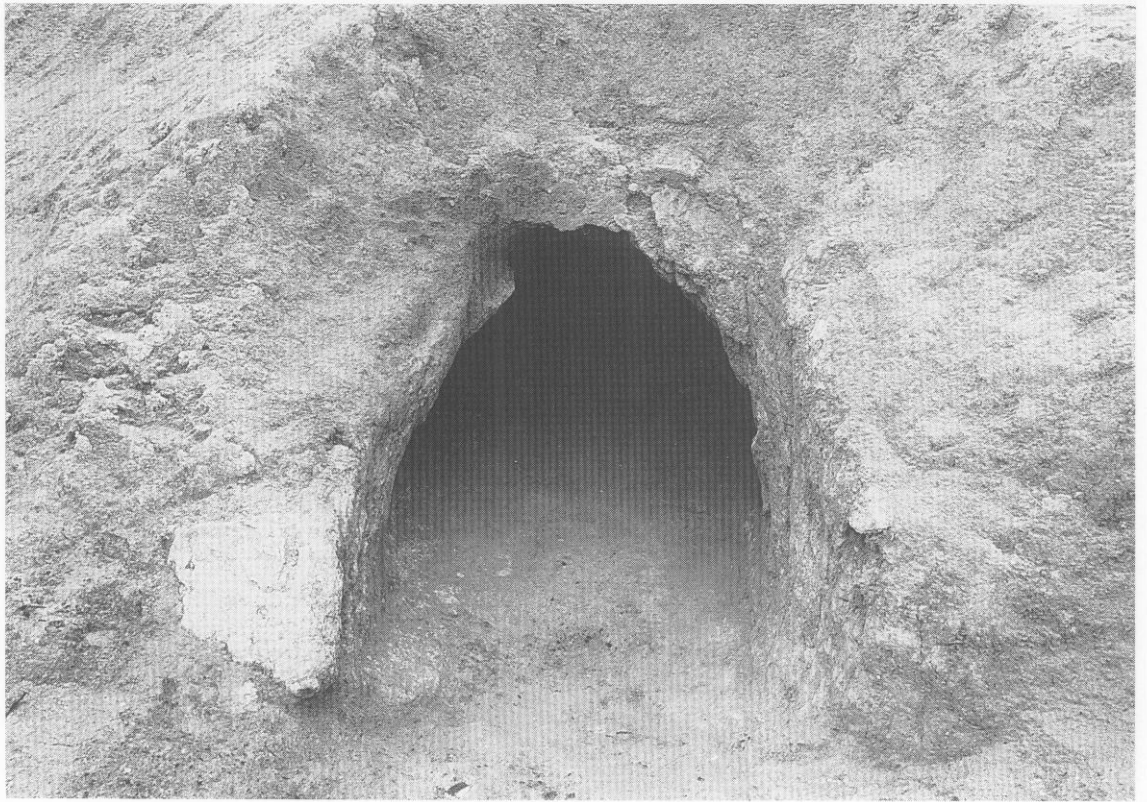


2. 43号窑迹烟道上面闭塞状态

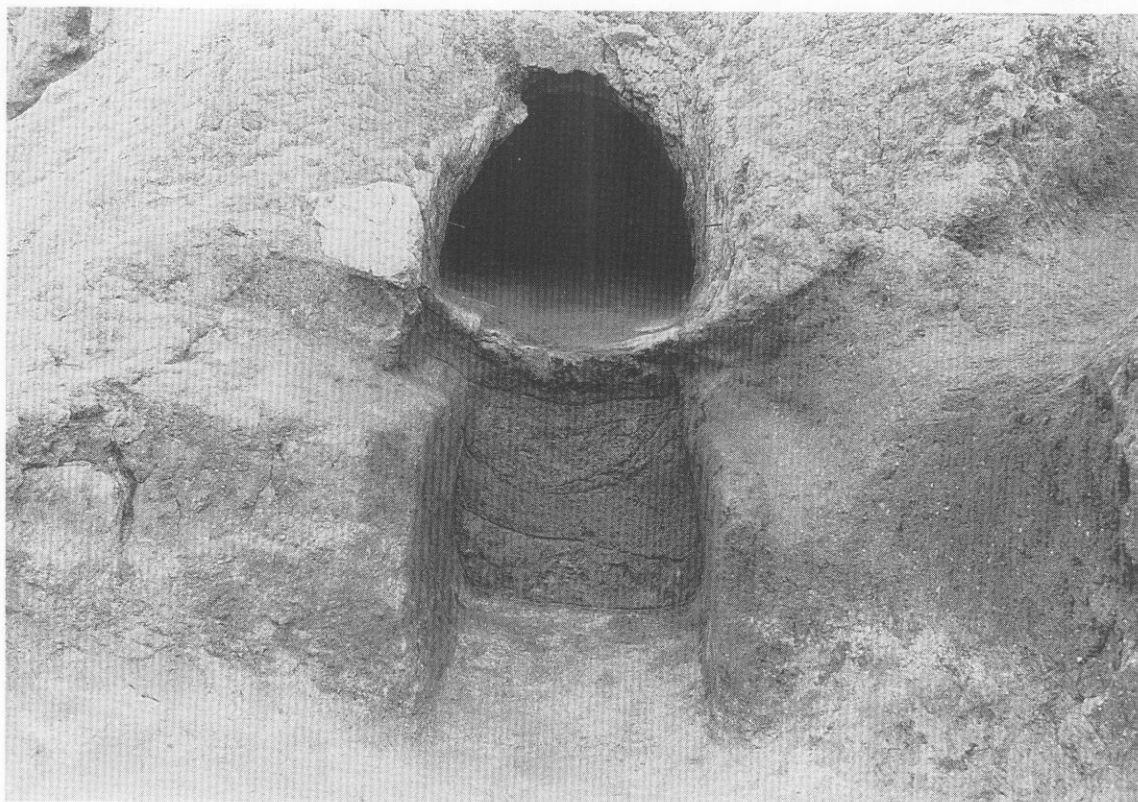
B-4 地区



1. 43号窑跡煙道部



2. 44号窑跡焚口部

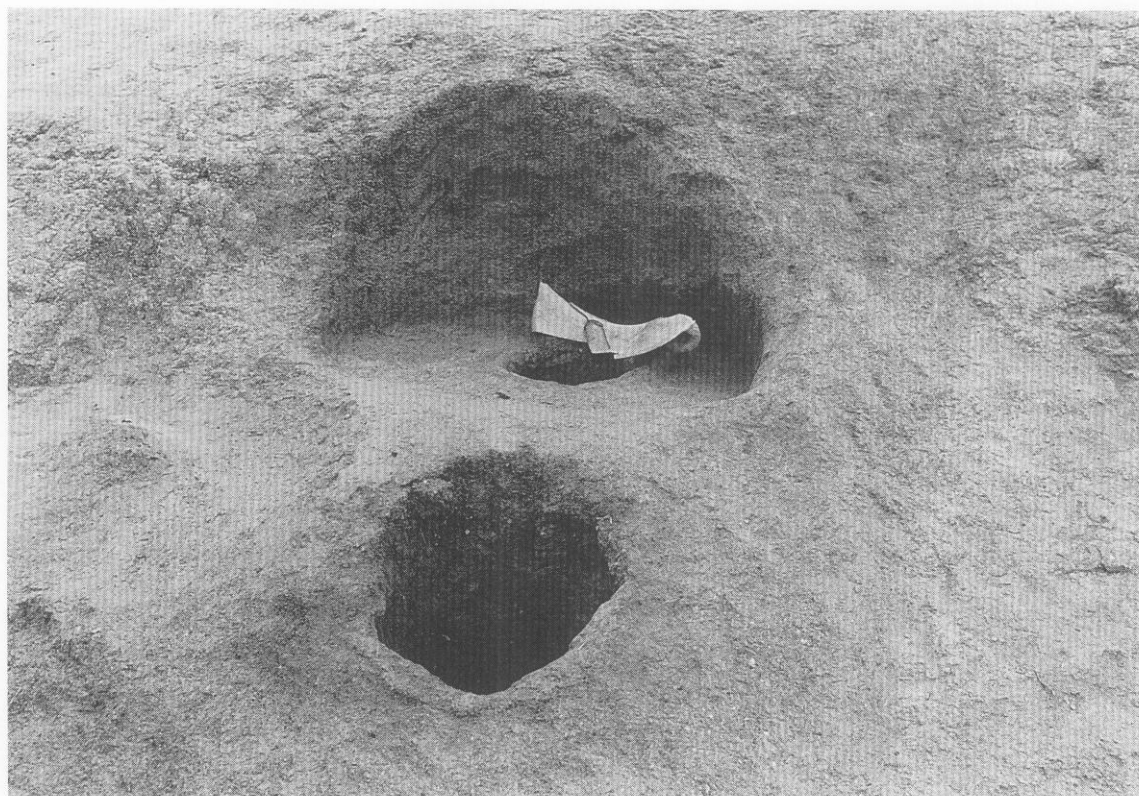


1. 44号窑迹焚口、45号窑迹焚口断面



2. 44·45号窑迹

B-4 地区



1. 44·45号窑跡煙道部 1



2. 44·45号窑跡煙道部 2



1. 46号窯跡遺物出土狀態



2. 46号窯跡



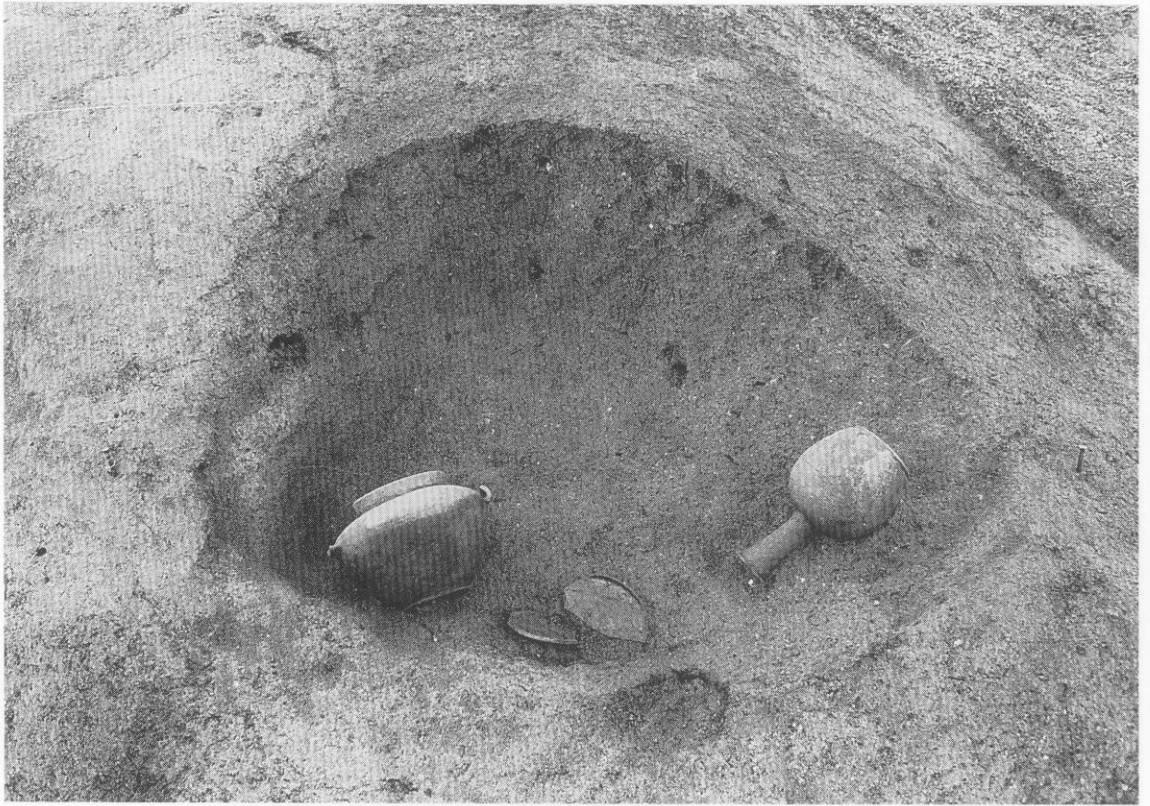
B-4 地区



1. 46号窯跡前庭部灰原横断面



2. 46号窯跡前庭部縦断面

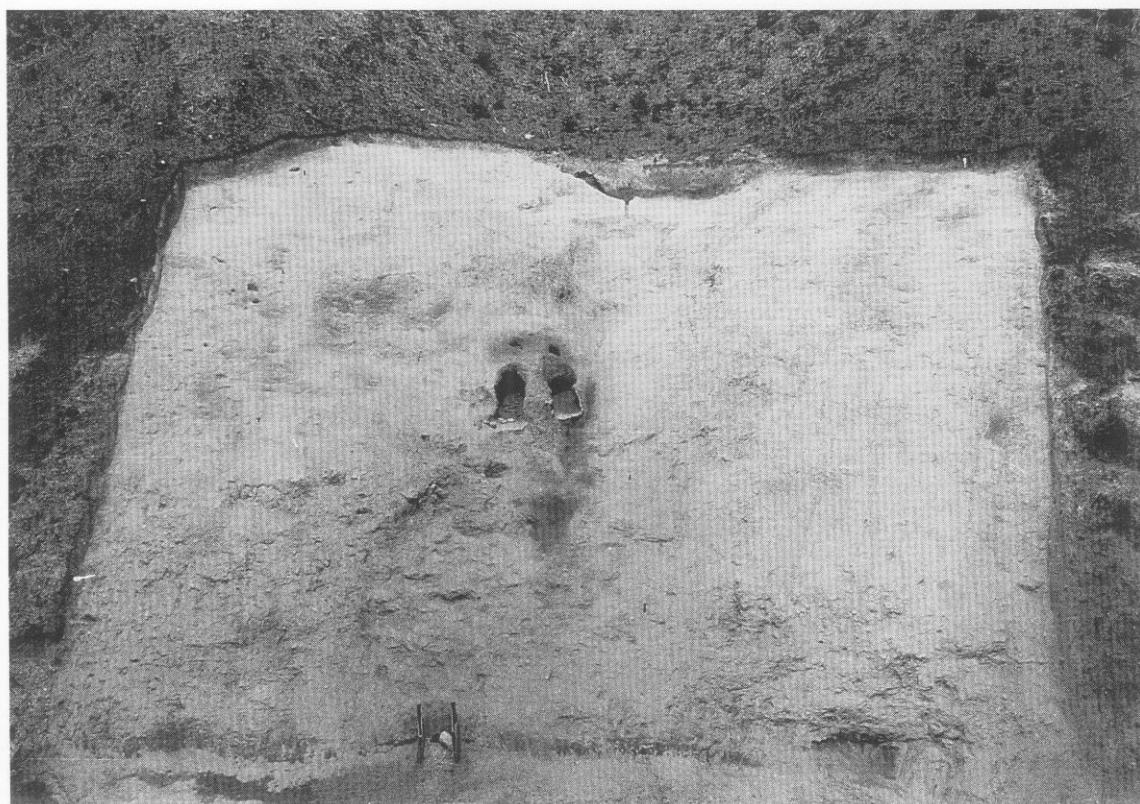


1. 44号南侧土城遺物出土状态 1

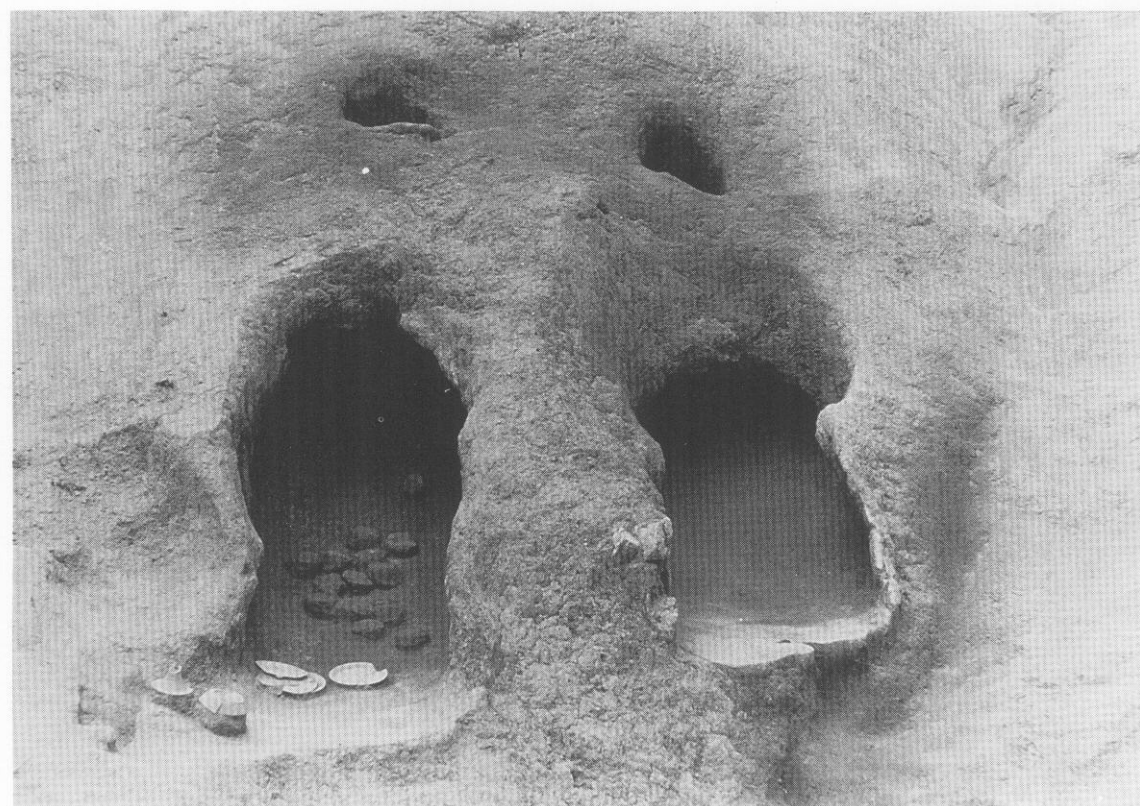


2. 44号南侧土城遺物出土状态 2

B-4 地区



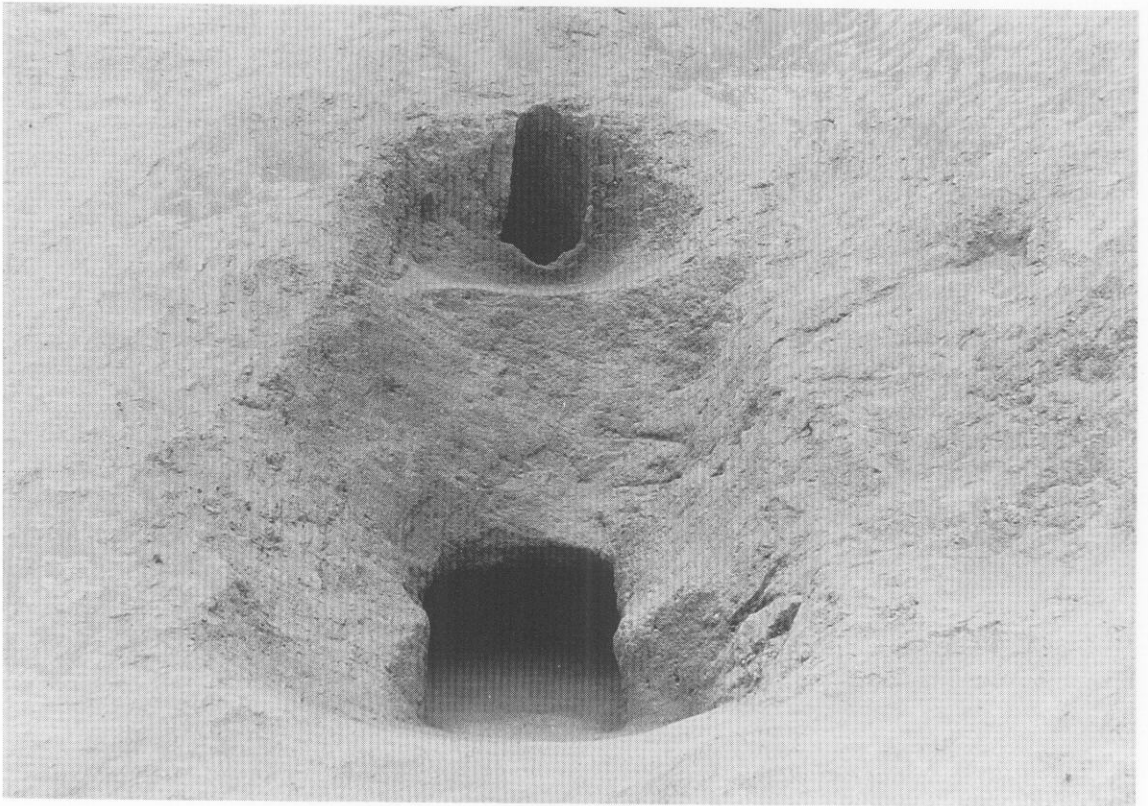
1. 47・48号窯跡（東から）



2. 47(右)・48号窯跡(左)



1. 49号窯跡（東から）

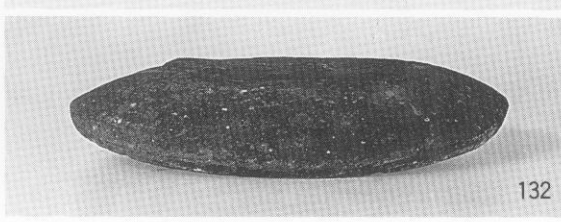
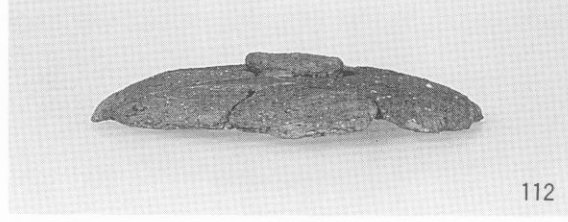
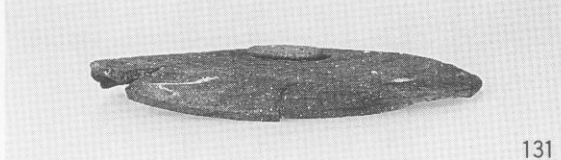
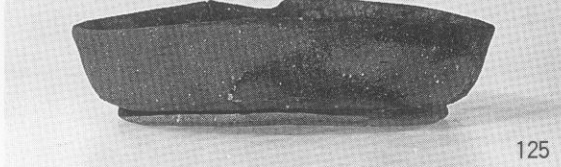
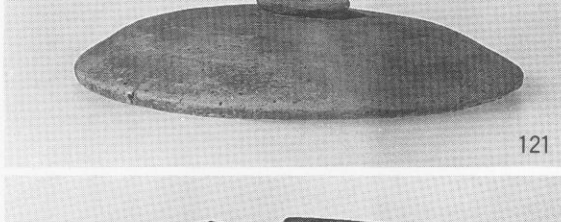
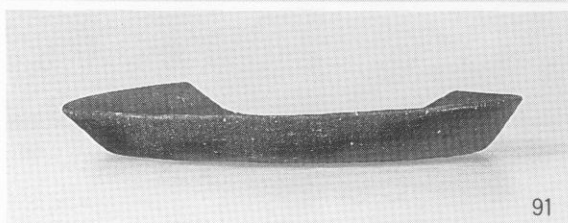
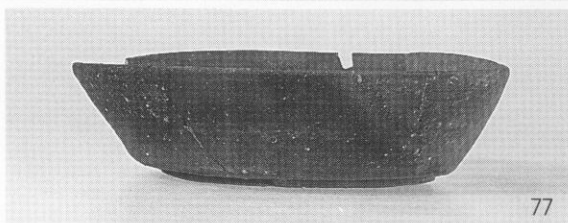
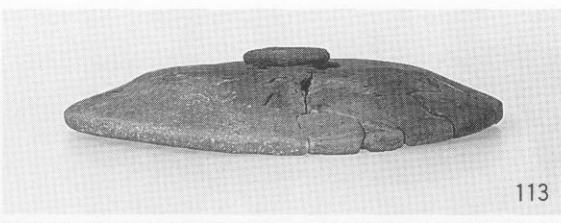


2. 49号窯跡

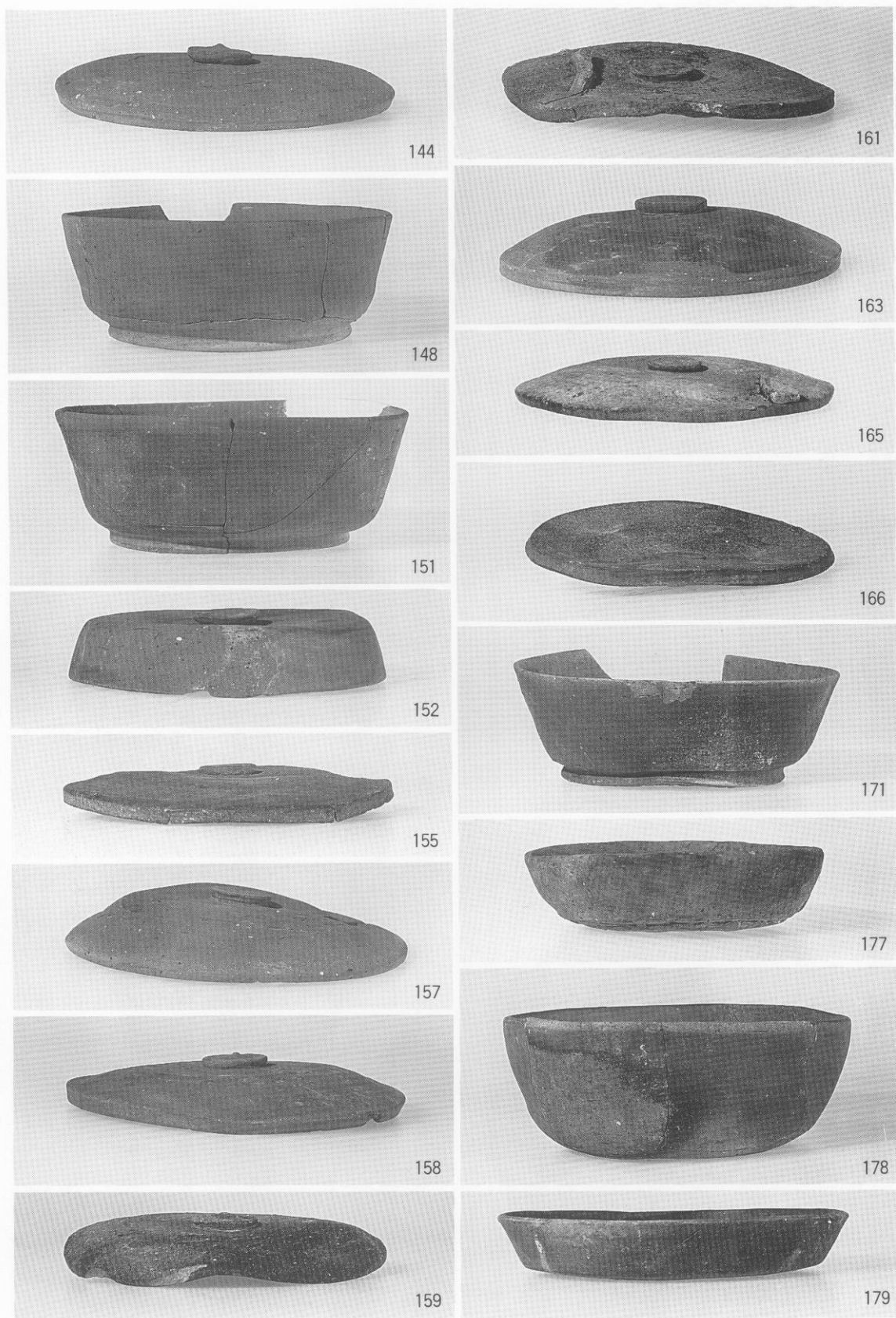
B-4 地区



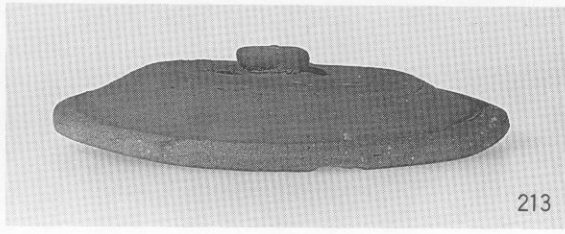
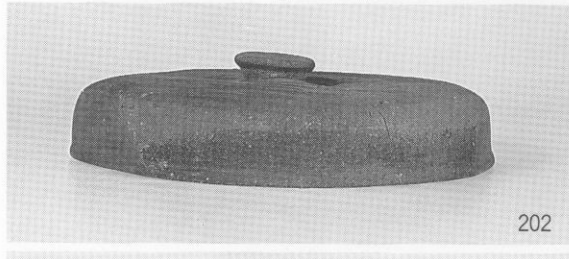
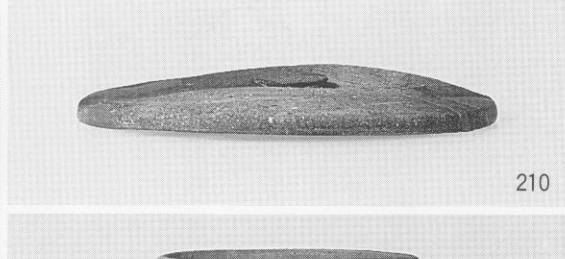
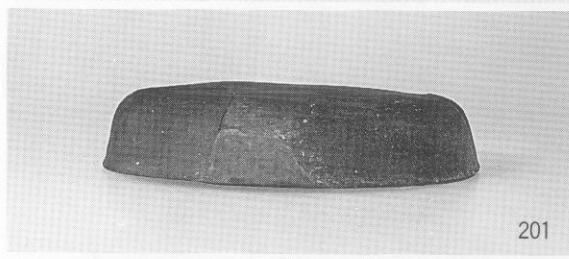
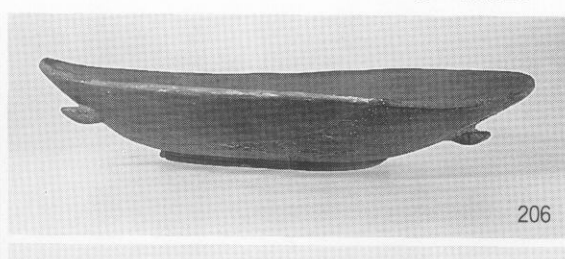
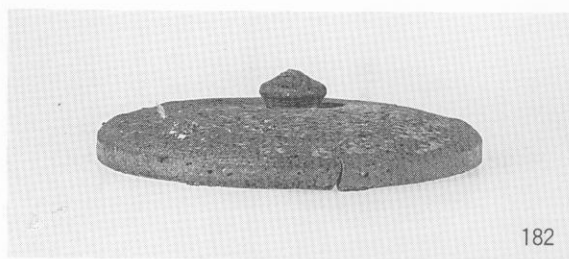
B-4 地区出土土器 1



B-4 地区



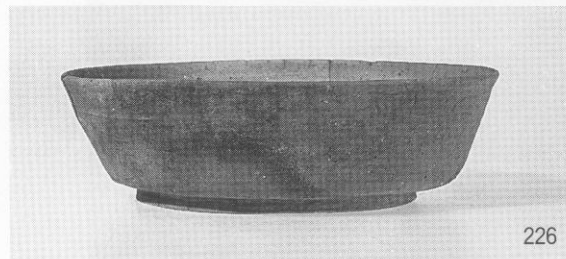
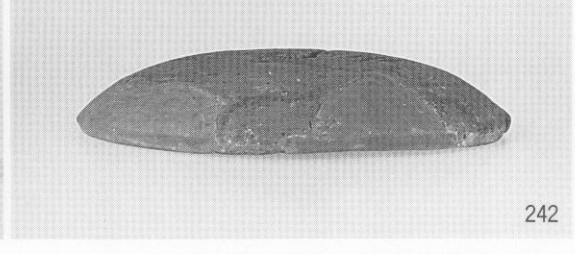
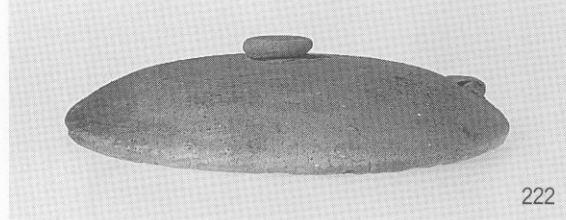
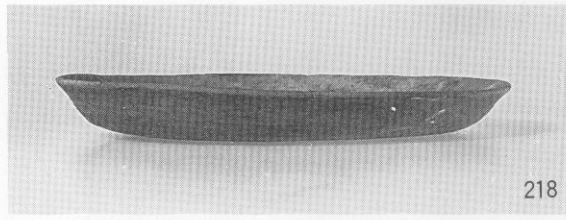
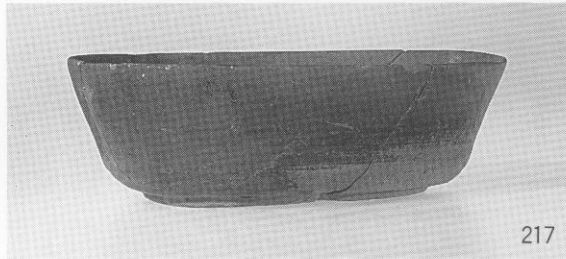
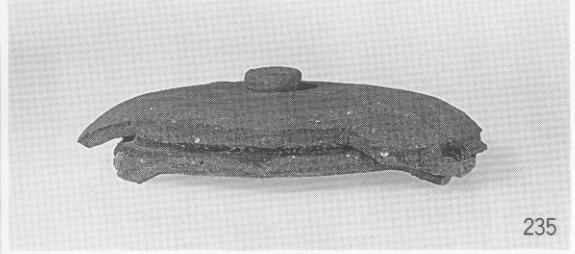
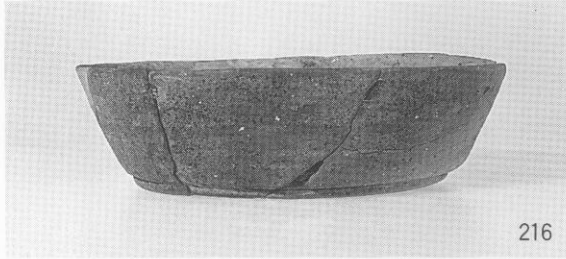
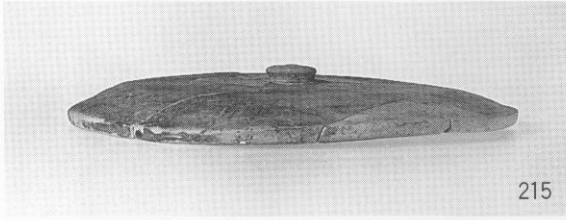
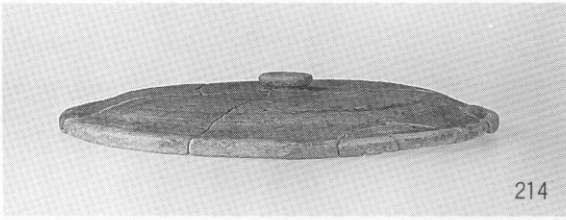
B-4 地区出土土器 3



B-4 地区出土土器 4



B-4 地区



B-4 地区出土土器 5



1. 発掘前全景（北から）



2. 法照寺裏崖面の窯跡検出状況

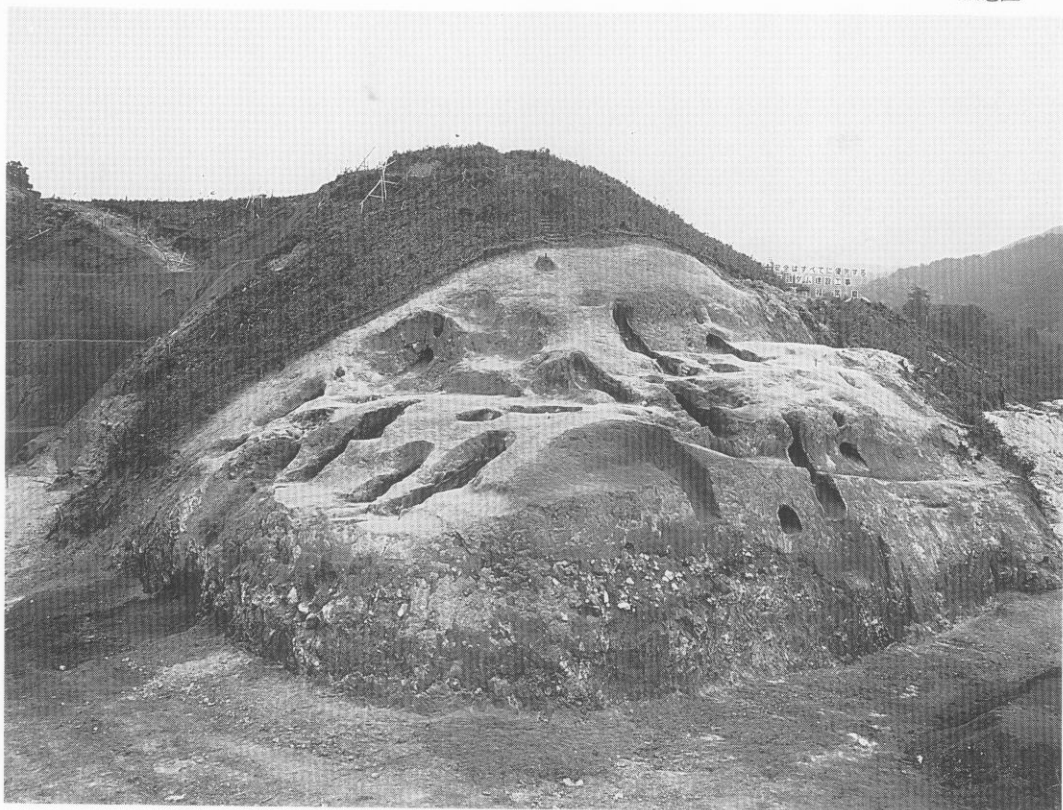
I 地区



1. 発掘区遠景 1 (北西から)



2. 発掘区遠景 2 (西から)



1. 調査区全景（北から）



2. 調査区北東側全景

I 地区



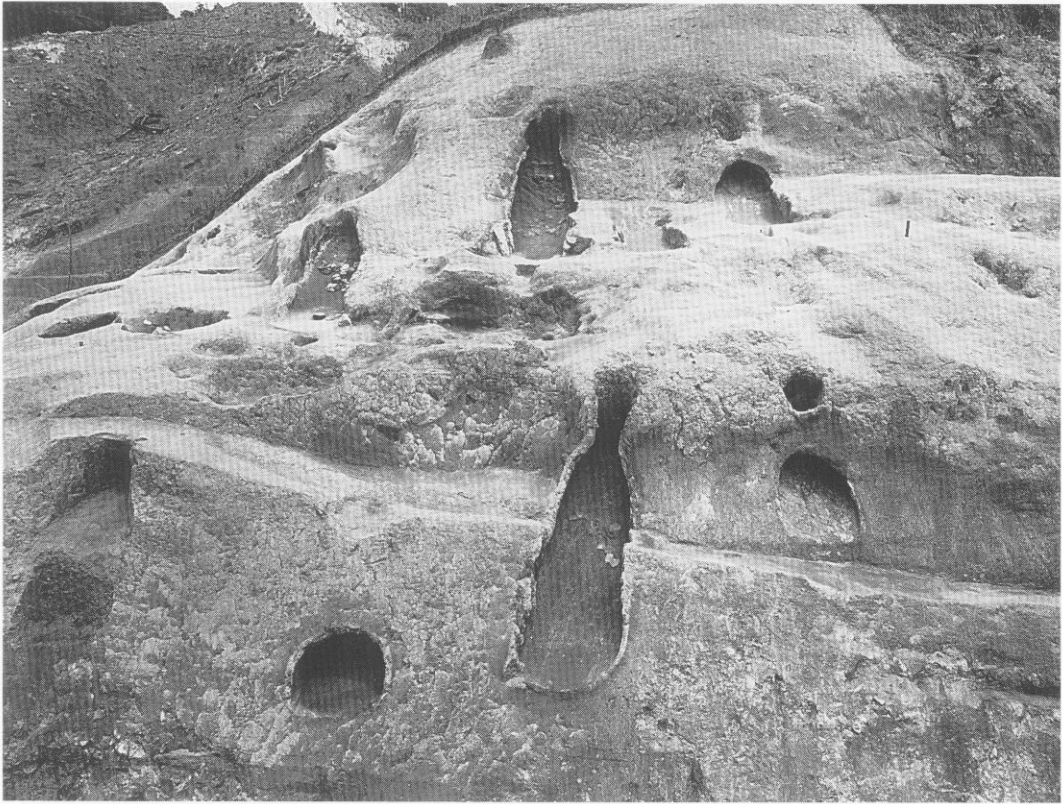
1. 調査区全景、灰原検出状態（北から）



2. 57~59・64~67号窯跡（北東から）



1. 53~56号窯跡灰原

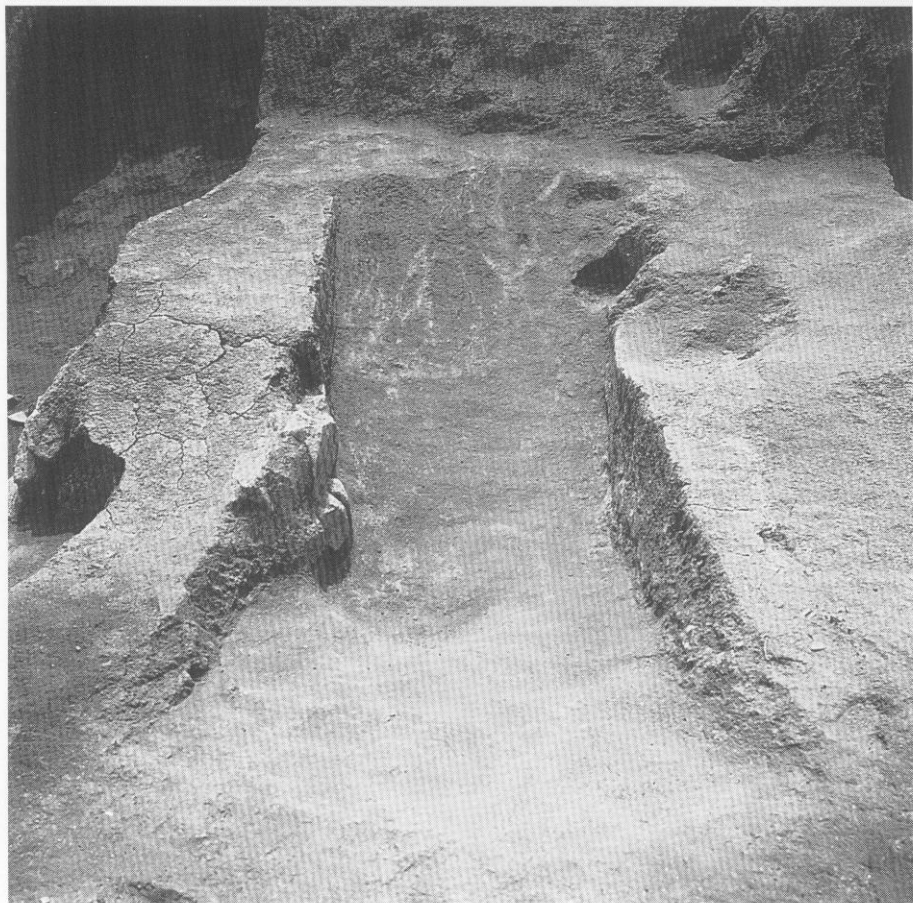


2. 53~56・60~62・68号窯跡

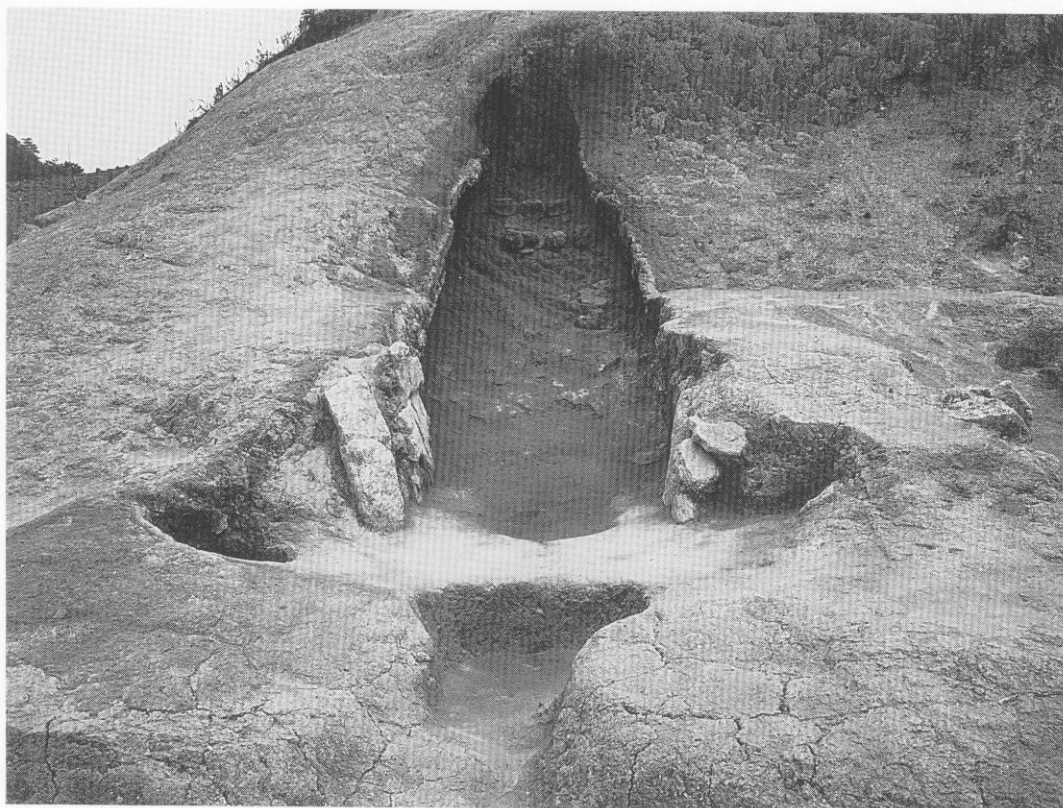
I 地区



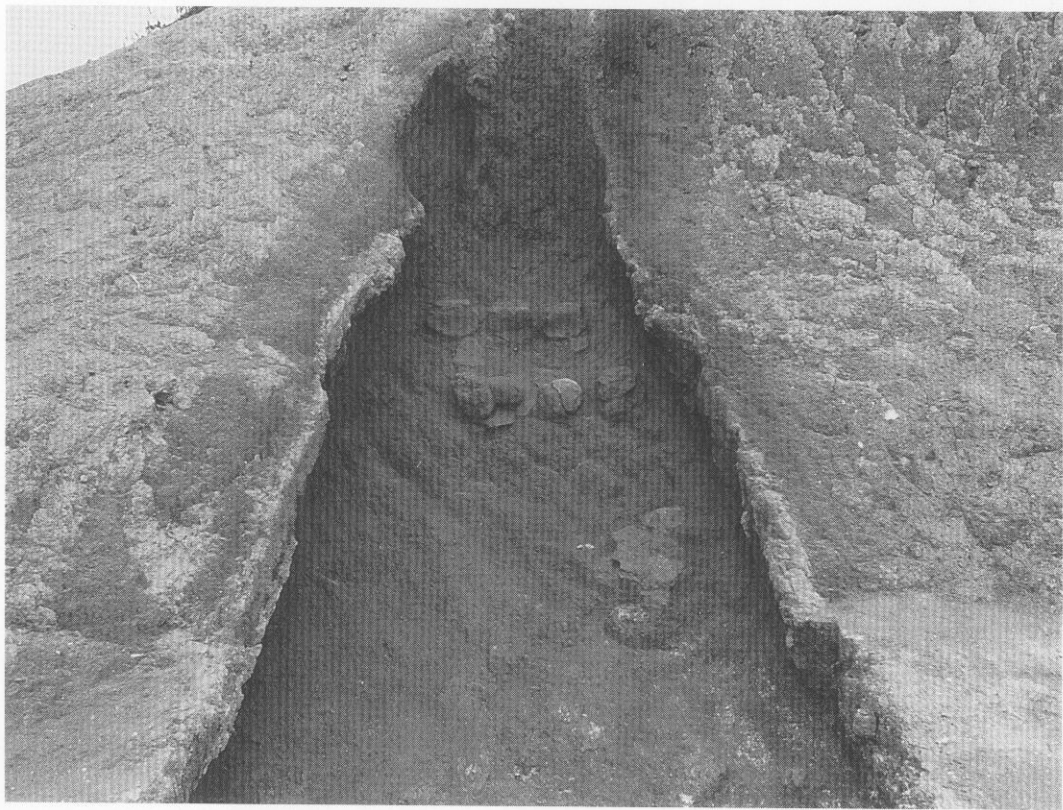
1. 53号窑迹



2. 54号窑迹



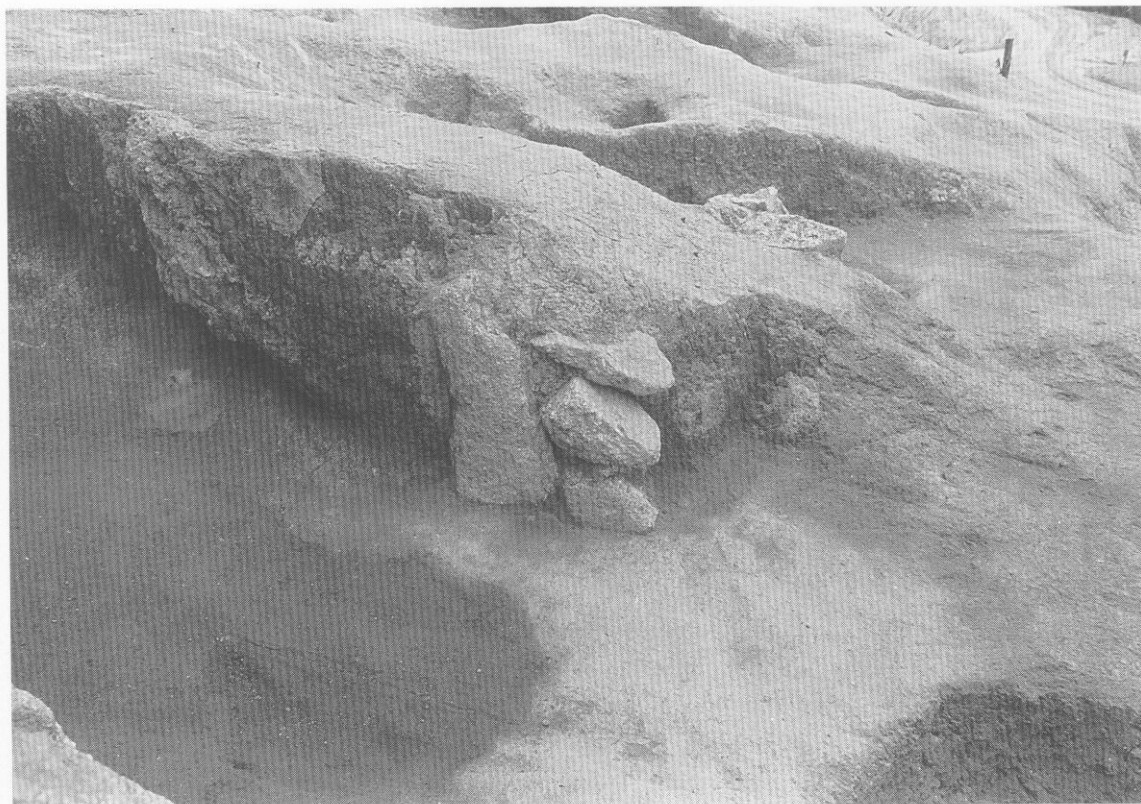
1. 55号窯跡



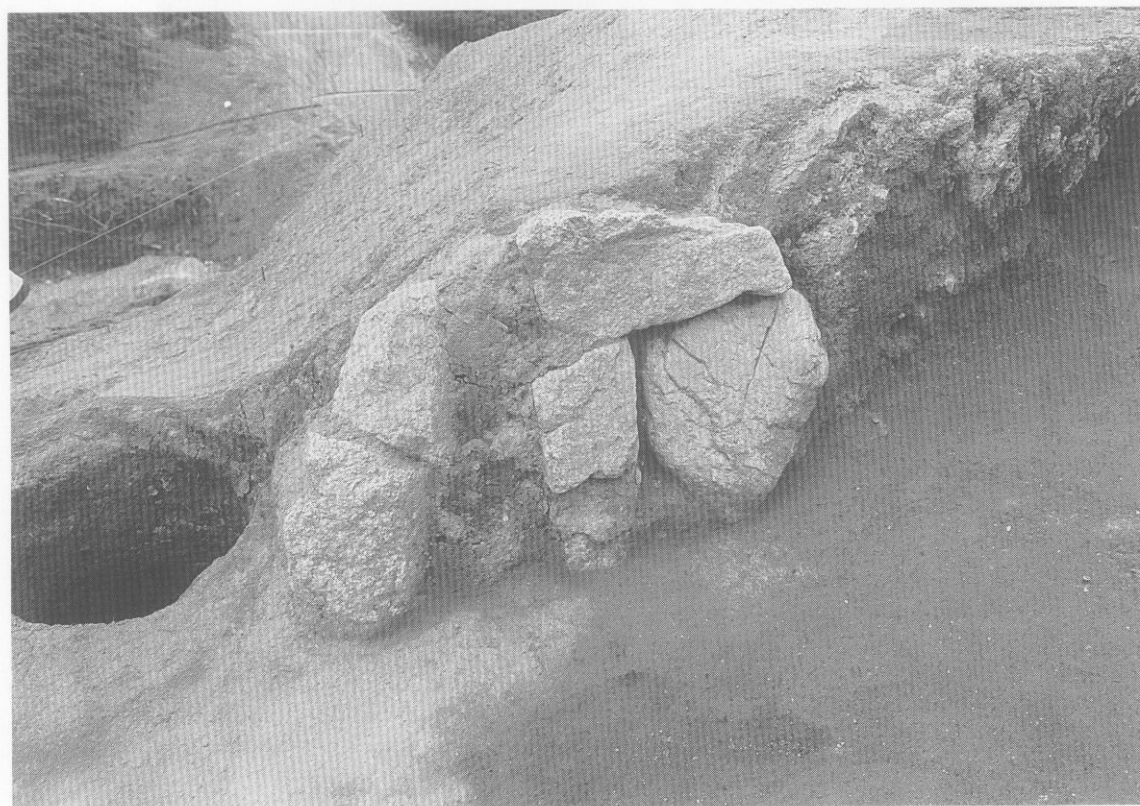
2. 55号窯跡床面置台検出状態



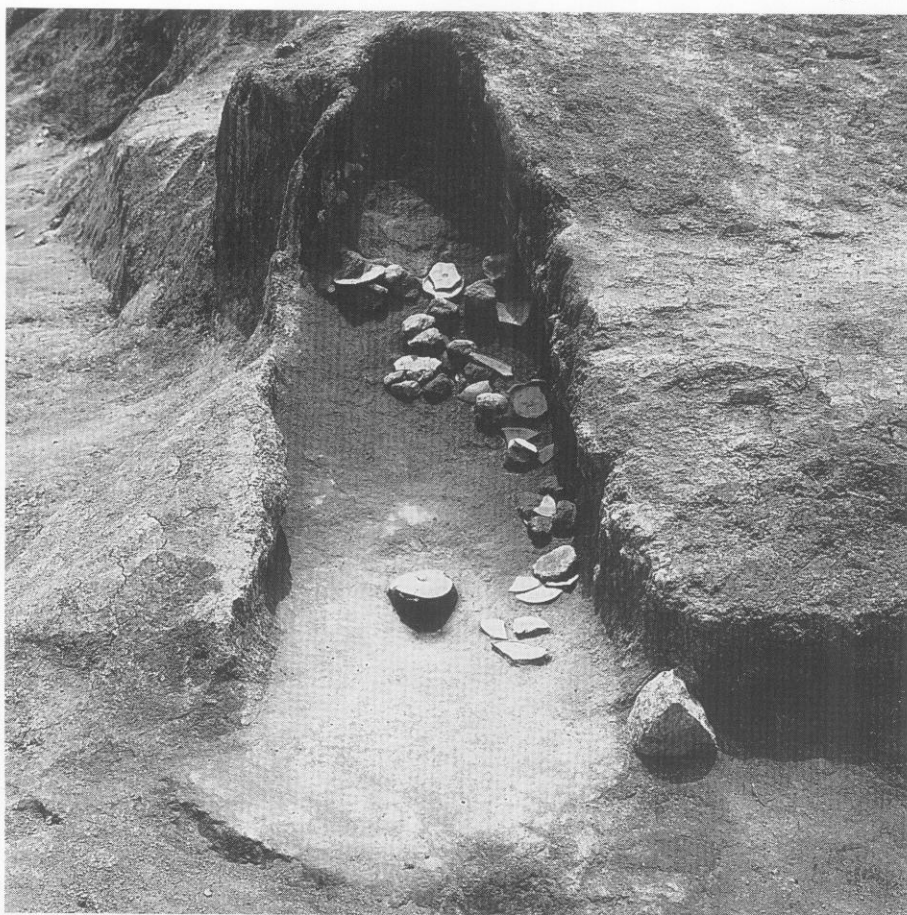
I 地区



1. 55号窯跡燃烧部右侧壁石组



2. 55号窯跡燃烧部左侧壁石组



1.  
56号窑迹



2. 57号窑迹

I 地区

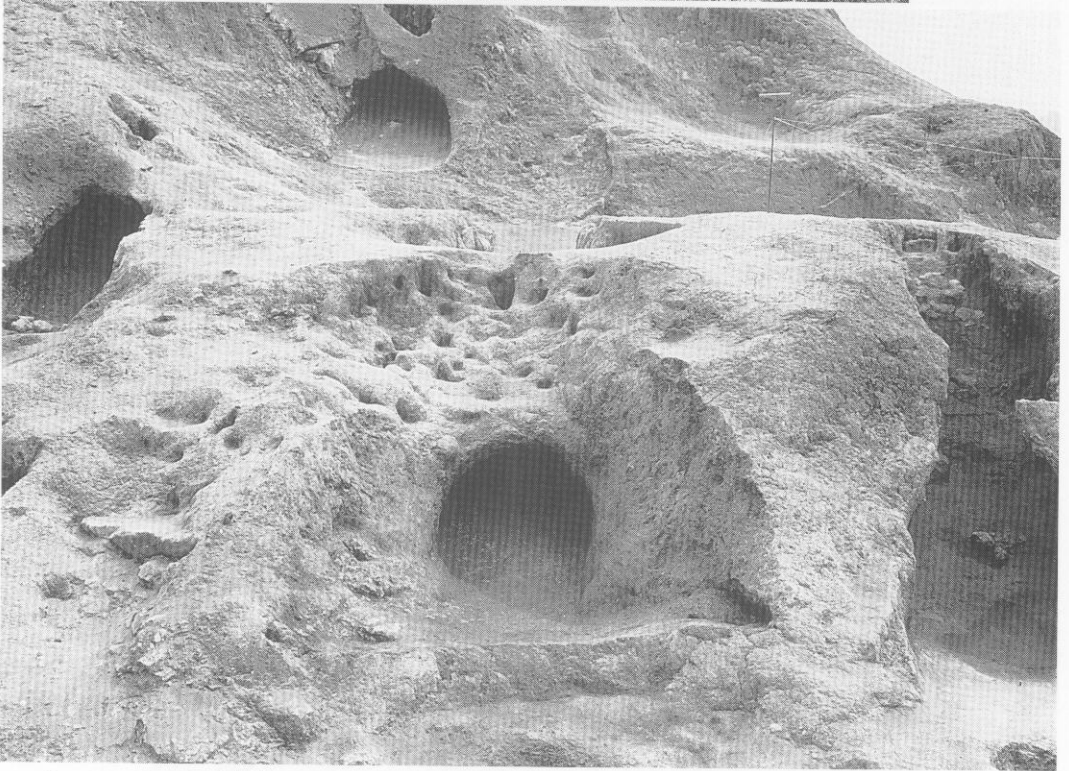
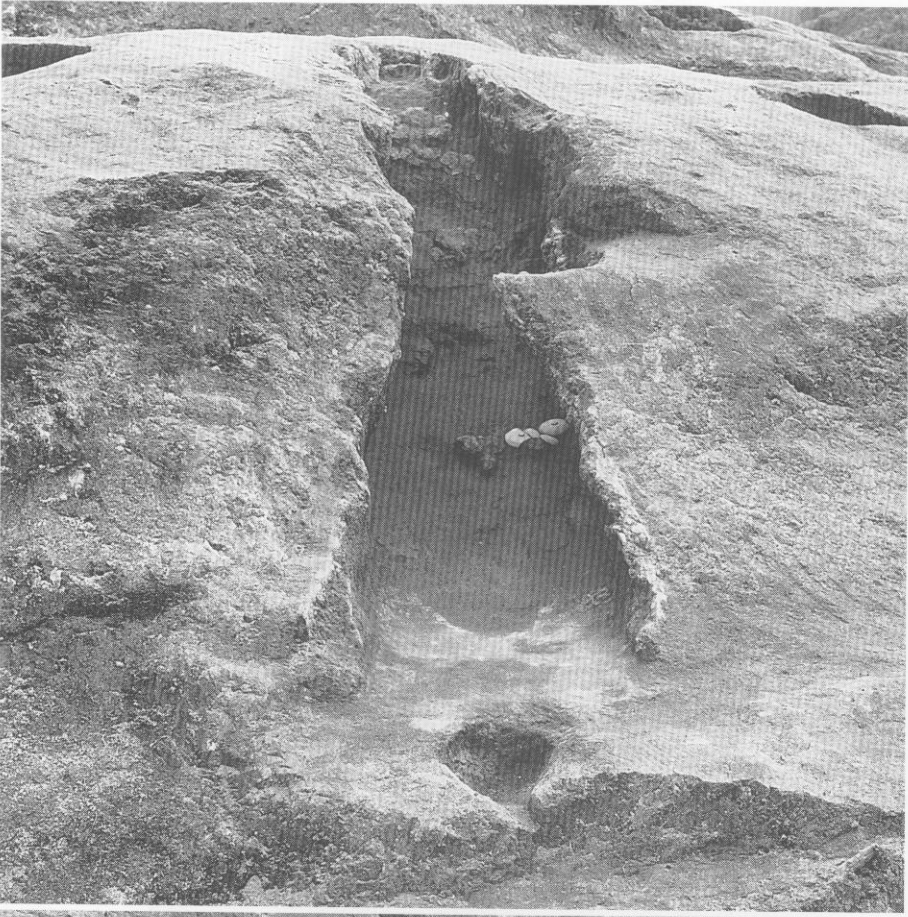


1.  
64  
号  
窟  
迹



2. 64号窟迹

1.  
65号窑迹



2. 57~59·67号窑迹

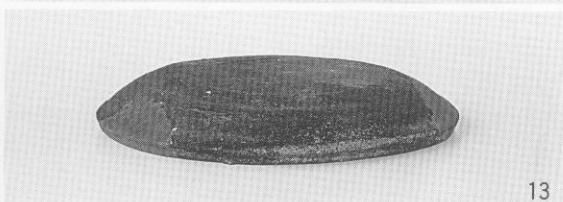
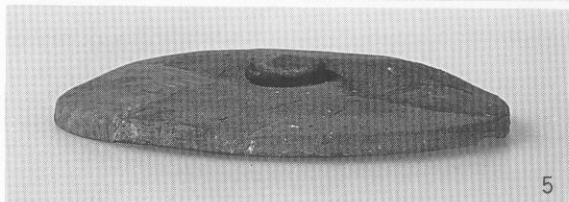
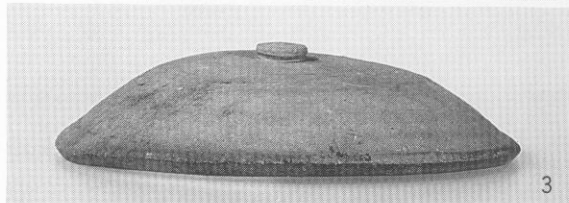
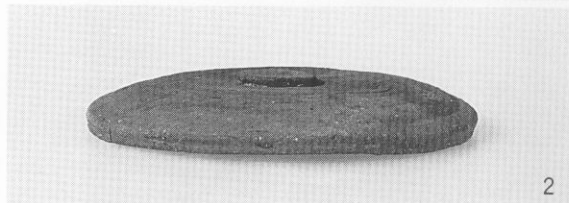
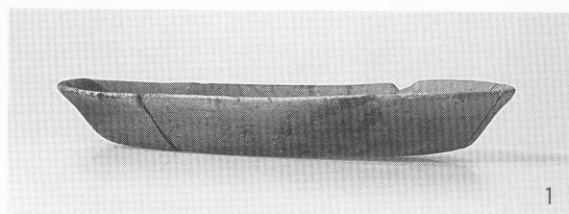
I 地区



1. 66号窑迹上部土壤 1

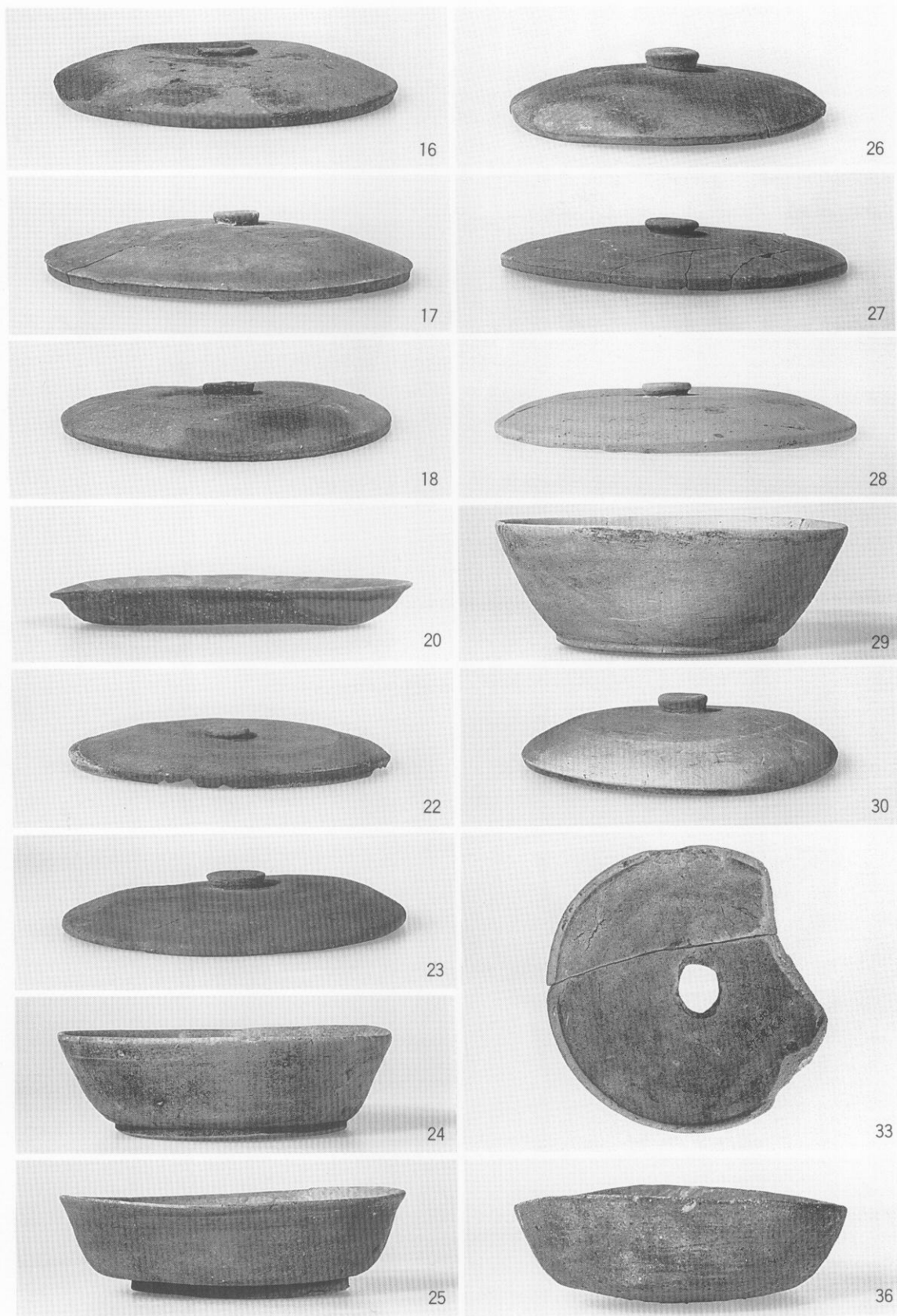


2. 66号窑迹上部土壤 2

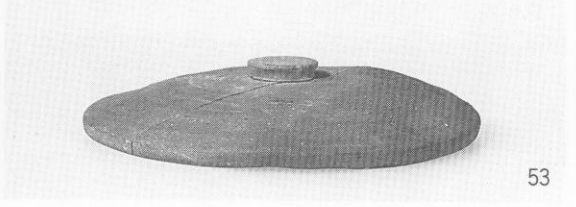
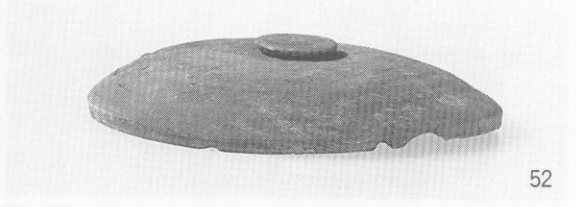
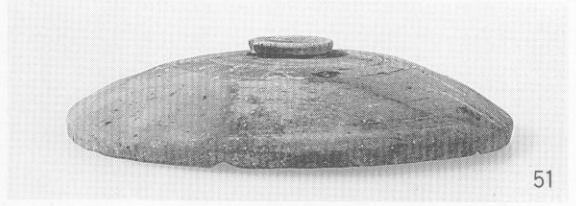
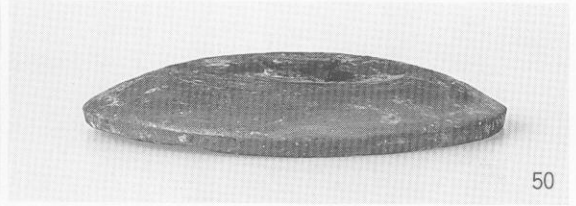
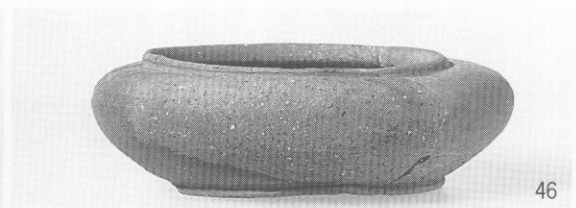
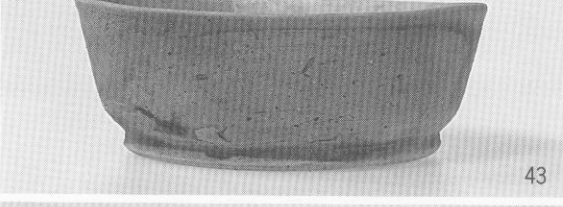
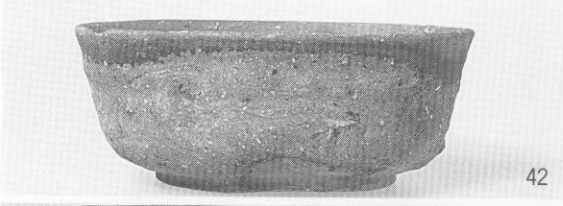
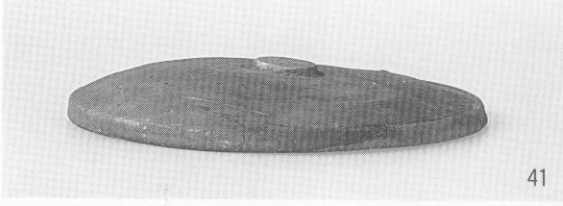
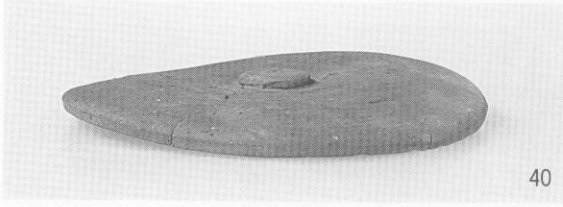
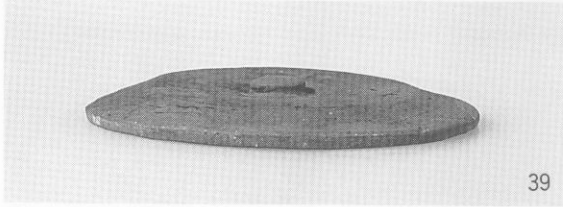
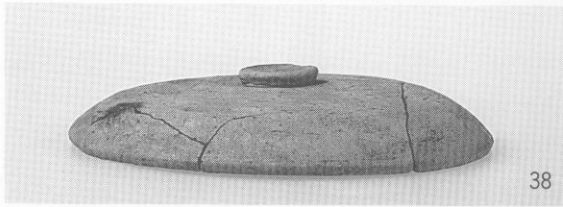
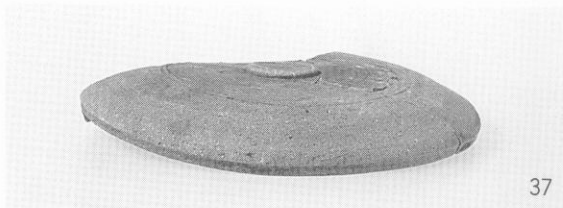


I 地区出土土器 1

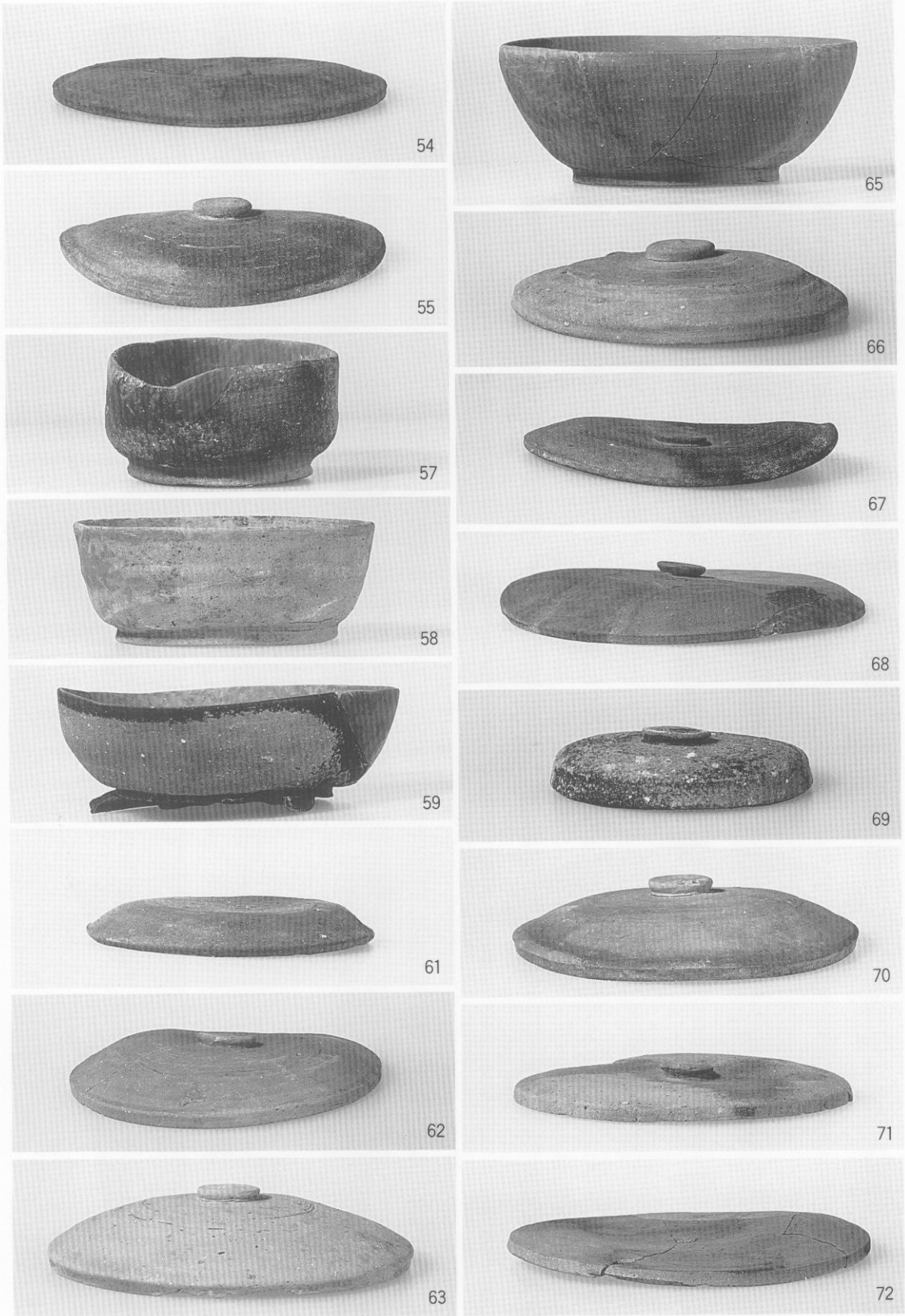
I 地区

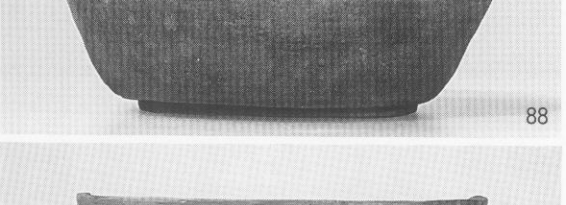
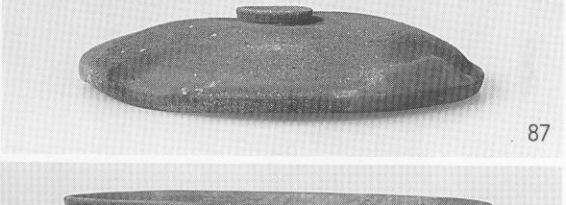
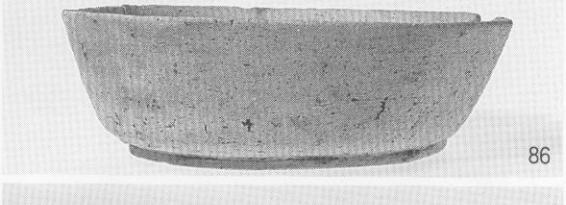
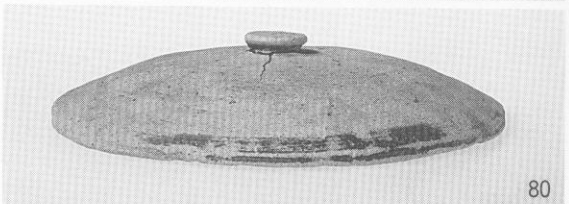
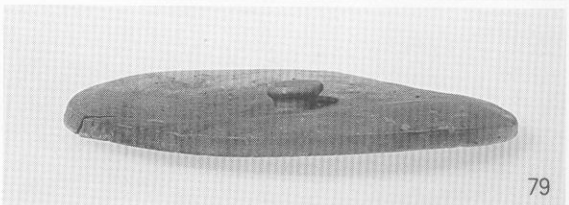
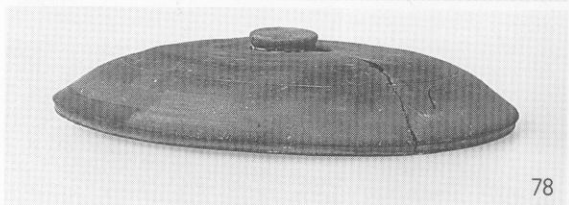
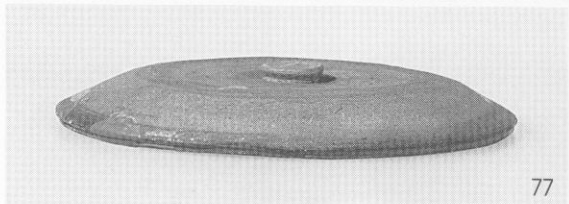
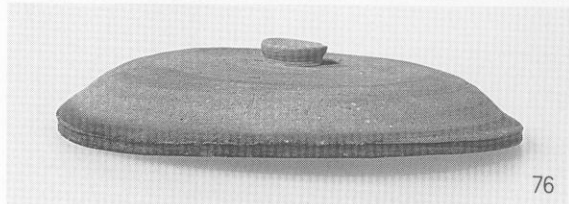
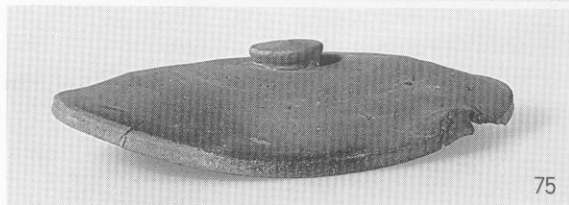


I 地区出土土器 2

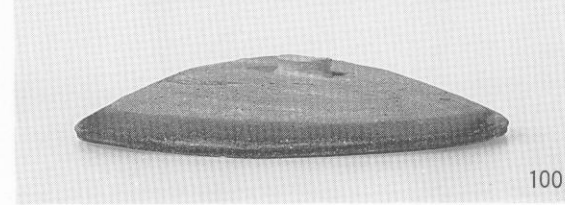
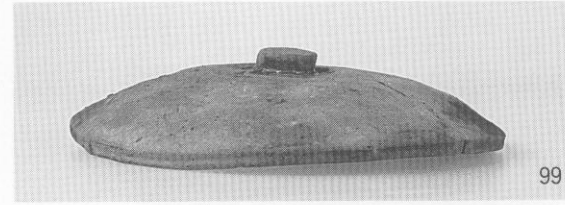
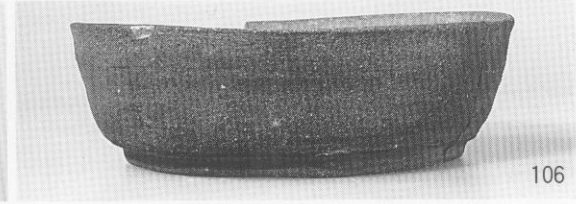
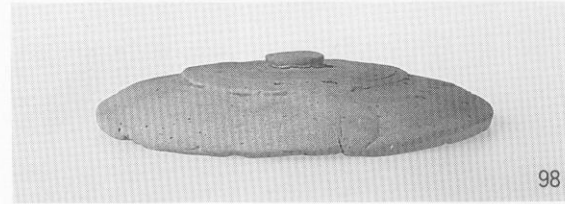
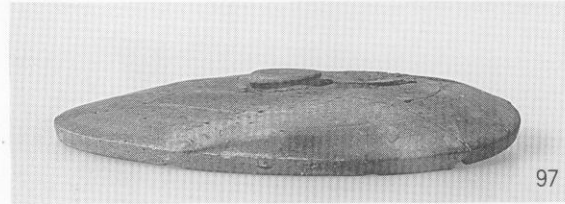
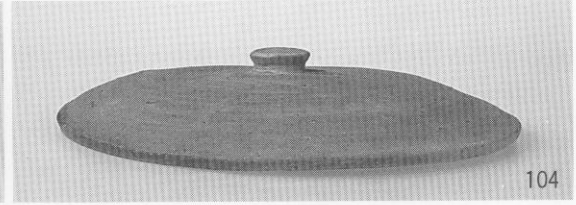
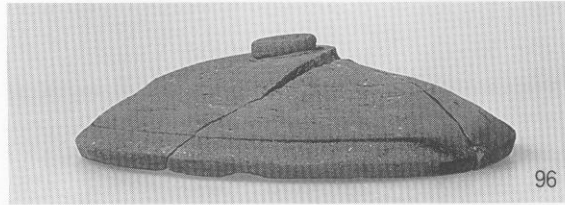
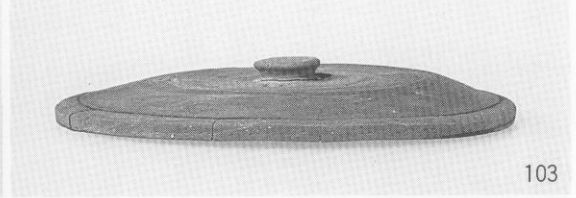
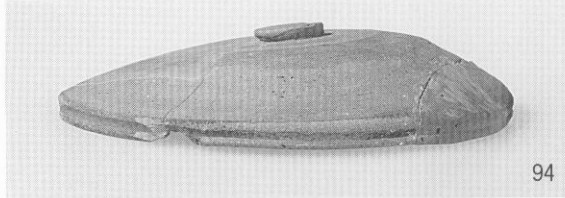
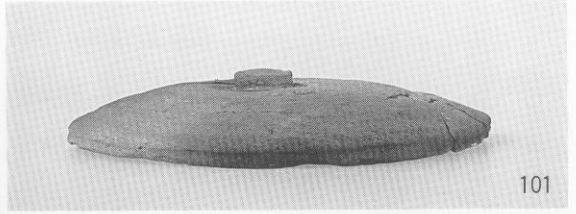
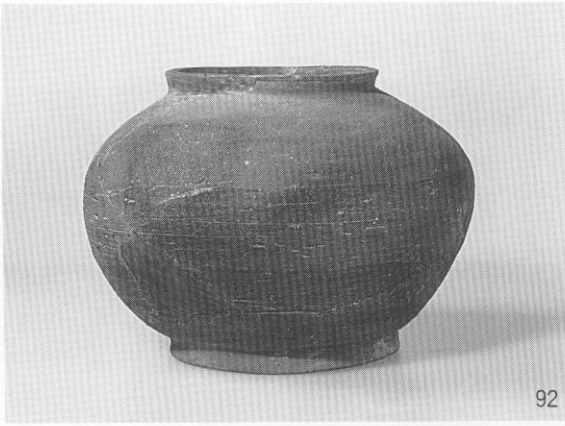


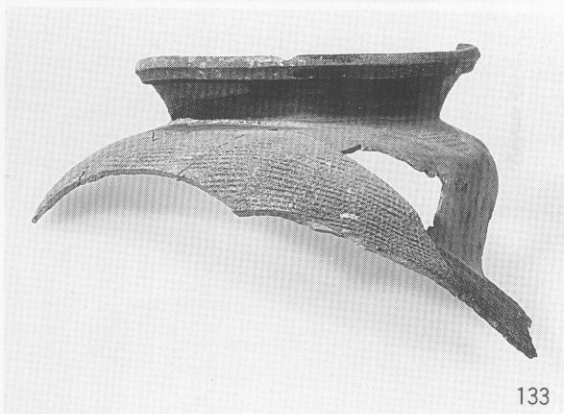
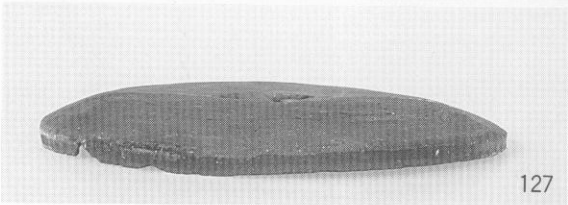
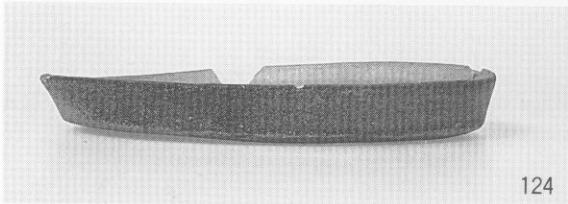
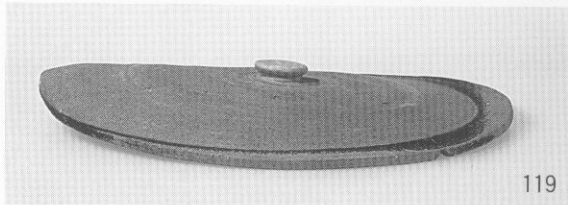
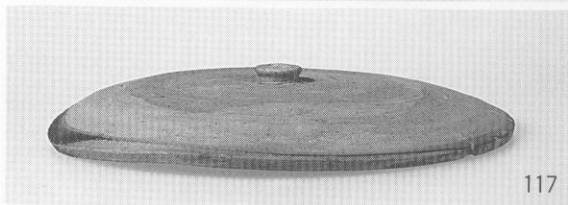
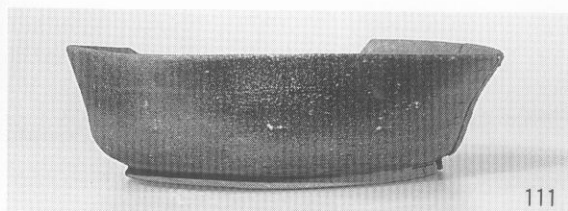






I 地区





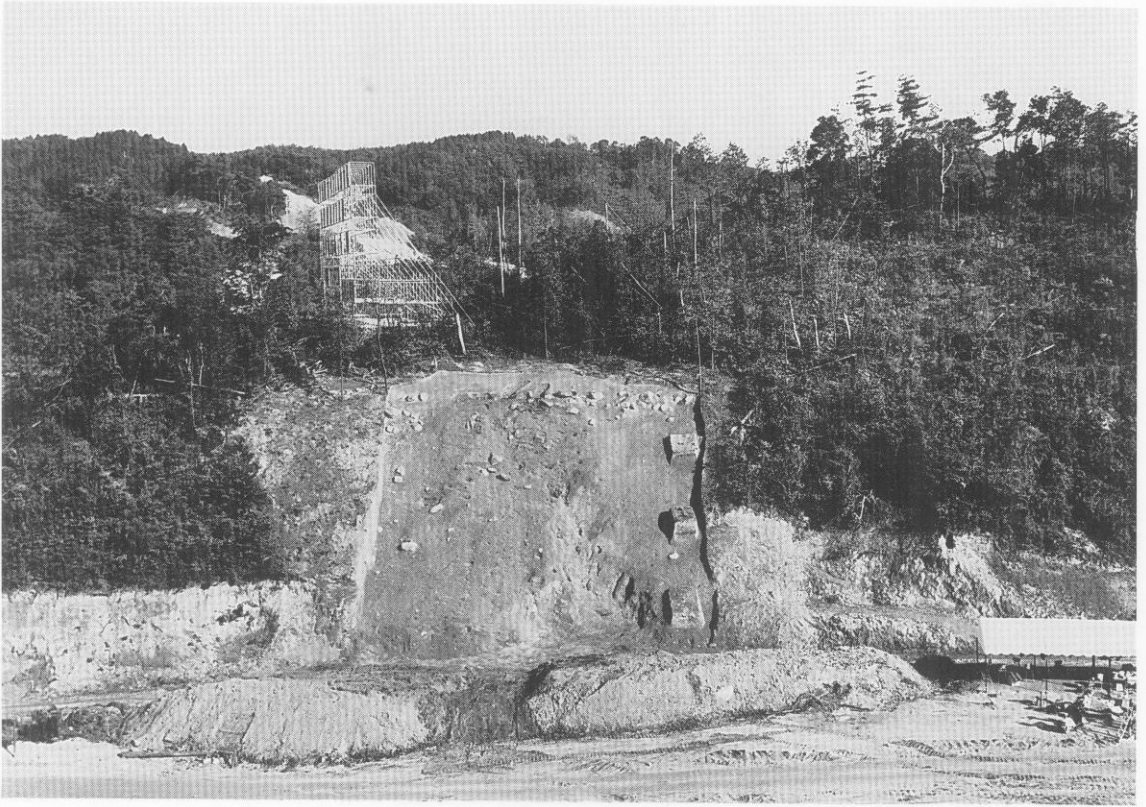
M-1 地区



1. 伐採後の確認調査状況（西から）



2. 51・52号窯跡灰原検出状態



1. 調査区全景（西から）



2. 51(右)・52号窯跡(左)

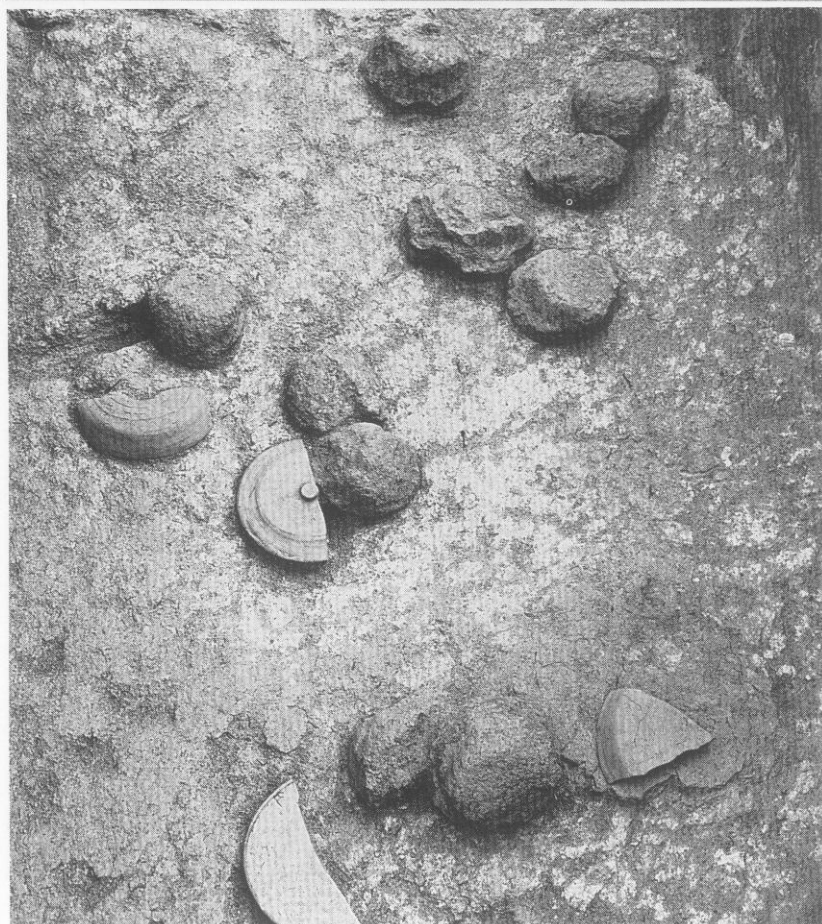
M-1 地区

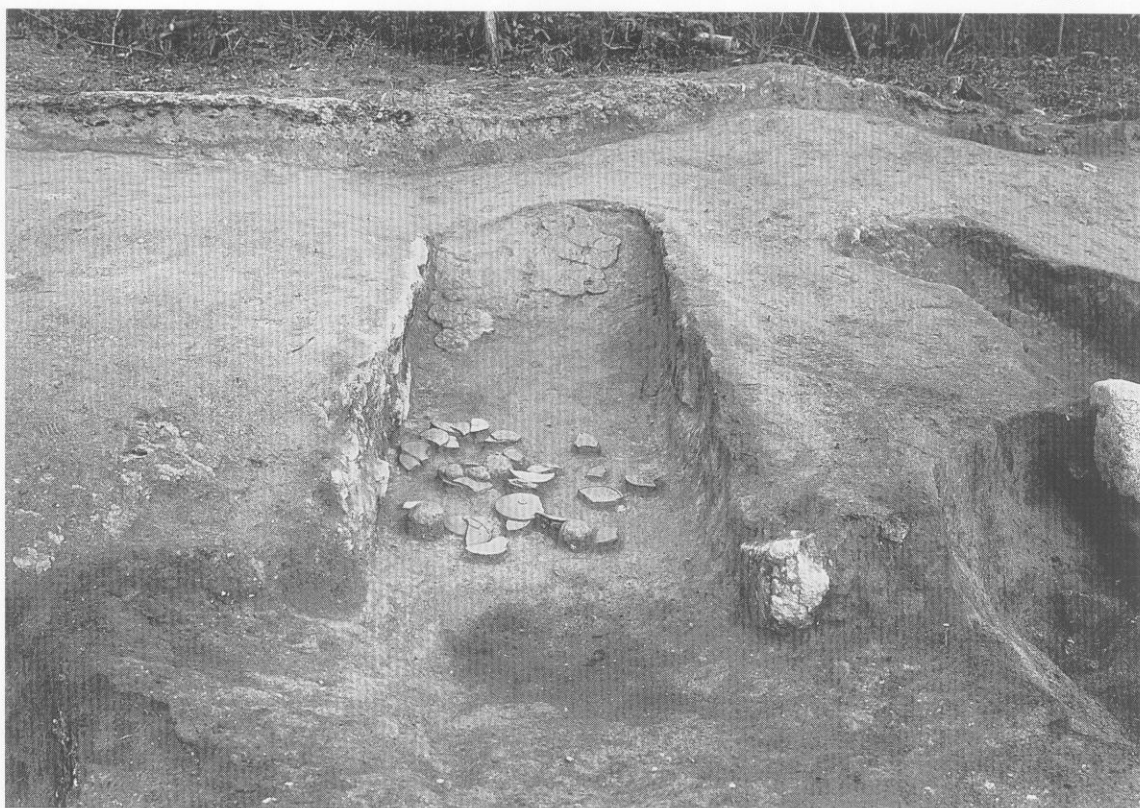


1. 51号窯跡

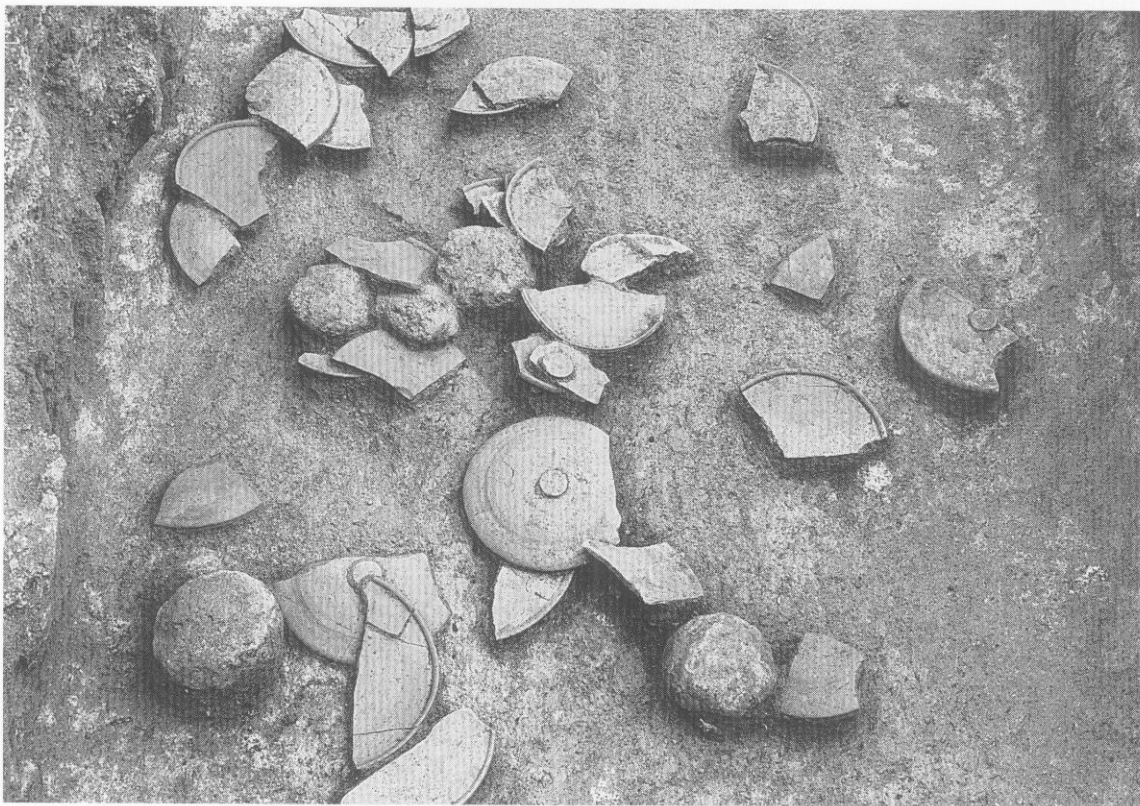
2.

51号窯跡床面須恵器、置台出土状態





1. 52号窯跡



2. 52号窯跡焚口床面須惠器、置台出土状态



M-1 地区



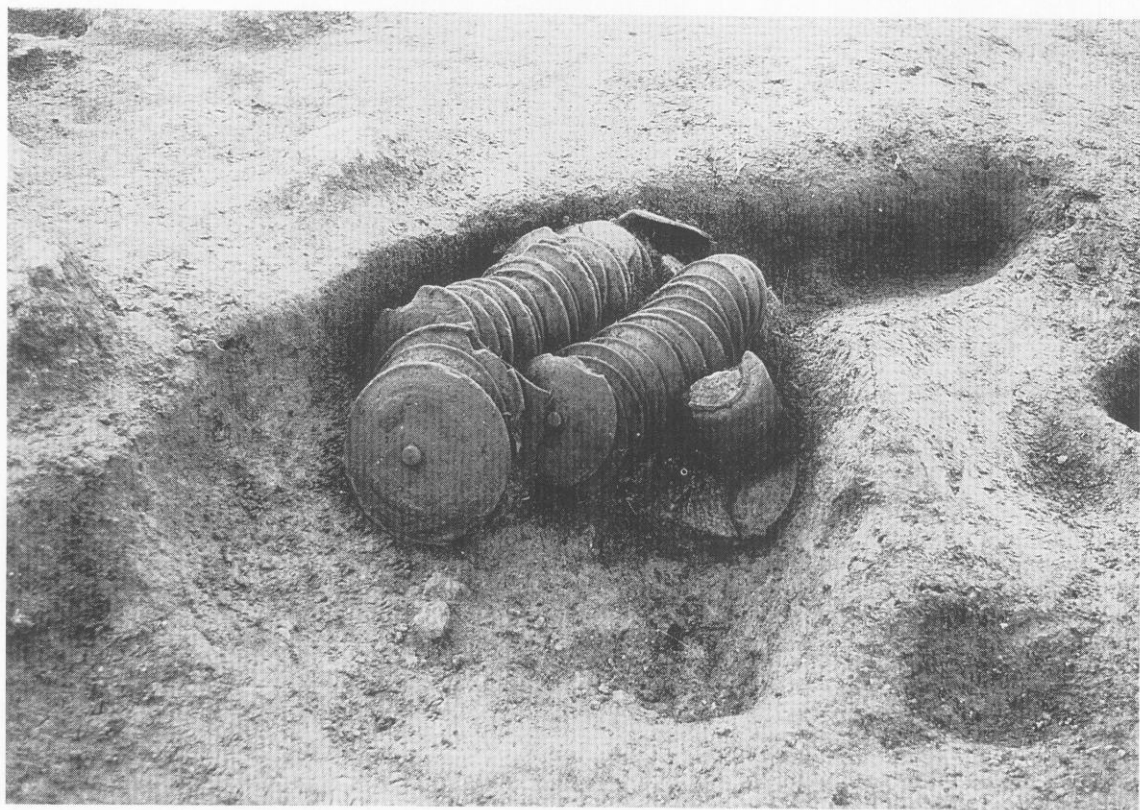
1. 51号窯跡焚口左側 土壙



2. 52号窯跡焚口左側 土壙

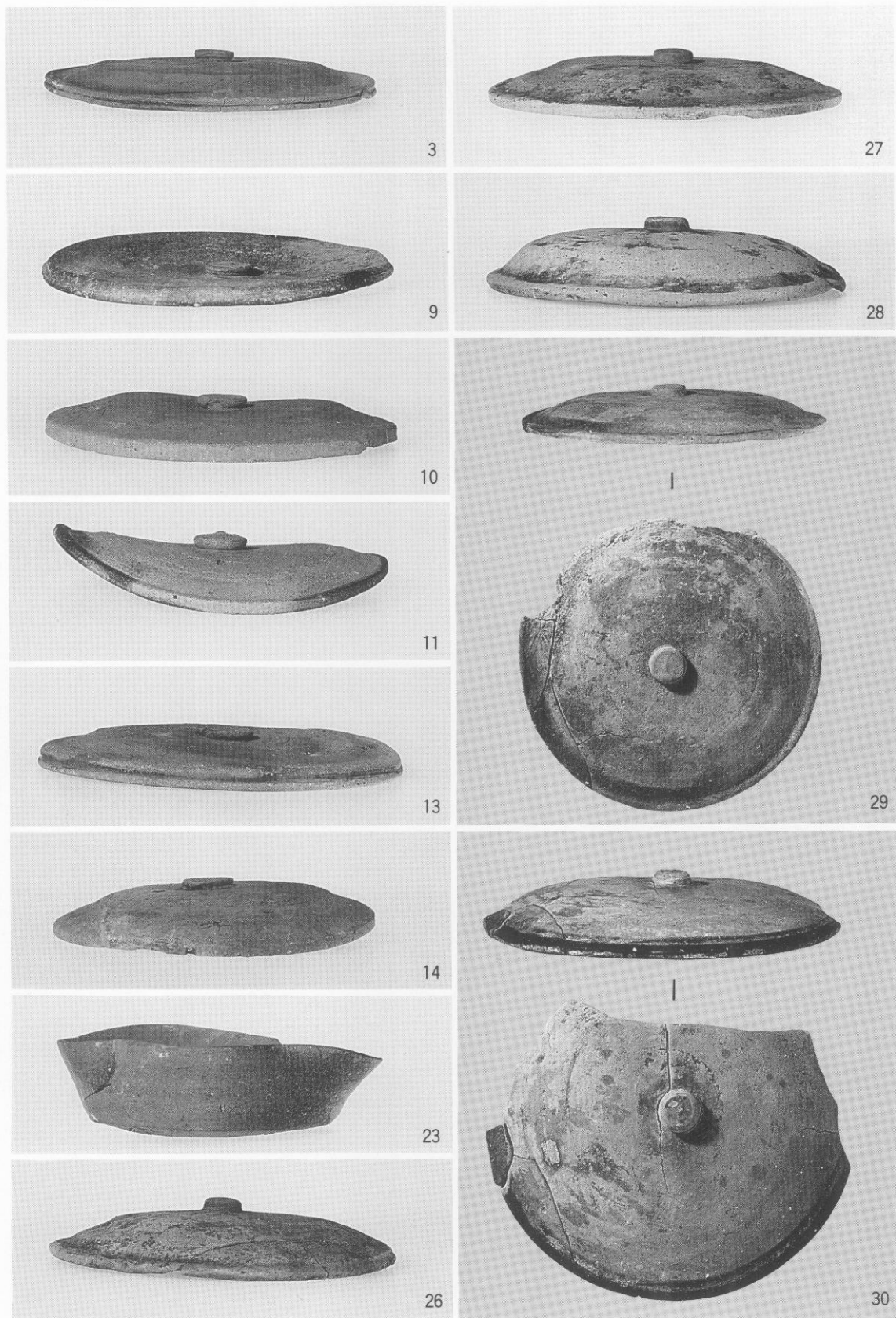


1. 51号窯跡右側 土城須恵器出土状態 1

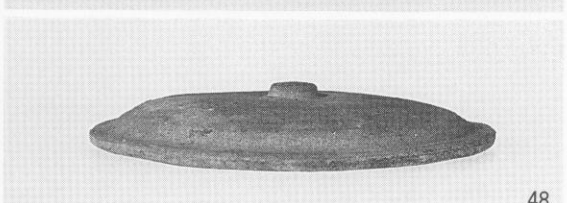
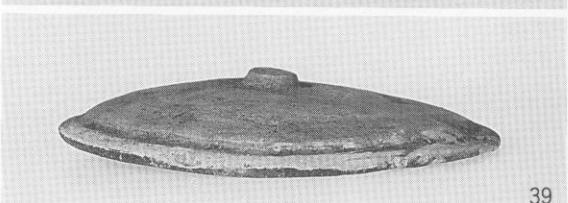
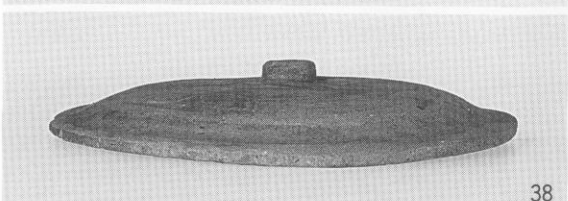
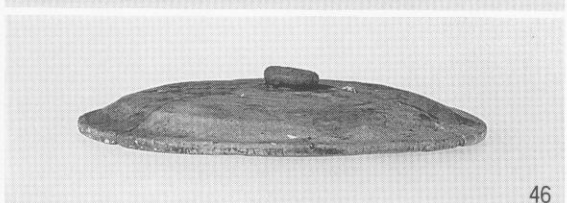
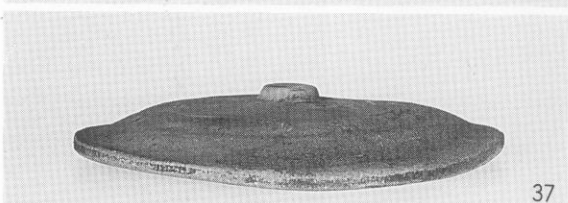
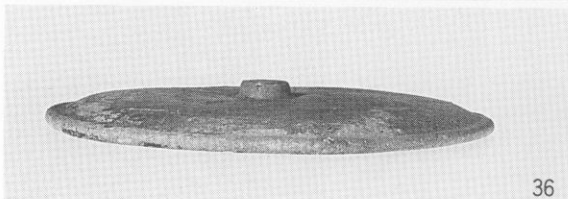
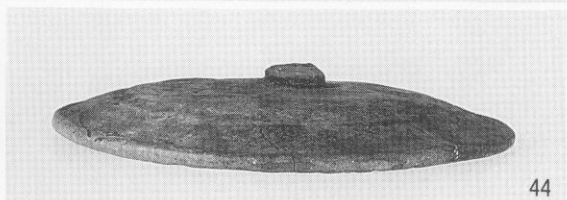
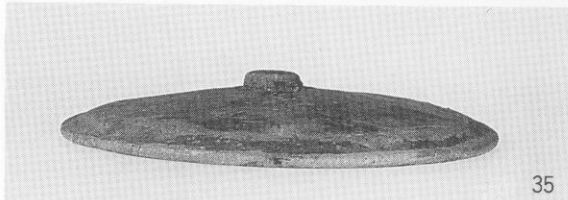
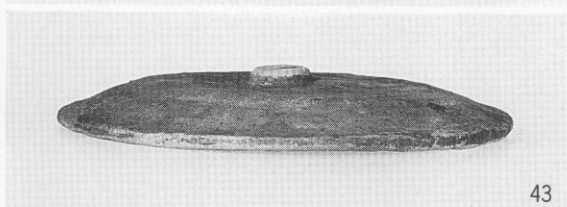
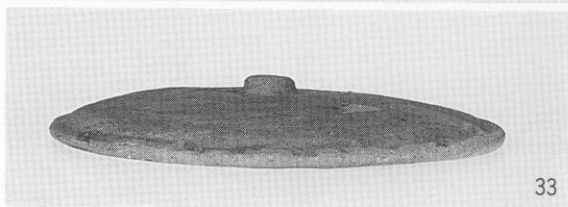
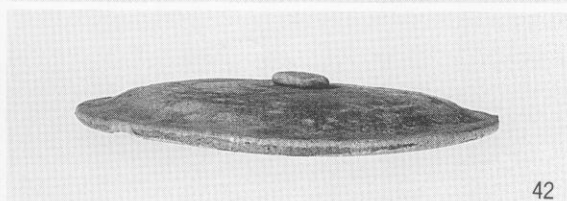
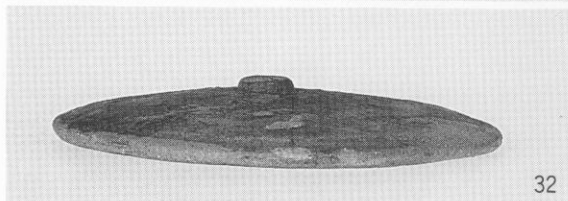
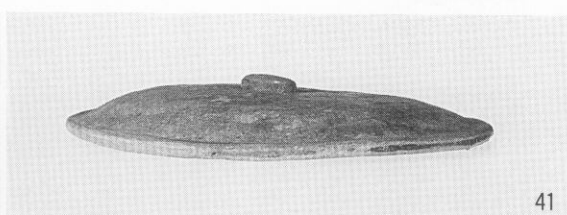
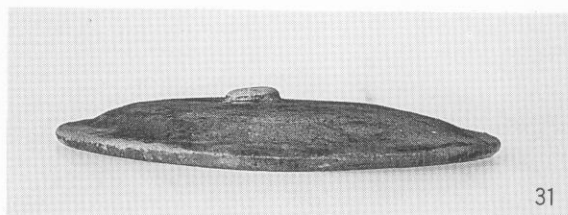


2. 51号窯跡右側 土城須恵器出土状態 2

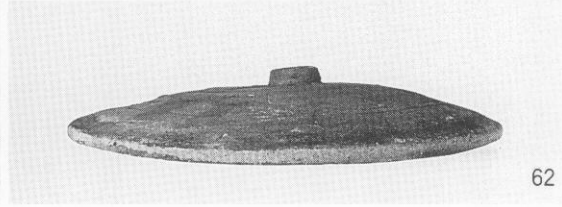
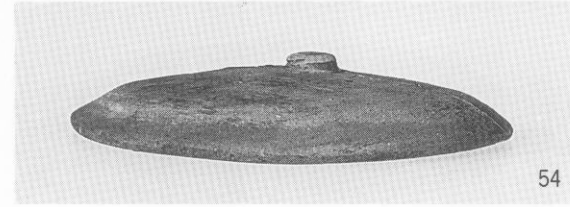
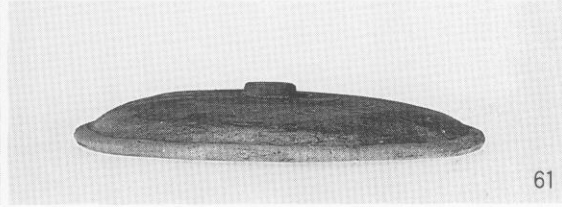
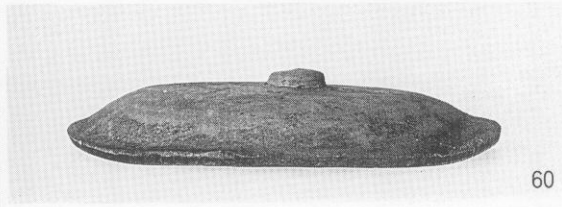
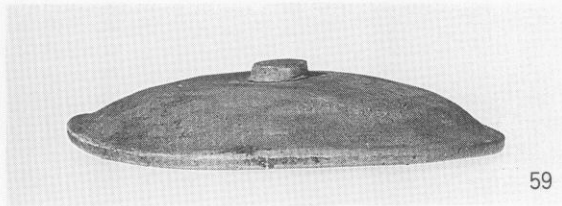
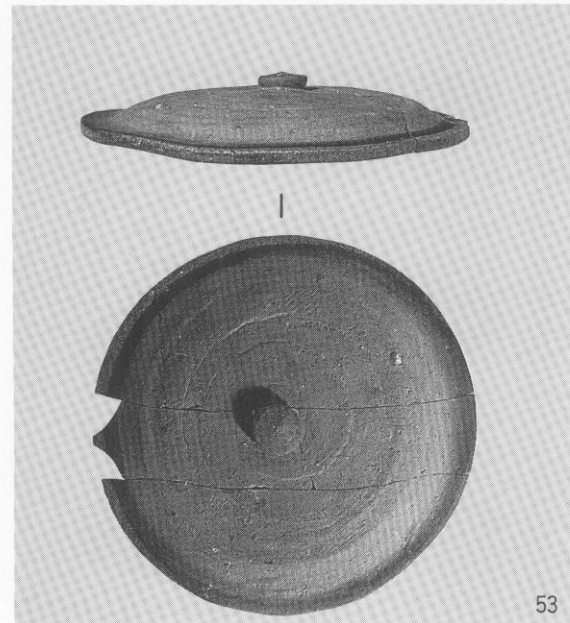
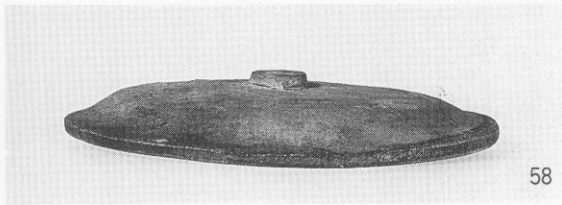
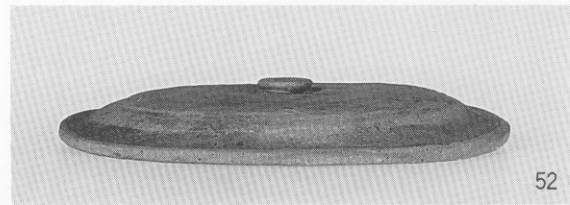
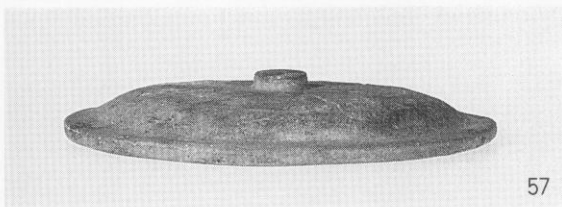
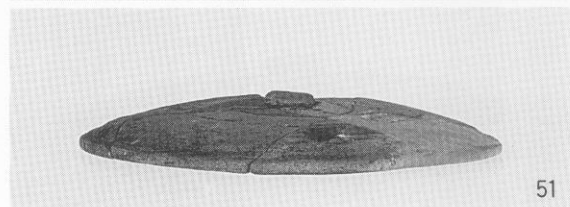
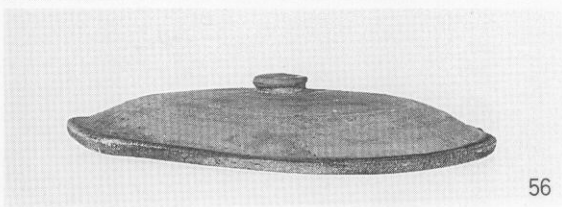
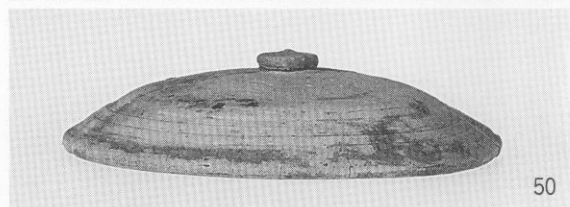
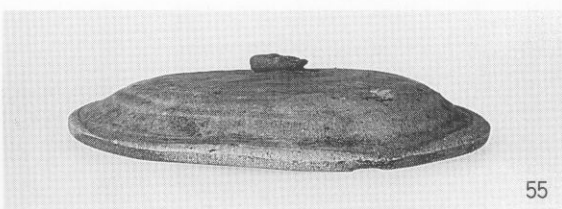
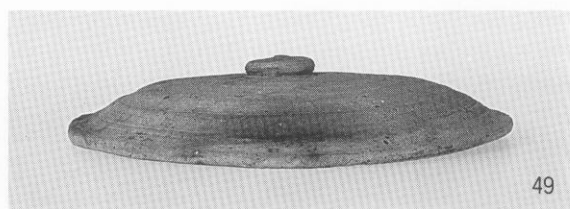
M-1 地区

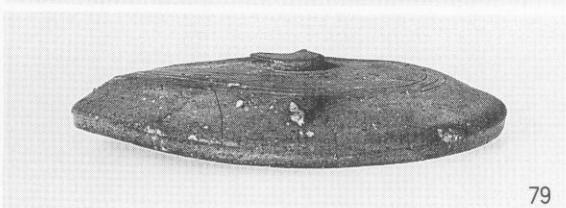
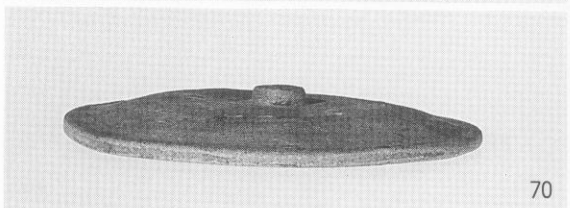
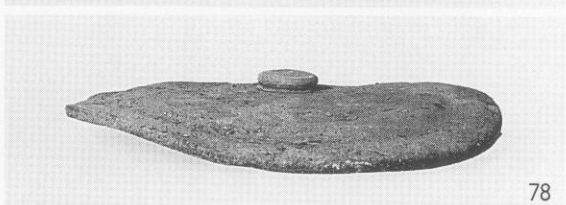
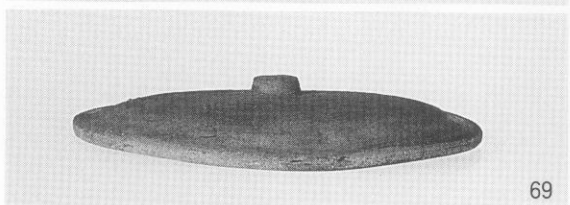
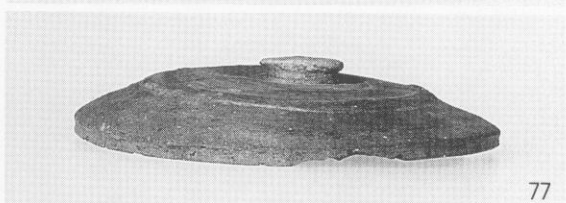
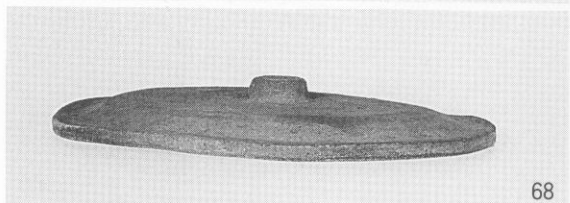
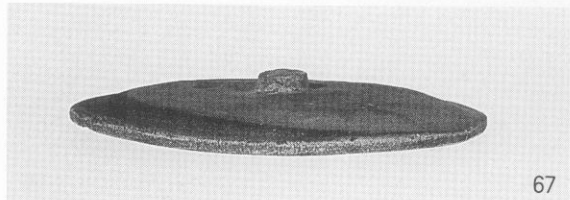
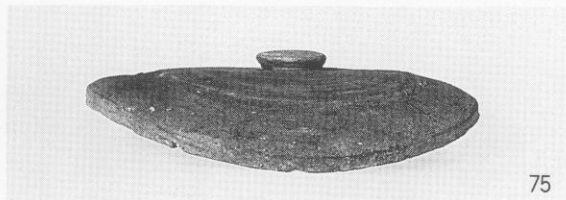
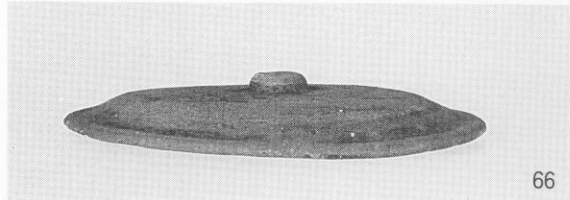
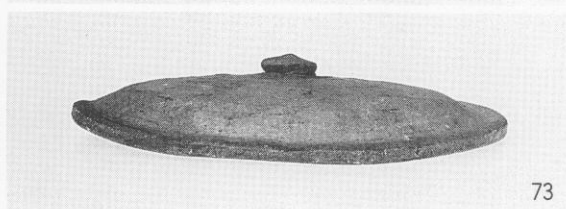
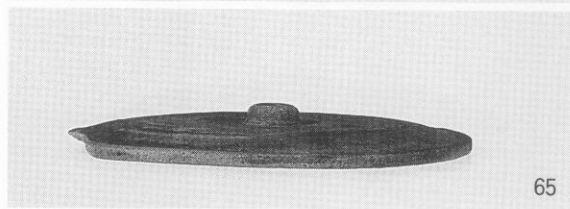
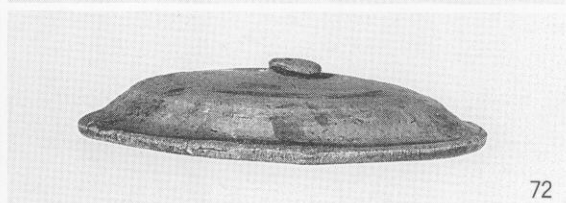
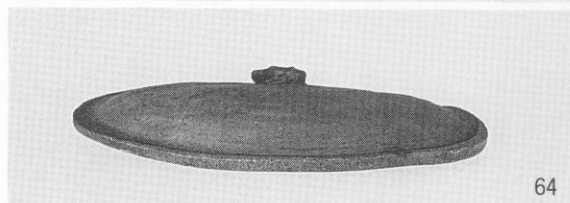
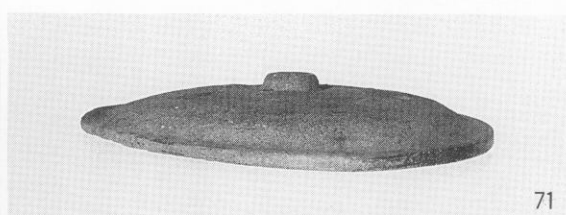
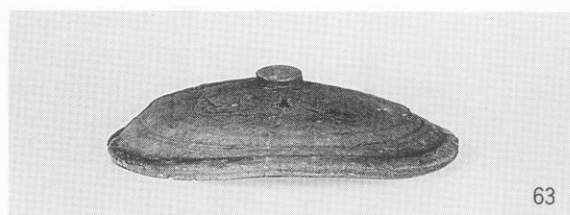


M-1 地区出土土器 1

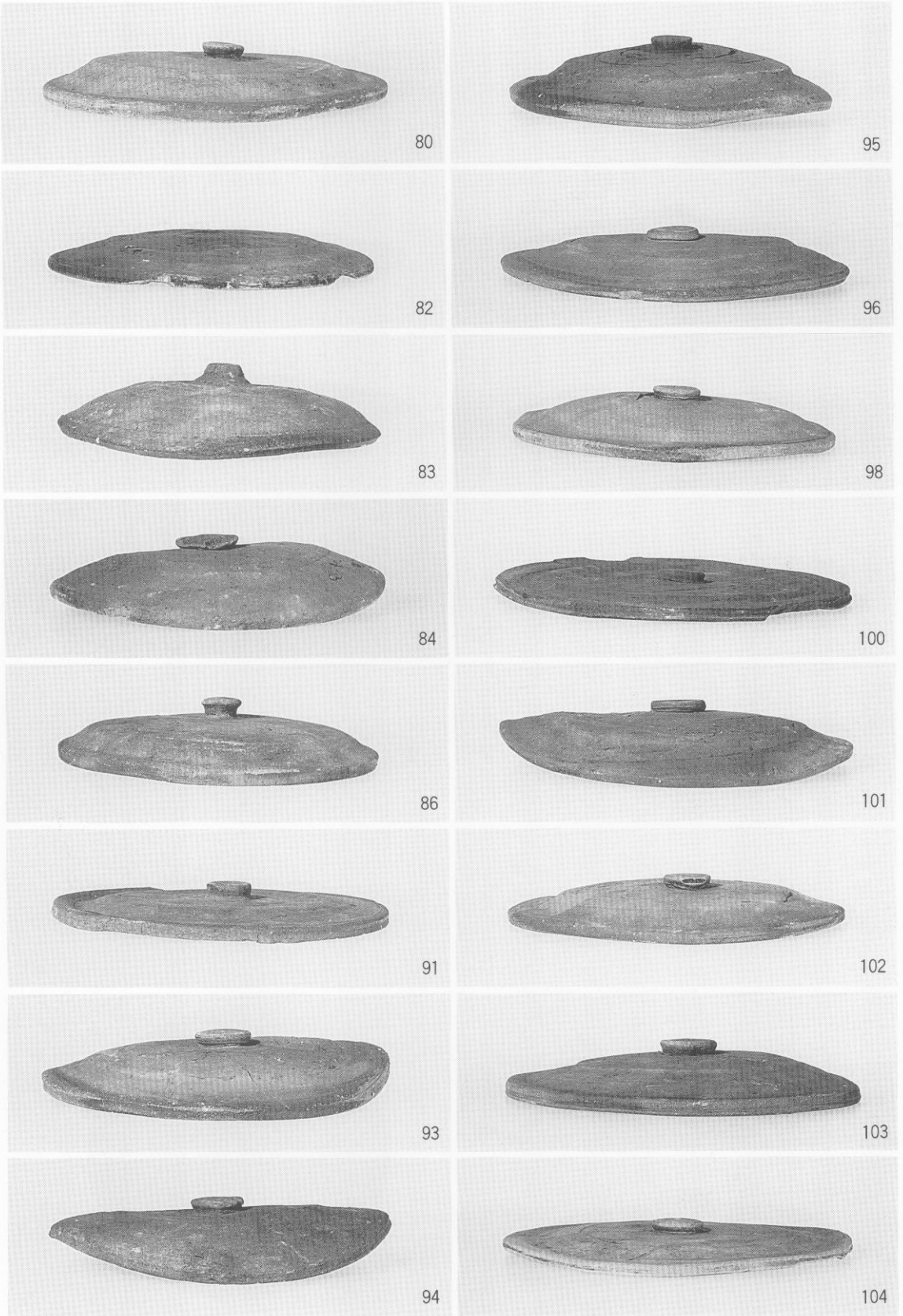


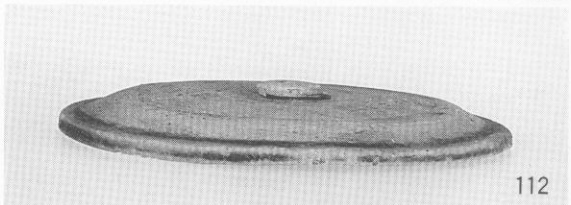
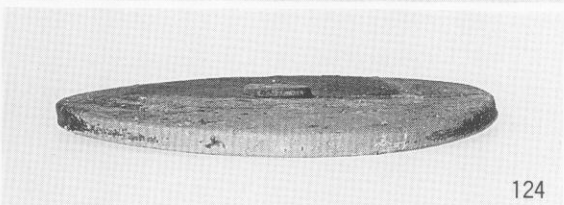
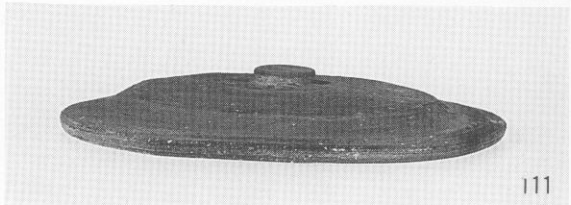
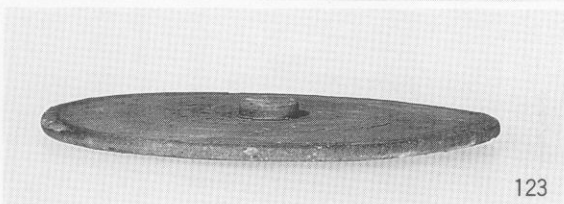
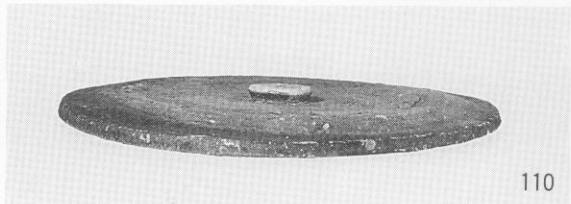
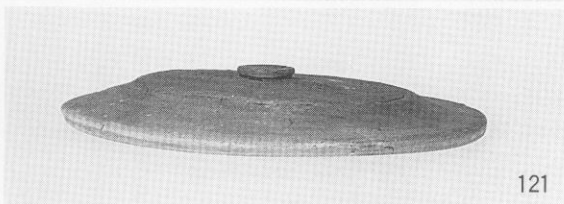
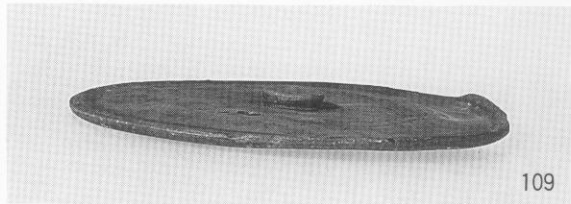
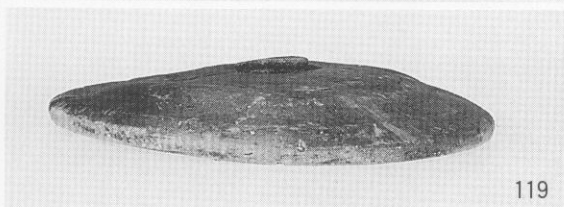
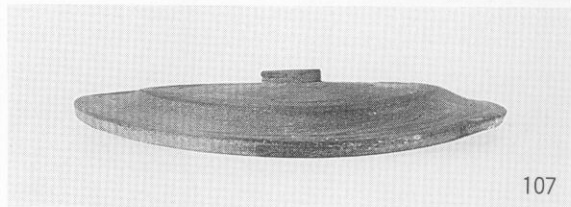
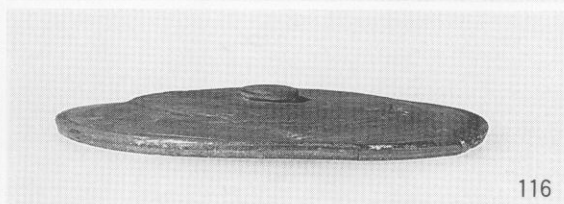
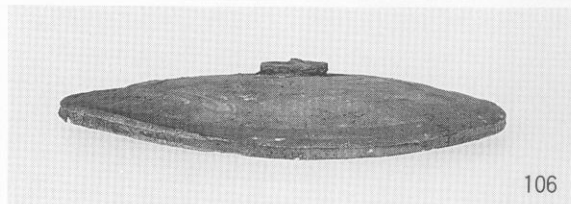
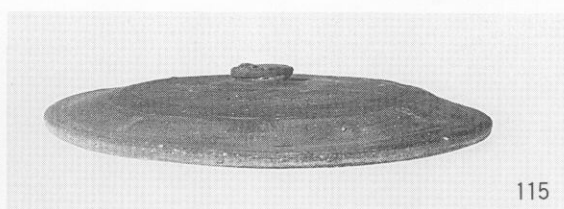
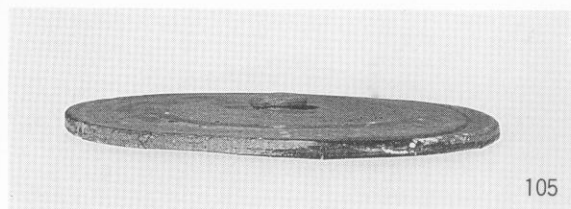
M-1 地区





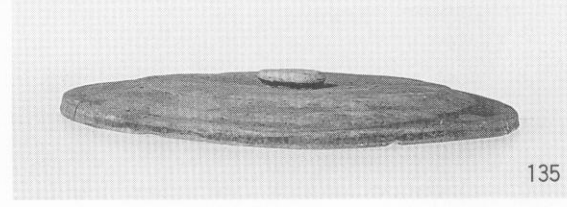
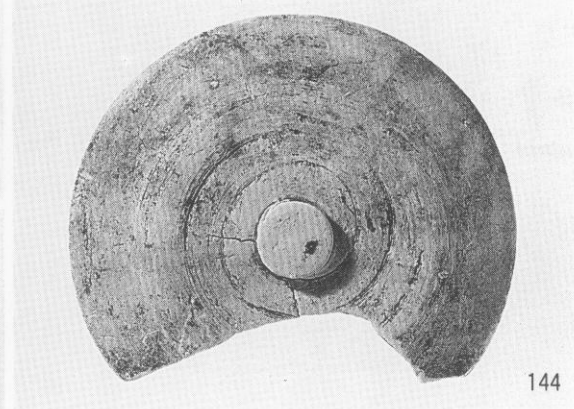
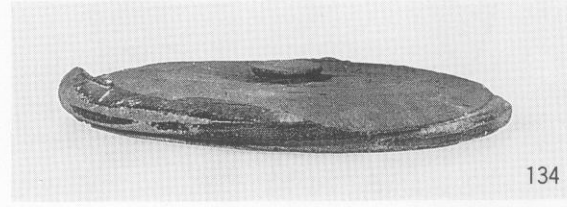
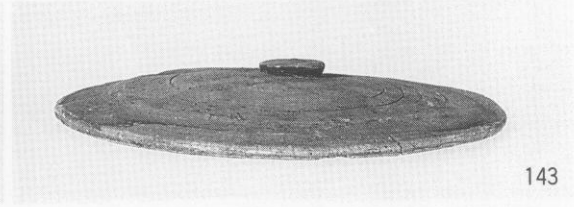
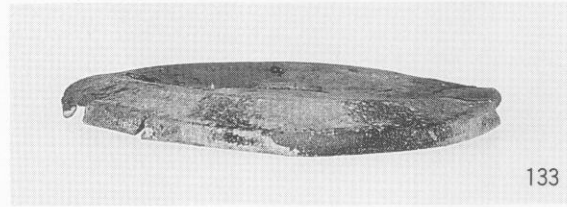
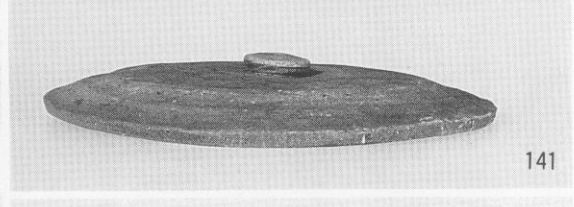
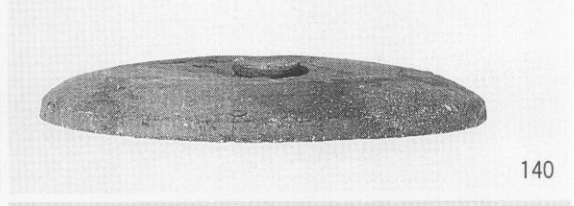
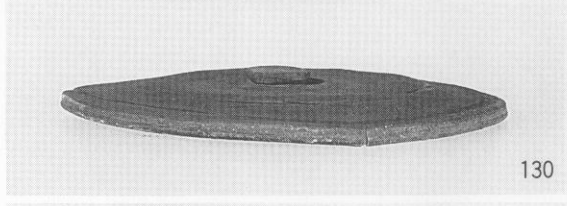
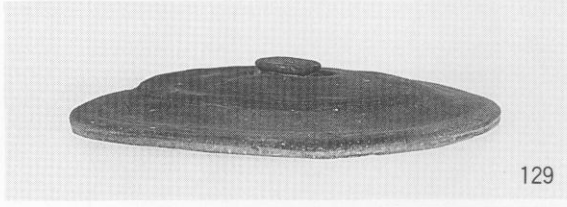
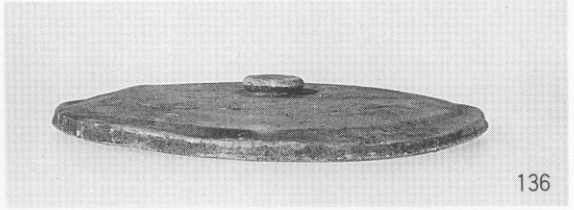
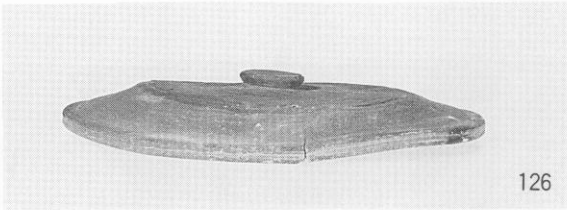
M-1 地区

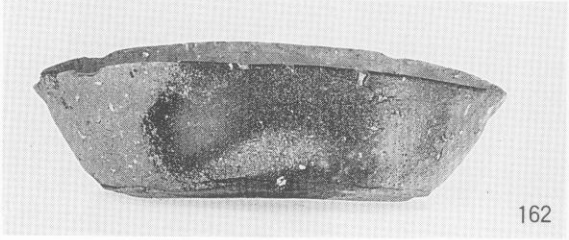
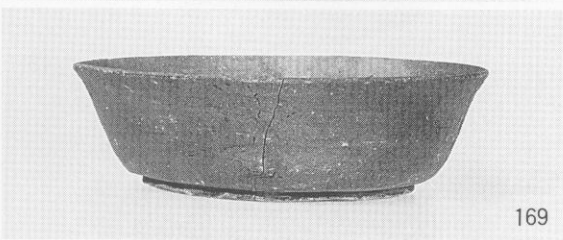
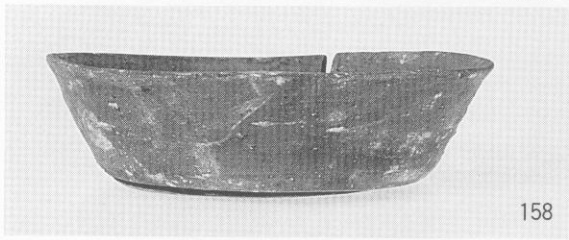
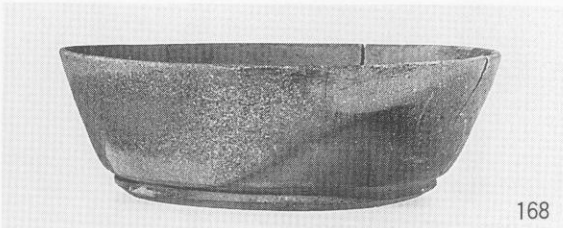
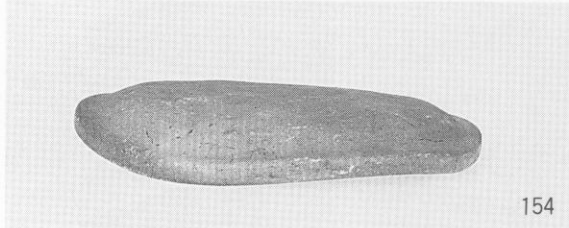
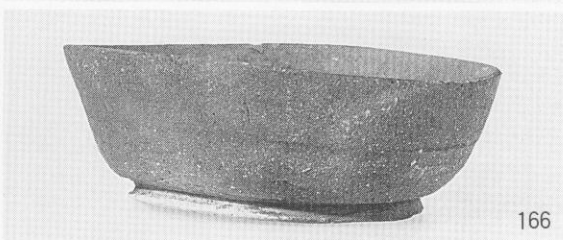
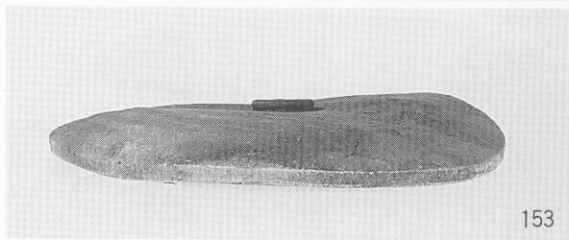
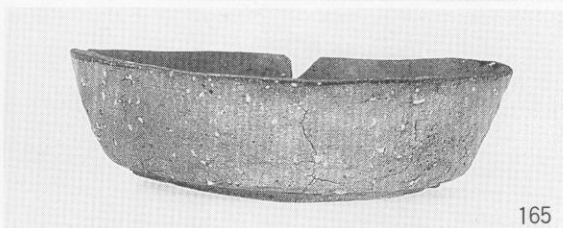
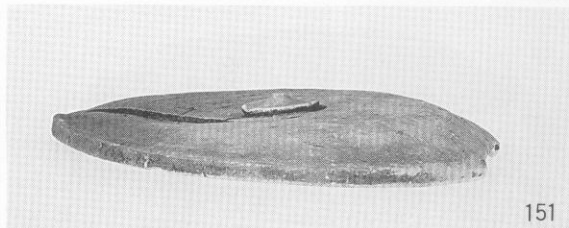
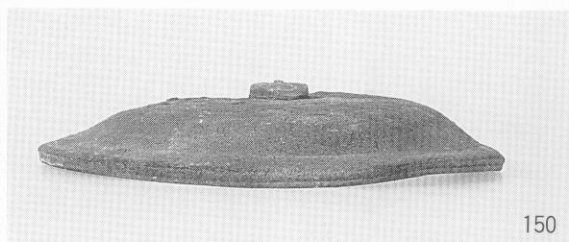






M-1 地区

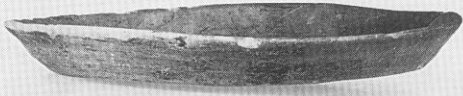




M-1 地区



M-1 地区出土土器 9



203



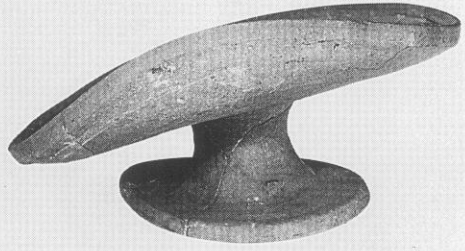
204



211



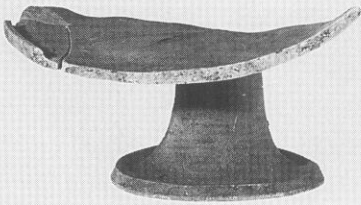
212



218



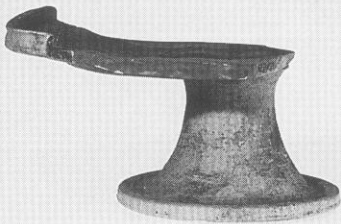
219



216



220

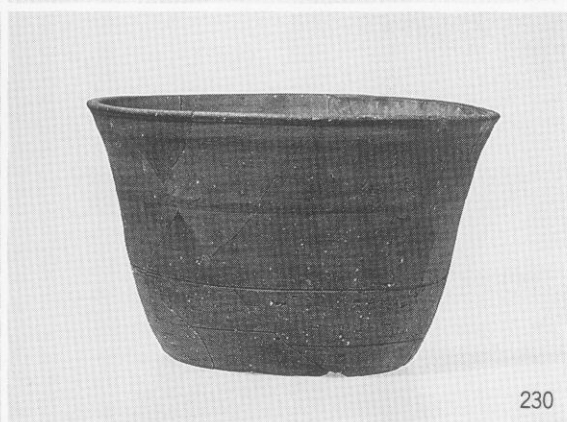
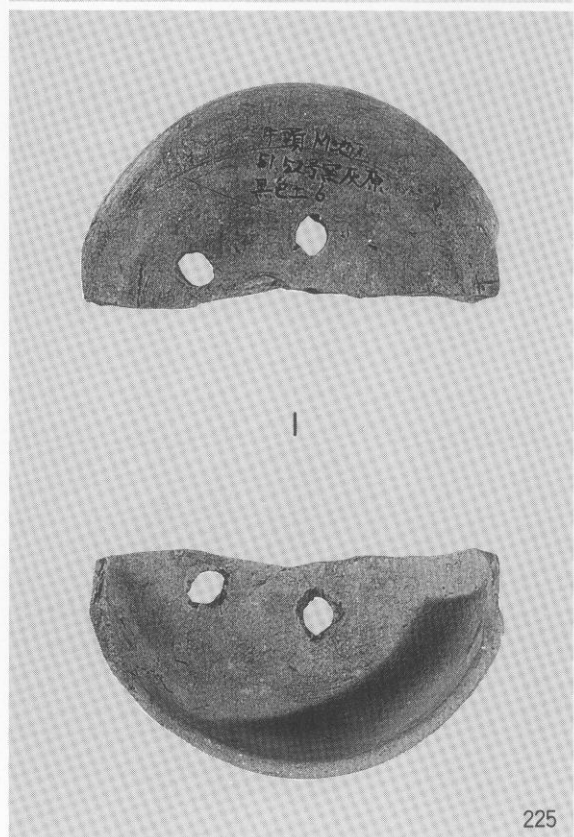
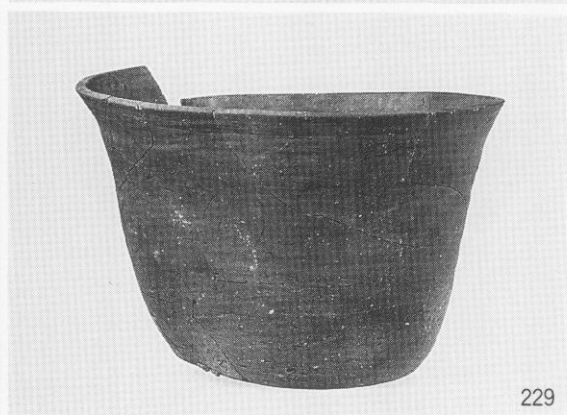


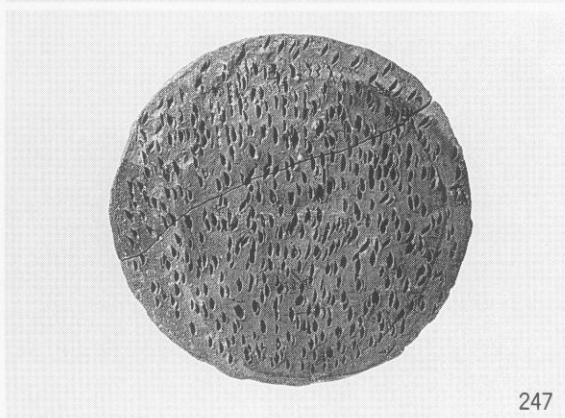
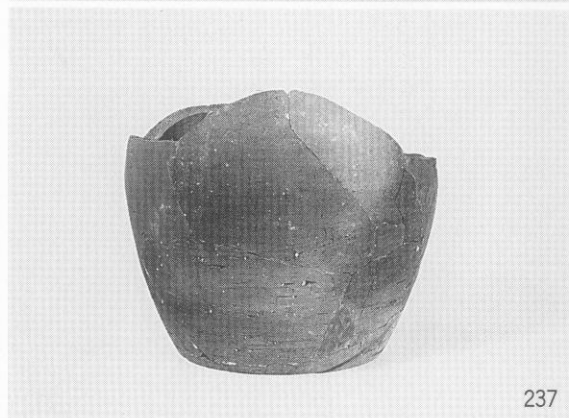
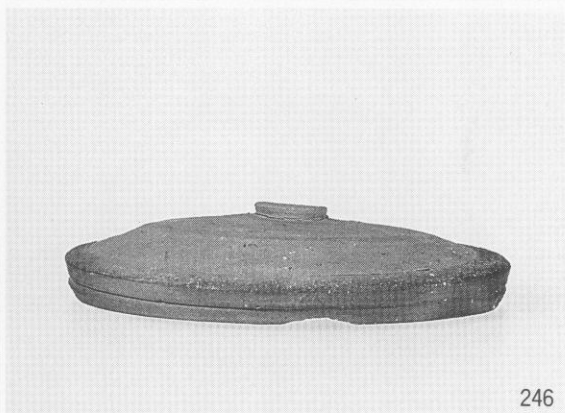
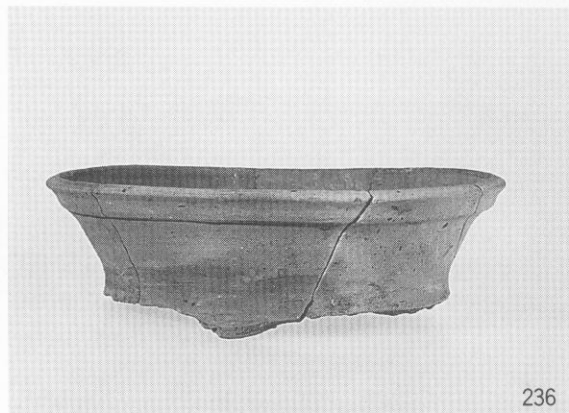
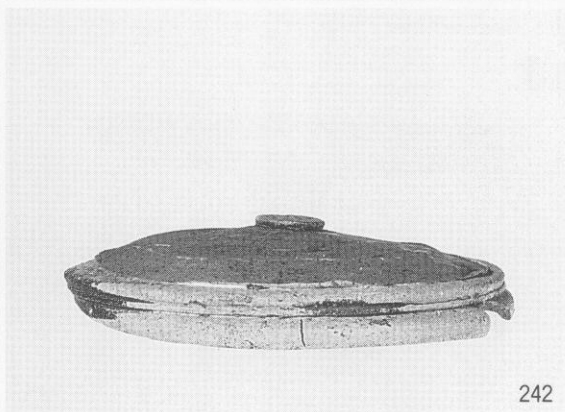
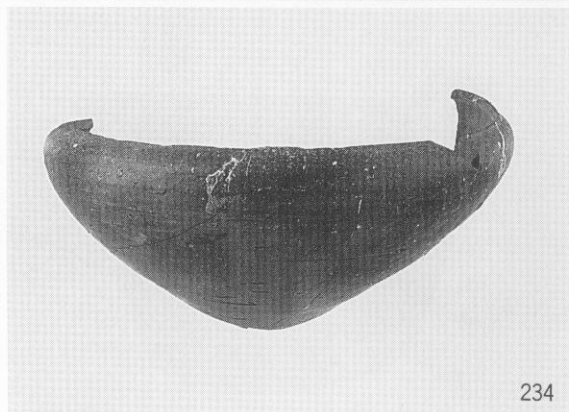
217



221

M-1 地区

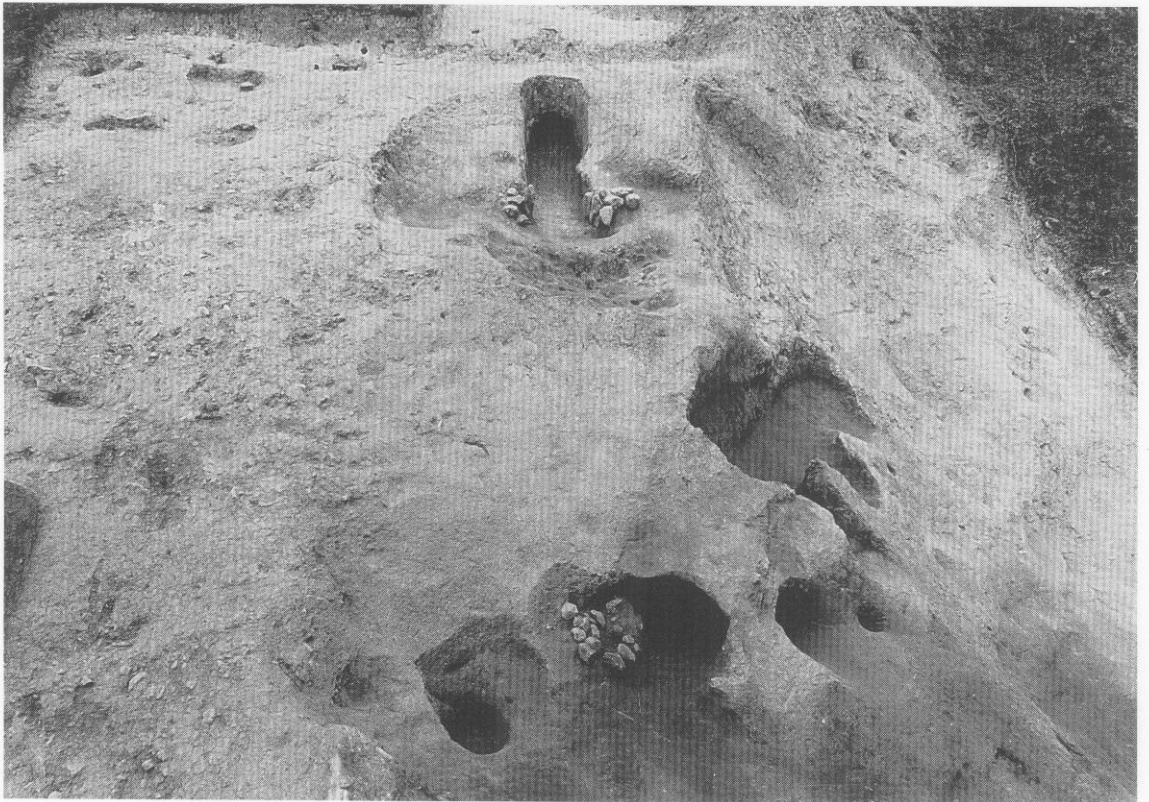




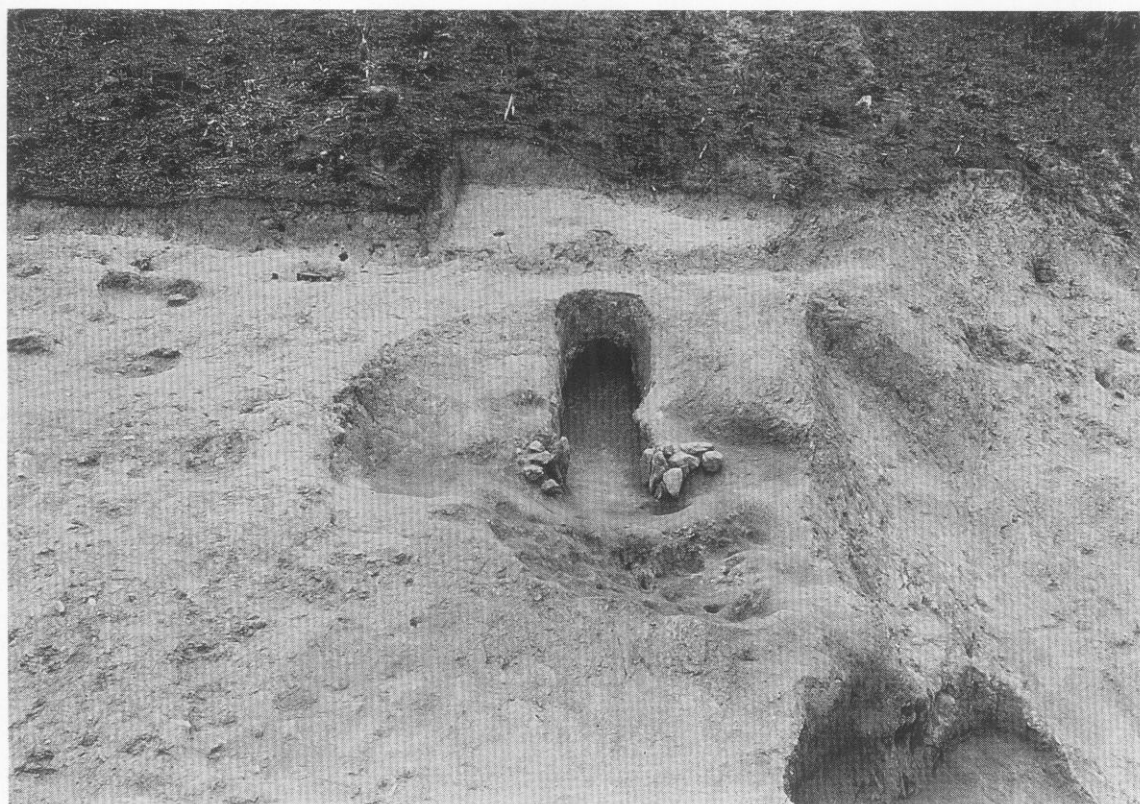
M-2 地区



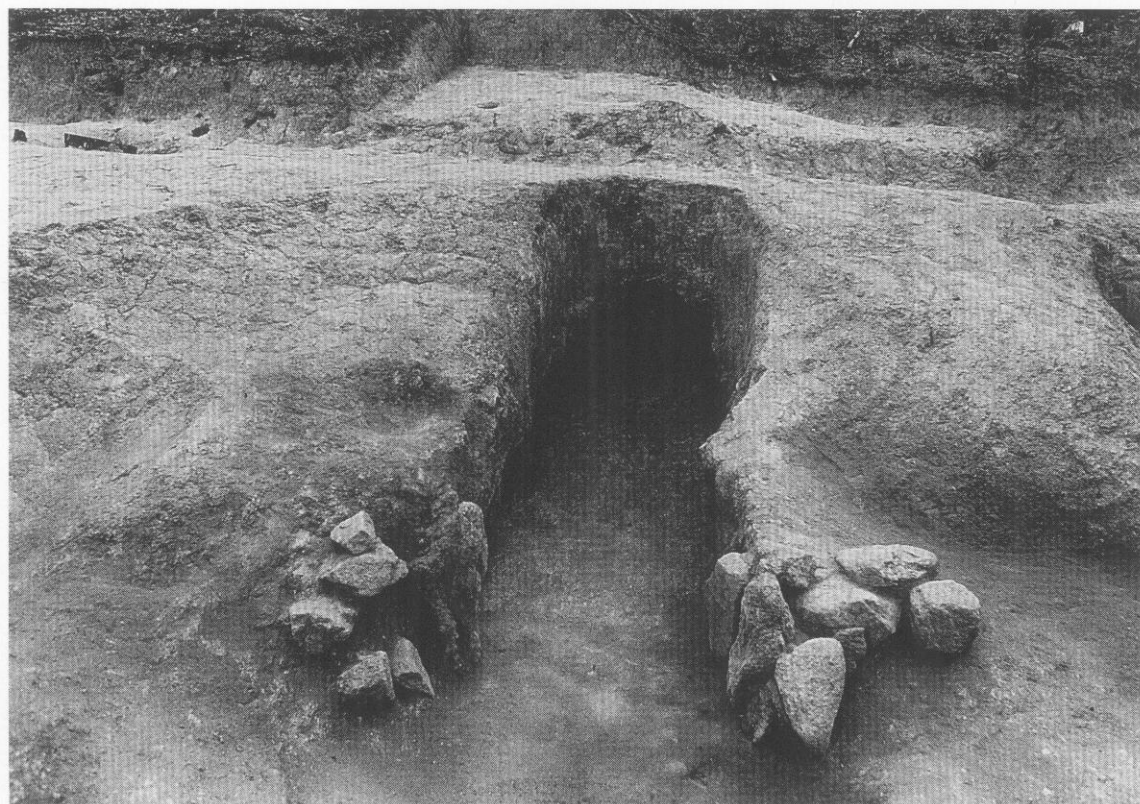
1. M-1・M-2地区調査区遠景（南西から）



2. M-2地区調査区全景（南西から）



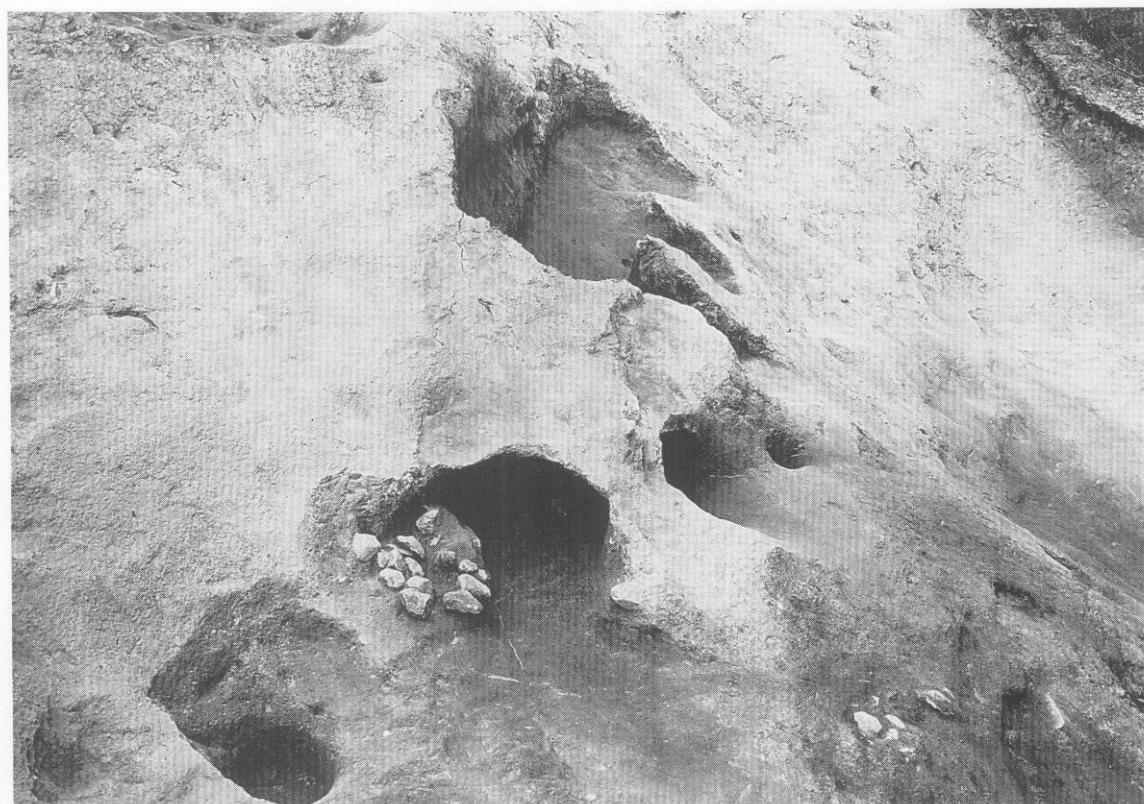
1. 69号窯跡1



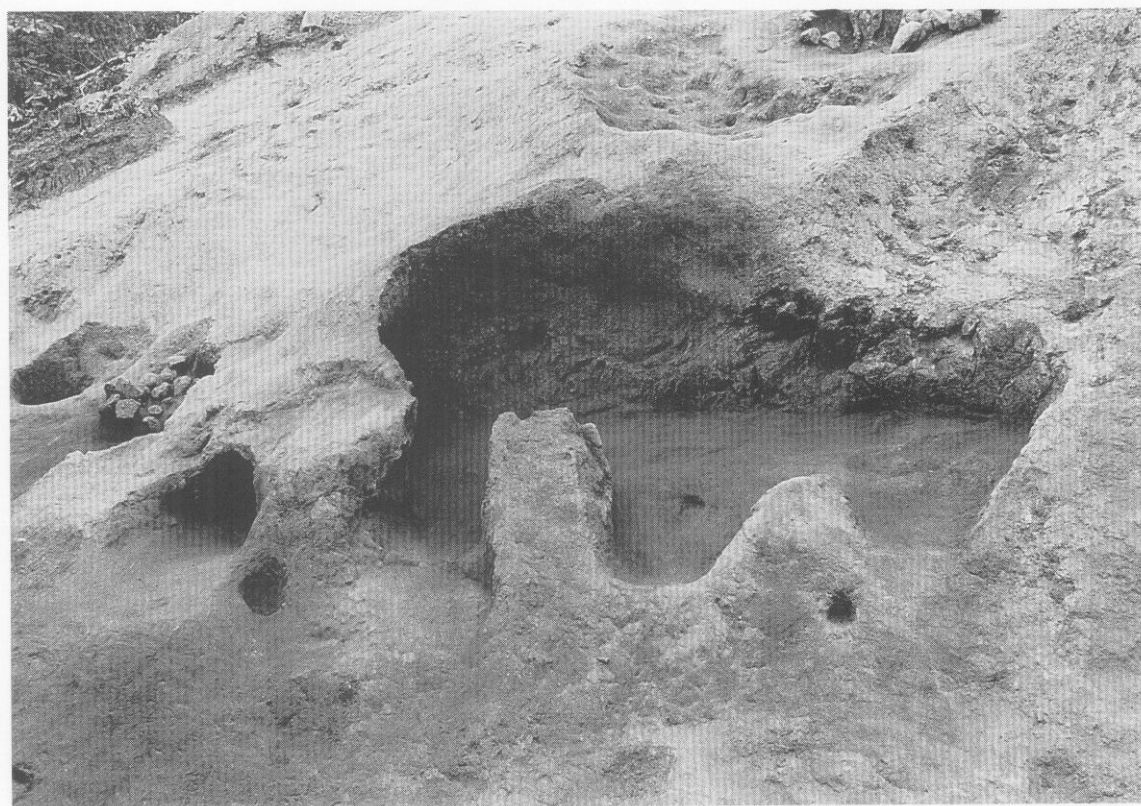
2. 69号窯跡2



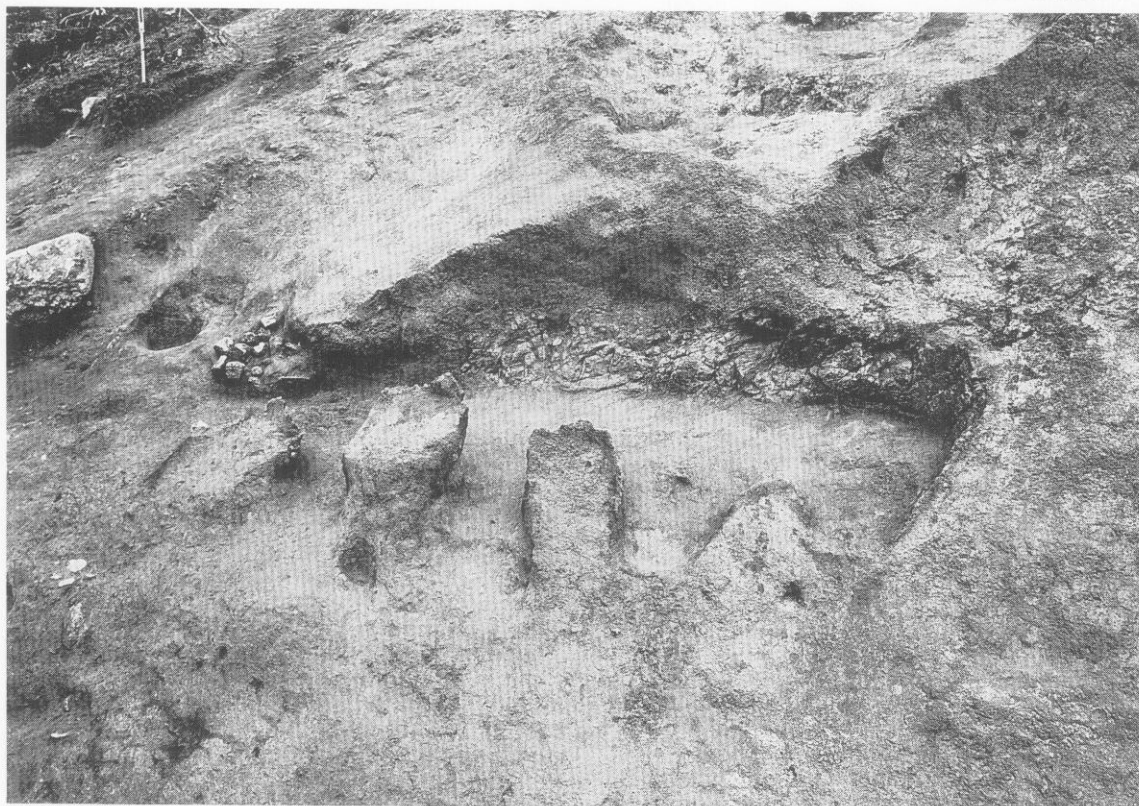
M-2 地区



1. 70号窯跡（西から）



2. 70号窯跡（南から）



1. 70号窯跡 (南から)



2. 70号窯跡 (西から)

M-2 地区



1. 70号窯跡焚口部



2. 70号窯跡天井部残存状况



1. 70号窯跡第1 補助燃烧孔



2. 70号窯跡第2 補助燃烧孔

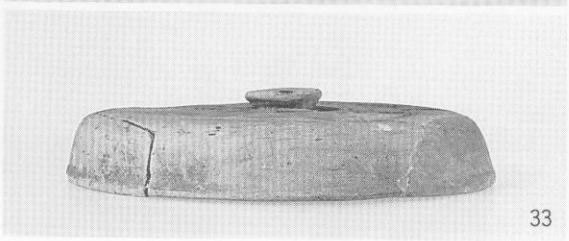
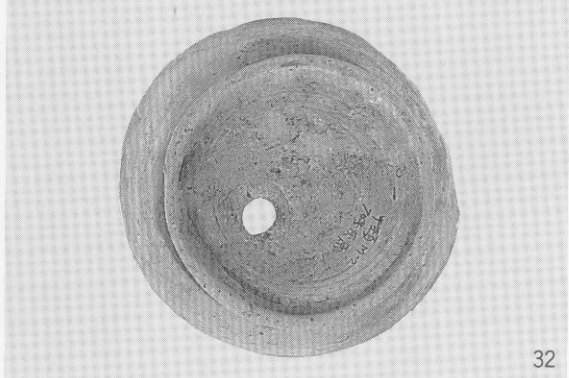
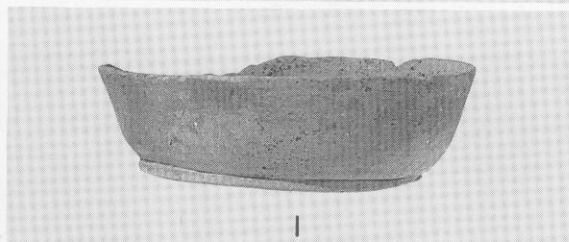
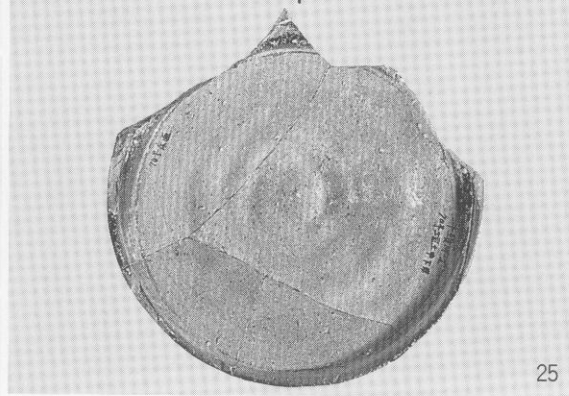
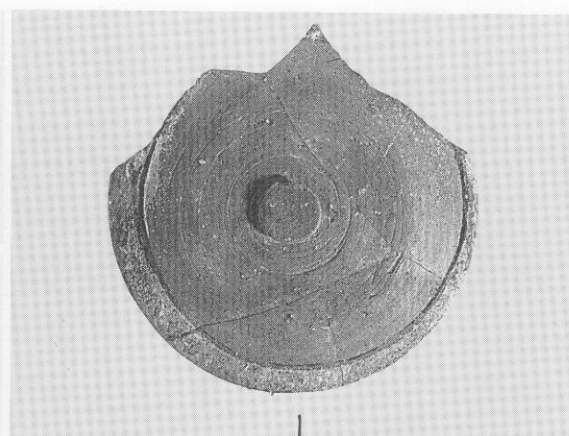
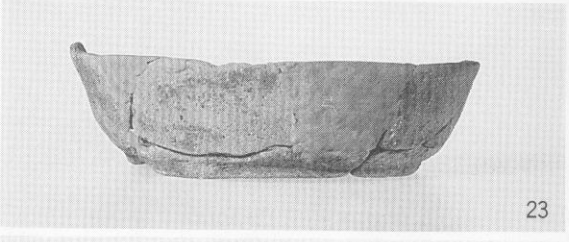
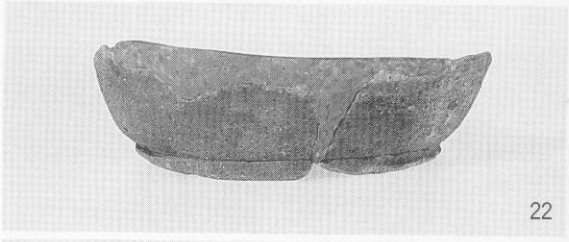
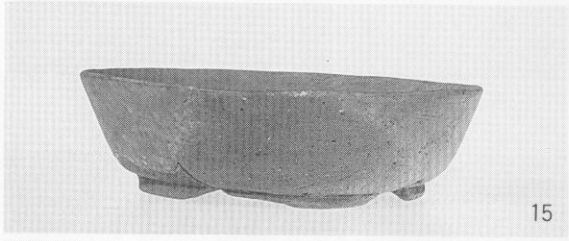
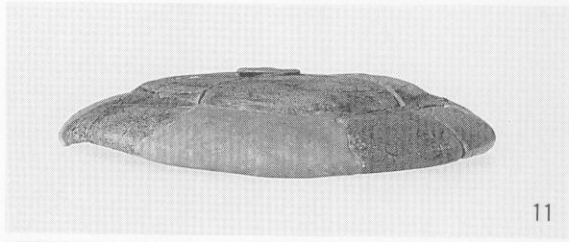
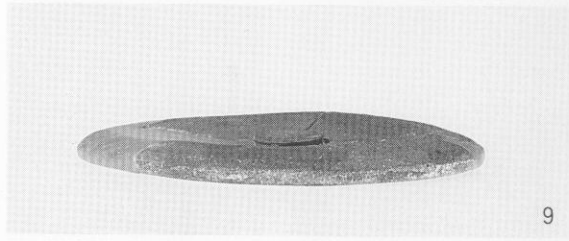
M-2 地区



1. 70号窑跡第3 補助燃烧孔



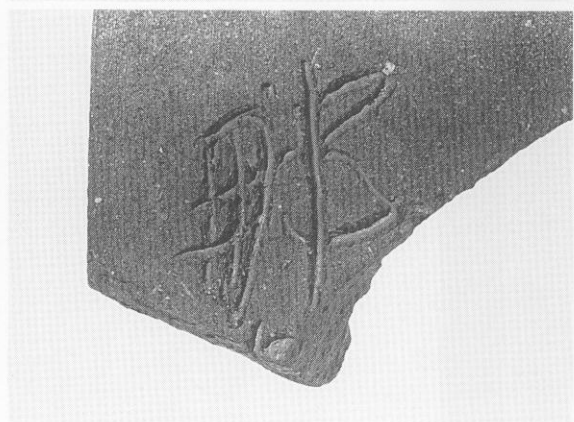
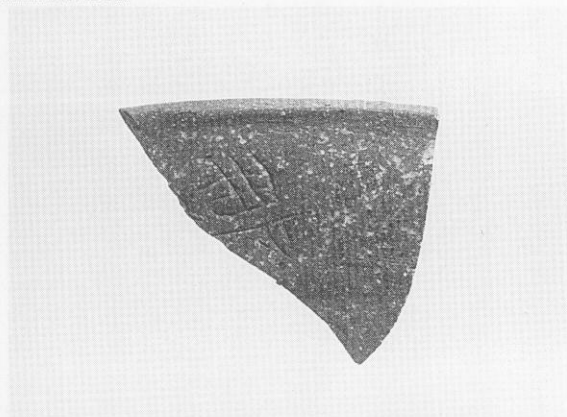
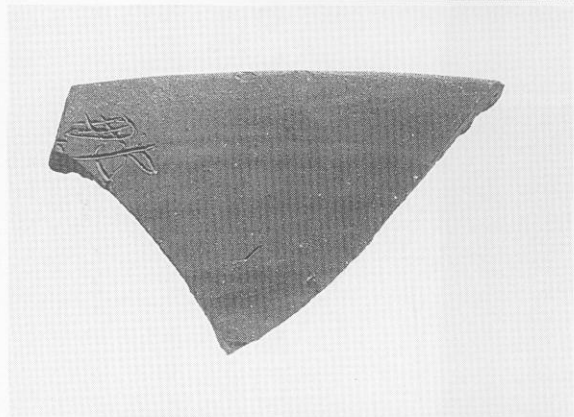
2. 70号窑跡第4 補助燃烧孔·煙道



M-2 地区出土土器



1. A—3地区4号窑迹



2. 刻書土器 1

3. 刻書土器 2



那  
哥  
郡

□ 大神部 □

□  
□ (養力)



# 牛頸窯跡群Ⅱ

福岡県文化財調査報告書

第 89 集

平成元年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 (株)天地堂印刷製本所

北九州市小倉北区大手町10番18号

## 福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 63	登録番号 10